泡鳴全集

第八巻

目次

實子の放逐

この作は『情か無情か』と題して單行されたものである。從つて、材料上の補遺なる、『子なしの堤』と聯絡するものである。

一

『あんた、ちよツと來て下さい！』妻のお粂はけたたましくはしご段をあがつて來た。そして机のそばへ腰をおろし、瀨戶の火鉢に兩手をかけて、『幸田が失敬ぢやアありませんか、やうやう歸りかけたかと思ふと、まだ玄關の土間からくびを延ばして子供と顏を見合つたり！　さうして春子のはうがそのそばでよちよちしてちよツと倒れたら、それを馬鹿にしてみんなであざ笑つたり！』

『…………』まさか、あざ笑つたのでもあるまいと吾助は思つたので、俄かにまたいつものやうないきごほりを發したのはその爲めではなかつた。が、こちらでいやになつて、また向ふにも不都合なことがあつて、一たび追ひ出した女を二人の子供の實母だからとして、本人の願ひをも容れてやり、また子供の方の心をも察してやつて、寬大にも斯うして、時々とまりに來させてゐるのである。今回もきのふの朝から來て一泊し、けふも子供が日曜だからと云つてこの晝過ぎまでゐたら、もう、十分に滿足ではないか？　それにも拘らず、歸りがけになつてなほ別れを惜しんで、手を取り合はないまで

に芝居じみた顔の見合ひをしてゐるのかと思ふと、こちらも意地になつて憎々しくなつた。机の前を立ちあがるが早いか、はしご段を妻よりさきに下りて行つて、『まだ歸らないでぐづぐづしてイるのか？』

『今歸りかけてるぢやアありませんか？』

「ぢやア、直ぐ出て行け！」。吾助は幸田の婆々アじみた横ツつらを一つ喰らはせてやりたくもあつたが、それだけはさし控へて、その餘勢を言葉や目つきにばかり出した。あの氣違ひじみたヒステリづらでやがて自分のところへこちらが歸つて來ると力んでゐたと云ふことを人づてに聽いたことさへ、實は、癪にさわつてるのだ。きのふはきのふで、かの女が來たのを隣りの若い細君とその妹とが燒きもきしてどんな人だらうと窓から頻りにのぞいてゐたさうだ。來るたんびにこちらがもともと通り可愛がつてやるのかと人から思はれるのも馬鹿々々しかつた。『直ぐ出て行け！』

『出て行きますが、ね』と、幸田はおどおどしながらも、例の如く、またくどさうにこちらの寛大につけ込み、今の若い妻を馬鹿にしてゐるやうすが見えないではなかつた。『わたしは子供のことさへ頼んで置けばいいんですから。また來ますよ。』

『いや、もう、貴さまのやうなやつア二度と來るにやア及ばない！』

『そりやア無理です、わ！』俄かにかの女はこちらへ突ツかかつて來るやうな態度になつた。

『うるさい！　また小理窟を云ふか？』一つ大きく叱り付けて默らせて置いて、吾助は少し言葉を和らげて因果を含めるやうに告げた。子供を三人ともかの女にまかせてあつた時はこちらが一度も會ひに行かなかつた。姉の方が會ひたいと云ひながら病氣で死んでも、葬式にさへ行つてやらなかつた。かの女はそれを父の無情と云ひふらしてゐるが、こちらには寧ろ別な理由があつた。一つにはかの女のつらを見たくなかつた爲めだが、今一つの理由は憎み合つてる父と母との間に立つて、殘つてる子供の心を兩方へ迷はせたくなかつたのだ。ところが、去年、かの女が自分のおろかな計らひでこちらのやつてある生活のたづきなる家屋を人に取られてしまつたので、今やこちらが子供を引き取つた以上は、今度はかの女がさう度々こちらへ來ないのが本當だらう。『貴さまが來る爲めに、子供の心はその度毎にぐらつくし、その上、家庭にいらない悶着が起つて迷惑だ』と。

『あなたは自分勝手に迷惑してゐるんですから、ね』と、幸田はなほへらず口を叩いた。

『何を云ふ、この婆々ア！』妻もはたで激昂してゐたのだらう、不斷には出したこともないひどいこと葉を吐いた。それにまた附け加へて、『一旦離緣された者が圖々しくやつて來るなんか、ほかの家にはないことですよ！』

『…………』幸田はそれにぎツくりしたと見え、たださへきよときよとしたその目を擧げて恨めしさうに暫らくお粂を見つめてゐたが、『さうですか？　ちやア歸りますから、ね』と、ぷりぷり怒つて直

ぐ立閾の敷居をまたぎかけたが、そこでもまた『若い人から見りやア婆々アになるのも當り前です、さんざん苦勞をさせられたあげくですから、ね』と云ふ棄てぜりふをほざいた。

そのあとをあツけに取られて、二人のままツ子がまだきちんと坐わつて膝ツこぶしを出してる前で、お粂は如何にも憎々しさうに、なほ渠らの實母の面白くない態度に對する不平を云つた。

『人のうちへ來てゐて掃除一つ手つだはないで、生意氣にも子供に足こしをさすらせたりばかりして！　さうして自分はただ鼻くそばかりほじくつて、それを手で圓めてあたりかまはず投げちらすのですもの！　わたし、きのふから御はんをろくろくたべられませんでした、わ――あれを思ひ出すと、むなくそが惡くなつて。』

『おれはそんなことにやア氣が付かなかつたが』と、吾助も氣が荒立つてゐたが、それを押し靜めつつ、それとなく妻の言葉のつよい響きを子供に和らげて聽かせるやうにした。そしてかの女が第二の母として子供に對してその實母のことを――正直にだが――さうつけつけくさすのは、かの女自身の爲めにもあまりいいことではないと考へた。が、吾助自身としては、また、子供の實母に對して今の妻の立ち場を辯護して置かなければならなかつたので、『おれも』と、わざとにもお粂に賛成して見せて、『あいつの婆々アじみたとげとげしいつらを見るたんびに、自分ながら、今更らよくもあんな者と一緒になつてゐたものだと思ふんだ。』

『そりやア、よかつたのでしようから、ね。』

『…………』馬鹿と、こちらはかの女のはしたなさを叱り付けてやりたかつた。が、今さうすれば、聽いてる子供をしてますますいい氣になつて若い母に對する惡感をつゞけしめることになるだらうと思へたので、喉までは出たののしりを私かにぐツと呑んでしまつた。兄の方は、もう、敎へられないでも、ひとり手に男の兒としておぼえることをいつのまにかおぼえた。その證據を繼母に發見されて、父からあたまを惡くするツてひどく戒しめられたこともある。そして父としては次ぎの兒も今や――少しそれとしては早過ぎるが――同じことを誰れからかをそはつてゐはしないかと云ふ疑ひを持つてゐるのである。さう云ふものらの前で、如何に考へがない女としても、はしたないことや嫉妬じみたことを云ふべきではなかつた。

兄の雄作は小學校を出る少し前に自分から進んで父のもとへ來て中學へ通ひたいと云ひ出した。それが二度目に最初のゆかりとなつて、幸田が子供二名をつれて來た。こちらはどうせ引き取るなら、自分の思ひ通り、弟をもやがて引き取つてこちらで敎育し、弟の政直の方は一人前になるのを待つて幸田の養子にすることにした。そして改めて愛撫の言葉を云つて聽かせたり、庭に育てた草ばなのいろいろを見せたりして、その時は一と先づ歸した。すると、市中にばかり育つて、まだ植物や畑の知識などは少しもなかつた政直は、俄かに父のやうな庭つくりの眞似をしようとして、母が買つて置い

た洗い大根を一本、狹い庭の隅に植ゑたが、白く奇麗な根を上に出して、葉ッぱの方を土に埋めたと云ふ。

それほど無邪氣な弟の方は兄より少しあとで引き取られると、父を何となく避けながらも、お粂のつれッ兒とは直ぐ親しんだ。初雄と云つて、これも亦男の兒で、やッと小學校へ行き初めた頃であつたが、もう、戸籍上でも同じやうにこちらの子になつてゐた。雄作には、その疑ひ深い實母から云ひ含められて、初雄の爲め若しくは新らしくできる兒の爲めに廢嫡されなどしないやうにと云ふ警戒心が初めからあつたやうだ。が、政直にはそんなことも分らないので、初雄を一番いい遊び友達にしたばかりでなく、うへの兄がこツそり臺どころの物を盜んだり、そとから菓子を買つて來て皆に知れないやうに別室の寢どこの中で喰つたりするを發見すると、したの二人で心を合はせてそれを素ツ破ぬいた。そして兄の壓迫にいつも二人は小さい力を合はせて對抗してゐた。

が、お粂の立ち聽いたところでは、兄と政直とが或時一緒に湯に這入つてゐると、雄作は弟を威し付けるやうにしてまたは口說くやうにして、

『なぜあんな者に味かたして、にイさんに同情しないの』などと云つてゐた。あんた者とは初雄のことで、『兄弟でも何でもないのだ。赤の他人だよ。然し、わたしは政ちやんのにイさんぢやアないか？にイさんがえらくなれば弟も助けられてえらくなるにきまつてる。そのわけを知らないで、どうして

にイさんの味かたをしないのよ！　自烈たい、ね、ちやんと返事をおし！』
『…………』政直はその時なかなか口を出さなかつたさうだ。そして最後に云ひぬけの爲めであつたかも知れないが、『あとで考へて返事をするから』と答へたさうだ。
『政ちやんの方は子供の返事としてなかなかおほできでしたが、わたし』と、お粂はそのあとで憤慨してこちらに語つた、『雄作がわざわざ無邪氣なものにゐる知慧をつけて、はやく返事をしないと悲觀しちやうよ、自烈たいなんて足ぶみまでして威し付けたのを聽いた時には、その本人をあはれにもなつて、ぞッとしました、わ。如何に幸田がそのかげに附いてるからッて、何だッてあんなけち臭い子でしよう、ね？』
『ふん！』困つたものだとはこちらも思つたが、こんな時、感情の激してゐる妻を慰める言葉をへたに云へば却つてまたかの女をつけあがらしめるだらうし、さうかと云つて、また、へたに子供をもッとおほ目に見て置かせるやうに戒めたッて、まだ斯う云ふことに經驗のない女には分る筈がなかつた。子供がこッそり臺どころの砂糖や茶簞笥の中の菓子を盜むほどのことは、自分らも子供の時にして來たことで、どこでもあり勝ちなことだと云つて聽かせても、
『いや、雄作のは特別に意地が惡い仕かたですから』と答へて、聽かないのであつた。尤も、雄作はお粂のなかなかちよッと落した位では毀われさうでもない舶來の鏡を、かの女の留守に、うち毀わし

てとぼけてゐたこともあつた。
　だから、かの女に直接には何とも云はなかつたが、吾助はうへの子供ふたりを二階の書齋へ呼んで來させ、お氣をもひがみ根性を起させない爲め立ち合はせて置いて、また父としての訓戒を發した。
『一體、お前達がこの家へ來てゐる以上は、今のおツ母さんを本當のおツ母さんと同樣に思はなければならん。さうしてその結果としてあの初雄をも兄弟のひとりにしてやらなければいけない。』たとへば、貰はれて來た子でも貰はれた以上はそこの子になつたのだ。血すぢがどうの、斯うのとか、幸田がそとからむかし流に勝手なことを云つてるのは、父として少しも頓着してゐない。若し父が死ぬとして、その時みんなの財産になる物があるとしたら、どの子供にも同じやうに分けてやれと云ふ遺言をして置くつもりで――そのうちで、雄作は總領だからこの田口家を繼ぐし、政直は約束があつて幸田家のあとになるし、初雄や春子はまた別々に獨立するだらう。それに、今の母は母で、矢ツ張り、生活ができるやうにしてやらないぢやア父の責任は濟まない。然し、ただお前達のもとの母は今ぢやア田口家に關係がないから、もう、この家で世話をしてやるには及ばない。いや、一生、生活ができる爲めにあのお前達も知つてる家をやつてあつたのだが、甲斐性なしの爲めにあの商賣を自分でつづけて行くことができず、それに元來が馬鹿なくせにづるいところから、なまはんじやくな猿知慧を出して却つて人に取られてしまつたのだ。若しあの女の老後を養つてやりたけり

やアお前達が勝手にしてやるがいい。と、まア、斯う云つたわけだと云ふことを嚙みしめて與へるやうに云つて聽かせた。

けれども、政直はその兄の壓迫に對してどう答へをきめたのかこちらには分らなかつたが、その後、學校へ行つても初雄を却つてよその子供と一緒になつていじめるやうになつた。そして雄作がうちでどんぶりを毀わしたり、買ひ物のつり錢を出さなかつたりすることは相變らず止まなかつた。それに對するお兼の辛抱が辛抱し切れなくなつて、とうとう、今玄關に於ける幸田との衝突になつたのだと思ふと、相當の家がらを以つてわざわざこんな面倒な家庭へ這入つた妻の位置も思ひやられて、吾助は幸田の無常識なわが儘を批難して置く爲め、子供に向つてはただ簡單に斯う云ふ風な命令を與へた。

『どうせお前達が大きくなつたら分ることだが、實は、幸田は一つには姦通と云ふ不都合なことがあつたので追ひ出されたのだ。それが圖々しくもやつて來るのを今日まではおれはお前達に免じて許してあつたが、あア云ふ風に分らず屋ぢやアうちの家庭の邪魔になるから、以後は來させない。お前達もそのつもりでうちぢやアよく今のおツ母さんの云ふことを聽くがいいぞ。さうでないと、またおれが追ひ出してしまうから。』

『へい』と、雄作は膝の上に堅くるしく兩手を置いてゐながら、素直に答へた。渠はその知力相當に

こちらを理解してゐることはゐるのであつた。『うちのおやぢは馬鹿だ』などと、生意氣にも學校では云つてゐるらしいのがよそから聽えて來るが、多少はこちらの大膽猛勇でなければ主張できない社會的、國家的運動のことを父の書いた物で讀んでるかして、

『僕も、少しおとうさんのとは違つてるかも知れないけれど、大抵おとうさんの同じ主義で哲學的宗教家になるつもりです』ともお衆には話したさうだ。

それに比べると、政直の方はそのまた弟の初雄が大隈さんになると云つてるのに對して、

『おれは東郷大將になるんでい、畜生』と、芝育ち特有の惡たれ口調で、却つて時代後れのことを云ふほど幼稚だ。そしてこちらの見たところでは、まだ、うつわが小さく、人が惡かつた。第一、學校へ行つても、新聞などに出される田口○○の子だと云ふことを一番に恥ぢてゐるのである。それには、無論、その實母のヒステリ的な惡い仕込みがあつた。

『お前たちのお父アんは馬鹿で、薄情で』と云ふやうな、かの女自身にばかり都合のいいことを幸田はいつも子供に云つて聽かせてゐたらしい。それがまた何のゆかりもない初對面の他人にもであつた。だから、死んだあね娘は、一度たとへ父が馬鹿であつたとしても、そんなことをあかの他人にまで云ふには及ばない。まして馬鹿どころではない、えらい人らしいからと忠告して、母とおほ衝突をしたさうだ。

それでも幸田はそのうつけた無常識が直らなかつた。そしてこちらがお粂と結婚したのが世間の評判になつた時など吾助の雅號を入れて、

『〇〇と粂子と現代式だ、ね』のはやり唄を歌ひ賣りしてるのを聽きに、これは政直の何げなくお粂に語つたところだが、わざわざ政直をつれて芝公園まで行つたと云ふから。

二

吾助の考へでは、幸田があア云ふ風に歸つても、あの圖々しさだから、また何とか高をくくつてやつて來るかも知れない。そんなことがあつたら、今度は子供の見せしめにも一つこツぴどく投ぐり付けて、懲りごりさせてやるつもりであつた。

が、こちらの出かたがいつになくこたへたと見え、それツきり音沙汰がなかつた。その奉公さきも換へると云つてたのだから、換へた筈であるが、それをも通知して來ないのであつた。

『幸田から何とか云つて來はしないかい』と聽いて見ても、雄作の答へでは、

『別に――何も。』

『多分、そとで會つてるのでしようよ』と、はたからお粂は、突きとめてでもゐるかのやうに、思ひ切つて口を出した。

『……』まさかと、吾助は思つてゐた。わが子を辯護すると云ふよりも、そんなことは、父の命令を守つて、少くとも當分のうちはしないだらうと見てだ。

その上、雄作はその一番するゑの妹に當る腹ちがひの春子を政直のするよりも以上に可愛がつてるし、春子も亦きやうだい中で他の誰れよりも先きに雄作になじんでゐた。

『矢ツ張り、血を分けたものは違ひます、ね。あんな小さい時からでも、どこか相通じるものがあるのでしようよ』と、お粂はかげながら嬉しがつた。かの女が尤も、若しできるものなら、うへの子ふたりをも自分の實子同樣に取り扱ひたいのであることは、こちらにもよく分つてゐた。が、これまでにいろいろな感情の行き違ひや若い爲めの思ひ違ひがあつて、うまく思ひどほりには行かないのであつた。かの女は或日外出する時、親しみの意味で雄作を一緒につれて行つてやらうとした。中學生の新らしい制服ができて來た時だ。そして渠も歸りにはどこかで何かたべさせてやると云ふのを喜んだ。そしてそのあまへた勢ひが、生意氣に、つい、冗談となつてだらう、お粂が時々三味につれて歌ふ『おともはつらい、ね』の眞似をさせた。すると、かの女は直ぐ本氣になつて怒り出し、

『つらいなら、およしなさい。つれて行かないから！』

それでも、雄作の方はまだ一緒に行けるものと思つてゐたらしいが、お粂はあまり無殘にも渠を取り殘して、獨りで出かけてしまつた。

父としては何でもなく見のがして置けることをもお兼はさうできなかつた。そしてそれには雄作が家にゐて時々私かに行ふ子供らしくない亂暴や、そとへ行つて繼母のあること、ないことをあしざまに云ひ振らす不都合やが少からず手つだつてゐたのは、こちらによく分つてゐた。だから、吾助は妻が二階へ來た時などに、かの女に向つて、

『おれもひがみ深いまま母を持つた經驗があるので知つてるが、何と云つても子供は子供だから、親の方からわざわざひがんで行つちやア切りがないものだ。もツと心をひろく持つ方がいいだらう』と敎へてやつた。そして子供には、また、妻の留守に、

『お前達が今のおツ母さんをおツ母さんとして立ててゐないと、お前達の損でもあり、またこの家庭がいつまでも騷がしい。若しそんなことがまだまだ續くなら、つまり、お前達が子供として素直に從順でないのだから、いつお父アんがお前達を追ひ出すか知れないよ』と、云つて聽かせた。

それでもなほ子供のやうすが變はつたとは思へなかつた。そこへ持つて來て、お兼が聽き込んで來たところでは、雄作のことを

『田口の坊ちやんが』と云つて、近處のものらは每朝、學校の制服を着て門を出ると直ぐ、燒きいも屋へ寄つていもを買ひ、それを喰ひながら歩いて行くのを見て、笑ひ合つてるのであつた。

『かどのお菓子屋のおかみさんなどは、いも屋との商賣がたきからでもありましようが、雄作の姿を

見ると直ぐ、また行くから見てゐて御覽なさいと云つて、車屋や八百屋のおかみさん達をおだてて
ゐるのださうです。すると、また、案の定、雄作がそれを知らないものですからいも屋へ寄るので
す。』
『馬鹿なやつぢやアないか？』こちらも自分までの恥辱と見て怒らないではゐられなかつた。
『あんたはそれでも御自分の子ですから、我慢もできましようが』と、かの女はまた言葉をもたれ込
ませて來て、『わたしばかりは詰りません、わ、ままツ子だから御はんもろくろくたべさせないのだら
うと云はれて！』
『…………』こちらはそれを聽いて一層怒りをおぼえた。そこまで鋭敏には、今の今まで氣が付かな
かつたからである。雄作が學校から歸つて來るのを妻の爲めにも待ちかねて、涙のこぼれんばかりに
叱り付けた。そして胸が落ち付いてから考へて見ると、一つの不審が湧き上つて來た。さう云ふかね
がどこから出たのだらうと云ふことだ。毎月きまつて與へる小使ひはその月の初めに、もう、好きな
雜誌やその他の物に使つてしまうやうだのに、いつまでも殘つてるのが不思議であつた。
　芝育ちの小學生徒並びに卒業生には不良性を帶びたものが多いとは兼ねて聽いたので、子供を引き
取つたそもそもからその點のないやうに注意してゐた。政直が、買へば壹圓五十錢もしさうな錫の
水筒を持つて來ていつのまにか自分の机の引き出しの奥へしまつてあつたのを發見した時も、曖昧に

ただ友達に貰つたとばかりでなかなか詳しいことを云はなかつたので、若し盜んだり、人から無理じひに奪つたりして持つて來た物は決してそのままに持たせないと云ふことを見せるつもりで、水筒を子供の目の前で石の上に置いて叩きつぶしてしまつたのだ。

雄作にはそとから持つて來た不審の物はなかつた。然し、この別な不審が出て見ると、釣り錢をそらとぼけて戾さなかつたり、繼母の財布から一二度僅かのはしたがねを盜んだりしたほかに、何かしてゐることがありさうであつた。で、それとなく責めて見ると、父のかた手間に發行してゐる小雜誌〇〇主義を二三の學校友達が買ひたいと云ふので、

『それを五錢づつで賣つてやりました』と答へた。

『そればかりではなからう――?』そんなこと以前にさか登つて考へて見ると、帝國文學がその第一卷第壹號から十ケ年ぶんばかり各年に合本になつてゐたのがなくなつたことがある。もう、どうせ入らないからと云つて、こちらは曾て雜誌や新聞を買ふ屑屋に見せた時、あまり安かつたので、お粂は反對して、

『折角、斯うまとまつてゐるのだから、子供がまた參考にできるやうになるまでしまつて置いてもいいでしよう』と云つた。無論、一番さきに知識がつく筈の雄作の爲めにだ。が、それツ切り忘れてゐたものだ。まさか、子供がと思つたので、ゐなくなつた女中のせいでもあらうかとして置いたが、そ

れも女中には無實の罪であつたのであらう。その後、當月の雜誌のおもな物を雄作が親に相談しないで勝手に古本屋の、これもよく來る者に賣り拂はうとして、價段を慾張つた爲めに失敗したことが、今度の女中の注意によつて親の方に分つたこともある。また、學校教科書で進級の爲めに入らなくなつたのが見えないので突きとめて見ると、下の級のものに親には內證で賣り渡したのだ。けれども、そんなことは約二ケ月も前に過ぎ去つてゐて、そのかねを今まで持つてゐるわけがなかつた。
『一體、どう云ふかねだらう、ね？』吾助は妻に斯う云つて、私がに相談をかけて見た。
『ほかのわけでないとすれば、もう、分つてます、わ』と、お粂は答へた。『どうせ幸田が學校へも度度行つてるのでしようから、少しづつでも幸田から小使ひを貰つてるかも知れません。』
『…………』それが本當であるとすれば、相變らず幸田が子供の可愛がりかたを間違つてると思はれた。むかしは生まれた子供を暑いからと云つてはだかにし過ぎ、寒いからツてまた衣物を着せ過ぎて、病氣にばかりさせた。それがこちらと別れてからは一層自墮落になつて、寒中など、風を引くからと云つて自分も一ケ月でも二ケ月でも湯に行かず、子供をもまた入れなかつた。だから、初めてこちらへ子供を渡した時など、子供の衣物にはしらみが一杯たかつてゐて、からだ中にはかゆいのを搔きむしつたあとだらけであつた。僅かのけち臭いはしたがねを呉れるのも却つて同じ結果で、『こツちがありがた迷惑ぢやアないか？』

『もう、わたしはどうでもかまひません、わ――どうせ、親の心子知らずですから』と、かの女はあきらめてゐた。『然し、考へて見ると、幸田は餘ツぽど馬鹿です、ね。こツちへ子供をまかせた以上は、子供が成人するまでじツと默つてゐたらいいのに、子供が全くこツちの物になつてしまひはしないかと心配して、きツと、けち臭い小使ひなんかやつてゐるのですよ。こツちぢやア何も實母を忘れてしまへなど云つてやしませんのに。』

『無論、世間の家とは違つて、離婚した女を寛大にまた出入りさせてゐた位だから。』吾助にはこれも一つの考へであつたが、今一つには、一番面倒くさくないのはどうか幸田と云ふ婆々アが早く死んで吳れることであつた。さうすれば、如何に手にをへない子供でも止むを得ず繼母の方に親しみを持つて來るにきまつてた。ひよツとすると、雄作らも――幸田が初めのうち一時持つたらしい考へに從つて――繼母を何とかいぢめぬいて追ひ出せば、また實母がこの家へ歸つて來られるかと云ふ幼稚なことを考へてるかも知れなかつた。そんなわけがないことも、一度は、うへの子ふたりにそれとなく云つて聽かせて置いたけれども。

幸田をいやな爲めに子までも嫌つてゐた吾助には、兎に角、俄かに去年から子供を大小四人までもそばに置くのが珍らしくもあり、面白くもあつた。無邪氣な子供の爲めにはわざわざ二階の書齋から飛び下りて來て、皆の笑ひに加はつたりすることもあつた。或日の午後、また皆のおほ笑ひが聽えた

ので、下りて行つて見ると、初雄の逸事が一つできたのであつた。
『政ちやん、ほれるとは何のことだらう？　學校で僕と露子さんとはほれてゐると云つたよ』と、初雄が質問したのである。そして政直は二三度せがまれたあげく、無言のにやにや笑ひをとめて、
『好きなこと、さ』と答へた。
『ぢやア、僕は露子さんにほれてる！』それをその實母なるお粂も皆と一緒になつて笑つてた。そしてそのあとになつて、かの女は、こちらだけに向つて、
『もう、政ちやんだツてあんなことが分つてるのですから、ね』と、氣味惡さうに云つた。
さうだ、次男でさへさうだから、雄作になつては生意氣なのも當り前であらう。もう、性慾の要求を以つて女と交際しようと云ふ考へもあるらしかつた。死んだ學友の家に行つて、そこの主人に信用され、學友の妹とも親しくしてゐるのが分つたので、吾助はその親として向ふの主人へも用心して呉れるやうに人を以つて云ひ傳へた。お粂も自分としては渠を見限つてゐながら、自分の所天の子としては共同の責任があるからと云つて、渠の行動は怠らず注意してゐた。そしてかの女が一度渠の机の引き出しをこツそり調べて見た時、吾助が呼ばれて行つて見ると、幸田から雄作へ學校の方へよこした手紙を發見した。これによると、幸田は駒込の林町に奉公してゐて、雄作は時々學校の歸りをその方へまわつてることが分つた。學校に近いから、幸田もそんなところをえらんだのだらう。

『そのたんびにわたしのありもしないことまで云つて、惡くちを云つて來るのでしようよ』と、お粂はその豫想がいよいよ實際の證據を得たのに今更らがツかりしたやうすであつた。
『だから、幸田が早く死んで吳れりやアと云ふんだ』と、吾助も歎息した。
『にくまれツ兒、世にはばかるですから、ね、あの馬鹿呑氣なやうすぢやア、幸田はなかなかあなたの思ひ通りには死にませんよ。』
『さうかも知れない、さ。』こちらでも死ねばと云ふのはお粂を慰めるには最も簡單であり、そしてこちらの幸田に對する憎しみもそれに一番よく云ひ盡せるだけのことであつたのだ。若し素直にしてゐて吳れさへすれば、どうせわが子の母だから、さう虐待するにも及ばないのだが――。
この密かに子が親に會つてることは、旣に推察してゐたことだし、また、もう、止むを得ないことだからそれとなくうツちやつてあつたしするが、今一つ意外なことを發見した。それは、雄作が隣りの細君の妹なるお光さんに戀してゐるのだが、到底及ばないことだから私かにただそれを泣いてると云ふことを歌つた詩である。『これですから、ね』と、妻も驚いて、暫らくは恥かしみの色を顏にまで現はした。
『………』こちらも考へて見ると、お粂が雄作に向つて學友の妹をどう思つてゐるのかと聽いて見たら、好きでないことはないが、顏がよくないからと云つたさうだ。それもその筈で、いつの間に

か、心が隣りへ移つてゐたのである。

『學校の歸りなどに雄ちやんにお辭儀されるのが恥かしい、わ』と、お光さんがお彖に云つたので、その時お彖は私かにかの女をまだ田舎くさい心が直らないのでそんな馬鹿な開らけないことを云ふのだと思ひ、寧ろ雄作のかたを持つ氣持ちになつて隣りから歸つて來て、斯うこちらに語つた、

『何も若い女と男とだからツて、互ひにお辭儀し合ふのが當り前ぢやアございませんか？　そこへ直ぐ何だかきたない考へを入れるのは、入れる方が趣味の野鄙なせいです、わ。』

『さう、さ』と、こちらも賛成した。男が女と交際することは、今のところ、犧牲を出し易い。が、この犧牲を成るべく少くするには、子供のうちから交際を奬勵して置かねばならぬことが分つてゐた。ところで、またお光さんに對する雄作の心持ちが分つてなかつた時のことだから、お彖は渠に向つても、

『これから、向ふのいやだと云ふことをわざわざしてやるには及びませんよ』と敎へた。

『へい』と答へながらも、それは渠に取つてその時からつらいことであつたらう。無論、吾助自身は自分の子供より年したの時に既に女を戀ひ慕つた經驗を持つてるが、別に肉まで落ちる失敗はなかつた。雄作のも恐らくそんなことで過ぎてしまうのだらうが、その親としては一應戒めて置く必要があつた。で、渠を二階へ呼び寄せて、

『お前は今から女を慕ふやうな詩などを作つてるやうだが、ね』と云ひ出した。

『………』雄作は相變らずただ形の上で恐縮してゐるばかりのやうであつた。
『それはよくない。多くの婦人と無事に交際することは、お互ひに趣味や感情を綺麗にして行つて、大きくなつてからもさう容易にお父アんのやうな間違つた最初の結婚のやうなのをしなくなるから、お父アんも贊成する。が、男が結婚するといろんな責任が生ずる。一緒に生活する費用を儲けたり、生まれた兒を養つたり、ね。』ところが、お前のやうな時代には、その責任を果せないから、無理にそんなことがあると、親に厄介をかけるばかりだ。して見ると、親が承知をするわけがない。たとへまだ子供でも、そこまでのことは今から考へてゐるがいいぞと云ふことを獨り演說にして聽かせた。そして幸田のことの方は、もう、何も別に立ち入つて云はなかつた。
が、それをお兼は段の下で立ち聽きしてから隱れたと見え、こちら二人が一緒にはしご段を下りて行くと、直ぐまた座敷から緣がはへ飛び出して來て、
『多分、わたしのことなんかいい加減にして置けと云つたのでしよう』と、こちらの思ひも寄らぬことを恨めしさうであつた。
『………』こちらはかの女を、つい、何げなく、立ち會はせなかつたのに氣が付いた。かの女の爲めには却つて利益なことを云つたのではないか? かの女を『いい加減にして置け』と云つたのではなかつた。『幸田にさう度々會つてると、お兼にはよく思はれないからいい加減にとめて置くがよから

う』と注意したのだ。あまりの見當違ひなのに呆れて物が云へなかつた。すると、かの女はなほこちらが弱みある爲めに返事をしないとでも思つたかのやうにつけあがつて、
『わたしがゐるのがお邪魔なら、いつでも出ますから』と附け加へた。
『馬鹿!』こちらは不斷からかの女の分つたやうでまだどこかに分らないところがあるに對して有してゐた不平が一ときにこの一言となつて胸を突き出たのである。こちらはかの女を十分に愛しかばつてやりながら、子供をもよくしようと苦心してゐるのではないか? この意味は通じないでもなかつたかして、かの女は直ぐそのはしたない態度を改めてしほらしく默つてしまつた。

三

お兼は相當の理解と決心とを以つて吾助の後添ひになつて來たので、渠もかの女のつれツ兒をまで自分の籍に入れてやつたほどだ。けれども、二人のあひだには子供の爲めにいろいろ感情上の行き違ひが絶えなかつた。そしてかの女だツて、もう、里の親にあまへてゐられる年でもなく、成り行きでもない筈だのに、親があまくて、『面白くなければいつにても歸つて來てもよい』と云ふやうなことを聽かせてあつたので、かの女は時々その氣になつて、下の子供ふたりをつれて歸る、そしてこの行きさつを書いて雜誌なり新聞なりで發表するなどと云ひ出した。

『ぢやア、勝手にしろ』と、渠もそんな時は云ひ切つてしまつた。すると、またかの女の方から折れて來て、それでもなほこちらへ勿體をかけるやうに、

『ぢやア、あんたは自分の子の惡いことが世間へ知れ渡つてもかまはないのですか?』

『あ、少しもかまはない!』このわざとにもまじめ腐つた答へには何等の僞善もわだかまりもなかつた。子供が果して惡いなら、惡いと云はれようが云はれまいがこちらはおんなじことであるからだ。が、公平に考へて見ると、子供はかの女の思つてるほど惡いのでもなからう、そしてそのどちらからもひがみ合つてるのは事實だ。その上、わざわざそんなことを世間に發表する必要があるか? 所夫を見習つて多少筆を執れるのだから、この程度の女が大した用意もなく定見もなく殆ど出たら目に下だらぬ告白的記事や小說を書いた例は他にも澤山ある。が、その結果は皆自分らの品位の低級なのを暴露して、同時に云ふにも及ばないことをしやべつたに終はつてる。云つて見れば、井戸端會議的にその人その家の內幕を——ただ知つてるからと云ふだけで——素ツ破ぬいたに過ぎない。ましてその御本人が山出しに毛のはえた位のものと來ては! さうだ、まるでただ間諜いぬのやうなものだ。こちらはよそ事ながらそんなものらに對して抱いた憤慨までも思ひ出しながら、『どうせ、卑劣な裏切り者を置いてあつたのがこツちの落ち度だから、ね』と、いやがらせまで云つて見た。

『そんなことは、まア、どうでもいいのですが、ね——』

『いや』と、今度はこちらが追ひかぶさつて行つて、『そんなことでおれを威し付けようたツて駄目だぞ。』

『分つてますよ』との答へがかの女に本當らしかつたので、こちらもやツと穩かになつて、

『お前はまだ實際によく子供を育てて見た經驗がないから』と云ふことを說明した。子供と云ふものは小まツちやくれたことを云つても、まだ殆ど何も分つてゐないこと。わがまま一方で、親にはどろ棒しても何でもちよツと叱られるだけですんでしまうと思つてること。それを成るべく叱られないやうに、こツそりと惡知慧をめぐらしてゐること。こんなことを一々批難してゐたら切りがない、それに子供はさうしつつ知慧や考へが發達して行くこと。だから、そんなことを世間に書き示めしたところで、實はどこにもあり、誰れでも知つてることであつて、それをかど立てただけがかど立てた者の愚痴になつてしまうこと。だから、子供の親としては、そして繼母ならなほ更ら、もツと子供を寬大に見て――寬大になれるのが矢ツ張り子供に對する愛だから――さうして子供と共になつてその惡をも或程度まで行ふべきこと。いや、子供の惡などは知れたものだから、それを許して行はせつつ、ひどくならない程度のところでおのづからとまるやうに、親としては先づ實例を一緒に見せてゐるべきこと。だから、あたまからがみがみ否定的命令を發して、それが用ゐられないと直ちに侮辱を受けたやうに思ひ取るのは、子供を自分と同等の素養ある敵若しくは對立者と見做してゐるわけであつて、

それがそもそもよくないこと、などをだ。

『分りましたが、ね』と、かの女が當り前のゐがほを見せると、口は少し人並みより大きいけれども、色が白くて、目がぱッちりして、矢張り、さう憎むべき顏ではなかつた。そしてその飮ましてゐる乳ぶさも、他の或女のやうに、その姿を亂だすほどにはだらしなく大きいものでないことは、兼てから分つてゐた。それが素直に訴への口調になつて、『これから、然し、子供の前でわたしを叱ることだけはよして下さいよ――子供がいい氣になるばかりですから。』

『さう、さ、叱られたくないなら、お前も子供のゐるところで餘りはしたない言葉は愼むがいい。おれだツて女房に馬鹿にされてるところを子供に見られたくないから、な。』

『それはわたしも注意しますからよ。』この時、下座敷で春子が目をさました樣子であつたので、お兼は急いで二階を下りて行つた。

それから、この田口一家には割り合ひに夫婦子供のあひだの衝突がなくて過ぎるやうになつてゐた。が、吾助は念の爲めに、そして一つには親しみを加へるつもりで、妻の里へ近頃珍らしく手紙をやつた。それには斯うも書いた。

『この頃では御存じの家の樣子も大分に納まつてゐますから、御安心あつていいと思ひます。この上、兼子が若し別れて歸へると云ひ出すやうなことがあつては、もう、かの女自身の勝手でしようか

ら、そんなことのないやうに御注意願ひます』と書いたには、こちらとしては、親がいつでも歸つて來ていいと云ふやうなことをうそにも二度と云つて聽かせるなとの意味まで含めたつもりだ。が、それを子供に郵便箱へ入れさせてから思ひ返して見ると、こちらの親しみある無邪氣な氣持ちが却つて向ふへまた意地惡い意味に取られはしないかと考へられた。

さきに幸田が政直をも引き渡しに來た時、お粂が留守であつたけれども、もう、きまつたことであるから、留守のままでこちらが形の上の承諾を與へ、ついでに、渠をこちらの小學校へ移す手續きまで幸田にさせた。こちらの面倒を省くつもりであつたところ、お粂は歸つて來て、相談の上にしなかつたのに對する不平を唱へた。そしてまたそとへ出てぶら付いてゐたところ、どこか人も通らぬ神社よこ手のあたりでいてふの芽ばえを拔き取らうとして、生憎、木の葉におほはれてゐた人間のうんこをぴしやりと踏んで、絹物の裾にまでそのくさいはねを上げた。それをこちらは一つの滑稽ばなしとして――お粂の母が來た時――語り聽かせたのだが、母はさう取らないで、娘には私かにこちらの無相談のよくなかつたことをばかり云つて聽かせた。

『然し、相談するもしないもなかつたぢやアないか』と、こちらはあとで知つてお粂に告げた。實は、さうした方が形の上だけでもかの女を喜ばすことはできたのだが、こちらの多少專制的な氣ぶんが承知しなかつた。『もう、前から分り切つてたんだから?』

『さう云へばさうでしようが――』
今回の手紙に對しても、向ふの親夫婦がいろいろくどい相談の上でよこしたと見え、果して見當違ひの返事が來た。
「娘が左ほど我儘の爲め御困却に候へば、直ちに御返し下され度候』などと。
『一體、向ふは人を馬鹿にしてゐるのか』と云つて、吾助は妻にも向ふへ手紙をやつたことを初めて告げた。そしてかの女をも責めるやうにして、『それとも、お前がいろいろ家のことをお前勝手に解釋して云つてやつてあるからだらう？』
『そりやア、親ですからあつたことは云つてやります、わ』と、かの女は存外平氣であつた。
『下らない！』ちよツと言葉を切つてから、『親と云ふものに對しては、ね、お前が親になつて考へて見りやア分ることだが、さういちいち家のごだごたを報告して、心配させるものぢやアないぞ。』
『あんたこそ横合ひから入らないことを云つてやつて――』
『…………』さうだ。無論、入らないと云はれれば入らないことであつた。かの女としてはかの女の考へも――丁度子供の氣ままに對するやうに――或程度までは許して置いていいのだから。そしてどうせ、男子は社會に向つても、家庭に於いても、一般的に理解され難いところを持つてるだけ、そこを自分の奮闘すべき誇りとすべきであつた。

春子が段々可愛くなつて行くので、かの女を中心としては田口一家が割り合ひに夫婦子供のあひだの衝突がなくて過ぎてゐた。が、そこへお兼の里かたからかの女の母が危篤だと云ふ知らせが達した。かの女がここへ來てから三年間と云ふもの、まだ一度もその國へ里歸りをせず、一度行つて來たいとも云ひ暮らしてゐたので、女中がひまを取つて手不足の時だけれども、吾助は丁度いい折りだと思つて許してやつた。行けばまたこちらがどう云ふ樣子であるかも實際に報告できるのだらうから。

『おみやげを澤山持つて來るから、ね』と、かの女は雄作にも約束した。雄作はそれをまだ子供のいぢきたなさから喰べ物としか思つてゐないやうすであつた。

家には、お兼の弟なる達磨と云ふ大學生が留守居に來たけれども、全く男ツけばかりの殺風景になつた。そしてお兼の里では、かの女が行くが早いか、母の病氣は快方に向つたと云ふのに、かの女の滯在期一週間の豫定が延びて二週間にもなりさうだので、弟や子供も臺どころのことに飽いてしまふし、吾助も亦段々に女ツけのない寂しみを感じて來た。銀座のカフェーへ行つたり、婦人の友達を訪問するだけでは滿足できなかつた。そして早く歸るやうに云つてやつた。

お兼と春子とが女中になる者一名つれて歸つて來ると、先づ荷物を開らいて出されたのはその老父から貰つて來たと云ふ青磁の香爐と菊地容齋の官人一幅とである。その他にもちよツとしたのが二幅ばかりあつた。これはすべて父が——以前に一度上京して家のやうすを知つてるので——ここの部屋

部屋の床の間に釣り合ひさうなのを選んで呉れたのだと云ふ。

それから、お祖袋に入れたちまきの餅を一と包みやら、向ふで出來た菓子や果物が澤山出た。子供らは皆待ちかまへてその分配を受けた。そしてそれを口に入れながら、皆で春子の向ふでやつた逸事を聽いたのだが、そのうちで一番皆を笑はせたのは猫の餌を喰つたことだ。

向ふは或立派な寺で、而も格式の最も高い別格寺だから、寺以外の社會組織で云へば、公卿若しくは華族として意張つてるので、春子も小さい『お姫さま』として出入りの檀徒らに可愛がられた。『そのおひめさまが而も猫の御はんを召し上つたのですよ』と、お衆は笑ひながら調子に乘つた。ちよこちよことどこかへゐなくなつたのを、ふと、氣が付いて探しに行つて見ると、いつのまにか庫裡の方へ來てゐて、置き戸棚の横手に置いてあつた餌さ入れから猫がかつぶし入りの御はんを喰べてゐたのを、その横合ひから小さな手を出してかの女も一緒に喰べてゐた。その猫を朝起きると直ぐ抱いて見たりして、一日ぢう遊び友達にしてゐたので、割り合ひにおとなしく日を暮らすことができた。そしてその猫は春子のおかげで時々叱られた。うるさくなると、かの女をひツ搔かうともしたからである。

それから、また、かの女は毎朝起きると、みんなの眞似をして母を引ツ張つて本堂へ行き、阿彌陀樣に向つて皆のお經を讀むのをおとなしく聽いた。そして自分も手を合せて、

『なも、なも、なも』と、かたことで六字の命號を唱へた。こちらの違つた考から云へば、あまり面白くもないことだが、お兼も向ふへ歸ればきツとさうさせられてたのだらうから、仕かたがなかつた。

『この兒は少し悧口過ぎるから、いのちが短いかも知れん』と、祖母が云つたさうだ。

歸つて來ても、かの女は一番うへの兒に對して一番その親しみを忘れなかつた。先づ雄作の膝へ飛んで行つて、

『にイちやん』と抱かれ付いた。

『矢ツ張り、おぼえてるのです、ね』と、お兼はそれを見て喜んだ。雄作もそれによつて母の機嫌を改めて迎へるやうすであつた。

『春ちやん、にやアにやがゐまちたか？　なも、なもして御覽なちやい。』

『なも、なも、あん』と、かの女は拜むまねまでして見せた。然し、その母の弟を向ふにゐるうへの弟と同じ人だと思つてるやうであつた。そして暫らくの間は、はにかんで父のところへも來なかつた。

その翌日、お兼は留守中の物を一と渡り調べて見たかして、

『あんたのおかアさまのかた見の櫛からがいとわたしの眞珠とがありませんが』と云ひ出した。櫛などは形が古いけれども、昔のいい鼈甲であつたし、眞珠は小さいが七つばかりあつて、他日お兼の指

輪の飾りにしようと云つてた物だ。

お粂はその疑ひを直ぐ子供の身にかけたが、吾助はなほ、『まさか』と思つて、これまでにゐた女中のひとりびとりを記憶に浮べて見た。たツた獨り、あやしまれたのも、かの女ではなく、雄作の仕わざだとすれば、みんなさう惡いことをしさうな女もゐなかつた。そして歸る時に僅かばかり米を持つて行つたのなどは、來た當日に逃げたのであつた。兎に角、男子には必要もなく、女には好まれる物であるところから疑ひを運んで見るとあやしいのは幸田しかなかつた。櫛かうがいは、かの女にまかせてあつた子供や田口家の位牌などを引き取つた時に、これをもこちらへ渡させたのだが、向ふが再び欲しくなつて、子供に命じて、お粂の留守を幸ひに、こツそり取り返させたのかも知れない。たとへ直接に盗み出したのは子供であるとして見たところで、子供がそんな物に目を呉れる筈がないので、どうしてもさうとしか思へなかつた。

こちらはお粂と共に雄作を二階へ呼び上げて糺問して見ると、何を云はれても知らないと答へるばかりであつた。そして

『この頃はちツとも幸田に會ひません』とも云つた。

『…………』この上は拷問同様の目に會せて見るより仕かたがないが、そんなことは今の時代にできないので、ぢツと睨らみながら雄作のやうすを窺ふと、まだ私かにすることをして顏の色の青さも尋

常ではなかつた。

『とぼけたツてちやんと分つてますから、ね』と、お兼はおどしつけるやうに云つた。

『その返答ぐらゐではまだ事が濟まないから、さう思つてろ』と、その場はこちらも突ツ放した。今少し、正面から手嚴しい制裁をも子供に與へて置かねばならなくなつたやうに思つてだ。

例の帝國文學十卷——これはどうでもいい物だが——の行くへをも、實際にどうなつたのだらうと思ひ出しながら、吾助は獨りで二階の書棚を調べてゐると、ふと、最近に買つて見た一つの英和辭典がないのに氣が付いた。先づ、お兼に聽いて見ても、使つたおぼえがないとのことであつた。もう、直接には雄作の答へを聽くだけの信用も持つてゐられなくなつたので、自分で行つて玄關の室なる渠の机や本箱や押し入れの中を調べた。默つて持ち出すなと命じてあるのに、二階の書棚から、いつのまにか斷わりもなくギリシヤ語の本を持つて來てあるのを押し入れに發見したが、探してる辭典はなかつた。

『こら』と、いきなり、雄作の横ツつらを毆ぐり付けて、『もう、承知できないぞ。一體、お前はそれをどうしたんだ?』

『知りません。』雄作は膝をこちらへ向けて、そこへきちんとその兩手を置き、下を向いてるばかりであつた。

『もう、知らないではとほせまい。こちとらの推測が段々實際に近づいて來たんだ。』
『きツと賣り飛ばしたのです、眞珠などと一緒に。』お兼もそこへ顏を出しに來た。
『わたしの物ならまだしも、お父さんの物を盜んで賣つたりするのでは、宗教家になるもあつたものではないぢやアありませんか？』

四

『まア、お前は默つてゐな。』斯う吾助は妻に命令して、雄作だけをつれて二階へ來た。お兼がまたその爲めにひがみをおぼえるかも知れないとは思つたが、そんなことは用捨してゐられなかつた。かの女が若しそばについてゐたら相變らずかの女に對する反感がさきに立つて、直きに白狀するところをもその爲めにしないことがあらうとも思ひやられたからである。

机を脊なかにして坐わり、こちらの氣のせいか、雄作の眞ツさをに見える顏と少し隔てて相向ふと、私かに情けない氣持ちもしたが、それを押し隱して、成るべく穩やかに說いて聽かせたのは、先づ、親の物を若し盜まうとして盜むのは、嚴密に云へば、泥棒の仕初めであること。次ぎに、毎月の小使ひは子供として相應に與へてあるのだから、それ以上にかねの必要があるのは、何か特別な事情がなければならぬこと。ところが、特別な事情など渠にはありやうがない、まだ放蕩などおぼえてゐは

しないから、若しあるとすれば、ほかでもなく、實母の爲めを思つてだらうと云ふこと。幸田は半ば氣違ひのやうな無常識の强慾家だから、若し貧乏で困りなどすると、子供に尤もらしいことを云ひ含めてこちらの物を盜ませることもしかねないこと。然し、實際には、幸田はさう困つてない筈である。さきに姉むすめが死んだ時にもその勤め先きから年の割りに甲斐甲斐しかつたとして貰つた弔らひ料四十圓はそツくりその葬式の日に郵便局へ預けてしまつて、葬式の時間に靑山の茶屋で待つてた人人をすツぽかし、棺をその夜こツそりと人夫に持つて行かせて他の費用や香奠返しを儉約して埋めてしまつたと云ふこと。それからは人のめしを喰つてるのだから、生活費も自分で出すことは少しもないこと。それにも拘らず、かの女が子供に向つてかねをせびつたとすれば、こちらの物を今から、もう、少しづつでも奪ひにかかつてるのであること。それも溜めて置いて他日子供の爲めになるのだなどと云つてるかも知れないが、それはたとへさうでないとして見たところで、寧ろただ向ふの强慾心を滿たしつつあるのであること。

　およそ斯う云ふことで、今の事件に關して必要なことは、子供との問答を待つまでもなく、どしどし考へ出してはどしどし語つて行つた。どうせ、問答の形で進めようとしても、鬪々しくなつてる雄作がそのいちいちに於いて默つてゐたり、答へても曖昧であつたりするのは分り切つてたからである。

『それに、お前としてもなほ一つ心得て置くべき重大な要點は、おれと幸田とは今では敵味かたも同様であるから、お前がどツちを選ばうとそれはお前の勝手だが、ね、一たびおれを選んでその心をなほ續けるつもりなら、幸田が如何にお前の實母だからツて、かの女の爲めにおれの物を一つでも持ち出してはならん。この理窟は分つたか、ね？』

『分りました』と、雄作はこんな返事には些かのためらひもなかつた。

『それは然し理窟を並べて見ただけだ。云はば、紙の上にたて横十文字のけいを引いて、お前の思つてゐること、行なつたことがそのどこに當るかと云ふのをお前自身で私かに考へて見るやうにさせてやつたやうなものだ。ところで』と、こちらは一度改まつてから、『お前は今そのけいのどこにとどまつてるのか素直に白狀するがいい。』

『分りません。』雄作はちよツと首をかしげたが、また眞ツ直ぐにかしこまつた。

『………』子供だから、さう云つたのが分らないのか、それとも子供がさう云つて胡麻化さうとしてゐるのか？　こちらの心は渠をあはれむよりも憎む方が勝つて來たので、『馬鹿！こツちへ來い』と怒鳴つて、渠がすり寄つて來たそのあたまを一つ喰らはせた。『これほど叮嚀に嚙み分けて云つて聽かしたのが分らないことはない筈だ。さア尋常に白狀してしまへ、櫛や辭書は賣り飛ばしたことは分つてるんだから、ただそのかねを幸田へ渡したのか？　それとも、お前の買ひ喰ひにでも使つたの

か？』
『………』こちらのこわい顔をしてゐるのを時々見上げてはゐるが、堅くなつてなかなか返事をしなかつた。
『もう、日が暮れて來たが、今夜は、もう、一かばちかだ。お前がお父アんの納得する返事をするまではここで根くらべだから、さう思へ。』こちらは斯う云つて、机の方に向き直つた。そして時計に合はせると丁度一時間半をわざと默つてゐて、どこか近處の火の見やぐらで二つ番を打つ音がしたのをも見に立たなかつた。そして書きかけの論文に筆を持つてゐたが、わが子の爲めには涙が出さうにばかりなつて、少しも筆がはか取らなかつた。とうとうこちらが根氣負けをして、半ば子供の方へふり向いて、『返答はどうだ？』その聲が自分ながら少し優しくなつてるのを知つた。すると、雄作は待つてたと云はないばかりに直ぐ、
『あの、賣りました。』
『よし。』こちらは父として寧ろ多少はかたがおろせたやうに感じて、『さう白狀すれば、それだけお前のお父アんに對する罪が輕くなつたわけだが、ね、そのかねをどうした？』
『いろんな物を買つてたべました。』
『ぢやア、確かに幸田へは持つて行かなかつたのだ、ね？』

『はい。』

『なアに、少しやアお前の實母へ持つて行つたらう？』微笑しながら鎌をかけて見ても、

『いいえ』と、靑ざめたままで答へた。

『それが本當なら』と、こちらは幸田のことは忘れてしまつて、『何もそんなことで今のおッ母さんまでおこらせるにやア及ばないのだ。たべたい時には、さう云つて買つて貰つた方がいいのだから、ね。』

『はい。』

ふたりはまだ晩の食事をしなかつたので、おりて行つて、取り殘された膳に向つた。不斷よりは二時間以上も後れてゐた。お兼はまた果してふて腐れたのか、隣りの座敷で、もう、春子と共に寢てゐるやうすであつた。それにはかまはず、吾助は獨りでまた二階へ上つた。そして十二時過ぎに寢に行つて見ると、お兼は目をさましてゐて、別々なとこの中で春子をさし挾んでの話しになつた。

『どうなつたのです？』お兼の言葉はわざとらしく冷淡な出であつた。

『どうツて、賣り飛ばしてみんな喰つてしまつたのだ』と、こちらは信じ切つて答へた。『幸田には少しもやらなかつたのだ？』

『そんなことがあるもんですか？』

『然し、さう白狀したら仕やうがないぢやないか？』
『まだあなたは子供をあまく見てゐますよ。ぢやア、櫛や眞珠も、確かに？』
『さア、ね』と、こちらはばツたり行き詰つた。書物のことばかりを目あてにしてゐたので、女の物にはちやんと念を押さなかつたのである。『實は、それは特別に聽かなかつたが――』
『そんなことがありますか？』かの女は溜らなくなつたやうに首を擧げた。その顏には十分のいきどほりをあらたに見せて。
『…………』こちらはかの女を相手にしてくどくど應對するよりも、直接に雄作から今一度聽いて見る方が手ツ取り早かつたので、玄關の間にまだ勉強してゐる筈の渠を呼び寄せた。いろけの出た子供を親夫婦の寢室に入れるのはどうかとも思つたが、別に異狀はないのだから、横になつたままで尋ねた。『お前の白狀したことは眞珠や櫛にも本當か？』
『はい。』
『ぢやア、どこへ賣つたのです』と、お粂は直ぐ口を出した。
『えいと、ずツと――向ふの――』と、變な手つきでゆび指しながら、『ふる――物――屋に。』
『…………』こちらはそのやうすの曖昧なのを見て、矢ツ張り、うそを云つてるのぢやないかと云ふ見當がつき出した。『ずツと向ふとは、その手つきでは巣鴨監獄の横通りのやうだが――』

『はツきりとお云ひなさい、わたしはあす直ぐに云つて突きとめて來ますから！』

『ずツと向ふの――えいと、ずツと向ふの――』馬鹿か薄のろのやうな手つきをまたやり出したが、それを中途からやめて、子供は默つてしまつた。意久地なしと云はうか、却へつてふてぶてしいと云はうか、こちらはそれに呆れてしまつた。

『しツかり物を云へ、しツかり！』

『…………』雄作は然しおづおづはしてゐるが、口をつぐんでしまつたままだ。

『いい加減なことを云つてゐるのですよ。』

『さうだらうよ。』暫らく吾助は怒りを抑へてゐてから、『お前は返答をしなければそれですむと思つてるやうだが、ね、それは惡いくせだ。眞珠はどこへ賣つたか、はツきり云へ！』

『どこへも賣りません。おかアさんの思ひ違ひでしよう。』

『なんだい、うそつき！』お兼はまた子供の方へ顏を擧げた。『自分が幸田へ持つて行つてやりながら、わたしがうそでも云つてるやうなことを！』

『そんな心配は今云ふに及ばないぢやアないか』と、こちらはかの女をなだめた。それに、また、確かに幸田へ持つて行つたのだとこちらで斷定してゐて、若しさうでなく、子供自身がそツくり喰ひ物にしてしまひでもしてゐたら、そこに子供に『おかアさんの思ひ違ひ』をあとまでも云はせる餘地を

與へ〻からである。兎に角、若しこの機に惡いしうとや小じうとでもゐたら、ひよツとすると、こんなことでも無實の罪を着せられ、芝居のやうにしほしほとして離緣になる嫁があるかも知れないと思つた。そして、特に芝居であり振れたことに近いことが自分の狹い周圍にも斯うしてあつたのを、少なからず、物すごく感じて見た。それは然し瞬間のことで、直ぐ雄作に向つて、『お前は然し、今、おツ母さんの物を賣つたと云つたぢやアないか？』
『本當は、――本當は』と、ためらつてから、『賣りません。』
『ぢやア、二階で云つたこともみんなうそか？』
『はい。』この返事はまた速かであつた。
『なんでそんなうそを云ふんだ？』
『さう――云つた――方が――いい――だらうか――と思つて。』
『馬鹿！　あツちへ行け！』もう、こちらもわが子ながら、相手にする愛情も勇氣もなくなつたのをおぼえた。父の言葉に恐れて斯うもああもと云ひまごついたとしても、そのまご付くのには後ろ暗いところがある爲めにきまつてゐた。
『どうしても向ふの親をかばつてゐるとしか見えませんね』と、お兼は雄作の去つたあとでひそかに云つた。『うちの物を盜んだのは如何にも憎いけれど、幸田がさう云ひつけたものとすれば、雄作が

可哀さうです、わ――あア云ふ風にうそを白狀して見たり、またそれを取り消して見たりしなければならなくなつて。』

『そりやアさう、さ。』こちらもそこは多少まだ希望がつなげるやうでもあつた。そして雄作が立ち上るまでに暫らく立ち上りかねてゐたのは、そんなことでもお兼さへゐなければ正直に訴へる氣があつたのではないかと思はれた、『あのいつかの十五圓も、さうして見ると、矢ツ張り、落したのではないかも知れないから、ね。』

初めて雄作がこちらへ來た月はおとどしの十二月で、その末日、乃ち、おほつごもりの日に、郵便局から出したかねがまだ諸拂ひに不足であつたので、雄作を以つて――まだ幼稚だから少し無理かとは思つたが、夫婦相談の上、これも子供に最初の經驗を與へることだからとして、試みに――もう、十五圓を出しに宮仲局まで遣はした。すると、果して取られてしまつたと云つて、豫定の時間よりもずツと後れて歸へつて來た。おもちや屋をそとからのぞいてゐた時に取られたのだらうと云ふのだ。物好きな試みが惡るかつたとすれば、子供心にも心配してそこらあたりを空しく探し廻つてゐたと云ふその心根が如何にもいぢらしくあはれに思へて、寧ろ罪なことをしたのが後悔された。そしてこの報告を受けた最初におこつて見たのも子供の爲めには氣の毒になつた。が、そのあとを二十分間とは後れないで幸田が訪ねて來たので、こちらどもの心は疑ひに變じたが、幸田がそらとぼけて横取りし

たのだと云ふ證據はつかめなかつたので、それなりになつてしまつた。
『あの時だツて、本當に落したか取られたかしたのなら知りませんが、さうでない以上は、どうしても幸田のでき心としか思はれませんでした、わ。ひよツこり出くわしたのを幸ひに。今度のことも、子供が、而も男の子がどうして櫛なんかに氣がつきましよう——女の幸田に云はれないぢやア？　幸田は巡禮をして來てから、ただ一しほ圖々しくなつたばかりですから、ねえ。』
『おれは、もう、ちやんと決心してゐる』と云つて、その夜はすましてしまつた。そしてその翌日、雄作が學校から歸つたのを捕へて一つの云ひ渡しをした。『お前がうちの物を勝手に無くしたと云ふことは、どう云ふ理由でしたにせよ、不都合だから承知できない。が、他人でもないから、それはそのままに暫らく預りとして置いて、若し今度同じやうなことがあれば、その時には、もう、斷然うちを追ひ出してしまうつもりだ。これは前以つて斷わつて置くのだからお前もその覺悟でゐろ。それから、無くした物は懲らしめのため辨償させなければならないが、お前の小使ではとても眞珠などの代價辨償はいつまでもできまいから、先づ、辭書の方に對して、お前の雜誌發送の手傳ひ賃から毎月五十錢づつを當分のうち左し引くよ。』かねが欲しいものとすれば、これには一番困るだらうと思はれた。
　すると、果して二三日立つてから、ないと思つてた辭書が思はぬところに發見された。書棚に立て並らべてある本の後ろからである。その後ろの當りも初めに十分念を押して見た筈だが、或はそこだけ

見おとしてゐたのかとも考へ直して見た。が、この頃の感情では、どうしてもさうとは思へなかつた。雄作が友達から取り返へして來て、――さうだ、古本屋にでも渡したのなら、もう、とツくに無くなつてゐよう――こツそり、どうせ直接に父へは渡せまいから、隱して置いて、そのうちに分らせようとしたにきまつてた。

子供が多少は思ひ返へして改まつて來たしるしかと喜んだが、

『それにしても、本を友達から取り返すかねなんかほかに出る道がなからう――幸田から出なけりやア。』

『さうでしようとも！』お粂も私かに合ひ槌を打つた。『どうせ、うちの物を賣つたおかねでまた買つて來たのです、わ。』

『然し、考へて見ると、また幸田ばかりのせいでもないか知れないぞ。たとへば、眞珠やべつかふのやうな大きなかね目の物は幸田が取らせたとして見ても、その手をおぼえて今度は辭書なんかはただ子供が自分自身の小使ひに使つてしまつて置き乍ら、その不始末を發見されたのに困つて、その本を買ひもどすかねをその親から――何とかうそを云つて、それとも實を云つたツて親からして弱味があるんだから、無理に――せびり取つたと云ふこともあり得ようぢやアないか？』兎に角、家庭としては、そとからも內からも、大變なことができつつあつた。

五

兄の方にさう云ふよくないことが度かさなつて行くのを知つたからであらう、その下の政直も盜み喰ひなどすることをいいことのやうにやり出したので、時時、その父や母に叱られるやうになつた。その前には、兄の盜み喰ひなどを政直と初雄とが一緒になつて――自分らができないのをくやしまぎれにだらうが――母親に素ツ破ぬいてゐたのが、この頃では、初雄だけが取り殘されるやうになつたと見え、政直の惡いことをも初雄が告げ初めて來た。

初雄が今になつてその實母に云ひ出したことによると、前の女中がよく子供三人を緣日へつれて行つて、春子の爲めに僅かの物でもみやげを買つて來たのは、少しも女中のふところから出たのではなかつた。その度每に子供らの持つてゐるかねを少しづつ卷き上げてゐたのである。その代り、子供らに砂糖を嘗めたり、臺どころの物を勝手につまみ喰ひしたりすることを許してあつた。そして『ねえやがおかアさんの惡くちを云ふと、にイさん達も一緒にいろんなことを云つた』さうだ。『なぜそんならその時におかアさんに云はなかつたのです』と、お兼が叱ると、『にイさんが云ツつけたら毆ぐると云ふから』との答へであつた。この時、兄どもはまだ學校から歸つてゐなかつた。

『にイさんは女中に、今のおかアさんは欲しいだけお菓子も呉れないから、わざと御はんを澤山たべてやるんだツて。』

『馬鹿だ、ねい、お前は――そんなことを早くから聽いてゐながら！』お粂はいまいましさうに渠を睨らみ付けた。かの女が渠を、自分が腹を痛めた子でありながら、初めからさう可愛がつてゐないことは、そしてその特別な理由も、今そばにゐて話しを聽いてる吾助の分つてゐるところであつた。『もう、おかアさんやお父さんの子にしてやらないよ。――あなたの子たちも失敬ぢやアありませんか』と、その目を筋のとほつた鼻のさきまでとんがらかせてこちらを返り見た。顏が燃えてるやうに。

『たとへ親にそんなことがあつたにしても、子が女中になんか云はないのが本當だのに、まして特別にあれだけ注意しておやつもやつて來たのを、まだ足りないなんて！もう、わたし知りませんよ。御はんだツて、勝手におなかの裂けるまでたべるがいい、わ。黄疸になりかけるくせがあるから、人がわざわざ心配して加減をさせてゐたのだに！』

『…………』あれには、然し、別にもツと惡いくせがある爲めらしかつた。が、雄作の意地ぎたなさは、學校から歸へると直ぐ、政直や初雄をかげへ呼んで責めつけ、けふ、母から何と何とのおちんをいくつ貰つたかと聽き糺して置き、それからそれだけの物を自分も貰はないと承知しないことででも分つてゐた。政直の方はどうせ幸田の養子になるのでもあるから、どんなに小さい人物になつても

左ほどかまはないが、ここのあと取りであつて、而も多少は見込みがあると思はれた雄作が、矢ツ張り、そんなことでは、自分として頼朝や太閤のあとが平凡人に終はつてしまふのであつた。『さう、さ。もう、うツちやつて置くがいい。どうせ、みんな出來そくないのやつらばかりだから。』それにしても前の女中が主人を馬鹿にして、子供を丸め込むやうな、そんな惡い人物であつたとすれば、さきに雜誌の合本を無くなした罪人のうちへ、矢ツ張り、その女中を少くも加へて見なければならないではないかとも思へた。が、そんなことを今云ひ出すと、また、お粂がその激した感情に輪をかけて、『あなたはまだ子供の身びいきをするのですか』と云ふにきまつてた。

『…………』こちらはかの女の今一少し心が練れてゐて呉れたらと云ふことを願つてゐた。すべての子供に對するとしては、殊にいろけも付き、知識も多少はできた子供に對するとしては、かの女の言葉が餘りにとげとげしかつた。それが爲めに一層、血のつづかぬ子をかの女と同時に激せしめ、面白半分のいたづらや反感などに走らしめる。その結果は、かの女として僅かのことにでも初雄だけに當り散らすことになつてゐる。ところが、こちらも亦かの女に對する遠慮があつて、子供のことになると、『初雄はまだ幼稚で何も分らないのだから、ね』と云つて、雄作や政直にばかり當つてゐたのだ。が、それでは子供に不公平の感じを與へて、親としての權威も薄らぐだらうと云ふことに氣が付いてからは、初雄をも――矢ツ張り、幼稚ながら、春子の爲めに買つた繪本などを勝手に持ち出して人にやつ

たりするやうな、惡いと云へば惡いことをするので――時々投ぐりつけることになつた。さきにお粂の姉が初雄に一つうへのむすめをつれて上京した時、その娘の兒が吾助の持ち前なる太いつよい聲を聽いて、

『おぢさんはおそろしい、わ』と云つた。が、初雄はそれに對して

『おとうさんは聲ばかりで、少しもおそろしくないよ』と答へたさうだ。さう云ひ當てられたのに對してもこちらは子供の幼稚ながらの一と見識を可愛く思つたが、今ではそれを自分から裏切らねばならぬことになつた。まださう固ならぬあたまを打つのは然しよくないと思つて、尻ツぺたをだ。それにしても、初雄こそ一番迷惑で、母からも父からもぶたれるのは渠ばかりであつた。そして父が手を當てないのはお粂と春子だけになつた。

前の女中が出たのは、今となつて見れば、足の出ないうちにいい加減に切り上げたのでもあらうが、雄作と喰ひ物のことで云ひ合ひをしたのが一番近い原因であつた。そのまた前の女中も渠がいぢめて追ひ出したわけだ。ところが、今の女中も亦それと同じ理由を述べてひまを取つてしまつた。

『何の爲めにそんなことをするんだ』と、父が聽いて見ても、

『そんなことはしません』と答へるばかりであつた。が、やがてそれがすべてお粂を困らせる爲めであることが分つた。

吾助の留守にお粂が隣りへ春子をつれて話に行つてゐると、雄作が學校から歸つて來て、直ぐまた弟どもを責めて見たと見え、まだ外套を着たまま、隣りの玄關へ來て、
『おかアさん、僕にも角砂糖とパンを下さい』と怒鳴つた。そしてあとで、母から
『なんであんな見ツともないことをするのです、あなたにだツてちやんと別に取つてあつたのに』と叱られた。それを渠は隣りのものに向つて、
『わざと困るやうにしてやつたんです。詰らないものばかり呉れるから』と云つたさうだ。
『何が詰らない？』吾助もそれを聽いて怒らないではゐられなかつた。『手まへ達にやア手まへ達相當の物をやつてあるんだに！』然し、こちらが私かに考へて見ると、お粂がさきに里から持つて來た澤山のちまき――これは子供に珍らしかつたらう――は最初に少し子供らに分けてやつた切り、くさる物でないからツて、大事さうにしまつてあつた。眞珠がなくなつたのにすツかり興をさましてしまつたからでもあらうが、かの女が
『これはわたしが持つて來た物だから、そんな不埒な子供には、もう、一つだツてやりませんよ』と云つて。
『ちやア、勝手にしろ。』吾助は自分もまた喰つて見たくなつたのをそのままにしたのであつた。が、社會に向つてもわざとらしい秘密を好まない渠としては、自分も何か喰ひたくなると、子供の見てゐ

るところででも、おほびらに『何からまい物はないか』と、戸棚などをのぞいた。すると、そんな時はお兼もうち笑ひながら、

『あれ、みんな御覧なさいよ。おとうさんがお菓子をどろ棒しまアす』などと云つた。それにしても、ちまきだけはかの女の所有物として勝手に手をつけなかつた。

或夜、夫婦が或會へ行つての歸りに、ふと、そのことを思ひ出して吾助は

『あれをお前が大事さうにしてあるのも子供をひがませる一つの原因になつてるかも知れないから、早くやつてしまう方がいいよ』と忠告した。

『第一にあなたが喰べたいのでしよう。』お兼はなほ自分のお國名物を持つてると云ふ自慢がさきに立つやうであつた。

『おれもさうだが』と、こちらはかの女の意をも汲んでかの女を喜ばせたが、さう云ふ無邪氣な誇りの爲めにかの女がますます子供の感情をそらせて行くのは無意義なことに思はれた。そして歸つてくると、春子を置いて行つた爲めに第一番の留守番役である雄作は、どこかへ行つて、うちにはゐなかつた。そして春子は幸ひにもいつもの通り隣室の寢ごこにおとなしく寢てゐるらしいが、茶の間には初雄がうたたねをしてゐて、政直ばかり起きてゐた。が、暑くツても、不用心なので締め切らせてある部屋ぢうに、餅を燒いたにほひがぷんぷんしてゐた。それがまた、政直の何だかとぼけた顔をしてゐ

るのでも、たツた今のことであるのが分つた。

『お前も亦にイさんを眞似て、ますます惡いことをし出した、ね』と云つて、お兼の前もあることだから、一つ、渠のあたまを投ぐり付けた。すると、つんと少し横を向いて坐わつてたのがからだを傾けて疊のうへに左りの手を突いた。が、直ぐきちんとなつて、また默つてゐた。弟よりも人ががいいかと思はれてた兄がさうでもなかつたと同時に、兄より意久地なしに見えた弟がまたこんな時にも泣かなかつた――その癖、實母のことを云ふと一番さきに涙をわけもなくこぼすが。つまり、どいつもこいつも皆づぶといところがあるのだ。この性質がこちらにもあるのかも知れないが、それがまた子供の爲めにあとあとから物になるのだらうかと、父としてはまだ私かにこころ頼みをかけられないでもなかつた。そして子供を憎ましくなつたそのそばから、そばから、隱れたいづみのやうにまた堪へがたい情愛が湧き溢れて來るのであつた。

『こんなにへつてゐますよ。』お兼はがツかりしたやうすでちまきの這入たおほ袋を持ち出して來た。雄作もやつたのだらうが、いつのまにか三分の一は無くなつてゐた。『ああ、いやだ、いやだ、丸で餓鬼道に來てゐるやうだ!』

『……………』こちらには、然し、さう解釋すべきではなかつた。どうせ、あるところの物を平らげてしまひたいのは子供でもおとなでも同じだから。ごんな理由があつて大事がつたり、差し控へさせ

たりするにしても、それは然しすべてを早く提供してしまうに越したことではなかつたのだ。『まして
お前はお菓子類をきらひ、子供は好きと來てゐるから。』
『それもさうです、ね』と、お兼は子供のゐないところではよく分つてゐた。
『…………』こちらもそんなことでいきなり子供を投ぐつたのを可愛さうになつてしまつた。
『どうせあんな子の上に、また幸田のやうなものがついてるのだから』と、お兼もいよいよあきらめを付けたかして、また暫らくは親の方から仕向ける騒ぎはなかつた。そして雄作が隣りのものに
『女中を探しても來ないのがいい氣味だ、實母もよそで女中をしてゐるあひだは、うちのにも飽くまで臺どころ仕事をさせてやるんです』と、如何にも生意氣さうなことをしやべつたのにも、かの女はさう心を激させない風であつた。どうせ、女中の候補者がありさへすれば傭ふのであるが、それをまた雄作がいぢめ出すのでは、お兼ばかりか、こちらも特に一つ困ることがあつた。主人が手を出すから女中がつづかないのだと云ふ世間の評判になつてるさうだからである。
『幸田が人に召し使はれてるのはあいつ自身の甲斐性なしからだ。』こちらは雄作に斯う云つた。『それをお前がかれこれ氣をもんでも、お前が一人前になるまでは駄目だ。それよりも、おれに下だらない評判を受けさせないやうにしろ。』

『どうせ、わたしは幸田なんかと身ぶんも育ちも違ふのです』と、お兼は高をくつてゐた。

『…………』一つには、幸田が宗教と云へば耶蘇教しかないと思つた時代もあり、雄作がまた一番家に近いからと云つてやられた中學校に於いて少からず同じ教への感化を受けたのが、佛教の寺生まれなるお兼を趣味上馬鹿にすると云ふ點もあるらしかつた。それに、お兼がピアノをへたなしろうと以上には彈けながら、西洋音樂を絶つて、三味線の稽古をしてゐるのが、子供には下等だと見えるらしかつた。だから、吾助は一度雄作に向つて、

『英語をおぼえ出すと、大抵のものは外國のことばかりがありがたいやうになる、その間違つてることはお前もお父アんの主義によつてよく分つたといつか云つたやうだが、英語に對して國語の長所を忘れないと云ふ高尙な氣持ちは、西洋音樂に對して日本樂なる三味線の妙味をも尊ぶのと同じことだよ』と說明した。無論、外國の長所は長所としてだ。

『音樂家になつてもいい』と、雄作は云つたこともある。また『語學者になつて各國の言葉を比較研究して見たい』とも。『けども、結局は、日本の精神に從つておとうさんのよりも新らしい宗教を建てるのが目的です。』

『さうか？　決して惡いことぢやアない』と、その時、こちらも答へた。

『それでゐて、親の物なごをどろ棒して』とは、お兼にしては云へたが、實父としては子供のうそに

も意氣込んでゐる精神をあたまからうち碎くことになるから、少しも追窮しなかつた。
『兎に角、お父アんは初め信じた耶蘇教を今ぢやアうツちやつてしまつて、佛教にも反對で、簡單に云はば、まア、神道で――人間のまことが物ごとに正直になり、熱心にもなれると云ふのだから。さうして、さう云ふところから發した國語や音樂はありがたいもので、たとへ外國人には分らないでも、日本人にはいのちだから。』斯う云つて、幸田などが人格を鍛つて來ると云つて四國巡禮に行つて來ながら、ただ一層人が惡くなつたに過ぎないのも、うわツつらの改宗であつて、そとをばかり見て、自己のうちを返り見ないせいだと云ふことも附け加へた。

六

田口の家は巣鴨の宮仲、天祖神社のうら手にあつた。で、吾助の電車乘り下りも大塚の終點からするのだが、そとにゐても自分のあたまの中では子供を憎めないで幸田ばかり憎らしかつた。そして天祖神社の鳥居うちなる敷き石を渡つて來るたんびに、ここらあたりで、幸田があの十五圓の金を、
『うちへ行つたら誰れかに取られたと云へばいいから、ね――どうせ本當のおツ母さんの爲め、お前たちの爲めになることだから』などと云つて、子供から橫取りしたのぢやアないかと思ひ迷つた。そしてそれを父に白狀する折りを失つたのが病みつきになつて、また實母の爲めや自分自身の爲めによ

くないことを重ねて、獨りで苦しんでるのか、とも。そしてその結果の燒け氣味で、幸田に云はれて憎みを加へた繼母にばかり、こツそりと、當り散らしてゐるのでは？

ところが、渠をおだてるものが別にまた近く意外なところにあることが分つて來た。隣りの細君の妹お光さんは、國にピアノもあつて西洋音樂ができると云つてるのだが、そして上野の音樂學校へ入學の準備だと云つて私立の音樂學校へかよひ、歸つて來ては譜にも合はない唱歌をばかりやかましく歌つてるのだ。そして今持つてるヴイオリンをたまに彈いてもその調子さへ合つてゐないので、お粂が聽きかねて調子を合はしに行つてやつたこともある。それからは恥ぢてその樂器を持たなくなつたのか、ぱツたりそのきイ〳〵云ふ音は絕えた。それでも女同士は兩方からの往き來をしてゐたのである。

が、うちのことを知りさうでもないことまで知つてゐたり、また知つてゐても少し間違つてゐたりするのをお粂が私かに不思議がつてるうちに、初雄の云ふ話から分つたによると、雄作とお光さんとは兩方の窓から板べい越しに毎日のやうに手紙のやり取りをしてゐるのであつた。雄作の方は詩にまで戀を書いたのだから、無論、かの女を戀しい爲めだらう。が、二つも年うへのかの女が何ゆゑにそんなことをするのか氣が知れなかつた。

『兎に角、雄作の書いた手紙の見本を一つなり二つなり見せて貰つて來い』と、吾助はお粂に命令し

た。そしてお兼が取つて來たのを讀んで見ると、

『さうです、あなたの質問通り、母は僕らに追ひ出されても喰へるやうに三味線の如き下等な物を稽古してゐるのです』と云ふやうなことも書いてあつた。

『無論、お前が三味線を稽古する以上は專門家になる覺悟でやれとは云つてるが――』

『然し、下等な物だとか、僕らに追ひ出されてもとか云ふのは、あんまり生意氣ぢやアございませんか？』

『いくら云つても、おれの精神が分らない豚兒だらうか、ね？』

『いいえ、多少は分つても、これは向ふのへたな西洋音樂かぶれの機嫌を取る爲めに、雄作が不見識にもそんな感傷的なことを――あること、ないことをつけ加へて――云つてるのでしようよ。さうして向ふふたりの所在なさに近處のうち輪ごとでも聽きたがるその惡いくせに釣り込まれてゐるのですわ。まさか、いかなお光さんでも、まだ子供の雄作を戀してゐるとは思へませんから。』

『馬鹿なやつだ、ねい。』呆れるほかはなかつた。

『雄作に學校の途中でお辭儀されるのが恥かしいなんて、うぶさうなことを云つたのも眞ツ赤なうそで』と、お兼は大分に熱してゐた。『きツと、向ふから水を向けて釣り出したに違ひありません、わ。

こんな物をこツちへ渡したのが向ふの考へなしなところで、こツちぢやアこれですツかり讀めました、

わ。雄作の馬鹿も、向ふのたくらみも。それに、向ふでは一つの恨みがあつたやうです』と云ふによると、三ケ月前以にお隣り宛に無名のハガキが届いて、
『へたな唱歌などよせ、近處隣りが迷惑だ』とあつた。向ふ夫婦と妹とで、隣りとはこちらだらう、それに〇〇さんは毎夜おそくまで書き物をして起きてるからと云ふことになつた。
『さうして、これもまま母育ちの、あの顏やからだまでいぢけてゐる主人が、いもとさんに向つて、かまはないから、つら當てにもツとやかましく歌つてやれと云つたさうです。こツちは、まさか、うちの主人がそんなことをと笑つてしまひましたが――』
『…………』こちらはあまり世間も知らぬ教師(東京高等工業のだ)がそれ相當のことを云つてるとしか思へなかつた。『そんなことアうツちやつて置けばいい』と云ひながらも、『それはひよツとすると達ちやんの仕わざかも知れないぞ』と云ふことを思ひ出した。別に證據があるのではないが、以前に、達磨が庭から仕切りの板壁のふし穴をのぞいて、あの唱歌を氣にして、向ふへは聽えぬほど小さい聲でだが、からだに力を入れて、
『默れ、やかましい』と云つた。
『おい、そりやアいけない』と、こちらは注意した。『向ふはおほ屋さんの家族だから。』
『ぢやア、さうかも知れませんが』と、お衆もそのことをにが笑ひに終はつてしまつた。

が、今度は、また、うちや近處へ出入りする八百屋へ行つて、お光さんが、お兼の一生懸命に三味線を稽古してゐるのは、向ふの女中の三味線に負けるのがくやしいからだとしやべつたと云ふ事件がそとから聽えて來た。これと前後してまたお光さんとその姉が、或夜、吾助の留守に怒鳴り込んで來た。お兼がお隣りのきやうだいは九州生まれだと云つてたのを聽き付けて、惡くちを云はれたのだと思ひ取つてだ。九州をんなはづぼらには違ひないが。

『一體、あなたがそんなことをおツしやるよりも』と、お兼は間違ひと分らせたあとでさかねぢを喰はしたさうだ、『おうちの女中さんは三味線を彈けるかも知れませんが、聽いたこともありませんのに、わたしがその女中さんの三味線に負けるのがくやしいからなんてどツから出た言葉です、わざわざ八百屋へなんかそんなことをおツしやつて？』

『そんなこと——云はない、わ』と、けろりとしてゐたとのことだ。が、吾助が公平に判斷すると、それも或は根のないことかも知れなかつた。その代り、お光さんがこちらのうち輪のことを知つてながら思ひ違つてるのも、雄作が殊更らに繼母を惡い者にして、あること、ないことを云つて聽かせる結果だらう。そしてこちらはお兼が八方に敵やわいわい連の噂さを受けてゐるのを氣の毒になつた。然し、吾助から云へば、結局、それもかの女が世間並みを離れた男子を所天としてゐるところからうらやまれたり嫉まれたりして起るのだから、その苦しさをも寧ろ喜びとしなければならぬのであつた。

兎に角、お光さんは可哀さうにもこの事件の爲めに東京にゐられなくなつて、九州へ返されてしまつた。そしてこちらは隣家の自由をさまたげようとするハガキなど無名で出すものではないと云ふことを、直接におほ屋の息子へよりも、おほ屋さんへお兼を以つて念の爲めに通じさせた。

『あれには皆も困りましたから返してしまつたのですよ』との答へであつた。そして親の方と息子の方とは別々だから氣にしないやうにともあつたさうだ。こちらはそこにも繼母まま子の行きさつを思ひ出さないではゐられなかつた。が、お光さんの事件で近所の八百屋やさかな屋などをお兼が呼びつけたところから分つたによると、また、幸田が近所へ幾度も來てあがり込み、吾助や子供に關する愚痴ッぽい話をして、泣いたり笑つたりしてゐるのであつた。一緒になつたそもそもに、吾助がかの女のおほをぢの妨害をさける爲め、かの女を人力車に乘せ、まだ年の若い勢ひでそのあと押しをして自分の父の家までつれて來たことまでも、皆が知つてゐた。

『なんて馬鹿でしよう、ね』と、お兼はまた憤慨した。『たツた一杯や二杯の澁茶をありがたがつて、きツと、云はないでもいいことまですツかりしやべつてるのですよ！』

『…………』こちらは幸田がそんなにもだらしなくぼけて來たかと思ふと、もう、それを敵として見たりするよりも寧ろ可哀さうな氣になつた。目のきよときよとした、きたならしいお婆アさんが時々お宅の門をのぞいてゐたと云ふやうなことを近所からお兼が聽いて來た時、それは幸田に違ひなかつ

た。が、近所では、知りつつさう云つてとぼけながら、かげでは面白半分にかの女を呼び込んでゐたのだらう。『そんな不埒なさかな屋や床屋のかみさんなら、一度呼んで來い』と、こちらはお兼に命令した。『さうして、あんなぼけた婆アさんをおだてるのは、色氣ちがひを大道でからかふのも同樣な無慈悲の罪に當るぞと云へ！』

『ぢやア、さう云ひます、わ。』かの女は然し子供らのゐる時にその命令を正直だが實行したやうであつた。これがまた、幸田に就いて意見の相違ある子供をおこらせた。二階で聽いてると、雄作が大きな聲で、

『僕の實母は氣ちがひぢやアありません』と怒鳴つてゐた。

『雄作』と、こちらはあとで渠に向つて、『幸田はおれ達の見るところぢやア少し氣が違つてるのだ。お前にやアまだ慾目もあり、さうして觀察力が足りないから、氣ちがひとは見えまいが、おれはさう見てゐるのだ。だから、ね、おれからお前に注意して置くことは、實母としてお前が幸田を思ふのは自由だが、理性上のしんしやく無しにあれの云ふことに從ふのは、おれがお前の父として反對である。然し、まだお前がお前の理性と父に對する尊敬とを棄ててもいいつもりなら、それでもかまはない。その代り、さう云ふ心持ちがお前のこれからの態度と行動とに一度でも現はれたが最後、おれは、もう、お前をこのうちに置く必要も希望もなくなるのだから、さう思つてゐな。』

『はい』と、雄作は答へるばかりであつた。
『若し今度會ふ折りがあつたら、幸田におれがさう云つてゐると傳へて置け。お前がうちを追ひ出されても急に驚いたりしないやうに。』
『はい。』
『………』こちらは半分以上も見限つてるせいか、子供の答へに少しも手ごたへをおぼえることができなかつた。これで若し自分のお粂がこちらの妻としてその親類や世間の攻撃と戰つて得られた物でなく、そして今の生活にも充實氣(じうじつき)ぶんを持てなかつたとすれば、自分はどんなに寂しいものであつたらうと思はれた。

そのうちに、子供らがお粂の豫告によつて待ち受けてゐたおほ切り雜煮もちがかの女の里から屆く時となつた。そしてまた正月が來た。吾助もお粂も餅をさう好きでないので、子供らに或程度はきめて好き勝手に喰はせた。またきてゐた女中にも、さうであつた。そして七日になつたが、その日は朝から達磨(たつまろ)もやつて來て、二階から聽いてると、下はまことに賑やかであつた。

午後になつて、吾助も思索や執筆に倦んじて茶のまへ來てゐると、そしてほかのものは座敷や玄關のまにゐたが、丁度茶のまの緣がはと向ひ合つた板べいの向ふがはから、
『雄ちやん、雄ちやん』と呼んでるのに、ふと、氣が付いた。

『…………』幸田の少しぢれた頓供ごゑではないか？　それでも、突然のことで、ほかのことを思ひ出すひまもなく、ただ何か子供に用事があるのだらうとばかり思つた。『雄作、お前のおッ母さんが來て呼んでるよ。』

『はい』と云ふ返事と、お兼の『何ですッて』と云ふとがつた質問とが、殆ど同時にした。そしてお兼の方が早くやつて來て、

『幸田ですッて？　雄ちやん、行つてはいけませんよ！』

『さうだ』と、こちらも既に思ひ返してゐた。こちらの子を人が自由に呼び出さうとするのが癪にさわつた。どこに幸田が來てゐるのか分らないで怪訝な顔つきをして突ッ立つてる雄作に向つて、そとの者へも聽えるやうに、『おれとしては今ぢやアお前はあいつの子ぢやアないのだ。』

『兎に角、何の用か聽くがいい、わ。』お兼はこれも集つて來た達磨(たつまろ)に向つて、『あんた出て行つて御覽なさい。』

『おりやア顏を知らんが、な』と云ひながら、達磨はあわてて云はれた通りに玄關を出た。そして暫らくして歸つて來て、『きたないお婆アさんの人』があとをふり返り、ふり返り、逃げるやうにして向ふへ行つたが、角まで追ひかけて見ると、矢ッ張り、おづおづして角から三軒目の店へ隱れたと報告した。

『ぢやア、矢ッ張り、秋ちやんのところでしよう。』お兼はいやな顏をした。秋ちやんとは初雄や春子の遊び友達で、ここへ來ていろいろ世話になつてゐるのだが、その母と云ふのはこちらに對して一番かげ日なたがあるので、さきに近所のかみさん達を呼びつけた時も、來ることができなかつた。さうだどうせ、どいつだツて平凡人中のそのまた平凡人どもだから、そんなものは、

『相手にしない方がいい』と云つてるのだけれども、お兼は、

『氣の毒ですから』とか、『功德だから』とか云つて、いつも近所の離婚ばなしや仲直り事件などを持ち込まれてゐるのだ。

『………』それほど人のことを思ふなら、今少し、形だけでもその母として子供とのあひだの感情を取り直して呉れるといいがとも思はれた。が、こちらも道理を押して行く上では、どうせあんな幸田がゐる限り、子供がよくなる見込みはなかつた。

その晩めし後、吾助は用があつて家を出たところ、神社の境內で幸田が今やツと歸つて行くのにその後ろから出會つた。大きな杉やいてふの樹のあひだであるから、電燈は所々についてゐても、うす暗かつた。聲をかける氣もないので、こちらが默つてかの女の左り手を通り越す時、かの女もそれと氣が付いたか、むかし通り毆ぐられでもしないかと云ふ風にこちらを見向きながら、そのからだをちよツとわざわざよけてゐたやうであつた。その目はなのことはよく見えなかつたが、何か長方形のひ

らべッたい物の風呂敷包みを左りの手に持つて、肩のあたりまで優しく擧げてた樣子が、そのむかし、かの女が教員用の教科書包みを待つて、はかま無しにすらりとした裾を塗り下駄の後ろまで引きつつ小學校へ出勤してゐた姿を思ひ浮べさせた。少しねこ脊の、そして脊も低い方だが、すらりと優しく高いやうに見えた。かの女はこちらより三つも年うへだが、あの時はまだ若くツて、綺麗のやうでもあり、また英語や精神問題に就いても萬更ら話せないでもなかつた。

それが今や、午後の一時頃から五時間ばかりも、緣もゆかりもない人のうちで、一杯の茶うけで、べちやくちや下だらないおしやべりをしたり、愚痴をこぼしたりして歸つて行くのかと思ふと、かの女との關係を、自分の社會國家にも有用な精神が若返る爲めに、早く切り上げたことの利口であつたのを喜ぶと共に、そこにまた切實に自分の生活する時代の變遷のおそろしさをもこの見じめな實例によつて觀じられたのである。

早い話が小學女教員の姿だけで云つて見ても、女教員が學校へまではかまなしで裾ながのずらりとして行つたとは、今の十代二十代の男女には想像もできなからうではないか？

七

『…………』その二三日後、吾助が何げなくそとから歸つて來ると、妻のお兼は玄關のまで何だか探

し物をしてゐた。雄作の書物や持ち物を入れさせてある押し入れのかたびらきを明け放つて、その中の物が疊の上にさんざん散らばつてゐた。そして常になくかの女は

『お歸りなさい』をも云はなかつた。

『どうしたんだ?』こちらはその室へあがつてから、まだ高帽をも取らないで、突ツ立つたままかの女を見おろした。挨拶のないのが癪にさわつたのと同時に、ぺたりと坐わつてゐるかの女が默つてこちらを見上げた顏つきのあまりに緊張してゐるのが馬鹿々々しかつた。『そのつらを見ろ!』

『あなたにはまだ申し上げないでゐましたが、ね』と、かの女は初めてその膝をもこちらへ向けて、『實は、わたしの財布にちやんと別にして、しまつてありましたおさつが七圓、そツくり無くなつたのです。』

『………』直ぐ雄作のせいだらうとはこちらも思ひ及んだのであるが、容易にさう口へは出したくなかつた。これが果して事實だと證明できたら、もう、何と云つても雄作のこの家に於ける立ち場がなくなるのだから、うかうかとかの女をして當座の感情に走らせて、事實の判斷をあやまらしめるやうなことはできなかつた。それに、いつかもあつた通り、こちらが手渡ししたかねを春子のことにまぎれてそツくりそのままかの女がちやぶ臺の上に置き忘れてあつたので、こちらはそ知らぬ顏をしてそツとまたたもとへ入れた。そして食後の散歩の爲めにそとへ出た。そして家ぢうがおほ騷ぎをして

ゐるところへ歸つて來て、『二度と再びこんなおろそかな不注意をするな』と云つて渡してやつた。今度のはまたあまりに大切にし過ぎてしまひ無くしと云ふこともないではなからうと思へた。けれども今や自分のいきどほりを半ば私かにここに見えない雄作の方へ轉じさせながら、『いつ無くなつたのだ？』

『氣が付いたのはけさのことですが』と、かの女はその顏の緊張を少しゆるめたと同時に、あまへて訴へるやうな聲になつて、『ひよツとすると、きのふのことかも知れませんの。きのふは珍らしく一圓以上の必要がありませんでしたから、財布は明けても、おさつを入れた方のあひだを見ませんでしたから。』

『ふん』と、こちらは仕かたなしに口を結んで鼻で受け答へをした。けさからこのゆふがたまでもかの女自身の方を調べたり考へたりしてゐたものとすれば、かの女自身に思ひ違ひのあらう筈はなかつたのだらう。

『去年の櫛や眞珠のことを思ひ合はせれば、大抵分つてゐるでしよう？』

『…………』こちらには、また、値段はあるにしてもそんなおもちやのなくなつた記憶などよりもさきに、辭書のことがあつた。合本雜誌のことがあつた。それから、なほさかのぼれば、いまだに疑問であつた拾五圓のことも何だかありありと。そしてその問題の當人は勿論、その他もゐないやうであ

るのを不思議がつて、『子供や女中はどうした？』
『今、癪にさわるから、みんなそとへ出して、先づ念の爲めに女中の持ち物から調べて見たのです。もう、手後れかして、ここにも見えません、わ。』
『畜生！　もう、またこんな物を持ち出して來てあるぢやアないか？』こちらはからだを曲げて、――机の引き出しが二つともはづしてあるそのあたりに、子供の寢卷きや、もも引きや、幸田が持つてた置き時計の解體したのや、死んだ學友のかたみ、アルコールを焚けば運轉するおもちやの機關や、父がやつた古事記や和譯法華經や、子供の勝手で大事さうに溜めてある少年雜誌や、靴したの破れたのや、誰れかに借りたらしい新刊小說やがころがつてるあひだから――こないだ父が買つて來た梵文漢譯對照の阿彌陀經を拾ひ上げた。布文や梵文の文字研究はいいけれど。
『おとうさんの物を何と云はれても無斷で持つて來るほど圖々しいのですから。』
『…………』さうだ、父がいけないと云ふばかりでなく、お兼もかげでさう云つてるやうすであつたが、圖々しい爲めか、それとも親の物だからと平氣でゐるのか？　若しあとの方のに相當するのなら、まだしも無邪氣だと云へよう。が、斯うしてかね目になる物を取つたり、かねその物を盜んだりもしてゐるのだと、分つて來ると、わが子に對してながら憎々しさがまた加はつた。お兼にも時々調べて見ろと云つて置いたのである。その押し入れへ進んで行つて、自分もいきなり手をさし延ばして奧の

方の蒲團のあひだをさわつて見た。初めから少し變だと思つたら、果して古シャツにかちかちした物が包んであるらしかつた。それを見てのお粂のまた一層の怒りを豫想したので、そのぶんまでとも前以つて引き受け、

『これは何だ』と叫ぶと同時に、その包みを力一杯に引き出すと、去年來たおほ切りの餅がばらばらと中の段から疊のうへへころがり落ちた。

『あら！』お粂は暫らく言葉を出さなかつた。それから、われに返つたやうになつて、『讀めました、讀めました。もうお餅は今でも十分にたべさせてゐるのですからこの上こツそりいぢきたなをするでもありません。』この口調は子供にでも直接に云つてるやうであつた。それから、『本人は、もう、たべ飽きたと白狀してゐる位ですから。だから、これもきツと幸田へ持つて行つてやる氣でしたのです、わ。分らないやうにこんなシャツなんかにくるみ隱して。』

『…………』いや、さうとして見ても、シャツを用ゐたのはただ隱す爲めばかりではなく、風呂敷をでも盜み出すつもりがなかつたのだらう』

『あんたに申し上げなかつたことがまだございましたが、下谷の床屋がお歲暮に持つて來たこなしやぼんも、まだ誰れも使つて見ないのに、箱の上から三分の一ほどへつてゐます。雄作が珍らしがつてそんな物まで幸田へ持つて行つてやつたとしか思はれないでしよう？　お餅だツて、さうです、わ。』

『おとうさんが幸田に途中で出會つたさうです』と、雄作がお兼に二三日前の晩のことを語つたと云ふを思ひ合はせても、最近にきのふか、おとゝひ、かの女に盗んだ物を渡さうとすれば渡すことができたらう。が、今聽くところでは、しやぼんのことからでも私かに氣が立つてたそのお兼の監視が嚴しい爲めにかさ張つた物を持ち出すことはできなかつたのかも知れない。して見ると、子供とその實母とのあひだには始終惡いことのうち合はせがしてあつて、餠の豫告を――これもしてあつたと見ると――あのがつがつした女のことだから待ち兼て、わざわざ向ふから出かけて來て、板べいのそとでこツそり受け取らうとしたのに相違ない。それが失敗して空しく立ち去つた。そして雄作もその實母の爲めにくやしく思つた。そしてそのくやしさまぎれに、また、お兼の財布から七圓を持つて行つたとすれば、

『お前もこの取り引きに就いちやア餘ツぽど損をしたぞ』と、もう、燒けまぎれの洒落までが出た。

『わたし、もう、溜りません、わ、斯う內そとから、しよツちう狙はれてゐては！』

『それも然し結局はおれ獨りの引き受けだア、ね。』

『あんたの引き受けたことは、矢ツ張り、みんなわたしの責任にもなります、わ。』

『よし、來た！　もう、いよいよ放逐だぞ！』この思はず大きく强く出た聲は、若し突然それだけを何も知らぬ他人に聽かれると、夫婦喧嘩の爲めにお兼その者に命令したかのやうに思ひ取られさうで

あつた。

それから、帽子を取つて茶のまへ來たのだが、いつも早い晩めしを女中がまだ歸らないので初められなかつた。茶を飮みながら、お兼の分り切つた不平やら泣き言やらを聽き流してゐると、門が明いて、玄關みちをがやがやと皆が歸つて來た。門内の左りがはへ自分が田返して置いたちよツとした小松菜ばたけに、雪が消え殘つてゐるやうすを思ひ浮べながら雄作のあがつて來るのを待つた。

お兼は特別に澄まし切つてゐた。が、春子をその膝へ女中の脊なかから受け取ると、初めてゑがほになつて、

『おう、ちやぶかつたらう、ね』と云つた。

『…………』こちらはかの女のそんなことも雄作らには、もう、嫉まし過ぎるのではないかと見えた。渠等の都合のいいやうには愛しても貰ひたからうから。

主人兩方が割り合ひに澄ましてゐるので、女中はこれもまだ早く歸つたとして主人らの氣に入らないのかとでも思つたのか、

『もツとそとにゐようと思ひましたのですが、にイさん達があんまり初雄さんをいぢめるものですから。』

『いぢめやしないぢやアないか？』雄作は怒りの色まで見せた。

『いぢめたよ』と、初雄も簡單に正直さうに女中の言葉を活かした。
政直だけは何とも云はないでちやんと坐わつてた。
『もう、どんなうそも申しわけもまに合ひませんよ』とばかりで、お兼は口をつぐんでゐる。放逐の當り前なのを前以つて暗に示めしたやうに。
『………』こちらも無論それと決心してゐるのだが、今一度父と向ひ合つて情を盡して見たいと思つた。女中の用意した食事をすませてから、『雄作、ちよツと二階へ來い』と命令した。そして立つて行きがけに、『政直も一緒に。』
兄を出すならば、それと心を一つにしてゐる弟もここには置けないのであつた。政直がゐれば、矢ツ張り、うちのことに關する兄の代理をやるだらうし、またそれよりも困るのは、幸田のそとからつけ狙ふことがおんなじであらう。そして政直をも出す以上は、その理由をも――まだよく分らないかも知れないが――兄と一緒に聽かせて置く方がいいと思はれた。
こちらは相變らずただかしこまつてる二人の子供に向つて、言葉に威嚴を持たせて告げたのである。
『お前達の運命も、もう、今夜限りになつたやうだが、ね、どうだ、すツかり白狀して改め直してお父アんのもとにゐたいか？　それとも、圖々しく默つてて幸田の方へ行くか？　この二つに一つを考

へて見なければならん。』これまでの形跡では七圓のかねも雄作が取つたものと斷定しなければならぬこと、それから、また取つたかねを幸田に渡したに相違ないが、それならそれで父が七圓を出して母にあやまつてやるから、ちやんとさう白狀しろ。別にまた疑ひがある。そのかねを幸田も知らないで雄作ばかりの買ひ喰ひその他に使つたのではないか？　それでもなほ許してやるから、さうと白狀さへすればいい。ただこれからは決して幸田の爲めに父や母の物を無斷で持ち出さないと誓はなければならぬ。すべて斯う云ふことを、たとへば、會てむくだと云ふ色をんなに男のあつたことが分りかけたので、それを白狀させた時のやうな切實な心持ちを以つて告げたのである。

けれども、子供はどのことをも聽き流してゐるやうであつた。そのうちに、下からお粂が呼ぶので行つて見ると、

『今、女中の云ふところでは、雄作がどうせかねなんか出る氣づかひはないと云つたさうです』との注意であつた。

『ぢやア、兎に角、かねの行くゑを知つてるんだ、な！』

『さうして女のやうに陰險な仕かたでいろいろ初雄を責めたのですと、あの子はまたいぢめられつけてるから、それを左ほどにも思はないのでしようが――』

『よし！』こちらはそのあとを聽くまでもなくくわツとなつてしまつた。人の子ながら、初雄の方が

可愛くなつて、もう、何もくどくど雄作らに云ふ必要がないやうであつた。再び二階へ行くと直ぐ、

『もう何も云はないから、ただ斯う云ふことだけを今晩ぢう考へて、あすの朝ふたりとも學校へ行かないでいいから、おれが起きたら返事しろ。今聽くのは早過ぎる。よく考へてからだが――あすから幸田の方へ行くなら白狀も何もしないでいい。然し、お父アんと一緒にゐたいなら、それでもいい。ただかねの行くゑを知つてる筈だから正直に云へ。』

その夜はとこに這入つてもなかなか眠られなかつた。子供も憎い、幸田も憎いが、また、その憎みを自分の行爲の自然の結果として重ねしめるに至つたところの自分の相ひ手なるお兼その者をも憎かつた。そして翌くる朝も不愉快な氣持ちを以つて起きてから、獨りで自分の食事に向ひながら、

『返事はどうだ』と聽いて見た。すると、雄作は

『矢ツ張り、おとうさんと一緒にゐたいのです』と答へた。

『ぢやア、すツかりお前の惡かつたことを白狀して見ろ。それでないと、お前のどこまでが惡く、どこからがいいかと云ふ、お前の考へがよく分らないから。』

『別に白狀することはありません。』

『馬鹿！』もう、すツかり望みが絕えてしまつた。『お父アんは、ね、さうあまいのぢやアないのだ！』子供の考へとして、自分が白狀すればその實母の罪になつて、幸田が他人のどろ棒として訴へられる

だらうとでも思つたり、吹き込まれたりしてゐるのかとも、こちらは想像して見たが、もう、それでも子供が敵の間諜と同樣にしか見えなかつた。そしてまた十五圓のことも思ひ浮べて見ると、あれも幸田がひよツくり雄作に出くわしてでき心を起したと云ふよりも、雄作が最初からそんな場合を云ひ含められてゐて、丁度いい機會だとして、こちらへは方々を探してゐたと云つたその時間で電車に乘つて幸田のもとまで行き、現金を渡してから、ひどい叱りかたを免れる爲め幸田について來て貰つたのかも知れないのであつた。そして、幸田も自分のさせたことの成り行きをそらとぼけて見屆ける爲め？

直ぐお兼に命じて子供ふたりの衣物や荷物を取りまとめさせた。そして綿入れの上にこの正月の爲めにできた揃ひの黑もめんの紋付きを着せ、最後の晝めしが渠らにできる前に、ちよツと堤と云ふ友人のところへ行かせることにした。いとま乞ひかたがたこれからの心得を少しでも聽いて來いと云つてだ。堤は人を多く使つたこともある商人肌で、こちらは子供を出す以上はどこかの商人に附けて小僧から仕上げさせるより外に道がなかつた。

『僅か十五圓や、七圓のはしたがねの爲めにお前達を放逐するのだと思つちやア違ふぞ。お前は』と雄作に向つて、『まだ幼稚な學生でありながら、今からかねを以つて實母を助けようとしてゐる考へが、おれには最も不愉快だ。そんなことで學問をしたツて駄目だから、早く商人にでもならせるつもりで

小僧に行くがいいと云ふのだ。お前はいつかお父アんがたに御厄介ばかりをかけても惡いからどこかの書生にでもやつて吳れろと云つたが、書生なんかこそ人に厄介をかけるばかりで、而もそんなことをして中途半端な學問ができたツて、これからの社會にはただまご付くばかりだ。それよりやア小僧から叩き上げて早く獨立の商人になる方がどれだけ見識か分らない。さうして人間としてえらくなるにア、まことをとほしさへする以上、商人だツて他の人間だツて甲乙の變はりはない。だから、そのつもりで少し小僧から叩き上げられる一般の樣子を聽いて來るがいい。』

『でも』と、雄作は少し心配さうにして、『向ふのおかアさんは人のうちにゐるのだから、行つても困るばかりでしよう。』

『なアに、こツちが十分に世話をしてやらうと云ふ子供をわざわざ呼び出す位だから、何とか考へがあらうよ。』この返答は子供に對してはあまり冷淡だと思はれたので、斯う云ひ直した、『それに、新聞の廣告を見て行けば、直ぐにも小僧の口はきまるものだから、ね。』

この時、お兼は子供よりも自分の方が泣き出しさうな顏になつて、子供に向ひ、『雄ちやん、わたしが賴むから、おとうさんへ正直にあやまりなさいよ。あんたさへ改心する氣なら、わたしも一緖になつておとうさんにあやまつてあげますから』と、二度も三度も訴へるやうた云つた。が、雄作はしたを向いた切り答へようともしなかつた。そして政直も亦默つてただ頻りにその兒のやうすに從つてば

かりゐた。

『………』吾助はこの弟の方をも同じ穴のむじならしいと見た。そしてお兼に『もう、なにも云ふな』と命じた。

八

『雄ちやんも政ちやんもそんならおとうさんにあやまる氣はないのです、ね』と、お兼は最後の念を押したが、ふたりの子供は矢張り返事をしなかつた。

『………』こちらには、子供が圖々しいのか、それともこちらの云ふ意味がまだ分らないまま止むを得ず云はれる通りにするのか、どちらともいまだに判斷に迷はざるを得ないところもあつた。そして堤宛に『今回子供二名を小僧にやりますから、お別れかたがた遣はします。どうか今後の心得になるべきことがおありなら子供の爲めに少しでも云つて聽かせて下さい』と云ふ短文を書きながらも、自分の胸の奥から、子供が父の無情を訴へるやうな聲が聽えた。

が、それを辛抱して子供二名を堤に遣はした。そして渠らが歸つて來る前に、お兼は『可哀さうだから、何とか別に仕やうがありませんか、ね』と云つたけれども、こちらの決心はかの女の弱いぐらつきを押し伏せてしまつた。

『政直にも一言云つて置くが、お前はただにイさんの巻き添へを喰つたやうなわけでもあるが、ね、どうせお前は向ふのおッ母さんの方へ行きたいのだから――』

『………』政直は父の言葉をここまで聽くと、澄ましてゐたのがにこにこし出したッけ。

『政ちやんはまだ何も分らないのだ、わ』と、お粂は笑ひながらあはれッぽい聲で云つてから、雄作に向ひ、『ねえ、雄ちやん、あんたがたが小僧さんになるなら、どうせ初雄もさうさせますから、お互ひの恨みッこはない筈でしようが――あんたは今一度おとうさんにあやまつて見る氣はないの？』

『もう、おそい！』斯う吾助はかの女をも最後に叱り付けた。子供らに對するこちらの感情から云へば、かの女の爲めに斯う云ふはめになつて來たものだとも一方では知らせて置きたい氣がしてだ。それから、『おい、政直』と、顔をこわく見せるやうにして弟をばかり呼んだが、これは兄の方へ言葉を直接にかけたくなかつたからである。『お前は初めから小僧にもなりたかつたやうだ。然し、なつた以上は、たとへ親の爲めにだッてそこの主人の物を一厘一錢でも盗んぢやア承知しないぞ！』

『はい。』

『お前もずゐぶんにイさんのよくない眞似をしてゐたらしいから。』いや、盗み喰ひやあやしい水筒のことではゐたらしいどころではなかつたが、ここでは、こッそりと手ですることをも含めたのだ。そしてさう云ふことがあるのは、一方では、子供が多少でもおとなの方へ向つて來たしるしだから、父

がうツちやつても、どうやら斯うやら生きて行けるだけの安心を豫想させないではなかつた。人間に性慾がなくなつたら、病人や子供に喰ひけの無くなつたも同樣、世界は、もう、活氣の絶滅した死のやみではないか？

最後の食事を與へられてから、いよいよ雄作らは出て行くことになつた。

『ぢやア、書物なんかはまたあとからいつでも取りにいらツしやいよ』と云つて、お兼は小さい風呂敷包みを二つ、茶のまの緣がはに出した。

『へたな書物なんか商人になるのに入用はない』と、吾助は叫んだ。そのくせ、前以つて『古事記』と自分の雜誌に書いた日本人格論とは持つて行つて度々讀めと、雄作には命令してあつた。

つい、目の前の板べいの向ふがはからは、そこに住んでるさかな屋や米屋のかみさん達の代りに、また、あのヒステリ性の姦通をんな、無常識の强慾婆々ア、子供はこちらと同じやうに可愛いのだらうが可愛がる道を知らない幸田が、のぞいてゐてまた子供を呼んでるのだと思へた。

『何と云つたツて子供はあなたとわたしの拵らへた子供ですから、ね！』

『畜生！　今更ら蟲のよ過ぎる鬼子母神！　こツちの物を喰ひ盡したいなら、その望み通り、先づ、このふたアりの子供から喰つてしまへ！』かの女に對するこの憎しみが自分の意識をうツとりさせたところへ、また、どこかよその方から、

『どうか矢ツ張りおそばに置いて下さい』と聽えてゐる。子供の聲であつて欲しかつたが、あいにくさうではなく、幸田がそのむかし、こちらのかの女に對する嫌惡の燒け放蕩に困りぬいたあげく、その曲つたのをいくへにも折つて一たびあやまり手紙をよこした時のその文句の一節であつた。

それでもなほ根本から面白くない爲めにとうとうかの女を棄てたが、今やその子供がかの女の爲めにこちらを棄てて行くのであつた。これを自分の播いた報いだと云はば、それでもよかつた。てきめんに受くべきこと、いや、行ふべきことをしたのだから。ふと、われに返ると、雄作は政直を從へて臺どころの方から、これも新年に新らしく買はれた下駄をはいて來て、お彙から風呂敷づつみを受けた。そして、

『なかなが御厄介になりました』と云ふ言葉を殘してから、ふたりともその兩方の肩にきちんとあげをした紋付きの後ろ姿を見せながら、行つてしまつた。

『………』それを、立ちながら、その場でちよツと見送つた吾助は、先づ、あんな世間的な挨拶をもいつのまにかおぼえてゐたのかと頼母しかつた。そしてさう云つた時、ちよツとこちらを見上げたその目つきは子供ながら別れを惜しむやうであつたが、こちらも目がしよぼ付いたのではツきりとは見えなくなつた。政直の方は兎も角、兄は利口と云へば利口であつた。あたまも學生としては思考力に富んでゐた。學者として進めば進めたものを、俄かに小僧からの商人にするのが今更ら惜しい氣もし

た。

が、幸田の鬼子母神と結び付けて考へると、矢ツ張り、渠等も敵の仲間であつた。そして渠等すべてに對するこちらの憎しみを撤回するには、今の妻が餘りに高價であつた。かの女との生活は、兎に角、一大決心を以つて初められ、而もおほやけに社會と戰つてまで築き上げて來たものであるから、そしてこの氣ぶんの續く限りは、別な親の爲めにでもこちらを棄てて行く子供らとは交換できなかつた。

『若しまた歸つて來たら許して下さいますか』と、お兼は自分のことのやうに頼むのであつた。

『いいや、歸つて來たら、こツちの手で小僧にやるばかりだ』と答へた。そして子供に關聯して今の今まで家のまわりにつき纏つてた幽靈がすツかり退散したと云ふ氣持ちになつた。が、なほ、子供に對してはこちらの云つたことを本當に呑み込めた上の、ああ云つた決心と退去であつたか、どうか、このことばかりはこちらにまだ何だかなやましい疑念となつて殘つた。

そしてこの疑念は、吾助自身としてその子供に對して無責任ではないかどうかと云ふことを呼び起した。が、自分としては考へて見るまでもなく決して無責任でも無慈悲でもなかつた。蓋し人間界の――そして人間に無關係な宇宙などはあつたとしても死と同様の空想だから別として、云ひかへれば活きた宇宙の――ことには、無制限の自由などはない如く、慈悲にも人間の力で以つてできる範圍の

と云ふ制限があらう。ところで、かかる慈悲の最も大きく具現したのは、わが國では、國家だ。外國人をでも、若し歸化して來れば、法律その他萬般の有情的規定と設備とに含まれた愛を以つて抱擁してやる。まして自然の要素と生後の教養とに於いてはえ拔きであるところの國人をやだ。さう云ふ義務若しくは責任が重大になればなるほど、嚴しい刑罰が伴はなければ成り立たないものだ。

で、國家はそれ相當な慈悲の爲めに無期徒刑、今一つ進めば死刑を云ひ渡す權力がある。親のそれはそこまで大きくないと同時に、それだけの權力を持たない。やッと、國外放逐に相當する家庭が關の山だらう。自分は自分の子供に對してそこまで怒りいきどほつたのである。自分の慈悲も決して徒らに感情的なだらしないものではない。恥づべきほど滑稽に終はるやうな芝居ではない。恐らく、飽くまで悲痛な愛だ。斯う考へると、子供をそばに置くも、子供を手放すも同じことで、つまり、賞罰いづれも親の同じ愛心の發現であつた。

『あんたはほんとに思ひ切りがいいのです、ね。』お兼もまだこちらのそばに立つてゐた。『わたしの方が却つて泣きたくなりました、わ。』

『泣くものは泣け、さ。笑ふものは笑へ、さ。おれにやアおれの考へがある。』斯う云つて、自分には武者振ひに似た顫えを感じてゐた。

九

その午後は長篇の力作を完成したあとのと同じ疲勞と輕快とをおぼえたので、碁でも打つて一と息拔きたかつたが、あいにく、相ひ手になるものも來なかつた。そのくせ、お兼と話をすることは、子供を聯想するので、いやであつた。

早い晩めしを濟ませてから、また堤のうちへ行つて花でも引からうかと思ひ、茶のまに默つて坐わつたまま、向ふの時がすむ時刻を待つてゐた。酒も飮まないのに少し醉つたやうな、自分だけは健全な氣持ちで小楊子を使ひながらだ。

『雄ちやん達はどうしたでしよう、ね？』お兼は少しむづかつてる春子を膝の上に抱いて考へ込んでゐた。

『さア、どうしたか？』吾助は子供の方から何とか云つて來るまでそれに關することを思ひ出したくなかつた。そして初雄に『いつものを二階から持つて來い』と命じた。それは、赤うら黑うらの花札と、こちら夫婦並びに向ふ夫婦四人分のもと手に當るだけの碁石と、子供のめんこを代用した借り貸とのことである。これで以つて勝負をすることは、春子がまだ母の腹にゐた時からの習慣のやうになつてるが、一度も物を賭けたことはない。それでもやり出すと、必らず二三年は戰つて來た。隨分度

度のことであるから、子供にも『いつもの』で分つてゐた。
「わたし、何だか今夜は行きたくない、わ」と、お粂は進まぬ顔つきであつた。
『…………』それにもこちらはまた面白くないことを思ひ出しかけたが、同時にまた、かの女が先刻からこちらの心に添はうとしないのを不愉快になつた。子供とのあひだのことが若し喧嘩ででもあつたら、兩成敗になるところであつたのだぞと云つてやりたいほどに。そしてやがて、遊び道具の小さい包みを初雄から受け取ると、お粂のふる物を仕立て直したお召しのどてらを着たまま、今夜に限り獨りで出かけて行つた。「來るなら、あとから來い」と命令するやうな、また、いやな者は誘はぬと云ふやうな、どちらにせよ、うちわのものには不機嫌なやうすに變じてゐた。
　堤のうちは無人の爲め門を締めてあるので、いつもうら木戸を明けて這入つた。そして、
『おい、ゐるか』と聲をかけた。
『ゐるよ』の返事があつたので、こちらは直ぐにこにこしながら勝手の障子を明けると、狹い臺どころとのあはひの障子が明いてたその向ふの茶のまの電氣のもとに、主人とさし向ひの雄作が今その膝を坐わり直したのが見えた。
『…………』俄かにこわい顏をして、つかつかとあがつて行つて、きつい聲を出した割り合ひには、さう自分の心はあら立つてゐなかつたのだが――『まだこんなところにまご付いてるのか？』

『さツきのお話の殘りを聽きに來てゐました。』

『…………』睨らんだところ、さう云ふにはそのおどおどした樣子が變に見えたので、『さうか』とは云つてやれなかつた。が、それも可哀さうにこちらのおもてづらにおそれた爲めかも知れないと思つた時、氣が付くと、うらの木戸の明く音がした。そしてそこにつけてある重りでまたぎいツと締まつたやうに聽えた。然し誰れも人のけがしないので、直ぐヒステリ性の幽靈も來てゐたに相違ないことが分つて、座の白けてゐるわけも讀めた。そしてその爲めいよいよ心の内外一致の怒りが湧いて、『幸田までもつれて來たんだらうが――そんな必要がどこにある？　早く歸れ！』

『ほたら』と、堤も雄作に向つて、『もう、お歸り。』また、こちらに向き直つて、『君の頼みの話を先刻し殘してあつたんや。』

『それにしても――』こちらは子供の顏が見えるあひだは心が少しも納まらないので、まだ立ちながら、堤に『君だツて、もう二度と取り合はないで置いて呉れ。僕の頼みは一度で十分だから。』

『そりや分つてるが――』

『ぢやア、左やうなら。』雄作はもぢもぢさせてゐた兩膝を揃へ直したかと見えると、突然のやうに兩手を疊へ突いた。そして尻の方から、からだを起して立ちあがつた。

『…………』こちらは何も云はないで見つめてゐると、別にしほしほしたけしきもなく、獨りで玄關

を出て行つた。
『君はあんなお辭儀の仕かたなら、わざわざ君のおやぢの送り迎へをしないでもいいぢやアないか』と、むかし、或友人に云つたことをこちらは思ひ出してゐた。その友人はその父が出て行く時、歸る時に、必らず玄關まで出て行くのだが、いつも、今雄作が見せたやうな尻あがりのお辭儀をした。そして

『それでも出て行かないとおこるから』と答へた。こちらはそんな、表面ばかりを嚴格にさせるおやぢではないが、自分の心が承知しない以上は、子供にだツてろくろく口をきくのがいやなのである。
この心持ちをなほ堤に向つても殘しながら、にが笑ひをして膝を折る時、

『さア、またやらうか、ね』と云つた。一度手がふところの中へ行つたけれども、直ぐ中の物を出すのはさし控へた。ここへあがつた初めから、この方の興味はそげてゐたから。

『やらう』と云つた答へに、堤も何となく進まぬ樣子を見せた。そして逃げ言葉のやうに、『細君はどうした?』

『うん、來るだらう。』こちらは來ても來なくツても、また花をやつてもやらなくツても、どちらでもよかつた。すると、堤からも別な話が出た。

『君、郵船株がまたあがつたよ。もツとあがるにちがひないから、かねがあると今のうちに少し買ふ

とくと儲かるが、な。』

『誰れだツてかねは欲しいが、ね。』こちらは、若しそれが十分にあらば、子供をどこかのしツかりした寄宿舍に入れて、一年に一度か二度その樣子と學業の進歩不進歩とを見せに來させてもいいのだ。が、そんなかねが今はできてもあとまでずツとつづく見込みが立たないと、却つて子供をなまれ半じやくなものにして、學者には成れず、さうかと云つて勞働はいやだと云ふやうな、所謂高等遊民若しくはまご付きものをひとりでも社會にふやすわけになるのが面白くなかつた。

口錢取りをしてゐる堤は株の話から轉じても、子供や幸田のことに云ひ及ばぬやうにしてゐるらしく見えた。そしてそれには何だか引け味を感じてゐるらしかつたが、こちらもその方が却つて今の心持ちに結局ありがたかつた。

そのうちに、お兼が春子をねんねこ絆纒でおんぶしてやつて來た。そしてこちらの顏を見ると、直ぐ、

『あんた、今雄作に會ひましたよ。こツちは確かにさうだと思つて見たのに、向ふは見ないふりをしてすたすた行つてしまひました、わ。』

『…………』こちらもただかの女の方を見ただけで、まだ返事をしなかつたが、堤は横を向いてにがい顏をしてゐた。

『さツと、ここへ來てゐたのでしよう。』

『さうですか知らん』と、堤のお竹さんはまだ臺どころで洗ひ物の音をさせながら答へた。

『………』お粂はそれツ切り默つて、こちらと少し離れた下座へ腰をおろしたが、一しほいやな顏をした。こちらもお竹さんのわざわざそらとぼけた返事を不思議であつた。なぜ今來てゐましたよと素直に云はなかつたのか？　それに、まだ默つてればそれまでだに、堤その人がにがい顏をしてゐるのも知らないで、その意味を却つて裏切るやうなことを云つたのか？　これは、つまり、雄作ばかりでなく、幸田も來てゐたことを隱しそこねたのであるに相違なかつただらう。それならそれで、云はないでも、もう、こちらは推測と確信とをしてゐることだが、今ここでさうだとはお粂に云へなかつた。お竹さんに面と向つて恥ぢをかかせることになるからである。

やがてお竹さんも手を拭き拭き出て來たが、四人の座がいろいろに白らけて面白く行かなかつた。

『さア、わざわざ來たものなら、早く一年しようやないか』と、堤は義理らしく促した。

『さうだ、ね。』こちらも皆の思はくに頓着なく、氣を持ち直して、自分の初手の考へに歸つてもよかつた。が、春子をおんぶしたままもぢもぢしてゐるお粂を返り見て、念の爲め『どうだ』と聽いた。四人揃はないと、興味が乘つて來ない習慣になつてゐるので。すると、かの女は無遠慮にも答へた、

『そんなこと、もう、面白くもありません、わ。』

『………』こちらは堤夫婦に氣の毒な氣がして、暫らく笑ひにまぎらしてゐたが、兎に角、大體から云へば、大したことでもない理由から、この場の不興を一層不興にしたのはお兼であると、むツとしてしまつた。そしてやがて
『ぢちア、歸る』と云つて、獨り先きに立つてそこを出てしまつた。
お兼はあとから追ツ付いて來て、
『いやになつてしまうぢやアありませんか』と、こちらに對しては左ほどこだはりのあるやうすでもなかつた。『きツと雄作が來てゐたのを云へない理由があるのです、わ。』
『そりやア、來てゐた、さ。』
『あんたも會つたのですか？』
『………』それには返事をしないで、『幸田もらしかつた。』
『さうでしようとも！　さうして雄ちやんはあんたに何と云つて？』
『別に何も云はなかつた。こツちも大して云はなかつた。』これは實際だから、二度目に聽かれてまた答へるのもうるさいので、先きを越して云つてしまつたのだ。
『きツと何か向ふのふたアりでわる知慧をつけるに違ひございません、わ。こりやアきツと近いうちにあの幸田があだをしますよ。』

『………』云はれて氣が付いて見ると、若しさうなら、これはなかなかおろそかの問題ではなかつた。向ふの相談相ひ手の一方はそのむかし、繼母に對する憎しみから事を大きくして、その父を二度までも裁判所へ訴へた男だ。その二度目のにはこちらが聽き付けて忠告を與へたけれども、承知しなかつた。それに、また、一方は成るべくうまく隱してゐるが、もとを洗へば藝者あがりのひねくれ者だ。そんなことは今の今まで忘れてゐたほどの親しみをとちらは持つてたのだけれども、向ふは商賈違ひの爲めにこちらの生活に理解が少く、お負けに子なしの子好きと來てゐて、こちらの子供の育てかたにも時々口ばしを入れたほど、親切と云へば親切な代りに、好意のつもりでどんな思ひ違ひをしてゐるかも知れなかつた。

斯う云ふ風にして、お竹さんのお粂に對した今のそぶりを思ひ合はせて見ると、堤も亦お竹さんと一緒になつてこちらのお粂のことを通常一般のまま ツ子いぢめと見て、怒つたり輕蔑したりしてゐるのかも知れなかつた。若しそれなら、お粂に對して餘りに氣の毒であつた。かの女が云ふことをきかぬ雄作や政直に關する怒りを押さへて、いつもその餘忿を初雄に漏らすのを見たり聽いたりしても、世間は

『あの子もままツ子だから』と云つてるさうである。

『おかアさんの思ひ違ひでしよう。』この方が寧ろ一般には信じられ易いのだ。が、かかる言葉を――

たとへその實母の惡を辯護する爲めであるにしろ――父の前には既に、そして堤夫婦に向つても恐らく、口に出した雄作が、こちらには、如何にも感傷的な世俗に迎合した淺薄者、卑劣漢のやうに見えて來た。が、この通りをこちらはお兼に云ふだけの勇氣も素直さもなかつた。

　どこで幸田が待つてゐると推測してか――恐らくうち合はせのひまは無かつたらうから――それへ追ひ付きに行く爲め足を速めてゐたのだらうが、雄作がその途中でお兼に出會ひながら、知らない顏をして行つたと。無論、特別にできたわけがあつて、それをまた云へぬ爲めでなければ、そんなことをする筈がない。そこへ持つて來て、堤とさし向ひの時の樣子がますます何だか怪しく思ひ出せた。『早く歸れ』と、雄作には怒鳴り付けたことは付けたが、それは勿論父の家へではない。幸田の方へだ。

『これは確かに自分が今でも否定しない又取り消しもしない事實だ』と、吾助は自分で自分に云つた。

　自宅へ來てからも、夫婦のあひだまでがすッかり興ざめてしまつて、お互ひに言葉がなかつた。そしてこちらは獨りで二階へ一旦あがつたが、書齋の仕事をする氣になれないので、再び默つてそとへ出て、近處なる碁の友を尋ねた。

一〇

その翌日も、然し、お兼はこちらの朝めしを待つてゐて、

『いつも、斯う御はんが後れては、早くから起きてるものは溜りません、わ』と、最も不平さうに云つた。

『………』こちらはそれに答へをしなかつた。午前の二時までも起きつづけてゐる習慣のものが朝寢をするのは當り前のことで、かの女にはかまはず子供や女中と一緒の時に朝めしをすませてしまへと云つてあるのだが、かの女自身の勝手でこちらを待つてるのである。

『ひとりでたべたツておいしくもありませんから』と云つて、不斷からの何でもないことにさうかど立てるのは、矢ツ張り、子供の事件からのことだらうと、こちらには思へた。

『だから』と、そこ力ある聲で、『勝手に喰へツて云つてあるぢやアないか？』

むツつりとしてだが、一緒に食事をしてしまうと、かの女は突然ちやぶ臺の向ふがはから口を出して、

『わたし、いツそのこと、雄ちやん達の代りに、春子をつれて出ましようか？』

『出たけりやア、いつからでも出ろ！』度々聽かせられたことだから、答へをするのもうるさかつた。子供のことを心配してゐるのだとは察しられたが。

が、まだその場にさし向つてゐながら、小楊子を使つてると、玄關で案内を乞ふ者があつた。女中

の取り次ぎによると、巡査が來たとのことだから、戸口調査の爲めでもあらうかと思つて、吾助は自分で出て見た。

『〇〇さんとは』と、雅號で云つて、『あなたですか？』

『はア、――さうですが――』

『さうすると、あなたの御子息さんですか、それがゆふべ、どうせ御承知の事でしようが、あなたへ說諭を願ひ出てありますが、こんなことは警察でも穩やかにすませた方がよからうと思ひますから、明朝九時にちよツと大塚の分署まで來て下さいませんか？　かかりの警部が穩やかに相談したいとのことですから。』

『御苦勞でした』と、こちらは答へて渠を歸した。そして子供や幸田や、それの相談を受けてたのだと分つた堤夫婦やに對して、俄かに新らしい怒りをおぼえながら、茶のまへ戻ると、『訴へ出たのです、ね！』お兼はいまいましさうな目つきをしてこちらへ言葉を投げた。『何かあだをするだらうとは思ひましたが、まさか、警察へ出るとは――』

『して見ると、堤が敎へたのか知らん？』こちらは斯う云ひながらも、なほ友人の心中を直ちに傷つけるやうなそんたくはすまいと云ふ用意があつた。が、お兼は『きまつてます、わね』と斷定して、『だから、奧さんがゆふべあんなにとぼけたのでしよう？　さうとは云はれた義理でもないから。――

わたし、もう、あすこへは決して行きませんよ。』
『それもお前達の勝手、さ。』こちらはそれでも別にかまはなかつた。思ひ違ひの爲めに輕蔑されたこちらの女が輕蔑した向ふの女といよいよ交際を絕つに過ぎないのだから。然し、これは向ふの方からは反對に云へるかも知れなかつた。お竹さんが藝者あがりとして、三味線の話などになると、直ぐ素性を却つて自慢することもあるが、人の細君としては、兼てその所天に云ひ含められて、素性を隱しかくししてゐるのは、こちらにもよく分つてた。で、かの女の可なり三味が上手なことをお兼が人に讃める時にでも、どうしてもほんばに勤めをしてゐたからと云ふことは成るべく云はせないやうに命じて置いたほどだ。が、こちらが堤夫婦をモデルに取つて、別に惡意ではなしに或作中の事件に――無論、別名に別場所で――編み入れたところが、堤も怒つたし、お竹さんも氣を惡くした。そしてこちら一家はすべて公けに向ふのことを惡く云つてゐるに違ひないと云ふ風に取られた。こちらは向ふの取りかたが惡いに過ぎないから、左ほど氣にもとめなかつた。そして男同士はそれなりに心は融けてゐた。が、お竹さんは女のことだからそのまま濟んでゐなかつたのかも知れないのだ、そして堤のあと押しまでして今回のことを仕あげたものとする。それでも然し、『つまり、女房同志の小ぜり合ひだ。それはそれとして、男同士は互ひにまた別な考へを持ち合つてもかまはないのだから。』
『そんなことができますか――わたしが馬鹿にされたのは、つまり、あなたが馬鹿にされたのではあ

りませんか？』

『それでもいいぢやアないか？』斯う云つたには、堤とのこれまでのつき合ひを考へさせられてゐたのだ。ありていに云へば、今では向ふから別に何らの利益も便利も與へられることはない。また向ふがこちらをよく理解して來たのでもない。ただ長いあひだ續いたつき合ひだ。お互ひに女房が邪魔なら、獨身の時を思つてればいい。子供が故障の種になるなら、子のなかつた時に心を返してゐてもさし支へない。また子供は子供として、そして女房のゐないところで親しみを示めしあつてもかまはない。どうせ向ふは世間一般の素養しかないのだから、こちらもそれに對して平凡になつてれば濟むことだ。こちらが何もえらがるにも及ばなければ、向ふに對して怒つたり云ひわけしたりすることも不必要だらう。そしてこの考へ、この心持ちをかの女にも實行させていいと思つた。いや、かの女も既にこれと同じことを行なつてるとして。こちらは暫らく無言のあとでその實例を持ち出して、『ぢやア、なにか、お前が功德だなんていい氣になつて、近處のかみさん達の事件を引き受けてるのは馬鹿にされてゐるんぢやアないのか？』

『さうおツしやればさうでしようけれど――』

『…………』こちらはそれでかの女のまた云ひ出しさうな鼻ツぱしらを折つてしまつたつもりになつた――堤さんと交際するなら、わたしは、もう、ここにお世話になつてゐたくはありませんなどと。

そして堤に向つて兎も角一つ詰問狀を出して見ようかと思つた。友人甲斐もないではないか？　君が警察署へ訴へさせたのであらうが、何の爲めにそんなことをしたのだ？　理解がなさ過ぎるもほどがあらう？　君は僕らに對して一般世間並みの解釋しかできてゐないのだ、僕が子供のおやぢとして子供がおやぢを僞はつたり、胡魔化さうとしたりしてゐるのだ――それを知りつつ――相當の處分をしないでゐられると思ふか？　これは決して子供と繼母との一般的いきさつではない。おやぢと子供との重大な問題であつて、この問題を等閑に附すれば、子供の人格を墮落させるも同樣なのである。君は子供がないから、從つて一般の子供の性質をも知らないから、子供の云ふことばかり直ぐ信じたのであらうが、子供はよくうそを云ふものだ。そして人の物でなくおやぢの物ならどろ棒してもいいとも思ふことがあるものだ。然し僕のうちの場合は、それればかりではなく、そとから幸田がからんで來てゐるのである。どうしても棄てては置けないことではないか？　糺明しなければならぬことではないか？　それを子供が白狀しないのだ。して見れば、懲らしめの爲めばかりにでも放逐するほかに道がない。少くとも、君が君のおやぢにしたのとは違ふから。まして さうするのが、この場合、子供の人格を叩き上げさせる唯一の道ではないか？　僕には考へがあつてしたのだ、それを友人甲斐もなく何ゆゑに邪魔をしたかと云つてだ。

けれども考へて見ると、今これを急いで、また二度の必要があつても困るので、警察との話し合ひ

の結果を見てからにする方がよかつた。その晩、お竹さんが不斷は所天(をつと)からの命令で三味線を禁じられてるのに、珍らしくもそれを借りに來たので、お粂は直ぐ

『やうすを見に來たのですよ』と、感づいてこちらへ耳うちした。

『まさか』と、こちらはわざとにもかの女の心を成るべく素直にさせて置かうと云ふつもりであつた。が、お粂は女中の取り次ぎにまかせて、自分で出て行くことをせず、三味は横手のそば屋へ貸してあることを事實通りに云はせた。そしてそのままお竹さんを歸した。

その翌日になつて、吾助は云はれた通り午前九時に大塚分署へ出頭して見ると、掛りの警部が出て來て、詳しいことは却つてその親の方が承知だらうから、もう、云ふまでもないが、

『兎に角、子供はその實母をつれて來てあなたを說諭して吳れいと云ふのです。かねを取つたおぼえはないから、今一度あなたの手もとへ歸れるやうにと。』

『コツちでは、然し、子供にばかりでなく、その實母にも疑ひが十分かかつてるのですが――。』

『然し、おや子のことではありませんか？　どうです、今一度引き取つてやつては？』子供に對してはまた警察としての注意は懇々云つて聽かせたともあつたので、こちらも少し心を和らげて、

『ぢやア、さう致しましよう』と、吾助が答へたには、然し第二の方法として考へて置いた通り、自分の手から小僧にやる決心であつた。

『では、向ふへさう通知しますから』との云ひ渡しを受けてそこを出た。そして渠には自分の子供の時のことが浮んだ。

『………』自分の父は維新後邏卒、乃ち、今の巡査から出世して行つたものであつた。自分は父の辨當を持つて行つたりしたついでに、女の罪人が牢へ這入つてゐるところを見せて貰らつたこともあるが、こちらを見て、その女囚が

『可愛らしい子供や、なア』と云つた。そんな女でも感傷的には人の子を可愛がる心はあるものだが、子に對する愛がそんな程度にとどまつてゐたのでは、それこそ畜生の生活も同樣だ。さうでなくとも、また、幸田の如きだらし無さの情愛とも同じことだらう。自分は然しさう云はれた時嬉しいやうな氣がした。あの時まだ心も單純であつたので、辨當を持つて家を出ながら、警察署へは行かないで、いつも買ふ酒屋のそばまで行つたり、またその反對に、酒のから德利を提げてうツかり署の方へ向つたりした。道の方向が全く違つてた。それでも、いろいろ自分としては物を考へてたのであつたが——

その考へは自分の年と共に段々復雜になつた。いや、何びとよりも復雜になつたと思はれるのを、今の自分の主義に於いて統一できたのである。が、自分のおやぢは官吏をやめて東京へ歸つてから氣らくな下宿屋になつてからも、むかしの官僚的末輩の思想によつてだらうが、官憲と云ふものを重んじた。それも渠自身としては不見識なほどであつた。或年のおほ掃除の時、疊のほこりがまだ取れて

ゐないと檢閱の巡査に叱られて、意久地なくその場にへいつくばつてしまつたさうだ。幸田はそれを見てゐたので、あとから、

『いかに自分らの父だツて、わたしやア呆れてまひました、わ』と、こちらへ報告した。

『なアに、お父アんの官吏根性がまだ拔けないだけのこと、さ。』さうだ、父は自分の官吏として意張れたことをいまだに忘れないで、自分が今年はその通りを意張られたと思つたに過ぎなかつた。寧ろ持ち前の小さい正直を發揮したのだ。父は官吏として一厘だツて、一物だツて、賄賂と云ふ物を――持つて來られても――取らなかつたので信用があつた。それだけは吾助も父を思ひ出す毎に忘れてゐないのだが、その人の孫に幸田の實父の物を盜ませたりしてゐるのではないか？　そして白ばツくれて實父の說諭願ひを出した！

なかむかするほど癪にさわつて歸宅したのであつたが、その晩がたになつて、また巡査が一名、雄作と政直とに風呂敷包みを持たせて、叮嚀にも送つて來て吳れた。そして、

『さア、歸つて來ましたから、どうか機嫌よく入れてやつて下さい』と云つた。『どうもお手かずをかけてすみません』と、こちらも叮嚀に禮を述べて巡査を歸してからも、吾助はわざと子供を相ひ手にしなかつた。そしてお兼が渠等に食事を與へながら、少し執念深く渠等をなじつてるのを、默つてそのそばで聽いてゐた。

『一體・誰れが幸田と一緒に行つて警察なんかへ訴へろと云つたの――幸田か？堤さんか？』
『堤さんです』と、雄作は答へた。
『なんでまた堤さんがそんなことを敎へたの？』
『知りません。』
『…………』そりやア、子供に分らないのも尤もだと、吾助は思へた。
『幸田がまたなんであんたをあの晩に堤さんへつれて行つたの？』
『…………』雄作はそれには口をつぐんでゐた。
『行き合つてもわざと挨拶一つしもしないで！』
それからそれへと兩方の言葉を聽いてるうちに、どうしても幸田と雄作とが堤と相談してから訴へたとしか見えないので、吾助はいよいよ一つ堤をたじらないでは置けない氣になつた。
『…………』そんなことをさせるとしても、その前に一度こちらへ友人甲斐には念を押しに來てもよかつた。さうしたら、事情をよく堤も了解できたかも知れない。若しまたできないでも、それから訴へさせるのは意見の相違で止むを得ない。又おそくもなかつたのに！筆は思はず走つた。そして『子供は君の考へ通り只今警察の手から歸つて來ました』と云ふことから、『子供を君に遣はしたのは小僧の心得並びにその將來の發展具合を云つて貰つたらよかつたのだ。決して子供に父を訴へさせること

を賴んだのではない』が、どうしてそんなことをしたかと云ふ詰問が、きのふから考へてゐた通りに書けた。そして『斯うなれば、僕の手から小僧にやるだけのことだが、以後は二度と寄せつけて呉れたら困る』と書き添へた。『友達甲斐がない』と云ふことを二ケ所にも入れてだ。
『ちよツと見せて下さい』と、お兼はつツけんどんにはたから云つた。
『…………』こちらはまたむツとして、ただ『お前のことぢやない』とばかり答へた。
そしてこの手紙を初雄にもつて行かせた。若し雄作なり政直なりに行かせると、またこれ以上のわる智慧をつけられて、それだけ人が惡くなるだけだらう。が、初雄はさきに一週間ばかり堤のうちへ貰ひ子に行つてて、その歸された理由は、ただ、こちらの家庭が若し破壞でもした時、――實際にさう云ふ危機は子供らの爲めに何度もあつたから、――お兼の子を貰つてるばかりにこちらとの交際が氣まづくなつては困るからと云ふにあつただけだ。それに、渠は蜜蜂の赤ん坊のやうなもので、まだなかにだが、お竹さんの老父が來てゐたのをどろ棒だと思つたりもしてだ。
その一群のにほひに染まらぬから、どの蜂群へでも出入自由であつた。向ふのうちへ行き立てに、夜『堤さんの云ふところをそれとなく聽いて見ると、矢ツ張り、奥さんの燒き持ちが原因らしいですよ』と、お兼はその時語つた。
『そりやア、よくあることだから、ね』と、こちらも答へた。かの女が矢ツぱりと云つたのは、その

前にも初雄が――まだこちらへ來ないうちに――よそへ貰はれてゐたのだが、その歸された原因はその主人が子供のない年うへの細君を忘れてしまつたほどに初雄を可愛がつたにあつた。その爲めにその細君は主人が勤めに出て留守の時を見計らひ、活動寫眞へつれて行つてやるとうそを云つて、電車に乘せて、ここまで置きに來た。まだ五歳でしか無かつたが、よく分つてる子であつたから、向ふの主人を本統の親とばかり戀しがり、二三日立つと、

『おかアさんはうそつきだから、おとうさんを呼んで來て貰ひたい』と云つた。そしてその當分のあいだは、電車や活動寫眞と云へば、またゞまされるものと心得てゐた。それがまた堤へ假りに貰はれて行つて、また同じやうな理由で返されたので。それからは、こちらも可愛さうになつて、お兼とも相談して、もう、どこへもやるなと云ふことにきまつたのであつた。女の子のやうに折り紙や人形を作つて素直な子であるから、學校へ行き出した當時は泣かされてばかり來た。が、こちらが渠の氣を引き立てる爲めにおもちやの劒を買つてやつたら、それからきつくなつて、その學級中で一番の家來持ちになつた。

堤はいまだにこの子を好きなやうだし、政直をも芝に一緒に住んでた時は貰はうとした。そんなわけで、新來のお兼によりも、いまだに子供の方の味かたをするのかも知れなかつた。

二

その夜、堤からの返事はお竹さんが持つて來たが、お衆はまた顔を出さなかつた。そして雄作が政直や初雄と共に玄關へ出て、お竹さんと何かひそひそしやべつてるのに聽き耳を立てて、

『雄ちやんに政ちやん、どこへ行つてるんです、ね』とわめいた。それでも、なほお竹さんのひそひそ聲が暫らくしてゐた。

『…………』吾助はお竹さんも隨分圖々しい女だと思ひながら、堤の手紙をよんでゐた。が、期待した程の手ごたへもなかつた。ただ、

『決して惡意から致したことにこれ無く候へばお許しを乞ふ』とか、『子供の爲めは君の爲めに候』とか、釋迦に說法のやうなことばかりだ。

『おい、これぢやア如何におれだツて滿足できないぢやないか』と、お衆の方へ手紙をほうり出して吾助は初めて十分に怒つてることをかの女に直接に示めした。

『…………』かの女はそれを一と通り讀んで、餘り興味のなささうに火鉢の猫いたの上に置いた。『人な、馬鹿に！』

『兎に角、あす來ると云ふのだから、その時、今少ししツかり云つてやる、さ。』『今夜にも來なければ

ならぬところを、わざとこちらの氣を拔いてるのだらう。そんな手は先きにこちらに於いてもモデル問題で向ふが怒つた時にやつたことがあるのだから、許してもよかつた。『多年の交際がこの爲め斷絶するやうなことがあらば如何にも殘念』だと書いてあるその意味も、また、こちらの同感するところであつた。

そして雄作に對しては、こちらが二三日來の諸新聞に出た小僧入用の廣告を照り合はせたのに從つて、明朝、父がまだ起きないでもいいから、弟の方を先づ京橋につれて行つて見て、それからおのれは日本橋へ行けと云ふことを命じた。

翌朝、吾助がとこを離れた時には、もう、雄作らはゐなかつた。それでも、自分は友人のゆふべの通知をおぼえてゐた爲めにいつもより少し早く起きたのである。そして湯に這入つてると、もう、堤がやつて來たかして、茶のまのあたりで

『やア』と云ふ、そのきまり惡さをまぎらすやうな聲が聽えた。多分、今しがた湯をあがつて行つたお粂に向つての挨拶だらうが、かの女は化粧に急がしい爲めか、それとも氣を惡くしてゐる爲めか、それに對しての挨拶返しがなかつたやうだ。

『………』吾助も默つて考へてゐると、うち湯、あさ湯にひたるいい氣持ちを、けさは、特に自分に感じたと同時に、堤がいつか相談に來たことを思ひ浮べた。石炭も段々高くなつて來たらうし、湯

錢もあがつたから、向ふ夫婦の錢湯に拂ふ分をこちらの石炭代の一部に提供することにして、一緒に入れて呉れないかと。

『さうすりや、お互ひの爲めやないか――うちやどうせ君らの這入つたあとのでもえいのやさかい？』

『うん、惡いこともなからうが、ね』と、少し吾助は返事に迷つた。こちら夫婦は優先權として必らず先きへ這入るとして置いても、這入るのは朝も晩もだ。都合によれば、三度もある。それに、子供や女中はどう云ふきめにするのか？　そんなことがお互ひの感情を惡くするもとになつては困るし、また、僅かの提供の爲めにこちらの家庭の自由が妨げられるのも面白くなかつた。その上、一番迷惑を豫想されるのは、堤夫婦に欲しがつてる子供が生まれないその原因であつた。

『斯うしてをつては、どツちやからも直るひまがないから』と云ふ、それとなしの白狀を堤がしたことがあつた。それをおとなは錢湯へ行つた時のやうに注意できるとしても、子供には自分らでさうする甲斐性のないことが分り切つてゐた。若し傳染して目でもつぶれたら、その一生の負擔は誰れにも持つて行きどころがないのだ。こちらは自分でもむかし一度あだし女から移された經驗があるので、一しほそれは面白くない豫想であつたので、

『然し、僕はむかしからおやぢの這入つたあとでさへ癪にさわつて這入らなかつたほどのたちだからね』と云つて、圓滑に斷わつた。實際に、おやぢが年甲斐もなく病氣を受けて來て困つた時は、こちら

はまだ、丁度、この最近小十年來の生活に於けると同樣少しも賤しい女などに關係したことはなかつた。だから、痳病若しくは梅毒と云ふやうな惡い病氣は、以前の如く、また今日でも、こちらには恐怖の種であつた。が、堤はそれをも或は意に含んでゐたのかも知れないのだ。それでは、然し、こちらに取つては、二重の迷惑になるではないか？　自分はその病氣をしてゐた時友人のところなどで湯に這入れと云はれても、遠慮して、決して這入ることをしなかつた。その初めに、大阪で堤のところの湯に這入つたのは、そんな病氣とは夢にも知らなかつたのであるが――。お兼はまだそのおそろしさをも知らないので、あとになつて、

『氣の毒だから、向ふの云ふ通りにしてお上げなさいよ』と云つた。それが今、いきなり、茶のまへ來てらしいが、『あなたの奥さんはどうしてまたあんなとぼけかたを爲すつたのでしよう？』

『きまりが惡かつて、正直に云へなかつたのやさかい、許してやつて下さい』と、堤は餘ほど折れてるやうすだ。

『警察なんかへ訴へさせたりして！』

『そりや、然し、うちばツかツりやない、このお隣りでもさう云うたさうやさかい。』

『へい』と、お兼の調子は變はつた。『向ふの主人もあんたや、うちのと同樣にまま母育ちでひがんでるたちですが――子供はお隣りへも行つたのですか？』

た。

『………』こちらは、かの女が激昂してゐる餘りにいい加減なことを斷定してゐやアがると思へ

『ゆふべ、雄ちゃんがお竹に云うたところでは、さうらしいさかい。』

『へい、あなたの奧さんも餘ッぽど圖々しいですよ。人のうちへ來て、こツそり子供からそんなこと

を聽いたり！』

『そんなことア、もう、云ふに及ばないぞ』と、こちらはかの女にともなく、そして堤には多少の當

て付けを以つて、からだを拭きながら怒鳴つた。

『うツちや、兎も角、子供がまだめしを喰うてをらん云うさかい、空腹で追ひ出されるのは可哀さう

や云うて、うちではめしが不足になるまでも喰はして歸したのやが――。』

『それが人を馬鹿にしたわけでしよう。どんなまま母だツて、少しあなたがたも考へて見れば分るぢ

やアありませんか？　そんな無常識なことは致しませんよ。』『それから、いくらか優しくなつて、『そん

なこととは知りませんから、うちぢやア、あんたのところから歸ると直ぐ、また、御はんを十分にた

べさせて行かせました、わ。』

『ほたら、よう喰ふ、なア』と、堤の調子はわざと打ち解けて見せたやうであつた。

『………』こちらは渠がそれにも下だらない思ひ違ひをしてゐたことに呆れたが、また、子供の野

ほうづにさへ喰ひなことをいきどほらないではゐられなかつた。そしてどてらの上に帶を締めながら、
『やア』と氣拔けがしたやうな聲をかけた。
『あんた』と、お兼は直ぐ、味噌しるのうまさうに煮え立つてる隅の火鉢の前から、ちやぶ臺を越えてこちらを頓狂に見上げて、『子供はお隣りへも相談しに行つたのですツてよ!』
『………』吾助はそれに返事をしないで、堤の坐わつてる前をとほつて、ちやぶ臺をお兼とさし向ひのところへ坐わり込み、いつも渠に失敬して食事を初める通りに椀や茶碗をあふ向けてから、けふは、わざと横がほを渠に見せたままで、『君は全體こツちのありがた迷惑なことばかりするぢやアないか?』無論、今知つた二つの新事實の一つをも云ひ含めてだ。
『惡かつた。許して呉れ。然し、別に惡意があつたわけやないから。』
『そりやア、惡意はないかも知れないが――』さうだ、そんなことで笑つては置けないのであつた。
『こツちにやアさうは單純に云つてゐられないのだ、――重大な迷惑だから、ね。』
『惡かつた。許して呉れ。』
『一體、君はひねくれてるからいけないよ。お隣りの主人も君と同じやうな事情でひん曲つてるやうだが――さうして僕の子供までにそのひねくれたところを傳へたりして!君が君のおやぢを訴へた時にもこの缺點があり過ぎてた。君は子供の時からだから、少し事情は違ふかも知れないが、君の訴訟

時代でも僕の繼母騷ぎでも、あの時にやア、もう、ひがまないでも兩方から折り合へる餘地があつた。僕としては、おやぢと一度組み合つて投げられてからは、おやぢの握りこぶしがこツちの女房の横ツつらをそれてその脊中の子供に當つたのが損であつただけで、あとは互ひに、互ひの女房共を保護したい爲めであつたことが分つたから、同居さへしてゐなけりやアそれで濟んでしまつた。そして罪もなくおぢイさんに投ぐられた赤ン坊はその後ジフテリアで死んだが、僕の繼母までが小さくツて投ぐられたのが原因ではなかつたか知らんと泣いてゐた。』斯う云ふ說明を爲しつつ自分も曾てはあの幸田を今自分がお兼を子供に對して保護する樣におやぢとお袋とに對して保護したことがあるのを、もう、人ごとのやうに思ひ出せた。そして雄作のことに及ぼして、『僕の子供はまだ幼稚で、そこまで達してゐないだけのことだ。それに、君は一つの大要點を逸してゐるやうだよ。今回の事件は、もう、繼母と子供とのあひだではなく、僕と子供との問題になつてるのだから、ね。』

『そりや知らなんださかい。』

『だから』と、聲に力を入れて、『入らないおせツかひはして貰ひたくないのだが――。』

『今、ゐないやないか？』堤は子供の方へ話を轉じさせようとするやうであつた。

『さう、さ』と答へて、二度目のめしをお兼から受け取りながら、もう、これ以上渠を追窮するには及ばないと考へたが、まだ少しいまいましい感情が殘つて斯う云はせた、『おかげで僕の手から小僧に

やらなけりやアならなくなつたので、今、その口をふたアりで當りに行つてる。どうせ一度は本人を見せて見ないぢやア物にならないんだから。』

『どうしても小僧にやる氣か』と、堤は今更らのやうに念を押した。が、そこが既にこちらの心を理解してゐなかつた一つの要點であらう。

『無論だ。』

『ほたら、仕やうがない。』

『あんた、雄ちやん達は堤さんでも御はんをいただいたのですよ』と、この時、お兼はその神妙にして箸を運んでた無言を破つた。

『…………』吾助は云ふだけ云つてしまつたので、また話のあと戻りをするのがうるさかつた。三杯目をかの女に突き出して、『どうせあのがつがつした幸田の生んだ子供らだから！』

『なアに、あんたの遺傳も隨分手傳つてるでしようよ』と、お兼は入らないことまで云つた。

『…………』無論、こちらもなかなか大食家であることは自分でも承知だが――。

『ほたら、失敬する。これから仕事に出かけなければならんさかい』と云つて、堤は歸つた。吾助はいつも通り、

『さうか』で濟ませてしまつた。これツ切り交際を絶たうと云ふやうな考へは少しもないけれども、

『これからまたそんなことをして呉れちやア困る』と渠に云つた言葉を思ひ出すと、渠をも子供あつかひにしたやうな氣がして、寧ろ不愉快であつた。

『あんたはなぜ交際を絶つと云はなかつたのです？』

『馬鹿！』吾助はかの女の命令的な出かたに寧ろ自分の不快を增して、半ばはかの女の爲めに子供を失ふはめとなりながら、その上にまた友人を棄てるものかと考へた。が、一言で叱り付けたのに多少の滿足をおぼえながら、『あれだけあやまつてるのだから、おれとしちやア、もう、追窮するにやア及ばないのだ、おれとしちやア』と、この言葉を繰り返した。かの女としてはさうでなくてもいいと云ふ餘地を暗に云ひ殘してだ。

『けれど。わたしは承知できません。わ――わたしは！』

『手めへのことア手めへのこツた！』斯う云ひ放つてから、然し、また云ひ添へた、『ただ、ね、お前はおれの命令にそむきさへしなけりやアいいのだ。たとへば、今度堤が遊びに來たとして、面白くなけりやアお前としての挨拶も打ち解けもしないでいいが、おれが茶を出せとか、うちの主婦として挨拶しろとか云つた時にやア、その通り從はなけりやアならない。』つまり、人の妻である以上は、その自由も妻たる範圍に於いての自由であらう。妻にして獨身時代のわがままを望むのは、かの間違つた偏物質的獨斷個人主義の現代教育に養はれた學生や紳士どもが、自由とか解放とか云ふことを、日本人

たることを離れても、人類や個人の名に於いて叫べると空想してゐるのと同樣だ。實際には、自分らは日本人たる人類や個人に外ならぬことを忘れてはならぬと同樣に、妻たる婦人は婦人としても妻たる條件若しくは制限から解放されることができないのだ。自由はその制限内の自由でなければならない。

この現實的精神は子供に對しても同じだから、さう云つて聽かせてはあるが、子供としても餘りに分らないことをするから、止むを得ず自分は渠等を放逐するのである。

『君の子が案を放逐されても矢ツ張り君の子でないか？　それと同樣に、日本人が日本國外に追ひやられても、相變らず日本人だ』と、きのふ、碁の友が來て反對した。が、

『それは違ふ』と、吾助は答へた。『日本人たる人類の本分を盡しても、それが誤解された爲めに放逐されたのなら、その精神に墮落的分子が這入つてゐないから、外國に在つても日本人的生活を努力しようとするだらう。が、放逐された理由が日本人たることを忘れたか、それを拒むかに在つた者は、その放逐を喜ぶと同時に、日本人的緊張若しくは生活から墮落してしまう。そしてそれがまた眞の人類若しくは個人としても墮落とならう。何となれば、その人は日本人たることからは墮落したくせに英國人たり若しくは米國人たりすることもできないのは分り切つてる事實だ。殊に、分り切つてるのは、たとへ白人國の國籍へ這入つても、黄色の爲めに一生侮蔑や虐待されてとほすだらう。して見ると、日本人としてはできそくないであるし、人類としては亡國の民や野蠻人も同樣だ。僕等はそんな

あはれな日本人や人類になる傾向の新らしがりは、馬鹿々々しいので、したくないのだ。だから、矢ツ張り、僕等は日本人としての人類たる外に最も高尙な生活の仕かたはないのである。』

こちらがさう云つたには今少し說明を加へなければその人には分らなかつたのかも知れない。刑罰としての放逐にも二種類の意味がある。一つは懲らしめの爲め、また一つは見限りの爲めだ。そして見限つても或は懲りて歸るかも知れないと云ふのが最後の希望だ。こちらのも子供を突ツ放して叩き上げさせるつもりだが、或は、このまま墮落してしまうかも知れない。が、そんな恐れの爲めに自分のこのいきどほりは毫も萎縮しないのである。

二

堤が出て行くと入れ違ひに、近處のかみさんが獨り、勝手の方へ這入つて來たので、吾助は二階へあがつて炭火を取りよせた。口を當りに行つて子供の寒さが想像された。すると、一時間もしてからお粂がまた昂奮してあがつて來て、

『あんた、堤の奧さんがお湯屋なんかでもうちのことをさんざんにわる口云つてるさうですよ！ゆふべも、さかな屋のおかみさんが聽いてると、うちのことをまるで知りもしない人にまでまま ツ子いぢめだなんて、あること無いことをしやべつてたさうです。』

『うッちやつて置けよ。そのかみさんだツて、幸川をあがり込ませて、馬鹿しやべりをさせた連中ちやアないか？』

『さう云へばさうですけれど――あんまり馬鹿々々しいぢやアありませんか？　わたし、つ一、抗議を申し込んで來ましようか――ゆふべに限らず、實は、ずツと前からかれこれ云つてたさうですから？』

『それよりやア、今度はこッちの番で、また警察へ說諭を願つたらどうだ？』

『い冗談は置さ、ね！』

『どうせ、さう云ふ凡人どもの口はふさげないよ。お前だツて、もう、お竹さんのわる口は云つてるのだから。』

『そりやア、うちわでしよう？』

『なアに、直接に堤にだツてだ。その報いと思つてりやア間違ひツこはない。』斯うあしらひながらも、吾助は堤がお竹さんに心をうち込んでるところを想像して、渠も知つてゝかの女にそんなことを云はせてゐるのではないかと、私かに少からず憤慨しないでもなかつた。

そのうちに雄作らが歸つて來て、ふたりとも都合よく小僧の口が直ぐきまつたとのことであつた。が、お粂は氣が全く挫けてしまつたやうになつて、こちらへ

『いツそのこと、やめさせて、もともと通り置いてやつたらどう』と、賴むやうに云つた。
『…………』吾助はむツつりして返事をしなかつた。寒かつたのかして鼻のさきを赤くして顫えてゐる子供を見てもだ。
『あんたがたも』と、お粂は今度は雄作に向つて、『小僧なんかに行かせられても、矢ツ張り、白狀しない方がいい?』
『おとうさんの命令ですから』と、渠は小僧のことをわけも無ささうに答へた。
『いツそのこと、あやまつて、おとうさんに白狀おしなさいよ。』
『…………』雄作は、もう、また答へなかつた。
『よう』と、お粂は子供に取りすがつて賴まんばかりのやうすであつた。
『お前と子供との問題ぢやアないのだ』と、吾助はかの女を叱つた時、卷きたばこのけむりが曾てわざわざ吸ひ込んだこともない鼻の方へ舞ひ込んで、暫らく言葉が繼げなかつた。が、そのあひだに、しんみりした感じが出て、雄作がまだ子供としてのわけも無ささうなところに却つてこちらの心だのみがあるのではないかと思つた。だから、今一度堤のところで見たやうに、自分もさし向ひになつて見る氣になつて、渠を二階へ呼び上げた。そして『お前に今一度、たツた一言聽くが、ね、お前もそれに對して一と言答へればいいのだ。一體、お前は幸田までがどろ棒として警察へでも引き出された

ら可哀さうだと思つて白狀しないのかも知れないが、おとうさんはお前の白狀する以上はお前のその正直に誓つて幸田を訴へたりはしない。まして親が子供を訴へるやうなことはなほ更らない。だから、云つて見ろ。幸田に云はれて取つたのではないか？』

『さうぢやアありません。』

『…………』もう、どうしても子供の命脈はないときめたが、まだ未練があつた。『ぢやア、今一つ聽きたいが、取つたかねはお前が取つて、お前が使つたのか？』

『さうでもありません。』

『よし、もう、行け！　おれとお前とは、もう、緣もゆかりもないと同樣だから。』斯う云つたこちらの心持ちでは、寧ろ、子供が正直などろ棒であつて欲しかつた。憎いのは、はたのものらにおだてられて不正直になつてることであつた。雄作にはかまはず下へおりて來たが、直ぐついて來た渠にも聽かせて置くやうにして、政直に向つて『お前はただ行つたり來たりして何のことをしてゐるのだか分るまいが、もう少し年が行けば獨り手によく分つて來るだらう。兎に角、お前だけは以前から幸田の方へ養子に行くことにきまつてて、十五歲になれば籍も向ふへ移せるのだから、行く先きの主人には前以つて田口と名乘らないで、幸田政直と云つてればいいぞ。』

『はい』と答へたが、これも分つてるのか、分つてないのか、こちらには餘りたよりなかつたのであ

る。

『…………』そんな幼稚なもの等の愛をこちらに奪はれまいとばかりして、子供をもこちらをもとうとうこんなことに立ち至らしめた幸田と云ふ女が一番憎かつた。

いよいよ再び出て行かねばならなくなつた子供らをお粂にまかせて置いて、吾助はまた二階へあがつた。そしてお粂ひとりで渠等をそとへ送り出したらしいところを見て、二階の机の前を私かに障子ぎはへ立つて行つて腰をかがめ、門の明くのを見る爲め、障子のがらす窓へ顏を持つて行くと、そとの空氣に冷えたがらすは子供の姿を映さないで、自分のつく息に曇つた。

――（大正八年十一月）――

子無しの堤

この作は『實子の放逐』の補遺である。

『…………』

田口の子供がふたり揃つて、而も鹿爪らしく木綿紋つきの羽織まで着てやつて來たので、堤は直ぐ、あの六ケしい家庭にいよいよ何ごとか起つたのだらうと云ふことに思ひ及ばないではなかつた。が、先づこちらも嚴格に坐わつて渠等に向ひ、

『どうした？』

『おとうさんが話を聽いて來いツて、これを――』と、兄の方がその手に持つてゐた書き付けやうの物を出した。

『なんだ？』堤は少しそれを馬鹿にして見た態度で受け取つた。子供にもツとまま母をも大切にせよとでも云ひ聽かせて吳れいと云ふことではないか知らんと思つたからである。一體、こちらから見ると、田口は子供ぎらひでその女房にあま過ぎる。いつもお兼さんに子供を隨分がみがみ叱らせて置い

で、自分はそれでいいことに思ひ過ぎてる。もツと子供を辯護してやつてもよささうなものだ。きのふも、七圓のさつがなくなつたと云つて、お粂さんは飛んで來て、きツと雄ちやんが取つたに相違ないと訴へたので、おもて向きでは多分さうだらうと答へて置いた。雄作もさういい子でないことは分つてるが、そのおやぢが云つてる通り、もう、半ば一人前の考へが出て來たらしいところも見えるのだから、さう一概に子供あつかひにすることもできまい。さきの十五圓のことだツて、果してその實母に渡したものか、それとも實際に落したのか、いまだに分らないものを、さながら雄ちやんとその實母のせいとばかり繼母根性のひがみから斷定してしまつてるからこそ、今回の七圓もまた子供らのせいだらうと云ふのだが、いつかのやうにまた置き忘れと云ふこともあるし、また思ひ違ひもないとは云へまい。そんなことにこちらまでがかかり合はせられては、溜つたものではなかつた。然し書き付けを讀んで見ると、いよいよ子供に見込みがなくなつたので、子供を實母なる幸田の手から小僧にやらせることに決心したから、そのつもりで何か訓戒を與へて呉れいとあつた。で、雄作に向つてだが、『お前のおとうさんも人を馬鹿にしてるやないか？　こツちやは、大阪で小僧を澤山つこた經驗もあるから、お前らの爲めになる話をせいとあらばせんこともないけれど、おれもまま母を持つてたから、まま母と云ふ者はみなそれが當り前だと云ふことをも多分云つて呉れと云ふんやないか？』

『田口さんがそんなことを書いて來やはりましたか？』と、妻のお竹は次ぎの臺どこから口を出した。その少しいきどほつてゐるやうな口ぶりをこちらもそのまま受けて、その方へ顏を向けて、

『書いてあらへんけれど、な、さう取れるやないか？』さうだ、決してそればかりではない。田口は大黑も同樣の者の娘を妻にしてゐながら、その妻をしてこちらのお竹が藝者あがりであるのを輕蔑させて置くやうなところも見えないではなかつた。人が飽くまでお竹を隱して、わざとにもしろうと同樣にくすぼらせて置くのに、それをわざわざ入らない人にまで――或は話のついでにかも知れないが――しやべらせてしまつた。今でこそ新事業失敗の結果貧乏をして、口錢取りぐらゐをしてゐるのだから、時々かねの融通なども頼むが、大阪では田口がろくにかねもないくせに遊びに來る時母に、南北の新地へもつれて行つてやつたし、京都見物のかねも出してやつたことがある。だから、お互ひのことではないか？

『ほたら、いよいよ雄ちやんたちは小僧さんに行かされるのですか、可哀さうに？』

『さうや！育ちでもないものが俄かに小僧になつたかて、何ができるものか、な？』

斯う云つてから、堤はまた雄作の方に向ひ、『實際に、お前はおかアさんの七圓を取つたのか？』

『取りません。』

『…………』然し子供が取つて置きながらうそを云つてるのではないかとも考へたので、今一度念を

押して見ようとした時に、雄作は斯う云ひ添へた、
『おかアさんの思ひ違ひでしよう。』
『さうだらう！』堤は子供の無邪氣さうな返事に自分から力を入れてやらないではゐられなかつた。たとへ、如何に貧乏な實母のもとにいぢいぢして育つた雄作だとしても、自分が盜んで置きながら、さう無邪氣に平氣でゐられるわけはないと思はれたからである。まして嫌疑さへかかつてゐない弟の政直をまで義務教育の途中から一緒におしようばんさせようとは、どうしても田口の爲め、田口の名譽の爲めにも贊成できなかつた。『なぜお前は繼母の方を調べて呉れと云はなかつたんや？』
『云つても駄目でした』と、雄作が子供ながらあきらめてるやうに見えるのが寧ろ可哀さうになつて、
『そんなことがあるか、馬鹿らしい？　もう一度おとうさんに頑張つてやれ、頑張つて。』
『…………』子供はふたりともこちらをちよツと見上げたが、何も返事をしなかつた。あの一こくな父親をこわいのでもあらうか？
『物は惡う取ればどこまでも惡う取れて行くものだから』と、お竹の云ふことも、まま母やまま子の經驗などないのに、なかなかよく分つてゐた。
『それが矢ツ張りお傘さんの繼母根性や。』話をして見ると、隨分教育もある人だのにと思へば、全く無教育であつた自分のまま母が、自分と自分のもとの妻とに對して一層ひどい思ひ違ひやうをまで云

つて、自分の父にばかり取り入つてたその昔の憎しみをも一緒に思ひ出してゐた。

父もあんな下だらない婆々ア女に――多少年が若いからツてだまされてゐたのは馬鹿だが、あの女と來ては、薄情なうへに强慾であつて、つれツ子ばかりの引い氣をした。それが爲めにいい氣になつて餘り道樂をしたので、自分の父は怒つてそとへ出してしまつた。たとへ同じ道樂むすこであつても、つれ子はつれ子、家つき息子は息子だのに、そのつれツ子がそとへ出されてからも、少しも自分をよくしては吳れなかつた。そして多少は學問をしたい自分を無學な親の云ふことを聽かぬからと云つて廢嫡させ、學問ぎらひの弟の方をあと取りにきめることにさせた。無論、さうした方が理窟を云はれないだけでもあの女の爲めにはよかつたのだらう。

けれども、迷惑なのは自分ばかりであつた。東京へ來て英語の學校へ這入るとそれはいけないとあり、それでは法律學校へ轉じて見ると、また生意氣になるばかりだからかねは送らないとあつた。どこでもいいから小僧になれとおやぢは云ふのだが、うちがかね持ちのおほ問屋であるのに、わざわざ人に使はれたくなかつた。さうかと云つて、うちへ歸つて店を手傳はうとすると、弟にまで兄を馬鹿にさせて置くから面白くなかつた。とうとう辛抱し切れなくなつて、實父と繼母とに赤い衣物を着せてやるつもりで裁判所へ訴へ出た。

それは然し父の友人どもが仲へ這入つて一と先づ納まつた。そして自分は東京で約束した女學生と

一緒になつて別に家を持たせて貰ひ、正直ですツきりした妻の氣象が父に氣に入つたかと思ふと、繼母はそれを氣にしてかたツぱしからぶツ毀わして行つた。妻のあけすけだが無邪氣な言葉をすべて意味ありげに取つて行つて、それを以つて父に自分と自分の妻とを讒訴ばかりした。そして妻とは互ひにいや氣がさして別れてしまつたし、自分はまた暫らく上海で仲仕をしてゐてから歸つて來て再び父を訴へて、財産分配を主張した。繼母がそばに附いてたので、父は生きてるあひだ動かなかつたが、父の死後、自分が弟と共にすつてしまつたのはその財産であつた。繼母さへゐなかつたら、父の死後でもわれ勝ちに遺産をさう使はなかつただらうし、從つて今のやうな貧乏にもなるわけがなかつたらう。それを思ふと、いまだにあの繼母が憎いのであつた。そしてこの憎しみは自分としてこれを人のうちのことにも及ぼさないではゐられないのであつた。

『腹が違ふと、どこでもさうしたものか、なア?』お竹はこちらのことも話しされてたからよく知つてゐた。

『子供が盗まないと云うてるのに、若いお粂さんにばかり云ひくるめられてるおやぢが阿呆やないか?』だから、頑張つてやれと勸めるのだが、子供はまだ自分の時ほどに發達してゐないせいか、少しもさう云ふけしきが見えなかつた。さうかと云つて、田口はあの强情な男だから、こちらも子供に代つて云つてやるだけの勇氣が出なかつた。『いツそのこと、警察へ云うて出たらどうや——おやぢは

繼母の云ふことを信じて子供がかねを盜んだと云ふけれど、わたくし共に於いては決して親の物を取つたりしたおぼえはありませんて？』
『それがよろしい、わ』と、お竹も手をふきながら出て來て、子供に勸めるやうに云つた。『何と云うても、あんたがたのおかアさんはまま母ですから、な、たとへしんは惡うならてもひがみがあります。』
『そら、うそやない。おばさんの云ふことは本當だから。』斯う云つたには、堤が自分の妻をお兼さんに對して辯護する意味もあつた。都會に生まれて、而も賑はしいばかりの藝者町に育つたお竹は、丁度、政ちやん、大根を白い根から土を出て來るものと思つたと同樣、植物の知識がないので、田口の庭に田口が自分で播いたり、こやしをしたりした枝豆の芽が延びたのを見て、
『これがお茄子ですか』と聽いた。兼てできたら呉れると云ふ約束をおぼえてゐたからである。この頓珍漢を田舍育ちのお兼さんは子供のゐる前で遠慮なしに笑つたさうだ。そして田口のこやしが利いたその茄子がなり初めると、かの女は最も自慢さうにして二日にあげず持つて來た。多少でもそうざいの足しになるから、呉れる物はありがたく貰つてゐたけれども、こちらの貧乏をあはれむやうな口ぶりが癪にさわつた。如何にこちらだツて、そうざいぐらゐを買ふに困つてはゐなかつた。かの女の子供に對する度々の不平を默つて聽いてやつてただけにでも、それ位の駄賃は取つてよかつたものだ。

が、こちらは――お竹だッて――そんなことでお粂さんに買收されてるやうなさもしいものではない。かの女は近ごろの知り合ひだが、雄作らは、こちらが田口と親しかつただけに、渠等の生まれた時からの親しみだ。今となつて自分は渠らやお竹の肩を持つ爲めには、お粂さんから貰つた茄子や、かの女の里から届いた御自慢だが抹香くさゝうなまんぢうやを、できることなら、口から吐き出して突ッ返したいほどだ。かの女に、お竹の云ふ通り、まま母のひがみがある以上、自分としては公憤をさへ催すのである。

『…………』子供は、然し、その父をおそろしい爲めか相變らず默つて、煮え切れないやうであつた。

『おばさんやおぢさんの云ふことが分らないのか？』斯う、少し齒がゆくなつて問ひ返した。堤は田口の子供にまでもこちらを馬鹿にさせて置きたくなかつた。すると、雄作が一しほ堅くるしくなつて、兩手を膝に突ッ張つて答へた、

『分つてゐます。』

『そんなら』と、こちらは頰ふくらませて、『おぢさん達の云ふ通りにしたら、えいやないか？』

『でも』と、雄作はなほためらひながら、『どう云ふ風に訴へるのか分りませんから。』

『そんなことはわけアない。直ぐそこの大塚分署へ行て、わたくしは何も盜みませんが、繼母のおかアさんが盜んだと云ひます。それをまたおとうさんが信じて、わたくし共を小僧にやると云ひますが、

小僧には行きたくないのでどうかおとうさんを說諭して下さいと云へばえいやないか？』
『…………』
『まだ分らないのか？』堤は子供の返事がないのをもどかしくなつたので、『おぢさんなどは裁判所へおやぢを訴へたこともある。矢ツ張り、繼母の爲めにだが、――なアに、おやぢだツて、なにだツて、かまうもんか？　子供を虐待したり、子供に理解がなかつたりすりや！』
『そりや本當ですよ』と、お竹も子供に向つて云ひ添へた。
『さうして少しはおやぢや、おやぢをおだてる繼母の、鼻を明かしてやるがえい。』
『かまはないでしようか？』
『まだそんなことを云うてるのか？　自分で行きたうなかつたら、お前の實母を一緒につれ行たらえいやないか――幸田を？』
『ぢやア、向ふの母と相談して見ます。』
『それでもえい。』何だかまだたより無いやうだとは思つたが、今一つ子供の爲めに憤慨してやるべきことにて氣が付いた。そしてこのまま追ひ出されるのだらうと見て、
『お前達は、然し、まだひるめしを喰うてをらんのだろ？』
『はい。』雄作はこれには直ぐはツきりとした返事をした。

『なんぼなんでも』と、お竹も早や利口にこちらの心を汲み得たのであつた。『お粂さんがおひろ時に御はんもたべさせないで出すとはあんまりぢやありませんか？』
『それがいよ〳〵安心して繼母根性をさらけ出したところや。』こちらにこんなしもた屋で三味線でもないと思つたから、とツくの昔、妻のいのちより二番目の品であつた地うた三味線をも賣り拂はせてしまつたのだが、お粂さんがまだ地うたの味も知らないくせに、いい氣になつて端唄や長唄を習つてるのまでが憎らしくなつて、わざとにも『そんなら、うちでたべさせてやれ』とお竹に命じた。それから、雄作らに向つて『うちは家族が少いからお前らにたべられるとあとの用意に困るけれど、まアそんなことはかまん。たんとたべて行くがえい。』
『さうしなされ』と云つて、お竹もお粂さんに對するつら當ての爲めだらう、今丁度煮付けあがつたところの里いもを割り合ひに多く子供ふたりの爲め盛つて出した。幸ひにも、けふはこちらが在宅してゐたからいいものの、若しゐなかつたら、子供は空腹のままで出されてしまつたのだから。
子供は遠慮なく喜んでめしを喰つた。一體にがつがつした子供らであることは、さきに、父がゐないで實母の手にばかり育てられた時、そこへこちらもちよツと暫らく下宿してゐてよく知つてる。が、それだけに今、喰ひたいだけ喰はせてやるのが餓鬼に功德のやうにも思はれて、氣持ちがよかつた。
そして田口のうちから二三度十圓や十五圓を借りたのは以前の大阪に於けることとの埋め合はせだとし

て、然し去年からいろんな物を施しのやうにして向ふが呉れたのも、それで帳消しになつていいと、私かに思はれたのである。

子供に荷物があらばこツそり預つて置いてもいいと聽かせたのだが、それは持つて來なかつた。

二

その晩になつて、幸田の婆アさんが雄作をつれてやつて來て、また田口の薄情に對する泣きごとをくどくど云つて切りがなかつた。田口は他人に向つても獨りよがりのところがあつて、その先妻や子供に對して人並みはづれて薄情なこともよく分つてるが、それを今更ら自分やおせいさんがかれこれ云つても何にもならぬことであつた。それに、おせいさんだツても、人を馬鹿にしたことがたびたびあつた。それを平氣で、時々、ここへも下だらぬおしやべりをしにやつて來るのが如何にも圖々しかつた。

かの女の下宿屋をこちらで引き受けて、お竹にやらせて見ようとした時のことだけででも云つて見よ。わざわざそれが爲めにこちらがあすこへ下宿して、お竹にその仕事を手傳はせて、下宿屋と云ふ物はどう云ふことをするものだかに暫らく氣を付けさせてゐたのである。いよいよこちらが引き受けることになれば、幸田と云ふ女は――どうせ無常識の甲斐性なしだから――毎日の仕事からは全く別

にして、その時はまだひとり殘つてた政直と共に、何とか
『らくにたべて行けるだけのことにしてあげます、』そして『都合によれば、政ちやんを――どうせうちには子がでけんさかい――うちの子にして育ててもえい』とまで考へて、その通り正直にかの女にも告げた。これはすべて田口にも――たとへ渠には、もう、法律上の權利はなくても、もとは渠の所有してゐた家のことだから――前以つて了解を得てゐたことであつた。が、それをかの女はどう思ひ違へたのか、俄かに顏いろを變へて、
『何もわたしがあなたにたべさせて戴くことはありません。あなたがたこそこのうちへ這入り込んで來て、このうちをどうかしてしまはうと思つてるんでしよう』などと叫んだ。
『そりや、おせいさん、飛んでもない間違ひですよ』と、お竹も顏を赤くするまで怒つて口を出したのである。
『田口君に聽いたら分ることだけれど、僕らはあなたや政ちやんの爲めをおもてこの下宿屋を――少しは面倒でも――引き受けて見よかおもたのです。』
『わたしは御面倒なことを何もおたのみしたくはありません。それに、田口の云ふことなんか當てになるものか？』
『…………』こちらは呆れてしまつて物が云へなかつた。向ふはまるで田口の云つてる通り氣ちがひ

であつた。こちらを瞰らむ目も燃えてるやうに思へた。一つには、はたから何か云はれたのを信じてゐたのであらう。或は、易に凝つてるところから、自分で易を見て、今這入つてる人にはうかうか家を渡されないとでもきめたのか？　こちらだツても、多少は自分の利益になる目的がなければ、人の爲めにかた肌ぬぐことはできなかつた。それをかの女はそのけちな、開らけない心から、惡い方にばかり取つたのだ。かの女がかねの用意が少いと云ふよりもただぶしようから下宿人に毎日のやうに僅かの煮まめやちツぽけな鹽しやけばかりを出してゐるので、『それではお客さんがゐつかぬのも無理はない』と云つて、こちらの財布から別な物を買つて添へさせたことも度々であつた。が、そんなかねも――かの女のおかげで――棒にふつてしまつただけだ。

かの女はへたな陰陽師身のうへ知らずで、自分で自分のことに氣が迷つて、いつでも惡がしこいものの云ふことへばかり行つてしまつた。そして自分でも猿智慧を出して、今や却つてとうとうあの家をすツかり取られてしまつた。そして政直をも田口に渡さなければならなくなつた。

そのかの女が圖々しくもまたこちらを味かたにしようと思つて、かの女が家を何とかさせようとして男を持ちそくねたことなどは棚に上げて、

『わたしアこれでも正直でとほつて來たんですから、ね』などと、相變らずのおしやべりばかりしてゐるのだ。

『そんなことはいつまで云うたかて切りがない』と、堤は制して置いて、『一體、警察へ行くことはどうなつたんや？』

『行ければ行きたいのですが、ね――』

『行けないことがあるもんか？』

『でも、いいでしようか？』

『いいツて――子が親に正當なことを要求するのが何で惡い？』

『さう云やアさうですが、ね。』

『一體、あんたは人を疑りツぽいから、さうして間違つた方を信じてしまうから、よくない。』堤はいつかいち度云はうと思つてゐたことが出たのだ。『僕は、もう、いつまでも田口の家のことで面倒を見るのは御免や。』おせいさんは自分の不利益だと見たことには、しまひには、默つてとぼけるのがくせだ。あね娘の葬式にわざと時間を夜に變へて、本當に正直な參列者どもをすツぽかしたのもそれが爲めではないか？　そんな無常識にづるいところを見ると、あの田口らが云ふ十五圓や七圓も、すべてかの女が子供に命じてさせた仕わざかも知れなかつた。が、今はそんな考へよりもこちらの一般に繼母に對する公憤の方が勝つてゐた。

『…………』おせいさんは果してやツとのことで雄作の方へふり向いたが、なほ人を馬鹿にしたやう

な口調で、それでも要領に這入つた。『ぢやア、雄ちやん、これから直ぐ警察へ行きましようか、ね？』
『………』雄作はどうでもと云ふ目つきをして母を見たばかりだ。
『お前も意久地がないやないか』と、堤は雄作を叱り付けるやうに云つた。『親が親でないのを訴へるのに何を躊躇するんや？』
『ぢやア、兎に角、さうしましようよ』と、おせいさんが代つて答へた。
『………』堤はその兎に角にも面白くない感じを得たが――。この時、あひにく、田口がうら木戸を明けて這入つて來て、
『おい、ゐるか？』
『ゐるよ』と、こちらもぞんざいを自認して答へた。今夜に限つて、向ふの出かたが――相變らずのことだが――特別に失敬のやうに取れたからである。
田口が勝手の障子を明けてあがつて來た以前に、おせいさんは顏いろを變へて玄關の方へ逃げ出したが、雄作は逃げ後れて、まだ坐わつたまま田口の鋭い目に捉へられた。
『また來てゐるのか？』
『さツきお話を聽き殘して行きましたから』と、雄作は感心にも巧みな云ひぬけをしたので、こちらも私かにこれはいよいよ決心した、な、と思つた。そして田口が茶のまへ來て突ツ立つたまま子供を

見おろしてるのを何げなく見せつつ仰ぎ見て、
『小僧の心得になることをまだ云ひ殘してあつたんや。』
『いらッしやい』と、お竹がとぼけていつも通りの挨拶をした時から、田口の顏にはこちらをうさん臭いと見たやうすがあつたが、今こちらが云つたことにも頓着しないで、渠は
『早く歸れ』と怒鳴つた。『幸田をつれて來たんだらう？』
『………』こいつも氣が立つてる爲めか、機敏な耳を持つてゐた。今、うら木戸がちよツとがたツと云つたので、早やおせいさんが逃げて行つたことを知つたのだ。で、堤は渠をなだめるやうにして、
『さうひどく云はんかて、どうせ君の子ではないか？』
『いいや、白狀もしないで、飽くまで親をだましてとほさうとするやうなやつは、おれの子とは思へない！』
『雄ちやんも、もう歸つたらよからう』と、こちらは仕かたがないのでそれとなく智慧をつけてやつた。
『ぢやア、左やうなら』と、雄作は手をついて親の方を見て挨拶すると、その尻の方から立つて歸り仕度になつた。そのまだ子供らしいやうすをも田口は見ないふりをして、こちらへ向き、
『さア、またやらうか、ね』と云つて、笑ひながら坐わり込み、ふところから花ふだを出さうとして

やめた。その日にはそれでも親としての涙をごまかしてゐるのを見て、こちらは警察から行きさへすればこの事件は一と先づ納まるに違ひないと思へた。そしてこちらも笑ひながら、少し迷惑でも、この場合、仕かたがないので、『やらう』と答へた。本勝負ならまだしも、何もかけツこなしのから花は、いつもただへたな殿さま夫婦のお合ひ手をしてゐるやうで、もう、大分に飽きが來てゐるのであつた。そしてお粂さんが來ないなら、それとなくやめにしようと思ひながら、

『細君はどうした』と聽いて見た。すると、矢ツ張り、

『あとから來るだらう』との答へであつた。そこに然し何だか田口がその細君に對して冷淡なところがあるやうに見て取れたので、子供のことからまた何か不機嫌になつて來たのだ、な、と思へた。

『………』果してお粂さんが來ないなら、丁度いいから、面白くない今夜はやめにしたかつた。が、堤はけふの新聞に出た相場のことなどを語つてごまかしてゐると、聽き慣れたはき物の音がして、うら木戸が明いた。そしてお粂さんが、藝者の出を思はせるやうに、

『今晩は』と云つて、これも相變らずわが家か何ぞのやうに遠慮なくあがつて來た。が、その所天(をつと)の顏を見ると。直ぐ、例のはきはき過ぎた調子で、『今、雄作にそこで行き合ひましたよ。確かにさうだとこツちは思つて見たのに、向ふは知らないふりをしてすたすた逃げて行きましたが、ここへ來てゐたのでしよう?』

『さうですか』と、お竹は——ほかのものがまだ誰れも返事をしないのに——わざわざそらとぼけて答へた。それが爲めにお粂さんはおこつてだらう。割り合ひに白く、いつも素直なその顏をいやに曇らせて坐わつたが、ねんねこでおんぶして來た子を脊なかからおろさうとはしなかつた。

『早く春ちやんをおろして一と勝負どうです』と、堤は愛相を云つて見た。が、これには應じないで、

『そんなこと、もう、面白くもありません、わ』と、かの女は少しつんとした。

『…………』堤は苦笑したけれども、結局、その方がよかつた。田口もほかのことにまぎらせて子供に會つたことを云はないのは、お竹の入らざらん言葉にここで直ぐ恥ぢをかかせない爲めとばかり見えた。そしてみなが互ひに不愉快なやうでその場は勝負なしに別れた。ふたりになつてから、お竹を『なんであんなことを云ふたんや、默つとればえいのに』と叱つた。その負け惜しみにだらうが、かの女は

『どうせ田口さんの口から分りまツさ』と云つた。

『それやから、云はん方がよかつたやないか？』

『わたしはお粂さんのやうな高尙な生まれではありませんから』と、かの女の言葉は飛んでもない方向へそれて行つた。

『…………』こちらは私かに女同士のことだから、少しは向ふをそねみねたんでる爲めでもあらうと譲

步することはできたが、それにしても、たださへ兩方の家が俄かに斯う氣まづくなつたところへ持つて來て、向ふの事件がもとになつてまたこちら夫婦のいさかひなどまでは眞ツぴらであつた。大抵、毎日のやうにどちらからか行き來してゐたのだが、その翌日は田口とのあひだに互ひのたよりがなかつた。その上に、また、こちらの夫婦同士も何となく互ひに不愉快であつた。夜になつてから考へて見ると、人を呪へば穴二つと云ふことがあるが、矢ツ張り、こちらも子供に親から見れば惡いことをうツかり敎へてやつたのがよくなかつたので、その報いがてきめんに、もう、夫婦のあひだにも來てゐるのではないか知らんと云ふやうな、舊弊じみた運命觀ではあるが、不思議にも、何となく自分以外から責められての後悔が先きに立つた。そしてそのまた翌日も、ゆふがたまでは、さうであつた。

お粂さんとは近ごろのことでも、田口とは長いあひだの付き合ひだ。それを――子供に同情してだとは云ひながら――訴へさせたのは、自分自身のことではなし、不必要なことでもあつた。この廣い東京に於いて、商賣上の利害關係を離れて親しく交際してゐるのは田口ばかりであつた。それが二日もやつて來ないと、矢ツ張り、女房だけでは埋め合はせの付かない寂しみが感じられる。お竹だツても、やツとできた獨りの女友達がなくなると、俄かに寂しいのだらう。その寂しさとがかち合つて、夫婦同士のあひだをもまた氣まづくしてゐるには相違なかつた。

別に、どうと云つて云ひ爭ふのでもないけれど、用事の爲めに出て行くにも、歸つて來るにも、きまり切つた挨拶や返事のほかには、どちらからもむツつりした受け答へばかりで暮らした。人のことだからツて、不平まじりな自分勝手の尤もらしい理窟を述べたのだが、それが斯うそり返つて來て、自分らをまで殆ど二日間も不愉快にするとは思ひも寄らなかつた。而もお兼さんの不斷の割り合ひに快濶なのに比べて、うちのお竹がもとの稼業出にも似合はず常々を浮き浮きしないのは、その時々冗談らしく云ふ貧乏の不平がある爲めらしい。

『いつまでたつてもこんなことなら、いツそ、藝者をしてをつた方がよかつた』とも云つたことがある。

『そんな年增でかい』と、その時は堤も怒つて答へた。『やるなら、やつて見い！また色をとこに棄てられたかて、今度は、もう、孕んだ兒までそツくり引き受けて呉れる、おれのやうなお人よしはゐないぞ！』さうだ、その兒は生まれ落ちると直ぐ、幸ひにも、死んでしまつたが、その母親を受け出してやるには二千圓足らずもかかつた。その恩義が足どめになつて、かの女は今でもここを逃げないだけのことだらうか？　ふたりのあひだには子がないのだから、この十年あまりもお互ひにかた氣であつたのをなほこのまま續けて、ともしらがまでも水入らずで愛し合はうと、こちらは靑年時代におぼえた耶蘇敎口調に從來の云ひ慣らしを加へて語つてもゐた。が、それを今や自分からも裏切り、かの

女からも裏切られたやうな氣ぶんに堪へられなくなつて來た。

で、二日目の晩の食事を一緒にやりながら、堤は自分から折れて出て、先づ、

『雄ちやんらはどうしただろか、なア』と云つて見た。氣がかりでもあつたことだから。すると、お竹も初めて常のゑがほを見せて、

『さア、何とか報告がありさうなものですが、なア。』

『…………』さうだ、報告とは氣が利いた云ひかたであつた。然し、それ位の漢語はかの女の藝者時代から云へてたのであるを思ふと、これから又あのまだしろうと臭いお粂さん以上に派手なお化粧でもさせてやりたかつた。が、一つには藝者あがりと見せたくなく、また一つには物入りを增さしめないばかりに、かの女の澄ませば上品で、お粂さんなどとは違ひ、口もとには引き締まつた愛嬌があるその顏を、これまで、惜しいことには、くすぶらせて置いたのだ。

三

そんなことを思ふと、おやぢ譲りの、三十代から少しづつ禿げ上つて來たあたまにも恥ぢつつだが、何だか氣ぶんが常になく面白くなつた。そして一つ、お竹の緣に合はせて、むかし隨分かねをかけたこの自分の地うた張りの喉を久しぶりで試めして見たくなつた。

が、それはさて置き、三味の絲から氣が付いて、
『おい、田口へ三味線を借りにいて來い』と命じた。
『なにしなさるのです』と、お竹は殆ど意外のやうに不思議さうな顔をして問ひ返した。
『…………』それは尤もであらう。お粂さんがお竹の意を汲んでこちらへ、つけづけとだが、
『三味線ぐらゐは彈かせて上げてもいいでしよう――折角、いい物を澤山おぼえていらツしやるのですから』と云つた時にも、こちらは餘り進まぬ顔をして、
『こツちやは田口君のやうな、成り上りの三味線ずツきやないさかい』と、冗談まじりに反對した。けれども、お竹はそれから少し氣を許して、田口のところの三味線をこちらの留守には時々借りて來て、彈いてるやうではあるが、こちらから進んで借りに行けと行つたことはない。『なにをするツて、それを出しに向ふの樣子を見て來たらえいやないか？』
『うん、さうです、な』と、かの女はにツこりしてうなづいた。そして直ぐちよこちよこと出て行つたが、失望のていで歸つて來たによると、裏手のそば屋へ貸して、今ないと云ふのであつた。
『馬鹿な！』堤は人ごとながら下だらないと思つた。『お粂さんはさう隣り近處へよくするほどなら、もツと子供の方を可愛がつてやればえいやないか？』
『その子供もゐないやうでした、わ。』

『ほたら、駄目であつたのか、なア――確かに訴へることは訴へたやろに？』

『まだ警察の方で後らしてるのかも知れません。』

『さう長引くわけがないが、なア』と、堤は話をうち切つて、茶のまへ出した引き出し附きのすずり箱にかた手を置きながら、暫らくそのことばかり考へてゐた。おせいさんのことだから、ぐづぐづまご付いてゐて、まだ警察へ行かせないのか知らん？　また、行つたことは行つたが、警官の方が手ぬるいのか？　かねを使ふ政治家や實業家のこととは違ひ、たとへ有名な文學者だからツて、田口に對して手加減をしてゐることもあるまい？　矢ツ張り、雄ちやんが親のために遠慮があつて行けなかつたのか？　獨り言のやうになつて、『あかん、なア、おせいさんも――こんな時こそあの辣腕を振ふべき時やのに！』

『おせいさんのことですから、如才はないでしよう』と、お竹が臺どころで洗ひ物の音をちやらちやら云はせながらの言葉であつた。

『…………』それへこちらからの突ツかかるやうな口ぶりで、『ほたら、何とか手ごたへがありさうなもんやないか？　どいつもこいつもたより無いものばツかツりや！』

『人のことですから、さうわが思ふとほりになりまツかい、な。』

この時、かたかたと惡さうな子供の足おとがして來た。初雄のらしかつた。

『…………』こちらはこの子をも一度自分の子に貰ひ受けようとしたことがある。幸田と下宿屋が喧嘩別れになつてから、あの政直に對する獨りぎめの養父らしい情愛も消えてしまつたので、お粂さんがそのつれツ子をさう愛してゐないのを幸ひにして、田口とも相談の上、この子を――可哀さうでもあるから――暫らくうちへ來させて、お竹にもなつくか、なつかぬかを試めした。その最初の夜、お竹の老父がおそく來てとまつたのを知らないで眠つた子は、夜なかに便所の緣がはがみしみしと云ふので目がさめ、障子のがらす窓から、大きな男が消えて行くのを見て、『どろ棒ぢやアないの』と云つた。まだその時はたツた五つであつた。仰向けになつて、足を天井へ向け、その上にのせて龜の子の眞似などさせてやると、『うちのおとうさんはこんな面白いことをちツともして呉れないんだもの』と喜んで、こちらにばかりは親しんでも、お竹には餘りなつかなかつた。そしてかの女も亦こちらが渠をばかり可愛がり過ぎると云つて不平を云ひ出したので、止むを得ず返してしまつた。その時の理由を、まさかうちの女房が燒き持ちを燒くのでとも云へないので、直接田口には、
『君の家庭の樣子が子供のことからいつ破裂するかも分らないから、君の實子でもないのを貰つて置いて、僕と君とのあひだまでが氣まづくなるやうなことがあつても困るから』と答へた。果して今度のやうなことが持ち上つたではないか？　これは、はたから見てゐても、どうなつて行くか見ものであらう。

それにしても、初雄が來るたんびには、その後だツても、きツと何か與へて可愛がつてたのだが、今晩は、それが木戶を這入るのをさう歡迎する氣で待ち受けることはできなかつた。が、勝手の障子を明けて。

『おばさん、おとうさんがこれを』と云ふのを聽いた時は、

『來たか、初ちやん』と、先づ、堤はわれ知らず自分のかた手を疊に突いて、からだをその方へ乘り出させた。が、自分の方から照らす電氣の光りに渠の小さい手が封書を一つお竹に渡したのを見て、忽ち自分は何か面白くないことを豫想しながらそれを受け取つた。

『にイさん達はどうして？』

『今、巡査につれられて歸つて來たの。』

『ふたりとも？』

『えい。』

『おとうさんは叱りましたか？』

『えい、にイさんは叱られたよ。』

『大相？』

『えい。大變。』

『…………』そんな應對もはツきりとは耳に入らぬほど、堤は困つてしまつた。手紙の文句には斯う書いてあつた、

『子供は警察の手から君の考へた通り歸つて來ました。然し、僕が子供を君のもとへ遣はしたのは、小僧としての心得や商人となる將來の爲めの訓戒を話して貰ひたかつたのであつて、決して父を警察へ訴へさせることなど賴んだのではなかつた。なぜそんなことをしたのだ？　君は僕が子供の爲めに筋立つた順序を立ててやつてるのを、わざわざ、はたからぶち毀わすやうな、入らないお世話をしたのであります。こないだの晩の樣子が變だと思つてたら、君達はこんなことをさせる計劃を致へてゐたのだ。友達甲斐もない！　君自身の經驗から見ても分る通り、親は子供を叩き上げる必要の爲めには一旦突ツ放してもかまはないものです。それをはたから、この後だツても、かれこれなまぬるいことを云つて貰ひたくありません。以上。吾助。』

『もう、歸してもよろしいですか』と。お竹が念を押した時には、

『うん』と答へただけで、また手紙を初めから讀み返してゐた。

『何を云うて來たの？』お竹もそばへやつて來て坐わつた。

『…………』その膝へ讀み終はつたのを投げやつて、またいきどほりを新たにしながら、『あいつも殘酷なやツちや。ゐのししは生まれた子供を運だめしに谷そこへ投げると云ふけれど、それは畜生のこツ

ちや、人間は少し違ふ！』

『然し』と、お竹も一と渡り讀んでから、『あんたはまた自分に子供がないから、人の子を目鼻がないほど可愛(かあい)がり過ぎます。』

『そんなこた、別ちや！』斯う云つたには、二つの意味があつた。もう濟んだことだが、かの女が初雄をさきに排斥したのに對する寂しい不平がその一だ。今一つは、何よりも困つたことには、これから自分は田口に相ひ手にされないかも知れないことである。若し相ひ手にされなければされないでもかまはないが、――これまでだツて別に商賣上の利害關係はなかつたのだから――然し、さうなると、自分は廣い東京に友達と云ふ友達(ともだち)がなくなつて、殆ど獨りぼつちだ。それがつらかつた。

『きツと子供がすツかり云うてしまつたのです、ね。』

『さうやろ。』あれだけ云ふなと云つてあつたのにだ。『あの田口のことだから、きツとおこつてるぞ、わしかて、子供と親とどツちやが大切(たいせつ)かと云や、矢ツ張り、田口の味かたになるのだけん。』

『まア、夫婦喧嘩の仲へ這入つたも同樣です、な』と、お竹はうまいことを云つた。

『あとで馬鹿を見るのはあんたばツかツりや。』

『…………』直ぐ出かけて行けばあたまからやツつけられるのはきまり切つてるので、堤も先づ手紙で返事(へんじ)をするより仕かたがなかつた。『御手紙拜見仕候』と、こちらは却つて商賣用に書き慣れた文體

にして、『大いに御立腹の御様子誠に恐れ入り候。小生は然し何も惡意を以つて警察へ訴へよと申したのではこれ無く、子供の爲めは結局また君の爲めで有之候へば、兩方共よかれと考へて致したことにこれ有候。偶々それが君の逆鱗に觸れお叱りを被ること、實以つて恐縮に堪へず候。幾重にもお詫は申すべく候へども、これが爲めに君との多年の交際が若し斷絶する如きことにも立ち至り候はゞ、お互に殘念のことに存ぜられ候。孰れ明日にも參堂、詳しく申上ぐべく候へども、取り敢えず手紙を以つて御詫の段くだんの如く候。伴太郎。』

　お竹がいやだと云ふのを叱り付けるやうにして、無理に持つて行かせたのだが、田口もお傘さんも出て來なかつたさうだ。お竹は、

『癪にさわつたから、どうせこれ切りなら、うんと子供を焚き付けてやれ』とのことで、玄關へ雄作や政直を呼んで、あすにもこツそり來て御覽と命じ、あれからどう云ふ順序を踏んだかと云ふことをも聽いた。あれから、田口の隣りの主人にも相談したら、矢張り、訴へるがいいと云つたこと――あすとも繼母育ちだと云ふからこちらの說に贊成するにきまつてたが、世にはどうして、斯う、自分と同様な育ちが多いのだらうと思ひながら、堤は自分の妻の報告を聽いたが――それから、大塚の分署へ上申して置いたら、けふ、芝の警察から知らせがあつて、また大塚へ政直も一緒に來たこと。そして巡査につれられて再びうちへ歸つたこと、などを。そしてもツと聽かうとしてゐるうちに、お傘さん

が奥から、

『雄ちやん、政ちやん、どこへ行つてるのです』と怒鳴つたさうだ。

『失敬ぢやないか、こツちやが使ひに行つてるのに?』

『だから、もう、駄目。あすも行かない方がえいでしよう。』かの女の顔つきでは、お衆さんの爲めばかりにでも田口家との關係を絕つていいと云ふらしかつた。

『然し、お前とわしとは違ふから。』堤は決して自分と田口との交際が絕えるのを望みではなかつた。

そのうちに、またおせいさんが例のねこ脊を寒さうに見せてやつて來た。子供の樣子をききにだらちが、斯うおそく來てべちやくちや話し込まれて、またとめて吳れいなご云はれては溜らないのであつた。

『田口ともあらうものが名譽にも關するぢやアありませんか? 今度こそ懲りて、二度と再び、もう、きツと、あの女の爲めに子供を虐待したりなどはしないでしようよ』などと、大平樂を云つてるのを、

『然し、あんたも實際にだらしがなかつたさかい、なア』と、いやがらせを云つて、大抵のところで切り上げさせてしまつた。子供をろくろく自分で仕つけ育てることもできないで、一つの燒き芋を二名の子供が泣いて取り合ひするそのぶざまをもただ笑つて見てゐた者が、今やその子供を人にまかせ

て、少しよくなつたかと思はれると、また横取りでもしかねないのは、餘りに蟲のよ過ぎるわけではないか？　山口やお粂さんの身になつては、おこるのも當り前だ。それでも、そのべちやべちや云ひながら勝手を出た時、堤は『兎に角、僕があすいて見たら樣子は分るさかい』と云つて聽かせた。

四

いよいよそのあすになつて見ると、前夜までは用事を延ばしてもと思つてたのが、こちらにも弱みがある爲めに、何となくやすやすとは行きかねたのである。來た手紙に書いてある通り、また、『入らないことをした』と云はれては、返事の仕やうにも困るだらう。よひツ張りの朝寢坊がまだ起きてゐまいと云つて、時間の立つのを待つてるあひだは、それでもまださうではなかつた。やがて起きた頃だとなると、こちらこそ警察へでも引かれるやうな氣がして、

『もう、やめよか』とも相談して見た。

『どうせこれ切りになるなら』と、お竹は然し勵まして呉れた、『今一度行つて樣子を見て來とく方がおもしろいでしよう。』

『さうや、な。』斯う思ひ直して、しぶしぶしながら出て行つたのであるが、さりげなく、これまで通り玄關をあがつた時、お粂さんのやツと朝化粧をすませて、鏡の前で肌を入れたところが奥座敷に見

えたので、『やア』と聲をかけたが、見ぬふりをして、茶のまの方に坐わつた。田口はまだ湯に這入つてたので、湯どのから、

『堤君か？』

『……　……』その聲がいつもの通り無頓着らしかつたので、こちらも同じ心持ちになつて、

『ああ。』然し、その湯のことでもこちらは去年から少し氣を惡くさせられてゐないではなかつた。物價が高くなつたにつれて、湯錢もあがつたので、お竹とふたりが隔日に錢湯へ行くとしても、月にざツと小壹圓は入る。それだけを石炭代に入れるから、うちのものを毎日最後の落し湯にでもいいから入れて吳れないかと、お竹とも相談の上田口に話しかけて見た。すると、渠は

『僕は湯には潔癖で、おやぢがゐた時でも、おやぢが這入つたあとへは這入らなかつたほどだから』

と答へた。そのくせ、自分の女房や子供はいつも先きへ入れてやつてゐるではないか？　それに、友人に比べては、おやぢなどは問題にならぬ筈だ。而も、渠のおやぢはこちらのに比べて餘ほど子供にあまかつた。それをわざわざ問題に持ち出したのには、然し、別な理由のあることが分つてゐた。それはこちらにもお竹にも子供のできる望みがないその病氣をおそれることであつたらう。だから、こちらも一番あとでいいからと云ひ添へたのに。むかしのことを引き出すなら、田口だツても、大阪へ來た時うちの湯へ正月の元日から五日間も這入つてゐながら、その暮れに京部から受けて來た痳病の

出てゐたのを知らなかつたではないか？　その爲めにこちらもどれだけ當分は氣味が惡かつたことだか？

　身勝手のわが儘と云へば、お粂さんも同じことで、今、同じ室へ這入つて來ながら、『いらツしやい』も云はないで、隅の火鉢の前を茶碗など出てゐるちやぶ臺に向つて坐わるが早いか、いきなり、『あんたの奧さんはなぜあんなとぼけかたをしたのでしよう』と云つた。『あとで直ぐ分ることぢやアございませんか？』

『…………』堤もあれはよくないと思つたので、お竹をあとで叱り付けたほどだ。けれども、斯う詫びるつもりで來てゐるものに向つて、半ば氣ちがひのやうなおせいさんぢやアあるまいし、さうつけつけ云はないでもいいではないか？『まア、許してやつて下さい。きまりが惡かつたばかりで、別に惡意があつたわけでも。』

『さうかも知れませんが――子供はあんたのお宅で教へられたとか云つて、巡査をつれて來ましたよ。』

『僕のとこばかりやない。お隣りでもさう云うたさうや。』

『へい』と、お粂さんは奧座敷のそのまたさきの方を見るやうにして、『お隣りへも行つたのでしようか？』

『………』かの女のこちらに對する權幕が少しわきへそれたのを見て、『實は僕のとこで晝めしを喰うてから芝へ行き、それからおせいさんを尋ねて一緒にまた僕のとこへ來て、それからまたお隣りへ寄つたんや。』

『然し、御はんはお宅から歸つて直ぐうちでどツさりたべて行きました、わ。』

『そりや知らんけれど――』して見ると、このことでお兼さんを惡く思つたのはこちらの考へ違ひであつたのだ。さうだ、まさか、無敎育なまま母でもないから。堤は雄作らのおほ喰ひに呆れないではゐられなかつた。少し向ふの機嫌を取るやうに、『ほたら、よう喰ふ、なア――子供と云ふものは！』

『わたしの方ではそんなこととは知りませんでしたから』と、かの女はなほまじめ腐つて、こちらの笑ひには應じて來なかつた、『最後の御はんだからツて、たべたい丈けたべて行けと云つたのでしたが――』突然、うわ目になつて、早や口に、『あんた、子供はお隣りへも行つたのですツてよ！』

『やア』と、田口はどてらの上にけんちうの兵兒帶を締めながら出て來て、こちらへ聲をかけた。そして直ぐ、『君はこツちのありがた迷惑なことばかりしたのだ、ね？』

『………』無論、今知つためしのことも含めて、すべて子供の訴へ事件を云つてるのだらうと思つたので、『君に迷惑をかけてすまんが、實は、ゆふべの返事の通り、別に惡意があつたわけやないから。』

『そりやア惡意はなかつたかも知れないが、ね』と、田口はこちらの前をとほつて、ちやぶ臺をお粂さんとさし向ひのところへ坐わつた。そしてこちらへ左りの横がほを見せながら、少し意張つてるやうに、『君は友人甲斐がないほど輕卒だよ。僕らのやつてることを君は君の細君と一緒になつて世間あり來たりのまま'ツ子いぢめと思つてしまつたやうだ。世間はお粂が初雄をよく叱るので、あれもままツ子だからと云つてゐるさうだ。そんな輕卒な斷定とおんなじやうなことを君らもやつて貰つちやア困るのだ。』

『………』堤は渠らが食事を初めたのを見て、いつもこれだけは貧乏の時を忘れないで質素にしてゐる、わいと感心しながら、『僕が惡かつた。あやまる。』

『なアに、さうたやすくあやまらなくツてもいいが、ね、ただ僕らを今少し理解して呉れて、これから子供をおだてて呉れさへしなけりやア――。』

『今、ゐないやないか?』堤は話しをこれで別な方向へ轉じようとしたのだが、さうはできなかつた。自分と共に自分の妻までも攻擊されてゐたからであつたが――。

『おかげで僕の手から小僧にやらなければならなくなつたので、今、新聞で見た廣告のところへ當りに行かせたの、さ――どうせ一度はその本人が行かなけりやアならないのだから、ね。』

『ほたら、どうしても小僧にやるつもりか?』

『無論、さ。』

『…………』もう、それでは、はたから燒きもきしてやることもないと思つたので、何だか自分の肩がおろせた氣がして、『君の意見通りになるのだから、それもよからう。』

『雄ちやん達は堤さんのところでも御はんをいただいたのですから、ね、何と云ふ意地きたなでしよう』と、お兼さんがまた話しを盛り返しさうであつた。が、これは田口の一と言ですんでしまつた。

『どうせ、あの幸田が乘り移つてるやつらだ！』

『ほたら、失敬する。今から仕事に出なければならんから。』斯う云つて、やツと窮窟で面白くもない場をのがれたのだが、けさと云ふけさは、誰れも送つて出ないのを氣安いなかの當り前のことではないやうに感じた。

『さうか』と云つた、田口の不愛相もこちらの耳にはいつも通りの氣持ちのいい親しみを與へなかつた。そして向ふがそのつもりなら、こちらもあんなに言葉低くあやまつたのが不見識過ぎたやうであつた。

お互ひに人間ではないか？　思ひ違ひもあらう。病氣にも罹らう。貧乏もしよう。ただこちらには今時節が惡いが、向ふには時節が向いて來ただけのことだ。湯には毎日二度も三度も這入り、無病息

災の女を持つて、それにも達者な兒を生ませた。その仕合はせが賑やかなのをいいことにして、子供をふたりまで手放したりするのだが、今に見ろ、冥加があまつて、田口はその爲めに何かの天罰が當らう。

堤はそんなことを考へると、何だか自分自身のことにまで反感が起つて、移つたか移されたか、どちらとも分らない病氣のあるお竹などは――かねのかかつた女ではあるけれども――もう、どうでもいいかのやうになつてしまつた。

そしてしほしほと自宅へは向ひつつも、田口から二度までも『友達甲斐がない』と云はれたのを、云はれて見ればさうかも知れなかつたが、恰も子無しの原因を指摘されたと同樣に、一番殘念で、殘念で――。

――(大正八年十月)――

あぶら蟲

『…………』柏木はけふ、自分の先妻――と云つても、今は人の茶飲み友達だ――から以前にかの女が殘して行つた短刀を返して呉れろとの交渉手紙を受け取つたことに關して、今の妻なるお里と云ひ合ひをしたのがもとで、うちにゐるのがいやになり、ここへ逃げて來たのである。

無銘の正宗とでもあらばこそ、濃州の定乘なんて品としても何でもない。こちらにはあつたツて仕やうがないし、向ふには然し親ゆづりの物であつたからと云ふではないか？離婚をして家を出る時に身につけて持つて行くべきであつたのに、女、殊にだらしのない女のことだから、そんな物に氣が付かなかつただけのことだらう。初めからうちに置くべき品ではなかつたのだ。それを――こちらも忘れてゐた頃になつて――返して呉れいと云つて來たのも不思議だが、うちのお里がまたそれを返すに反對するのも不思議であつた。

『なんで、また、今更らそんなことを云つて來たのでしようか？』

『おれにも分らない。』

『たとへ向ふの物であつたとしても、今までうツちやつてあつたものを今となつて取りに來る權利はないぢやアありませんか？』

『さう云つてしまうのも可哀さうぢやアねいか？』

『何が可哀さうです？そんなに大切な物なら、離婚して歸る時に、ほかの物と一緒に持つて行つたらよかつたでしよう。』

『それも少し無理だ。』

『何が少し無理ですの？あなたは娘の關係からでしようが、まだ向ふを最い氣めに見てゐるのですよ。今までうちに置いといた物を今となつて渡すにやア及ばないぢやアありませんか？人を馬鹿にしてゐます、わ。』

『さう云やアさうだが、なア――』斯う初めのうちは答へてゐた。が、よく考へて見ると、お里は矢ツ張り氣をまはしてゐるのだ。あとから這入つた年の若い妻として、こちらがこんなことにでも先妻との交渉があるのを好まないのであらう。

『こんなことを度々云つて來るやうになると、わたしが主婦として困ります。』

『だから、返してしまつた方が却つてあとが面倒くさくなくツていいぢやアねいか』と、叱り付けるやうにして納得させようとしたのだ。が、かの女は强情にも顏いろを變へてまで不承知であつた。

『いいえ、いけません！わたしが來た時にあつた物はみんなうちの物としてわたしが保管致します。』

『分らねいやつだ、なア！』

『でも』と、かの女の顏は恨めしさうにこちらを見て、泣き出さないばかりになつて、『あなたがまたそんなうそを云つて、もとの奥さまにやつておしまひになるのかも知れませんぢやアありませんか？』

『ぢやア、勝手にしろ！』斯う怒鳴りツ放しにして、ここへ來る決心をした。それには、先妻のお霜を婆々ア臭くツていやになつた爲めにいぢめ出した上に、あんなけち臭い品物をこちらへ保留したがつてると思はれるのが不愉快で心ぐるしかつたばかりでなく、お里に對してもこちらは一つ、また觸れて貰ひたくないことがあつた。それはほかでもない、つい、こないだ、先妻の生み殘した娘――これはお里が嫁して來て以來親戚に預けて、そこから女學校へかよはせてある――が來た。そして、友達も買つたから、それと同じ腕卷時計を買ひたいと云ふので、學生には贅澤過ぎるとは思つたが、かの女にその新らしい母を惡く思はせない爲めに、『ぢやア、お前のおかアさんの財布から出してやらう』と云つた。そして實は自分がお里には內證のつもりで自分のから出してやつた。

ところが、正直な娘は確かに母の承知だと喜んで、その通り親戚へ語つた。そして親戚からまたお里へしやべつた。

斯うなると、親戚などはあつて却つてうるさいもので——お里はそこから聽いて來ると直ぐ、『わたしはそんなおぼえはありません』と云つて、怒り出した。そして娘の方へばかりそのほこ先きを向けて、『あの子はそんなうそを云つて、實は、わたしに內證でまたあまいおとうさまをせびつたに相違ありません!』

『………』さうぢやアないと、この場合、こちらは胡魔化して置けないので、『實は、せびつたにやア違ひねいんだが——』

『それ御覽なさい!あなたはどうしてさう子供にあまいのでしよう、女學生などにやア、まだ贅澤過ぎるのに?』

『さう一概に云ふな。實は、おめへの恩を娘に着せて置く方がおめへの爲めによからうと思つたんだ。』

そしてわざ〲斯う〲云つたのだと辯解した。が、かの女はとうとう泣いてしまつた。

『わたしに知れたらわたしが——反對するとでも思つて、あなたは——內證でしたのです、わ』と悔しがりながら。

『そんなこアとねいツて云ふに!』

『いいえ、きツとさうです!きツとさうです!わたしだツて、——そんなに——まま母——根性は持つて——ゐませんのに!』

『…………』いくら云つて聽かせても、云へば云ふほど面白くない方へひねくれて行くのであつた。そんな時には理窟で說き伏せようとしても失敗を重ねるばかりだから暫らくこのままにして置く方がいいのであつた。今回のことでも、二三日ここに滯在して向ふをうツちやつて置けば、向ふから獨り手に折れて來ることは分つてる。

かの女のうるさいのはかの女にこちらの望む女の熱があるのを證明する所以だから、つまりは、惡い感じはしない。が、たまには、斯うしてこちらの氣を拔くのも、ちよツと、家庭から解放された自由のやうなものをおぼえて、自分の生活上にそれだけ氣の輕い餘裕を與へるのであつた。

この場所では、藝者はすべてつれ込みで、土地にゐるものとしてころぶ女はゐないが、遊藝師匠なるものは六七名もゐると云ふので、そのうちの一番若い美人を呼んで一杯飮むことにした。宿からの名ざしであつたにも拘らず、それが來て見ると、もう、二十五六の年增で、鈴彌と云つて顏だちはちよツと上品らしいが、三つ口を縫つたのではないか知らんと思はれるやうなあとが――ほんの、微かにだが――鼻のしたの右寄りにあつた。それが、

『今晚は』と云つてから、およそ一時間もたつかたたぬうちに、何となく和らかい親しみをこちらにおぼえさせて來た。男の野呂さが女、殊には藝者若しくはそれまがひに向ふと、きツとさうなるものとは自分でも承知してゐるが、今夜のには今少し別な理由もあつた。きまつて出る身の上ばなしにな

つてから、『わたしが身を落して』との前置きであつたが、こんな商賣を決心したのは、つい、一二ケ月前からのことで、それまでは、東京でこちらの住んでる表町にゐて、そのそばの豊川いなりなどへは毎日のやうに子供をつれてお參りに行つたとのことだ。『兎に角、わたしのをつとが死んでからまだ五ケ月ですから、ねい。』

『いや、死んだのはおとうさんだらう』と、こちらは思はず口に出してしまつた。歸つてお里に聽けば直ぐ分ることだが、鈴彌の話しぶりによると、どうやら、こちらの近處にある三等郵便局のかねを長いあひだ局の窓に於いて取り扱つてた安井と云ふ人の娘らしい。

　安井と云ふ人は、こちらも局の窓で度々見たことがあつたのでおぼえてるが、五十代を六十の方に近づいてた老人で、こちらの名をよく知つてて、お里が貯金やかわせのことで行つても。その不慣れをよく世話して呉れて、かの女の顏が見えると、いつも誰れよりも先きに、『柏木さん』と呼び出して呉れたさうだ。それが緣となつて、その人のいもうとがうちへ來るやうになつた。兄と一緒に住んでて、人仕ごとなどをして兄の暮しを助けてゐたので、うちでも衣物の新調や蒲團の縫ひ返しがある時には、度々そのいもうとを賴んで來た。見にくい、年のふけた女ではあつたが、相當に教育もあるかして、生意氣にも中央公論と云ふ、こちらさへまだ讀んだことのない雜誌などを讀んでた。そしてその老兄弟はふたりとも音樂や芝居のことには詳しかつた。從つて、その渠

等の娘なり姪なりに當る女も琴の師匠になるだけの許しは取つてるとの話であつた。だから、三味線だツて相當にやつてたのだらう。

『わたしは琴の方が本職ですけれど、それでは斯う云ふ場所に向きませんから』と云つたのによつて考へても、こちらの想像は必らずしも當つてゐないわけでもなかりさうだ。こちらは音樂のことはよく分らないけれども、三味線の方はかの女にあまり確信がなささうに見える。

自分は一度も直接に顏を見たことはないのだから、無論、確かだとは云へないが、若しこの女の父があの安井なら、湯屋で頓死してから、その家は近處にある借金の爲めに解散し、娘はどこへ行つたか知れなかつたが、その兄と一緒に暮してゐたをばと云ふのには、こちらがお里をつれてこの夏、鹽原の鹽の湯へ行つた時に、意外にも出くわした。どうして姿を隱したのかも分らなかつたのが、そこで出くわしての白狀で初めて安井の生前半ケ年ばかりにできた借金の爲めと知れた。

『そんなわけで、ね』と、かの女が泣き〳〵お里の正直な同情に訴へてるところをこちらもそのそばで聽いてゐたのだ、『女中にまで落ちて兄の不義理な借金をなしくづしして行くつもりですから、どうぞね、當分のあひだは、お歸りになつても近處の人へはお話しにならないやうに――。』

『そりやア、ね、さう聽けば御尤もですから、わたしも默つてます、わ』と、お里も答へた。そして別れる時、何ほどかを特別に心づけしたやうであつた。

『姪も別なことをしてをりますが』と云つたので、

『ひよツとすると、藝者ぢやアないでしようか』とまでお里はそのあとで推測したほどだ。『藝ごとには兎も角堪能な家すぢですから？』

果してその姉の姪なら、かの女はその亭主とは何かの理由でどうしても正式の夫婦になれないので、女の兒を獨り引き受けて別れたのだ。五歳の女の子があると云つてるのもそれに符合してゐる。が、鈴彌はそらとぼけてか、それとも實際に違つてる爲めか、醉ひにまぎらす黒うと同様な輕薄さで以つて、

『おあいにくさま』と答へた。そして『都々逸でもおやりなさい、な。』

『……………』そのとぼけかた若しくは馬鹿にしかたが、まださう摺れてゐない女のそれとして見ると、實際を云はれてつらかつたので、わざと輕薄さうにしたのであらう。そこにまだ脈が殘つてると思ひながら、こちらもかの女の三味線につれていろんな物をごたまぜにやつた。そして撥ひとつ持てない無器用なお里に對するその方の不平を、なほ二時間ばかりも、腹の中からそれとなくさらけ出した。

鈴彌が歸つてしまうと、然し、そばにお里がゐないその寂しさに氣が立つて、女中の敷いて呉れたとこにも這入りたくはなかつた。女中を呼びとめるやうにして、

『あれは割り合にいい藝者ぢやねいか』と云つて見ると、

『おとなしいので、うちではあの人ばかり呼んであげてゐます。』
『…………』それも私かに頼母しかつた。
時計を見ると、まだ九時ではないか？よし、これから直ぐ仕事を初めよう！一と晩ぐツすり休んで、あすからと思つてたのだ。が、寢られないままに、とこを自分で横の方へ引き寄せ、眞ン中の電氣の下へ眞ツ四角なおほ机を再び引き出して、その上で携へて來たところのかばんを開らき、參考の書類を廣げた。一つ有望な大建築を引き受けることになりさうなので、その詳しい見積り書を拵らへなければならないのである。從つて、詳しい圖も調製しなければならぬ。
　その爲めに机に向つてあぐらをかき、萬年筆を持つたり置いたりしてゐると、然し、そのはたから邪魔をするものは若い、肉づきのいい、どツちかと云へば圓ツこい顏の女だ。これはお里にきまつてる。それを成るべく見ないやうにしてゐると、今度は、目の前に鈴彌の顏が浮んで、その口びるの傷あとらしいのが折角のいい圍ひ者を臺なしにするので、甚だ可哀さうになつた。
　さうだ、あすの晩までに用事がかた付けば、
『あさつて、そんなら――まだ曾我の家を見たことがないなら――新富座を見物につれて行つてやらう』と約束したのであつた。何の爲めにそんな約束をしたのか、今更ら少し馬鹿々々しくなつた。例の不平に酒の醉ひが手傳つてゐたとは分つてるものの、今やお里に對する和らかい感じが逆もどりし

て來て見ると、もう、この二三ケ月で多少は惡ずれしたやうな三つ口をんなどを必要としないのであつた。女が必要なら、お里に電報をかけてもいいのだ。

『ぢやア、樂しみにしてゐますよ』と云つたが、第一、一緒にゐると云ふ子供をどうして置く氣だらう？この場所ぢうなら、どこに來てゐたツて近いからいいが、兎に角、車や電車を利用して行かなければならぬ東京へは、うツちやつては行けまい。いや、近處の人に預けても行けまい。そして子供をもつれて行かれるとすれば、こちらの氣が利かないことはおびただしいわけにならう。それだけを考へても、全く興がさめてしまうのに、その入費を勘定して見ると、見物料や晝と晩との食事やで少くとも十五兩以上にはならう。けちくさいこともできない。

『別にお前に野心があるわけぢやアねいぞ』と斷わつての、然しそれとなき物好きには、餘りに高價であるやうだ。それよりは寧ろ、あす、かの女を挨拶に來させて三兩も包んで渡し、芝居見物の代りにこれを子供にやつて呉れい、お前を喜ばせるよりも子供を喜ばせた方がいいだらうからと云ふがましであつた。

　さうだ、さうしようと思ひ直して、また筆を持つてると、今度は、あぶら蟲が氣になつた。机の上の罫紙に目をそそいでゐたのだが、左りの疊のうへからまた黑い物が映つた。先刻も一匹、小さい赤ぐろがお膳について來たのであつた。

『なんだ、こりやア』と、わざと斯う云つて、こちらは女中がいろんな物を乘せて來たひら膳を見るが早いか、そのふちを指さした。

『料理場にあぶら蟲が澤山わいて困りましたが、もう、死ぬ藥りをたべさせましたから絶えてしまひました。』女中は平氣さうであつた。そして『そりやア、一ときはぞろ〳〵出て來たのですよ。料理番もうるさがつて、困つちまつたのです、わ。』

『困るのア、おめへ、料理番ばかりぢやアあるめい、さ、きツと客の喰ひ物や味噌しるへも這入つてるもんだ。』『酒さへ何だか變にかはつたにほひがしてゐる氣がした。ぷんと、その蟲くさい。

『でも、もう、絶えてしまひましたから』と云つたが、この通りまた出て來るではないか、最初に『見積り書』と書いて、そのあとを書きそこねた罫紙を一枚持つて行つて、二つにも三つにも疊んでその眞ン中ごろをつまみ持つた。そして蟲の驅けて行くのに打ちかぶせると同時に、上からつまみ上げた。そのあとに見えないのを見ると、幸ひにも紙の中へ這入つて押しつぶれてゐた。紙をそのまま丸めて、たばこ盆のすみへ挾んでから、あたりを見ても、もう、ゐないので、自分はやツと安心したが――

『土方や大工のやうなものを相ひ手にする請け負ひ師に似合はず、餘りに潔癖すぎる』とまで云はれてゐる男である。そとへ出る時はちやんと洋服か羽織り袴でなければ行かないし、――そしてけふは

袴でやつて來たが——きたない感じ、氣味の惡いことはすべて嫌ひだ。
よそのうら長屋をたうとう出られないで死んだおやぢが、曾て家ぢうにあぶら蟲をわかせ、自慢の彫り物を肩からつづけた腕を振りまはして、
『こいつア緣起のよくなる前ぶれだぜ』と喜んだことがある。
『何が緣起でい、きたねいのに』と云つて、こちらはおやぢの留守に兄弟と一緒になつて、煮え湯をかなだらひに入れて、その中へ天井や戸棚を這つてる蟲をすべて掃木で以つて拂ひ落した。この蟲は喰ひ物などへ這入つてきたならしいばかりでなく、寢てゐる時にちよツとでも知らずにさわれば、ちくりと刺すので癪だツたのである。
その後、獨りでおやぢの使ひに行つた途中で氷屋へ這入つて見たくなり、隨分貧乏ツたらしいところだとは思つたが、そこの床几に腰をかけた。そして半分ばかり氷じるこをうまく喰つた時、今度のさじへすくはれて來たのは長さが一寸もあるかと思はれる眞ツ黑のあぶら蟲の親であつた。直ぐ『げツ』と云つたかと思ふと、喰つただけの物がみんな胸からそとへ出てしまつた。それからと云ふもの、自分にはます〳〵緣起どころではなくなつて、あぶら蟲と云へば、したくない貧乏と云ふことをも一緒に思ひ出せるやうになつた。
そして鎌倉の大佛がまだうすぐらいどこかの貧乏でらで生きてた時のことなどを夢にまで見た。そ

この大黑がなか〳〵ぶしようで、部屋や障子をほこりだらけにして置いた。そればかりならまだしもだが、自分たちが物を喰つたあとの茶碗や皿小鉢をそのままにして置いて、少しも洗はなかつたのであぶら蟲がわいた。そして初めのうちはまだしも蟲のなめ散らす物があつて、その數多い生命がらくに持ちこたへられてたものの、寺その物が段々にひどい貧乏をして行つた。檀家は見限つてしまつたし、本堂へあがるお賽錢もなくなつた。如何にぶしような大黑でも、斯うなると、溜らないので逃げ出してしまつた。が、和尙はゐ付きのものだから、そのまま辛抱してゐた。そして喰ふ物がないから、止むを得ず坐禪を組んだ。さうして淨に入つてると、そのからだはそとがはから段々に固くなつて行つた。

あぶら蟲の方でも、もう、とツ付く物がほかになかつたので、みなで固まりつつある和尙にとツ付いた。そしてその鼻の穴や少し明いてる口から和尙の胸や腹へぞろ〳〵這入つて行つて、腐り易い臟腑と云ふ臟腑をすツかり喰ひ盡してしまつた。そこで和尙その物も腐る方の分子が全く取り去られたので、十分に固まる一方になつて、ミイラとしてはあまりに固過ぎるところの一つの大きなかな佛ができ上つたのである。そして鎌倉へ持ち運ばれたのだが、あぶら蟲はその爲めいつのまにか絕えてしまつた。

これは夢だからどうでもよかつたとしても、靑年の時に、この夢を見てから、自分はまたあぶら蟲

を特におそろしいほどきらひになつたのである。うツかり眠つてゐる時に、人間から見ればずツと小さい物だから、いつ口を這入つて腹へ下りて行くかも受け合はれなかつた。それが而もコレラやペストのばいきんをでもくはへてゐたら、なほ更らのこと！だから、鼻の穴は仕かたがないとしても、口の方を自分はいつも寢る時に習慣として結んでるのだ。

『かけ蒲團は裾の方へ折つて置きますよ』と、あぶら蟲の女中が云つたツけ。が、その裾に三つに折れた蒲團から出てゐる白い敷き布のおもてに、さツきから一つごみか何かが付いてると思つてたのを、ふと、思ひ出して見ると、もう、そこになかつた。して見ると、それも動いて行く物であつたかと氣付いた。

　そツと立つて行つて、先づ、枕の乘つてる敷き蒲團のうへのあたりや左右を調べて見た。それから、その枕もとを上げて見た。それから、また、かけ蒲團はそツとして置いて、その周圍を歩いて見た。最後に、かけ蒲團を右の方へ上げると、果して小さいあぶら蟲が一匹じツとしてゐるのを發見した。『畜生、こいつだ、な』と、思はず自分の口に出した。直ぐおのれのいのちが無いのも知らないで、蟲は寒いのか、矢ツ張り、じツとしてゐる。もう、時節が時節で、他の仲間に置き殘されたものとして、勢ひがないやうであつた。多少はまだ蚊もゐるのに、蚊やり線香でごまかして、もう蚊帳を釣つて呉れない頃だから。ひとへ物にどてら一つでは、溫泉のあツたか味が消えてゐると、もう、多少の

冷え氣味を感じるのだ。

書き棄てになつた紙をまた一枚取つて、明いた袖を左りの手で押さへながら、こわごわ右の手をそツと持つて行かうとすると、蟲は思つたよりも早く敷き蒲團のかげへ隱れた。それを、こちらは蒲團のその部分をうら返すと同時に、うまく、ばたと押さへた。そしてつまみ上げて、紙ごと丸めてまた同じ場所へ挾んだ。が、この具合ひではまた出て來はしないかと云ふおそれに襲はれ出して、考へごとができなくなつた。

『かすみのころも』と、鈴彌が少し目をつぶり加減に歌ひ初めた時、皮肉に見ると、その顏がのツぺら棒に長かつたことを思ひ出してゐた。どうしても、あさつての約束は撤回だ。その代り、あす、三兩ばかりをその子供の爲めにやらう。

時計が遠くの方で鳴り初めたのを數へると、一つ聽き落したのかも知れない、今やツと九時ださうだ。

『馬鹿々々しい』と、獨り言を云つてから、手ぬぐひを肩にかけて今一度湯場へ行つた。すべての書類をかばんに納め、机をわざ〳〵床の間にかたづけ、寢どこを室の眞ン中に出して、その周圍に蟲の隱れるかげなどのないやうにして來たのだ。印度へかせぎに行つた友人が或時とまつた室へ、さそりと云ふ蟲が一匹がさ〳〵と出て來た。幸ひにも、この蟲が步くとがさ〳〵云ふので、人が直ぐ氣が付

くさうだ。これは物のかげでなければひそまぬさうで、若し人がうツかりと氣づかないで近よると、飛び付いて足などを嚙む。人間はそれに嚙まれたら最後、その毒が直ぐからだぢうへまはるので助かりツこがない。さうかと云つて、どうしてうち殺したらいいのか分らなかつたので、うか〳〵手を出すよりもと思つて、寢臺のうへから、ただじツとそれの動かぬやうに見つめてゐた。そして一と夜をそのまま明かしてしまつたと云ふ。

そのさそりと云ふ物はまだ見たこともないが、少しおほ袈裟に云ふと、自分は友人がその蟲に向つたやうにあぶら蟲をもおそれてゐるのである。第一に、貧乏くさいにほひを運んでゐる爲め、第二に、人間の安らかなねむりを腹のそこまで這入つてから驚かすかも知れない爲めだ。

湯につかつてると、それでもいい心持ちになつて、遠く離れたお里のことなどは半ば忘れてゐた。そして二三日でうちへ歸ると直ぐ、あの短刀をお霜まで届けてやらうと考へた。

『親ゆづりの寶刀にて候へば——』馬鹿！あんな物が寶でも何でもあるかい？貰へばたツた二兩か三兩のものだらう。それにしても今更らあんな物を問題にして來たのは、どうしたのだらう。あのかな佛に對する大黑のやうに、ぶしようで意久地のない爲めに、茶飲み友達の隱居やそこの若夫婦にでもまた虐待されてるので、いつかは喉でも突いて死なうなどといよ〳〵思ひ出したのではなからうか？あいつも貧乏ツたらしい婆アさんではあるが、自分が虐待したのを可哀さうだと云へば可哀さうでな

いこともなかつた。それからと云ふもの、あちらこちらをまご付いてばかりゐて、さ。

おやぢやお袋のゐた時代を思ふと、貧乏ほどいやなものはない。それに比べると、こちらは自分ひとりの腕でどうやら斯うやらここまで漕ぎ付けて、こんな溫泉などへも、ちよツくら、らくに來ることができるのだ。さうだ、それにしても、あすは、あの三つ口に三兩拂ふうへに、女中にも二兩は少くともやらないではなるまいか？

『お客さんは何御商賣なの』と聽くから、こちらは、

『なアに、けちなやつ、さ――製圖家の手間取りで、なア』なんて、からかひ半分のことを答へて置いた。酒がもツと飲めると、この宿ぢうを驚かすまでのこともやつて見せるけれども、

『でツぷりと飲むやうなからだ付きをして、案外飲めねいのが傷、さ』と云はれてゐるのが殘念であつた。ずツぷりと全身を湯につけてる氣持ちは、一部分のあツたかみを感ずるとはまた一しほの氣持ちであつた。出るのが惜しいやうで――

『四谷で初めて逢ふたとき』などと、下まち町内のにイさんなら、得意らしい新內でも出さうだ。が、醉ひがさめて來た爲めか、少しねむけを催して來たので、ゆツくりとからだを拭いて大きな鏡のかかつてるところへ出た時、

『もう、おあがりですか』と云つて、さツき流しをして吳れたちんばの湯番頭が出て來た。

『おい、ちよツと待て。』こちらはそれを呼びとめて、縮緬のふくさに包んだ、やわら革の紙入れから、五十錢札を一枚出して渡した。

『ありがたうございます』とお辭儀をしたのが、然し、こちらへ向つてよりも、左りの方へ向いてあたまを下げた。人を馬鹿にしてゐるやうだが、右の足が惡いのだから仕かたがなかつた。

『この溫泉はなか〳〵あツたまつていい、なア』と云ひながら、自分の手ぬぐひを寢卷きの上から一方の肩へかけた。そして、『お休みなさい』と云ふ番頭の聲を後ろに湯場を出た。

離れの二階の方ではまだ一と組の客が三味線や歌で以つて騷いでゐた。氣のせいか、鈴彌がまだゐ殘つてるのかと思つて、岡燒きの憎しみのやうなものをおぼえて、あすの三兩が今から惜しいやうでもあつた。が、それは間違ひなく與へることにして、その代り、いづれ歸宅してから、そのことを少しおほ袈裟に吹聽して、お里を燒かせるのも亦一興だらうと私かに思はれた。

そして長い廊下を戻りながら、部屋々々のささやき聲やひツそり閑を心に聽いて、自分も人間らしい感じを催して來たが、室に這入つて見ると、直ぐまたあぶら蟲の心配に氣を取られた。そして物かげや四方の隅々を念の爲めに調べてから、いよ〳〵寢どこへ身を投げるやうにしてもぐり込んだ。

蚊が時々ぶんと云つて來るけれども、もう、殆ど刺す力がなくなつてるので、この方は左ほど氣にならなかつた。一昨年來た時には白い蚊帳の中に寢かせられたが、この場所には、まだ遊藝師匠なん

かもゐなかつた筈だ。こちらは友人二三名と共に藝者ぐらゐはゐるだらうと云つて、女ツけを誰れもつれないで初めてやつて來たのであつたが、一里半ばかりさきの驛から藝者を人力車で迎へてゐるうちには、みなの酒やめしも濟んでしまうだらうからと云ふことで、そのままになつてしまつたのであつた。師匠はその後になつてできたのだらう。

『然し、これだけはしないでも助かりますから、ね』と、かの女はその隱してゐる身の上ばなしを、ほんの、うは皮だけしたあとで、撥を持つてる手で枕の眞似をして見せた。だから、

『野心があるわけぢやアねいが』と、一と言云つて置いたのだが、實際にさう固いのか知らん。女中にもあとでそれとなく聽いて見ると、

『ころぶとなると、ほかから來る藝者衆に評判が惡くなりますし、うちでもさうなると、お客がへつて困りますから』と云つてゐた。して見ると、却つてそんなのを手に入れて見たいのだが、今夜は兎に角仕かたなしに、こちらは神妙にも久し振りの獨り寢をしなければならぬのであつた。こんな時こそ、赤坂のやつでもひとり連れて來るのであつたのに――氣が利かなかつた。ただお里に對する癇癪ばかりが先きに立つてて！

今ごろは、もう、お里も女中を寢かしたあとだらうから、獨りで考へ直してゐるだらう。よしんば、短刀が初めからこちらの物であつたとしても、それを呉れいと云ふお霜にあんな物をやつたツて、少

しもこちらの身上には關係がないのだ。今回だツて、この仕事がうまく行つたら、一番少く勘定して
も四千や五千は儲かる筈だらう。

けれども、戰爭が初まつて以來、諸費用のかかることには驚かれる。物價が高くなつたと共に、人夫や大工の手間賃も馬鹿にあがつた。それだけ、然し、見積りを多くして置けばいいのだが――

いつのまにかいい氣持ちで眠つてゐたかして、自分の大きないびきが鼻の方をとほつたのでちよツと目がさめた。そのついでに、自分のとこの近處へ蟲が來てゐないかと、左右を見て見た。そとでは、明るい時に見て置いた脊の高い白楊樹がそのえだ葉をさら〳〵云はせてゐるとはまた別に、さアと云つてる音がする。雨が降つてるらしかつた。そのうちに、あま垂れの音も確かめられるやうになつた。が、そんないろ〳〵の音もいい氣持ちにこちらのからだをぐたりと延ばさせてゐた。

『…………』あぶら蟲が口から出入りしたかな佛がまた夢に見えたが、これはいつものことであつて――今夜に限るわけではなかつた。…………

自分は何だか高いところに立つてゐる。その目の下には多くの人夫や土方も――どこかの會社の建て物らしい。無論、煉瓦まがひの西洋造りで、本通りと横町との直角に結び付いたそのかどに向つて見ると、西洋まどが二階にも三階にもいくつも附いてゐる。そしてその上には、また窓附きの塔が直立してゐる。何だ、おれが見積つて建てようとする麹町〇丁目のかどの建て物ではないか？一體、誰

れがおれを出し拔いて建ててしまつたのかと思ふと、その高い塔の上から目がくらんで、からだぢうがじいんと縮み上りながら落ちた。幸ひに無事であつたのは、ただ自分のかた足が他の方の足の立て膝からはづれ落ちたのであつたからだ。が、あまりいい緣起とは云へなかつた。この見積りが入札の時期までに間に合ふにきまつてるけれども、折角の入札をこれまでは失敗するかも知れなかつた。

また、然し、眠つてしまつた……遠くの方に、曾て見たこともない山々があつて、そのふもとの村では、百姓とも付かず町人とも見えぬ人々が澤山ゐるが、皆、いづれもわれ勝ちに勝手放題な方を向いて、男も女も、子供も老人も、お互ひに話をしない。北海道にあると云ふトラピストとかの社會のやうだ。が、それが寧ろ世の中の輕薄な、薄情な、そしてその上にも殘酷なすがただと思つてると、段々に、そツくりそのまま近よつて來た。すると、それが東京の眞ン中のやうでもあつた。そして誰れかひとりが、自分のそれを見物してゐる後ろから、かげのやうに飛んで來て、

『この野郎！貴さまもおれ達を殘酷に苦しめるのか』と云つて、眞ツぱだかでこちらの脊中にすがり付いた。

『待つて呉れ、人違ひだ。おれはそんなことをしたおぼえはねい』と答へたが、實はうそであるので、そのまま逃げようとして橫倒れに倒れた。すると、如何にも氣持ちがいいではないか？自分はすやすやといびきまでかいてゐる。相變らず自分の脊中にとツ付いてる幽靈か、何かを、うツちやつて置い

た。が、そのしッかり抱き付く力を感じて、ふと氣が付くと、

『あなたは定業を返さないではありませんか』と、しがみ付くやうな聲をして一生懸命にお經を讀んでゐる。それがお經の文句だからおそろしい。『定業を返さないでは死んでしまひます。わたしやア定業がないと、わたしの先祖に對して申しわけがありません。』

『やるよ、やるよ。そこ放して呉れ』と、自分も苦しくなつたので同じやうにお經を初めてゐた。そして最後の苦しまぎれに『助けて呉れ』と云つて、左りの腕に力を入れてうんと起き上らうとすると、獨りで自分の胸をしッかりと押さへてゐるのであつた。何だ、夢かと氣をゆるめると、今度はまたい氣持ちがつゞいて――お霜が短刀を取り返すのは、それで自殺の用意ではないかとまで思はれたのに、今や反對に、それがないと先祖に對して死なければならぬと云ふのだ。

それもさうだらう、かの女はもとの武士の家の出だが、ただ傳來の寶を忘れてゐたほど墮落したのに過ぎない。ぶしようで意久地のない爲めにだ。そしてこちらにも嫌はれてしまつた。

『然し、あの痩せ婆々アのからだとしては、力も強く、肉も肥えてゐた』と、不思議になつて、今度は本當に目がさめた。そしてお里のことが今ゐたやうに思ひ出せた。が、實際は、お霜の恨みがお里のからだに化けてやつて來たのではないかとも思はれて、おそろしいやうな感じに打たれた『短刀は必らず返すから、行け、行け』と、枕もとにまだお霜の幽靈でも來てゐるかのやうな思ひであつた。

そこへまたあぶら蟲が氣になつて來たが、もう、あたりにゐないやうであつたから、見て見もしないで安心してまたぐツたりとなつた。お霜は矢ツ張り自殺でもしたいのではないか知らん、然し、もう、出て行つたものがこちらに關係はないと思ひながら。

…………自分は獨りで宴會をしてゐる。客はすべて藝者だ。赤坂で知つてるのもゐる。新橋でのもゐる。よし町のも――そして鈴彌もだ。飮めよ、歌へよで皆がおほ喜びになつてる。『ああ、こりや、こりや』と云ふ聲で自分ながら目をさましたが、自分は今、夢で都々逸を歌つてゐたのであつた。

斯う度々いろんな夢を見ることは、うちにゐてはないことであつた。氣のゆるんでた昔のことはいざ知らずだ。お里を入れてからは、さう馬鹿なことは考へなくなつてゐるのに。

枕のうへから目を上げると、廊下のあま戸のまどがらすから、もう、夜明けのうすびかりがさし込んでゐるのが障子の腰がらすに見えた。が、今から起きても仕やうがないので、また眠る氣になつた。然し、もう、夢を見るなら、お里ばかりのそれを見たかつた。

それから、また、今度はぐツすりと夢もなく眠つてると、ちくりと腕を刺した物がある。自分の左りの腕を半ば蒲團のそとへ出したと、夢うつつで氣が付いた時のことだが、それが疊へ落ちると、直ぐ何かを押さへたに違ひなかつた。南京蟲なら、夜のうちに出るが、夜が明けてはさツさと隱れてし

まうものだからと思ふと、矢ツ張り、例のにきまつてた。

直ぐ飛び起きたのである。すると、果して一匹がまだその場にとどまつてゐた。

『畜生』と云ひながら、卷きたばこの殘りを急いでふり落したあとのから袋で以つて、その蟲を抑へた。それから、わざ〳〵かばんを開らいて鼻紙を出し、それで以つて刺された傷ぐち――と云ツても、あるか無きかのあとだが――を痛いほどつまんで、無理にそこの血をしぼり出した。若しうツちやつて置いた爲めに、貧乏くさいにほひや運命が自分のからだにまはつて、その一部だツてもが乞食坊主の成れの果てなるかな佛のやうに固まつては困るからである。

血を出して兎に角一と先づ安心はしたものの、もう、再びとこに付く氣にはなれなかつた。けふはもう、夜までゐるのもおそろしくなつた。そしてこれをしほに自分の心を落ち付けて、お里のゐるところへ歸りたくなつた。

自分で先づあま戸を明けてると、それを聽きつけたものか、番頭が飛んで來て、

『わたしが明けます』と云つて、そのあとを引き受けて呉れた。が、昨夜、夢に飛んで來て自分に抱き付いた幽靈の力や肥え加減を思ひ出して、けさは、そのおそろしさよりも、お里に對する人間らしい感じばかり催して來た。

便所へ行つてから、湯に這入つた。それから朝の風に吹かれながら、そとを散歩して、それとなく、

ゆうべ聽いて置いた鈴彌の家らしいその前をとほつて見たが、まだひツそりして子供の聲も聽えなかつた。

『もう、二度と再び男なんかはいやよ』などと、あんな堅さうなことを云つてても、實は、旦那があつて、それと一緒にぐツすり寢込んでゐるのではないかと思ふと、ほんの、ただの疑ひではありながら、いやな氣がして、あはい嫉妬までをおぼえた。少しでもやるべきかねがあると云ふかかり合ひから。

一とまはりしてから歸つて來ると、直ぐめしが出た。給仕の女中に向つて、

『たうとうあぶら蟲に一匹刺されたぞ』と云つて、かたぶとりが自慢の腕を出して見せた。そのあとは湯につかつたせいか、もう、殆ど全く消えてゐたが、なほ氣にならないでもなかつた。

『それはお氣の毒さま、ね』と、女中は馬鹿にしたやうな目つきをして答へた。『そんなにあぶら蟲がきらひですか？』

『誰れが好きなものがある？』斯う怒鳴つてから、笑つたが、今度は聲を尋常に和らげて、『そのうちでも、おれは一番あぶら蟲とだらしねい婆々アとはきれひだ。』これには、尤も、かのお霜のしみツたれた姿が見えてゐた。

『どなただツて、然し、女なら一度はお婆アさんになります、わ。』

『だから、きれひ、さ。』
『おや、ぞれぢやア女はつまりません、ね。男だツて、しまひにやアおぢイさんでしように？』
『そのときやア、その時、さ。なアに』と、近ごろ拔いて見た定齒の燒きを思ひ浮べながら、『喉でも突いてくたばつてしまう、さ。』
『おそろしいの、ね。』
『そりやア、人間ツて云ふやつア何をしたツておそろしいものだ。女で云やア、執念は深いし、燒き餅はひどいし』と云つて、冗談半分は、それツ切りにしてしまつた。自分のお里の棚おろしでもしてゐるやうであつたから。けれども、そこにまた、若い血と熱とを感じさせられないでもないのであつた。
食事がすむと、鈴彌を呼んで來るやうに命じた。
『別に支度は入らねいんだ。ただ子供にやるものがあるから』と云つて。すると、かの女が子供と一緒にやつて來て、
『昨晩はありがたう』と坐わつて突き出したその素がほは、ゆふべのとは違つて、餘ほどふけてるやうであつた。頰などにもたて皺が澤山出てゐる。もう三十を越えてるのではないかとも見えた。それに、その三つ口は矢ツ張りこちらだけの冗談やわる口でもないやうだ。が、郵便局員の娘ではないか

と云ふ疑問にまだゆふべからの親しみが殘つてゐたので、自分できめてあつたかねを與へてから、話のついでを利用して、

『あなたは』と、尊敬まで表しながら、『矢ツ張り、ゆふべ云つた人の娘さんでしよう？』

『南槇町のことですか？』

『…………』さうだ、京橋の南槇町にその年うへのきやうだいもあつて、矢ツ張り、後家でとほしてゐて、その總領は、もう、本年中學を出たと云つたツけ。そして姉の方がかの女自身よりも美人で、ずツと若く見える、と。そしてこちらは、私かに、ぢやアそれにも逢つて見ようか知らんと云ふ氣を起したのであつた。けれども、今、自分のゆふべから心當てにしてゐた問ひをさうそらされたのを、矢ツ張り、前以つて用意のとぼけかたをされたのだらうと思ひながら、『おれの云ふのア表町の安井さ。』

『そりやア何かの間違ひでしよう。』

『若しさうなら』と、なほこちらに都合のいい言葉をつづけて、『あなたのおばさんと云ふのに鹽原で會つて、多少の心づけもして來たんだが――』

『…………』そんなことは少しも知らぬと云ふやうすだ。

『ぢやア、違つてるんだらうよ』と、こちらは俄かにきまりが惡くなつたのをぞんざいな言葉に返つ

てまぎらせた。そしてこちらの發見から居どころが分つて、亡父の借金を取りにでも來られたら、困ると思つてるのだらうと推測した。若し正直に白狀して氣が合ふものなら、ちよツとちよツかひを出して見て、當分でも目かけになれば、父の借金ぐらゐは自分が出してやつてもいいと考へてただけに、向ふの水くささを私かにむツとした。そして今度は反對に、かの女の缺點ばかりが大きく見えて來た。

それよりはずツと器量がいいと思ふお里のいろ〳〵な美點に比較してだ。

『友ちやんはこのお部屋へも度々來たことがあるの、ね。お客さんに呼びに來られて』などと云つてる口が、なか〳〵しツかりした年增のやうな聲を出すが、三つ口の上にその口びるが薄ツぺらで、如何にも輕薄さうなところもいやになつた。そして、

『芝居に行つてお前を喜ばせるよりやア、子供を喜ばせた方がいいだらうから』と云ふ口實で、あすの新富座行きを御免被つたかねをさへ無駄であつたやうに考へられた。が、何だ。けち臭いことをと自分で自分ながら思ひ返すと、こいつも矢ツ張りあぶら蟲であつたと見ればいいのだ。ただ人間のうわツ皮をちくりと刺しただけで濟んでしまつた。今や、自分に喰ひ入つてるのは矢張りお里ばかりであつた。

『まだ御滯在でしよう』と、鈴彌が親しみ薄く尋ねたに答へて、

『なアに、もう、直ぐ歸る。例の蟲が氣になつてとまる氣になれねいから、なア。』斯う云つて柏木は

「お里への正直な笑ひみやげが二つできたのを喜んだ。

――(大正八年十一月)――

塩原日記

十月廿七日。晴。急行で午後四時三十分頃に西那須驛に着した。實は、初めてのことで、而も急行は宇都宮より先きは黑磯でなければとまらぬやうに旅行案内には出てゐたので、正直に黑磯までの切符を買つたのだが、車上で人に敎へられて西那須へ下りたのだ。

そこから自動車（乘り合ひ、一人前四圓）で五里半の道を四十五六分で鹽原の福渡りと云ふ溫泉場へ來た。その途々のいい風景は、日が暮れてゐたので、見られなかつた。どこへとまると云ふ當てもなかつたのだが、乘り合はせた老人夫婦も當てて行くと云ふので、一緒にいづみ屋別館へとまることにして、そこで自動車を下りた。團體が來てゐてやかましいが、あすは歸るからと云はれて、僕は老人夫婦のと前以つてきまつてたおもて向き坐敷の隣室へ這入つた。宿帳へは、どこへ行つても、僕は職業を著述家と書くのだが、どう云ふことをするのかと問ひ返されることがあるので、今回はそのうるささの豫想を避けるため、職業の一部分なる小說家を以てしたところ、それを一と目見てから番頭は俄かにほほゑんでじろりと僕の方を見返した。名を知つてたのか、それとも小說家と云ふのが珍ら

しかつたのか、そこはちよツと分らなかつた。やがて再び番頭がやつて來て、
『書き物をなさるなら、ここはごた〳〵してゐまして、お困りでしようから、あすから本館の離れの二階へ御案内致しましようか』と云つた。その代り、寂しくて不便だがとのことであつたが、それはかまはないから、その方が結構だと僕は賴んだ。
湯はすみとほつて修善寺溫泉のそれのやうに綺麗だ。手ぬぐひも染まらないで、ます〳〵白くなると云ふ。僕が修善寺を好きなのもその爲めである。その夜は一杯飮んで直ぐ休むつもりであつたが、食後、隣室の老人に呼ばれて暫らく話をしに行つた。日本橋の藥り問屋の隱居であつた。孫だと云ふ五歲の女の兒をもつれてた。
『あなたなどはまだお若くて結構です、わたしなどは、もう、この通り、あたまも』などと云つたが藥り屋のせいか、なかなか達者さうなおぢいさん、おばアさんであつた。二十年來、いづみ屋のお客ださうだ。向ふとこちらと同じやうに酒は一本と飮めないのであつた。達者なのは、一つには、さう飮まないせいだとおぢいさんは云つてた。西那須驛の自動車立て場の人があまり橫暴で面白くなかつた話も繰り返された。それは僕も不愉快には思つたが、ただ仕かたがなかつたこととして來たのであつたから、今、同感しないではゐられなかつた。貸し切りで十二圓だから、三人が四圓づつはいいとしても、いよ〳〵出發の時に一人ふえたにも拘らず、矢張り、その人からも四圓取つたのだ。そして

『それが當り前です』と、立て場のものらは僕らを乘せてからも怒鳴つてゐた。

十月廿八日。曇。別館は、そのうら廊下から川向ふを見ると前山並びにその左右の青い樹木やこうえふが見える代りに、ごた〳〵と人の往き來がやかましい。で、朝めしをすませると直ぐ、道の向ふがはなる本館の離れへ移つた。そして本館としても、段々高くなつてるその一番奥の建て物の二階を僕が占領することになつた。そこへ行くには長い内廊下や、いくつもの階段や、大きな部屋々々があるけれども、大抵は別館の方で客を受けてしまうかして、殆どがらんどうのやうだ。そのがらんどうの一番奥二階だが、この夏は皇太子殿下附き侍從や武官がゐたさうで、ずツと前にはまた閑院の宮樣もゐられた。また、三島彌吉さんが新婚の宴をひらいた時の室もここであつたとのこと。

あたりの家々の家根をよそに見おろして、青い山や赤い山に向つてゐる。青いのは前山で、澤山の杉がお槍のやうに並んでその絕頂までのしあがつてる。これにはこうえふが比較的に少い。が、それと一つ淺い谷をへだてた山には、その代り、赤や黃や青みがかつた黃やの色で以つて一面の錦が織り出されてゐる。そのうちで、赤いのはもみぢやつつじ、櫻の葉の色で、黃いろいのはカツラ、ナラ、栗などの葉だ。それらを押しなべてこうえふと云つてるのだが、その光りあるけしきは、本年はまだ霜や風がひどくないので、これからまだ暫らく盛りだと云ふ。

ここに三島子爵の別莊があると云へば、妻よ、お前も十日會の會員だから、來月の幹事に當つてる

同氏を思ひ出して親しみを持つだらうが、それは赤い山の方のはづれ（無論、川のこなたであるが、川は音ばかりでこの室からは見えない）に在る。こちらへかぎの手に反つて向ふへひらいてるその方に、そこの庭前のではないかも知れぬが、高い松が一つあつて、左右のこうえふを拔いてゐる。その松や別莊は丁度、恰も赤い山の樹木とつらなつてそのふもとにあるやうに見える。その少しさき（來た道の方）に鳥居戸山のこれも赤、黃こきまぜのこうえふが見えて、その裾に陛下の御用邸がある。（今上陛下は鹽原をおきらひだとか云ふことで、日光へばかりお行きだけれども、皇太子殿下はよくこゝへ來られる。）兎に角、この室から四方をながめると、靜かなもので、火鉢の湯のたぎつてる音がしてゐるあひだに、川の音が始終遠く、そして時々自働車や馬車の發着の響きが松や檜葉や赤い實ばかりになつてる柿の木やの樹かげから、聞えるばかりだ。

『僕のやうな商賣のものがこの宿へ來たことがありますか』と、主人に聽いて見ると、

『大町さんと言ふお方が暫らく御滯在のことがございました』との答へであつた。同件者――と言へば、田中君や松本君だらうが――二三名と來て、大分に酒の飮めるのを見せたらしい。餘ほど驚いてたやうすであつたので、僕は

『今ぢやア、もう、あの人も全くの禁酒をしてゐます』と知らせてやつたら、これにも主人は不思議な顏つきをした。はた折り溫泉場の淸琴樓と云へば、故尾崎紅葉の爲めに有名になつたも同樣で、も

とは小さい宿屋であつたが、他がふさがつてたので斷わられて渠はそこへとまつた。そしてそこの場面をかの『金色夜叉』に書き入れたので、今では評判になつて、多くの人々がきそつてそこへ行くが、そしてその場所では一等の家に廣がつたが、土地の人はいまだに淸琴樓（紅葉がつけたも同樣の名）など云はれても氣が付かないで、何とか屋と元の名でなければ分らないとのことも話にのぼつた。紅葉や大町氏の書いた物が鹽原にも殘つてると云つて、番頭までが僕にも何か書いて欲しいやうすであつたが、僕は例の通り字がへたなので、遠慮して置いた。

午後一時、これから雜誌人間十二月號の爲めの小說を書き初めるのだ。英枝よ、これは日記の一節だから、手もとへ行つても、このまゝ保存して置いて貰ひたい。鹽原は交通が不便な爲め今のところ二度と來るつもりはないから、來た以上、暫らく滯在する。そして『人間』の小說と中央公論へ渡した物の續き四五十枚を書いてしまうあひだに、一度もツと奧の方へ遊びに行つて來るかも知れない。兎に角、轉宿等の知らせが行くまではここへ東京日々だけを每日送つて貰ひたい。大抵の手紙も保留して置いて、誰れから何が來たと云ひさへすればよし。

＊　＊　＊　＊

湯は並んで大小三室にも別れてゐるが、客としては僕ひとりが自由に占領してゐられるやうなものだ。本館には誰れもゐないやうすだ。

十月廿九日。曇。今曉二時まで起きてて、今一度湯にあツたまつてからとこに就いた。けふ、晩食後、別館の老人夫婦を訪問して見たら、

「孫がむづかるので、もう、あす歸らうと思ひますが、自動車は癪にさわりましたから、馬車にしようと思つてます」と云つた。馬車で新鹽原まで行き、それから輕便鐵道の便があるのだ。

『僕も歸る時にはさうするかも知れません』と答へた。然し、旅へ出てゐても腰を据ゑてるあひだは、二度と來るか來ないは考へるが、まだ左ほど歸りのことが苦にならぬものだ。

十月三十日。晴。けさの二時に『子無しの堤』と云ふ、實際に人間らしい小說を五十三枚書き終はつたので、十時に起きて食事をすませると、一と息入れて來るつもりで車上を奧の方へ行つた。福渡りの宿屋が並んでる道を三四丁も行くと、その突き當りに白倉山のふもとなる天狗岩と云ふ大きな石が山にベツたりと廣がつて屹立して、その周圍もみなこうえふだ。

そのけはしいやま裾を左りへ曲つたところに、直ぐ退馬橋がかかつて、川添ひ道が走つてゐる。然し、橋からまた直ぐのところに橫へ左りに渡る橋があつて、そのさきは植竹氏私有の公園だと車夫は說明した。そこにも樹の葉の色に照つてるのが望める。植竹氏の第四子に當る人は東京に出版屋をやつてたこともあつて、僕も直接知らないでもないのだから、この公園の名も多少の新しみがあつた。それをながめながら、川のこなたを進んだ。

『植竹さんだツて、縣下一等の金滿家としても百萬圓はありますまい。それに、内田信也と云ふ人はただ栃木縣に生まれたと云ふばかりで高等學校建設の爲めに百萬圓を寄附したと云ふのですから、土地のものは皆呆れたほど驚いてをります』と云つた宿の主人の言葉を思ひ出しながら。

退馬橋から三四丁來たところに、鹽釜と云ふ宿場があつて、そこの鹽原郵便局で人間社宛ての原稿の書き留め郵便を出した。また二三丁で（この邊はさう人の目に見えないでのぼり道になつてるが）福渡りの宿々の內湯へ引いた湯の出もとのあるところへ來た。この邊の川ぷちから見返ると、白倉山の後ろ手が、そこも岩だらけのあひだにこうえふしてゐるのが見える。そこから眞ツ直ぐに、また、自動車みちを三丁ばかりで有名な清琴樓もある溫泉場を、廣い河原を隔てて、高みの路傍から見た。が、はた折りの位置は周圍の山々が少し遠くひらけてゐて、そのながめは廣い河原を渡つてこちらがはの山々のはにかみ笑ひを見るに在るばかりらしい。そこへ立ち寄つて一泊しようかとも考へたのを、それが爲めに直ぐ引ツ返した。

『そりやア、鹽の湯よりもここのけしきの方がいいでしよう――鹽の湯は山と山とのあひだですから、ながめが窮屈です』と、車夫に云はれたけれども、一方では、いづみ屋の番頭から、

『何と云つても鹽原のけしきは鹽の湯が一等ですから』とも聽いてゐた。そして僕もこの方が一泊するに足りさうだと云ふ豫想にうち勝たれた。

その當時は壓制家と云はれて縣下のひらけない人民と死を以つて爭つたやうなものだが、もとの三島知事の思ひ切つた道路開拓は今となつてはなか〳〵爲めになつてる。この鹽原の奥をもツと奥までも自動車がとほるのだ。が、内湯の出もとにかかつてる橋を渡ると、川の支流をさかのぼることになるのだが、ここの道は三島道路ではなく、お兼みちと云つて、鹽の湯のお兼と云ふ婆アさんが自分一個で切りひらいた道だ。狹くなつて、而も隨分ひどい坂があるので、自動車は通じない。慣れた車夫は、然し、どうやら斯うやら十丁の道をのぼりつめた。僕よりも一と足さきであつた中年の夫婦づれは、づるい車夫の爲めに、車をおろされたけれども。

『鹽原は一體に坂みちですから、のぼりの時はからだが延びさうになるし、下だりにはまた腕が拔けさうで――』先般、東京から稼ぎに來た車夫は三名とも一週間とこたへられないで引き上げてしまつたさうだ。

お兼みちの初まりは兩がはに植ゑ付けたやうな杉と檜の木とで大抵のながめはふさがれてるが、反の中腹からながめがまた下の方へひらけて、坂の上へ來ると、天狗岩の横手までが高みからずツと見渡された。そこに鹽の湯の大きな宿屋がたツた三軒だけあるのだ。茗荷屋と云ふのが客でふさがつてたので、玉屋と云ふのにあがつた。車は七十錢取つた。宿は一泊貳圓で中等のところだ。

僕に當つた三階の一室の正面には、川を隔てて一とかたまりの杉の森がその腰から以上を見せてゐ

る。が、その後ろうわ手も靑と赤相ひ半ばの景だ。そして緣がはへ出ると、目の下にうづもれたこうえふのあひだを右から左りへと十間はばばかりの川水が白く音を立てて流れてゐる。その上流と下流とからうへへそり返つて黃、赤、べに等のいろづき葉が、松その他の針葉樹の靑葉と入りまじつて、橫へ四つに重なつた山々の絕頂まで一面につらなり渡つてる。隨分大きいと云へば大きい景だ。そしてその全景を引き締める爲めのやうに、例の杉の森が一番こちらへ近く、僕の目の前に立つてゐる。無論、その眞ツ下の崖にもこうえふはいち面だ。つまり、ながめのそらからも、またその目の下からも。赤い照らしが滿ちて來て、それを眞ン中に針葉樹の靑さが一層に引き立ててゐる。

稿渡りのは——僕の占領してゐる場所からは別だが——かの川添ひの部屋々々から見ると、こう葉をこう葉の中から見るやうな景だ。が、ここのはそれを近く見おろし、遠く見渡すのである。近く迫つた方だけで云へば、北海道のこうえふの一名所神居古潭の景に似てゐて、ただ面白い釣り橋がないばかりだ。が、また、かの釣り橋の代りに、僕らの倚る高どのの欄干がある。そして下を見おろすと目がくらむほどだ。

晚食にはまだ二時間ばかりあるので、以上けふの日記をお前へ出しかたがた、そとへ出て、もツとさきの方の道へと狹い芝ばしを渡つて進むと、行く手の川ぷちに少し平らかな廣ろ場が見えて、植ゑ付けたやうに紅葉樹の幹が立ち並んで、多くの幹と幹とのあひだがこれも赤さうな太陽のよこ照らし

に向ふのそらを透かし彫りにしてゐる。來たついでにそこまで行き付くと、入り口に梅ケ岡と云ふ立て札がしてあつた。その中で僕の丁度一と部屋置いて隣りにゐ合はせた中年者夫婦が一緒に寫眞を取らせてゐたのを少し隔ててながめながら行くと、向ふの方から何だか見たやうな人がにこ〳〵してやつて來るのではないか？

お前は誰れだツたと思ふ？　婦人作家の〇〇さんなら、近ごろここへ來てゐるとか新聞にあつたから、ひよツとすると出會ふかも知れないとは思つてたが、小寺健吉氏とは僕も思ひも寄らなかつた。繪に適する位置を方々探してゐたらしい。而も同じ旅館の四階に來てゐるのであつた。渠は毎年來るのだが、

『去年の今ごろは、もう、こうえふが半ば以上過ぎてゐたが』とのことだ。暫らく一緒に崖のそばの腰かけに休んだが、僕らの目の前に紅葉して崖の中腹からかしらを出してる二本の特別な樹は、二本とも、葉の大きい、きざみの淺いイタャもみぢのやうであつた。

宿へ歸つてから、渠に聖目を置かせて碁を七八番ばかり打つて、一緒に食事をした。そして互ひに別室へ別れてから、僕は中央公論の續きを書き初めて、午前の一時半まで起きてた。川水の遠い音にまじつて、雨がさアと降つてゐるのが近く聽えた。

十月三十一日。起きて見たら、赤い山々にまだ少し雨が降りつつあつた。然し靄がかかつてゐない

ので、樹々の色がしめやかに一しほつやを帶びて見えた。小寺氏と共に廊下の倚子によつてながめてゐたが、渠はこの景の一番右手を、川のこちらがはの一番近く特別に眞ツ赤になつてるもみぢの大樹を取り入れて畫にしてゐるとのことであつた。

川の水を勝手へ引き上げる爲めとして、やぐらのやうに高い仕かけができてゐて、トタンの小さいコップやうの物がいくつも鎖りにつながれて下からうへへ回轉してゐる。そしてその上から一つの細い管が出て勝手まで走つてる。それを見つめてゐる時は、まだしも目がくらまないで話をしてゐられた。が、それからちよツとでも目を放す度毎に、僕は欄干からそとへほうり出されでもする時のことが豫想されて、腹のそこまでが目まひを感じた。そして、からだがぞツとさせられるのであつた。それを小寺氏は僕が、もう、話をいやになつたと見せたかのやうに思ひ取つたらしかつた。日光で華嚴の瀧を見てゐてもやがて目がくらむのをおぼえたので、その下の方へは獨りで下りて行くことができなかつた程のたちに生れ付いてるのだが――。

車が出切つて一臺もないので、いづみ屋へ電話をかけて一臺、福渡りから上げて貰はうとしたが、そこにもけふは天長節の人出の爲め餘裕がなかつた。止むを得ず、歩いて山を下だることにして、一英國人を加へた三人づれと一緒に宿を出た。坂道の上から白倉山の天狗岩のよこ手を正面に見渡すところは、こうえふも矢張り一面に見ごたへがあつた。ゆふべ、あんまの笛をきいたが、

『目くらで以て鹽釜から毎晩十五六丁をあの坂みちまでも獨りで探つてのぼつて來るのだから、えらいものだ』と、湯場で云つてたものがあつた。湯場と云へば、福渡りでも川ぷちにある五六ケ所の共同湯並びに川向ふの岩の湯は、自然に湧き出たままをたたへてあるのだが、鹽の湯でもまた川の水面と殆ど水準を等しくしたところのは、內廊下の傾斜を百段も下りて行かねばならぬ代りに、岩のほらに湧いてるままのもあつた。そして上の方の內湯はみなそこから引き上げるのだ。

福渡りへ行つてるうち湯のもとまで下りると、橋を渡つて、僕は他のものに別れ、自動車みちをかみへ左りに曲つた。そしてはた折りを過ぎて、今一つさきの名所門前や古町まで、橋から八丁ばかり來た。蓬萊橋と云ふのがかかつてるその向ふたもとなる米屋と云ふ旅館で一と休みして車を命じようとすると、丁度中食時で部屋が明いてゐないと云ふし、車も亦五六臺あつたが乘せて來た客を待つてるのであつた。そこの家につづいてその三階家根よりも低い瀧が川へ落ちてるのを見ながら、橋の上に立つと、周圍がずツとひらけたながめで、遠く山々のこうえふだが、ここは別に取り立てて云へる風景でもなかつた。で、またはた折りまで立ち返つた。

例の清琴樓を中心として見た景は、後ろの山を切りひらいて畑が段々に疊みあがつてるのとも聯想されてだらうが、小じんまりと造つた田園の箱庭的をそツくり押し廣げたやうなものだ。廣い河原の左右に盛りあがつた二つの山が一番近く色づいてるのだ。綺麗なことは綺麗だけれども、規模が小さ

い。して見ると、鹽原の紅葉と云へば、どうしても矢ッ張り鹽の湯に限つてるのだらうか？　それが、然し、大ではあるが、僕のむかしの記憶にして間違ひなくば、まだ京都高尾の奇や江州永源寺の勝には及ばないやうに思はれる。また、北海道十勝原野の雄大には。

とう／＼また徒歩の止むなきに至つたが、歸り途では矢ッ張り白倉山の裾から植竹公園に渡つて、河中に何とか岩と云ふのが他の赤や針葉樹の靑に對して白く空氣にさらされてるところの景がよかつた。曇りではあつたが、幸ひに、雨には會はないですんだ。そして自分はこうえふの色に光りを浴びてたせいか、少しも曇りのうす暗さを感じないでしまつた。

いづみ屋に歸つてから、念の爲めに川添ひの部屋々々の廊下へ行つて見た。流れの向ふに見える山山の景色はあまりに低く接近してゐるやうで、蓋し家や軒に狹められて、優雅なばかりだ。そして軒近くに紅葉してゐるのは僅かの山櫻ばかりであるのに氣が付いた。それから、もとのながめ廣い室に立ち戾つて、山々を見直して見ると、僕が比較的に靑いと思つた前山、赤いと思つた一階山、その次ぎの鳥居戸、それからそのまた少し後ろでずッと左りへ寄つて富士がたちをしてゐる根本山、一番左りに近く家の後方からその一端を迫らせてゐる裏山、すべてかかる山々とその色ある景とに、鹽の湯あたりよりは荒ッぽくない感じが廣がつた。これは、僅かのだが、人家の家根が段々と里いもや大根の畑になつて、正面に一番遠く御用邸の家根までつゞいてるのに調和した爲めでもあらう。また、家の

後ろになつてる裏山と白倉山も、廊下をまわつて行けばよく見えた。きのふ見たとはまた少し違つて、白倉山の絶頂には、ゆふべの雨でだらう、葉の落ちた枝々が一しほ白くなつて日に立つた。『盛りと申すものは過ぎ易くて、な』と、宿の主人はけふの挨拶に來て云つた。渠には鹽原のこうえふだけのことであつたらうが、人生には盛りの過ぎ易くないものは一つとしてないのだ。無邪氣な子供の可愛ざかり――瑞々した女の盛り――男の人氣ざかり――希臘の文化――佛蘭西の流行――米國の正義人道――日本の武士道――。すべて、花や葉は過ぎ行いてまた新らしくなればいいのだが、根に歸ることがその根本から過ぎ去つては困るのだ。そこに、僕らも人類だからと云つて外國人の議論や眞似をそツくりはできない所以の論據が潜んでることを知らねばならぬ。

よく聽いて見ると、このあたりのは、黄いろがかつたのがカツラ、栗、ホウの木、ソネ、クヌギ、カシワ、ナラなどの葉で、赤い方へ變はるのがサクラ、桐の葉のやうに早く落ちるノデボウ、野州に多い野州つつじ、それに本當のもみぢだ。が、この邊のもみぢにはイタヤがその半ばを占めてゐて、そのこうえふが――北海道に於けるが如く――一番後れるさうだ。根本山の中腹からいただきにかけてどす赤く見えるのは、野州つつじが多い爲めだとのこと。二三日前から見ると、多くの樹々がここにもまたずツと葉を散らしたかして、白い枝や幹を遠く露出させてゐて、それがまた別なけしきとして綺麗だ。

一階山と鳥居戸とのあひだに、遠くて雲に見えないが、里前山と云ふのがあつて、そこのいただきにのぼらなければ西那須その他の人ざとは見えないと云ふに徵して見ても、僕らの隨分山深く這入つてゐるのが分つた。だから、一ときでも仕事をやめてると、何となく寂しく、人戀しくなつて、自然に繪ハガキを書いて子供にも出したくなる。『林間に酒をあたためてこうえふを焚く』と云ふ『もみぢ狩り』の句をあしらつた鬼の面に撞木の繪など、まことにふる臭い意匠だが、花は散りても根に歸ると云ふ心持ちで流行と不易とを（別々な概念にしないで）合致的に見れば、毎年多くの人々に見ふるされて行く景も、たとへば誰れでも持つてる同じ人情の變化の力と同樣、僕らにはまたいつも新らしいものだ。そして子供が笑ふやうに、山ももみぢもまた同じやうに笑つてるよ。

九州日報からの手紙がまわつて來た。小說依賴の件だが稿料が安過ぎるやうだから、一應交涉の返事を出した。けふはここへ登つて來るまでにある見返り橋の曲りで馬車が谷へころげ落ち、女や名ある人とその兄弟が手やあたまを怪我したが、死人はなかつたさうだ。小田原から熱海へ行く輕便や自動車のやうに、この邊でも自動車のかよひ初めにそれが同じ途中で落ちたことがあつたし、昨年はまた、定員以上をのせた馬車のかじ棒が折れて、御者臺に乘つてた女學生が三名、退馬橋のわきからころげ落ち、一名は即死、二名はおほ怪我をしたさうだ。勝景の地には兎角さう云ふ危險が伴ふ。

十一月一日。晴。氣候が俄かに變はつたやうだ。朝十時に、手のさきがひや／＼して、火にあぶら

ねばならぬほど周圍が寒い。風もゆふべから少しひどい。ながめいいけしきを塞いで、障子を締めた。僕は十疊敷きの仕事部屋のほかに、隣室の八疊を寢室に當てられてるのだ。こちらの廊下と直角に前山の方へ出張つた室へ、きのふから、年の若い丸髷の婦人が來てゐる。

『どう云ふ人?』

『畫かきでしよう』と、一名の女中が答へた。が、他のに聽いて見ると、畫かきはおととひ歸つた人だ。それなら、然し、兩方とも間違ひで――おととひのも畫家ではなく、鐵道院の囑托とかの地圖かきで、さきおととひの晩に來て、おととひの朝四時に出發して、奥の方へあがつて行つた。

『若いのに獨りでよく來ました、ね』と、あとの小さい女中が感心してゐるので、僕は冗談半分に、『ぢやア、おさし支へなければお話にいらツしやいて云つて御覽』と云つた。若し來たら、毎日へただが運動代りにやつてる僕の謠ひの聽き手にでもしようと思つたのだ。が、來ないで、ただその室を廊下へ出たり這入つたりして、人待ちがほであつた。『きツと、あとから旦那か色をとこが來るにきまつてるよ。』

果してゆふべ到着すべき者がけさの六時に來てゐた。

『女中に來てとまつて貰つたらよかつたのだ』と云つてる男の聲に、僕はふと目をさました。そして直ぐ、女は僕を警戒の目あてにして眠られなかつたのではないか知らんと云ふことに僕の氣が付いた。

それから、一層僕は氣をまわして、女が若し男の機嫌をどんなうそを云つてでも取つて置く方がいいやうな種類の者であつたら、夜ぢう僕につけ狙らはれてゐたからとでも語つてゐたのではなかつたかと考へられた。僕は、然し、ゆふべも二時まで仕事をして、それからまた湯に這入つて褥に就いたので、再びいい心持ちで朝の眠りに這入つて、いつも通り九時ごろに起きた。そして齒みがき楊子を使ひながら、湯に行く時、したの廊下でその男らしいのに出會つたので、ちよツと聲をかけようかと思つた。丁度、お前と僕とのやうに夫婦としては年が大分に違つてゐるらしかつた。その上、僕には長い髪にまだしらがはないが、向ふは半白の五分刈りであつた。それが何だか僕をにらみ詰めてたので、失敬なやつだと思ひ直して、僕は默つてとほり過ぎてしまつた。が、女中の話によると、その男がけさの三時に西那須驛へ着したので、輕便鐵道は勿論のこと、自動車や人車もなかつた。そして月夜だとは云ひながら、五里半の路をてく〳〵歩いて、而もたツた三時間でここへ到着したのださうだ。大切なものがさきへ來てゐなかつたら、無論、そんな奮發はしなかつただらう。

十一月二日。晴。きのふの男女は僕が起きた時には、もう、出發してしまつてた。僕は『賓子の放逐』の最後五十三枚を中央公論に郵送する爲め、車に乘つて鹽釜まで行く途中、天狗岩の上あたりがまた一層しらがのやうに樹々の枝が露出して來たのを見た。退馬ばしの橋けたへ昨年の馬車がぶつかつたそのあとの附いてるのをも、車夫は車上の僕に示めして教へて呉れた。差し出し人が有賀長雄と

なつてる支那流封筒の手紙を足のよぼ〳〵した老人が杖によつて持つて來たのに、僕は郵便局で出會つたが、その人が本人であるかどうかは分らなかつた。

十一月三日。晴。別な小説を書き初めたが、こないだぢうからの重なつた奮發で少し勞れをおぼえたので、夜中に一杯を命じて、いつもより早く休むことにした。このひるま、主人が伺ひに來た時、このあたりで蜜蜂を飼へば、きツと成功するだらうからと、養蜂の大要を教へてやつた。すると、主人は、時によると、この町のうへをひどい音をさせて、蜂の大群が飛んで來ることがあると云つた。別館で僕を世話した女中がけふ訪ねて來て、この十日頃にはここを引き上げてまた熱海へ行くと云つた。斯う云ふ種類の女中は渡り鳥も同樣で、暑い時は斯う云ふ土地へ來たり、寒くなると必要がなくなるので、これから必要のあるあツたかい方へ行くのだ。

十一月四日。曇。きのふけふがまた穩やかなので、西向きなる低い前山や一階山のこうえふはまだ可なり持ちこたへてゐる。が、兎に角、高い山々のいただきの方から段々に赤い色は禿げて行くのである。

雄辯新年號の小説『あぶら蟲』を四十三枚書き終へた。

十一月五日。晴。おとゝひから僕は――さきの女とは反對に――妻の來ると云つて來たのを待つてゐたのだが、子供が少し病氣でもあるし、さう危險なところでは獨りで行きづらいと云ふ知らせが來

た。で、大分に飽きが來てゐた僕は俄かに思ひ立つて、午前の十一時に出發。自動車も人車も出切つてたので、乘り合ひ馬車に乘つた。

來た時には夜で見えなかつた景を見て行くと、見える限り、どこもかしこも、恐らく鹽の湯以上の雄大な景ばかりであるのに驚かれた。そして僕は大切な拾ひ物をしたことに氣が付いた。僕は鹽原を多少馬鹿にして歸るところであつた。が、歸り途で初めて利口に目がさめた。そして來がけに乘り合はせた老人の

『福渡りへ行くまでの途が見ものですが、な』と云つた言葉をも確かに思ひ起して、今乘り合ひになつてる老婆や若い紳士夫婦の段々この景に對する別れを惜しむ意味が僕には同感であつた。僕らはこうえふに光る山々の大きな景に浸りつつ、したに深い谷川の音がする高い崖の中腹を驅けてゐるのであつた。殊に、その流れに材木岩と云ふ大きな岩が露出して、その下流に稚兒が淵を臨むあたりから、右手の山々を見上げると、どす赤い野州つつじだらけが空にのぼつて行つて、その下にはまた他の樹樹のこうえふが赤にも黄いにも變化した絕景だ。そして魚どめ橋、さかへ橋、猿岩ばし、その他の橋があるところには、必らずまたその左り手に大小の瀑布がある。九回瀑、冷々瀑など。それから、一旦、がけ下から生えあがつたモミなどの大木のうすら暗い林に僕らの目はさへ切られた。が、石安戸橋を過ぎて見返り橋へ出ると、今度は僕らの通過した谷々と左右の山々とのもみぢ照らしが、近く遠

く重なり合つて、恰もどこまでもの如く奥深く返り見られた。そしてこのところで鹽原全體の風景を總勘定せしめた。

さうだ、この總勘定によると、京都高尾の奇も、永源寺の勝も、まるでちツぽけになつて、これに對照されるのはただ十勝高原のこうえふばかりである。一は深い山の、そして他は高い平野の、雄にして大なるものだ。

西那須行き輕便汽車を新鹽原へ出て待つてる時、柿や蜜柑を賣つてるたツた一軒の百姓家に、雉と山鳥とを一羽づつつるしてあるのを發見した。他の紳士が山鳥の方（をす）を二圓五十錢で約束したので、僕は雉（めす）を一圓五十錢で買つた。が、那須驛へ來て見ると、雉のをすでも一圓五六十錢で買へるのであつた。兎に角、歸京すると直ぐ、自分で料理するのを樂しみに汽車を待つてると、どこかの事務員のやうな黑服をつけた者が僕らの待ち合ひ所へやつて來た。杖を突いてあたりを探つてるところでは、確かにそれだと見えたので、僕は

『お前さんは笛を吹いて鹽の湯へも稼ぎに行つたあんまさんだ、ね』と、出しぬけにだが聽いて見た。

『えい、さうですよ。もう、お歸りですか』と、渠は僕を渠のお客さんであつたかのやうに受けて、目くらとしては圖々し過ぎるほどの挨拶であつた。『わたしも引き上げて來ました。』暫らくあつてか

ら、また、僕の方をにほひで嗅ぎ付けるやうにして、『折角のこうえふも、もう、過ぎました、な。』

『…………』なあに、渠に過ぎてしまつたのは鹽原に於ける稼ぎ時のことばかりの筈だ――。

――（大正八年十一月）――

おせいの平生

『…………』おせいは田口に離婚されても、子供と共に同家の先祖代々のお位牌を預つてゐた。そしてこの家を持ちこたへてゐる以上は、いつか知ら自分のうわきなをつとは――若い女に棄てられるか、またはその女をいやになるかして――再びここへあと戻りして來るに違ひないと秘かに考へてゐるのだ。が、然し、おもて向きでは、をつとの田口に對する恨と憎しみばかりが先きに立つて、子供に向つてでも、『お前のお父アんは馬鹿で――薄情で――』と云ふやうなことを云ひつづけた。

尤も、これは田口が今の女をでなく、まだわけも分らない目かけを持つてそれに入りびたりになつてた時からのことであつた。そしてそれとも別れて、いよいよこちらを離婚して、いいお寺の生まれとして多少は素性もいい今のお粂と云ふ女と結婚した時には、〇〇と云ふ田口の雅號は新聞の上にも有名になつて、

『〇〇と粂子と現代式だ、ね』と云ふ、こちらから見れば馬鹿々々しいそして嫉ましいはやり唄まで

が出た。それを芝の公園で歌ひ賣りしてゐる書生があると聽いて、半ば物好きも手傳つてだが、總領の文子に、
『行つて見ようぢやアないか、え』と云ふと、文子は
『恥かしいから、いやだ、わ』と答へて。
『ぢやア、雄ちやん、どう？』
『僕もいやだア。』
『ぢやア、政ちやんはいい子だから行かう、ね』と、末ッ子の政直をつれて出やうとすると、文子は
『何も分らない子にまでそんなことを見せないでもいい、わ。』
『なアに、却つてこれからの見せしめになつていいぢやないか？』
『だッて』と、文子はます〳〵怒つて、『見ッともないぢやありませんか？』
『誰れもうちのお父アんのことですとア云やアしないよ。それとなく見て來りやいいんだから、ね』
芝園橋へ寄つたところのひろ場でベースボールをやつてゐた。その近處の梅ばやしのそばで、果してその唄を大きな聲で呼び賣りしてゐた。『あれだよ、お前、よく聽いてて御覽』と、小さい聲で云つて、かの女はそれとなく立ちどまつてると、ひとりふたり買つてるのもあつて、そのものらをまで嫉ましくなつた。そしていや氣になつて歸つて來てから、『それこそお父アんの方が見ッともないぢやアない

か、ね、あんな唄にまで歌はれて――馬鹿で――薄情で？』

それがまたいつのまにか口ぐせになつて、子供に向つてばかりでなく、親戚や知り合ひの人にも及び、遂にはまたあかの他人からちよツとでも同情の言葉を得ると、直ぐ自分の味かたに思ひ取つて、『田口は實に薄情な男ですから、ね』と云ふやうなことを訴へた。そしてその人がます〳〵これに同情して呉れると、却つてそれを田口その人であるかのやうにして勢ひづいた不平を以つてその人に突ツかかつて行つた。

そしてそんなことは自分として當り前のことで、別に異狀な精神になつてるのでアはないと思つた。だのに、文子はこちらのことをうそでも云つてるもののやうに聽き取つて、意見がましくも、

『おツ母さん、何も目の色變へてまでお父アんのことをわざわざ見ず知らずの人にまで惡く云はないでもいいぢやアありませんか』などと云つた。『見ツともないぢやアございませんか――おツ母さんこそ馬鹿か、氣違ひのやうに見えて？』

『何が氣違ひです？　おツ母さんはこれでも獨りの腕で正直にお前たちを育ててゐるんです』と、かの女は叱り付けた。それには、然し、少からずきまりの惡いことが一つないでもなかつた。自分は曾てをつとの一年以上も薩張り歸宅せぬに對する餘りの不平と侘しさがこんぐらかつて、ふとしたことから、下宿人のひとりを好きになつて、炬燵のある部屋へ引き入れた。それを、眠つてたと思へた文子

が知つてゐて、小さいくせに利口であつたから大變怒り、こつそりその父の兄弟のところへ行つてう
ち明けた。あとではそんなことを取り消させるやうにしたけれども、そして文子もおもて向きそれは
思ひ違ひであつたと云ふことは承知したけれども、そのことを一つの有力な理由にされて、とう〳〵
田口の望み通りに離婚となつてしまつたのだ。そしてさうしたことを思つても、多少わけの分つて來
た娘には、わざとにも『おツ母さんは正直一方だから、ね』を押し付けずにはゐられなかつた。
をんな獨りでは營業がうまく行かないので、この方では、然し、隨分不正直なやうなことも企てて
見た。下宿人と關係ができた時も、一つにはそれから多少のかねを出させようとしたのだ。それは然
し不正直と云へば云へるが、家の爲めを思ふ一つの手であつたから、家の爲めには正直な企てだと云
つて貰はなくてはならなかつた。その證據には、田口の友人で、友人としては年もずツとうへな爲め
に、なか〳〵喰へないところがある隱居ぢぢイの山崎さんが、何度も酒に醉つて來て、色仕掛けでこ
ちらを落し入れて家を乘ツ取らうとした時も、こちらは初めから感づいてゐたので、決してその手に
はかからなかつたではないか?
『どうせわたしは獨り者だから、隅の部屋でも一つ與へられて、身のまわりの世話さへして貰へばい
いので――その代り、家の修繕費や營業費は出すわけです』などと云つた。
『然し、田口がどうせ承知しないでしようから、ね』と、わざと恥ぢまでかかせてやつたのである。

その後、都合のいい人があつて、抵當の利子や地代や營業税をも引き受けて、こちらへ別に家賃を毎月三十圓拂つて貰ふことになつたので、おせいは子供三人と共に櫻川町を引ツ越して、巴町へ借家した。そして文子が小學校を卒業したのをしほに、近處の人の世話を以つてかの女を遞信省の雇ひに入れたので、向ふの家賃と文子の月給と田口から毎月の約束で來るかねとで、月に五十圓ばかりは這入つて、親子はじツとしてゐても先づ喰べて行ける勘定であつた。が、下宿屋から這入る家賃がしぶり勝ちになつて、その上に地代や營業税までこちらへ直接に催促しに來られた。自分は親戚へ行つてかねを借りたり、自分の持ち物を質に入れて足し前をしたりした。そして營業代理者に立ち退きを命じたけれども、二ケ月、一ケ月、また半月と出ししぶつてるので、裁判所へ訴へ出た。

その騷ぎの最中に、少し利口過ぎると思つてた文子が十六歳をいちごに肺炎で突然死んでしまつた。『フミキノフケフキトク』と云ふ電報を打つたのだが、どうせ薄情な田口の來よう筈はなかつた。十圓の電報がわせがそれでも僅かに間に合つたので、『お父アんから今このおかねが届きましたよ』と知らせると、病人はさうかと云ふことを
『ほう』とたわいもなく答へて、にツこりしたのが最後であつた。可哀さうに、電報を打つたと聽いて、若しや父が來はしないかと心待ちに待つてたのだ。が、『どうせお父アんはおツ母さんを見るのがいやなのだから』とは、不斷から云つて、あきらめてもゐたやうだ。

『………』こちらは、かの女がおとなの人情を多少でも知つてただけ父の方へ心を傾けてるのを悄らしくもあつた。世間の交際も上手であつたので、いろんな人から病氣見舞ひやら香奠やらが來て、思はぬ臨時收入ができた上に、子供としては感心にも勤務に忠實であつたと云ふので、うわ役の周旋により、破天荒の特典だと云つて四十圓の追弔金が下りた。それを不時の收入としてその日に直ぐ、他の香奠と共に郵便局へ預けて來た。そしてそのから包ばかりを子供の靈前へ供へて置いた。

　葬式は追弔金を貰ふことの爲めに一日延ばして、午後の二時となつてゐた。が、その朝になつておせいの考へでは、盡ま葬式を出すと、多少でも見えを張らなければならぬので、それだけ物入りであつた。折角できて、きのふ預けたかねをまた引き出すのは惜しかつた。ぶつつけに青山へ行く時には少し義理が惡いけれども、どうも役所の人々だらうから、二度と顏を合はせるには及ばないものばかりであつた。

　斯う考へて、葬列や坊さんをも斷わり、夜に入つてから、人夫二人に棺をかつがせて、自分だけがついて行つた。すると、田口家に屬する茶屋のおかみさんが『先刻、七八名のかたが待つてをられましたが、あまりおそいのでお歸りになりました。』

『さうでしよう』と、こちらは平氣で答へた、わざと延ばしたのだとは云はないで『いろんなことがあつて、時間が延びたものだから。』そしてこのいろんなことのうちには、田口が手つだひに來ない不

平や、今の家主からの香奠料が少なかつた怒りや、久しぶりで郵便局へ預けたかねをまた櫻川町の家の爲につぎ込まなければならぬやうになりはしないかと云ふ心配なども數へてゐた。

死者の籍は、もう、幸田の家に養女として這入つてたのだが、田口家の墓地へ速急のことだから無斷で割り込ませることにしてあつた。茶屋の方では、無論、これまでの關係上、遠つた家のものとは知らう筈がなかつた。文子を埋めたその隣りには、長女の淸子と長男の秋雄と三男の讓とが別々に埋まつてるのだ。そして、今は夜だから、向ふの森にかかつてる鎌がたちの月はあつても、目さきが暗くつてよく讀み返せないが、長女の小さい墓石には、自分のその時作つた俳句『永き夜を稚きものの獨り旅』と云ふのが彫り付けてあるのである。それを俄かに思ひ出せても、今のわさ〳〵してゐる心にはそのもとのやうな、靜かにあはれな感情が浮ばなかつた。いや、新たにできた墓に向つても、これ田口の薄情に對する恨みばかりが先きに立つて、素直な涙の出ないのをおぼえた。何だツても、これだけの子供を生ませてまた死なせて置きながら、人を『婆々アくさい』とか、『ヒステリづら』とか云つて、とう〳〵ぶツ放してしまつた。『…………』抵當入りの家を渡してこれだけ苦勞させれば、誰れだつて皺くちやにもならう。ヒステリにも落ちよう。正直なものには――自分もさう云へるつもりだから――それが却つて當り前のことではないか？こんなに苦勞や心配を重ねてゐたら、世間の義理や人情もできるだけ切り詰めて行かねばならぬことを考

ゝてゐた。
口の前にゐる人夫には約束通り、そして茶屋へは穴掘り料と別に二三十錢とを與へれば、あとは香奠返しなどもしないつもりであつた。そして文子の一番親しい友達として弔金の爲に度々足を運んで呉れた子などには、どうせお互ひに子供のことだから、別にお禮はしないでもよからうと獨りぎめにしてゐた。

歸つて見ると、留守居をさせて置いた子供のうち政直はまだ小さいのでごろ寢をしてたわいもなかつたが、雄作の方は蠟燭のともつた机の上の姉の位牌に向つて目を泣き腫らしてゐた。これを見て、子供ながら感心にと思ふと、おせいは自分も俄かに寂しい悲しみに打たれた。そして自分の手もとにあつて、近しく何かと云へば小ごとの相手となるもののひとりが――而も自分のあと取りとして心だのみにしたものが――無くなつたのであると云ふことを、ここに、初めてしみじみと感じられた。

がツかりして、死んだ子供が使つてた机の前に坐わると、新らしい線香を二三本立て添へてやつて、かの女が父のやうに小說家になると云つてたことなど思ひ出しながら、

『おツ母さんはまだ文ちやんがゐなくなつたとは思へないが、ね』と、雄作に言葉をかけた。『まだお役所へ　も行つて直き歸つて來るやうで――』

『…………』雄作は別に返事をしなかつた。が、多分、姉の生きてゐるあひだを、あんなにいぢめた

り、喧嘩をしたりしなかつたらよかつたとでも後悔してゐたのだらうと思へた。

二

おせいはまだ動かないでその場にじつと坐わり込んでゐた。墓へ着て行つたよそ行きの衣物——と云つても、銘仙まがひの棒じまの綿入れだが——をぬぎ替へる氣もしないで。まだ秋は半ばで、寒いのに早すぎる筈だのに、若い時から、

『少し猫脊、ね』と冷かされたその背なかの方から、ぞく〳〵と冷えて來るのをも感じてゐた。

何をするのもいやになつて、どこへでも坐わつたところでただじつとしてしまつて、兩手をふところへ入れたまま、何を考へるともなく自分の心がめいり込んで行くその氣持よさを獨り手におぼえたのは、もう、ずつと以前からのことであつた。それを田口のをんな兄弟のものなどは馬鹿にして、

『おせいさんは如何にもぶしようだから』と云つてるやうだが、こちらとしては苦勞をして見なければ分らない一つの樂しみでもあり、味はひでもあるとして、人からは何と云はれてもかまはないでゐるのだ。

襦袢にでもまたしらみが湧いたかして、苦勞の爲めに骨だつた胸の後ろあたりがちくりと痛がゆかつた。ふところの中から、直ぐ左りの手を右の脇の下からまわして、その方の肩を少し縮めて、ぱり

ぱりと掻いた。かゆいところへは半分しか屆かなかつたけれども、それが自分の沈んだ氣持ちに二重の心よさを與へた。そして一つには、じれつたい燒けから自分までがこのまま文子と共に線香くさい眞ツくらな穴へ引きずり込まれて行つてもいいやうな氣になつてゐた。

そこへ丁度また來て呉れたのは、向ふの家に假りに下宿してゐる堤さん夫婦であつた。もとから田口の友人で、この人も大阪では度々奥さんを換へ、それがみな仲居や藝者であつた爲めに、親ゆづりの財產五十萬圓ばかりを全くすつてしまつた結果、今日のやうな見じめな天罰を受けてるのであるが、田口よりも人情があるかして、今回の訴訟事件にも智慧を貸して呉れたし、この二三日は每日のやうに來て、いろ〳〵手つだつても呉れた。けふも、午前にはおひる前までゐたので、今夜は來て呉れまいと思はれてたのに、それが來て呉れたのだから、俄かに力を得て、こちらはその方に向き直つて、右の手をふところから出した。が、今度はその手の人さし指が思はずまた鼻の穴へ行つた。そしてそのついでに穴の奥でさわつた鼻くそをゆび先きの爪にかけて引き出して來て、むなもとから出た左の手のひらに乘せて丸めながら、

『ヤツとお墓の方をかたづけて來たのですの。』

『まア、これで一段落や』と、堤さんも圖ぬけて大きなからだを自分勝手なところへ坐わらせて、うち輪の人のやうに云つた。

『ほんまに可哀さうなことをして、なア。』奥さんはこちらのそばへ進んで來て、こちらの坐わり込んでる横手から線香をたむけた。

『…………』おせいはその手つきまでを見つめてゐて、藝者をしてゐた女にもこんな時には本當の人情があるのだらうかと思つた。直ぐ堤の方へ向いて、『わたしやアどうしてもあの薄情な田口が殺したとしか思へません、ね。』

『そんなこた、もう云はん方がえい。向ふかて、貧乏のなかから十圓も送つて來たんやさかい、十分、文ちやんの死に目にや會うてやりたかつた意志は見えてます。ただあんたに會ひたうなかつたんや。』

『あなたもまだそんなことをおツしやるんですか？』おせいはさきに文子が同じやうなことを云つたのに突ツかかつて行つた時のやうな勢ひになつて、『わたしはわたし、子供は子供ぢやございませんか？』

『そらさうやが、な――』

『…………』かの女は渠をも云ひ伏せたつもりになつて、多少の滿足をおぼえた。

『風を引きますよ、政ちやんにうたた寢させて置いたら』と、奥さんが渠の上に座蒲團を二つ三つ乘せてやつてるのをこちらから見ながら、

『いいんですよ、憎らしい、こツちの歸つたのも何も知らないで！』おせいは今となつては、もう、雄作がたよりであつた。渠の機嫌を取り込むやうにして、『雄ちやんは、それでも、少し分つてるやうですが、ね。』

『もう、十三やさかい、な』と、奥さんも雄作の方へ向いて、『ねえさんがゐなくなつて寂しいでしよう？』

『………』雄作はそばに坐わつてるまゝ、にが笑ひをして目をしよぼ付かせた。

『これからねえさんのぶんも引き受けて、しツかり勉強しなけりやいけないよ。』おせいは丁度いい折りを見つけて斯う云つて聽かせたが、自分もわれ知らず涙をこぼした。雄作は來年の三月にやつと小學校を出られるのである。女の子とは違つて、そのまゝ月給取りにもやれないのだ。して見ると、これまで文子が取つてたぶんだけがそつくり這入らないことにならう。それに向ふの家のありさまだ。

『然し、けふも、中尾が云うてたが』と、堤さんは營業代理人のことに云ひ及んで、『如何にわたしだツて出るやうに從來の義務が果せるなら、直ぐにも出ます。それを然しかねが思ふやうにできないので躊躇してゐますのだから、幸田さんもさうせツかちに訴訟などしないでもツて。』

『あなたが勸めたんぢやありませんか？』もう、突つかかつて行きたい氣になつてゐた。

『そやさかい、こツちやはとぼけてゐたんや。若しさう云ふおつもりなら、僕が仲に這入つてあげて

もよろしいツて。どうも訴訟にや勝てないおもてるらしいさかい、出る用意はしてるやうや。』
『それでなきやアこツちが困りまさア、ね。』おせいはちよツと調子には乘つたがこんなことやそんなことを一どきに考へ出すと、客の來てゐることも忘れがちになつて、ひえる夜を、自分も疊のうへに坐わつた切り、またふところ手をしてむな元をふくらませたり、ふところから兩手をえりに出して、なけ無しの鼻くそをほぢつて丸めて壁の方へ指さきではじいたりしながら、自分勝手な世界を現じて、客にも座蒲團をすすめることさへしなかつた。

　が、堤さんはこちらにも都合のよささうなことを話し出したので、おせいはまたちよツと氣を引き立てることができた。これによると、渠がいつそのこと、こちらや田口の友達甲斐に、中尾の出たあとをそツくり引き受けて、こちらと一緒に下宿の營業をやつて見ようかと云ふのだ。
『これはまだあんたには云はなかつたけれど、田口君には先日會うた時相談して見て、承諾を得たことやが――』
『…………』おせいは田口の名を出されると、直ぐ反感をいだかないではゐられなかつた。『あんな者に何の權利がありませう?』
『僕かてそら知つてる、さ。けれど、友人として先づ話しをして置かねば、感情を害するかも知れへんやないか?田口君に異存がなけりや、あとはあんたと僕らとの相談づくや。』

『それもさうです、ね。ぢやア、いいやうに相談します、わ』と、かの女は答へた。そして中尾が出ると、自分も子供二人と一緒に向ふへ舞ひ戻つて行つて、堤夫婦と共に力を合はせて營業をやり直すことに話をきめた。文子は死んでも、櫻川町の家の方はどうやら斯うやらまた持ち直しさうだと云ふことが、せめてもの光明を自分の心に投げて來て呉れた。『さうなると、もう、うち輪同士のことになりますから、ね、あなたの方へも香奠返しはしませんよ――少し勝手のやうですけれど。』

『そら、お互ひのこツちやさかい』と、堤さんも心よく承知して呉れた。

『………』かの女は文子に關することがこれで最早や殆どすツかりかたが付いてしまつたと思つてしまつた。薄情な田口などへは何も返すに及ばないことだし、四十九日までに、ただ自分の方の身うち二軒へ壺屋の饅頭をでも申しわけにくばれば、もう、それでいいのであつた。だから、もう、あの中尾を追ひ出しさへすればと云ふことにばかり心が向いて、『ぢやア、どうかその方を先づいいやうに頼みますよ』ともたれ込んで置いた。この頃は何ごとにでも成るべく人まかせの方が面倒くさくなくツていいのであつた。この正直な自分の獨り腕で以つて、斯うやつて三人の子供を育ててゐたのを初めは同情して呉れてか、一番面倒くさかつた下宿の營業も中尾が――若し約束通り家賃を出せれば――うまくやつて呉れる筈であつたし。文子が急病に變じた時はまたおほ屋のおかみさんが醫者を呼びに行つて呉れたし。追弔金の奔走も文子の友達がすべてやつてくれたし。埋葬の手つづきなども堤

さんがして呉れたし。中尾とのかけ合ひもまた續いてやつて呉れると云ふし、そして自分は、もう、この最後の事件の結果をただ待つてゐたらいいのであつた。

二三日は何だか全く手加減が違つてしまつたかのやうに寂しくぽかんとして、らくはらくであつたが、手持ち無沙汰過ぎたほどだ。堤からも音沙汰がないのを待ちわびて、こちらから向ふの家へ出張して見ると、何のことだ？まだ少しもはか取つてはゐなかつた。男のくせに、

『さうひどくも云へないから、まア、じイわりとやつてるけれど――』などと云つてた。

『ぢやア、わたしがもう一度裁判所へ行つて來ます、わ』と、おせいは急にむきになつて答へた。既に一度は檢事にも面會して、田口の薄情から自分が棄てられて、今はただ借金附きの家をもと手に子供三人を養つて來たことをまで語つてあつた。そしてその大切な家の營業を月々の家賃にしてまかせた約束だのに、『こツちを女と見くびつてるからでしようが、中尾と云ふ男は不都合にも少しも約束を實行しないのです。』

『ぢやア、よく調べて見ましよう』とのことであつた。そしてこちらが今少し辯じて置かうとしたら、檢事は『いや、もう、さう能辯に云はないでも分つてゐますから』と云つた。だから、それを力にして再び面會に行くと、會つて呉れたことは呉れたが、まだ調べてないといふのであつた。

『あなたは』と、おせいはここでもむきになつてしまつた、『おや子四人のうち、ひとりはその僅か十

日ばかりのあひだに無くなつてしまひましたし、あとのものらもいつ飢えて死ぬかも知れませんのに、それを見殺しにしておしまひなさらうと云ふおつもりですか？』

あとで少し云ひ過ぎたか知らんとは思つたが、その爲めに直ぐ事件がはか取つて行つた。そして中尾の方は三百代言らしいのに代理させたから、

『あなたの方も知り合ひか何かの辯護士に頼んだらどうです』と云ふ注意を檢事から受けたけれども、おせいは、

『いいえ、わたしはそれにやア及びません。正直に中尾と對決さへすれば分ることですから』と答へた。そしてそれもその通りになつた。

いよ／＼對決の日になつて、中尾もよんどころない顔つきをして檢事の前へ出たが、相變らず證文の上の不備な點を楯に取つて、

『わたくしは一ケ月三十圓の割りで營業の利益を幸田さんの方へ拂ふ約束は致しました。然し、それを毎月、毎月拂ふやうには約束致しませんでした』と、まことしやかに陳べ立てた。

『いいえ、それはほんの證文づらばかりのことです。あなたはわたしが毎月にして拂つて下さるのでしよう、ね、と念を押した時に、無論ですよとお答へになつたぢやアありませんか？』

『…………』中尾は直ぐ云ひ詰つてしまつた。

『女ひとりだと思つて、證文の文句などでごまかさうとしたツて駄目ですよ！』
『文句の上にも家賃としてと書いてある以上は』と、檢事もさすがいいところをつかまへて呉れた、
『月々拂ふのが當り前ではないか？』
『それに致しましても、實は、營業上の利益がそれほどにあがりませんので――』
『それは別問題だらう。利益のないやうな商買をお前が引き受けたのが惡いのだ。』
『へい。』
『…………』つまり、こんなことで、おせいは自分の師匠に見て貰つて置いた易に出てゐる通りの期日に、櫻川町の家を明け渡して貰ふことができた。『正直のかうべに神がやどるとはこのことですよ。中尾も檢事の前へ出た時にやア、まるであたまがあがりませんでしたから、ねい』と、嬉しまぎれの調子に乘つて今度はうまく行くだらうと思ふ營業共同者になるべき堤夫婦に斯う語つた。

三

死人を出した巴町の家を引き拂つたのも幸ひが向いて來た一つのしるしだと思へたところ、今度は雄作がまた父の方へ行つて修業させて貰ひたいと云ひ出した。
あれだけ惡く云つて聽かせて來た田口のことだのに、文子も十二の頃から渠を戀しがつたが、その

弟がまたさうなのかと思ふと、いつそのことまた死んでしまへとまで云ひたいほど、母としては憎らしかつた。折角ここまで育てて來たものを、ひとり死なせた上に、またひとり手放すことは意地にも考へ物であつた。

『お前は、あんな薄情なお父アんのところへでも、どうして行きたいの？』

『學問をさせて貰へるから』との答へだ。

『それもさうだらうが、ね。』わざと煮え切らない返事をして置いて、堤さんの部屋へ相談しに行つて見た。『どうしましようか、ね、今度はまた雄ちやんが田口の方へ行きたいと云ひ出したんですが、ね？』

『そら丁度えいやないか？』堤さんは案外わけもなく贊成した。『來年から中學やのに、あんたの手でつづくかどうや、實際は、分らへんさかい。』

『つづかないこともないでしようが、ね』と、かの女は一つ、向ふのこちらを馬鹿にしたやうな言葉にいや味をうち込んだ。と云ふのは、子供の二人や三人を喰つて行かせるぶんなどは、下宿屋をしてゐる以上は、食物の餘分として獨り手に出て來るものだ。あとは月謝の二圓や三圓しか雄作の爲めの物入りはないと思ふと、それ位は追ひ出された中尾に代る人として堤が出すべきのは當り前であつた。

『よしんば、あんたの力でつづくにしてからがだ、雄ちやんの爲めに取つて、あんたのはたにゐる方

がえいか、それとも、學問のある田口の手もとにゐる方がえいか？』

『………』その質問のわけをよく聽いて見ると、堤さんの云ふことも尤もでないことはなかつた。渠に田口が語つたこともあると云ふによると、雄作や政直は――みな、うへの子だが――こちらへ養子にしてしまつてもいいのであつた。田口にはそのあと取りなどは誰れにしてもかまはないのだ。だから、雄作を向ふへやつて學校へ入れて貰つても、卒業の後はこちらへ返して呉れる。して見ると雄作はやがて文子の代りに全くこちらの物になるのだから、自分の手もとで育つ政直の方が却つて入らなくなつて、行く末はどこかの養子にでもやらなければならぬわけだ。ところで、どうせ養子にするのなら、堤さんが今から約束して政直は貰ふことにして置いてもいい、そしてこのことも田口には了解を得てゐると云ふのだ。『成るほど、ねい』と、最後には會得ができて、『それもいい考へです、ね。』

『さうおしになる方がよいでしよう。』堤のお竹さんもそばから親切に勸めるのであつた。

『ぢやア、さうしましようか、ね？』そこへ政直がいつもの物欲しさうな顔をしてやつて來た。そこでまた土いぢりをしてゐたと見え、筒袖や衣物の裾をほこり色の土だらけにしてゐた。渠はそれをそのからだと共にこちらの膝のあたりへこすり付けながら、

『よう、おツ母さん、何か呉れよ』と云ふ目付きをして見せるのであつた。そしておせいには、この目付きに自分の子供の聲までが可愛く聽えてゐた。が、別にやる物もないので、

『また、その袖を御覽』と、なまぬるく叱り付けて、暫らくそのままあしらつてゐた。『お前はおとなしくしてゐないといけませんよ、堤さんの子に貰はれるのだから、ね。』

『いやだ、いやだ?』政直はます〳〵駄々を捏ねた。

『…………』おせいも自分の子を人の養子にやるかどうかは、その實、それには情愛があり餘つてゐて、まだ決心してゐるのではなかつた。この營業をもまだ本當にまかせる氣にはなつてゐなかつた。これまでのところを何ぶんよろしくと云つてゐたのはこの家の明け渡しをさへ助けて貰へばよかつたのであつた。今のところは、ぼんやりとただ向ふの云ふにまかせて置いて、向ふのやうすを見てゐるのだ。蓋し自分の易のうらなひに出たところでは、あまりいいことにも成りさうでなかつた。

然し、客も少くツて直ぐ女中も雇へない折りから、堤さんがその奥さんを見習ひとして臺どころへ出して吳れるのはこちらには女中代りとして便利がよかつたし。それに、もと手があるかなしのところへ持つて來て、この寒いのにそとへ出ておさいの工面をあれかこれかと見つくろふのも面倒なので、毎日僅かの煮まめとちツぽけな鹽しやけとですませてゐた。すると、堤さんが番頭がはりに出て來て、

『そんなこツちやあかん』などと、滑稽な大阪言葉で叱り飛ばした。『お前までが、もう、今から寒さうな風をして』とは、奥さんに云つても、實は、こちらへ當てつけたことらしい。『そやさかい、お客

さんが續かんのやないか？毎日、毎日同じ物を喰はせられてゐたら、わしらかて飽いてしまうが、な！』

『だツて、仕かたがないぢやアありませんか、おあしがないんですから。』斯うおせいは口を出した。

『これで買うて來い』と云つて、堤さんは時々五錢銅や十錢銀貨をお竹さんに投げ出した。

『…………』割りに合はないものを添へたりすれば、月末の勘定の上に損をするばかりでなく、客をつけ上らせることになるのを、まだ經驗のない夫婦は知らないのであつた。が、別にこちらのふところを痛めるのでもないから、うツちやらかして置いた。すると、堤さんの干渉はこちらのからだのことにまでも及んで來て、

『あんたがたのやうに一ケ月でも二ケ月でも湯に這入らんでは、お客さんにきたながられますが、な』と云つて、時々みんな一緒に錢湯へ行くやうに命令した。それも向ふのおかねを出すのだからいいやうなものの、時には、

『わたしだツてお湯をきらひなんぢアないんですが、ね、お湯に這入ると、却つて風を引くことがありますから、ね』と、強情を張つて見せたこともある。

『たまに這入るからや』と、堤さんはいやな顔をした。が、おせいはわざと笑ひに受けて、

『だから、這入らない方がお湯錢だけでも助かるぢやアありませんか？』と云つてやつた。今も湯に

行くおあしをこちらは貰つてあるのだが、自分の財布にはそれしか這入つてなかつた。が、政直が餘りうるさいので、そのうちから、はしたの五厘だけを出して、『ぢやア、これでおいもでも買つて來てにイさんとふたアりでお分けなさい。』

『おぢさんが、ほたら、少し足してあげよ』と云つて、堤さんは一錢五厘を出した。

『………』だから、丁度二錢になつてひとりに一錢づつ當るわけになつたので、今一度、『にイさんと半分づつですよ』と念を押してやつた。雄作も障子のかげへ來てゐたので、はしご段をふたりの足おとが下りて行つた。それにじツと聽き耳を立てて、見えない姿を目に見えるまでに引き寄せながら、無くなつた文子に對する情愛までも呼び起した。が、おもてには去りげなく見せて、『うちの子はみんな、なんて、あんなにいやしいんでしよう、ね?』

『あんたの仕つけが惡いのんや。』

『なアに』と、お竹さんは別なことを云つた、『子供と云ふものはみなあんなものでしよう。』

『さうでしよう、ね。』おせいは奥さんの言葉を自分の味かたを得たやうに考へた。子供は三人ともよく一つの物を取り合ひしたが、雄作はその姉に向つて亂暴なほどつよかつた。そして、

『ねえさんが死ぬのなら、生きてた時にあんなにいぢめなければよかつた』とまで後悔した。その割りには、弟に向つては少し弱い。ひよツとすると、姉に對する後悔の爲めに、その心がおとなびて優

じくなつたのかも知れない。が、自分の發明だと云つて、二三日も苦心して、やツとでき上つたおもちやを、づるい弟に横取りされて逃げられながら、ただ泣きわめいて追ツかけるばかりであつた。いつもこちらが出て行かなければ、この兄弟同士の喧嘩は納まらないのである。

今ふたりでおいもを買ひに行つたのでも、その歸りには、どちらが大きいとか小さいとか云つて、きツと、大道の眞ン中で取り合ひの喧嘩をするのだ。が、何と云つても聽かないのだから、こちらはただ笑つてゐるより仕かたがない。それでも少しづつはふたりで親に持つて來るだらうから、それを樂しみにして――さうだ、親だツても喰べたいのだから、

『貰つたものでも、何でも、少しはうちへ持つて來るものですよ』とは、不斷から敎へ込んである。その一方の雄作が田口の方へ行けるとして見ると、自分も時々尋ねて行つてもいいやうにして置いて貰はなければならない。さうすれば、その度毎に多少の馳走もして貰へるだらう。まさか、赤坂のおばのところのやうにお茶一杯で追ツ拂ひながら、そのあとで、

『おせいはおしりが重いうへにおしやべりで困る』などと、かげ口が云へた義理でもあるまい。

『兎に角、さうすると、雄作は田口の方へ行かせることに致しますから』と、堤さんに向つて、おせいはまたもたれ込んだ、『なあたから一應田口へかけ合つて貰はないと困りますが、ね。いきなり行つて、はね付けられても詰りませんからね。それに、子供が行つてる以上は、わたしも時々會ひに行け

ゐやうにしていただかないぢやア、ね。これまでのやうに、毎月のおかねさへ直接に取りに行けないやうぢやア困ります、わ。これでも、もとは仲のいい夫婦であつたんですから、ね、いくら薄情な田口でも、さうなると、まさか、わたしを――』

『そんなことは云はんかて分つてゐるさかい』と、堤さんはうるささうに答へた。

『だツて、一應はそのわけを云はないぢやア向ふにもとほらないでしよう。たとへわたしは追ひ出されたにしても、さ』と、ぞんざいに口をあいて笑ひながら、『矢ツ張り、向ふの子供の親ぢやアありませんか？さうして見れば、子供に會ひに行くのア――云つて見りやア――いくらおほびらになつてもかまはないのが本當ですから、ね。田口が若しそれをいけないとでも云ふなら、わたしやア子供を渡しませんから、ね。こんな貧乏な家にやア、子供しかわたしの寶ばないんですから。あなたがたなら、まだ子供がないから、この經驗はお分りになりませんが、わたしなどア、もう、子供を四人までも死なせたんですから、ね、ちよいとしたことにも直ぐ驚きます、わ。おなかが痛いと聽けア赤痢になりはしないか、せきするからツて肺炎ぢやないかツて。あんまりお湯へ行かせないのも、一つは、その爲めですから、ね。』

斯う述べ立てて來て氣が付いたのだが、これで向ふが度々こちらどもを『あかだらけだ』と云はないばかりの顏をしてゐるに對する申しわけが十分にできたのであつた。こ

の時、丁度子供が歸つて來たやうすだから、

『また喧嘩をしないやうに』と云つて、おせいはその座を立つた、そして下の茶のまへ來て、直ぐこちらから子供の方へ默つて手を出すと、ふかしいもの親ゆびほど喰ひ殘されたのを政直は呉れた。そして雄作のはと見ると、それよりもたツた二倍ほどのものであつた。然し、その兩方を大切に子供から受け取つて、おせいは長火鉢――これもおぢイさんの坐わつてたかたみ――の前に坐わり込み、自分ひとりで番茶を入れた。そして女敎員をして獨立してゐた時からして、自分のお茶好きであつたことを思ひ出した。すると、また自分のおほおぢの防害を避ける爲めに、田口が夜ぢう俄かに自分を自分の荷物と共に人力車に乘せ、そのあと押しまでして、小石川からこの家へつれて來たそのむかしのことまでも。その時は、まだ電車と云ふものがなかつたが――。

この家のしうと、しうとめや、小じうとにも、隨分苦勞をさせられたけれどいよ〳〵しうとが亡くなる時には、

『吾助ではとてもこの商賣はやつて行けんから、よろしくお前がしツかりして、ね』と云はれた。その一言に感じてこそ、自分はいまだにこの家と田口家のお位牌とを――どうせ田口はそんなことには頓着しないたちだから――自分ひとりで守つてるのである。

四

堤さんは、

『けふ、あすはちよツとそとへ出る用があるから』とのことで、あさつては、きツと行つてやらうと受け合つて呉れた。おせいはそれがまた自分にも都合がよかつた。と云ふのは、近ごろ、しらが染めの束髪がその根もとから白いのを大分に延ばしてゐたのだが、それを染め直すかねもなかつたし、またその氣にもなれなかつた。

が、丁度いい折りだからと心を引き立てて、堤夫婦へはただ、

『お湯に行つて來ますから』と告げて、こツそりと、しらが染め屋へ行つた。さかなやが取りに來るぶんを融通すれば、染め賃と湯錢とを拂つて、なほ二十五六錢は殘るのである。自分から進んでお湯屋へ行くのも、自分ながら珍らしかつたが、染めた時の氣持ちわるさは湯にでも這入つて直さないと、いつも忘れられないのであつた。三十前後から自分が染めてることは、もとのをつとたる田口のことだから今だツておぼえてゐるだらう。

『若白がなどを嫁に貰つたのが間違ひだ』と、死んだおぢイさんは、こちらへも聽えよがしに、田口にこちらと別れることを勸めたこともあつた。その時には、田口は

『お父アんの女房ぢやアないんだから、わたしの勝手です』と、きツぱり答へた。そしておぢイさん夫婦との二度目の同居をまたやめて、麻布の本村町へ別居した。その近處にしらが染めの髮ゆひがあつて、その亭主といふのが文學好きで、田口――その時から多少の名は出てゐたので――に會ひたいと云つたけれども、田口は相手にしなかつた。それほど見識があつたものがこちらをよく愛して呉れてたそのむかしを思ひ出して、ちツと恥かしい氣もした。

『然し、今、電車賃もないんですから、ね』と云つて、おせいは二十五錢の殘金はしまひ込んで、三人分の往復電車賃を堤に出して貰つた。そして、政直までをもこんなに大きくしたと云ふ自慢をするつもりでつれて出た。久しぶりでうす化粧までしてゐた。そして市内電車を大塚終點でおりるとガードの上にも電車がとほつてゐるし、またガードの先きの方にも電車があるのに驚き迷つてしまつた。堤さんはそんなことを詳しく云つて呉れなかつたし。通りすがりの人に聽いて見ると、先きの電車は、もう市内のではなく、王子へ行く電車ださうだし。田口と云ふ小説家なら、なんでも、ガードの下をとほつて左りの方へ這入つて行つた大分奧の方にゐる筈だとのことであつた。

して見ると、堤さんに書いて貰つてふところへ入れて來た圖にも確か、

『直ぐ左りへ入る』とあつたやうだが、そこのことだらうと思つて、圖を出して見るひまもなく、その方へ行つた。そしてまた田口の名で聽いて見ると、

『その人なら、もツと、ずツと先きの、もと眞宗大學で、今は澁澤さんのお屋敷になつてゐる近處です』と敎へて吳れた。
『さうですか？どうもありがたう』と答へたが、おせいは私かにこんなに遠さうな話でもなかつたがとの疑ひを生ぜしめながら進んだ。分らなければ大變だとして、政直がもう歸らうと云ひ出したのをなだめながら、雄作を相談相手にあちらこちらと尋ねまはつて、一二時間も費やしたのである。そしてやツと突きとめたかと思ふと、それは田口の元の住まひであつて、
『今は天祖神社のそばにゐます』と云ふのであつた。
『ぢやア』と、おせいはやツと見當が付いたのを嬉しがつて、『それが本當でしようよ。わたしも何か神社とは聽いて來たんですが、ね、つい、思ひ出せなかつたものですから。』
『本當だから本當のことを云つてあげるのです』と、敎へて吳れた人は何だか不機嫌さうであつた。
『…………』おせいは、自分の一生懸命で探して來た心持ちも知らないで、おこつたりするのは變な男だと思ひながら、ちよツと禮を述べて、政直の手を取つてやつた。そしてまた云はれた通りをうつせみ橋と云ふのへ來て、それを渡ると、やがて神社の森が見えて、そのそばに『田口寓』『〇〇主義社』として二つの表札があるところへやツと到着することができた。
が、何だか少し恥かしいやうな、遠慮がちなやうな、そしてまたおそろしいやうな氣がして、先づ

締まづてる門の戸のすきから、そツと中をのぞいて見た。兼て堤さんから話には聽いてた通り、つつじや菊を作つたり、蜜蜂を飼つたりしてゐると云ふそれらしい庭が左りの方に見えるし、小松菜や大根らしいその畑が右にあるやうだ。自分と一緒に暮してゐた無趣味な時とは丸で違つてゐると云ふ豫想が、餘り實際的に自分のあたまへ證明されたのでもあるから、自分は少からず向ふとの隔たりを感じないではゐられなかつた。そして雄作をじろりと返り見て、『先きへお這入りよ』と命じた。が、渠もおぢけが付いたかして、尻込みしながら、にが笑ひをして、

『おかアさんから――』

『ぢやア、政ちやん？』

『いやだア。』政直も赤い顏をしてあとすざりした。

『仕かたがない、ねえ、お父アんのところぢやアないの』と、低い聲で叱つてから、おせいは自分で思ひ切つて戸を明けた。そして庭と畑とのあひだの敷き石を三間ばかりおづおづ進んで行つて玄關のがらす入り格子戸を引き明けた。

『御免下さい』が自分ながら人ごゐのやうに聽えた。

それから、女中の案內で子供と共に玄關の三疊のまをとほつて、そのさきの六疊敷きの茶のまへ行くまでは、取りのぼせて殆ど夢中であつた。おそろしくもあり、早く見たくもある田口と向ひ會つた

時、先づ何から云ひ出さうかと考へてたが、幸ひにも、そこにゐたのは渠の今の女房だと云ふ女ばかりであつた。

『あなたが今の奥さんですか』と、少し馬鹿にして笑ひながら、挨拶をすませた。

『まだお若いのです、ね。』そんなに若くッて、第一に大きな子供達の世話などができるかどうかがあやぶまれた。どうせ田口は無頓着で子供のことなどはかまはないだらうから。

『二階にゐますから、今呼びます、わ』と云つて、名は以前から唄にまで歌はれてるお粂と云ふ女は玄關の方へ立つて行つた。そして『あんた』などと、越後生まれださうだのに、これも堤さん夫婦のやうなかみがたなまりで呼んだ、『子供が來ましたよ。』

はしご段をどたばたさせて下りて來る音が聽えると、おせいはまた自分の顏がぽうッとほてつたのをおぼえた。

『來たか、ね』と云つて、田口がにこ〴〵して出て來たのをこちらはじろりと見上げたが、直ぐ下を向いてお辭儀をしながら、思つたよりもさう變はつてゐないと考へた。けれども、自分の代りになつた女のゐるのが面白くなかつたので、そのいや味をも籠めて云つた。

『お變はりもなくお目出たうございます』

『…………』田口はこれには返事もしないで、そとの障子に近い隅に据わつてる長火鉢の前へ行つて

女とさし向ひに坐わつた。

『…………』おせいは田口の爲めにはそれ位の無愛相を當り前のことだと思つて氣にしなかつた。そして、もう、自分の心を落ち付けてしまつて『今度、堤さんのお世話で御承知下すつたので、子供をつれて來て見たんですが、ね。』

『つれて來て見たとは何のことだ？』田口はもと〳〵通りその持ち前の太い聲をして、こちらを横向きに見た。『來て見て、面白くなけれやア、女中かなんぞのやうに　また取り返さうと云ふのか？』

『さうぢやアありませんが、ね』と、笑つて見せながら『いよ〳〵よこす日はわたしがまたよく調べて見てからにしようと思つて、けふはただ久しぶりのお目見えにつれて來たんです、わ。』

『矢ツ張り下だらない易だらうが、そんなことアよせ！』

『だツて、こりやアわたしのいのちです、わ。云はば、もとの耶蘇敎の代りの信仰ですもの。』

『なアに、お前は疑ひ深いたちだから、とても、易なんかはほんとうに出よう筈がない。』

『わたしは、いつも子供にも云つて聽かせてゐるとほり、正直ですよ。だから、あなたがお目かけを山王の森のところへお隱しになつた時でも』と、わざとお傘に田口の舊惡をきかせるつもりで、『直き見當が付いたぢやアありませんか？』

『ありやア、何も易で當たつたのぢやアない、さ。お前の氣ちがひにらみがひよツこり當つただけの

ことだ。』
『いいえ、違ひます。わたしのまことがちやんと易に現はれたのです。』
『そんなら、それでいいだらうから、なぜあんな家などうツちやつてしまつて、易の專門家にならないんだ？』
『見てゐて御覽なさい』と、おせいは自分からうち解けた笑ひになつて、『今に、きツと成つて見ます、わ。然し、家だツて何もうツちやるにやア及びません、わ。』
『持つてたツて、お前にやア持ちこたへられないやうすぢやないか？』
『そんなことアうそです。誰れが云ふのか知りませんが』と、堤のことを思ひ浮べて渠がそんなことを云つてるのかと思ひながら、『これまでにも、あれをわたしから奪ひ取らうとして、いろんな人がわたしをだましに來ましたがね――』
『そりやア、お前が誰れから見ても色きちがひに見えるから、さ。』
『ありやア、全くうそですよ。』炬燵の事件を云はれたのだと思つたのでちよツと顏が赤くなつたが、直ぐうち消して、『文子の思ひ違ひですもの。それに、あのぢぢイの山崎も――あなたのお友達でしたが、ね――度々やつて來ました。然しとう〳〵わたしが恥ぢをかかして二度と來られないやうにしてやつたのです。今度の中尾だつて、ちやんとわたしが看破してゐましたから、裁判所へ出ても向ふは

ぐうのねも出せなかつたぢやアありませんか？』あの堤夫婦も當てになつたものぢやアないと思ひながら、『みんな、これもあなたの爲め、子供達の爲め、云はば、田口家の爲めぢやアありませんか？』
『いや、そんなおせつかいな考へにア及ばないのだ』と、田口は反對した。こちらの意外にも、少しもこちらが苦勞して來たことを思ひやつては呉れないやうに、『子供だツて、お前が勝手に渡さなかつたのであつて、――そのくせろく〳〵仕つけもしないやうすだし――』
『わたしや子供の敎育にや放任主義ですから、ね、それにしても』と子供ふたりを返り見て、少からず自慢のつもりで、『これだけ大きくなつたんですから、ね。』
大きくなるのア畜生でもなる！』田口の返事は相變らず亂暴であつた。そして渠がそのむかしもよく『ただなめずりまはすやうなのばかりが、子供を育てる道ぢやアない』と云つたのを思ひ出させた。
『だツて、可愛けりやア仕かたがないでしよう』と、おせいはその時答へた。田口は不斷は無頓着なくせに、子供のことになると、隨分やかましくもあつた。が、いろ〳〵いそがしいことがあつて、こちらはさう手がまはらなかつた。
『放任主義よりやア、お前のアぶしようなんだ！　むかし、敎員をしてゐたくせに、甲斐性もなく、一般の俗人同樣な考へになつてしまつて、學校へ行かせて置きさへすりやアそれでいいように思つてたにきまつてらア、世間のやつらはね多くは子供をただ伊達に學校へやつてゐるやうなものだ。苦しい

やり繰り算段をしてたとへば醫科大學を卒業させたところで、家に財産がなけりやア、病院を建てることもできないし。また建てたところで、無理な借金の心配ばかりが先きに立つて、肝腎の專門技術よりやア親からの遺傳のやり繰りばかりが上手になつてしまう。それよりア、身ぶん相當なところで學校を切り上げさせて早く實社會へ出す方が自然のやりかただ。お前で云つて見りやアまア子供は早く勞働者にでもしてしまう方がましだ。』

『まさかさうでもありませんが、ね。』かの女はひどいことを云ふと驚いたが、田口にはそれが當前のやうであつた。

『さうでもありませんぢやア行けないのだ』と、渠は言葉をつよくして、叱り付けた。『お前が若し子供をいつまでもそばに置いときたいなら、さうでもしなけりやアならないと云ふのだ。』

『だツて、お渡しすりやアいいでしよう』と、こちらは答へるより仕やうがなかつた。

『それに、今一つ云つて置くが、ね、あの家はお前の物であつて、もう、おれの物ぢやアない。田口家とは、だから、何らの關係もないので、あの家を維持できたところで、お前がそれを以つてこツちへ恩を着せようとするのは眞ツぴらだぞ。』

『だツて』と、おせいは不審になつたので云ひ返した、『お位牌まで――あなたの先祖代々のですよ――預つてあるぢやアありませんか？』

『馬鹿！位牌なんか子供と共に返せ！たとへば、日本の國民がとんぼがたの狹い陸地などに未練がなくなつて阿弗利加へ移つてしまつたとして、そのあとの地面など何になると思ふ？　そしてなほ未練があらば、取り返すだけだ。お前はそれでいいか？』

『そりやア困ります、わ、ね。』斯う云つて、田口を見詰めながら、かの女は少からずがツかりした。自分は、櫻川町の家が自分の物になつてるけれども、それを持ちこたへることは、子供の關係から、矢ツ張り、田口家の爲めだと正直に思ひ込んでゐるのである、これを田口は却つておせつかいだと云ふのであつた。そこに初めて自分は田口家と全く無關係にされてゐたことが分つた。『ぢやア、子供をあなたは一體どうしようと思つてるのです？』

『そんなことア分り切つてて、尋ねるまでもないぢやアないか？うへの子どもはかたツぱしから死んで――それもみんなお前のだらしないせいであつたとしか思へないが――今ぢやア雄作が總領だから

おれのあと取りになるんだ。』

『…………』かの女には、それも亦意外であつた。『あなたは子供はみんな入らないとおツしやつたぢやアありませんか？』

『入らないツたツて、法律がさうたやすく許すものか？』

『…………』さうなつて呉れりやア、實はこれより結構なことはないのであつた。こちらは田口にそ

んな意志はないと思つてたから、渠が死にさへすれば直ぐ田口家に對する相續上の訴訟を起さうとまで考へたのである。『雄作に取つちやア、無論それに越した幸ひはないのですが、ね、――ぢやア、政直はどうなりますんです？　堤さんのお話しでは、あなたが雄作をあたしのあと取りにして、政直を堤さんに呉れるとおッしやつたさうぢやアありませんか？』

『そりやア、雄作がこッちへ來ない時のこと、さ。』

『ぢやア、來た以上は可愛がつてやつて呉れますか、ね』と、おせいはまた自分の子供らを返り見ながら、『みんなお父アんをこわい者の樣に思つてたんですが？』

『そりやア、お前がさうさせたの、さ。氣ちがひじみて、ね。』

『そんなことアない、わ、ねい』と、實は、當つてゐないこともないのを云ひくるめるつもりで笑ひながら、子供の方へ向いてわざと念を押した。

『…………』子供はふたりとも返事をしなかつたが、それとなくこちらの意を受けたかのやうにからだをもじ〳〵させてゐた。

『それで雄作のことは分りましたが、――ぢやア、政直をわたしの方へ下さるんですか？』

『くどいやつだ、なア！　欲しけりやア、やるにきまつてゐる！』

『だツて』と、こちらから田口の機嫌を取る爲めにまた笑つて見せながら、『聽いて置かなきやア分ら

ないぢやアありませんか？』

『分らないのアお前ばかりだ。』

『だつて、ねい』と、おせいはまた友の方へも向いて、ちよツと媚びを見せた。雄作が案外らくに向ふへ受け取られたやうに、若しかまた政直をも欲しくなつてこちらへ渡して置けないとでも云ふことになつたら、文子は死んでしまつたし、自分はあぶ蜂取らずになるではないか？今から心配なのはそればかりであつた。

五

『わたしからも云つて置きますが』と、お兼は――こちらが何か云ひ出すだらうと私かに待ち受けてた通りに――云ひ出した、『雄作さんがこツちへ來た以上は、先づ、おとうさんの云ふことばかりでなく、わたしの云ふことも聽いて貰はなければなりませんよ。』

『そりやア、さう云つて聽かせてありますが、ね。』斯う何くはぬ顏でおせいは子供に代つて受けたが、「實は、まだそこまでのことはどう云ふ風にさせようかと云ふことを考へ中であつた。いよく〳〵深を手放すことになるその日までに何とかきめてやればいいと思つてた。たとへば、うわべだけではまま母にも素直に見せてゐなければならぬが、もと〳〵あかの他人だから、實母のこちらを忘れるやう

なことがあつたはいけないとか、何とか。然し、今そんなことを云へた義理でもなしまた云ふにも及ばないので、ただ話を別な無事な方へ轉じさせる爲めに、口を明いて笑ひながら、この家のことを
『なか〳〵分りませんでしたよ。何だか、ずツと奥の方までも迷つて行つてしまつて、』などと語つた。
そして、ふと思ひ出して、明いてる口びるを縮めてさきの方で合はせると、そのさきが矢張りとがつてるやうな氣がした。
『前齒が大きいうへに出ツ張つてて、おまけに締まりなく笑ふので、どす赤い齒ぐきまでが一面に出る』と、意地惡くも、よくこちらの惡くちを云つた田口だ。が、それがこちらの堤さんに書いて貰つた來た地圖のことを聽いて、素直にも『どれ、出して見ろ。』
『わたしやア、子供をつれてることだし、もう、一旦引き返さうかと考へてしまひました、わ』と云ひながら、ふところのがま口に歸りの電車切符と共に入れてある紙切れを出して、先で自分が見て見ると、矢ツ張り、圖の方がほんとうであつた。『成るほど、堤さんも斯う書いてあつたんですが、ね、何だかわさ〳〵して忘れてしまつたんで――』
『この通りだ』と、田口は地圖を取り上げてから云つた。『神社の鳥居や敷き石まで書いてあらア。これで分らなかつたんぢやア、よツぽどお前がどうかしてゐるんだ。』
『………』さう云はれると、おせいもむきになつて、『わたしやア。なにもどうもしてゐやアしない

わ。田口さんなら、ガードをくゞつて左りの方へ行つたところだと、間違つたことを敎へて吳れた人が惡いんぢやアありませんか？』

『なんでもお前はあとの人のことを信ずるくせだ。さうしてまたそのあとのがあると、直ぐまたその前のを疑ふんだ。惡いくせ、さ。』

『さう馬鹿にしたものではありませんよ。わたしだツて、あの山崎をあとからはね付けたぢやアありませんか？』

『ばアさんがぢイさんをはね付けたツて、それが何の手がらだい？』

『ふ、ふ』と、お粂は人の前をも憚らず吹き出した。子供の方と顏を見合せてた。

『………』が、おせいが先刻からそれとなく樣子を見てゐると、お粂は口かずも少く、つゝましやかにしてゐて、先きの目かけなどとは違ひ、思つたよりおとなしい女のやうだ。これなら、子供の爲めにもよく、またこちらが時々やつて來るにも都合がいいだらうとは思ひながらも、なほいや味をきかせて、『そりやア、お若い人を持つあなたは相變らず御自分も若い氣でゐられませうが、ね。』

それでも、お粂の心でお茶も出たし、菓子には羊かんに綺麗な赤い林檎も出た。カステラに似て黑い色の西洋菓子をも珍らしいのでたべて見たが、ぶつぶつした物が齒に當つて、あまりおいしい物ではなかつた――子供はみなうまさうにして喰べたけれども。

そのうちに、奥座敷の方で寢てゐた春子と云ふ女の兒が目をさました。お兼がそれを女中から抱き取ると、
『坊やのにイちやん達が來ましたよ、御覽なちやい』などと云つた。ついこないだ生まれたと云ふにしては大きくもあつたし、また濃い髪の毛でもあつた。
『いい兒ぢやありませんか』と、愛相だけは云つたが、おせいは先づ父の愛を段々にその子ばかりに取られて行きはしないか知らんと思へた。
『子供に蜜蜂でも見せてやるから、來い』と云つて、田口は奥座敷の方へ行つたので、そのあとからおせいも子供について行つて見た。
『雄作さん達は玄關から銘々の下駄をはいておまわりなさい』と、もう、お兼が母親氣取りで命令してゐるのがこちらには面白くなかつた。が、それよりも一層蜂と聽いては、子供が刺されはしないかと心配であつた。
寒いのと心配なのとで、おせいは緣ばなに立つてからだを縮めてゐると、黄の亂菊の大輪が、まだ二つばかりおそ咲きに咲き殘つてる庭の中で、田口は寒さうもなく、ちやぼ檜葉の根もとなる蜂の巣の箱の横にしやがんで、子供達に何か說明してゐた。
『雄ちやん達は刺されちやいけませんよ。』

『さう刺すものではありませんよ』と、お兼は兒を抱いてゐながら、こちらと一緒に見てゐて云つた。『そらを見てゐて御覽なさい。小さい黑い物がばら〳〵と雨つぶのやうに落ちて來るでしよう。あれはみんなうちの蜂ですよ。』

『…………』ちよつと、目を細めてそらを見たけれども、時々目ぐすりをさしてる目がまぼしいのと蜂が恐ろしいのとで別に何も見えなかつた。『わたしにやアちツとも分りませんが、ね。』

『蜂と云ふ物は』と、田口が今度はこちらにも聽えるやうにして、『斯うしてせツせと働らいて冬ごもりの支度をしてゐるんだ。人間はせツせと勉強して一人前になるんだ。さうしてえらくなるとならないとは一人前になつた上のことだ。あの幸田のやうに、無常識の老いぼれになるのア禁物だぞ。』

『わたしだツて』と、笑ひながら、おせいはむきになつて、『常識は持つてゐまさア、ね。人間が正直でとほすことア一番常識です、わ。』

『こツそりおれのかねでへそ繰りを拵らへて、それが百圓とまとまつたからツて、またこツそりへツぽこな銀行へ預けて、すツかりすつてしまつたなどが不正直ぢやアないのか？』

『…………』あんなことまで今更ら誰れに聽いたのだらうと、おせいは考へた。ふところ手のままで、かゆいとこを搔きながら、『あのときやア親類のものが惡かつたんぢやアありませんか？　わたしは、家の爲めを思つてしたんですもの。どうせ、あなたなんか當てにならないんですから、ね。』自分のす

ることには、すべて理由のないことはないのだ。そして理由のあることが失敗するのは、させる方が悪いのであつた。

みんなが再び茶のまへ立ち戻つて、親子三人がおひる御はん代りに天どんを御馳走されてからも、まだ〲むかし物語りの不平のたねは盡きなかつたのである。が、

『そんなことアいくら云つたツて無益だから、よせ』と云はれてしまつた。

『………』こちらが思つてるほどには、田口は人間としての思ひやりも何もないのであつた。最初にはしご段を飛び下りて來たり、蜜蜂や植物の講釋を叮嚀にしたりするところを見ると、まんざら子供を可愛くないことはないやうだ。が、初めのうちの珍らしがりであつて、あと〲になると、こちらがいぢめられたやうに、またどんないぢめかたをするかも知れまい。おせいにはそれがまた一つの心配になつた。半ばいやな氣になつて、『それぢやア、どうしましよう、ね?』

『なにをだ?』

『雄ちやんのことを?』

『まだそんなことを云つてるのか?來ると云ふから、こツちはそのつもりでゐるんだ!』

『だつて』と、また胡麻化し笑ひになつて、『ほんとに可愛がつてやつて呉れますか、ね?』

『くどい!』

『…………』さう云はれては、おせいも取り付く島がなかつた。けふはこれで引き取つてと思ひながら、なほ、田口を賴むやうに見やつて、『ぢやア、よろしく賴みますよ。』

『…………』田口は返事をしなかつた。が、それがまた却つてこちらに男の賴母しいところのやうにも見えた。そしてお粂の方が

『わたしも引き受けた以上はわたしの子供同樣にしますから、さう御心配なさらないでもよござい
ますよ』と云つたのが、ほんのそらぞらしいお世辭でないか知らんと思へた。そして、そんならわッつらの愛嬌で以つて人のいい田口を丸め込んでゐるのではないか、とも。

おせいは自分が年も行つてるだけに、そんな手には乘るものかと云ふ氣の引き締まりをおぼえたついでに、少し向ふのふところをへづつてやらなければ損だと思つた。そして、

『ぢやア、兎に角、歸りますが、ね、三人の歸りの電車賃を下さいよ』と、ねだつて見た。お粂が直ぐその財布の口を開らき始めたので、『さうして今度つれて來る時のもどうぞ。』それを受け取ると、今度來る時はまた堤から電車賃を往復とも取つてやればいいと考へながら、いとまを告げた。そして今度は、田口に云はれた通り、天祖神社と云ふ森の中を拔けながら、『斯う云ふ遊びどころもあつて、雄ちやんはこれからいい、ね』と、自分としては半ば子供に對してのいや味を云ひ加へた。そしてほんとうに父のところへ行きたいのか、母はどうも氣に向かないがと云ふことを相談して見たかつた。

が、雄作はと見ると、これもこちらのそばにはゐなかつた。そして少し隔たつたところへ行つて、弟の政直と共に矢ツ張り、母の心を知らない子のやうに、いてふの枯れ葉などを拾つてゐた。

さうだ、もう、いよ〳〵秋も過ぎよう。うか〳〵してゐると、年の暮れも直きだらう！

『本へ挾むのにいいよ』などと、子供が語り合つてるのが聽えた。

『………』多くの大きな杉の木に立ちまじつて、また大きないてふが三本も四本もある。おせいは立ちどまつて、これを見上げると、高いえだ葉にそらもおほはれて、自分の目がくらんで凄いやうでもあつた。が、久しぶりでこんな天然に觸れて、自分も何だかのんびりとせい〳〵したのである。おかぐら堂もあつて、氣が付くと、自分の後ろが神社だ。俄かにその方へ向き直つて、ついでにだが、手を叩いて拜んだ。そして子供の爲め、自分の爲めに、けふのこのかけ合ひごとがどちらともうまく行くやうに願つた。

それから、また子供はと見ると、兄弟が手をつなぎ合はせて、大きないてふの木の一つを根もとに於いて取り卷いて見やうとしてゐた。が、おとなだつて、六人や七人の手つなぎでは、とても取り卷けさうではなかつた。ふたりも斷念したかして、こちらへ戻つて來ながら、政直がその兄のあとから小癪らしい聲をかけた。

『馬鹿に大きい、なア。』

『そりやア、お前』と、こちらは兄に代つて笑ひながら答へてやつた、『丁度、まア、うちのいちぢくの樹に蟬がとまつたよりも比べ物にならないから、ね。』

『馬鹿に大きいんだもの』と、雄作も田口のうちでかしこまつてたやうな窮屈を全く離れてゐた。それに向つて、

『雄ちやんは矢ツ張りお父アんのところへ行く氣か、え？』

『えい。』

『………』行きたいなら行かせてもいいが、文子と云ひ、今度の雄作と云ひ、子供と云ふものは亦男おやと同じやうに珍らしがりなのか知らんと思へた。今迄ひとりで苦勞して育てて來た母おやのことなどは、あまり察しても呉れないで！

そこをとほり拔けると、直ぐ敷き石の道があつて、堤さんの書いて呉れた鳥居がその先きに見えるのであつた。

『近いんだ、ね』と、政直が云つた。

『おかアさんがあんな方へ行くからいけなかつたのだ。』これは雄作がその父を眞似ての小ごとであると受け取れた。

『おツ母さんだつて、ね、何もわけがなく行つたんぢやアないよ。』おせいは自分の子供にまでも道の

眞ン中で口をとがらせて辯解をして置かなければならぬ氣がした。田口は子供のゐる前ででも渠等の母おやをののしつて見せる男だから、今後とも、こちらがどんな馬鹿なことを云はれるかも知れない。そんな場合に、子供が父のこと葉をそのまま信じないやうにはして置く必要があらう。で、ここでも、田口に向つて訴へたのと同じ理由で以つて、「間違つたことを敎へた人が惡いんぢやないか。ね？』

六

雄作が田口に受け入れられることになつたのを喜んだのは、おせい自身よりも堤夫婦であつた。
『それで世話甲斐もあつて、こツちやも嬉しいわ。』堤のお竹さんは斯う云つた。すると、堤さんはまた、
『いツそのこと、政ちやんも渡したらどうや』と附け加へた。
『…………』おせいは自分としてむツとしないではゐられなかつた。あんまり馬鹿にされてると思へた。子供のうちの一名をさへまだ自分は渡さうか、渡すまいかと考へて歸つて來たのに、今一名をもとは一體何のことだ？
『ほたら、あんたの負擔がそれだけ輕うなつて、子供の心配なく、あんたの好きで凝つてる易の方を十分にやれます。』

『易なんか、まだどうでもいいですよ。』おせいは凝つてると云はれれば凝つてるのだが、この方は自分のをとこ師匠のやうにもツと年を取つてからでもかまはない。それまでは、もツと研究だけをしツかりやるつもりである。そんなことにまで堤さんが干渉しようとするそのこんたんを考へて見るに、なか〳〵うツかりしてゐられなかつた。

渠が子供のことでこちらと田口との仲へ這入つて呉れたのは、必らずしも子供の爲めではなからう。渠は、もう、この家を自分の物になつたやうに思つてて、きツと、自分の負擔を少しでもへらさうとしてゐるのだらう。が、こちらとしては、營業を人にまかせることさへ、もう、中尾で懲りごりしたのだ。堤夫婦と一緒に住むことはかまはない。そして堤が日々の營業費を出して、月末の總勘定に於ける利益をほんとうに公平に分配するのなら、然し、はツきりとさうもきめないで、ずる〳〵べツたりにゐずわつて、たまにお客さんのおかずに小ごとを云つたりしてゐるのでは、あんまり蟲がよ過ぎるではないか？

いつまで奥さんの見習ひだ？　どうせ藝者をしてゐたをんななんかが、如何に堅氣になつたツて、締まりはなからうから、まかせツ切りにはできないのである。堤さん自身がもツと本氣にならないでは駄目だ。そして少し本氣になつたところを見せるかと思ふと、つまり、こちらの子供までを邪魔にしようとする。そりやア、堤も

『僕が政ちやんを貰ふにしても、今のところ、ここで育てるよりも田口君のところへ賴んで置いた方が得きや。學問の發達と云ふ點から云ふても、また金錢上の方からでも』と云ふ道理はくツ附けた。

『………』が、そんなことをらくに云ふには、凝つて見れば、何か田口との向ふ二人ツ切りの相談でも濟んでるのかも知れなかつた。堤さんの初めに云つたところでは、雄作を一人前にしたらこちらへ呉れるにきまつてるから、政直は堤の養子に貰つてもいいとのことであつた。が、行つて見ると、田口は――子供を見て惜しくなつた爲めか――雄作を何と云つても法律上の相續人にすると云つた。そして政直の方ならこちらへやると。だのに、その政直をもまた今度は堤が向ふへやれと云ふのだ。得になるからツて、そんなうまいわなに落して子供をみんな母親の手から引き放し、子を欲しがつてる堤は田口から政直を直接にゆづり受け、その代り、この家はこの家で再び田口へ取り返してやるとでも云ふ隱謀ではないか知らん？　斯う考へると、堤夫婦にゐずわられたのがよく易に合つてゐる。

『山風蠱』と出たので、これは災難が遠くにあらずして近きに起る、外よりせずして內から生ずると云ふのだから、つまり、敵の間者を住み込ませてあることになつて、なか〳〵油斷すべきではなかつた。

『ちよツと考へて見ても分ることツちやないか』と、堤は然しこちらの心も知らないのでこの話しを進めた。渠のとぎまつてる二階の三疊に於いてだ。こちは主人のことだから、もと死んだおぢイさんの

居間になつてた下の八疊の座敷を占領してゐたが——。『あんたに子供の心配と營業上の心配とがないやうになつたら、あんたの心もこれまでとはちごて、よく落ち付いて來るさかい、あんたの目的や云ふその易が進んます。あんたには少し人とちごたところがあるさかい、きツと、易者には持つて來いや。あんたもえいとこへ氣が付いてるんやさかい、早うそれに成れるやうにすりやえいやないか——營業の方はあんたの云ふ通り公平に利益分配の約束をきめれば、僕がしツかり引き受けまツさかい？』

『さうです、ね』とは、おせいも渠や奧さんの顏いろに注意しながら答へたが、向ふの云ひ出しかたが、もう、遲いやうに思はれた。どうも、自分の方にはそらぞらしく聽えた。

『僕らもさう／＼あんたの男しゆや女中さんがはりになつてはをられん』と、堤は冗談にまぎらせながらだらうが、『あんたが營業上にはツきりした委任を約束して呉れませんと、お互ひに曖昧で、な。』

『…………』はツきりしないのは却つてさう云ふ方の本人ではないかと云はないばかりに、おせいはわざとにや／＼笑ひをしてゐた。自分は向ふのやうすが獨り手にはツきりするまで待つてゐても、さう損にはならないのであつた。こちらの融通が行き詰れば、向ふにたよつてればいいのだから。地代の大分とどこほつてるのも、こないだ、多少、地主の氣がすむやうに堤が拂つて呉れたりして。

『さうでないと、な、僕はさう遊んでもをられんさかい、また別に仕事を見付けまツせ。』

『…………』さう俄かに威かされては、然し、直ぐその代りは見付けられるものでないから、おせいもちよツと困るのであつた。『兎に角、あなたがたによろしく賴みます、わ』と答へた。

『兎に角ツて、おせいさん、こツちやは一と身上つぶして來た腹からの商人や。それに、あんたは昔から計算に鈍うて田口君に呆れられた女教員さんや。そろばんを持つた上のことなら、安心して、すツかりこツちやにまかせて置きなさい。』

『だツて、わたしだツてもこれまでこの家を無事に持ちこたへて來たんですから、ね。』さう馬鹿にされてるにも及ばないのであつた。それに、どうせこちらと商人肌の人とは金錢上の銳敏さが違つてゐるに相違ないのだから、こちらは却つてすツかりなんてまかせて溜るものではない。

『けれど、田口君は云つてをりました』と、これは堤さんも笑ひばなしだらうが、『幸田があの家をそろばんで以つて持ちこたへて來たなんて云つてるのはちやんちやらをかしい。ただ無方針に出たら目の强情で持つて來たんだて、な。』

『田口の云ふことなんか、當てになりますもんか？』おせいはもとのをつとのことにかこ付けて、堤を叱り付けたつもりになつた。が、堤はなほいい氣になつて、渠がこの家とこちらの生活とを引き受けるのを機會として、易に熱中しろ。そして思ひ切つて髮をも切つたらどうか、とまで干涉を進めて來た。

『切り下げ髮にでもして、ちよツとちごた行者のやうな服を着て、どこか場所のえい四ツかどの、狹うてもえいから、立て机を出せる店を持つて御覽。あんたはきツとをんな易者として有名になり、店もはやるに違ひない。』

『…………』珍らしいからと云ふのだらうが、世間の珍らしがりの當てにならぬことは堤自身でも前に云つてたではないか？　それに、こちらはまだ五十歲にも達しないのに。たとへしらがでも、髮を切ることなどはしたくないのである。心では、むツとなつたが、

『それもさぞありがたいことでしよう。ね』と、笑ひにまぎらせて、おせいはその場をはづしてしまつた。そしてまた堤夫婦の要求をそのままにして置いた。『今のうちは珍らしいから、田口君も雄ちやんを相續人にすると云うてるけれど、向ふの春ちやんが大けなつたら、その方をかあゆなつて、考へが變はるに違ひない。田口君のこれまでの口ぶりもさうやさかい』と、堤さんの云つたことがあとでまた氣にかかり出したのである。

『…………』おせいには粗暴で、無頓着で、氣の變はり易い田口を、どうも、信用できなかつた。そして雄作を改めてつれて行くことは暫らくさし控へてゐた。すると、雄作は母の氣も知らないでやいやい云ふし、田口からもいつよこすのだとハガキで催促して來た。で、向ふのやうすを今一度調べて來るつもりで、おせいはまた――今度は自分ひとりで――行つて見た。すると、

『お前なんぞが何度來たツて用はない』と、田口はあたまから例の罵倒をあびせかけた。

『だツて』と、おせいは笑ひにまぎらせながら、『いい日を調べて見ないぢや仕やうがないぢやアありませんか？』

『多分さうだらうと思ひまして、わたくしが調べて見ましたところでは、いい日はいくらでもございましたよ』と、お粂も利いたふうに此道のことを云ひ出した。

『………』なんだ、白うとがとは思へたが、おせいはその實、まだそこまで氣が進んでゐなかつたのだ。いよ〳〵くろうとが調べることになれば、はしらごよみのおもてに出てゐるばかりでは濟まないのだ。そこがいい師匠やいい參考書を持つたこちらの德ではないか？『ぢやア、わたしの先生ともよく相談して見ましてＩ―。』

『なんだ、先生、先生ツて、そりやアお前のお茶のみ友達かい』と、口の惡い田口はからかつた。

『まさか、わたしだツて――？』おせいはお粂までが吹き出したのを怒らないではゐられなかつた。そりやア、自分のいそがしくない時などには、こちらから出かけて行つて、自分も弟子の一人として、易を見て貰ひに來る客どもにお茶を出したりする手つだひはしたこともある。然し、それも經驗である。そして先生の弟子達のうちへも、たツた二三人のをんな弟子の一人として顏をつないで置く必要もあらう。そして自分も多少の見識を以つて須等に入りまじつてゐるので、決して馬鹿になどさ

れてゐるおぼえがない。が、田口は今では、もう、自分と戸籍上では他人同士だのに、いまだにこちらを目したにばかり見ようとするのが――お餘と共にゐる爲めだと思ふと、なほ更ら――面白くなく見へた。よしんば、お茶のみ友達になつてゐたッて、いまでは田口がかれこれ云へたものでもないが――。

もと〳〵通り默つてれば、もと〳〵通りであつたものを――こちらからわざわざ藪へびを出したやうなものだ。こりやア、どうしても、自分の子供を渡すとしても、雄作には色んなことを云ひ含めて置かなければなるまいと思ひながら、おひるをよばれてから電車に乘つた。田口へつゞけさまには無心も云へなかつたが師匠のところからは歩いて歸つてもいいつもりで、電車道をそこへ立ち寄つた。そして子供の爲めは自分の爲めだから、斯う云ふことにも慾が出て駄目だと云ふこともあるので、よく先生にまかせていい日を見て貰つた。

自分の考へでは、子供はみづのへ寅の八白で、共生まれ性は金箔のきんである。それに對して一番肝腎な相ひ手は向ふの繼母で、これもみづのへの歳だが、午の一白、楊柳の木性だ。

『して見ると、先生、こりやア金尅木ですから、いつも子供がその相ひ手に勝つてて、いいわけでしようが、ね――？』

『ところが、相尅と云ふことがあるぢやアないか』と、師匠は意外にも答へた。そして『元來、木は

東方にくらゐし、春をつかさどるもので――故に草木は春に至つて發生して盛んに茂るなりとある。だから、さう安直にはいい合ひ性とア云はれない。』

『へい――？』おせいはさうなつて來ると、もう、いつものやうにまた何が何やら分らなくなるのであつた。五行と相尅の關係がいつも自分の思ふやうにはさうはツきりと行かなかつた。如何に子供に張みがあつても、親は矢ツ張り親だから、栖を突くやうなことはやらせないやうに云つて聽かせなければならないと云ふのだ。然し、金が木に尅つ以上は、どこまでもそれで行つてよささうに、こちらでは思はれるのだが――。

『だから、せめてはいい月といい日をえらばねばならない』と云つて、師匠はこの十一月は六白でよし、けふから三日目の二十九日は九紫の辰の大安でいいときめて呉れた。

兎に角、この時の師匠が考へをする態度は如何にもかう〳〵しい物であつた。田口がちはひげを短く切つて若返つてるのも男らしいと云へるが、長い口ひげをはやしたかう〳〵しい老人も、また、自分から見れば、なか〳〵尊敬に價ひする。子供のうちのひとりをこの師匠のやうに成らせてやつてもいいのだ。が、今のことでは、どうも、こちらの滿足であるやうには子供と向ふの繼母との合ひ性を解釋されてゐないのが少し面白くなかつた。

その心持ちを露骨にも云へないので、自分のくびを曲げながら、おせいは

『わたしにやア、どうも、まだ分らないところがあるんです、ね。』
『幸田はまだ色けと我慾とが勝つてるからいかん』と、矢ツ張り、田口でも云ひさうなことを云はれた。
『さうでもないのですが、ね』と、かの女は自分でも思ひ當つてゐないでもなかつたことを云ひくるめてしまつた。が、實際には、自分としてまだ〳〵師匠のいつも云はれる通りのことが拔けないのである。それも、薄情な田口に對して恨みを持つたことが深く自分にしみ込んでゐる爲めだと分つてゐた。それに、また、家のことがうまく行かない爲めもあつた。
　相變らずその日にちにも疑ひを抱きながら、歩いてうちへ歸つて來ると、雄作は學校から歸つてゐて、待ちかまへてたやうに玄關へ飛び出して來て、
『いよ〳〵あすから行つてもよくなつて』と尋ねた。
『お前はなんだ、ね！』いきなり叱つたほど、おせいは癇が立つてゐた。『文も文であつたが、お前もそんなにおツ母さんを見棄てたいのか、え？』
『…………』雄作がいやな顏をして立ちながらあとすざりしたのにつけ込んで、なほ睨らみ付けながら、『そんなことを云はないでおとなしいのは、今ぢア政直ばかりだ。』
『お歸り』と、臺どころで働いてたお竹さんがやさしく云つて呉れたので、おせいは少し自分の主人

らしい氣持ちをおぼえた。而も五十萬圓の家の奥さんたるべきであつた人を私かに女中がはりと見てはだ。

政直も出て來たが、直ぐ物をねだりがほであつた。それを見ると、また、渠をも叱りたくなつて、『そんな顏をしたツて、何もありやしないよ！おツ母さんは雄ちやんの用で行つて來たばかりだから、ね！』わざ〳〵行つたのだから、何か少しでも子供にみやげを呉れて置けばいいのに、あのお衆もまだ若いからあんまり氣が利かない女だと思へた。

早速、先づ、臺どころへ行つて見ると、お客さんの爲めに晩のおかずにしようと思つて、家を出る前に買つて置いた大根二本のうち、その一本が無くなつてゐるではないか？　お竹さんに聽いて見ると、

『わたし存じませんよ』との答へだ。

『然し、なくなるわけがないんですが、ね。』おせいはてツきりそれだと見て、堤夫婦がこツそり勝手におひるのおさいにしたのだらうと思ひ込んでしまつた。そしてわざと子供を呼び付けて、『お前は知らないか、え』と、大きな聲でから意張りに責めた。

すると、政直がわけもなく、

『あア、大根のことかい』と云ふのだ。

『知れたことです！』

『ぢやア、僕があすこへ植ゑて置いたよ。』

『どこへ？』茶のまから中の廊下をとほつて、うら緣がはをまた八疊のまの前よりも奥の方へ行つて見ると、雨隣りの板べいを境として、幅二間ばかりの庭が鍵の手になつてる。その三角の隅にいちぢくが一本立つてる。そのまた根もとに、問題の大根が福祿壽の繪の長い頭のやうに眞ッ白な太い先きびろがりの根をうへに出して、葉の方が土の中に埋め込まれてゐた。それを見ると、おせいはおかしいよりも情けなくなつた。町ばかりで育つた爲めに、こんな子供に植物上の智識がまるでなかつたと云ふことを發見した爲めばかりでなく、もう、この子までその父の眞似をしようとして、畑づくりを始めたのだ。『馬鹿だ、ねい、お前は！大根は白い方が根でありますよ！』

おせいは子供や堤夫婦にばかりでなく、何でもさわるものには當り散らしたいやうな氣がして、十一月二十九日の大安日も空しくいなしてしまつた。

それと知らぬ雄作は、毎日のやうに、はたから

『よう、巣鴨へ早く行かしてよ』とせがんだ。そして學校までをわざ〳〵ぐずねて休んだ。

『うるさい、ね！』おせいは斯うおもてでは叱つた。が、自分は長火鉢のそばなる自分の席に尻を据ゑてゐながら、――參考書をわざ〳〵自分の部屋から持つて來るだけの奮發もせず、――あのお龜も多分仕來たり通りに見てゐるらしいと思はれるのと同じやうなこよみを、そばにつツ立つてる子供に命じて、はしらから外して來させた。そして十二月の一日から繰つて行くと、三日のひがよかつた。三碧のさき負け、きのへさるだから、さきの相ひ手が先づ負けたあとへ、こちらの子供が勝ちを得つつこの家を去ると云ふ緣喜もあつた。そして向ふへ乘り込むにも午前よりは午後がいいのであつた。で、ふとその氣になつてしまつたので、三日になるその前夜、ひそかに雄作を自分の室なる置き炬燵――これは他の家よりも每年早く開らいてゐた――のそばに呼んで、『お前がさう行きたいなら、行かしてやつてもいいが、ね、一體、お前はわたしをどう思つてるの？』

『おかアさんと思つてゐます。』

『そりやア、分り切つてるが、ね、そのおツ母さんは早くからお前のお父アんに棄てられて、これまで苦勞して來たことはお前も知つてる通りぢやアないか、ね？』

『はい知つてます。』

『ぢやア、どうしてさうおツ母さんを棄てて行きたいの？』

『棄てて行くのぢやアありません。僕が勉强させて貰ひに行くんです。』

『ぢやア、お父アんの方へ行つても、このおツ母さんのことはわすれないか、え？』

『はい。』

『どう云ふ風に忘れないのです』と、おせいがまじめに念を押したには、雄作が向ふへ行けば、うちにゐるよりもいい物をたべて、きツとこの母よりも贅澤ができると云ふことがからまつてゐた。向ふへ自分が二度行つて見たところによると堤さんから聽いて想像してゐたよりも結構な暮しを田口はしてゐるらしい。あのやうすで行くと、雄作が大きくなつてあとを取るまでには大分おかねも品物もできるだらう。その時には、それを自分が雄作の實母として乘り込んで一緒に占領してしまうことができよう。が、先づ、それまで親子がかけ離れてゐて、雄作がうまい物をたべてゐるにも拘らず、自分は相變らずこれから五年なり十年なりを女ひとりの腕で貧乏してゐなければならぬかと思ふと、これが少からず渠に對して嫉ましかつた。渠は然し怒つて云へば馬鹿だから、そこまで氣が付かなかつた。そして

『どう云ふふうツて――僕が中學や大學を卒業したら――』

『そんなことは分り切つてるぢやアないか、ね？』一人前になつて母をたべさせてやらうと云ふのだらうが、おせいとしてはそんな遠いさきのことを云つてるのではなかつた。

『ぢやア、忘れないやうに時々やつて來ます。』

『それもさうだが――』ぼんやりとただ手ぶらでやつて來たツて、母を喜ばせることにはならないではないか? この要求をどう云つてそれとなく聽かせたらいいかと考へてゐるうちに『お前のお父アんは澤山おかねが取れるんだよ』と云ふ言葉が口を走り出た。『それだのに、あのお衆と云ふ女はお前の爲めにはまま母で、もツと詳しく云つて見りやア、緣もゆかりもないあかの他人ぢやアないか、ね?』

『それは知つてゐます』と、雄作は答へたが、おせいはさう云ふ問答では自分の云はうとするところへ直ぐには引き込めなかつた。

『そのことも知つてるべき筈だが、ね』と、自烈たい氣がして、『それよりもまだ大切なことがないか、え?』

『大切ツて――?』

『………』さうだ、田口の儲けるおかねをあの女に自由にさせるな、とも云ひたかつたのである。お人よしのところがある田口のことだから、こちらが曾てしたやうに、またその女房にへそ繰りをどしどしされてゐるかも知れないから。さうして、雄作があとを取る時になつて見れば、田口の財産がまるで無くなつてゐるかも。然し、そんなことは雄作が幼稚な子供として、今のところ、どうすることもできないだらう。『大切ツて、おツ母さんの爲めに、さ。』

『まま母を追ひ出すことですか？』

『…………』それには、こちらも驚いてしまつた。そしてそんなおそろしい考へが、教へられないでも、今から子供にあるのかと思つた。『さうなれば、無論、おッ母さんにも結構だが、ね――とても、お前にやアできないことだらう』

と、思はず調子をむかし英語でをそはつた疑問のやうに尻あがりにした。『それよりやア、お前、うわべだけおとなしくして、まま母のことをおッ母さんなり、おかアさんなりと云つて、お貸にもおいしい物をどッさり貰つた方がいいぢやアないか、ね？　さうして、さ』と、やッと自分の云ひたいところへ達して、子供をそそのかすやうな氣で、『さうして、さ、このおッ母さんへも時々そのおいしい物をおみやげに持つて來りやア、一番、わたしをお前がいつまでもおぼえてゐる證據になるぢやアないか？』

『分りました。』

『なんでも』と、今度は少し改まつて、『このおッ母さんをいつまでも忘れちやアいけませんよ。忘れるやうなら、初めからわたしが行かせませんから。』それからまた、別に自分がこれまでに田口家の爲めに盡して來たことを改めて云ひ聽かせた。まして向ふへ行つた以上は、お父アんの氣に入るやうにして、へたに廢嫡などされては承知しない。『さうしてゐるうちにやア、また、お前やわたしの運が向

いて來て、田口家がお前やわたしの物になるんだから、ね。』

『…………』

『分つたらう、ね。』これだけ詳しく、叮嚀に云つて置きさへすれば、雄作がその時になつて、お衆やその子達を追ひ出しても、こちらを入れて呉れるだらうと察しられた。都合によれば、時機を見てまた、雄作をおだてて今からでもお衆のやつてる惡いことを田口へうそにもこツそり云ひあばかせ、かの女を不信用にして出してしまつたあとへ、また自分が入り込んでもいいのだが、こちらの考へをそこまでは、如何に子供に向つてとは云ひながら、今のところ、うち明けるのが恥かしかつた。若い時のやうな氣持ちでではないが、自分には、矢ツ張り、田口のそばへ歸りたい氣があつた。

『分りました』と、雄作はまた答へた。が、おせいには、それが何だか實は分りもしないでゐることを利いた風に分つた顏をしたやうにも受け取れた。

そしていよ〳〵その翌くる日になつた。おせいは思ひ切つて、茶のまにつづく六疊のまの、佛壇の中央に飾つてある田口家代々の這入つてるお位牌を取り出した。それから、佛壇のそとに額としてかかげてある田口の實母のあぶら繪を取りおろした。それから、また、自分の室の貴重品が這入つてる押し入れの行李を明けて、田口家の系圖や繼母の遺品を出した。ずツと昔し流の櫛や笄はここの繼母も一度だツて使つたことを見せないで死んでしまつた物だが――。

『おせいさんは呑氣ですから、ねい』と、冷かすやうな、またわる口でもあるやうな猫撫で聲の言葉がいまだに聽えて來るやうだ。あの聲のぬしの爲めには、田口もよく父と喧嘩をしたが、こちらも一度打たれそこねて、脊中の淸子――これもその後死んでしまつた――に、きついおぢイさんの握りこぶしが當つたツけ。その頃呑氣と云はれた者がこのやうに自分ながら氣の落ち付かない者になつたのは、みなおぢイさんや田口のおかげだ。

　すべて斯う云ふ品々を――今となつて向ふへ渡すほどなら――これまで自分が一生懸命に大切にして來たことが馬鹿々々しかつた。けれども、田口の命令で仕かたがないので、すべて取りまとめて、雄作の持つて行く本や着がへと共に大きな風呂敷に包んだ。そしておぢイさんがこツそり見て樂しんでたらしい繪だけは、どうしても田口に渡さないつもりで、矢ツ張り、こちらがこツそり持つてゐることにしたが、今までのお佛壇をふり返つて見ると殆どがらんどうで、最近に死んだ文子のまだ新らしい位牌だけが殘つてるだけであつた。

　何だか寂しい氣がしながら、雄作が學校から歸るのを待つた。そして、一緒に出かけた。電車へ乘つてからも、子供のただ喜んでそは〱してゐるやうすを見ると、憎らしくなつて、今から、もう、自分が忘れられるのではないかと心配ばかりが先きに立つた。

『いい子です、わ』と、こないだも讃めて置いた初雄と云ふ、お粂のつれツ子が田口の家にはゐるの

で、雄作は直ぐそれと共に庭の蜜蜂を見に行つた。おせいはどうせ自分も晩の御はんを御馳走になるのだらうと思つて腰をすゑ、ゐない田口の歸りを待ちながらお粂と話し込んでゐた。が、自分ながら鼻くそをほじつてるばかりが能でもなからうと思ひ返して、お粂の手から一度春子を抱き取つて見ようとしたのだが、いやだと云つて、なか〳〵來なかつた。『あなたのにイさんをつれて來てあげましたのに、ねい。』赤ン坊に向つて使ふ言葉なんかは、もう、なか〳〵出てこなかつた。

『おばちやんにだツこちて見ないの』と、お粂は赤ン坊に云つた。

『…………』おせいは自分がおばちやんなどと云はれるのさへ馬鹿々々しい氣がした。田口さへ初めからちやんとしてゐたら、こちらは立派な奥さんで續いて來たのであつた。お粂を、若くて綺麗でないこともないから、お目かけぐらゐにはして置いてもいいが――。やがて田口がそとから歸つて來たので、それに言葉や目つきを以つてもたれかかるやうにして、『つれて來ましたからよろしく頼みますよ。』

『なにはどうした――位牌なんかは？』

『それも持つて來ましたが、ね』と云つて、すツかりを渡してから、まだ未練があつた。『これだつてわたしが大切に保存してゐなけりやア、殘つてるわけがないぢやアありませんか？』

『なアに』と、田口は然し何とも思はない風で答へた。『お前が子供と共に人質に取つてあつただけの

こと、さ。早くみんなをこツちへ渡して置きやア、おれもお前からそんなに勿體をつけられるわけアなかつたのだ。』

『それにしても、毎月の物アつづけて下さるでしよう、ね？』これは離婚の條件の一つとして子供の爲めに規定されてゐた。

『やるが、ね、ひとりは、もうこツちへ來たんだから、あとのひとり分だ。』

『たツた五圓ばかりですか？』

『いやなら、よせ。』

『いやとア申しませんが、ね――』おせいは笑ひにまぎらせて、それでもいいにしてしまつた。そして田口の割り合ひに寛大なのにあまへてお湯にまでも這入り、また腰を据ゑてしまひ、とう／＼晩の御はんが出るまでおしやべりをした。そして今一度、雄作に念を押して置かうと思つて、その折りを見付けてゐたのだが、雄作は少しもこちらのそばへも來なかつたし、また、こちらがあとを付けて行つても、初雄が一緒にゐるので、こちらの欲するこそ／＼ばなしもできなかつた。

『雄ちやん、おかアさんがお歸りですよ』と、お兼は呼ばはつた。

『…………』おせいはかの女が、もう、雄ちやんなどと、こちらの子をわが子のやうに呼ぶのが自分の心に憎ましく響いたのに、雄作はただぼんやりと、この時、初めてきまり惡さうに茶のまへやつて

來て、突ツ立つてるばかりであつた。馬鹿だ、な、と思ひながら『ぢやア、たべ逃げだが、おツ母さんは歸りますが、ね、これからお父アんや今度のおツ母さんのおツしやることをよく聽いて、ね、おとなしくするんですよ。』

『はい。』おづ〳〵した返事であつた。何もおづ〳〵などしないでもいいのにと、おせいは思ひながら、

『さうして、今までにおツ母さんが敎へたことも、ね、よくおぼえてゐて、ね』と一層睨らみ付けたほど熱心に自分の目で以つてそれとなくこちらの本意を渠に送り込んで見たのである。

『はい』と、また答へたが、こちらには何だかまだたよりなかつた。

八

雄作のことが一段落ついて見ると、また今度は、夫婦のことにばかりおせいの心は向いて行つた。疑つて惡かつたこともあるが、また自分としてはどうしても疑はなければならぬこともある。いつまでも口錢取りをしてゐるのが面白くなければ、ほかの商賣を何でもしたらできないこともなからう筈のその大の男が、わざ〳〵ここでこんな營業をこちらや奧さんと一緒にしようと云ふのは、第一、その意味が分らなかつた。おかねが無くなつたとは云つてながら、まだ〳〵ゆツくりしてゐるところを見るとさう切破つまつてるのではないらしい。政直を欲しい爲めかとして見ても、またさうでもな

い。

『政ちやんはあんたのあと取りになるんやさかい、これからは、もツとよく仕込んでおやりなさい。行儀も知らなければ、また亂暴すぎもします』と。

『…………』一體、そんなことを今更らとぼけて云へた義理か？

『どうせ雄ちやんはあんたの手にもどるにきまつてるから、政ちやんの方はこツちやの子に貰ひたい』とまで、うそにも、云つたことがあるではないか？　さうかと思ふと、また、政直をも田口の方へやつてしまへとか、こちらに大道易者になれとか。

『…………』易者になるのもいい。政直をやるのもかまはない。が、さうしてあとはどうなるのか？中尾の二の前をして、今度夫婦でけろりとこの家を取つてしまはうとしてゐるとしか思へないではないか？　だから、もう、當てにしないで、誰れかしツかり頼みになる人を探してゐるのだ。そのあひだに、堤夫婦が出て行つてもかまはない、もう、こちらはそれとなく出て行けよがしにもしてゐるのだから。

ほかの客は不平を云つてよく出てしまうが、默つて長いあひだゐてイて吳れる二階のお客さんで、鶴見さんと云ふのは、遞信省へ勤めてゐるだけあつて、物もよく分つた人だと思つてゐた。薄情な田口のことから、こちらの苦勞して來たいきさつをすツかり云つて聽かせたから、直ぐに同情して

れからほかの人のやうな不平も云はずにゐて吳れたのだ。が、今度は、いつのまにか、この人を人の惡い堤が——特別に、こちらへは知らせないで附けたおかずか何かで——買收してしまつたかして、堤のやうすをこツそり相談して見ても、鶴見さんは

『まさか——わたしが話をして見ても、さう云ふ人物ではないやうですよ』などと、辯解がましいことを云つた。

『あなたは知らないからですよ。』おせいはむツとして、それツ切りにした。そして赤坂のをばのところへでも行つて見ようかと考へたが、これには、また、文子の四十九日にくばる物を忘れてしまつて、その時機を失つたので、ちよツと行きにくくなつてゐた。ほかの方を略したので、つい、ここのをばのことをも思ひ出しそくねたのだ。で、家のことは結局子供に關係があるのだから、子供の爲めとして田口も相談に乘るだらうと考へて、ふだん着のままで渠をまた尋ねて見た。

雄作は每日電車に乘つて芝の學校へかよつて來るので、まだ歸つてゐない時間であつた。が、每日のやうすは學校の歸りにちよツと立ち寄つて語つて行くので。別に、今渠に會つ聽てきたくもなかつた。が、

『お前は全く呆れた女だぞ』と、田口から直ぐ叱られてしまつた。

『…………』雄作がこちらとの密約をうち明けでもしたのかと、おせいはあたまがふら〱するまで

取りのぼせた。が、幸ひにも、このことではなかつた。
『雄作のからだぢうに掻きむしつたあとが雁がさのやうになつてるので、多分しらみがわいてるのだらうと思つて、けさ、女中にその襦袢と寢卷きとを調べさせたら、果して白い玉子や麥つぶのやうなのが行列してゐたぢやアないか？』
『まさか――』おせいは渠の話が詩人や小說家だからおほ袈裟過ぎるのだと見て笑つて受けた。尤も、多少しらみがゐることは自分のからだにも分つてゐたのだが――。
『默れ、馬鹿！　手めへが甲斐性なしの、ぶしやう者であつたのは昔からのことだが、まさか、それほどとは思はなかつた！』
『…………』かの女は自分の笑ひをとめて、まだ半信半疑であつた。そしてどう答へたらいいのかとまご付いてると、田口は話を別なことに持つて行つたので、ほツとかたが拔けたかと思へた。ところが、また、それもこちらの落ち度のことであつた。
『けち臭い衣物を別に子供につけて來たのはまだしもだが、』『それがまたどれもこれも寸法が合つてゐないで、みんなちぐはぐだと云ふのだ。』『まるで成つてゐないぢやアないか？』
『前はば六寸五分、後ろはば七寸五分、そで幅八寸五分ぢやア、まるで女のおとな物ですよ』と、お粂も口を出した。『いくら肩あげをして見ても、そで幅がひろいから、どうにもできないぢやアござい

ませんか？　たとへ、襟かただけが二寸になつてゐたツて？』
『………』『それではおほかみがころもを着たやうになるのは、こちらにも分らないことはない。
『そのうへ、また、かた〳〵のそで幅が八寸五分で、かた〳〵のは八寸足らず。それに、そでくちと來ちやア、男の子だのにたツた二寸七分とは、ちよツと考へて見ても、三つばかりの子供のよりも小さ過ぎるぢやアありませんか？』
『そんなことが如何にわたしだツて――わたしだツて！』向ふがわざとそんなことを云つてこちらを責めるのでなければ、一體、どうしだのたらうとびツくりして目をきよと付かせた。そんなことは、しらみとは少し違つて全く思ひも寄らぬことであつたので、おせいは不思議に思ひながら、『むかしですが、わたしは裁縫學校も出て、教員は正教員の免狀を取つた者ですから、如何になんだツて、そんな筈アないでしようが、ね。』
『まだそんなことを！』お粂も遠慮がなかつた。が、田口は一層あら〳〵しく、
『筈アないツて』と、こちらをおそろしい目つきで睨らみ付けながら、『實際あるぢやアないか？』
『………』して見ると、氣のわさ〳〵してゐる時に縫つて、そんな狂ひのできたのを知らなかつたのだらうかと、おせいも少し自分で考へて見た。そして相談しようと思つた家のことも、また何とか叱り飛ばされても詰らないから、云ひ出せないでしまつた。また、ただでお湯に這入れると思つた事

もやめにして。

すご〱歸宅してから、先づ、こツそりと、おせいは自分の部屋で襦袢をぬいで、見た。自分も度度かゆいのをおぼえるからである。すると、田口の云つたことが萬更らうそでなかつたのに、自分ながらもぞツとした。實際に、麥つぶのやうなのもゐた。白い玉子もあつた。炬燵のそばで肌をぬいだまま、それをつぶしてゐたので、その氣味がよさに、暫らく肌が寒いのを忘れてゐた。

　そして氣が付くと、右の腕も、左の腕も、總毛立つて、粟つぶだらけだ。これだから湯錢へ行くことも――直ぐ風を引くので――嫌ひなのだが、今少し寒いのを辛抱して、かゆいところを長く延びた爪のさきで痛がゆいほど搔いた。ぽり〱音がしたが、見ると、或爪のあひだには黒いあかと共にちよツと血が附いてた。それと思ふところを念の爲めに指のさきで當つて見ると、肩の後ろあたりは粟つぶのほかにまだぶつ〱ざら〱した物が一面のやうだ。これが田口の所謂搔きむしつたあとか知らんと思へたので、今度は自分の腕のあたりをさすつて見ると矢ツ張り、それがあつた。

　身ぶるひして襦袢を新らしいのと着かへた。寢卷になる時でさへ、ぬくもつてる襦袢だけはぬがないのだけれども――。そして古いのを丸めて、がんくとか云ふ人の梅に鶴の掛物――これは田口が忘れて置きツ放しにして行つた切り、四五年もこの儘になつてる――のがかかつてる置きどこの間の隅へ投げた。あすでも天氣がよければ煮え湯をかけて洗はうと思つてだ。

ところが、あひにくにも、たツたそれだけ肌を出してた爲めに、風を引いて二三日、臺どころのことをお竹さんにまかせて自分の部屋を出なかつた。その後、氣が向いて共同井戸端へ出て、自分のきたない襦袢を洗つてゐると、こちらの一軒建ちと横に向ひあつた二階長屋のうち、その入り口が丁度井戸のそばについてるところの女、大川さんと云ふのが一緒に洗濯をした。

大川と云ふのは、もと酌婦か何かしてゐたので、人が惡いと地主のうちでも評判してゐる。そしてこちらもさう親しくしなかつた。が、話をしてみると、そんな女にしては正直さうなところもあり、また年輩もこちらの話し相ひ手には都合のいい方だ。

『二階に置いてあるのはわたしの甥で、さる會社へ出てゐますが、云つてみればそれにたべさせて貰つてるやうなものですから、ね、わたしも何か別に初めたいと思つてますの』とも云つた。

『…………』して見ると、多少おかねを持つてるだらう。それをこちらの營業につぎ込ませて、をんな同志で經營すれば、堤と云ふ男あひ手よりもやり易くはないだらうかと云ふ考へが出た。

『まア、どうです、お茶でも一杯』と云ふのをしほに、洗濯がすむと、そのうちへあがつて見た。そして田口のことや自分の身の上ばなしをしてから、堤夫婦のことをも自分の考へてる通りに說明して、

『それでどうでしよう、つまり、わたしの家を奪ひ取る算段をしてゐるのぢやアありませんでしよう

か』と聽いて見た。女だけれども、大川さんは鶴見などよりも分つてゐて、直ぐ、
『そりやアそれにきまつてます、わ、ね』と答へた。
『さうでしよう！』おせいは向ふも丁度こちらの意見と同じであるのが嬉しかつた。『して見ると、わたしはどうしたらいいでしようか、ね？』
『あなたもお人がいいんです、わ、早くお斷りなすつたらおよろしいのに！』
『それがまた六ケしいことがあるんですよ』と、おせいは向ふの機嫌に取り入るやうに笑ひながら顏をしがめて見せた。『田口も承知の上で來させたんですから、ね。』
『だツて、あなた、田口さんの物でなけりやア、田口さんが反對するわけアございませんでしよう。』
『それもさうです。ね。』矢ツ張り、大川さんの考へ通り、自分の家だから自分がつよく出るに越したことはないと云ふ決心を得た。それに、こちらさへ承知の上なら。
『ひとりいい資本家を周旋して上げます、わ』とのことであつた。『わたしが仲に立つてうまくさへすれば、きツと物になる人物ですから。』
『ぢやア、そのついでにどうでしよう、少し家の手入れもかけ合つていただいたら』と、こちらは話を今一つ突ツ込んで見た。堤も云つてたのだが、第一に、臺どころの流しもとが腐つて、くさいにほひまでしてゐるのだ。また、雨はところどころ漏るし、とよは外れたままになつてるし、ねだも亦が

たがたする部分が澤山できてる。家根に張つたトタンも張り換へなければ駄目になつてる。さうすると、また、ニスも塗らせなければならぬ。こんなに客が少いのでは、とても、その一つにだツて、手がまはらぬのであつた。中尾がすべてそんなことをも引き受けてたのだが、なんにも手をつけてなかつた。

『それも話して見ます、わ、さきは大工ですから。』

『そりやア、また、丁度いいぢやアありませんか？』正直にしてゐるものには、今にきツと運が向いて來ると信じてゐたのは、恐らく、これらしかつた。運と云ふものはひよツくり來るものだから、これは必らず成るとおせいは信じてしまつた。そしてよろしく頼むと勇んで、堤にはいよ／＼喧嘩を吹ツかけるつもりで歸つて來た。そして、『一體、あなたは』と堤の部屋へ行つて坐わり込み、『約束も早くきめないで、ずる／＼ベツたりにどうするつもりです？』

『…………』堤は直ぐ返事をしなかつた。こちらの計畫通り、むツとおこつてしまつて、『きめようとせんのはあんたやないか？　僕が何度たうても云ひぬけばツかりして？』

『それがいけなけりやア、いつからでも出ていただきます、わ。』

『よし、さう人を馬鹿にするなら、直ぐ出る！　これまで僕らがえいやうにだまされてたとおもや濟むこツちや！』

『何もわたしやア』と、わざと騷がないで『あなたがたをだましちやアゐませんよ。』
『べら〳〵云ふな、畜生！』
『そりやア、少しひどいでしよう？』
『何がひどい？　あんたの實のないおしやべりは昔しからのこツちや！　田口君の云ふ通り、わるがしこう、づるうて！』
『づるいのアあなたがたぢやアありませんか――わたしの困つてる家を種に利益を得ようなんて？』
『利益のないことなどに誰れがかねをつぎ込むもんか？　然し、僕は僕の利益ばかり考へたんやない。あんたが困つてるのやさかい、友達甲斐にあんたがたを助けかたがた、僕の勞力にも報酬をえようとおもたんや。それでなけりや、こんなけち臭い商賣などに初めから誰れが手を出すもんか？』
『さうおツしやりやアさうでしようが、ね。』堤さんの云ふことにも道理がないこともないやうだから、おせいは少し折れて見せた。それに、あの權幕と勘定だかさとでは、今までに出したかねを直ぐ返せと云ひ出すまいものでもないらしかつた。で、言葉を和らげて『ちやア、わたしはどうしたらいいんですの？』
『僕も少し言葉があら過ぎたけれど、つまり、豫算を立てて、これ〳〵這入つたら、これ〳〵出て、儲けがいくらあるとして、その儲けをあんたの方と僕の方とで分け合うたらえゝいのや。』

『さうはちやんと行きませんよ、斯う客が出たり這入つたりしてゐちやア、豫算なんか立ちませんから。』『思ひ出すと、田口と一緒にここに住んでた時にも、こちらのそろばんがいつも合つてゐないのでおこられどほしであつたのだから。そんなことでまた堤なんかにおこられるのは面白くなかつた。

『そら、あんたにでけんなら、僕を信じて僕にまかしなさい、僕はあんたと政ちやんとを十分にだべて行けるやうにしてあげまツさかい。』

『………』それで矢ツ張り家は向ふの物にして、こちらどもを厄介物あつかひに落してしまはうと云ふに違ひなかつた。公平な分配と云ふのは、馬鹿々々しい。そんなことか？　おせいは自分で顔いろがまた變つたと思はれるほどむきになつて、『わたし達は何もあなたがたに養つていただくにやア及びません！』

『分らない女や、なア――ほたら、勝手にしなはれ』と、堤もおこつてしまつたので、丁度いい仕合はせだと思つて、下へおりた。そして默つてこれも火のやうにおこつてお竹さんには一言も聲をかけないでしまつた。

『政ちやん、もう、堤さんの部屋へ行くんぢやアありませんよ』と命じて、おせいは政直と共に自分の室に引ツ込んでゐた。すとる、雄作がその日立ち寄つたので、渠にも堤がこの家を取らうとしたから出してしまうと云ふことを語り、然しお向ふの大川さんがいい資本家を紹介して呉れる筈だから、

この母には、評判が惡く、これもなか〳〵喰へない女だが、安心していい。大川さんは酌婦あがりで、また母の智慧と覺悟とがあつて、『正直な神さまが守つて下さるから』と云つてきかせた。

或高等學生の親

雨の續いた爲めに羽根田の堤が切れると云ふ騷ぎになつて、皆がその喰ひとめに手分けを出したと云ふ。

一

それを聽いて權造も、そのあたりに少し地面を持つてやがてはそこへも料理屋を一つ建てようと思つて意張つてるところだから、手まわりのものを呼び集めて出かけて行つた。そしてその夜一と晩を皆と一緒に寢ず働らきをした。

その朝、七時頃になつて、森ケ崎の目かけの方から使ひが來て、

『正ちやんが何だか寂しくツて、悲しさうな手紙を本店の方へよこしたさうです』とあつた。『あんまり寂しくツて、泣いてるやうすでよ。』

『さうかツ』と、權造は直ぐ氣が變はつてしまつた。今まで他のものより先きに立つて人々を命令してゐた意氣込みは俄かにどこへやら行つてしまつて、人知れずほろ〳〵と涙までこぼした。正造は今、

可愛いわが子ながらも、親の手を離れて京都の高等學校へ行つてるのである。やがては大學にも這入つて、立派な學者ともならうとしてゐるのだ。それがその中途で今度は親が戀しい爲めにまた病氣にでもなられたら溜るものではなかつた。兎に角何はさて置いても行つて見てやらなければと思ふともう、何も手につかなかつた。すべてのことを人にまかせて、先づ、急いで森ケ崎へ歸つて來た。こないだから、植ゑ木屋を入れてあるその手筈を留守でも分るやうにして置いてやらねばならぬからである。

『あんた、どうしなさる?』目かけのお絹も初めから心配さうであつた。

『どうするツて、馬鹿！早く行つてやるより仕かたがねいぢアねいか?』腰も据ゑないで、『八さんはどこだ、八さんは』と、植ゑ木屋の親かたをうら庭の方へ探しに行つて、『おりやこれからな、子供のところへ行つてやるんだからな、あとをよろしく頼むぞ！』何はここへ、何はかしこへ、そしてなんでもよその部屋からこちらの部屋の中が見えないやうにさへ、植ゑさへすりやアいいのだからと云ふ要領だけを話して聽かせた。『うちはつれ込みの客が多いのだから』と。

『さう急いだツて、あんた、まア、おひるでも早くあがつて』と云ふお絹をもふり返つて見るひまもなかつた。

『馬鹿！畜生！これがぐづ〳〵してゐられるけい』と、あと足で蹴飛ばすやうにして、來てゐたお客

さんの車に乘つた。そして山谷まで驅け付けてから自分のうちの四五臺もある貸し自動車を呼ぶまでもなく、人の自動車を雇つて東京へ飛ばせた。

本宅へ行き付くと、また、

『あなた、まア、どうしたのです、ねい、その顏は』と、本妻のおよしが怪訝さうにしたやうすをわざわざとぼけてゐるやうに見た。

『馬鹿！お絹でも心配してゐるのに、おめへは實の母親として何ともねいんか？正造が寂しがつてると云ふぢやアねいか？』

『そんなことアないでしよう。』

『なんだと。畜生！』渠はいきなり自分の妻を投ぐり付けた。わざ〳〵とぼけるならまだしも、全く感じが動いてゐないと思へたからである。『だから、手めへアぼんくらだと云ふんだ！初手にだツて、だから、おりやア京都へなんかやるくれゐなら、學校もやめさせてしまへツて云つたぢやアねいか？』

取り敢へず女中に命じてこちらの旅の用意をさせた。そしてやツと八時半の急行にまに合ふことができた。

それまでは、自分ながら、殆ど夢中であつた――子供のなさけ無ささうに泣いてるその顏が目の前

に見えるやうで。

二

自動車や電車とは違ひ、それに比べると、汽車は遲い物だらうが、けふは殊に遲いやうに思へた。そしてそれがまた癪にさわつて見ると、自分が先きに立つて早く東京大阪間の乘り合ひ自動車會社を起してやらうかと考へられた。

むかしは人力車が速かつた。そして自分はその車夫であつた。車夫から車の元締めになつた。元締めから馬車も買つた。自動車が渡つて來てから、それをも持つやうになつた。そしてそれを女房と番頭とにまかせて、自分は別にまた森ケ崎へお絹の爲めに溫泉旅館を出した。この成功が何の故障もなく思ひ通りになつて行つたのを不斷に人にも自慢してゐる自分には、自分の出世の方が急行列車よりも速力があつたやうで、今や、早くわが子のところへ行かせて呉れない鐵道院は、この文明の代に、一體、何をしてゐるのだと云つてやりたかつた。

品川は過ぎても大森は來ない。大森はとほつても、自分の別邸でまた別店のある森ケ崎の見える山谷へはまだだ。たツた今しがた自動車で逆にとほり過ぎたところではないか? せめて急行にでももツと速力を出しやアがればだが――人をこんなのろのろした汽車に乘せアがつて、畜生！お負けに

一等車を廢して、こんな窮窟な思ひをさせアがる！　おほ急ぎでかばん一つだからまだしもいいやうなものの、いよ〳〵向ふへ居つくとして行けば、おれなんぞは荷物が澤山ある！

ゆふべから眠られなかつたところの勞れた神經も手傳つてか、心が少しうツとりしてゐるくせにいらいらして、癇癪ばかりが先きに立つた。が、山谷も過ぎ、蒲田も川崎も過ぎてしまうと、多少、自分も往生して、氣が落ち付いて來た。すると、先づ、自分の兩わきに立派な紳士がゐるのに氣が付いた。思ひ出すと、自分はそのあひだへ挨拶もしないで無理に割り込んだのであつた。自分も窮窟であり、また兩方へも氣の毒だから、どこかほかのところへ移つてやらうかとあたりを見まわして見たが、別に明いてる席がなかつた。よんどころなく、申しわけのつもりで、どちらへとも決めずに、

『京都へ行つてる子供があまくツて親の顏が見たくなりましたので』と云つた。

『…………』兩わきのどちらも返事がなかつた。

つまり、獨り言のやうにさせられてしまつたので、今度は豪はらが立つて、畜生！　と云ふ氣になつた。そして、どうせ同じ料金を出して乘つてるのだから、意張つてやれと、右左に頓着なく幅をひろげて、心では自分のことばかり考へて見た。

可哀さうに、およしはいきなり投ぐられてしまつたのだ。然し、その申しわけには、かの女ばかりでなかつた。自分はお絹をも叱り飛ばして出た。それに、今川崎の手前をとほつた時にもちよツと思

ひ出したのだが、羽根田の堤防のことをどう云ふ風にまかせて來たのか、薩張り分らないのであつた。また、森ケ崎の方の庭は、どうせ、自分がゐなければ、自分の氣がすむやうにはならないのである。横手の堀ぷちや部屋々々の緣さきへ植ゑる木ぐらゐは、この一二年來つづけてさせてあるのだから、八さん獨りでも呑み込めてるかは知れない。が、玄關に向つて中心石にをあしらつた松の植ゑ込みは、他日自動車があすこまで來られるやうになつたら、その車まわしにするつもりで、その右手の堀を二間ぶんばかりも埋めさせたばかりなつてる。樫やもみぢやいろ〳〵の置き石は、どうしても、自分が差配しなければ思ふやうに行くまい。自分は自分の庭をどこか大きな庄屋さんの庭のやうに、植ゑ木と植ゑ木とのあひだをどこまでもまわつて行けるやう、上品にまた高品に造らうと思つてるのだ。が、それは八さんにはとてもやれさうもないのであつた。

　だから、向ふへ着いたら直ぐ、

『ニハノウヱキチウシ』とでも云ふ電報を打つことに自分できめてしまつた。前庭ばかりでなく、うら庭も同じことだ。或お客さんなどは

『どうだ、おやかた、さう、木ばかりに凝らないで、少し草花も植ゑたら』と云つて呉れる。が、自分はそれが嫌ひなのだ。

『花は咲いてる時は綺麗でしようが、どうも、散りかけるときたないもので――それがわたしの趣味

に合ひません。それに比べると、どうしても常磐木は大きく威勢があつて、結構なものでして。』

さうだ、汽車に乘つて考へて見てもよく分る。市中のうへをとほつてる時は、人のうら庭によく西洋花などを作つてあるのが見えるけれど、あんまり感心したものではない。それよりも、もう、斯うして神奈川をも越して見ると、威勢のいい松並み木は人の心を生き〳〵させて、なか〳〵にうらやましい。自分は一番うらの堀を海の沙で埋めて、あすこを松ばやしにしようと思つてるのだ。若し人間の力でやれるものなら、斯うして今、じツとしてゐるも、汽車の窓から眺められる山々を移して、その松ばやしにあしらひたい。

そして、もう、その松ばやしができ上つた時のことを考へてると、今から既に植ゑてある松がみな大きなやつになつてゐる。自分はそれを見上げた。いい氣持ちに醉つて、藝者どもの歌などには飽いてゐた。そしてそのはやしのあひだの白い沙の上を松かぜの音を聽き樂しみつつ、誰れよりも先きに歩いてゐるのであつた。

すると、その後ろから、ちよこ〳〵したものが附いて來て、

『お父アーん！　お父アーん！』

『…………』自分には、今、正造が拾歲以下の子供に立ち返つて、鼻を垂らしながら泣いてる聲が聽える。『おう、顏が見たいか、見たいか？』

さうだ、庭のことどころではないのであつた。自分は、都合によれば、渠の高等學校卒業まで三年間を京都で一緒に住んでやらうかと考へてたのだ。日本橋の本店の方は、もう、二三年前から番頭にまかせてあるので、今更ら少しも心配するには及ばない。旅館の方はお絹がゐるし、それにはまたかの女の親や弟もついてるから、それくらゐの間は大丈夫だらう、たまには汽車で來て見てやつてもいいのだから。

　して見ると、自分は向ふで何をしよう。もう、元の車夫にはからだが堅くなつてて駄目でもあり、また子供の爲めにも親が車夫では肩身が狹からう。さうかと云つて、ただ遊んでゐれば、無駄なことだし、そして自分のからだまでが惡くなつてしまうだらう。まんざら、何も經驗のないこともやれない。それには、自分の好きな植ゑ木をいじくりながら、呑氣に植ゑ木屋でもやるのが一番いいかも知れない。然し、それも子供の爲めに不見識だとでも子供が云ふなら、考へ物だ。兎に角、向ふへ行つたうへの相談づくにしてからがよからうと思つた。

　何しろ、正造は自分に取つては獨り子も同様だ。お絹にもひとり十歳のがあるが、女の兒で、而も妾腹である。本妻の子はあとがみな死んで、今は正造だけだ。それも去年肋膜をわづらつて、おほかた生命を取られるところであつた。

『どうしてもこれは一かばちかのあら療治をしなければ』と、病院の醫者は云つた。

『先生、もう、あきらめてゐます』と、自分はあたりの看護婦どもにもかまはず男泣きに泣いた。『ただおかねはどんなにかかつてもようございますから、萬に一つのいのちを助けてやつて下さい！』
『それぢやア』と、醫者はいよ〳〵自分を立ち會はせて、渠の左りの胸のうへの方を裂いて、あばら骨を二本だけ切り取つた。その一本の方はまだ半分ばかり惡かつたのだが、それをも取らないでは腐りが殘るからと云ふのであつた。
その爲めにいまだに健康が人並みでないやうだが、いのちだけは取りとめることができた。そして高等學校へは入學が一年後れて、ことし這入つたのである。だから、向ふから手紙が來るたんびに、また病氣だとでも云ふ知らせではないかと、心がひや〳〵してゐた。そこへいよ〳〵今度の手紙だと云ふのだもの、寂しがつて、なさけながつて、それから子供がその爲めに熱でも起すと、今度こそは、もう、助からない病氣にかかつてしまうかも分らない。
あたまを痛める學問もよしあしだ。わざ〳〵あんな遠方へ子供を手離して、親から見れば、如何にも子供が可哀さうではないか？
『父上も母上も安心して下さい。僕もこの頃では澤山の友達ができて、勉強をするにも張り合ひがあります』などと云つて來た。この前の手紙の威勢がいい文句をこちらはまだよくおぼえてゐて、なかなか忘れもしない。それが若し藝者かなんかの手紙なら、浮かれたお客はかねのなくなつたのを最後

にそれなりにも、なつてしまはうが、おや子のあひだはさうでないのが互ひに頼母しくもあり、樂しみであるのではないか？それだのに、直ぐ今度はそれと打つて變はつた反對の文句だとすれば、熱でも出たやうに俄かに親を戀しくなつただらう。

その然し可愛い心ねを思ひやると、われ知らず涙がこぼれ落ちた。それに氣が付いて、それを胡麻化す爲め、自分の目に汽車の石炭ぼこりでも這入つたかのやう、わざと大げさに目をしよぼ付かせながら、あたりを見まわした。

すると、その以前から、こちらのやうすを見て察して、親切にも同情してゐて呉れた人かして、丁度眞正面に腰かけてゐた男で、これもインバネスを着てゐるのが、

『なんですか、あなたの御子さん、御病氣におなりになつたのですか』と尋ねた。

『なアに』と、こちらはわざと威勢をよくして見せて、『病氣ならまだしもですが、下だらない親の顏を見たいと云つてよこしたでさア。』

『は、は、はア！』インバネスは少し人を馬鹿にしたやうな笑ひをしたが、『それなら、まだ結構でしよう。わたくしのはまた娘ですが、危篤だと云ふ電報がかかつたのです。』

『…………』こちらはむすめと聽いて自分の子供にやがてはいい嫁をきめてやらねばならないことを思ひ浮べた。不斷からどこかの女學校で出來のいい、そしておとなしいむすめツ子を世話して呉れる

ものがあらばと考へてるのだ。どんな緣になるまいものでもないから、ふと、その氣になつて、『どこにおいでです』と聽いて見た。

『大阪ですが、な。』

『矢ツ張り、學校へでも?』

『いや、もう、かたづいてるんですが――』

『そりやア』と、ただこちらは答へた。かた付いてるのなら、そしてそれがくたばりそこねてゐるのぢやア、お話しにならなかつた。で、自分は自分がいつも人に自慢することの一つをここへも持ち出して、『わたくしのはまだ京都の高等學校へ行つてをりまして』と云つた時それでもまた思ひ出し泣きをしかけた。が、直ぐ親たるのけんぺいを見せるやうにして、から笑ひになつて、『馬鹿な子で――學問はできるさうですが、な、まが親の乳の戀しい方で。』

『いや、その方がまだ素直で結構です。おいくつです?』

『二十一歲ですが』と、がツくりした構へになつて、『去年肋膜をわづらひまして、あばらツ骨を二枚切り取りましたので、一年入學が後れました。』

『そりやア大變な御療治でした、な。けれども、まだお可愛いところがあります。親のかねをうそを云つても無心して、十代から女郎買ひや藝者買ひをするのもよくあるやつで、ありやア一番困ります

から、な。』
『いかにも』と答へたが、こちらはこいつもそんな息子を持つてゐるのだ、な、と察しられた。そんなのに比べれば、うちの正造などはまことにおとなしくて誇るに足るべき學生だらう。

三

話し相ひ手のむす子やむすめよりも自分の方のはまだ〱ましで、相ひ手の云ふ通り結構であるのに相違ない。これに少し安心した爲めか、こらへこらへてゐた眠けを催して來た。この時だと思つてかばんに用意して來たウヰスキを出した。これを小さいコップに一二杯もやれば、子供に對する心配も一ときは拂ひのけられて、ぐツすり休める筈であつた。
『どうです、一杯？』こちらはわざとにも景氣をよくして見せて、先づ、そのコップを正面の人へ突き出した。
『いや、どうか御勝手に。』
『………』こちらがわざ〱飲ませてやらうと云ふものを、何も恥ぢをかかさないでもいいではないか？これの一杯ぐらへ、たとへ遠慮されたツて、二十錢か三十錢かの得にしかならないのだと思ひながら、ちよツとむツとしないではゐられなかつた。ウヰスキの一瓶や二瓶の代などは、うちで使つ

てる多くの若い衆若しくは多くの女中の、たツた一人の鼻くそからでも浮いて出るのであつた。

日本橋で〇〇自動車と云やア、また森ケ崎で〇〇旅館と云やア、少し氣の利いてるものなら知らないやつアないのだ！　寢臺が滿員でなけりやア、場所もお前らと一緒にはゐなかつた。畜生、ぢやア、勝手にうらやましがつて見てゐろと云はないばかりに、自分の勢ひにまかせてぐびり〲、二杯でやめるところを三杯、四杯つづけて見せた。すると、そのあとから直ぐいい心持ちになつて來て、うとうとし初めた。そしてはたにどう云ふ人がゐたのかも忘れてしまひ、またどこを自分が通過してゐるのかも知らなかつた。

目がさめると、夜になつてゐたが、矢ツ張り、汽車ののろいのが癪にさわつた。

『畜生！　早く東海道を自動車をとほさねいぢやア』と、獨り言を云ひつつ、またウヰスキに訴へた。

さう云ふことが今一度あつてから、今度ボーイに呼び起されて見ると、京都驛であつた。すツくと立ち上るが早いか、何よりも早く子供に會ひたかつた。あわてて車臺の中を飛び出し、改札口を出て車に乘つてから、忘れ物はなかつたか知らんと考へて見ると、かばんはちやんと持つてゐた。

『どこへ？』

『知れたこツた、高等學校の寄宿舍でい！』

『もう、休んでをつて、とても、あきますまい。』
『一體、なん時だ?』
『もう、十二時を過ぎてます。』
『そんなことアあるけい、馬鹿!』この汽車は確かに七八時ごろに着く筈であつたのだ。
『馬鹿と云はれても仕かたおへん』と、車夫は平氣であつた。『途中で故障があつて、この汽車が四時間以上も後れましたのだツさかい。』
『へい——?』こちらはそんなことを夢にも知らなかつた。自分の金時計を出してあたりの電氣の光りにすかして見ると、成るほど、車夫の云ふ時間に當つてゐた。『こりやアおれも驚いた。誰れもそんなことは云つて呉れねいもんだから、おりやア今まで知らなかつたんだ。』然し、このまゝ、こんなところに宿をきめて、あすを待つてはゐられなかつた。そして心が一層あわただしくなつた。『よし、なんでもかまはねいから、急いで行つて呉れ! おりやアおほ急ぎで子供に會ふ用があるんだ!』
學校の門へ行き着くと、自分から先づ車を飛び下り、貫ぬきのかかつてる幅のひろい頑丈な門の戸に取りすがつて、番人を呼び起すつもりで、それをがたがたさせながら、
『もしもし、もしもし』と呼びつづけた。が、返事もなかつた。
『旦那、どうせあきまへん』と、車屋は入らないことを云つた。

『明かねいことがあるけい？おりやア明けて見せる！』また、一層ひどくがたく、もしくをやつて見た。とても起きて來さうがないので、インバネスをぬいで車屋に預け、おもて付きの履き物を門の下から押し込んで、自分はその高い門をよぢ登つた。そしてどうやら斯うやら向ふがはへ飛び下りることができた。

それからは、この九月に子供と一緒に來て、およそ勝手は分つてゐた。先づ、門番の小屋を叩き起し、急用があつて子供に會ひに來たことを述べた。が、渠はただぶりく怒つてゐて、

『門を飛び越えて來るとは不都合や』と云つた。

『さうおツしやらねいで、どうかこの親を助けると思つて下せい。子供の爲めに大至急の用事がごぜいまして、わざく東京からやつて來たんですから。決してあやしいものぢやアごぜいません。歸りにも、若し門をあけていただくのがお邪魔でしたら、わたくしは決して明けツ放しには致しません。自分でまた乘り越えて行きますから。』もみ手をして泣き付くばかりに賴んだ。

『………』門番は返事がなかつた。ただじつとこちらを半ば寢ぼけづらで見つめてゐた。が、それでも見のがしてやると云つてるやうすであつたから、なほ念の爲めに、

『どうかお許しを願ひます』と云つて置いて、ちよツとあと戻りをして、車屋に、『おめへ賴むぞ。そこに待つてろよ。』

『へい。』
『………』どうせここには子供と一緒にとまれないので、どこかの宿まで引ッ返さなければならぬことは分つてゐた。兎に角、一度親のかほさへ見せて置けば、今夜一と夜ぐらゐは子供も安心するだらうと思へた。

　夜目にもうらやましいほどいい植ゑ込みのある庭を向ふへ進んで行つて、またまかなひ部屋を叩き起した。そしてまかなひの細君らしい、でぶ〳〵肥えた、見ツともない女の出て來たのに、實は、これこれで、今、門番さんにも承諾を得て、杉本正造と云ふ子供に會ひに來たと云ふことを告げた。

『それでは』と云つて、かの女は蠟燭をつけると、暗い廊下を應接室へ案内した。

『………』けち臭い！　苟も高等學校の寄宿舍ともあらうものが、客が來ても電氣一つ附けないのか？向の爲めに高い月謝を取つてるのだと云つてやりたかつた。そして倚子にかけてもろくに腰が坐ゐらず、その細い西洋蠟燭のらふがテーブルの上でじり〳〵と燒けてゐるのを、待ちどほしい胸をわくわくさせながら、見つめて見た。すると、その火が子供の顔になつたり、その顔がまたけち臭い蠟燭の火になつたりしてゐた。

　やがて、ひらき戸が明いた。

『おう、正造！』

『お父アん！』

『………』これぢやア、まるで、自分ながら、新派の芝居を見たやうだと思つた時には、もう、然し權造には涙が一杯出て、自分の目をふさいでゐた。

『急用ツて、いきなり、どうしたんです？』

『どうしたツて、おめへ』と、こちらはせき込んで、『おめへが親を戀しくなつて寂しいと云つてよこしたんぢやアねいか？』

『へい！　そんなことをまた誰れが申しました？』

『………』あんまり呑氣さうなのにこちらは一層不思議であつた。あたまを使つた上に、寂しさが嵩じて、このたツた一二日のあひだに馬鹿にでもなつたのぢやアないかと。『誰れつて、おめへはどうしたんでい。おれが羽根田の堤の工事に加勢をしに行つてるていと、お絹の弟がわざ〳〵つけひに來て、おめへが獨りで京都に寂しがつてるツて云ふ手紙をよこしたと云ふぢやねいか？　おりやア氣が氣でなくなつて、その爲めにわざ〳〵おほいそぎで、取る物も取り敢えず、飛び出して來たんだが――。』

『何かの間違ひです、ね。』

『へい！』また一つ意外なことに驚かされたのである。『ぢやア、なにか、おめへが親に會ひていツて

云つてやつたツて云ふのアらそか？』

『少くとも』なんて、正造は生意氣な言葉を使つてうち消した、『間違ひです、ね。』

『ぢやア、まア、よかつた。』間違ひとしてもいい方への間違ひであつたが、それだけ馬鹿を見たのはこちらだ。『おりやアまた、そんなにおめへが獨りでゐるのがつれいなら、おれもこツちへ來てやつて、かた手まに植ゑ木屋でもしようかツて、みち〳〵考へて來たんだ。

『僕ア、お父アん、いかになんだツてもう、二十一歲で』と、正造はあまへるやうな、またこちらをあざ笑ふやうな顏つきで『高等學校の學生ですよ。さう親に御厄介はかけないでもすみます。』

『そんなら結構だが、な』と、こちらは汽車のうへで向ふのインバネスが云つた言葉を思ひ出して使つた。が、何だか馬鹿々々しい氣がして、今まで張り詰めた心が俄かにがつかりとゆるんでしまつた。口をとんがらかせて、半ば獨り言のやうになつて、

『どうしたつてまたこんな間ちがひができやアがつたんか？』

『あア、分りました』と、正造はこちらを本氣に受けて答へた。『僕アおツ母さんに手紙を出したのです。その手紙には僕の同級生で、可なり多くゐる支那人のことを書きました。あア云ふ人々が本國を遠く離れて來て、さぞ親も戀しいだらうが、默つて勉强してゐる。まして僕らは幸ひにも割り合ひに近く兩親を持ちながら、勉强をしないのはうそだから、一生懸命にやつてるから安心して下さいと書

いて置きました。』

『ちやんころのことならどうでもいいが、な』と、こちらは子供に對してながらさう云はれて見ると些かきまり惡くないこともなかつた。それをまぎらせながら、『そんな手紙はおりやア讀みやアしねいが――。』

『ぢやア、誰れが見たんでせう？』

『おめへがおツかアにやつたんなら、おツかあだらうが――。』

『おツ母さんなら、それほどのことが分らないこともないでしよう。分り安いやうに、わざ〳〵澤山の假名を入れて書いてやりましたから。』

『…………』ぢやア、こちらの目かけが讀んだとでも云ふのだらうが、さう云はれると、こちらもかの女の爲めに辯解をしてやりたくなつた。『然し、お絹だツて、およしほどにやア無學ぢやアねい。』

『ぢやア、誰れが讀みちがへたんでしよう？』

『多分、ぢやあ、鶴公だらうよ。あいつ、畜生――うちの女中に手をつけアがつたのを穩便にかかアにして置いて貰はうと思やアがつて、近ごろ特別におべつかばかりしやアがつて、な』と、お絹の身代りに、つい、その弟の鶴太郎を出した。若しほかのものらに間違ひがないとすれば、これがその姉の言づてを聽き違へたか、云ひ違へたかして、こんな飛んでもないことに自分をさせてしまつたのだ。

『ほんとうでもねいことをただ、ほんの、おれの機嫌取りにぺら〱としやべりやアがつて！』斯うは自分もおもてに、ここにはゐない鶴太郎のことを怒つて見せたものの、一つには、これも子供に對して親の羽ぶりを示めしたつもりだ。親がみんなから親かた〱とおそれられ、敬まはれ、そしてまたその結果としてちやほや云はれてゐるのは、その子の爲めにも誇りとなることであらうと考へられた。

『然し、お父アん、そんなことでこの夜なかにまでこの寄宿舍を驚かしちやア困るぢやございませんか？』

『う、う！』

『僕の爲めにわざ〱ここまでも來て下さつたのはありがたく思ひますが、僕は今學校に身をまかせた以上は、それだけおほやけの人になつてゐます。おほやけから見れば、親子の情愛なんか一つのわたくしごととしか思はれてゐません。して見ると、このわたくしごとの爲めにこの寄宿舍の規則を破らせては、僕がみんなに對して申しわけがないのです。』

『…………』こちらはぐツと行き詰まつてしまつた。そして子供にやり込められたも同様だから、ちよツとむツとしないではゐられなかつた。が、子供の云ふことも道理は違ひなかつた。いきどほらしいやうな、また自分ばかりが心づらいやうな、自分では何とも云へない氣ぶんになつて、すツくと倚

子から立ち離れた。『尤もだ、尤もだ！　おりやア惡かつた。許して吳れ。ぢやア、な、おりやこれで直ぐ歸る。おめへの無事なことを見さへすりやア、おりやアそれで十分だから、おめへの爲めに直ぐまかないの方へもあやまりを云つて、引き上げよう。』

『氣の毒ですが、どうかさうして下さい。僕はこの通り無事で勉强してゐますから。然し、まかないは、もう、寢てゐましようから、僕が出ぐちを敎へます。まかないの方へはあすよく云つて置きますから。』

『ぢやア、どうか賴む』と云つて、こちらはわが子に對してながら少し冷たいきまり惡さを今一度感じた。がツかりの上にがツかりを重ねてだ。そしてあたふたと子供よりも先きへその室を出た。が、テーブルに置き殘された蠟燭を手にして正造があとからついて來たので、學校としてこんなことをさせて置く不都合をまた思ひ出した。そしてこれも、不興さうにしてゐる子供に向つて機嫌を取り直させるやうに、『どうしてまた學校が電氣をつけさせねいんだ？』

『大きな聲はよして下さい――もう、とツくに消燈時間が過ぎたのです。僕らはこの頃試驗ですから規則に反してこツそり蠟燭をともして今まで勉强してをりましたけれど――。』

『えい』と、またびツくりして、『まだ起きてたんけい？　もう、一時を過ぎたぞ。』

『えい。』

『………』こちらは子供に對するきまり惡さと氣の毒さとの理由がまた一つふえたのであつた。試驗勉强の邪魔をしたのだ。そして自分の爲めに自分の子供が落第でもして見ろ。つまり、また自分の損だ。それだけ月謝や食費をただ奉行させたも同様だから。少し小さい聲で、『然し、またからだを痛めては困るが、なア。』

『なアに、大丈夫ですから。御安心を願ひます。』

『ぢやア、な、これでおりやア直ぐ東京へ歸るから、な、しツかり勉强しろよ』と云つて、その寄舍を出ぐちのところで子供に立ち別れた。それでも、子供は無理に門まで送ると云つたのだが、こちらはまた例の乘り越えをやるつもりであつたから、たツて押しとめたのであつた。

四

正直な車夫は寒いのにそこにじツと待つてゐた。あわを喰つた爲めに持ち去られても仕かたがなかつたインバネスだが、それを受け取るが早いか、權造はからだに纏つて車に乘つた。そして再び京都驛へ來て、また一番早く乘れる汽車の人となつた。幸ひにも、それがまた夜なかの急行で、今度は寢臺も取れた。

それでやツと心が落ち付いて見ると、自分はあんまり子供を可愛がつて失敗したのであつた。けれ

ども、子供は思つたよりもおとなじみてゐた。そしておほやけに出たら、親子の情愛なんかわたくしごとだと云つたのには、確かにこちらが目かけを持つてゐるのをもまたそれとなく攻擊したやうであつた。だから、こちらもそれとなく辯解もして置いたが折角、一生懸命に行つてやつたのに、その親の出會ひがしらをこちらがぶん投ぐられたやうな氣がして、少し憎くもなつた。が、無事に勉强してゐるのだから、まア、安心なことは安心だ。夜が明けてから今一回もツくり逢ふことにして置きたくないこともなかつたけれども、試驗最中だと云ふのだから、さうも云へなかつた。何しろ、うまくやつてて呉れさへすれば、つまり、それでいいのだから――。

來た時とはまるで違つて、らく〳〵した氣持ちで歸つて來た。東京驛へ着くと、直ぐ森ケ崎へ向はうか、一と先づ日本橋へ立ち寄らうかと、心がちよツと迷つたのである。が、考へて見ると、およしをわけもなく投ぐり付けたりして出たのであるから、それとなく一應子供の無事であつたことを知らせてやる氣になつた。そして驛の車に乘つてから、みち〳〵自分の配下も働らいてるのに出會ふと、また子供と同樣に可愛いやうな氣もした。

本店へ行き着くと、

『どうでしたか』と、およしはこちらの失敗を前以つて知つてたかのやうに冷かし笑ひの目つきを以つて尋ねた。それがこちらには矢ツ張りちよツときまりが惡かつたので、

『なアに』とわざとそらとぼけて答へた、『おりやアおめへなんかよりやア子供の方がずツと可愛かつたんでい！』

『まだひとりありますでしよう？』

『馬鹿！』こちらはおよしがその實の姪なるお絹のことを云つてるのだと思へた。あれをこちらの物にしたことが發見された時には、およしもまだ少し今よりは若くツて、燒き持ちの爲めに隨分怒つたけれども、今では、もう、慣れツこになつて、女同士も行き來し、お絹の生んだ女の子をもおよしが引き取つて學校へかよはせてゐる位だ。『然し、行つて見りやア案外元氣がよくツて、な、あべこべに親を意見しやアがつた。』

『だから、云はないこツちやアなかつたのに。』

『おれが知つたもんけい！鶴の野郎、あン畜生、いい加減なことをぬかしやアがつて』と答へた。そしてこれを叱り付けて來るのを當座の口實にして、こちらは直ぐ店を出た。そして實際に癪にさわつてもゐたのであるから、森ケ崎へ來ると直ぐ、お絹の目の前へ鶴太郎を呼び付けて、あんまり人を馬鹿にしたと叱つた。

するとヽ鶴太郎は例の飛び出したやうな目をむいて、おこつてるのか泣いてるのか分らないやうすでこちらを見つめて、

『わたしは姉に云はれたことをその通りに申し上げたのですが――』
『…………』こちらはさう云ひ返されると、また自分の怒りの目當てを別に拵らへなければ氣がすまなかつた。『ぢやア、もと〳〵誰れが間違つたんでい？』
『わたしだツて』と、お絹も不思議さうであつた、書いてあることがさうでしたから、その通り云はせたのですが――では、まア、親かたも讀んで御覽なさい、な。』
『…………』して見ると、間違ひのもとは矢ツ張りかの女にあつたらしいので、もう、仕かたがなかつた。女中どもも、こちらが帳場の坐にすわつてるのを取りまいて、心配さうにしてゐるので、その前でここのおかみをしてゐる自分の目かけを叱るでもなかつたから。
お絹は來狀ばさみから封筒に這入つた厚い手紙を出して、こちらの手へ渡した。が、もう、一たびその本人から聽いて來て滿足したことをわざ〳〵苦勞して、目を痛めてまで、讀むには當らなかつたので、火鉢の猫いたの上へそのまま置いた。そして女中どもにまでも自分の子供のことを自慢するつもりで、斯う云つた。
『正造の野郎、この頃試驗中で、なア、おれが行つたのア十二時を過ぎてたのに、まだ勉強してゐやアがつた。』
『そんなに勉強するのもいいけれど――またあたまでも痛めて病氣になつては』と、お絹もさすがこ

ちらの子だから心配さうにした。
『おれさう云つたが、な、あン畜生、生意氣にも、『僕も、もう、二十一歳で、さう親の御厄介にならねいでもいい』ツて云つてな、あべこべに、親に向つて意見などしやがつでつた。』
『おほ、ほ、ほツ』と、女中どものうちに二三名は笑つた。
『それでも、利口なの、ね』と、鶴太郎のかアめがこちらの腑にぴたりと落ちることを云つた。こいつも、――お組と云つて――おべつかが多いけれども、またよくこちらの氣を呑み込んでるだけが取り柄であつた。ちよツと姿もいい爲めに、鶴との關係を知らないお客が時々惚れ込んで來て、こないだも、まだ年の若い生意氣なやつが、店の爲めには幸ひにも、四五百圓を使つて行つた。
『だツて、ぢやア、わたしのことを云つたのでしよう』と、お絹は少しすねた顏をした。が、さうだとはわざと返事しないで、『馬鹿! おれなんか、なんで、おめへのやうに、間違つたことなど云ふもんけい?』子供をもツと利口に見せる爲めに、『おやぢに、もツとしツかりしろと云やアがつたんでい!』
『ほ、ほ』と、また笑つた女中がある。おつまの聲であつた。
『わたしは手紙の意味が、如何にもなさけ無ささうであつたから』と、お絹はまだそのことを考へてゐた、『その通りを鶴さんに云はせたのですが――』

『だから、おめへのこツちやアねいツて云つてるぢやアねいか？』斯う云ひくるめてから、庭へ出た。

蓋し、きのふから八さんがどんなことをしてゐたかを早く調べて見たかつた。

そしておもて二階の横手の廊下から見える、同じ堀に向つた離れの縁さきへ、大きな柳が植わつたのはいいけれども、そのそばで、小さな松がその根もとからずらりと二本に分れてゐるのを水の上にのぞめて植ゑた、その植ゑかたがまだ氣に入らなかつた。で、これは自分が離れてながめながら、八さんに植ゑ直させた。

おもて庭の方は、まだ手をつけてなかつたのを既に見て置いたので、安心であつた。再び帳場へ來てから、子供の自慢や自分の失敗に付いて云ひ殘したことを笑ひばなしにしてゐるついでに京都の車夫の正直であつたことをも語つた。そして自分の使つてるものは多いけれども、そんなに正直なやつはあの人數のうちに恐らく一人だツてゐなからうと云ふことを歎息して見せた。

五

それから二日目に、おやぢ宛ての正造の手紙が直接に森ケ崎の方へ届いた。今度のはまた一層詳しいことが書いてあるかしてかさもあつて、六錢の切手が張られてゐた。

權造はそれを讀むのを樂しみにして、先づ、自分の目がねを取り寄せた。そしてそばにゐるものら

に向つて。

『みな聽いてろよ、おれが讀んでやるから』と云つた。『どうしたツて、高等學校の學生だから、な、おめへらのやうな無學なものが聽いてゐると、きツと、爲めになることもあらア、な。――なんでいこりやア？ 詳しく書いて來たんかとおもつてりやア、こんなに大きな字だ。――而も、おやぢをも無學と思つてだらう、畜生！ 假名ばかり多い。さうして本字にやア振り假名をつけやアがつた。――えいと』と、涙はその卷き紙を繰りひろげながら讀み初めた。

「父上がわたくしのことをお思ひ下さつて、わざ〳〵京都までも來て下さつたのは、わたくしの大いに感謝するところです。」

『うまいことを云つてらア、な。おい、みんな聽いてるけい？』

『聽いてますよ、親かた』と、お絹が先きに立つて皆の頭を取つた。

『えいと――』

「然し、父上、わたくしはその爲めにその翌日、舍監からひどく叱られました。」

『親子のことだのに、そんな馬鹿なことがあるもんか？』

『それから、どう書いてあります』と、心配性のお絹はあとをせき立てた。

「舍則にそむいて時間外に面會人を受けたうへに、消燈規則をも守らなかつた爲めです。」

『こりやアおれも知らねいで惡かつたから、子供にやアよくあやまつて來たが、な。』

「それに、まだ、あなたは學校の本門を乘り越えたのですツて、ね。わたくしは門番がよくあんな時間に明けて吳れたものだと私かにありがたく思つてゐましたら、門番もその爲めに學校から罰を受けました。まかなひの夫婦も舍監から叱られました。」

『困つたことになつた、なア。』そんな面倒くさい規則などを拵らへて置かなければいいのに、置くからこそ、何でもなく親子のあひだでこツそりすませてしまへたものが、こんなにおほ袈裟に人の迷惑にまでもなるのであつた。

『でも、親かたはその時は一生懸命であつたのでしようから』と、またお組は云つた。

『もちろん、おりやアさうでねいなら、人の門など越えるもんか？』

『ねい』と、お兼はひようきんな女中であつた。『モンをモンかです、わ。』

『畜生、なによう云やアがる』と、こちらも笑つた。

「もう、あつたことは仕かたがありませんが、これからそんなことの無いやうにして下さい。わたくしは親からさう心配を受けないでも大丈夫ですから。」

『さう云つて來るだけ、然し』と、これはお絹の顫えた言葉だ。涙までその目に見せて、『感心ぢやアございませんか？　云ふことがよく分つてます、わ。』

『だから、なほ更らこツちやア可哀さうになるんぢやアねいか？』こちらも自分の目がしよぼ付いて來たのをおぼえた。『えいと』と、涙で字がちツと見えにくくなつたのを、無理に、努めて讀んで行かうとした。

「わた――くしは――御らんにな――つた――通り――健康――なのです。ヨーイ、ヨーイ――」

『こりやアをかしいぞ』と云つてこちらは少しあと戻りをした。

「健康なのです、ヨーイ、ヨーイ、デツカン――」

『なんだ、畜生！　文句だと思つて讀んで行きやア。デツカンシヨ節をやつてゐやアがるのけい！』

『ほ、ほ、ほツ』と云ふ笑ひが女中のあひだから出た。

『………』こちらはなほまじめであつた。

『デツカンシヨ』のあとには、然し、また「わたしも學生になつたからは、デカンシヨ、デカンシヨで日を暮らす　ヨーイ、ヨーイ、デツカンシヨ」とあつた、

『馬鹿にしてイらア、な』とは、おもてで云つたが、これも親を安心させる爲めの洒落かと思ふと、私かにその優しい心ねに泣かれて、あとの今度は繪とこまかい字とになつてるところを讀めないほど胸が詰つてしまつた。少し氣をまぎらせてから、『さア、今度は多分おめへらの顏だ。勝手に見ろ。』

『どれ、どれ』と云つて、女中どもは手紙にたかつた。

『…………』こちらはそれをうツちやらかして置いた。
『これはお組だよ』と、お絹はその弟のかかアに云つて、「いまこツそりおいもをたべてゐるだらう。」
『人を馬鹿にして！』お組は、ぢやア、自分以外のを見つけてやらうと云つたかのやうに熱心になつた。『これおつまさんよ！おしろいをつけてゐるところ。』
『でも、よく似てる、わ。』お末はそれからお島のを見つけた。「今、こいつはあひるのやうに緣がはを這つて、雜巾がけをしてゐるだらう。」
『ひどいことを云ふの、ね。』
とぼけたお兼のや、目の飛び出た鶴太郞のもあつた。一つも名は書き添へてないけれども、顔の恰好で大體誰れのかと云ふことは分つて、みなが怒つたり、笑つたりした。それほど繪も上手だが、お絹のだけを書いてないのは、それでも、遠慮したのだらうと思はれた。
『…………』權造は自分の子が利口なうへに、遠慮もありまた快濶でもあることを、ここに初めて氣が付いた。そして一層頼母しくなつたと同時に、また一層可愛くなつて、わけもなくまた淚の大きなつぶがこぼれ初めたので、その場にゐたたまらなくなつてまた獨りで庭へ飛び出した。

——（大正八年十一月）——

金貸しの子

一

『叔母さん、あれは僕の本當のおツ母さんぢやアないの、ね。』斯う正一が突然云ひ出した時には、叔母さんは非常に驚いた顔つきをして、

『まア、誰れがそんなことを云つたの』と問ひ返した。

『誰れも云やアしないけれど――』

『ぢやア、どうして知つたの？』

『………』渠には自分がそれを云つていいのか、云つて惡いのか分らなかつた。つまり、自分には別に實母のあることを今回知るに至る手續きを私かに自分がして見たことをだ。で、暫らく叔母の問ひ返しに對して答へることをしないで、もぢもぢしてゐた。

この時にも渠が思ひ出して見たことだが、父がああ云ふ、古いが大きな家に住みながら、自分を他の兄弟から切り離して別にして置くわけが分らなかつた。たまたま遊びに行けば、母も、

『正一、正一』と呼んで可愛がつて吳れたし、年うへの兄弟も皆、『正ちやん、正ちやん』と云つて親しんで來た。が、父は一と晩でもとまつて行けと云ふことがなかつた。晩におそくなつても、無理に俥で返した。

で、自分は父や母に親しまうとするした心があつてもいつもそれが不滿に終はつてしまつて――叔母さんのうちが寧ろ自分の一番親しい家のやうになつてゐた。そしてかの女が斯う自分を誰れよりも可愛がつて吳れるのを見ると、父の姉と云ふのはうそで、實は自分のお母さんであるのではないか知らんとも思つた。さうだ、

『叔母さんが僕のおツ母さんぢやアないの』と、聽いて見たこともあるが、

『馬鹿をお云ひでない』と叱られたツけ。

『…………』さうだ。姉と弟とで子を生めば畜生も同樣だと云ふ。そんなことがこの進步した人間界にありやうがない。けれども、そんなをかしなことまで考へて見たほどに、渠は自分の父の心が分らなかつた。どうして向ふの母と自分とを一緒に置いて吳れないのか？　そしてなぜ叔母さんにばかり自分を可愛がらせて置くのか、と。

この疑問は渠の小學時代には、あつても、空想に過ぎてしまつたが、中學へ這入るやうになつてからは段々とはツきりして來た。一體、自分の母に當るものは誰れだらう――叔母さんがそれでない以

上は？　今の母と云ふのを、どうしても、自分の母とは思へなかつた。親切にはして吳れるが、そのしかたが他の年うへの兄弟に對するのと同じやうではなかつた。兄弟どもはその母に無理を云つて泣いたりしてゐるのだから、こちらもさう云ふことをして叱られたツてかまはないのだ。が、さう云ふ折を捕らへることさへできないほど自分だけは叮嚀にされるので、自分もつい遠慮がちになつておとなしくして來た。そして私かに兄弟に向つて、

『おツ母さんはにイさんたちを叱るけれど、僕を叱つて吳れないんだもの』と云ふと、

『そりやア正ちやんは一番末ツ子だから得をしてるんだ』とうらやまれた。

『そんなことが得なら、僕はもツと損をする方がいいんだ！』斯う云つて、うへの兄弟どもへ却つて不平を漏らしたこともある。自分はいくらおこられてもいいから、一度でもいい、母の膝に取り附いて無理を云つて見たかつたが、それができないのを殘念に思はれた。だから、よそのうちへ遊びに行つて見ても、友人どもは皆自分よりもずツと多くの損をしながら、自分から見れば、それが決して損ではなく、ずツとほんたうの得をしてゐるのであることが分ると、自分は何となくうらやましくてならないではゐなかつた。

それに、渠は自分の顏を時々鏡に映して、それを兄弟の顏に思ひ合はせて比較して見ても、少しも似てゐるところがないのだ。それが如何にもまた不審を增す種にならないではゐなかつた。兄どもは

母に似て色が黒く、鼻も低いのに、自分だけはその反對である。で、

『あなたのおッ母さんはどこにゐるのよ』なんて、叔母さんのところへ來るをんなの兒らが尋ねることがあつたが、

『僕も知らないんだ』と答へた。父の方にゐる母を自分のおッ母さんだとは云ひ切れなくなつてゐたと同時に、ひよッとすると、お父アんも違つてゐるのぢやアないかとも考へられた。

『全體、あなたのお父アんは何をしてござるのです』と、或友達の父から聽かれても、

『それも僕には分らないのです。多分、おかねは澤山あるから、何もしてゐないんでせう』と云ふよりほかに知るところは實際になかつた。

『をかしいぢやアありませんか――おッ母さんも分らない、お父アんの仕事も分らないツて？　何かわけがあつて、親も叔母さんもあなたには云つて聽かせないのでせう。戸籍謄本を取つて御覽なさい、區役所から。』

『…………』たツた二十錢を區役所へ出せば、自分のよくは分らなかつた家族の戸籍のうつしを書き出して貰へるツて、そんな都合のいいことがあるのをその時まで知らなかつた。そんなことができるのですか？　ぢやア、一つさうして見ませう。』爲替を添へて郵便でやつても事はすむと云はれたのだけれども、それでは返事の來た時に若しそれを叔母さんに見られてはよくないと思つた。

かの女へは何喰はぬ顏をしていつも通り學校へ行くふりで家を出で、實は、先づいつも途中でその前を通り過ぎるところの芝區役所へ立ち寄つて見た。窓がいくつもあつて、どの窓へ賴めばいいのかと思つてると戶籍掛りとしてあるのがあつたので、そこへ體をぶらさがるやうにして賴んで見た。代書へ行つて書式を書いて貰つて來いなどと面倒くさいことを云はれたが、兎に角、二時間ばかりかかつて、初めて自分らの戶籍謄本なる物を見ることができた。

すると、果して自分は今の母の子ではなかつた。さうして、無論叔母さんの子でも。別に實母の琴と云ふのがあるのだが、自分のおぼえのないほど以前に、離婚になつて、もとの籍へ復歸してゐた。そしてその實母と父との間には自分ひとりしか子どもはないことになつてる。そして今の母や兄どものことは一つも載つてゐない。そして父もこちらの考へ通り無職業になつてゐる。

無職業でもかねを持つて暮して行けるのだから、それは少しもかまはないと思へた。が、いよいよ自分に實母のあることを發見した時には、飛び立つやうに嬉しくなつたと同時に、今の母や父や叔母に對しては俄かに反感が抱かれ、憤りをさへおぼえて――後れて學校へは行つたが、ろくに教師の云ふことなど耳へ這入らなかつた。そして學校から歸つて來ると、わざと突然に今の母が實母でないことを叔母へ告げたのだ。斯うなると、もう、隱してゐられないので、

『區役所から戶籍を取つて見ました』と答へた。

『いけないことをした、ねえ。』かの女はその顏をしかめたので、こちらはそれ以上のことは云ひ出さなかつた。が、實は、早速、母の原籍へ手紙を出して、早く一度逢ひたいことを云つてやつた。

實母から返事の來るのを心ひそかに待つてゐたのだが、いくら待つても來なかつた。そのうちに、叔母さんは、

『戶籍の謄本なんか子供が持つてゐたツて仕やうのないもので――一度見れば分つたらうから、叔母さんが預つて置きませう』と云つた。

『………』さう云はれると、この五六日間を肌身はなさずお守りのやうにして持つてゐたものをだが、渡してしまはないではならなかつた。そして考へて見ると、母の返事も來たのかも知れないが、こちらの留守に叔母さんが郵便屋から直接に受け取つたので、こちらへ見せないでしまつたのだらう。知れた以上はかまはないではないか？　それをなほどうしてさう秘密にしたがるのか、わけが分らなかつた。

二

父からは頻りにちよツと來いと云ふ使ひをよこしたけれども、そのことだらうと思ふと行きたくないと返事して、その度每に使ひを追ひ返した。

日曜日を友人にさそはれて遠足に行くと稱して叔母の家を出で、實は、自分ひとりで上野から汽車に乘つて宇都宮に來たり、實母の戸籍なる有名な釣り天井の城あとだと云ふあたりの番地を調べて見た。が、情けないことには、そんな家はなかつた。いや、あつたのかも知れないが、もう、古いことで、十年や十五年をそこにゐ付いてる人にも分らなかつた。

何でも、一月中旬のことであつたので、寒さうに水ツぱなを垂らして親切にも隣り近所に就いて尋ねて呉れたおぢイさんの姿と、そこへの行き歸りに見た何かのおほ建て物の横に噴水があつて、それがかたツぱしから凍つて行つて水晶岩のやうになつてゐたのとが、自分の印象に殘つただけで――目的は達しられないで歸つて來た。

自分としては生まれて初めての遠征であつたのに、それが空しく終はつたのを全く自分の周圍の人人が惡いやうに思へて――第一に叔母がうらまれた。次ぎに、今の母がうらまれた。そして最後にはすべてその惡い責任を父がしよつてるやうに！

みんなで申し合はせて、こちらを虐待してゐるのだ。さうだ、虐待と云つてもいいではないか、うち明けなければならぬことを失敬にもうち明けないで、みんなで押し隱してゐるとは？

『正ちやんは大層考へ込むやうになつたの、ね』と、叔母さんが云つた。

『…………』知れたことではないか？　みんながそのつもりなら、こちらにも考があつた。つまり、

叔母の云ふことも信じてやらない、佐久間町の父のところへも行つてやらないと云ふのであつた。そして私かにまた繼母の戸籍謄本を取つて見ると、父はかの女の所天でもなく、自分はまたかの女のまま子でもなかつた。父とは籍がまるで別々であつた。と同時に、かの女の職業が金貸しであるのは、乃ち、父がそれを助けてゐるのだと云ふことが分つた。そして叔母がまたこちらへ何も云はないでゐるのは、その兄からかねの仕送りを受けてたべさせて貰つてゐるからであらうと。

そしてただ會ひたいのは實の母おやにばかりであつた。が、それのゐどころを自分の周圍のものらは誰れも教へて呉れないのであつた。また、どうせ教へて呉れないのにきまつてるものからそれを假りにも聽いて見たくはなかつた。そして自分の周圍、引いては一般の世の中までを何となく薄情なやうに、便りないやうに、またはかない物のやうに感じ初めた。そして自分の實母だつても、その後、どこへ方づいてるかも知れないので、もう、自分ばかりが全くうツちやられてゐるやうに。

そのあひだに在つて、たツた一つ、正一が自分のこころ私かに賴みとしてゐたのはお浪さんである。かの女はどこにゐて、何をしてゐると云ふことは決して口へ出さなかつたが、よく叔母のところへやつて來た。そしてこちらをも。

『正ちやん、正ちやん』と云つて、よく可愛がつて呉れる。そして來るたんびに必らず何か――菓子でなければ、學校用品など――を呉れる。で、或日のこと、ふと、あたまに浮んだところでは、かの

女は自分よりも先きに生まれた實母の子が、それとはなしに、斯う時々弟なる自分に會ひに來るのではないかと思はれたので、

『あなたは僕のねえさんぢやアなくツて』と、聽いて見た。無論、叔母のゐない時で、お浪さんがこちらの勉強室へ慣れ慣れしく獨りで這入つて來た時にだ。

『どうして、正ちやん？』

『でも』と、こちらは少しためらひながら、首をかしげて、『何だか――さう――思へるから。』

『おほ、ほ』と、かの女の微笑は待ち受けてたやうに、破裂した。それから、またまじめのやうになつて、『ぢやア、正ちやんはあたしをあなたのねえさんと思つて頂戴、ね。さうして、大きくなつても忘れないで、ね。』

『…………』こちらはその優しい言葉と綺麗な顏つきとに全く引き入れられてしまつた。よしんば、實の姉でなければ無くてもいいから、これからそれになつて貰ひたかつた。

叔母さんがやがてそとからかへつて來ると、お浪さんは直ぐむかふへ行つたが、こちらへも聽えるやうに、

『正ちやんがあたしをねえさんぢやアないかツて、あたし、それだけでもありがたい、わ』と、すツかりおとなの句調になつて語つてゐた。

『…………』こちらにはそれが一層ねえさんらしい頼母しさに聽き取れたのである。叔母には耻かしいが、こツそりこちらで鼠泣きをした。毎日でも來て吳れたら、どんなに嬉しからうり・その顏なり、聲なりに接しないあひだは、氣の拔けたやうになつて、敎科書にも自分の目が据わらないのであつた。

それが或日、叔母に向つて、

『けふは、何だかくさくさして仕やうがないから、正ちやんと一緒に公園でもぶら付いて來る、わ』と云つてゐた。そしてやがてこちらをさそつて吳れた。

愛宕下の家を出て來て、消防隊の高いやぐらがあゐ角の向ふから、どぶ橋を渡つて芝公園に這入り政友會の事務所の前どほりをとほつてゐる時、

『あなたは一體どこにゐるの』と、また尋ねて見た。

『赤坂ですが、ね――あなたはなぜさう聽きたいの？』

『遊びに行きたいから』と、耻かしいやうだが、思ひ切つて答へた。

『そりやア、あたしが度々あなたの方へ行つてるからいいでせう。』

『でも、僕は毎日行きたいのです。』

『大層、慾張り、ね。』

『…………』こちらの思ふ樣な返辜に向ふが近づいて來ないので、思ひ切つたついでに、『いけないのですか』と、あまへた口調で念を押した。
『ええ、少しいけないことがあるの――あとぢやア、いつか知れることかも知れないけれど――。』
『…………』こちらはわれ知らずむツとしてしまつた。せめてこの人だけは正直に物を云つて吳れるだけの親切があらうと思つたのに、矢ツ張り、さうではなかつた。話をするのもいやになつて、わざと少し步みをゆるめると、向ふもちよツと立ちどまつてこちらをふり返つた。
『あなた、おこツちやいやよ、それにはわけがあるのだから、ね。その代り、あたしが來るたんびにこれからも何かいい物を持つて來てあげますから。』
『…………』こちらはそれだけでは何だか詰らない氣がした。が、その姿と共に優しい言葉をまだしも賴みとしてゐることができるのが嬉しくないこともなかつた。政反會事務所の前通りを電車通りへ出て、左りに交番のあるところから、正面の樹木の向ふの方をゆび指して、『僕の行つてる中學は直ぐあつちの山の上にあります』と云つて聽かせた。
『さう。ぢやア、近くツていいの、ね。』
『でも』と、然し、こちらは學校の近所へ行つて、若し敎師か事務員にでも見つけられたら、きまり惡いのであつた、『こつちがいいでせう。』

右の方へ先きに立つて、一番近いお玉屋の門を這入つた。そして增上寺の大きな釣り鐘のあるところへ拔けて、本堂の前をまた渡り廊下のしたから向ふへ進んだ。そして丸山へあがると、

『いいけしき、ね。』お浪さんは前の方で一番よく海の見えるところへ行つて、そこの腰かけ石にかけようとした。

『まア、お待ちなさい、きたないから』と云つて、こちらは自分の腰に提げてた手ぬぐひをはづして石の上のほこりをはたき、そのあとへその手ぬぐひを擴げてかの女をかけさせた。それをあとで新らしい記念にしようと思つてだ。

『正ちやんは親切、ね。』

『………』ただぽつと顏が赤くなつたやうに思ひながら、こちらは遠慮がちに少し離れて同じ石の上へ腰をおろした。そして自分の顏をかの女の方へ向けるのが耻かしかつたので、遠い海の白さをばかりかの女の顏として見つめてゐた。

『一度、正ちやんと一緒にお舟に乘つて見たいの、ね』と、かの女は云つた。『さうして釣りをしたり貝を取つて見たりしたら、さぞ面白いでせう。正ちやんのおとうさんはおかねが澤山あるのですから小さいお舟一つぐらゐ買ふのは何でもないでせう。それに乘つて、向ふにけむのやうに見えるお山の方まで行つて見たら、どうでせう? あれはどこでせう、ね?』

『房州でせう』と、こちらは答へた。が、自分が若しかの女をボートにでも乘せれば、あの房州まで
どころではなからう。東京灣を大平洋のただなかまで出で、できることなら、もう、いやな父や叔母
などのゐる東京、綺麗なお浪さんをも不正直にさせるやうな世の中へは、二度と再び歸つて來ないの
であつた。

自分の目の前には、高い木の枝から枯れた木の葉が風もないのに二つばかりもつれ合つてひらひら
と落ちて來た。そして自分らの目の下へ落ちて行つた。そしてそれが――見えなくなつてからも――
全く自分とお浪さんとのたましひか何かであつたやうで、今や、そこもない海のうへへ行つて、ふた
りで仲よく小さいボートを漕いでるかと思はれた。

『秋はいいもの、ね、正ちやんはさう思はない――何だか、斯う、しんみりと人の心を奥ぶかいとこ
ろへ持つて行つて?』

『…………』ぢやア、こちらのこんな心持ちも、今、その爲めであるのか知らん? けれども、お浪
さんと一緒でなければ、斯うもあるまいと思ふと、『さうです、ね』と云つたのがまた恥かしかつ
た。

が、かの女がこちらへ膝を向け直して、

『あなたにそれが本當に分つて』と云つた時には、少しこちらも勇氣が出た、

『えい、分ります』と、にが笑ひしながら、自分でもちよツとかの女の方へ向いた。向ふの顔までは見えなかつたが、自分の目に觸れたかの女のぴかぴかした帶の、ここにもいい香水か何かのにほひでもしてゐさうなあたりへ自分の顔を持つて行つて泣きたかつた。

『どうしたの？　え、どうしたの』と、かの女は石を離れて、心配さうにこちらへ寄つて來て、『べそをかいてるぢやないの？』

『…………』こちらは、ねえさん、もツと正直になつて下さい、正直になつて下さいと叫びたかつた。が、それがまだ口へ出ないうちに、かの女は、

『ねえ、泣くのはおよしなさい。あたしが何か惡いことを云つたのなら、可にして、ね。さア、塔のところへでも行きませう』と、云つた。そしてかの女が先きに立つて、後ろの坂を下りた。『矢ツ張り五重の塔、ね。むかしの人は何でこんな物を建てたんでせう、ね？』

『…………』こちらは塔を見ると寺を思ひ出した。そして寺を思ひ出すと、いつも、人の死ぬことが考へられて、自分の母も既にお墓になつてるのではないかと。

『まだ泣いてるの、ね！見ツともないぢやアないの？』

『…………』こちらはお浪さんに取り付いて見るのはけふに限るのだらうとばかり考へてゐたので、もう、溜らなくなつた。恰度かの女のすらりとした姿があふ向いて、また塔のうへの方を見てゐるす

きに乘じて、自分は自分の兩手をかの女の帶にかけて、『よう、ねえさん』と、顏をもそこへ持つて行かうとした。

かの女はびツくりして、こちらの手をふり切つた。そして、

『見ツともないから、およしなさい』と、逃げたのである。が、斯うなつては、もう、こちらも無理(むり)を押しとほして見る氣になつて、恰度さツきから誰れも見てゐないのを幸ひに、

『よう、ねえさん』と、顏をしかめながら追ひかけた。

『見ツともないから』が三度も四度も塔のまはりを驅けめぐつてから、たうとうおこり出した。『そんないたづらをするなら、正ちやん、おとうさんに云ツ付けますよ！』

『…………』ふと、こちらも立ちどまつた。かの女が息を切つてゐたなら、こちらもさうだ。そして父のことを云はれたのがおそろしいよりもがツかりするのであつた。お浪さんはこちらは親切さうにしてゐるけれど、實は、こちらをそんな金貸しの手つだひなんかしてゐる者の子だと思つて、馬鹿にしてゐるのではないか、若しさうなら、こちらから何と親しんで行つても、心からは相手(あひて)にして呉れないのであらうと。

三

このことがあつてから、お浪さんはばツたりうちへ來なくなつてしまつた。そして叔母さんも亦かの女のことをばツたり云はなくなつたのは、かの女から云ツ付けてしまつたからであらうと思へた。が、正一としては、私かにますますかの女が戀しくなつて溜らなかつた。

『赤坂ですが、ね』と云つた言葉をおぼえてゐるので、獨りの散歩とか外出とか云へば、わざわざ電車に乘つて行つて、赤坂見附けやあふひ橋から下りて、表町を青山の方へ、若しくは溜池を檜町の方へぶら付いた。また、芝園橋からまはつて、青山墓地を高樹町の方へも度々行つて見た。かの女を腰かけさせた手ぬぐひをいつもただ一つの記念としてふところに入れてだ。

實母を尋ねて行つた時には、そのもとの戸籍に就いて突きとめて見たのだから、いよいよ分らないとなつては、そのことだけには諦らめが直ぐついた。が、今度のはただぼんやりと赤坂と云ふだけがところ當てだから、その代りになかなか諦らめることができなかつた。中學一年の時から三年間もつづけてゐた。ほかのことを思へば、すべて世の中のことが自分の勉强なんかを妨げるばかり奮發心をにぶらせるばかりであつた。けれども、若しお浪さんに今一度會つて、年がうへでも夫婦になつて呉れいと申し込むには、十分學問をしつつあることが第一の條件だと考へられるので、ただそれだけの爲めに學校のことは怠らなかつた。

そして四年生まで進んだが、その春もおそくなつて、正一は櫻の咲き散るあはれさを見がてら、電

車を三宅坂(みやけざか)で下りて、青山行きの通りをぶらぶらと豐川いなりの前まで來た。すると、向ふから電車を下りた人がもぢやもぢやと口髯(くちひげ)をはやして、圓ツこい形をしてゐたではないか？　そして黑いがまぐちかばんを提げてるところまでが自分のおやぢそツくりだと見えた。

それが果してさうであつた。が、ゆふがたのことでもあるし、向ふは目がねなしにはこちらへ氣が付かなかつたらしい。平氣ですたすたと横町へ曲つて行くのであつた。

『…………』こちらはあんな者の、それこそ見ツともない風采や精神までが遺傳してゐたら、もう、いよ／＼人間を辭職(じしよく)だと悲觀しながらも、好奇心の爲めにこツそりあとをつけて行つて見た。

すると、とてもおやぢが見付きを見ただけでかねなんか貸しさうもない小さい家へ、安ツぽい門を明けて這入り、その殆ど鼻さきにある格子戸をも明けた。案内(あんない)も乞はずにだ。そしてうちから迎へに出たらし女の浮いた聲が

『おそいぢやアございませんか？いつも人を待たせて』と云つた。驚いたことには、それがお浪さんの聲であつた。

『…………』こちらは一ときにくわツとなつてしまつた。

『おそいたツて、用があるのだから、仕かたがない、さ。』

『でも、けふはとまつて行けるの？』

『さうはいかん。』
『あたし、憎らしい、わ！』少し低い聲になつて、『さう、あのお婆アさんがこわいの？』
『…………』直ぐ怒鳴り込んで、おやぢとお浪とを驚かしてやらうかと、既にその身がまへまでしたのである。だが、そこへ暫らく忘れてゐた實母のことが思ひ出せた。そして聽き慣れない聲で、『お父アんのめかけになんかお前が戀したのがよくない』と云つてるやうであつた。
『…………』畜生！こちらよりもたつた三つか四つかしか年上ではない癖に、三四年も前からあんなぢぢィと、きツとかねの爲めに、くツ付いてゐたのか？呆れないではゐられなかつたが、一方では、あたまが痛くなるほど失望した。
『舟を貰つて貰つたら』とも云つたぞ！『おとうさんに云ツつけますよ』とも！芝の圓山でのことは今でもこちらは忘れてゐなかつたのだ。あの時からかの女はこちらの父の物好きに取り入つてたに相違ない。そしてぱツたり姿を見せなくなつたのは、こちらのことを、かの忌むべき寢物がたりとかに白狀して、父から叱られた爲めだらう。
『…………』馬鹿な女だ！　それに血みちを上げてるやつも馬鹿だ！　それを知つて、また、兄弟に忠告を與へなかつた叔母も馬鹿だ！　いや、それを知らないで、年ぢう尋ねてゐた自分も馬鹿であつた。

何の爲めに勉强などしてゐたのか？　叔母や父の爲めではなかつた。また、世の中が何となく詰らなくなつてる自分の爲めにでもなかつた。正直に云へば、全くお浪さんを思つての爲めであつたではないか？　それをいよ〱突きとめて見ると、かねの爲めに人のめかけになつてたのであつた。もう、勉强などするものか？　中學なんか卒業したツて何にもならない。いや、この世に生きてゐたツてだ！　寧ろ死んだ方がこのつらさ、恥かしさ、情けなさ、並びに詰らなさを斷絕できて、いいのであつた。

自分はどうして時間を過ごしてゐたのか分らない。が、今や、氣が付くと、あたりはいつのまにか眞ツくらになつてゐた。そして矢ツ張り自分はかの女の門前に立つてゐた。そしてこのくらさは自分の心の然らしめるところか、それとも、實際に夜になつてるのかを考へて見た。

方々に火がついてる樣子では、實際の夜であるらしい。が、して見ると、もう、自分は何時間ここに立つてたのかを知りたかつた。聽えるものは電車の響きばかりで、あたりはただしんとしてゐた。自分ながら十分にわれに返つたことが分ると、今度はぢツと耳をそば立てて、家のなかのひそひそばなしをでもしツかり聽き取つて見ようとした。が、全くひツそりして、何も聽えなかつた。すると、父とかの女とがふたりツ切りで、この春の夜を快樂に耽つてる樣子が想像に浮んで來て、けがらはしいやうな――また、溜らないやうな！

自分は思はず記念の手ぬぐひをふところから取り出し、その疊んであるままの上につばきを吐きかけて、それを門内に投げ込んだ。そしてすたすたとそこを引き上げた。

その翌日から學業を怠るやうになつて、ただ氣まぐれにボートをばかり殆ど專門にした。それが學校の方から父へ通知され、父からまた叔母への抗議となつた。そして叔母はこちらを不都合だとして度々懇々と親切さうに勉强を勸めたけれども、こちらはわざとにも應じなかつた。

『どうして、正ちやんは俄かにさう勉强がきらひになつたの』と尋ねられることが度々であつた。

『…………』こちらは、つまり、親なし子も同樣だからと云ふ憎まれ口の一つも答へてやりたかつた。が、それさへ口に出ないほど自分の周圍をいやになつてゐた。ボートに全身の力を出してゐる時は、その爲めに暫らく何ごとも、世の中のことを忘れてゐていいが。またうちへ歸ると、六疊の勉强室を一歩も出ないで、墓の中へ生きながら引ッ込まれて行くかのやうな悲觀ばかりをした。そして學校を落第しようが、しまいが、そんなことは眼中になかつた。

『どうしたのでせう、ね、わたしが困るぢやアないか、ね』と云つて、叔母はボートのことばかりでなく、またこちらの考へ込んでばかりゐることをも心配し初めてゐた。そしてそれをこちらの父に告げたと見え、滅多に來ない父がその爲めにやつて來た。

『一體、お前はどうしたと云ふのだ？　來いと云つても、一度だツて親のうちへ來たことがないし、

さうかと云つて勉强もしないで、遊ぶか考へ込むかばかりしてゐると云ふし？』
『…………』こちらはそれにも答へる氣がしなかつた。
『ひよツとすると、お前はお父アんよりやアおツ母さんを戀しがつてるのかも知れないが、お前のお袋は、もう、疾くのむかし死んでしまつたのだぞ。』
『…………』そんなそらぞらしいうそをと、こちらは直覺的に感じられた。蓋し、母が若し死んでたのなら、少くともこちらの、二三年前に自分らの戸籍謄本を取つて見たことが知れた時、これまで云つてはなかつたが、實はこれこれだから、さう思へとでも聽かせる筈であつたらう。それをもしないで置いて、今更らそんなそらぞらしいことを云つたツて、信じられなかつた。却つて、あのかね貸し婆アさんが若し死んだ場合には、またあの若い淫婦のお浪をこちらの母とでも思はせようとしてゐるらしい父のしたごころまでが見え透いて。
『返事をしろ、返事を！』
『…………』こちらは向ふのめざとらしくこわい顏をしたのをじろりと見たが、矢ツ張り、默つてゐた。そしていろ〳〵と渠の云つて聽かせることが尤もらしくあればあるほど、こちらには吹き出したいほど滑稽に聽えた。父はお浪のところへ入りびたつてればいいのだから。そしてこちらは學費を貰へなければ、いや〳〵學校へ行く必要もなくなつて、却つて仕合はせないのだから。いや、いツその

こと、衣食の費用も來なくなつて、凍えて饑ゑて死んだ方を望んでるのだから。

こちらは、だから、叔母にもろく〳〵口を聽かなくなつてゐた。そしてボートなどは、云はれるまでもなく、自分からまた飽きが來てゐたのだが、なほこれだけは續けてゐたには、おぼろげながら、一つの望みがあつた。それはほかでもない、手ツ取り早く立派な選手にでもなつて、隅田川の競爭に出て、それが盛んに新聞に書き立てられたとする。そしてそれが萬に一たび母が讀んで、わが子の名を知つたら、或は、それを動機として向ふから學校へ尋ねて來るかも知れなかつた。

こんなことをも、自分ながら空想のやうだが、私かに考へてゐた。すると、或日、叔母はこちらを留守番にして外出したその先きから歸つて來て、斯う云つた、

『正ちやん、けふは、ね、後生だから素直に返事をしてお呉れではないか、え？　わたしは心配で心配で溜らないから、お前さんの爲めに易を見て貰つて來たのだから、ね。』

『…………』こちらは相變らず口を開らかなかつたけれども、ちよツと好奇心が動いたので、目だけでは『はい』と返事をした。

『お前さんの鬱し性は女のことから來てゐると云ふのだが、ね――』叔母さんはまじめな顔つきであつた。若しそれが若い女なら、その思ひはどうせ叶はないから諦めるより仕かたがない。若しまたずツと年うへの女なら、母を戀しいのだから早くそのありかを知らせてやれツて。一體どツちだ、

え？』
『………』何だかくすぐつたいやうな氣もしたが、ひよツとすると、これは僞はつて易にかこ付けた何かの手ではないかとも思へた。
『今の若いものは直きに易なんかなんて云つてしまふが、ね、なか〱よく當つてるやうだよ。』
『………』こちらはそれをよく當つてると云はれて見ると、お浪を戀してゐたことが果して叔母にも、從つて父にも、既に知れてるのだらうと考へられたので、その恥かしさをまぎらせかたがた、『をんななんか、どいつもこいつも』と云つて、叔母その人も云ひ含めたつもりで、『みんな僕はきらひです。』
『ふん』と、案外正直さうにして、『して見ると、矢ツ張り、わたしの推量してゐたとほり、おツ母さんだ、ね。ぢやア、見て貰つた易が命じることで、仕かたがないから、本當のことを云つてあげるが、ね、さうすると、お前さんはこれから一生懸命にそのおツ母さんの爲めだとも思つて勉强して呉れますか？』
『はい、します！』こちらは自分の待ち望んでたことが、もう、こんなに早く達しられたのかと云ふ氣がして、久しぶりの嬉しさをおぼえた。
『これは然しわたしだけの親切から云つてあげるので、お前さんのお父アんには內證だから、ね、そ

のつもりで』と云つて、叔母がその言葉通り親切さうに語つたによると、矢ツ張り、こちらの母は生きてるのであつた。離婚された時多少のかねを貰つて行つた切り、約束通りの音信不通になつてるが、そのかねをもとでにしてお菓子屋をやつてて、確かまだ死んではゐない。蓋し、その一生の最後の大事の時には、どこにゐてもちよツと知らせをよこすことになつてるが、それがいま夫になかつた。

『ぢやア、僕は直ぐにも行つて來たいから、その場所を――』

『ところが、ね、行くのもわたしとお前さんとのあひだの内證で、お父アんにやア決して知らせることはなりませんよ』と云つて、叔母さんは向島押上町の番地をまで知らせて呉れた。

四

これで自分の新しい運命が開らけるのだと云ふほどの勇氣を以つて、正一は常になく勇んで家を出た。

『眞山お琴さんとはここですか』と云つて當つて見ると、お菓子屋と云つても、まるで駄菓子を賣つてるきたない店であつたことなどは、少しも氣にはならなかつた。

『お前さんが正一か、え?　よく來て呉れました』と云つて、あたまへ小さい丸髷をのせた母は初手

からぽろぽろと涙の大きなつぶをこぼした。

『………』こちらも、暫らくのあひだは、自分に似て鼻すぢのとほつてる母の面が見えなくなつて、喉がぐいぐい鳴るばかり、言葉が出なかつた。

秋のことで、もう、火がともつた頃であつたが、母はいそいそしながら店を締めてしまつた。多分、泣いてる顏を人に見られたくなかつたのだらう。そして薄荷入りの板砂糖やねぢり棒や鐵砲玉やを皿に入れて持つて來て、たツた一つしかない四疊半の座敷――そのあとは店と臺どころとに取られてゐた――に、再びさし向ひになると、

『わたしは決してお前さんを忘れてゐたのぢやアありません。この店だツても、お前さんを殘して別れた爲めにいただいたおかねをもとでにして初めたのですから、これもみなお前さんの爲めだと思つて、ありがたく思つてゐました。ただわたしが音信をしないのはその時からの約束でもあり、また別れたわたしとしてもしたくなかつた爲めです。どうせお前さんの代になれば、さうしてその時までわたしが生きてたら、きツとまた遠慮なく會へると思つて、ね。』

『………』こちらはかの女がまた襦袢の袖を出して目を拭いてゐるのを見ると、云はうとした言葉がまた喉につまつて出なくなつてしまつた。そして便所らしい隅のゆか下からこほろぎの聲だけがしてゐた。

『だから、薄情な母だとは思はないで、ね。』

『…………』

『それにしても』と、今度は少し笑ひ顔を見せて、『あの因業なお父アんがよく出して呉れた、ね――子供が一人前になるまで會はせないと云つてたのに？』

『もう、ずツとせんから、叔母さんとこにゐるのです。』

『ぢやア、叔母さんだけの考へでよこしたのか、え？』

『ええ。』

『でも、度々お父アんの方へも行つてるのだらう、ね？』

『いいえ、少しも行きません――面白くないから。』

『まま母にいぢめられるから？』

『さうでもありません。』あれはまま母でも何でもないが、假りにさうして見ても、あまりによくして呉れ過ぎて他人扱ひになつたことやら、父が下だらないめかけを持つてることやらを告げた。

『お父アんはまだそんなことをやつてるのか、ね、もとからそれが惡い癖であつたが？』

『…………』して見るとむかしからのことで、またよく聽いて見ると、同時に二人や三人どころではないのであつた。その上、驚いたことには、父があのかね貸しの身上を自由にするまでにはいまはし

い姦通やら毒殺やらを行なつたのだ。
父は、もと、あの隣りにゐる〇〇子爵の家扶であつた。が、華族の家扶なんかはまことに給料が少いものだから、その時からの隣りへ取り入つて、かね貸し――而も高利貸――の世話をおもに華族や實業家に向つてしてゐた。そしてそのうちに、そこの女房とくツ付いて、所謂姦夫姦婦が相談の上で主人を殺した。それが而も警察からの嫌疑を受けかけたのだが、醫者やその他のものに賄賂を使つて、やツと無事に濟んでしまつた。
初耳だが、驚いたらへに呆れないではゐられなかつた。そしてこちらは知らなかつたからとは云ひながら、そんな者のそんなかねで喰はせて貰つたり、學校へやつて貰つたり、してゐたのがいさぎよい氣持ちではなかつた。
『もう、叔母さんところにもゐないことにしようか知らん』と云つたには、寧ろ駄菓子屋の子となつても、改めていさぎよい生活を初めたいと云ふ意味があつた。
が、母はこれには反對して、
『お前さんが何もそんなことをすると云ふのぢやアなし。まア、學校を出るまではそのままにしてゐる方が得ぢやアないか、ね』と云つた。
『それもさうだけれど――』こちらには學問だツて母の考へてるやうにありがたい物ではなかつた

が、折角、この母にめぐり會つてゐながら、直ちにかの女を失望させるでもなかつた。
自分の持つてた小使ひのうちから牛肉を買つて來て、一緒にたべながら、三四年前に宇都宮へも行つて見たことを話すと、母は胸がせまつて肉を喉に詰めたりした。で、自分は死んだ方がましだと思つたことなども、語りたかつたのだが、やめてしまつた。
『わたしは、ね、こんなけち臭い店でも斯うやつて續けてればわたし獨りだけはらくにたべて行けるのだから、安心してお呉れ。』
『ぢやア、僕も今のうちにうんと勉強して置きませう』と答へた。『さうして僕が獨立するやうになつたら、おツ母さんを引き取つてあげますから。』
『樂しみにしてイる、わ』と云ふその聲と言葉とは、自分がその夜はとまつて、あくる日の朝早く歸つて來てからも、耳もとに殘つてゐた。
それからと云ふもの、自分ながら自分の精神をも母と共に取り返し得たやうに思へた。ボートの爲めの時間つぶしをぱツたりやめて四年級も無事に過ぎ、五年を終はると、直ぐ望み通り一高に這入れた。その前から、父も喜んで時々またその姉のところへやつて來たが、自分はその顏を見るのもいやであつたけれども、
『男子として學ぶ以上は、脆弱な文學よりも法律がいいぞ』と云ふ父の命令は命令としてよりも、自

分のこのみとして自分も承知であつた。が、そのつもりで豫備知識を得ようとして購ふ著書や雜誌に時々『姦通』、『高利』、または『殺人』と云ふ語が出て來るには困つた。そしてそのたんびに、自分はさう云ふ語をインキで以つて眞ツ黑に塗りこくつて置かないでは承知できなかつた。そしてまだそんな書物は成るべく友人にも見せたくなかつた。つまり、自分の父の隱れた惡事と、自分がそんな惡い父からかねを貰つてると云ふこととの、この二つの面白くないことを自分は聯想したくなかつたのだ。

　そのうちに、押しつけられてた假りのまま母なる人が死んだ。そしてその子供は皆いくらかのかね――いくらか分らないが――を與へられて、別になつてしまつたと云ふことが、叔母さんからこちらへ聽えた。

　それを報告しにまた押上の母を尋ねて見た。すると、母は

『その、例の若いのと早く一緒に住みたくなつたのだらうが』と、また意外なことを云つた。『きツと、また、あれもむかしのことが報いて、今度は自分が毒害をされたのかも知れないよ。』

『さうか知らん？』

『お父アんも、もう、老い先きが見えて來たので、したいことは早くしたいだらうからね。』

『…………』こちらはますます自分の父に對する聯想ばかりが惡くなつて行つた。そして、父にして若しこちらがお浪に戀したことがあるのをおぼえてゐたら、ひよツとするとこちらも亦この色氣ちが

ひにいつかは殺されてしまふではないかとも！

そのうちに、また、佐久間町の屋敷が賣れたとかで、市兵衞町の高みへ和洋兩様の、新らしい而も立派なのができたと聽いた。が、正一は自分で行つて見る氣にもなれなかつだ。

すると、父の命令として叔母と一緒に移つて來いと云ふことになつた。叔母は恰も元の亭主のところへでも逆もどりするかのやうに、

『ぢやア、あすからでも行きませうよ』と喜んだけれども、こちらは少しも嬉しくなかつた。敵のわなへでも這入つて行くのであるかのやうに、そして、もう一週間、今十日と、動くのを延ばしてゐた。

『…………』第一、あのお浪がこちらよりもたツた三つか四つかしか違つてゐない癖に、今度はこちらのまま母として臨むのではないか？　それを而も一度は自分も戀した。そして最後にその爲場所とその生活とを突きとめた時、向ふにも見おぼえある筈の手拭ひを投げ込んで來た。あの翌日、あれを發見しなかつたと云ふことはなからう。

して見ると、不思議ではないか？　ここに疑問が二途に分れた。かの女はこちらの來たのを知りながらも、その手ぬぐひをこちらの斷念のしるしと見て安心し、相變らず父にはそらとぼけて默つてゐたのであらうか？　そしてそれだけの利口さ若しくは圖々しさがあつたとすれば、その前にこちらの

うちへ來なくなつたのも父や叔母に命令されたのではなくて、かの女自身のそらとぼけた計らひであつたのだらう。そしてまたそれも本當なら、自分が自分の父に對するこの方の恥かしみ並びに弱みがそれだけ輕くなる代りに、かの女の淫亂らしい性質がこちらに一層おそろしくなるわけだ。かの女はこちらが何も事情を知らなかつたのをいいしほにして、一老人のめかけをしてゐながら、その老人の子を、かの女が來る度每に、叔母のゐないところで接吻してゐたではないか? 云はば、かの女の方からこちらの戀を誘惑したやうなものだ。

『叔母さんに何も云つちやアいけませんよ、ね、叔母さんに!』

『…………』そしてこの祕密のあまさをこちらがただ默つて受けてゐられなくなつた時には向ふも俄かにびツくりして、逃げてしまつたのだ。

その時から見れば、かの女は父の續ける愛に安心して、一層その心が喰へなくなつてゐるに相違ない。そしてこちらもそれだけおとなになつて來た。自分が若しかの女と同じ家根の下に住むこととなつては、父の留守にかの女がいつ、また、以前よりもひどい手段と落ち付きとを以つて誘惑に來るかも知れない。それが第一におそろしかつた。そして尋常な親なら、その子とそのめかけとにそんな危險があるのを知りながら、一緒に住めと云ふわけもないだらう。

若しまた、この想像とは全く反對に、父もこのことを十分に、若しくは半分なりとも、知つてゐな

がらなほ且こんな命令を發したとして見る。果してさうなら、また、親としてその子をおもちやにし過ぎて、あまりに不人情ではないか？あまりに殘酷ではないか？わざわざ、こちらの氣持ちを一層惡くし、こちらの折角實母とのめぐり會ひによつて多少でも遠ざけることができた悲觀にまた別な芽を吹き出させると云ふものだらう。

今一歩疑ひを進めて見ると、こちらに母のありかが分つて度々會ひに行つてるのを――叔母がどう云ふ風に聞かせてあるのかは知らないが――父もこの頃では知つてるやうだから、その復讐をそれとなくするつもりではなからうか？

『父にはろくろく口もきかない癖に、畜生！　お母のところへは連りに行きやアがつて』なんかと云つて？つまり、その氣ならその氣で、親にも考へがあるといきどほつて、こちらへはわざとこちらの昔の戀の破滅を毎日のやうに實例を以つて見せ付け、悲觀して死ぬなら死んでしまへ、あと取りにはお浪にできた子を立てるとでも云ふのだらうか？　おやぢの罪惡の結果なる財産などは、澤山あればあるほど罪深いものだから、こちらはそれに少しも目を吳れてゐないのだが――。

この二つの疑問のうちそのいづれかを一つでもいだいてゐれば、自分が父の命令に従ふことは、精神的にも肉體的にも、自分の死を豫期してゐなければならぬことであつたのだ。

五

『向ふへ行つたツて、どうせおツ母さんが尋ねて來ることさへできないのだから、いツそのこと、これをしほに僕もお父アんとの關係を絶たうと思ひますが――』斯う云ふことを、思案に餘つて、母のもとへ相談しに行つた。

『夫婦の緣は直ぐでも切れるが、お前、親子の關係を絶たうと云つたツて絶てやアしないものだから』と云つて、母は反對の意見であつた。この頃では、もう、餘ほどお互ひの遠慮が取れてゐたのだ。『どうせお前は子供だから、お父アんの云ふ通りにしてゐたらいいぢやアないの？』

『…………』それには、然し、わけがあるからとは、いかに母にでも、うち明けられなかつた。氣を取り直して、『ぢやツ、さうしようか知らん？』

『まア、さうしておいでよ。そのうちにやアお父アんも死んで、財産の幾分かは來るにきまつてるから。』

『そんなものア――』自分は母に向つてもさう口かずを聽かなかつた。わざと聽かないのではないが長いあひだの習慣がさう物を云はないでも自分を滿足させてゐた。が、母からは、

『お前は初めて尋ねて來て呉れた時から顏いろの惡い子だツたが、ね、少し氣を付けないといけない』

よ。近ごろの色ツたらありやアしないから、ね』と云はれた。

『さう聽けば、僕も氣が付いてゐないことはないのです。市兵衞町へ來いと云はれてから、殊に氣が面白くなくツて。』自分としてこれは少しも誇張した答へではなかつた。自分は精神醫學に就いてわざわざ自分ながらをかしいと思はれる自分の精神狀態を研究して見たが、どうも、父の不義不德の變態心理が自分にも遺傳してゐるやうで――それと自分の正しい理性とが心のうちで戰ひつつ、一種の氣狂ひになつてゐるのであらう。そして鏡に向つてこツそり寫して見る自分の顏の色つやがよくないのもつまり、その結果であると思はれるのだがそこまでうち明けては、母を悲しませるばかりだらうから、さし控へてゐた。

『然し、ね、お父アんはお父アんで、お前が何もわざわざ向ふのことまで氣にするにも及ばないぢやアないの？』

『さうは行きませんが――。』兎に角、こちらは自分の獨りで貧しく暮してゐる母を安心させる爲めだと思つて、他の何ごとにも目をつぶつて父の云ふ通りにすることにした。が、自分としては、父かお浪かのどちらからでも殺されるかも知れないので、いのちがけの覺悟であつた。

母が貧しい商賣がらにも似合はず、女として無銘の正宗だと云ふ短刀を今までも所有してゐたのにこちらは感心したが、それをそれとなくかの女から貰ひ受けた。そしてそれを自分の胸に呑んで、叔

母や自分の荷物について初めて市兵衛町の新築邸へ向つた。

　正面には、練瓦でうへの方にすかしの這入つた嚴丈な壁が廣がつてた。そしてそのあひだに切れた幅の廣い門は赤塗り鐵の雨びらきで兩方の太い四角な石ばしらの上には、各々一つの植ゑ木鉢が載つてて、つたのえだ葉を垂らしてゐた。その中はなかなか廣いが、自分から見ても無趣味な庭で、ところどころ芝くさを圓くしてその眞ン中に大きな木を植ゑたその一つは蜜柑の木らしいが、この夏に向つて植ゑたからでもあらうか枯れかかつてゐた。

　庭の眞ン中に立つてる建て物のおもては洋館風で、石段つきの玄關などもあるが、うらへ續いては日本流のであつた。

『先づ、おれの自慢な部屋々々を見せてやるから來い。』父はにこにこしながら、如何にも滿足さうに先きに立つた。が、正一は自分が從つて行かないで、叔母だけを行かせた。

『…………』一體何が自慢なのだ？　たとへ西洋風の應接室は皆に新らしく珍らしいとしても、そこの椅子に腰かけ、テイブルに向つて、應接するところの仕事はと云つたら、もともと人から不義によつて近づき、素殺を以つて奪ひ取つたそのかねの高利貸し事業ではないか？　そんな場所は自分の生きてる限り見たくもなかつた。

　自分は自分の居間ときめられた一番奥の、廊下つづきで離れのやうになつてるうへ下ふた間の二階

へ、自分の机や書棚を運んでると、父と叔母とをはづしてあと戻りして來たお浪が――もう、丸髷などになつてゐて――

『正ちやん』と、それでも少し顔を赤らめながら云つた、『久しぶり、ねい。』

『…………』いつか知れるとかの女が云つたのはこのことだらうが、こちらは一度ちよつと見ただけで、あとはふり向きもしなかつた。かの女の顔に出たその色を、も早や、かの女の憎むべき淫慾のほだしだと見て、その印象を私かに自分の心からふり拂ふやうにしながら、恰度自分の足もとにあつた學校のノートや教科書や、その他に度々讀む爲めに自分の手あかでよごされた自分のたツた一つの聖書とも云ふべき精神醫學の書などを、かた手を以つてかた腕に積み重ねてゐた。

『あなたも大きくなつたぢやアございませんか?』

『…………』

『いまだにおこつてるの?』

『…………』

『ええ、正ちやん』と、かの女はこちらの後ろからこちらの横がほをのぞいた。

『…………』正一はかの女のおしろいを附けた顔に訴へるやうなにが笑ひが見えたので、えい、けがらはしいと思つた。そしてまだ書物を積み重ねられる餘地があつた自分の腕のあひだを他の方の手で

押さへ締めると同時に、ぷいと立つて二階へあがつてしまつた。
『ねえ、正ちやん、お前さんはあんまり變人過ぎるぢやアないの？』離れの下に寢ることになつた叔母は、その翌日になつて、こツそり二階へあがつて來て、心配さうに斯う云つた。『お父あんにろくろく挨拶しないのもよくないが、お浪さんにだつて、斯うしてゐりやアたとへ若くつても、お前さんのおツ母さんのわけだからね。わたし達が來早々ゆふべは、あの人がくやしいツて、涙をこぼしながらくどいてましたよ。』
『だから、來たくなかつたのです！』
『そんなことを云つたツて、お前さん、來た以上は、さ。』
『…………』こちらには、もう、返事の必要がなかつた。父がこれに懲りて直ぐにも追ひ出して呉れれば、自分としてはそれほど望ましいことはなかつた。が、親としての世間ていを憚つて、さうもできないと云ふなら、自分をもまた前の高利貸し主人のやうに、またあとのをんな主人のやうにして、早く殺して呉れたらいいのだ。
但し、自分は持つて來た覺悟通り他殺にされたくない。若し父がやい刄を持つて來ればやい刄で立ち向ひ、若しまた毒を向ければ毒を返してから、自殺するのだ。その自殺が間接にはたとへ父の他殺と同じであるとしてもだ。そして自殺や間接の他殺には毒藥も入らない、かたなも無用だ。今からで

も直ぐ父の與へる食事を取らなかつたらいい。いや、その食事にさへ既に不義や罪惡(ざいあく)の毒は這入つてるのであるから、自分は、もう、――實母さへゐなければ――のめのめと公けの社會へ出る耻ぢ知らずの準備などをするにも及ばないのだ！

『ぢやア、いよいよ市兵衞町へ行つたら、あんまりおほびらに――きた度々――來ない方がいいよ。』と、母は云つたつけ。『お父アんの氣を惡くしてもよくないから、ね。』

『なアに、僕は、もうそんな僞善(ぎぜん)がましいことは考へられないんです』と答へた。その代り、母と共にならいつでも死んだつてかまはないつもりであつた。

　ボートなどは、もう、せんに止めてしまつたが、高等學校だけは今一年で卒業だからと云ふので――それもよんどころない母の勸めだから――尋常にかよつてゐた。ところが、或日、歸宅して見ると、いつも自分の歸りを待つてて制服(せいふく)をぬぐ手傳ひなどをして呉れる叔母も、どこかへ出たかしてゐなかつた。で、自分獨りで服をぬいでると、意外にも――ここへ來てから、二度目の意外だが――お浪が赤ン坊を抱いてあがつて來て、ありがたくも無いのに、叔母の代理(だいり)をした。そして、また、

『正ちやん』となまめかしい聲になつて、『許して、ね、あたしが惡かつたのだから。あの時、すこしわけがあると云つたでせう。そのわけとは。もう、あたしが云はないでも、今度で分りましたでせう。』

ぼえた。

つただらうがと責めてやつてもよかつた。が、それだけの僅かな執着も自分にはなくなつてるのをお

『…………』少くとも、こちらだけには、今度が決して初めてではない。手ぬぐひの時に、あれを拾

『だから、ね、許して、ね。さうしてもとの何もなかつた時のやうになつて、仲よくして頂戴よ。』

『…………』こちらはぷんとかの女のお化粧か何かのにほひをまた感じた。そしてあのこと以來自分

が無理にも制してゐる性慾が、却つて、その本性とは反對の方へ動いて、かの女の淫亂さうな微笑に

對しても、また自分の默つてはまぎらせないやうにのぼせて來た弱點に對しても、反感ばかりが燃え

てゐた。そしてまたぷいと、かの女を置き去りにして二階を飛び下り、當てもなく外へ出てしまつた。

今度、若しまた三度目に、自分の寢どこへでもかの女が忍び込んで來て見ろ、如何に罪惡の積りつ

もつてる父をかの女が裏切るに過ぎないとしても、不義たる行爲はそこにも矢つ張り不義だ。だか

ら、自分は兼て用意の一刀を以つてかの女を切り殺してやるだけのことだ。

どうせ父から間接に他殺されることは前以つて承知の自分だから、お浪を殺して自分も自殺するほ

どのことは何でもないことであると思へた。

六

まだ夏のうちであつて、夜かぜが明けつ放した廊下を越えて這入つて來て、靑い蚊帳をゆり動かすのが氣持ちよかつた。が、自分の不眠症が段々につのつて行くのを正一は自分ながら苦しかつた。

『戶を締めないで寢るのは如何にも不用心きはまる!』父は怒つて注意を與へたけれども、こちらはそれに對する返事をあとで間接に傳へさせる爲め、叔母に向つて、

『どうせ僕は。』と語つた、『夜ツぴて眠らないんだから、若しまた眠つてて泥棒に這入られたからつて、取られる物はみんなもともと僕らの血屬の所有物ぢやアなかつたのでせう。』

『そんなことを、お前さん、お父アんの前で云へますか?』

『なアに、云はないでも分つてます。』たまに斯う云ふ警句を云つたことでさへ、あとで思ひ出すと、それを自分一生の遺言にしてよかつた。

明るい夜で、これも父の植ゑた、背の高い大きな、柳のあたまが、月の光りをしよつて、こちらの橫になつてる寢どこをのぞいてゐた。そしてそれが自分には、父の私かに命じた間諜のやうに見えて、ますます自分の神經を高ぶらせた。

で、こちらも反對に父のあとをつけて見ると、渠は沙翁の『マクベス』に出るヘカテのほら穴のやうなところにゐた。そしてひどい火氣の爲めに顏を眞つ赤にして、おほ釜の中をかきまぜてゐた。そして毒藥を製造してゐるのであつた。

『今に見てゐろ、貴さまにも飮ませるのだぞ！』

『どう致しまして』と、こちらは案外おとなじみた返事をした。『わたしにやアさう澤山は御無用です。』

『ふていやつだから、ちびちび飮ませても、一斗や二斗は入るだらう？』

『いいえ、たつた一ガラムばかりで。』いや、そんな物を全く使はないでも、自分は死ねるのであつた。自分はただ眠りたくても眠れないのが苦しいばかりだ。つまり、目を明きながら、墓の下へ這入つて、地獄の責めを受けてるやうなものだ。これも、然し、父の罪惡の結果なら、そして自分がその責めを受けて父の淸淨が得られるなら、止むを得ないことだが――。

　さきの高利貸しやその不義な女房の全く改心した幽靈が――毎晩出るやうに――今夜もまた現はれた。そして、

『どうかあなたの爲めに浮ばれるやうにしていただきたい』と云ふのであつた。此聲は四すみのはしらの蔭や蚊帳の横たるみから聽えたが、そのぬしの姿は見えなかつた。

『なんぢらはなんぢらを殺した者の緣にたよつておれのところへもたれ込んで來るのだらうが――』

さうだ、自分も亦父の罪惡性を遺傳されてゐるのだ。だから、自分はこの遺傳を絕つ爲め結婚をもしまいと決心してゐるのではないか？『いツそのこと、殺せ！　殺せ！　おれを！』

この血統的、遺傳的悲劇には叔母だツても、氣の毒だが、巻き込まれてゐるのであるから、矢ツ張り、殺されるべきものの一人だらう。それをも知らないで、すやすやと眠つてるいびきの聲が下から聽えて來るのを、この場合、自分は憎らしくもあり、馬鹿のやうにも思へた。

そしてやる瀬がないままに、目を蚊帳のうちからそとに放つて見ると、輕く風にゆらぐ柳の葉が――うら返るのもあるのかして――その度毎にきらきらと光つた。それを多くのほたるか何ぞのやうにうちながめてゐると、幸ひにも、少し眠りを催して來て、うとうとした。

すると、足おともさせないで忍び込んで來た女のすがたが見えた。その初め、てツきりこれはお浪に相違ないと思つた。が、さうではなかつた。驚いて俄かに自分の半身をはね起し、直ぐ自分の枕もとにいつも隱して置くところの短刀を取り出して、すらりとそのさやを拔き拂つたのである。すると、そのすらりが柳の葉のさやぎに移つて行つた。そして吹き入る風にも魔氣を感じて、自分のからだは總毛立つてた。

確かに女ではあつたが、少しも若いところはなかつた。そしてそのあたま付きと云ひ、おぼえのある衣物の縞がらと云ひ――すべてが押上の母に似てゐた――顔だけがはツきりと分らなかつたけれども。

考へるひまもなく、蚊帳のすそをはね上げてそこへ出るが早いか、おそろしさの餘り、わざとにも

とんとん云はせてはしご段を下りて行つた。

するど、叔母が目をさましてゐて、蚊帳の中から、これもびツくりしたやうに、

『なんです、ね、お前さんは――拔き身など持つて？』

『今、誰れか來たでせう――下へ？』母の幽靈でなければ、化け物に違ひないのであつた。

『いいえ、だアれも來やアしないよ。わたしは、つい、今何か大きな音がしたので、目をさましてゐたけれど。』

『どんな音です』と、こちらはなほせき込んでゐた。

『何か、どたんと、戸でもはづれたやうな――』

『ええ』と、聲まであとずさりさせて、また自分の戰慄を新たにしたのである。

して見ると、化け物でもなかつた。確かに母の靈魂が自分に會ひに來たのだ。そして人の死ぬ時には、人だまが出るかさうでなければ、不思議な音がするとも云ふことがあるから、これはきツと母が急病で死んだか、危篤であるかの知らせだと直覺できた。

もう、眠れないにきまつてるし、どうせ行つて見るなら、今から直ぐの方がいいと決心して、家を飛び出した。そして途中から夜明け歸りの俥に乘つた。

こんな不思議には自分も初めて會つたのだが、母は果して近處の人々に取り卷かれて、もう、あの

世の人になつてゐた。別に遺言と云ふほどのことはなかつたけれど、
『苦しい息のもとから、葬式の費用に使つてもまだ殘るものがあつたら、市兵衞町にゐる子供にやつて與れいと申しました』と、一人の親切らしい男がこちらへ告げた。そして使ひを出したのだが、それと行き違ひに早くこちらが來たのを皆も非常に不思議がつた。さう聽くと、正一は泣くどころではなく、寧ろこの不思議に打たれて俄かに哲學者にでも成り澄ましたやうな勇氣を得た。

そしてその翌日の葬式までを――無論、皆に相談して手傳つて貰ひながら――自分が主となつて立ち働いた。そして母のかたみは自分には例の短刀一口で十分だから、殘つたものはすべて近處の人人に分けてやつた。お浪の名義でよこした香奠貳拾圓も、これは母の爲めよりも、こちらの心を迎へる爲めに過ぎなからうと思へたので、自分はそれに目を與れないで、それをもそツくり分配した。

そして靈に於いても一たび通じ合つた親子のことなら、自分も死んで行きさへすればまた一緒になれるのだと云ふ信仰を得て、そのまゝ、ぶらぶらと東京市を市外へ遠ざかりつつ、當もなく漂泊して歩いた。そして、もう、全く望みも頼みもなくなつてしまつた。自分の父の家などへは歸らうともしなかつた。自分としては、もう、生きる必要もなかつた。まして學校へ行くことなどは！

然し、人間は空腹になると、乞食をしても生きたいものであつた。渠はこれを自分に經驗して見ると、自殺には、矢ツ張り、他殺同様の道具が入ることに氣が付いた。そして母のかたみとなつた物を

それだと思ひ出すと同時に、それを取りに、十三日目にやッと父の家へ歸つて來た。そして俄かにがッかりしたせいか、自分には却つて分つてても、醫者には本當の原因の分らない病氣にかかつて、半年ばかりを寢たり起きたりして暮した。

このあひだに、父はこちらを殺す氣などの少しもないやうだし、そしてお浪も――そのおつとに別にまた巣のあることを知つてるにも拘らず――こちらの思つたやうなそんな淫亂をんなでもないらしいことが分つた。けれども、こちらは自分として殆ど十年足らずも習慣になつた無くちを破ることはできなかつた。そして罪惡人の子であることは、なほ更らのこと！

で、こなたも父の命令として、お浪よりも三つ年したの女と――自分としては、然し、名義だけの――結婚をしたけれども、その式には、たツた兩方の兩親とたツた一人の同窓としか列席して貰はなかつた。而も自分は初めから夫婦のまじはりをまじへるつもりはなかつたので、その名義上だけの妻を叔母と共にいつも下に寢かせて、自分は相變らず獨りで二階に不眠症をつづけることにした。

父が矢ツ張りお浪一人では滿足してゐないで、そとにも怪しいのがあることも分つてゐたので、或はその嫁にも關係をつけはしないかと云ふ疑ひが時々こちらのあたまに浮ばないでもなかつた。が、そんなことはどうでもよかつた。

正一は以前から無けなしであつた友達ともすべて自分から遠ざかつてしまつた。自分としては、友

人や女ばかりでなく、すべて人間と云ふ人間の顔を見たく無くなつてゐたのである。

――(大正八年十二月)――

眞理論者

或化學工藝品の一手販賣を引き受けると云ふかけ合ひごとの爲めに、淸次は汽車に乘つて、わざわざ○○市へ出かけた。が、相ひ手が他へ出張の留守で、明日の午後でなければ歸らないとのことであつた。不慣れの土地であるから、ちよツと當惑してしまつた。さうかと云つて、また出直すには汽車の旅としては遠過ぎたのである。

車上をどこか宿屋のある町まで引ツ返して行く途中、何派かの耶蘇教會堂の前をよこぎつて、ふと思ひ出したのだが——當地には一人、自分の舊友がゐる筈であつた。それが而も、去年のいつ頃であつたか、近々牧師をやめて、東京に移住し、こちらの住んでる靑山の原宿なり、どこなり、兎に角、少し場末のこれから發展しようと云ふあたりで藥種屋を初めたいから、いづれ、久し振りの訪問かたがた一度やつて來ると云ふことづてを人づてによこしたこともあつた。が、それツ切り本人の音沙汰はなかつたので、自分ももと〳〵通りに忘れてゐた。

それをこちらから驚かして、どうせ手の明いたこの一と晩を語り暮らすのも面白からうと云ふ氣に

なつた。そして、自分の車夫に

『ちよツと待て』を命じ、『どうだ、齋藤博雅と云つて、宇宙敎會の傳道をやつてる人を知らないか』と聽いて見た。數へて見れば、もう、二十年ばかりもこの地に住んでるのだから、少し古い車夫なら、乘せたおぼえが一度や二度はあるかも知れなかつた。

『あの人なら』と、果して知つてる答へであつた、『毎晩、夜學をやつてをりますから、そこへ行けば分ります。』

『ぢやア、頼む』と、こちらは少からず勇氣を得たのである。むかしは自分も渠と一緖に東京の或敎會堂を敎室にして、英語の夜學を開らいてゐたのだ。そしてそこで、渠の病氣などの時は、自分が渠の代理になつて、日曜日に於ける西洋人の朝の說敎を通譯したこともあつた。それが緣となつて、自分も一度は傳道師となつた。

が、それが詰らなくなつて學校敎育者に轉じ、尋常師範學校の倫理や英語の敎師となつた。それからまた別な地方の高等女學校長もやつた。それがまた一大變化して、東京へ歸ると同時に、米屋さんになつた。そしてその失敗が却つて今の會社に於ける重役の地位をかち得たもとになつた。自分はそれにも滿足しないで、別にまた今回のやうな野心をも企ててゐるのだ。うまく行けば、それを土臺にして、一つの株式會社を起すつもりだ。が、そのあひだを、齋藤は、十年一日の如しと云ふ形容が實

際に於いて既に二倍されてゐながらも、なほ且同じやうなことをしてゐるらしかつた。

△△町の夜學講習會と云ふのへ行つて見ると、見おぼえのある長い顏にうわひげの舊友が直ぐ、その敎室――と云つても、低い天井の下に敷かれた疊の上に、小學校の長い腰かけのやうなのを二列に五つ六つづつを竝べて、たツた五六人の生徒らしいのに對する黑板には英語の綴り字を敎へてゐた――の障子を明けて狹い板の間へ出て來た。そして、薄い書物をかた手に開らいて持つたまま、

『黑田さん、よく訪ねて來て下さいました』と云つた。これもおぼえのある通りの少しく延びのした調子だ。讃めて云へば、相變らずの落ち付きだが、斯う云ふ場合の感動が少しも見えなかつた。『然し、今丁度敎授の時間ですから――。』

『そりやアやつておしまひなさい』と、こちらは素直に答へた。自分の經驗から云へば、然しそんな詰らない時間は――殆どわたくし的なもので、――休んでしまつてもよからうにと思へたが。自分は若し齋藤の家にさしつかへでもあるなら、このあひだに宿をきめて來ようと考へたので、『どうだ、ね、今夜、君のうちへとめて貰へるか？ちよツと商買上の用事でこの地へ來たのだが、相ひ手の人があすでなければ歸らないと云ふので、今夜は久しぶりで語り明かしてもいいのだが――。』

『おさしつかへさへ無ければ、僕の方はかまひません。但しです、今、子供がひとり病氣で、おかまひすることはできませんが――。』

『そりやア、困るだらう、ね、病人があれば氣の毒で。』
『僕の方は少しもさしつかへはありませんが――。』
『ぢやア、兎に角、最初の考へ通りだ、行くことにして――。』
『それでは、一と足さきへ行つてをつて下さい。僕は直ぐあとから行きますから。』
『あれは××町だ、ね』と、こちらはまた思ひ出してゐた。一度、渠を尋ねて來たこともあるのであつた。そして市中の中央にある何とか神社の山へあがつて、けしきを眺めたりした。また、夏であつたから、ここから一番近い海岸へ遊びに行つて、二人で船を出したが、風の方向が變じて大洋へ流されかけたのを、漁船の爲めに助けられた。が、その後は、仕事の違ふ爲めに互ひに段々と遠ざかつて行つて、向ふが年會の用で上京しても訪問して來ず、こちらも亦汽車でこの地をよぎつても下りることがなかつた。が、町の名だけはおぼえてゐた。
『さうです。』
『ぢやア、行つてるから』と云つて、そこのうす暗い土間とくぐり戸とを出て、こちらは待たせて置いた車に再び乘つた。そしてまだ宵だのに餘り活氣の見えない町なかを出て、ひるまでも寂しさうな昔の城あとへ突き當り、その堀ツぷちを少しまはつて、友人の家に行き着いた。そして斯う〳〵云ふわけで主人よりもさきへ來たと云つて、座敷へとほつた。

もう、クリスマスが來るのだ、な、と思はせる品物――カードやら、學校用の手帳やら、リボン、西洋人形、鉛筆など――が別々に散らかしてあつて、それを、のろい又は落ち付きある言葉ぶりまで友人そツくりの十一二歳の男の子と、これに對してこの主人のことを先生、細君のことを奧さんと云つてる十六七歳の娘とが、相談し合つて包み分けてゐた。この娘の子が取り次ぎにも出て、火鉢の火も入れて呉れたのだが、教會員として、日曜日などには先きに立つて、こちらもおぼえのある『主エスよ』云々などの讃美歌を歌ふ一人らしかつた。色の白い而も可なり器量のいい子で、叮嚀な言葉を用ゐながら、而もはき〳〵と仕事を運んでるそのととのつた橫がほを見てゐると、こちらは若しこれが許されてる場所ならちよツとその手を握つて見たいやうな氣もした。無論、この家の人ではないらしかつたから。

『平木さん。』隣りの室から呼びごゑがした、細君のらしい。

『はい』と、この娘は返事をして行つた。

『…………』子供のむづかつてる聲がしたり、氷を持つて來させたりしてゐるやうすでは、こちらがわざわざ押しかけて來たのはよくなかつた。ちよツとでも細君が顏を出せば、挨拶だけして直ぐまたここを出ようとも考へた。が、その名を平木さんと分つた娘が用をすませてまた出て來ても、細君の方はなか〳〵見えなかつた。

さきに、かの女がそのをつとに從つて東京へ出て來た時、こちらの家へ一泊したことがあるが、錢湯へ行つてもそばにある湯をけが見えなかつたと云ふほどの近眼であつた。
『あれで子供が生れたらどうするでしよう、ね』と、こちらの母も氣の毒さうにしたツけ。『まるで目くらも同樣ぢやア、子供が寢どこを這ひ出しても見えやアしないで？』
『きツと、齊藤さんは人がいいから、誰れかに押し付けられたんです、わ』と、こちらの昔の妻も云つた。女はみんな人が惡いものだから。
『然し、好きで貰つた以上は仕方がない、さ。』その時から、英語だけは相當にできる婦人だと云はれてゐた。友人もそれに惚れ込んだらしかつた。が、英語では子供のおしめの世話などはできなかつたらう。今でも强度の近眼鏡をかけてゐるのかどうか――好奇心も手傳つて――早く見たかつた。
時間がたつにつれて、自分も目の前のものに親しみが出て來て、こちらは平木さんにもさう傍觀的な目を以つてでなくに時々話をまじへた。
『もう、お歸りになりさうなものですが、ね』と、かの女も思つたより人慣れてるのであつた。『電話をかけて見ましようですか？』
『いや、それにも及びません。どうせ用がすめば歸るでしよう。齊藤君はなか〳〵ゆツくりした人ですから、ね』と、こちらは最前のやうすに昔のことを思ひ合はせてゐた。そして直ぐと云つたのがこ

んなにかかるのを、寧ろ友人の性質がよく現はれてる一例だと考へた。半ばすまし込んで平木さんに、
『あなたはなか〳〵お働らきです、ね。』
『ほ、ほ！』ちよツと首をすくめて笑ひ聲を漏らしたのが、『先生がこの頃おいそがしいものですから』と云つた。
『お病人は大分おひどいのですか？』
『ええ、お子さんですが、肺炎ですから、ね。先月も同じ病氣で總領のお子さんがおなくなりになりました。』
『さうださうです、ね。』これでまた話しの種が切れた。
清次は火鉢に接近して寒さをまぎらせながら、床の間の次ぎに仕組んである書棚の中の本をながてゐると、主人が耶蘇教家であるにも似合はず、多くの佛教書類や神道に關する書物も這入つてゐた。讀書だけは隨分廣くやつてるのだらうと、今やかね儲けにばかりいそがしくツて讀書に遠ざかつてる自分からは、私かに敬意を表しないではゐられなかつた。が、そのあとから、然し、また、八宗兼學の藥種屋さんは面白からうが、どうなつてるのか知らんと云ふ冷かし氣ぶんもあたまを出した。
兎に角、自分なら、久し振りも久し振りな友人の顏を見た以上、何は置いても早く飛んで來るだらう。ましてうちでは子供が病氣で、手が足りないのだから。然し、齋藤はさうでなかつた。あんなけ

ち臭い夜學校に對しても、――どうせ月謝なんかは問題ではなからうが――公けとわたくしごとの區別をわきまへてるのなら、それも渠自身の心がけとして、一つの善事であらう。それを、不斷に疎遠であつたこちらが、俄かに友人だからツて、たツた一度でも破らせるわけには行かなかつた。

『どうでしよう、またやらせましようか』と云つて、齋藤が主張者になつてよくこちらと今一人の神學生とからも四五錢づつを徵集して、渠の宿の主婦にまるごとの大きな唐茄子をゆでさせ、それをナイフで切り取りながら、澤山の白砂糖をつけて喰ひ平らげた。が、そんなことは、無論、書生時代の單純な熱に過ぎぬと見てしまつてもよかつた。年は、確か、こちらよりも一つうへた筈だ。こちらが頻りにかね儲けにあせつてると同樣に、向ふは向ふで――年輩相當の考へがあつて――おのれの仕事に忠實でなければいけないのかも知れなかつた。

やツと歸つて來て、渠がふすまを明けると、

『黑田さん、どうもお待たせしました。あとでいろ〳〵お話しも伺ひたいのですが、ちよツと子供の方の用をすませますからと、』のツそり突ツ立つたまま、少しも飾り氣のない言葉はそれでも、素朴と云はうか、むかし通りと云はうか、こちらには心が置けないでよかつた。

『…………』もう、十時を過ぎたのだから、別に宿を取ると云ふやうな水くさいことを云ひ出さない方がよからうと思へた。

『平木さんも今一と晩とまつて行つてもよろしいでしよう』と、齋藤はつづいてその言葉をかの女に向けた。『電話をかけて置きます――東京からお客さんがあつて、またお手傳ひが入りますからツて？』それから、氷を割る音や何かをさせてゐた。また、隣室へ來て、細君に何かの話をひそ〳〵と。そして半ときばかりの後に、やツと二度目の顏を出したかと思ふと、『今少しお待ちを願ひます。ちよツと電話をかけて來ますから。』

『どうか、さう僕の方は心配しないで――』

渠がどこまでか行つて歸つて來るまでにまた十五分か二十分かかつた。それから、初めて坐わつて、『どうもお久しうございました。折角來て下さつても、あいにく、クリスマスの準備やら、子供の病氣やらでこのありさまです。それに、總領の子を先月肺炎で無くしましたところへ、また今度末の子か同じ病氣にかかつてをりまして。』

『そりやア、困る、ね。僕も何だか氣が引けてて、先づ、宿をきめて來ようかとも考へたのだが――。』

『いいえ、おかまひなくば、蒲團はありますから。』きまじめで、さう笑がほを見せたことのないのは、この人の持ち前だと分つてゐた。『平木さん、おかげで大分かたづきました。今晩は、もう、遲くなりましたから、義務はあすのことに致しましよう。』

『では、さうしましよう』と、平木さんも相ひ手の子に云つた。實際、こちらの娘にしてもこれだけ

可愛く見えるは子なかつた。

『どうです、炬燵もありますから、向ふへまゐりましよう。ここは一度掃いて貰つて、あなたの寢どこを取らせますから。』

そしてやぐら炬燵のできる茶のまへ行つてから、それをさし挾んで向ひ合ふと、齋藤はつつましやかな婦人を聯想させるやうな微笑の顔つきで、その目や口までを少しかた向けて、また『隨分お久しぶりです、ね』と云つた、『然し、あなたは少しもお變はりになつてをられません、』

『君も矢ツ張りもと〳〵通りの君のやうだ、ね。』斯うこちらが答へたには、相變らず引き立たない職業に從事して、而も同じ細君をつづけてゐるのがみじめだといふ意味を、それとなく、含めてゐたのである。が、職業の性質としては必らずしも一概にはさうけなすべきでもなかつたので、自分から直ぐ仲を取つて、『まア、お互ひに無事で結構、さ。』

『御活動ぶりはおうわさで度々聽いてをりますが、この頃では、もう、稽神問題の方にはおたづさはりになりませんか?』

『…………』こちらは耶蘇教の信仰や修養のことを云つてるのだらうと思つたので、そんな不自然で而も無用なことは『無論』だと答へた。そしてそんなことでよりも、寧ろ、世間の實際問題や生活その物によつて心がけあるものらが直接にきたはれる思想や人格の方がどれだけ適切で而も有用だか分

らないと云ふやうなことなどは、ここでまだ說明をしなかつた。そして一般の生まじめ家に向つてわざと云つてやるのと同じやうに、『なんしろ、僕らはかね儲けが第一だから、ね。』

『さうして、儲かりますか？』

『いや、なか〳〵儲かるものぢやアない。それでも、もツと儲けたいので、この市へもわざ〳〵或人を尋ねて出かけて來たのだが、ね。』

『僕もやがて時機を見て商買でもやらうとは思つてをりますが――。』

『そりやア、いつか聽いて、君の爲めにいいことだと思つて待つてたのだが――。』

『ところが、僕のは』と、齋藤は少しも感動や熱心を帶びてゐない聲で、『さう手ツ取り早く行きませんのです。さう考へてはをりますが、僕の生活としては一大變化でありますし、また敎會の方にも僕のいいあと釜がなければ氣の毒でありまして。』

『君も隨分長いあひだの奉公だから、ね。』さうだ、聽いて見ると、〇〇市と××市とにも、いまだにもと〳〵からの人が殘つてるさうだが、それらに比べると、まだ〳〵この友人の方が正直でもあり、忠實でもある筈だ。が、このやうすでは、友人の爲めに最も安全な道を勸めて見るとすれば、矢ツ張り、あるか無きかのままで死んでるも同樣な同敎會の傳道を續けてゐる方がいいらしい。社會的、國家經濟的に云つても、――多少は有害かも知れないが――外國人から俸給を受けて、それがたとへ僅

かでも、それだけをわが國に加へてゐるのだ。

『眞理の爲めの奉公ですから、少しもかまひませんが――』

『………』こちらは、然し、眞理なる物がさう無發展でゐるわけはないと思ひながら、『まア、僕は君らの所謂背信者だから、なほ更らかねが無けりやア何もできやアしないのだ。』

『僕も、然し、或意味では背信者です。』

『へい!』こちらは渠にもそんな意氣があるのかと頼母しかつた。が、それは大して特別なことではなかつた。

『僕の屬する敎會が既にユニテリアン派と共に他の敎派から見れば背信的に見なされてをりますところへ持つて來て、僕はまた僕らの宇宙敎會派西洋人からも異端視されてをります。然し、僕は眞理は一つだと思ひますから、反對があるにも拘らず、少くとも自分のうちだけでは、自分の自信を實行してをります。』

『………』どう云ふ自信かと思へば、友人のは相變らず古くさいユニテリアン的な信念と云へば信念、迷信と見れば迷信であつた。乃ち、佛敎だツて、マホメト敎だツて、矢ツ張り、その目的は眞理である。ところが、眞理に二つはないから、どの宗敎、宗派をでも平等に信じてかまはない。耶蘇敎信者でありながら、佛敎の僧侶とも交際し、また神道のかんぬしにも交際を求めてゐる。そして先月な

どは、子供の死んだ時、友人の坊さん達が來てお經を讀んでやると云ふので、それに反對な西洋人だけは呼ばなかつたが、あとのみんなでその席に列した。無論、齋藤自身の家でだ。若しかん主が來て、おはらひをしてやらうと云へば、それも斷わるには及ばない。眞理から云へば、すべて同信の友のことだ。と、こんなことを云つてわが國の古歌
『分けのぼるふもとの道は變はれども、同じ高嶺の月を見るかな』をも引證にした。
『そりやア、全くの空想、さ、ね』と、黑田は自分の前々から迷ひ迷つて最後に得た思想上の立ち場から反對した。『如何にちよツと見では實際生活と離れた思想上のことだツて、實際生活を動かさないやうなものは駄目だ。』
『然し』と、齋藤も議論になると、その職業上の習慣からでもあらうが、少し熱を加へて來た。炬燵ぶとんの上へ下向きに揃へて眞ツ直ぐに出してた兩手を顫はせながら、『さう實行してゐるのが既に實際生活ではありませんか？』
『違ふ、ね。君の云ふのがよしんば生活であつたとしても、ほんの、ただの遊戲若しくはおもちやの物、さ。』こちらはクリスマスの贈り物に尤もらしい宗教的意義をつけることの愚をも考へてゐた。そしてさきの古歌を他の或友人が、分けのぼるふもとの道は變はりつつ、別な心で月を見るかなとやうに改訂したことを思ひ出した。月は一つでも、みなが同じ心、同じ道では見られないのである。して

見ると、月も同じ月ではないかも知れないのだ。いや、少くとも、同じ月でなくてもいい。それをただ外存的に、若しくは徒らに固定の先入見から、一つだときめてかかつたところで、それは無內容の形式に過ぎないではないか？　生活の要點はそこではなく、別な心を以つて別な道を行ふに在る。そしてこの別な心、別な道はその人、その國の特別な生活事情から生ずるものだ。

ところが、マホメト教はその特別な事情でアラビヤに生じ、佛教はまた特別な理由で印度に出た。耶蘇教もさうで、特別な事情があつてユダヤ民族に發し、特別な事情によつてまた西洋人に傳はつた。が、わが國の事情若しくは生活はまた違つてる。ただ一つの耶蘇教をさへ受け入れるのが間違ひだのに、その上にまた他のいろ〳〵な宗教、宗派を、詮ずるところ一つに歸するなどと安閑なことを云つて受けてるのは、つまり、何ものをも受けてゐないのと同じだらう。云ひ換へれば、ゼロで受けたものの平等は、矢ツ張りゼロの平等で、さう云ふだけ、さう信ずるたけが駄無ではないか？だから、

『君には、結局、實際の生活がないのだよ』と云ひ添へた。

『それでも、生きてるではありませんか？』

『ただ生きてるのは畜生でも生きてる。』

『相變らず猛烈です、ね』と、齋藤は少しも思ひ返すやうすがなかつた。

『…………』こちらは、私かに、渠がそんなたわいもない自信をいだいてゐるのだから、二十年以上

も、ぐづ付くと云ふよりもただ安閑としてゐられたのだらうと思はれた。口に出しては、『君はそんなことでよく疑ひが出ない、ね。』
『そりやア、矢張り、眞理は一つだと信じてをりますから。』
『ぢやア、聽くが、僕のやうに君の眞理を攻擊するものの言葉も、君には眞理か、ね？』
『さう云はれると、少し困りますが』と、齋藤はまたもとの落ち付きに返つて微笑を見せながら、『然し、僕は反對者だからと云つてその人を憎めません。わが敎祖は敵を愛せよとまで申しました。』
『それが旣に君の受けかたに於いて間違つてるのだ。敵を愛せよなんては、理論とすりやア、その實、敵のないところ、人間のゐないところだけで實行できるに過ぎない。』耶蘇だツてまた一方に劍を持つて來れりとまで云つたではないか？　つまり、この二つとも、渠が無學なものらに示めした渠の不用意なたとへ言葉と見ればいいのだ。これを理窟一遍で推し詰めれば、矛盾だ。この場合、理窟に都合のいい方を取つて、都合の惡い方を捨てれば、情理相ひ備はる耶蘇その人の性格若しくは生活が成り立たない。と同時に、人間その物もぶち毀わしだ。『君、人にせよ、國にせよ、實は對抗の意志があつてこそ存在の價値があるのだから、好惡愛憎の念によつて初めて熱あり、主義ある具體化の生活ができるのだ。若し君のやうな偏見が宗敎なら、つまり、それによつて熱もなく、主義もなく、またいのちもない土人形をでも拵らへるつもりだらう。君がそんなことを自覺しないで坊さんどもを自由に入

り込ませるのは、君としてはあまり呑氣過ぎる。向ふに云はせれば、きツと、君を馬鹿にしてゐるわけなのだらう。』
『そんなことはないのです。あなたは宗教に對するお考へがまるで違つてしまひました、ね。』
『………』さうお人よしの呑氣に云はれると、もう、こちらはこれ以上突ツ込むのも無駄であると見えた。無制限に空想から空想に勿體をつけて行つて、それこそまるで夜つゆか天のマナをでも喰らつて生きてたと云はれるおほ昔の詩人さまのやうだ。これで齋藤が牧師の俸給を貰つてるのだから、――こちらが考へた通り、わが國の大切なかねではないからいいやうなものの、――貰つてる者も貰つてる者なら、出すものも出すものだ。その事業の沈滯してゐるのは當り前だ。
　さうかと云つて、こんな人が傳道をやめて藥り屋さんになつたツて、とても、うまくは行くまいと思はれた。矢ツ張り餅屋で終はつてしまつた方がよからう。
『どうも暫らくでした、御無沙汰ばかり致しまして』と、細君がやツと十二時前になつてから出て來た。そしてその挨拶は目がね越しだ。
『お子さんが御病氣のところをすみませんでしたが――。』
『いいえ、よろしいのです。』
　今まで蜜柑ばかり出てゐたところへ、かの女が茶を改めて呉れた。

『………』こちらは、これも一緒に讃美歌を歌ふ餅屋の細君で一生をすませる人なら、さう云ふ人に、ふすま越しにでも、今までそのをつとの大平樂を破らせようとするやうな議論を聽かせたのが氣の毒であつた。かけで、或は、をつとの肩を持つて、こちらを憎んだかも知れない。そしてこちらが妻を去つて藝者を入れたのなどに、一層、固定道德家にありがちな侮蔑若しくは反感を增したかも。かの女が知つてるのは先妻であつたから。そして今の妻のことは勿論、先妻のことをも聽かれないのが、向ふには當前のことだが、却つてこちらの氣になつた。で、こちらは自分で自分の氣をなだめながらたとへ或時代には實際の不身持ちに落ち入つたこともあるが、それが爲めに決して自分の今云つたことの論據が崩れるやうなことはないぞと思つた。

一般の實業家には理窟や哲學は入らなかつた。が、宗教家出、教育家出の實業家として、自分はかね儲けのことにもかかる實際的な宗教や哲學を持つてゐるのであつた。それがたま〳〵昔の友人の間違つた眞理論に出くはして、思はずその方の專門的研究家らしい意見になつたのだ。

『許して下さい、ね、突然來てあんまり大きな聲を出しました。』

『どう致しまして』と、細君が答へた。『子供が病氣の爲め、あまりおかまひもできませんのがお氣の毒でございますが。』

『僕もいづれ東京に移ります。その時は、また、度々お伺ひすることができましよう。』

『然し、君』と、こちらはこの時だと思つて、それとなく忠告した、『慣れないことはやらない方がいいよ。君が今の仕事で東京の本部へ來るならよからうが、藥り屋なかんに早や變りするのア考へ物だ。それも僕のやうに妻子に迷惑をかけてもなほ、いやな生活なら、やり直すだけの覺悟』と云つたが、それが何だか自慢さうに聽えるので、『と云はうか』と改めて、『または圖々しさと云はうかがあるならまだしもだが、ね、君は多年の傳道事業によつて既に人がよくその方に練れてしまつてるのだから、うか／＼商賣がへをすると、取り返しが付かないぞ。』

『さうでしようか？』齋藤はちよツと小くびをかた向けて、その細君と目を見かはせた。

『…………』こちらは寢どこを敷いて呉れてた平木さんの顏を今一度見たいものだと考へてゐた。

『でも、いつまで傳道してたツて詰りません、わ』と、細君が云つた。

『…………』して見ると、友人よりもかの女の方が轉業を望んでるのか知らんと考へながら、『然し、奥さんだツて、俄かに商人のおかみさんになれますか？』

『そりやア、成れぬこともないと思ひます。』

『ぢやア、やつて御覽なさい』と、こちらはわざとにも笑ひを見せながら、『僕の經驗から云やア、きツと、最初のもとではすつてしまひましよう。』

『まだそのもとでが、實は』と、齋藤も微笑になつて、『十分できてをりませんのです。』

『一體、教會はいくら君らに拂ふのだ』と聽いて、きまつた俸給と家賃、細君や子供に添へられる手當、夜學から擧がる收入等を數へて見ると、可笑さうに、他の社會の人々に比べて、ちよツと氣の利いた東京市中の小學教員よりもお話にならないのであつた。そのうちちからいくらかねを殘して行かうたツて、知れたものだらう。まことに意外であつた。『思ひ出すと、君と一緒に競爭して中學教師の英語科檢定試驗を受けたこともある、ね。』

『お互ひに落第致しました。』齋藤は初めて珍らしくも自身からちよツと笑ひ聲を立てた。それから、また熱のない生まじめに返つて、『何かよい方法はございませんでしようか？』

『さうだ、ね——何かありさうなものだが』と受けたが、こちらは自分の今回の計畫——その爲めにこの地へも來たの——がうまく行くとしても、その會社の業務に渠を使つてやる氣にはなれなかつた。平木さんと云ふのはどう云ふ人の娘か知れないけれども、あれに若しその氣があらば、今からでも事務員の位地を約束して置いてもいいとは思つたけれども。かの女は二度と顏を見せなかつた。

で兎に角、淸次には酸味もあま味もなく、そして一般的な親切のみあつた眞理論者の家庭に一泊して、自分の淡い夢にまでも殘つた印象は、最初にクリスマスの贈り物を包み分けてゐた平木と云ふ娘の子であつた。

——（大正八年十二月）——

おせいの失敗

『…………』

一

おせいはひとりで頑張つて、自分の營業代理を引き受けた中尾も出してしまつた。また、そのあとにならうとした堤夫婦も追ひ拂つてしまつた。して見ると、これから自分がもと〳〵通り本氣で營業するのが當り前だらうと、自分でも思はれた。が、失敗であつたにせよ、一旦、人まかせにしたと云ふ、心配中にもあつた氣らくさをおぼえて見ると、そばにお竹さんのやうな手傳ひ人がゐなくなつたのを却つて面倒くさくなつた。そして堤のやうな干渉好きがゐないのを寧ろがツかりした。

自分は下宿屋のをんな主人でありながら、お客に對する三度々々のおかずを心配することがいやで溜らないのであつた。それも、おかねの用意があつてのことなら、まだしもだらう。それを出し手がなくなつて見ると、二日置き、三日置きには、お客さんからちびり〳〵借りてゐなければならぬ。借りるにしても、また、客が少いので同じ人をわづらはすのだ。そして相變らずお客のおさいを僅かの

煮豆や鹽しやけにして置く。

『あんまり智慧がなさ過ぎる』と、堤さんがゐた時によく叱られたけれども、貧乏してゐては別に智慧の出やうもないではないか？　それに、前借りを賴むに一番融通の利いた鶴見さんも、堤夫婦の味かたになつてゐたので堤が出ると間もなく出て行くことになつた。

『あなたもお出になるんですか』と云つて、おせいはそれでも隨分長いあひだゐて吳れたのだから名殘り惜しくないこともなかつた。云つて見れば、堤がこちらの家をまぜくり返さなければ、まだ〳〵ゐて吳れた筈だが――

『ちよツと都合ができまして――』

『………』それは、もう、度々誰からも聽いて聽き飽きてる下宿人どもの最後の挨拶であつた。おせいが考へて見ると、自分はこの家は飽くまで持ちこたへたいが、もう、氣拔けた營業はしたくないのであつた。何かしたいと云つてる大川さんが、その紹介する大工の資本家をつれて來るまで、當分のうちでも假りにやつて吳れないか知らんと思ひ付いた。そしてまたかの女のところへ行つて見た。すると、横手に向ひ合つてゐながら、最近にたツた二三度しか話をしてゐない人が、もとは酌婦であつたと云ふだけに、もう、不潔な話なんかをし初めた。

『あなたが川口さんに棄てられたなど、あんまり意久地がないぢやアございませんか？　どうせ棄て

られた位なら、その前にこツちもさんざん勝手な眞似をして見せたらよかつたのです、わ。さうしたら、男と云ふものは未練を出して、きツと、こツちへよりを戻して來るものです、わ。』

『そんなものですか、ねい。』と、おせいはにやく笑ひながら、とぼけて見せた。自分もそれに似たことを一度やつたのであるが、文子がまだ生きてた時で、子供のくせにわけも分らず憤慨して、それを田口の兄弟のところへ行つてうち明けた。そしてそれが爲めに却つてこちらの望みもしない離婚を早められてしまつた。自分は自分の家を何とかよくして貰ひたい爲めでもあつたが、私かにまた好きな人でもあつた。

『それに、今ぢやア、もう、わたしもをつとを死なせて自由な身ですから、なほ更ら好きなことができます、わ』と云つて、大川さんは二階に置いてある若い會社員と關係してゐるらしいことを暗に自慢さうにほのめかした。

『………』して見ると、こちらへ甥だと云つたのはうそかも知れないのだ。おせいでさへまだ自分の元のをつと田口を戀しくないこともないのだ。自分よりもまだ五つ六つは年したで、肉づきもよく、毎日うす化粧までしてゐる人だから、生まれつきからの淫亂がまだやまないとでも云ふのだらうか？

こちらは却つてきまりが惡くなつて、『然し、わたしは、もう、色けよりや喰ひけの方ですから、ね。』

『さう、あなた、をんなだツて老い込んでしまつちやア駄目です、わ、ね。これから、御一緒に一と

仕事しようと云ふんぢやアございませんか？』

『それもさうですが、ね。』さうだ、おせいは大川さんが資本家を紹介して呉れれば、その功勞に報いる條件としてかの女と一緒に營業の方をやることに話をきめてあるのであつた。

『どうせ向ふは大工さんですから、ね、こんな商賣を自分でやつてるひまはないのです、わ。わたし達がいい加減に毎月の利益を見積つて、そのうちから月々幾分なりとも返して行きさへすれば、向ふに異存のあらう筈はないぢやアございませんか？』

『………』こちらと同じやうなことを大川もその大工に就いて考へてることが、おせいにも分つたのであつた。『そりやア、さうです、ね。』

『だから、しツかりやりましようよ。わたしがなんでも向ふへうまく云つてゐさへすりやアいいんですから、ねい。』

『なにぶん、よろしく、ねい』と、おせいはまかせて置いたのだ。その大工は、けふの話では、今請け負つてる工事がここ二三日でおしまひになるので、それがすむと直ぐ一度こちらを見に來ると云ふのだ。もう、二三日のことなら、自分が今云つて見ようとして來た考へも暫らくさし控へて、そのあひだを僅かだから何とか辛抱して置く方がよかつた。

『どうせ、今、だアれもゐませんから、こんな物でもお見せ致しましようか』と云つて、大川さんは

何かのとぢ本を出して來た。それはこちらも亡くなつたおぢイさんの遺物の中から發見して、田口にも渡さないでしまひ込んでゐるのと同じやうな繪であつた。
『あなたもお持ちですの、ね』と、つい、きまり惡さに押つて口へ出てしまつた。
『ぢやア、あなたのもお見せなさいよ。』
「わたしやア』と、おせいはそのきまり惡さを取りつくろひながら、うそを以つて答へた、『もう、田口の方へ渡してしまひましたが、ね。』
『惜しいぢやアございませんか?』
『………』おせいは、然し、折角のおつき合ひに、仕かたがないので、成るべく心を落ちつけて、それでも顏には可なりほてりをおぼえつつ、半ば見ないふりをして見ながら、一枚一枚をめくつて行つた。そして自分の心には、田口と一緒になる前に死んだ想思の友秋元の姉に當るお高さんのことが浮んだ。これも苦勞の極、田舍で酌婦をしたこともあると云つたが、亭主の河野さんが上京して農商務省の官吏になつたと云ふので、珍らしくも十何年ぶりかで尋ねて來た。金時計――それはめつきであることがあとで分つたが――まで持つてた。そしてそれからは殆ど毎日のやうに遊びに來て、しまひには、こちらの持つてる繪をまで見せるやうになつた。すると。お高さんは意外にもその說明まで詳しく知つてるのであつた。

そのうちに、その亭主の河野さんも獨りで訪問して來るやうになつた。こちらはお高さんのやうすから見ても、少しかねを持つてゐさうであつたので、渠が他の男同樣にいろ〳〵變なことを云ひ出すのを柳に風と受け流しつつ、多少の資本を出させようとした。渠は出す、出すと云つてなか〳〵實行しないので、時々はその催促をしに、向ふの家へも行つた。そしてそんな時にお高さんが買ひ物に行つて留守なこともあつた。それがまた意外にもお高さんの燒き持ちの種となつて、こちらとのおほ喧嘩になつてしまつた。そしてその向ふの理由と云ふのは、こちらも繪を以て樂しんでるほどだから、家の主婦のゐない留守に主人とどんなことをしたか知れないと云ふのであつた。

お高さんには亭主があつた。そしてこの大川さんには若い男が――と思ふと、おせいは自分の離婚された身の、たゞ獨りぼツちをいや氣になつた。そして、『あなたゞツて、これからまだいい芽が出て來ますよ。』などと云はれたのをも、何だか遠いところに聽いてゐた。そこへ、

『おツ母さん、なにか。』と云つて、政直がそとの井戸端まで來てゐるのであつた。

『…………』うちが明けツ放しだと云ふことに氣が付いた。下の部屋々々は奥までがら明きで、お客さんは二階にたツた二人ツ切りゐるだけだ。これではまるで商賣にはならない。然しうツちやつても置けないので、大川さんが、

『まア、およろしいぢやアありませんか。』と云ふのをふり切つて、いとまを告げた。そして、そとへ

出てから、政直を睨み付けて、

『あれだけ留守番をしてゐなと云つたのに！』

『なにか！』渠はこちらに叱られたのも平氣で、その小さいからだを地べたに突ツ立つてゆすつた。

『まるで氣ちがひぢやアないか、ね』と、つい、おせいも自分が田口などによく云はれたことを以つてまた子供を叱り付けた。『さう、おツ母さんの云ふことを聽かないと、お前もにイさんのやうにお父アんの方へやつてしまうよ！』

『いやだア！　なにか！』

『馬鹿だ、ねい！』おせいは子供をわざと返り見ないで、井戸端からそとの通りへ直角にとほつたどぶ板の上をせか〳〵と五六步あるいて、勝手口から自分のがらんどうのやうに感じられる家へ這入つた。これが若し政直でもゐなくなつたら、どんなに自分は寂しからうと思へた。が、

『よう、おツ母さん、なにか、なにか』と云つて、あとをついて來た子があまりにうるさいので、財布から五厘を出して、

『ぢやア、これで遊んで來るんですよ』と命じた。そしてかの女は自分で今、私かに大川で刺戟を受けて來た寂しみの味はひを何だかもツと續けてゐたかつたのである。

長火鉢に消えかけてゐた火に炭を添へてやつて、そのふちへ兩の肱を立てて考へて見ると、田口と

さうだ、庭のことどころではないのであつた。自分は、都合によれば、渠の高等學校卒業まで三年間を京都で一緒に住んでやらうかと考へてたのだ。日本橋の本店の方は、もう、二三年前から番頭にまかせてあるので、今更ら少しも心配するには及ばない。旅館の方はお絹がゐるし、それにはまたかの女の親や弟もついてるから、それくらゐの間は大丈夫だらう、たまには汽車で來て見てやつてもいいのだから。

　して見ると、自分は向ふで何をしよう。もう、元の車夫にはからだが堅くなつてて駄目でもあり、また子供の爲めにも親が車夫では肩身が狹からう。さうかと云つて、ただ遊んでゐれば、無駄なことだし、そして自分のからだまでが惡くなつてしまうだらう。まんざら、何も經驗のないこともやれない。それには、自分の好きな植ゑ木をいじくりながら、呑氣に植ゑ木屋でもやるのが一番いいかも知れない。然し、それも子供の爲めに不見識だとでも子供が云ふなら、考へ物だ。兎に角、向ふへ行つたうへの相談づくにしてからがよからうと思つた。

　何しろ、正造は自分に取つては獨り子も同樣だ。お絹にもひとり十歲のがあるが、女の兒で、而も妾腹である。本妻の子はあとがみな死んで、今は正造だけだ。それも去年肋膜をわづらつて、おほかた生命を取られるところであつた。

『どうしてもこれは一かばちかのあら療治をしなければ』と、病院の醫者は云つた。

『先生、もう、あきらめてゐます』と、自分はあたりの看護婦どもにもかまはず男泣きに泣いた。『ただおかねはどんなにかかつてもようございますから、萬に一つのいのちを助けてやつて下さい！』『それぢやア』と、醫者はいよ〳〵自分を立ち會はせて、渠の左りの胸のうへの方を裂いて、あばら骨を二本だけ切り取つた。その一本の方はまだ半分ばかり惡かつたのだが、それをも取らないでは腐りが殘るからと云ふのであつた。

その爲めにいまだに健康が人並みでないやうだが、いのちだけは取りとめることができた。そして高等學校へは入學が一年後れて、ことし這入つたのである。だから、向ふから手紙が來るたんびに、また病氣だとでも云ふ知らせではないかと、心がひや〳〵してゐた。そこへいよ〳〵今度の手紙だと云ふのだもの、寂しがつて、なさけながつて、それから子供がその爲めに熱でも起すと、今度こそは、もう、助からない病氣にかかつてしまうかも分らない。

あたまを痛める學問もよしあしだ。わざ〳〵あんな遠方へ子供を手離して、親から見れば、如何にも子供が可哀さうではないか？

『父上も母上も安心して下さい。僕もこの頃では澤山の友達ができて、勉强をするにも張り合ひがあります』などと云つて來た。この前の手紙の威勢がいい文句をこちらはまだよくおぼえてゐて、なかなか忘れもしない。それが若し藝者かなんかの手紙なら、浮かれたお客はかねのなくなつたのを最後

まだ、ふたりツ切りで、死んでしまつてもいいやうな情愛に落ちてた時が今更らのやうになつかしかつた。おかねも入らなかつた。衣物も欲しくはなかつた。無論、子供の苦勞などは夢にも知らなかつた。ただ健康なからだと戀とがあればよかつた。さう云ふあまい世界は今では夢になつてしまつた。大川さんなどは産まずめであつたからよかつたものの、こちらは子供ができて苦勞が増した。子供が死んで悲しみが加はつた。そしてその苦勞や悲しみの爲めに年を取つて、意久地がないやうに嫌はれ棄てられてしまつた。たださへ意久地がなかつたものなら、この今の馬鹿々々しいやうな、詰らないやうな位置に在つて、田口の云ふぶしような爲めに子供や自分の襦袢にしらみをわかせた位は――この心持ちを察して呉れれば――殆ど當り前のことではないか？

今や子供の爲めに家を持ちこたへて行くほかには、何を考へてゐられようぞ？大川さんのやうにあだし男にでも何でも肌を許していいつもりなら、こんなにからだ中をかきむしりの爪のあとだらけにして――田口から子供のことで云はれるまで――氣が付かないでゐるやうなことは、如何に自分だツても、ない筈であつた。然し、斯う云はれて氣が付いて見ると、自分ながら淺ましくもなるので、以後は少し注意して湯にも度々這入り、大川さんに負けないで少しおしろいも附けて見ようかと思はれた。世間で云ふ色はあせたとは云ひながら、まだ／＼役に立てれば役に立つ女であらうから、と。

斯う云ふことを繰り返し、繰り返して考へてると、いつまでも切りがなかつた。が、その考へてる

だけで氣が秋のやうに澄んで來て、どこか、斯う、かさ〳〵した枯葉がところどころに舞ひ落ちる景色のいい山のふもとへ生徒をでもつれて遠足に行つてゐて、うす暗いやうだが澄みとほつた自然と云ふ物の奥までも見えてるやうだ。そしてさう云ふところで皆を遠ざけて、自分ひとりがあの大切にしまつてあるゝ繪本をこツそりひらいて見たかつた。

『おい、おい』と呼ぶ聲と共に、ひどい手が二階で鳴つた。

『お呼びですか？』何げなく行つて見た。

『斯うおそくまでめしをどうして呉れるんだい？』

『さうでした、ね！』おせいは氣が付いて、俄かにあわて出した。もう、電氣もいつのまにか來てゐたのに、まだ晩のおかずさへしてなかつたのである。

二

大川さんがつれて來た人は、兎に角資本家だと云ふから、どんなに立派な風つきをしてゐるのかとおせいが思つてたら、大工は矢ツ張り大工だけに——棟梁とは云へ——下司張つたおやぢであつた。

中島と云つて、四十五六歳に見えるのが家ぢうを調べて見てから、

『こりやア、もう、根つぎからしてかゝらないぢやア、とても持たない家です』と云つた。

『流しもとも一つ見ていただきたいのですが、ね』と、おせいにはこの方が寧ろ根つぎよりも大切なことのやうに思はれた。堤夫婦に云はれてからは、毎日、そのくさいにほひを嗅がせられるのが氣になつてゐないでもなかつた。

『………』棟梁が默つてそこのくさつた板を打ちはづして見たところ、二尺幅に三尺長のどろが一面に少しも見えないほど、うす赤いみみずがうぢやうぢやとしてこんがり合つてゐた。

『あら！』おせいはぎよツとしてしまつたのである。自分は毎日その上へ知らずに水を流してゐたのだが、その流し板をはがれたので、みみずが直接に浮き世の風に當つて、俄かに寒さをおぼえた爲めか、うへのは下になり、したのは上になりつつ、みんなでむくむくと浪を打たせてゐる。これを見ると、かの女自身も寒けをもよほして、自分や子供のからだにわかせたしらみの氣もち惡さまでも一ときに思ひ出せた。

『これぢやア溜りません』と、棟梁も云つた。その樣子が呆れたと云はぬばかりなので、若し呆れた爲めにこれツ切りになつてしまはれては困ると思ひながら、向ふの機嫌を取るつもりで笑ひを見せて、

「道理で、いつも秋になると、ここでみみずがよく啼くと思ひました、わ。』

『そりやア、啼きもしましたでしよう。』棟梁もそれを見つめてゐたのが笑つて受けた。『これだけゐる

んですから、な。』

『それでどうでしよう』と、おせいはこの時だとして首を少しかしげて、渠を見ながら渠に訴へ込んだ。『この家に手を入れて下さるでしようか？』

『そりやア、大川さんのお話もありますことですから――』棟梁はその手のどろでよごれたゆび先きを、後ろのかべにかかつてる手ぬぐひ掛けの手ぬぐひの一つへこすり付けた。

『…………』おせいはそれを失敬だと見たが、向ふはその腰のたばこ入れをぬき取つて、再び茶のまの長火鉢へ行つたので、こちらもついて行つて、またもとの座に坐わつた。そしてこれも元の急須へ鐵瓶の湯をさしながら、こちらは見えるところだけ少し直せばいいと考へたのを、その上にも根つぎまでやつて吳れるなら、最も願つたり叶つたりと思つた。

『あとから行きますから』と云つた大川さんも丁度そこへやつて來たので、直ぐかれに向つて棟梁の言葉じりを證據の爲めに取つて置くつもりで、

『いよ〳〵やつて下さるさうですよ、根つぎをまでも』と、おせいは云つた。斯う云つて置けば、もう、渠もあとになつていやとはへんがへすまい。そしてへんがへがなくば、あとは大川がいいやうに渠の後ろから渠をおだてて吳れるのにまかせて置けるのであつた。

『ぢやア、わたしも紹介甲斐があつて嬉しい、わ。棟梁だツて』と、大川はその見ツともないほど大

きな太つた顏で流し目を集の方へ使つて、『何も商賣ぢやアございませんか？　まんざら損になるおかねをつぎ込むんぢやアないし。』

『……』おせいはうまく云つて呉れると思つた。向ふがつぎ込んだかねをこちらが返せるなら、無論、返してもやる。が、若し返せないなら、いつまでも何とか云つてそのまゝにして置くつもりであることは、大川がその初めに

「まア、御一緒にこの商賈がやれ出せさへすりやア、棟梁の方はどうとも胡麻化して置けます、わ、ね』と云つた言葉に前以つて私かに含まれてゐたのだ。

『それでも二三百はかかりをすから』と、今、棟梁は大川さんに答へた。

『それくらゐは、なアに、棟梁の腕なら、ほかで直ぐ儲かります、わ。』

『さうでしよう、ね』と、おせいも自分から合ひ槌を打つた。そしてどうせ無學な男で、字を一つも讀めないさうだから、女の相ひ手としても始末がいいと高をくくつてた。

『……』棟梁の中島はなほぐづ〳〵考へてるやうすであつたが、おしまひにはこちら二人に云ひくるめられて、「兎に角、それぢやア、わたくしが引き受けることに致しましよう』と答へた。然し、それには、田口がたとへこの家に對する權利は棄ててゐるにしても、その名義はまだ書き換へられてないのだから、その名義上の所有者に會つて異存がないことを確かめてからにしたいとのことであつ

た。『それも尤もですから、ぢやア、今からわたしが御案內致します、わ』と云つて見たが、中島さんは存外見識ぶつて、行かうとは云はなかつた。そして、

『田口さんがここまで出て來て下されば、わたくしも折り合ひましよう』とのことであつた。

止むを得ず、おせいはその日自分ひとりで宮仲へ出かけて行つて、田口にあすの十時を期して櫻川町へ中島と會見しに來て吳れろと賴んだ。

『家の爲め、子供の爲めですから、ね。』

『おりやア面倒だからいやだ』と、田口は答へた。そツけないのはこの人の持ち前だと思つて、こちらは氣にもとめなかつたけれども、『そんなことを子供の爲めとは思はない』と附け加へたので、おせいは

『親としてそんなことがありますか』と叱つて見た。

『親としては、ね、今ひとりの子供をこツちへ渡せと云つてるのだ。それ以上にお前なんかにかかづり合ひたくねいんだ！』氣まぐれな田口は怒つて、ぷツとその座をはづしてしまつたので、再び取り付く島がなかつた。

『…………』おせいはこれも亦止むを得ずにお兼のはうへ賴み込んで、田口を無理にも來させるやうにして貰ふことにして引ツ返した。そして歸りの電車に乘つてからも考へて見るに、田口は雄作を引

き取つたばかりでは滿足せず、政直をもこちらから奪ひ取らうとしてゐるのだ。それならそれで、いツそのこと、こちらをも一緒につれて行けばいいのに、さうは云はずに、こちらばかりをうツちやつて置いて、家のことを心配させようとしてゐる。そして自分では

『そんなことア面倒くさい。』は、あんまり蟲がよ過ぎるではないか？　たとへこちらは別として置いても、家はおぢイさんからの讓り受けで、而もそれが他日は子供の物になるのだから、お互ひにさうおろそかにすべきではない。

その翌日は、それでも、あの朝寢坊の田口が感心にも約束の十時をたツた三十分しか後れないでやつて來た。

おせいはその前からこころ待ちに心配して、大川さんとも相談してゐたのだ。

『どこで會はせたらいいでしよう。ね？』

『さうです、ね』と、大川さんはちよツと考へて、『わたしが兩方を紹介するわけですから、わたしのうちがいいでしよう。』

『それもさうです、ね。』おせいは自分としては自分のうちで會ふのが本當だらうにと考へたが、こんな場合だから、わざとにも意地は張らなかつた。それに、少し人が惡く考へて見ると、大川が物好きにも一度田口を見たいと云つてるし、田口もこちらより少しでも年の若い女のそばの方がいいだらう

し——

で、渠が來ると、おせいは自分のうちの玄關へ飛び出し、自分の待ち遠しかつた胸のとどろきを私かに押し隱しながら、

『お早かつたんです、ね』と、にが笑ひをして見た。ふたりツ切りでここで向ひ合ふのは近年になかつたことだのに、こちらの心も察しないでか、渠はただこわい顏をしてゐた。尤も、この人は餘ほどの氣六ケし屋で、曾てその目かけのところから四五日ぶりで歸つて來たが、それでも歸つて來たのをこちらが恨みながらも喜んで出迎へ、『お歸りですか』と聲をかけると、

『おれのうちへおれが歸るのがさう不思議かい』と怒つた。

『何も不思議がつてはゐません、わ。』

『なアに、そのつらを見ろ！』

『…………』その時のつらは無論うらみに滿ちてゐただらうが——。『けふは、兎も角、大川さんのうちにすることになつてますから』と云つて、直ぐその方へ案內した。

すると、大川はをかしいほど樣子をそわ〳〵させて渠を立ち迎へ、

『お待ち申してをりました、わ。まア、どうぞ』と云ふが早いか、こちらに向つて、『二階がいいでしよう、ね。』

『さうです、ね。』おせいはかの女の云ふがままに自分らふたりで梁を二階へ案内した。日曜日ではないので、丁度、この室を占領してゐる大川さんの甥だと云ふ、實は色をとこなる會社員は留守であつた。ここでおせいは大川を田口に改めて紹介した。

『棟梁も、もう來ますから、どうぞ暫らく』と、大川が云つた。

『………』おせいはこの時特に氣が付いたのだが、大川がトウレウと云ふことをトウリウと云ふやうに發音してゐる。これも無學の爲めだらうが――。

『はア、――はア』とばかり、田口は相變らず無愛想で――こちらには、おぢイさんがいつも、『わたしのところへ來た客に對しても吾助は禮儀を知らないで困る』と云つたのを思ひ出せた。

『おりやア華族の三太夫や海軍大佐ぐらゐにあたまを下げるのはいやだ』とは、田口の云ふお箱であつたけれども――。そしておぢイさんはまたその子供の時からの親友だと云ふ大佐の人が病死したのにがツかりして、御自分も死を早めてしまつたのだが――。

坐の白けがちなのを取りつくろふつもりで、おせいは立ち上つて窓の障子を明けて見た。そして、『いい二階ぢアありませんか』と云つた。ここへ上つたのは自分も初めてだが、自分のうちの向きが違ふ二階からのながめとはまた別で、自分らの共同井戸を見おろし、虎の門女學校の森を見渡して、多少の趣がある。

『ちよツといいでしよう――あなたがたのお二階はまだ存じませんけれども』と、大川さんは答へた。

『………』おせいは大川がそのあなたがたと云ふのでこちらをからかつてゐるのだと受け取つたので、思はずにやりと笑つてその方を見た。が、直ぐそれをそらせる爲めに、『うちの二階はこれほど趣きがありません、わ。』

『でも、そとの趣きはなくツても』と、ゆツくりした口調でたほ執念ぶかく出て、

『あなたがたのあひだにまた趣きがおありになりさへすりやア、ね。』

『ほ、ほ！そんなことア、もう、夢と過ぎてしまひました、わ。』おもてでは斯う大川さんへさばけて見せたが、心ではこれが田口に對する恨みの言葉であつた。

『大工さんが約束通り來ないなら』と、田口はそツけもなく云ひ出した、『僕も歸ります。』

『棟梁も、もう來る筈ですから。』大川さんもわがことのやうにあわてた。『まア、一緒におひるをさし上げるつもりですから。』

『僕はひるめしは喰ひません。』

『まアそれでも一杯お飮みなさい、な――用意してあるんですもの。』おせいもこの時自分の座へ立ち戻つてゐたが、このまま歸られては、中島があとから來てまたおこつてしまうだらうと思つた。

『然し、向ふが約束通り來ないのだから。』

『きツと來ますよ』と、首まで動かして念を押した。

『來たツて、僕は酒は飲みたくない。』

『いいえ、これはあの社會の例ですから。』おせいはさきに一度自分の家を抵當がへにする爲めその周旋者を呼んだ時、女ひとりと見くびつてか、先づ酒を飲ませろと云はれたことを思ひ出して、大工にだツてさうした機嫌を取つて行かなければいけないことを自分の獨りぎめで示めしたのである。そして、

『お酒はおきらひですか』と、大川さんが失望らしい顏をこちらへ向けたに答へて、

『なアに、今でも少しやアいけるらしいんです――もとは隨分飲んだのですから。』

『………』田口はそれを聽いてゐながら、ただむツつりして何とも返事をしなかつた。

『もう、來ますでしようから』と云つて、大川が下へ行つたかと思ふと、直ぐこちらを呼んだ。で、おせいも下りて行つて見ると、『おこつていらツしやるのだから、何でもかまはず、先づ用意の物を出して置からぢやアありませんか? そのあひだに、あなた、棟梁を呼んで來て來さい、な。』

『さうです、ね。ぢやア――』斯う云つて、おせいはそとへ出た。そして大川さんから敎へられた中島のうちへ急ぎながら、みち〳〵考へて見ると、斯うして自分を追ひ出して置いて、自分の男を却つ

て大川ばかりがどうしてゐるのか分らなかつた。ねたましい氣もしたので、中島が佐久間町のうちで客と酒を飮みながらゆツくりかまへてゐたのをせき立てて、『どうか直ぐ來て下さいよ、あなたが約束通り來ないのをおこつて歸ると云つてるんですから。』
『歸るなら、歸つてもいいぢやないか？』
『まア、さう云はないで、ね、話はお互ひに丸く行かないぢやアまとまりませんから』と云つて、無理にも渠をつれて來た。
『棟梁、おそいぢアないの』と、大川さんは下で大きく中島を迎へたかと思ふとかの女がいくらお酒を飮んだか知れないが、もう、その顏を赤くしてゐた。
『………』おせいはそれを見ると、また妬みのほてりを顏にまでおぼえた。そして中島を案內しながらだが、いそいで二階へあがつて行つて、思はず子供を叱るやうな氣ぶんで訴へた、『もう、大分飮んだのでしよう？』これには、自分がまだ少しも飮みはしないのにと云ふ不平も手つだつてゐた。渠と別れてから自分は酒を飮めるやうになつたのだから、そしていくら飮んでもさう醉はなくなつてるのだから、初めて一度渠と一緖に飮んで、自分は可なりつよいことを見せたくもあつたのだ。
『おりやア、まだ』と、然し、渠は思つたよりも平氣で、『二三杯しか飮みやアしない。』
『さう？』かの女はちよツと不思議であつたが、飮めば直ぐ醉ひが出る筈の田口が少しもその顏を赤

くしてゐないので、その云ふ通りが本當であらうと思へた。して見ると、或は、あの大川がこちらに酒をまで買はせて置きながら、こちらの留守に田口のお相ひ手も碌々しないで――まさか、全くうッちやつても置けないから、時々は出て來たらうが――實は、下でこツそり、あんなに醉ふほど盜み飲みをしてゐたのだらう。これぢやア、たとへ一緒に營業をし初めることになつても儲けをいつのまにか飲んでしまはれるかも知れない。なか〳〵油斷はできないのであつた。

三

『早く引き合はせておあげなさいよ。』あとからお膳を一つ持つてあがつて來た大川が云つた。

『…………』氣が付くと、おせいは自分だけがぼんやりと突ツ立つてゐたのである。中島はと見ると、自分の持ち手に坐わつて大きな四角いその顏をまじめ腐らせてゐる。それで、こちらも直ぐ坐わつて、ゐがほを兩方に見せながら、田口に、『これが、ね、話の棟梁さんですから。』

『さうですか？　僕が田口です』と、それでも少しはした手に出て呉れた。

『わたくしは中島と申しまして』と、棟梁は名刺を出してから、無學なたたき大工ですから、どうかお手やわらかに。』

『…………』おせいは、中島が醉つてゐてもおのれの名だけは讀めるのだらうと、却つてをかしかつ

た。多少こちらに不利益な證文を書いても、どうせ本人が讀めないのだからと云ふことを田口に一と言注意して置かうと思つてたのだが、そのひまがなかつたのだ。

『どう致しまして』と、田口も人並みのお愛相を中島に云つた。

『それで、この棟梁が』と、大川さんが口を出して、田口に向ひ、『あなたがたのお宅をおかねの慾ツけ拔きにして手を入れてやらうとおツしやるのですが――。』

『慾けがあつてもいいでしよう、若しそれが當前の條件になつてれば。』

『………』おせいは今そんなことは云はないでもと云ふ目つきをして見せたが、田口には通じなかつた。

『人間が慾を離れてすると云ふことは、きツと、あとでうそによりますから。』

『そんなことアありません、わ、ねい』と、おせいは笑つてのけた。

『でも、うそが本當になることもございます、わ。』大川さんは中島のお酌をしながら、また變なことを云つた。『今回のお話だツて、ね』と、こちらを見て、『あなたとわたしとで、まア、うそを云ひ合つてたやうなものです、わ。それが斯う本當になつて來たのですから。』

『そりやア、さう云つて見りやア、さうかも知れませんが――。』おせいは大川も無學な爲めにそんなことを平氣で云ふのだらうと思つた。そして自分の目を直ぐまた田口へ轉じて、ここをしツかり賴む

と云ふ意味を利かせた。この時、中島が口を切つて、

『わたくしも全く、これは幸田さんの爲めに義俠的にするつもりですが、――』

『成るほど！』

『…………』おせいが注意してゐると、田口がにが笑ひをしながら少し向ふを茶化し氣味になつてると見たので、『そりやア、棟梁さんの心はわたしが知つてます、わ』と云ひ添へた。

『骨は折る、あなたが御不承知と來ては、わたくしが馬鹿を見ますから、先づ以つてあなたの御意見をうかがつて置くことに致しましたのです。それでけふ、わざわざここまで御足勞をかけました次第ですが――。』

『だから、どうか、ね、棟梁さんに一と言あなたからも頼んで下さいよ。』

『幸田さへ承知のことなら、僕には少しも異存のあらう筈はありません。全體、ここへ僕を引き出すのさへ不必要であつたのですから。』

『でも、名義はまだあなたになつてをりますさうですから。』

『それぢやア、最後の言葉として今一度僕が申しますが、幸田さへ承知なら、僕の方には異存がありません。』

『…………』おせいが謹聽してゐると、田口は直ぐにも立ちあがりさうになつたので、『ぢやア、さう

お賴みして下だすつた上は、一つ中島さんにおさしなさい、な。』
『棟梁もそれをおほしなすつて、ね』と、大川さんは大川さんで云つた。
兩方のさかづきが三度交換されてから、田口はいとまを告げた。それを玄關まで送つて出てから、
『政直がゐますから、ちよいとうちへ寄つて御覽なさい、な』と云つて見たが、向ふの心は動かなかつた。
『ろくに湯にも入れない兒なんか、見たくもない。』
『この頃アさうでもありません、わ。』おせいはこちらの顏をも見て御覽なさいと云ひたかつた。大川さんにも刺戟されて、多少は氣を付けるやうになつたのである。
『思つたよりやア堅いの、ね』と、一緒に見送つた大川が云つた。『わたし、わざと氣を引いて見たけれど、動いて來ません、わ。』
『………』おせいは、かの女を矢ツ張りそんな氣があつたのかと見て、こちらの思つたことがいつも不思議に當たるのを私かに誇らしかつた。同時に、眞ツ赤に醉ひが出てゐる女を卑しめるつもりで、
然しそれとなく、『あなたは隨分飮んだのです、ね。』
『なアに、二三度お酌して貰つたのが嬉しかつたものだからです、わ。』
『さうですか？』おせいは何を云つてると云つてやりたかつた。

また二階へあがつてから、おせいは自分も――どうせ自分のかねを出して買つた物だから――遠慮なく一緒に飲んで見た。が、今度はまた大川が中島にべたつくのを面白くなかつた。かの女は初めのうち渠と共に都々逸やはやり唄を歌つたゐたが、やがてはこちらがゐるのをも忘れてしまつたかのやうに、かた手を突いて渠のそばへにじり寄り、他の手をだらりと突き出して、

『さア、それを飲んで直ぐわたしにおさしなさいよ、手ぎわよく、ね』などと云つた。

『…………』おせいは、かの女がこの手を田口にもして見ようと思つたのなら、田口が初めから相ひ手にしなかつたのは當り前であらうと思へた。田口は、まさか、こんな女に引ツかかるものではないだらうから。

『どうして呉れるのよ』と、かの女はおしまひには倒れて行つて、渠の膝につかまつたりした。

『…………』何たるをとこ好きだらう、ましてこんな大工になんかと、おせいは思つた。中島の方は多少こちらに遠慮してか、手を引ツ込めてはゐるが、それでもいい氣になつてるやうすが見えた。こちらも少からず燒けて來たのをただにが笑ひにまぎらして見てゐるに堪へられなくなつてしまつた。そして自分だけはそこ〳〵にして引きあげたが、繪を見せられて自分の抑さへてゐるものが刺戟を受けた時のやうに、そのあとまでも何だか寂しく、氣持ちが惡かつた。

　こちらを出しにしてただあんな機會を付けてゐるに過ぎないのではないかと云ふ不安があつた。け

れども、それからまもなく、中島は七名の手したをつれて來て、工事に取りかかつた。そしておせいも都合の惡いところを一々考へ出してはすべて自分の云ふ通りに直して貰ふことにした。便所のつきかたが方角にそむいてゐる事を氣になつてゐたのだから、これも別なところへ持つて行つて、そのあとへ押し入れ附き二疊敷きの部屋が一つできることになつた。

この工事中にも、雄作が學校の歸りをやつて來たので、わが子ながら、おせいは自分のこの一大奔走の結果を自慢しつつ說明して見せた。そして、

『おツ母さんの方は斯うして、思つたことが實現して行くのだから、ね――實現とは分つてゐるか、え、實際にその證據があがつて行くことだよ。だから、お前の方でも約束したことは實行して呉れないぢやア困るよ』と云つた。これはほかでもない、雄作が毎日貰つてるに相違ない物、殊に贅澤なお菓子などを、たまにはこツそりこちらへもおすそわけして來いと云ひ付けてあることを意味したのだ。渠が田口の方へ行つてから、もう、かれこれ二週間にはなるが、持つて來たのは、一つの林檎を、而ツもたツた一度だ。

『餅菓子なんか持つて來ても、途中でなくなつてしまうから』との答へであつた。

『お前が學校でたべてしまうのだらう?』この問ひに對しては、渠がただ笑つて胡麻化してゐたのを見ると、どうもさうらしいのであつた。今、おせいは自分の喰ひたいと云ふことは押し隱して、『政ち

やんだツて、お前が持つて來るのを待つてるから、ね。』
『然し、こツそり持ち出すことはできにくいから。』
『お前が貰つたものを喰べたふりをして持つて來りやアいいぢやアないの？』
『それもさうだけれど――』
『今度からさうおしよ』と命じた。そして繼母のお粂に何かまま子いぢめのやうなことはないかと例の如く聽いて見たのだが。
『別に――何も』と、雄作は答へた。
『…………』おせいは、渠が子供だから、それがあつても氣が付かないのではないか知らんと、もどかしかつた。たとへば、お粂が自分のつれツ兒にはお菓子を澤山やつて、お前には少し呉れるとか、わざと御はんを喰べさせないとか、お前のしないことをしたと云つてお父アんにいツ付けるとかだよとは、まへまへから云つて聽かせてあるのだが――。
工事はばたばたと氣持ちよく運んで、それが四日目に濟みかけると、大川さんはその前から向ふの家を解散することにして待ちかまへてゐたのだから、早速その日からこちらへ這入り込んで來た。そして茶のまにつづく八疊の、炬燵を切つてある部屋がかの女のになり、それと內廊下を一つ隔てて、おぢイさんの代から主人の占領してゐた八疊が應接室として明けて置かれることになつた。そしてお

せいが自分と自分の政直とで寢起きする部屋はもとの便所のあとにできた二疊の室ときまつた。自分としては、何だか話が違つて、主客の顚倒してゐるやうに思はれたけれども、殆ど無條件で工事を引き受けた中島の云ふことだから、自分もしぶしぶながら、まア、默つて云はれるままになつた。尤も大川さんはこちらへ中島を紹介したと云ふ行きがかりから、營業掛りになることは初めから相談づくの上であつたのである。そしてこちらも、さうなれば、第二の堤夫人ができて餘ほどどらくだとは考へてゐた。

『兎に角、けふは工事落成のお祝ひをしなけりやア、ね』と、大川さんは來早々から云つてゐた。

『だツて、そのおかねは？』おせいは斯うかの女に低い聲で注意した。

『棟梁か出します、わ、ね。』大川さんは中島にも聽えるやうに云つて、『どうせ、これも營業のあがり高から返して行けばいいぢやアありませんか？』

『それもさうです、ね。』おせいはこれにも云はれるままになつてゐようと考へた。すると、中島もそれは承知かして、皆のものに向つて、

『さア、早くやつてしまへよ、けふは飮めるから』と云つてゐた。

『…………』酒の支度の方は大川さんが頻りに奔走してゐるやうすであつたから、おせいはけふも自分の鼻くそをほじくりながら、風の寒いのを我慢して、大工たちの仕事を見てゐた。渠らが木を切つ

て、丁度うまい具合ひに當てはめて行くのが、何でもないやうだけれども、見てゐるものには面白かつた。こちらの物を切つてそれがうまくあちらへ這入る。こんなことを一體誰れが初めて考へ付いたのだらう？　六ケしい天地や人間のことを考へるには、別に哲學とか易學とか云ふものがある。が、無學な大工にでも斯うして何でもなくできるやうに初めて考へ付いたものは、たとへ矢張り大工であつたとしても、その大工はなかなかえらい人であつたらう。その仕事がけふ切りでおしまひになるのかと思ふと、何だか名ごり惜しいやうな氣もした。そして、自分のそばにゐるしたツぱ大工の、夜は工手學校へかよつてると云ふのに向つて、突然、『わたし、あなたがたのやつてることにやアなかなか道理があると思ひます、わ』と云つて見た。

『…………』その大工は今奥の緣がはの腐つたところへ新らしい木を切り込んでたのだ、『そりやア、世の中のことにやア一體、道理がないことはございません。』

『だツて』と、おせいは笑ひに受けて、『さう、うまく當てはまるにやア――。』

『矢ツ張り、物の道理に合つてをりますから。』

『さう云ふやうに』と、一層冗談のやうに見せて、『おかね儲けもうまく行くといいが、ね。』

『これにやアまた、當てはづれが多うございます。』

『…………』さうだ、今度のことだツて、中島をうまくだまし込んだつもりであつたが、何だかその

當てはづれになつて來さうであるのが心配になつてゐた。直ぐ、おせいは自分の室ときめられた二疊へ引ッ込んで、易を立てて見ると、けふの落成祝ひが左ほど目出たいことではないのであつた。『風火家人』と出たので見ると、家内治らず、爭論口舌ありで——殊に、色情のなやみとは、然し、大川と中島とのことになつてるのか、それとも、自分と田口とのことを云ふのか、そこだけはツきりしなかつたが——。

明るいうちから酒が初まつて、おせいもそのせきなる大川さんの部屋へ呼ばれたが『奥さん』と、それでも中島はこちらを押し立てて呉れて、機嫌がよかつた。『この、けふの御主人として、まア、一杯さします。』

『さうですか？』おせいも微笑を見せて、『ぢやア、お祝ひに一杯いただきましようか、ね。』

『わたしがお酌します、わ』と、大川さんもこちらの機嫌を取るやうであつた。

『…………』おせいはさかづきをはして中島へ返した。すると、渠はそれを受けてから、

『然し、大工が工事もしたり、祝ひのかねも出したりするのア、開闢以來のことでしよう。』

『ほ、ほ！　そりやア、ね』と、おせいは當らずさわらずにしてゐる方がいいと思へた。

『然し、これも奥さんや田口さんの爲めにわたくしが義侠的にやつたのですから仕かたがありません。』

『棟梁さんの心は』と、笑つて見せながら、『わたしもよく分つてゐますから。』

歳の暮れに近い日のことであつたから、直きに電氣がついた。そしてやがて皆が揃つて祝ひの手を打つた。『そのしやん〳〵、おしやしやんの、しやん』が濟むと、皆と一緒に中島も歸るのかと思ふと、渠だけがゐ殘つて、また二人の女に酌をさせた。そして、そのあひだには、また例の義俠的を云ひ出して、

『このことは田口さんには十分傳へて置いていただきたいものです』などと。

『無論、傳へますとも。』おせいは少しうるさくなつたが、さうは見せないやうに努めてゐた。

『無論』と、こちらの言葉を眞似たのがまだくどくどと、『傳へていただかなければ――。』

『…………』おせいも少し醉ひが出て苦しかつた。が、その苦しさのあひだにも、中島が何か云ひたいことがあるのを云へないので同じことを繰り返してゐるのだらうと思はれた。そしてそれが、――若し義俠的にはしたが、そのかねは直ぐ返せとでも云ひ出すつもりでなくば、――ひよツとすると、いやらしいことではないかと思ひ當つたので、この場を自分よりも醉つてる大川さんにまかせて、早く二疊へ引ツ込んでしまつた。

あとの二人は、云はばまア。水入らずで、ふざけ合つてるやうである。そして、時々は、

『お前、ひとり、か、

つれ來、は、ないか、
つれしや、あとから
篭で、來る』

などと歌つてゐる。また、聽いてるのもいやなほどの亂らなはやり唄をも。

夜がふけると共に、その騷ぎはぱつたりとやまつたが、中島が大川のところへとまつたやうすだ。工事落成の當日から、斯う、自分のうちが淫賣やどにでもなつたかと思ふと、けふの易がこの點に於いて當たつてゐた。おせいは廊下と物入れとを隔てたこちらに、政直と共に寢てゐて、人ごとながら向ふのやうすが氣になつて眠られなかつた。そして、大川の歌つた唄、『…………』をそのきたない意味通りに心で辿つて見たりした。何しろ、たツた二疊のまへ、一つの箪笥やら二つの行李やら政直の机やら、身上のありツたけを持ち込んだうへに、また自分と子供との炬燵を入れた寢どこを取つたのだから如何にも窮屈で、これも氣になることの一つであつた。

四

家の所有權と營業權とをこちらが持つてゐさへすればいいのだから、工事費の辨償などは成るべく口約束のままにして置きたかつたのだ。が、矢ツ張り、證文にせよと云はれたので、向ふの云ふことと

を容れて四百圓ときめ、それを毎月營業の利益から二拾圓づつ返して行くことに書いた。これさへも向ふの本人は讀めないのだが、おせいは自分の書いた證文通りをむな算用して見ると、期限はつまり二十ケ月で、二ケ年とかからないのであつた。

その方はいいとしても、おせいは、一緒になつたそもそもから、自分の相ひ手なる大川とは成るべく早く手を切るやうにしなけりやアと云ふことを考へなければならなかつた。

そして、自分の營業を自分でうツちやつて置くのも馬鹿々々しいと思つて、寒さを辛抱しながら、兩手を袖の中へ引ツ込めたまま、臺どころの方へ出て行くと大川は、二階のお客さんなどにはなかなか愛想を云つてるが、こちらに向つてはつけつけと、

『あなたは、まア、奥さんだから意張つてたらいいんですよ――さう出しや張つて來ないでも』と云つた。

『さうですか、ね?』おせいは少し勝手が違ふので、にが笑ひをしながら、わざと不滿足の意味を曖昧な返事にきかせた。そしてわざと暫らくその場に突ツ立つてゐて、それとなく、向ふがどう云ふことをやつてるかと見てゐると、そのたすきがけをしてはきはき働らくやうすは、とても、あのまどろツこしい堤のお竹さんなどの及ぶところではなささうであつた。その代り、こちらが斯うしていつまでものけ者になつてゐるのでは自分の家ぢうをかの友に自由にされてるのも同樣であらう。そんな

約束ではなかつたのだが――。

然し、日常のお小使ひまでをかの女は中島に出させてゐるので、やツとのことでこの營業ができて行くのを考へると、まア、そツとして置けと云ふ氣にもなるのだ。營業さへうまく行つて、その利益で工事費の埋め合はせがついてしまへば、その時自分は自分の權利を十分に主張し出してもいいのだと思はれた。

『もう、やがて、正月のお餅をつかせなけりやア』と、大川さんが云ひ出した頃にも拘らず、中島は殆ど每晚のやうに飮みに來て、每晚のやうにとまつて行くのだ。

『…………』おせいはその酒の初め頃にはいつも渠のおつき合ひに呼び出されるので、度々のことをしぶしぶながら出て行くのだが、出て見ると、渠の機嫌をも取つて置かねばならかなつた。こちらが若しかまかり間違つたことでも云ふと、渠はどんな亂暴を仕出かすかも知れないやうな醉ひざまになつてるからである。それでも、時々は政直の爲めにお菓子や學校の用品などを持つて來て吳れる。そして酒の場へ政直をも呼んで、

『いい兒だから、わたくしもこの兒は可愛がつて育てて上げます』などとも云つた。

『…………』おせいは、それぢやア、まるでこちらの亭主氣取りではないかと、滑稽な感じもした。が、さうは見せないで、『どうかよろしくとお云ひなさいよ』と、子供に命じたやうにして笑つた。そ

して自分はこの時だと思つて、何げない顏つきをして、『一體、棟梁さん、あなたの工事にはおかねが本當のところいくらほどかかつたんでしよう？』
『そりやア、證文通り四百圓かかりました。』渠は斯うしか云はないのであつた。
『………』こちらにも初めを曖昧に出た弱みがあるので、おせいは再びそれ以上に問ひ返しはしなかつたけれども、自分の見つもりでは、中島が初めに二三百圓と踏んだのに多少の思ひ違ひがあつたとしても、おそらく、まア、三百圓を出ることはなかつただらう。して見ると、あとの百圓と云ふものはこつちの弱みにつけ込んで贅澤にこちらへ押し付けたのであつた。

それに、工事と云つても、おもに手のかかつたのは根つぎであつたから、もともと通り根太を張り疊を敷いてしまへば、それはおもてには少しも分らない骨折りだ。おもて向きに變つたのは、おもに便所の位置と流しもとの新らしい板とである。それにしても、不思議なことには、たツたそれだけのことで今迄さう來なかつたお客さんが、斯う歲が押し詰つてからでも、あとからやつて來た。そして大抵の部屋はつまつてしまひ、お客の一人としては珍らしい支那人の目かけなども來た。『わたしの腕は見上げたものでしよう』と、大川さんは自分だけの手がらのやうに中島へもこちらへも威張つて見せた。そしてお客から取る前金をすべてかの女自身が預かつてしまつて、帳面さへもこちらへ見せないのであつた。

『…………』おせいはこれぢやア不安だと見て、大川に向つて一度、『せめて帳面だけでもわたしによくお見せなさいよ』と云つた。すると、どうしたことか、大川はぷいとおこつてしまつて、

『わたしは何もずるいことはしてゐませんよ。棟梁の云ふ通りにしてゐるんです！』

『その棟梁だツて、さう勝手にやアできない筈です！』つい、おせいもつもツてる不安を漏らした。こんな具合ひで行けば、たとへ中島へは二十圓づつ拂へても、そのあとの儲けを大川に勝手にされてしまうかも分らない。今一つ疑つて行けば、その二十圓をだツて、大川が自由にして、中島へはわざと拂ひを延ばして行つて、できるだけこの營業をかの女自身の手に殘して置く算段をさせるかも知れない、そんなことをされちやア、こちらは溜つたものではないのだ。中島その人に取つても、決して都合のいいことではない。

それを、然し、大川はその晩、どう云ふ風に云ひもじつてか、中島の醉ひに乘じて渠を焚き付けたと見え、渠は突然、

『幸田、どこにうせる？　殺してやる』と叫んだ。

『…………』おせいはこの時、まだ宵であつたから、二階へ行つて新客の慶應大學生を捉らへて、自分のこの家の內狀を訴へ、これも實は自分を棄てて他の女を持つてる田口の薄情がもとになつてゐるのだと云ふことを聽かせてゐたのであつた。自分はこれまでにも例として新客には先づ田口の薄情を

語り、それから自分や子供がその爲めにこんな苦勞をしてゐることをうち明け、そしてこれに同情して呉れる人をいいお客とし、これにあまり取り合つて呉れないのを信用すべき人ではないとした。今自分はびツくりしてはしご段を飛び下りるが早いか、直ぐその前の玄關からはだしで逃げ出さうとした。が、奧の二疊にゐる筈の政直のことを思ひ出して二疊の方へ行かうとすると、臺どころから中島が出齒庖丁を取り出して來たのを大川のとめてゐるのが廊下からちらちらと見えた。急いで奧の方へ行く途中で、これも何ごとが起つたかと心配してだらう、政直の出て來たのにぶつかつた。それをも『早く、早く』と、小さい聲で急がせて、一緒に自分らの部屋へ這入つた。そしてできてる炬燵にかじり付いて、小さくなつてゐた。

『およしなさいツてば、あぶないから』などど、大川が中島をとめてるやうすだ。

『かまうもんか、畜生！　殺してしまへ！』

『…………』おせいは、まさか、間をとこ騷ぎぢやアあるまいし、自分があんな無學なものに殺されるわけがないと思つたが、あの聲が近づいて來られては溜らないのであつた。

が、無理にも納まつたかして、

『あいつ、失敬なやつだ』と云ふ中島の聲がした。また大川の部屋で酒がつづき初めたやうすだ。

『あなたが事をはツきりさせないからいけないんですよ』と、大川が云つてる。これはこちらにも聽

えよがしのやうにだ。『おかねを出した以上はそれだけの權利を以つて這入つて來てゐるんですし、そのあなたにまたわたしは賴まれて、營業のかかりになつたのですもの、それをはツきりと幸田さんへも云つて置いて下さらないぢやア、ね。』
『そんなことア云つてやるまでもない、さ。もう、分つてることだ。』
『………』して見ると、たツた三四百圓のことで向ふは、もう、この家を占領した氣でゐるらしい。馬鹿にしてゐるぢやアないか？　あの二人はもとからくツ付き合つて、こちらに對しては初めから相談づくでそんな考へであつたのか知らんと思ふと、こちらにも確かな男がゐて貰ひたかつた氣がして、自分の獨り身をつくづく心ぼそくなつた。こんな場合に雄作がゐて呉れるとまだしもだが、政直ではまだほんの子供で――こちらと一緒にちぢみ上つて、炬燵にかじり付いてるのだもの！
たとへ不平はあつても、あんなことはまだ云はない方がよかつたと後悔しながら、子供と共におせいもこツそり便所へ行つて、こつそり寢に就いてしまつた。
――その翌日であるが、この家が抵當に這入つてる二葉株式會社から來た手紙は、來月十日が期限だから、今度こそはどうしても競賣に附すると云ふ通知であつた。
『こないだの、また今度とは』と、おせいは思ひ返して見た。が、堤に立て換へさせたままになつてしまつたのは――さうだ――家その物のことではない、地代のとどこほりの一部をであつた。今度の

はまた家の抵當流れになる期限が來たのだ。田口からこの家を受け取つて以來、ひどく高い高利貸しをしてゐるとなりの醫者から○○銀行へ、それからまた二葉會社へと、抵當の書き換へが三度もあつた。そして二葉へは利子だけでも、もう、どれだけ拂つたか分らない。あすこもまた面白くなくなつたので、抵當換へができるところがあらば、さうしたいのだが、もう、當てもなく、相談相ひ手もなくなつてるのだ。止むを得なければ、また利子だけを拂つて、一とき延ばしにして置けばいいのだらうが――その利子をあの中島には工面させたくない。そんなことをさせれば、この上にもまたこの家を自由にする口實を加へさせるやうなものだ。そしてまた、

『殺してやる』など云はれては、ただこちらに對する醉ひまぎれの威し文句であつたとしても、あの無智の分らず屋のことだから、いつどんな拍子で傷を受けさせられるか知れたものでなかつた。

『無盡の通知ですか?』大川がはたから尋ねた。

『まア、そんなものよ』と、おせいはとぼけて見せた。同じ會社の無盡に這入つてることは、そのかけ金を營業のあがりから出させなければならぬので、既に大川にも話をしてあつた。だから、若し實際に無盡のことなら、向ふからいや應なしに財布を開らかなければならないのだが、こちらがそれッ切り云ひ出さないのをしほにしてか、向ふは二度とそのことを問はなかつた。今となつてはこちらもその方のかけ金は別に工面して出さうと思つてるのだ。それでなければ、折角かけて當つても大川や

中島の自由にしてゐる家のものになつてしまつて、こちらがその家を恢復しようとする足しには少しもならないであらう。

この通知にもおせいはあたまが痛んで溜まらなくなつたので、自分の室に引ツ籠つて、何かいい智慧は持ち合はせないかと考へて見た。文子の死んだ時にできた五十圓たらずの貯金は、あの子の記念でもあるので、どうあつても使はないと決心してゐるのだから――。そして田口から每月貰ふ分をさき取りしてしまつては、政直の學費や小使ひがそれだけ出なくなるのである。さうかと云つてほかに相談して見る人もなかつた。

丁度、そこへ

『もう、學校が休みになつたから』と云つて雄作が遊びに來た。

『馬鹿だ、ねい、また何も持つて來ないで』と手ぶらで來たことを叱つて見た。が、政直が直ぐゆふべのことをもち出して、

『僕、こわかつたよ――棟梁がおツ母さんを殺すと怒鳴つたりして』と云つたのでおせいもついその方に引き入れられてしまつた。

『而も出齒庖丁をふりまはして、ね。』

『直ぐ警察へ訴へてやればいいのに』と雄作はその顏まで赤くしてこつそりと怒つた。

『そりやア、いよ〳〵となりやア、また警察へでも、裁判所へでも訴へてやるが、ね、さうすりやア、無論、こツちが勝つにきまつてる、さ。このおツ母さんにやア、いつも、正直の神さまがついてゐるから、ね。然し今のところはさうも行かないのだよ。向ふだツて大分おかねをかけただらう、それをこツちが返せるやうにならなけりやア、ね。それに』と、また、けふの通知を思ひ出して、『まれ別なおかねがいるんだよ。二葉會社の方からこの家の抵當流れを知らせて來たので、ね。』

『ぢやア、ついでに、それも出して置いて貰へばいいぢやアないの？』

『さうは行かないのだよ。たださへいい氣になつてる大川や棟梁がなほ更らいい氣になるぢやアないか？』

『おかアさんはどうするつもり？』

『それを心配してゐるんだが、ね。』斯う云つて、ふと冗談にだが訴へて見た、ぢツと渠の顔に見入りながらにが笑ひをして、『まさか、どろ棒もできまいし、ね、雄ちやんに何かいい智慧はないか、ね？あるなら、貸して頂戴よ。』

『………』雄作はちよツと小くびをかしげて暫らく考へてゐたが、困つたと云ふやうすをして、『お父さんに相談して見たら、どう？』

『さう、ね。』おせいは自分にそんな分り切つた返事を得るつもりでもなかつた。ぢかに田口に云へば、

またかとただがみ〳〵叱られるのが落ちだらうから。然し、子供に云はせるのはかまうまいと、その氣になつて、『どうせ駄目とは思ふが、ね、ぢやア、お前の心もちとしてお前から云つて御覽、な。さうすりやア、おツ母さんがあしたのゆふがた行つて、お父アさんが何と返事したかこツそりお前に聽くことにするから。』

五

萬が一の心當てを賴みにして、翌日の約束時間におせいは田口のところへいつた。誰れが先づ出て來るかと、おづ〳〵がらす戶を明けると、玄關のまに机を置かれてゐる雄作が、それでも、待ちかまへてゐたかのやうに立つて來た。

『どう？』かの女はずツとひそめた聲で、こくびを手つだはせながら聽いて見た。

『駄目』と、渠はその心配さうな顏つきに於いて初めから見せてゐたことを半ばはその口のうちで云つた。

『…………』どうせこの賴みがはづれてしまつたのなら、さう小さくなつてゐるにも及ばないと思ひ、おせいはそのまゝつか〳〵と、田口の例の太い底ぢからのある聲がしてゐる茶のまへ、もう勝手は、分つてゐるので、寒さに少しからだをちぢこませながらだが、ふすまを明けて這入つた。お粂が

火鉢のそばからぎよツとしてこちらを尻目にかけたが、それを知らないふりで、『今晩は。』

『なんだ、畜生！』田口もちやぶ臺に向つて食事のできるのを待つてるやうすであつたが、いきなりこちらを見て怒鳴つた。『ここは貴さまのうちぢやアないぞ。』

『だから』と、ちよツとまご付いて、こちらも思はず言葉の調子が高くなつたがその高さをつづけて答へた、『挨拶をしてゐるぢやアありませんか？』

『案内もなしに！』

『ぢやア惡うございましたが、ね――』こちらは雄作の母ではないか、さうつけつけ云はないでもよささうなものだがと、心ではむツとした。

『來るのは仕方がありませんが、ね、もう少し人並みにして貰はなけりやア、うちでも困りますよ』と、お粂もはたからこちらを馬鹿にしたやうな言葉であつた。

『…………』おせいはそれにはわざと返事をしなかつた。ここでも、もう、お餅を註文してあると見え、その話をしてゐたのを玄關で聽いたが、それがつけて來たら雄作は――あれだけ云つて聽かしてあることだから――少しはこツそりとこちらへも屆けるかしらんとばかり考へられた。

『それに』と、田口は少し聲をゆるめて、『あの家が競賣に附されかけてると云ふぢやアないか？』

『さうです、わ。』直接にも一度頼んで見ようか知らんと云ふ氣をおびき出されたので、おそる〱だ

が『何とかして下さい、な。』

『馬ア鹿！』田口は矢ツ張り取り合はなかつた。『お前にやア、どうせ、あの家は持つて行けないのだ。うツちやつてしまへ！』

『そんなことが出來ますか？』もう直ぐ反抗しなければならなくなつた。そしてたとへ渠の不斷に云つてる通り、田口家の爲めではないにしても、田口家を繼ぐべき子供の爲めにはなることを再び念の爲めに云つてやりたかつた。が、

『また教訓か』と云ひ返されるのが面倒くさゝにさし控へた。そして、うそにも機嫌を取つて置く方がましであつたので、少し聲を和らげて見せて、

『わたしはそれで苦勞してゐるんですから、ね。』

『財あれば財を憂ひ、宅あれば宅を憂ふだ。』

『それこそまたお說敎ぢやアありませんか？』

『なアに』と、田口は横を向いて、憎いほどこちらを馬鹿にした口調で、『丁度、お前を冷かすにやア適當したお經の文句、さ。』俄かにこと更らじみた怒りごゑになつて、『そんなものア早くうツちやつて、一本立ちになつてしまへ、易者にだツて、乞食にだツて！』

『ふん』と、おせいは鼻であしらつてしまつた。なる時が來れば何にでもなる、さ、然し、斯う研究

のひまさへないのでは、易だツて、進みやうがないではないか？　それにしても、こちらが渠のやうすを考へて見るに、餘ほどお兼の手まへを氣がねして、渠が不本意のこととまでも云つてるらしかつた。そこにまだこちらのあと〴〵までの賴みがつなげるやうに思へた。いよ〳〵困まれば、何とか泣き付いて見ることができるだらう――と。

そして食事を一緒によばれてから歸つて來て見ると、大川と中島とが酒の出てゐる部屋で喧嘩をしてゐた。互ひに外聞の惡いほど大きな聲を出して。

『何とおつしやつても、ね、わたしは承知できません！』

『ぢやア、おれの力づくで取つてやる！』

中島はこちらの歸つたのを氣付いたのでわざと大きくなつたのか、どうだか分らないが、立ちあがつてその巖丈な兩手を大川のからだに持つて行かうとしてゐるところへ、おせいは中郎下のふすまを明けて丁度割り込んで行つた。いつも秘密室のやうに締め切つてるのも妬ましかつたのだが。――そして、

『どうしたと云ふんです、ね、まア棟梁さん』と、先づ中島を制した。自分のつもりでは、他の一方の、これも立ちあがつて、逃げ出しかけたのを無事に逃がしてやらうとしたのであつた。これも憎い女だけれども、おととひ、こちらがこわい目に會ひかけたのをとめて吳れたのに對して恩返しをする

爲めにだ。『そんな亂暴をしないでも！』
『亂暴でも何でもありませんが――。』中島は兎に角また腰をあぐらにおろした。
『一體、どうしたと云ふの？』おせいもそのそばに坐わつて、今度は大川の方を見上げた。
『…………』大川さんもおづ〳〵してだが坐りに來て、『棟梁が無理です、わ。この節期に拂ひ出すものをみんな渡せと云ふのですもの。』
『あなたも帳面をわたしらに見せないのは行けませんが――』こんな時だと一つ突ツ込んで置いてから、『棟梁さんだツて』と、笑ひにきぎらしながら、『うちで拂ふぶんをこの押し詰つた場合に持つてお行きになつちやア、困ります、ね。』
『お説の通り、わたくしも押し詰つてをりますので――』
『…………』向ふへ戻して行くのは來月からの約束になつてるのだがと思ひながら、おせいがよく聽いて見ると、中島はこちらの家にかねをかけた上に、少し調子に乘つて、無理をしてまでまた別な家を二百五十圓で買つたのである。その結果が二進も三進も行かなくなつて、子分どもに暮れの小使ひをやることもできず、正月の餅もつけないと云ふのだ。
『實はその爲めにけふは一つ、奥さんにもお願ひしてわたくしがこの家の爲めに義俠的に盡しましたに免じて、若しここの營業から融通ができませんとすれば、田口さんにでもちよツと一ときこの急場

を救つていただきたいものですが――。』

『田口はとても――』斯う、おせいは先づ云ひ切つてから、『實は、わたしの身でもまたおかねの入用ができましたので――』この件をどうせ云はねばならぬとすれば、今が却つて丁度よからうと思つて、うち明けたのである。

『そりやア、また困りました。なア』と、中島は案の定おこるどころではなくなつてしまつた。『そんなことがございましたのなら、前以つて一と言云つて貰ふ筈でした。さうしたら、わざ〳〵かねはつぎ込む、そのつぎ込んだ家は抵當流れになると云ふやうなへまなことはなかつたのです。こりやア、困りました、なア！』

『棟梁の腕まへで何とかできませんか、ね』と、大川さんも云ひ添へて吳れた。

『今取られてしまやア、あぶ蜂取らずぢやアありませんか？』

『そりやア、さうです、わ。だから、わたしも成るべく棟梁さんの手をわづらはせないでと心配して見ましたが、ね、最後の心當てであつた田口の方も駄目ですから――。』

『然し、田口さんはこの家を所有してをられますではございませんか？』

『それが名義だけだツて、ね、向ふぢやアどうなつてもかまはないと云つてますから――。』

『…………』中島は醉もさめてしまつたやうにまじめになつてゐた。そして暫らく考へ込んでゐた

が。

『實に困まりました。然し、仕かたがありません。どうせ、うちの方も心配しなけりやアならぬついでですから、何とかして見ましよう。』斯う云つて、この夜はそこそこに歸ることになつた。

それを玄關で二人が見送つてしまうと、大川さんが

『うまくやれました、ね』と云つた。

『…………』おせいも首をすくめてにこりとして見せたが、もう、自分のこの相ひ手は二度と氣をゆるすべき女でないと云ふことを自分の心に注意してやつた。

十二月も、もう、あと二日と云ふ日になつて、政直も一緒になつて皆がつけて來た餠を切つてゐると、中島を尋ねて來た人があつた。大川さんが出て應對してゐるのをおせいもそれとなく聽いてると、中島の親戚の人で、今回、この家の爲めにかねを出すことになつたので、見に來たのだが、中島も來てゐることになつてるがと云ふのだ。

かねを出すと聽いて、こちらも私かに一と安心しないではゐられなかつた。

『ぢやア、わたしが呼んで來ましようか？』かの女は飛び出して行つて、大川から云はれない先きに自分から斯う口を出した。

『では、おそれ入りますが――』さう上品な男でもないが、叮嚀らしかつた。

『ぢやア、あなた、早く賴みますよ』と、大川も云つた。
『…………』おせいは自分の受けた氣ぶんで直覺的にこれはきツとまとまる相談だと見た。さうすれば、都合がいいばかりでなく、中島さんの方もまたいいだらうと。
渠のうちへは大川の戀づかひも同樣のことを既に二度もつとめたが、今回は決して自分にも不愉快の使ひではなかつた。が、行きついて見ると、中島のかみさんがいつになくその亭主と同樣なやすツぽい顏を不機嫌にして、
『またおかねの無心だらう？　あなたの爲めにうちでも困つてます！』
『…………』こちらはちよツと面くらつてゐた。
『何をぬかすんでい』と中島がそのかはりに飛び出して來た。これは當り前の言葉ぶりで、『何か用ですか？』
『あなたの親戚だと云ふ人が來て待つてゐられますから。』
『ぢやア、直ぐ御一緒にまゐります。』
渠のみち〳〵の話によると、どう云ふついでかは知らないが、渠が京橋の八丁堀あたりを歩いてゐると、突然呼びとめられた。
『どうした――そんな不景氣な顏をして？』

『ぢやア』と、おせいは合ひ槌を打つて、『あなたも隨分心配をしていらツしやつたのです、ね？』
『さうです、丁度これができないなら、いツそくびでもくくつて死んでやらうかと考へてをりました。そこへ、丁度うまい具合にぶつかつたので』と、中島も安心したと云はぬばかりに笑ひながら、『さう困つてるなら、おれが出してやらうとのことで――豆腐屋ですが、とほ緣に當ります。』
『斯う云ふのが神だすけでしよう、ね』と、おせいはこの信仰にはうらはらがなかつた。そして棟梁のうちでもさう困つてたのなら。さし當り、大川さんと相談して、こちらにできた切り餠を少し屆けてやるのが情誼だらうと考へた。

六

けれども、歸つて見ると、大川さんは豆腐屋を客間の方へ入れて、自分勝手にもう酒を出してゐた。そして棟梁もこちらへ相談なしのを當り前のやうに見て、
『やア、氣が利いてるな、斯う云ふところは確かに大川に限ぎる』と賞めた。
『…………』それでは、こちらを氣が利いてゐないと云つてるも同然ではないか？　折角、迎へに行つてやつたのに――人を馬鹿にと思つたので、おせいはつんとして自分の部屋へ這入つてしまつた。これをいいしほにしてか、向ふからも呼びに來なかつた。そして何をまたどう云ふ風に相談したの

か、豆腐屋が歸つてからも、向ふのものらが話を秘密にしてゐるやうだから、こちらも意地になつて、少しも聽き糺さうとはしなかつた。兎に角、矢ツ張り、この家さへ何とかして抵當流れになるのをまぬがれさへすればいいと云ふ考へばかりであつた。

すると、豆腐屋が歸つてから間もないと思はれる頃、やがて日が暮れようとする時にだが、同じ客間で聽き慣れない女の聲で怒鳴つてるのに氣が付いた。

『どうしてもあいつに云つてやることがあるんだ！あいつをお出しなさい！』

『そんなことアねいツて云ふに、ぶんなぐるぞ！』

『いいや、けふこそわたしも堪忍ぶくろの緒が切れたんだ！』

『馬鹿云ふな！』

『………』どうも、棟梁に對してそのかみさんがなにかおこりに來たのらしいので、おせいは若しか大川さんとのあひだがらを感づいてしまつたのだらうと思つて、あまり事を大きくさせない爲めに出て行つて見た。するといきなり、そのかみさんに自分の胸ぐらをとツつかまつてしまつた。

『この婆々アめ、よくも、よくも、人を踏みつけにしやアがつた、な！』

『ど、どうしました、わたしが』と、おせいはびツくりしながら向ふの手をふり切らうとしたが、向ふの力はつよかつた。それを中島が直ぐ立つて來て、

『よく話し合つたら分る、馬鹿』と云つて、大川と一緒に引き分けて吳れた。

『一體、どうしたことです？』

『とぼけるない？教育もあると云ふのに、かねの爲めにこんな無學なおやぢとくツ付きやアがつて！』

『そ、それが思ひちげひだ』と、中島は辯解らしくだがまた怒鳴つた。

『…………』この時は、もう、皆が坐わつてゐたが、おせいは胸の動悸を押し靜めながら、先刻、向ふがいやな顏をしたのも、ぢやア、大川のことをこちらと思ひ違つてる爲めだと分つた。馬鹿々々しくもあるが、このいきどほりが納まりかねたので、『わたしは淫賣ぢやありませんよ』と云つてやつた。『如何に貧乏してゐましても、ね、これでも武士の生まれで、小學敎員もして來ましたし、この後もまだ多少の望みは持つてゐますから、ね！』

『そりやアさうです』と、中島がはたから證明して吳れた。

『ぢやア、どいつがだまくらかしてゐるんだ、うちのおやぢを？』かみさんはそのこわい目を今度は大川の方へ向けたが、まさか、こちらもそれだとは云へないので、

『そんなことアわたしが知つたものですか？』

『わたしだツてただここの營業掛りを引き受けてるばかりで、それが疑ひの種になりますなら、いつからでもやめてしまひます』と、大川は胡麻化してゐた。

『やめられちやア却つて困ります』と、中島が答へてから、またこちらに向つて『どうか、奥さん、このことはこれツ切り許していただきたいものです。わたくしの家内もあまり心配してをりましたので、ついこんな失禮なことを致しましたのでしよう。然し、今回、あの豆腐屋の熊本がいよ〳〵わたくしどもに一と肩入れて呉れることになりまして、この家も熊本が責任を持つて呉れますから、この際、わたくしの方から返り證文をさし入れて、田口さんの名義を假りにわたくしの名義に書き換へていただきたいのです。』

『そりやア、間違ひのないやうにならね。』

『勿論、間違はない爲めの返り證文ですから。』

『…………』おせいは何だか不安心になつて來たのだが、ただその場をつくらふ爲めに、『なんでも、お互ひに都合のいいやうにお願ひします、わ。』

『これでわたくしも』と、中島は微笑になつて、『あす、熊本から少しかねを受け取れますから、おかげで後ればせながら正月の餅もつけます。』

中島のかみさんもこれを聽いてゐて、段々心が落ち付いたかして、皆と一緒に仲直りの酒を飲んでから、その亭主をつれて歸つた。

その翌日、おせいは早速、砂糖半斤をわざ〳〵自分で買つて、それをお歳暮にして、大川には内證

で二三軒さきの地主へ行つた。そしてそこの老主人に面會して、斯う〳〵云ふわけで今度持ち家の名義を書き換へることを中島と云ふ者から通知して來るかも知れない。が、その者になら地所を貸さないと云つて吳れ、さうすれば、兎に角、田口の家をあんな者に取られる恐れはないからと賴んだ。すると、地主も

『田口の老人が生きてゐなさる時に丹精した家ですから、わたくしもそれを他人の手に渡させたくはありません』と應じて吳れた。『その代り、隨分とどこほつてる地代は成るべく早くかたづけて下さい。』

『それはわたくしも年中心配してゐますんですから』と答へたが、この點は自分から藪へびを出したやうにも思へた。そしてうちへ來てから、大川を說いて、

『この月はほかの月と違つてますから、ねい』と云つて、無理に地代を一ケ月分だけ多く出させることにした。

その他の諸拂ひもうまく行くのかして、大川さんはそれらのことに就いても別に不足を云ふやうすもなかつた。そして正月のお屠蘇やおにしめの用意もできた。

そしてとうとうおほつ籠りの日になつたが、その午前には中島がちよツとやつて來て、

『うちの子供にも買つてやりましたから、政直さんにも』と云つて、立派なたこのぼりを一つ、糸を

も添へて呉れた。

『政ちやんはいい物をいただいたの、ね。』おせいは貰ふ物は何でもありがたかつた。そして隨分亂暴な大工さんだけれど、斯うして時々子供を見て呉れるのを嬉しく思つた。

『おととひはあの馬鹿が飛んでもない失禮を致しまして――おかげで、きのふ、やツとかねができましたから、あれも落ち付きました。この家のことも歳が明けましたら、うまく行くやうになりますから』とも、中島は云つてゐた。

『どうか、なにぶんにも、ね。』おせいはこのことには自分の心で取り澄ましてゐたのである。いよ〳〵となれば、地ぬしの反對があるので、さう向ふの自由ばかりにはなるまいから、

中島さんが大川に營業の方をうまく歳を越せることを聽いてから安心して歸つて行くと、暫らくしてから、雄作がやつて來て、意外にも一圓札を何枚か重ねて出して見せた。

『こんなに、どうしたの？』おせいは見ると直ぐ不思議がらないではゐられなかつた。

『おかアさんが困ると云つたから。』

『それりやア困つてゐないこともないが、ね――』置き炬燵のやぐらへぢかにかじり付いてる自分の兩手をおほつてゐる。その古ぼけた麻の葉の蒲團――これも自分がかた付いて來た時からあつたのを、段々洗ひざらし、切りつめつつ持つて來たのだ――のうへで、自分の鼻さきへ置かれたそのかねを

ぢツと見詰めながら、無論嬉しくないことはなかつた。まさか、子供がよそで泥棒して來たのでもあるまいから、筋みちさへ立つてるものなら、このまま受け取つて置いてもいいがと思つた。渠の方を見て、『一體どうしてたおかね？』

『………』雄作は少し靑ざめた顏いろをして、返事がなかつた。

『まさか』と、おせいも自分の胸にどきツと來たものがあつた。このまへに渠が來た時にかけたこちらの苦しまぎれの謎と云へばなぞを、子供だから本氣に實行したのだらうと思ひ當つて見ると、先づ子供に對して自分が母としての罪惡敎唆の責任を免れたくなつて、『お父さんの物を泥棒して來たんぢやアないだらう、ね？』

『いいえ。』雄作は身ぶるひをしながら、わざとらしい無邪氣さを見せてうち消した。『泥棒はして來ません。』

『ぢやア』と、かの女は少し安心して、『どうしたの？』

『向ふのおかアさんが――お拂ひをするおかねが足りないから――郵便局から――出して來いと云つたのです。』

『そんなことを子供にさせたり！』

『さうして――おとうさんは、これも子供におぼえさせる一つの經驗だから、面白からうツて。』

『ぢやア』と、おせいは半ばがツかりして、『おツかさんに持つて來て呉れたんぢやアないの、ね？』
『僕が落したと云やアすむからと思つて、持つて來たつもりだけれど、いけなけりやア直ぐ持つて歸ります。』
『まア、いいや、ね、それぢやア』と、かの女は何げなく云つて、ちぢめてゐた脊を延ばした。そして急いで兩手を蒲團のしたから出して、手早くお札を數へて見ると、十五枚あつた。そして渠をなだめるやうにして、『折角、雄ちやんが持つて來て呉れたんだから。』
『十五圓だ、ね』と、そばで見てゐた政直が云つたので、
『誰れにもしやべるんぢやアないよ』と、かの女は叱るやうに云つて聽かせた。それから、また雄作に向つて、『ぐづ／＼してゐると分るから、ね、けふ早くお歸りよ。おツかさんも一緒に送つて行つてあげるから、』『大川さんに對しては『ちよツと、また用事ができて子供が呼びに來ましたから、宮仲まで行つて來ます』と云ひ殘して家を出た。
電車を大塚終點で下りると、雄作を一と足さきへ行かしめて、おせいは自分で終點のあたりの歳末景氣を見てから、雜誌屋やおもちや屋をのぞき歩いて、暫らく時間の經過を待つた。それから、神社の鳥居をくぐつて敷石の道をゆツくり進んで行くと、石段のところでお兼が急いでやつて來るのに出會つた。

きツと、この件でだらうと思つたところ、果して向ふから聲をかけて、
『今、ね、雄ちやんがおかねを十五圓すられたか、落したかしたんですよ！』
『へい！』おせいは驚いたふりをして見せた、『さうして』と、何くはぬ顏をかしげて、『あつて？』
『あるもんですか！』
『困りました、ね。』この受けかたが自分には少しわざとらしく聽えたので、つい、ちツと自分の目を來た方の道へ轉じて、『どこへ落したんでしよう、ね？』
『落したかすられたか、分るもんですか？』
『どうしたと云ふんでしよう、ね？』
『こんなぼんくらぢやア、雄作も困つた子供ぢやアありませんか？』
『あんな子供にまかして下さらなかつたら、いいんでしたが、ね。』
『なんでも、郵便局で受け取つてから、それをふところへつツ込んだまま、おもちや屋を見てゐたから、その時取られたのかも知れないツて云つてるんです。』
『………』おせいは雄作も人が惡くなつて、うまいことを云ふのを、末おそろしく思はないでもなかつた。『ほんとに、それぢやア、ぼんやりしてゐたんでしよう、ね。』
『まア、念の爲めに郵便局やおもちや屋を調べて來ます、わ。あとで、また、ゆツくり、ね。』

『わたしも以後そんな落ち度のないやうに雄作に注意しますから』と云つて、おせいはお粂と反對の方へ別れた。そして田口のうちへは、自分の心におそれをいだきながら、それでも相變らず何くはぬ顏をして行つたのである。お粂がゐないだけに、田口と自分とが水入らずのさし向ひになれるのを一つの樂しみにしてだ。

七

然し、田口からは早速、

『また何の用があつて來やアがつたんだ』と云はれた。

『さう、あなた』と、おせいは日ごろの不平を十分自分の渠を見つめた目に持たせて、『奥さんの手までも入らない時にまで、わたしをさう叱らないでもいいぢやアありませんか？　子供もゐますのに？』

實際、雄作は玄關の机の前で小さくなつてるのを、自分がこの茶のまへ這入る前に見て置いたのだ。

『その子供が十五圓と云ふかねをどうかして來たんだ！』

『今、聽きましたが、ね――』

『誰れに聽いた？』

『あなたの奥さまに、ね』と、冷かし氣味になつてゐた。如何に若い女だからツて、それにみだらな

文句の多い三味線なんか習はせていい氣になつてるから、子供にまで馬鹿にされるのだと云つてやりたかつた。が、田口の見當は別な方にあつたらしい。斯うつゞけて怒鳴つた。
『まさか、お前が横取りしたんぢやアなからう、ね？』
『冗談を！』おせいは、はツと思つた刹那に自分も怒つて見せた。『如何にわたしだツて、親として子供にそんなことをさせられますか？』
『然し子供がかねを受け取つて來るところを途中で出會つて、ふいと氣まぐれを起すことが、圖々しいお前なんかに對しちやア直覺的に考へられないこともない。』
『馬鹿をおツしやい！　わたしがすりか泥棒ででもあるやうに！』證據を握られてゐるのでもないから、相ひ手になつてゐなければいいと思つて、話を別な方へ向けた。『わたしの方はそれどころぢやアないんですよ、家が流れかけてゐて。』
『丁度、結構ぢやアないか、そのまま流してしまやア？』
『ふん！』おせいは先づ鼻であしらつてから、『あなたはさう呑氣でゐられましようが、ね、わたしは一生懸命ですから、ね。』
『…………』田口はまたこの方には相ひ手にならなかつた。
『地ぬしの方へはきのふ行つて、どうしても中島の名義では地所を貸すことにして呉れるなと頼んで

あるからいいけれど』と、獨り言を云つてるやうにして渠にも聽かせた。渠が相談に乘つて呉れなかつたから、これも中島へまかせたこと、さうすると、中島が自分で變な豆腐屋をつれて來て、家の名義の書き換へをすると云つてること、返り證文を出すと云つてるが、そんな物は當てにならないだらうと云ふこと、などを。

『そんな面倒くさいことよりやア、いツそのこと、あの中島に安く賣つてしまつて、多少でもかねを握つて手を引く方がましだらう。』

『家があつての營業ぢやアありませんか？』

『ふん、お前の物だから、おりやアどツちにならうがかかり合ふ必要はないが、ね、ぐづ〳〵してゐるうちにやア、營業はおろか、あの家まで取られてしまふにきまつてる、さ。』

『まさか――』

『然し、雄作の云ふところぢやア、お前を大工が出齒を以つて追ひまはしたと云ふぢやアないか？』

『そりやア、あの大川が惡いんですよ、なか〳〵喰へない女ですから、ね。』斯うは答へたが、そんなことを、もう、雄作がしやべつてゐるのでは、渠がまたいつどんなことを思ひ遣つて口からすべらすかもしれやアしないと思つた。出齒の一件ゝツで、何も追ひまはしたのではない。ただ大工が持ち出さうとしたところを大川がとめてしまつたのである。で、自分として豫防線を張つて置くつもりで、

『子供の云ふことなんか當てになりますものか？』
『然し、大川だツて、中島だツて、今となつて見りやア――おそらく、同じ穴のむじな、さ。』
『まさか、そんなずるい大工でもないやうすです、わ。子供にだツて親切で、時々、物を買つて來て吳れますから。』
『そんなことでお前ぐらゐをだまくらかすのア誰れにでもできる、さ。――ところで、その大工は子供に物を吳れるが、お前は子供の物を橫取りしてゐるのか。』
『いつ、わたしがそんなことをしました』と突ツかかるやうに云つて見たが、ひよツとすると、雄作が何かこちらの喰ひ辛抱なことでもしやべつてあるのぢやアないかと思ひ出せた。堤さんから子供たちのたツた二錢ばかり買つて貰つたおいもを、少しづつだが、おすそ分けさせたこともある。また、雄作に對しては、殊に田口やお兼から貰ふ物を少しでも持つて來いと云つたが――。
　そこへお兼が失望のやうすをして歸つて來た。田口はそれに向つて、
『あつたか？』
『あるもんですか！』
『無論、おれが行くだけ無駄だと云つた通り、さ。』
『あなたは』と、お兼はまだ立つてゐながら、こちらへ出しぬけに聽いた。『雄ちやんに途中で出會つ

たのぢやアない？』

『また、あなたまでがそんなことを！』おせいは今度はうまくとぼけるひまもなかつた。まだ泥棒とも横取りとも云はれないさきに、自分から氣をまはしてそれを否定してしまつた。そしてこのへまを取りつくろふ爲めに、かの女を見つめながら、『ぢやア、子供に聽いて御覽なさい、な！』

『若し子供が承知のうへでしたことなら、聽いたツて白状するわけはありやせん』お兼は奥へ行つてコートをぬいで來てから、いつものところへ坐わつて、田口に『郵便局でも、こんな子供に取りに來させちやアあぶないもんだがと思つたさうです。案の定、さうでしたかと云つてました。おもちや屋なんかは急がしくツて、そんなことア氣が付かなかつたツて。』

『…………』田口は返事をしなかつたので、おせいが受けて、

『これから、あんな子にまとまつたおかねなんかあつかはせないやうにして下さいよ。わたしまでが疑ひを受けるやうぢやア、つまりませんから。』

『あの子の云ふことはまだ曖昧です、ね』と、お兼はまだ田口に言葉をかけてゐた。『なんぼ何だツて今受け取つたかねを直ぐ落すなんて！それに、また、あんなところにすりなんか來てゐるとア、まア、思へませんから、ね。』

『そりやア、どうだか知りません、ね。』

『お前がそのすりでありやア』と、田口は半ば冗談にだらうがこちらへ答へた。

『失禮なことをおツしやい！』おせいはわざとにもまじめ腐つて見せた。

『時間だツて、出た時から勘定すりやア、二時間半もかかつてます。探してゐたと云ふのが本當なら、そのあひだの子供の心が思ひやられて可哀さうでもありますが、若しさうでないとすりやア、――何をしてゐたんだか分りません、わ。』

「兎に角、どうなつたのか分らないとすりやア、災難と思つて一回だけは許してやつて下さいよ。」おせいは斯う押し付けるやうに云ふよりほかなかつた。『わたしからも、今後は氣をつけるやうに云つて聽かせますから。』

『何もお前から云つて貰ふにやア及ばないんだ』と、田口はまたこちらをのけ物のやうにした。『こツちが引き取つた以上は、こツちで自由に仕つける。以前にやア、子供をお前にまかせてあつたから、子供のことをおれはわざと干渉しなかつた。今度はおれの方で雄作を引き取つたのだ。命令が二途に出ると、子供をふた股膏藥にして、よくない！』

『そりやア分つてますが、ね。』

『分つてりやア、もう、歸れ！　こツちもけふはまだ急がしいんだ。』

『歸れとおツしやりやア、歸りもしますが、ね』と、おせいは晩めしまでゐさせて貰へないのを名ご

り惜しく思ひながら、『然し、子供の親としちやア親としての人情がありますから――』

『人情があれば、成るべく來ないやうにするのが當前だ！』

『さうですか、ねい？』おせいはをかしなことを云はれるものだと思つて、暫らく默つてゐた。

お兼は、赤ン坊をおんぶしてゐる女中と共になつて、臺どころの用――ここでもおにしめだらう――を手つだひ初めた。田口はまた二階へ立つて行つた。

おせいはこツそり玄關へ行つて、雄作に、

『默つてるのだよ、わたしはどとまでもお前のおツ母さんだから、ね』と、一言云つてから、お兼にいとまを告げた。そしてみちみち考へて見たところでは、向ふは雄作がかねをこちらへ持つて來たとは思ひも及んでゐないのだから、せめては雄作の爲めに都合のいいことであつた。若しこれがばれた時には、こちらだけわる者になればよかつた。然し、こちらのわる者も向ふではたださう想像してゐるだけで、別に證據も何もないのだから、警察なんかへ持ち出すことはできない。

して見ると、あの十五圓は、まア、不時の儲け物で――棟梁や豆腐屋が引き受けたと云ふ家の爲めには出すにも及ばないし、つまり、大川へも無論知らせないで、死んだ文子の記念貯金のうちへ加へ入れて置けばいいのであつた。

八

お正月が來ても、然し、おせいにはお雜煮の味が自分の胃ぶくろをふくらませたと云ふ感じだけで過ぎてしまつた。一月の十日が來るまではこの家がどうなるかと云ふことばかりを私かに心配であつた。そしてこの心配は大川さんには云へなかつた。ただ二階の慶應大學生には、その後も度々田口のことや中島のことを惡いやうに云つてあるのだから、そのつづきとしてこれをもこツそりうち明けた。そして若しこれが爲めに騷ぎでも起つたら、

『そのときやア、あなたもわたしに加勢して下さいよ』と賴んで置いた。

ところが、六日になつて、こちらからはまだ雄作の件で氣が引けて田口へは年始にも行かなかつたのに、向ふからお粂がやつて來た。而もひとりの女をつれてだ。おせいはあの件で何か談判をされるのではないかと先づぎよツとしたのである。が、若しそれなら、確かな證據を見せろと云つてやるつもりの腹をきめて、自分の部屋へとほした。すると、意外にも、別にこの家を引き受けてやらうかと云ふ人があるのを知らせに來たので、そしてそのつれの女がそれであつた。

『島村さんとおツしやいますが』と、お粂もおもての方へ懸念して聲低く云つた。『旦那さんは山林局へ勤めていらつしたので高等官の恩給を貰つていらつしやいますが、或商賈の店を人にゆづりまし

て、今度お國へ歸ることになつていらしつたのですの。然し、この奧さんはまだお若いので、思ひ返して、何かすることがあれば矢ツ張り東京にゐたいとおつしやるし、わたしもお友達としてこツちにゐて貰ひたいし、それでふいとこのことを思ひ出して、お話をして見たの。さうしておつれ申したのですが、ね。田口にも云つて見ましたら、至極いいだらうと申しましたから。』

『この田口さんの奧さんとは越後にをりました時からおつき合ひを願つてをりますのですから。』島村さんは信州のもので、その主人は土佐だと云つてゐた。

『土佐へお行きになつちやア、ちよツと出ては來られません、ね。』おせいが斯う云つたには、ぢやア、丁度いいから、それを思ひとまつて、こちらの爲めになれよと云ふした心を先づほのめかしたのであつた。身なりから見ても、お粂よりは立派だから、退職高等官の奧さんと云ふのも本當だらうと信じた。ただ、その亭主が既に恩給を貰つてるほどの年輩になつてるのに、女の方が而も美人で、このやうにまだ若く、お粂と丁度おツつかツつらしいところを見ると、これも亦前の女房を追ひ出して、自分がそのあとへ這入つた手合ひではないだらうかと、多少はまた妬ましい氣もしたけれども、いろ／＼向ふの話も聽き、こちらからも中島や大川の仕うちに對する不平を語つたあとで、島村さんに、『ぢやア、どうか、旦那さんに來ていただいて、直接にさうかけ合つて貰ひます、わ』と、もたれ込んで答へた。

『わたしも、ぢやア』と、お兼は嬉しがつて、『島村さんを紹介がてら、田口の代理として地ぬしのところへ行つて、よくわけを云ひ含めて來ます、わ――大工に先きまはりをされちやア困りますから、ね。』

『そりやア、念には念を押すのもいいでしようから、ね、わたしからも中島を相ひ手にして吳れるなとは云つてありますが。』おせいはそれから、大川へも渠等がちよツと會つて置いて貰はなければ、もう、たとへ僅かのあひだにしたところがこちらの義理やばつが惡るいからと云ふことを云ひ出して、渠らが餘り乘り氣になつてゐないにもかかわらず、大川さんを呼んで來た。そして笑らひながらお兼に向つて、『あなたにやア島村さんが朋輩なら、これはまたわたしの朋輩ですから。』

『よくいらツしやいました。』大川さんは例のおじやうずだが人のうちをわが物にしてゐるやうな挨拶をした。『わたくしは大川と申しまして、ふつつかながら、あなたがたのお蔭でこの帳場を受け持つことになりました者でございます。』

『どうかよろしく、ね』と、おせいも、はたから、おもて向きは、親しみある云ひ添へをした。が、人の帳場を占領したのは向ふの自分勝手からであつて、こちらの正當に許したのでないと云ふ不平が胸に一杯であつた。そしてあす、あさつてのうちには、きツとその勝手な挨拶ぶりの鼻を明かさせてやるぞと云ふ心賴みができてた、だから、大川の話の調子に乘つてこちらのことを

『どうもなか〳〵氣のきつい奥さんで、番頭やお三どんが隨分困ります』などと云つてても、別に頓着しないふりをして笑つてゐた。そしてこちら二人が渠ら二人を送り返した時、こちらは玄關で渠らに

『ぢやア、ね』と、そのあとを目から目へ念を押した。

『あんな若い女どもに取りまかれてゐちやア、田口さんもまゐつてしまうのア當り前でしようよ。』大川はあとで直ぐ斯う笑つて、その淫亂な目つきをこちらへ向けた。

『だツて』と、つい、おせいもその方へ氣が向いて、島村と云ふ女なら、如何にも憎いほど美人だがお兼なんかをと、田口の昔からの物好きがここでも考へられた。

貯金のあることは渠等にも云はなかつたが、大切な書類をここのものに盜まれたら困ることをうち明けた時、

『ぢやア、わたしが今預かつて行きます。わ』と云つて、お兼は無理にも出させて、こちらと中島との間に取りかはした契約書と警察から下りた營業許可書と工事檢査濟みの證とを持つて行つたツけが――。

『ぢやア、賴みますが、ね』と、答へたものの、こちらはそれを渡したくもなかつたのだ。大川や中島が契約書を書き換へると云つて、それを奪ひ取らうとしてゐることは事實だが、さうかと云つて、

自分がそれを持つてゐなければ、中島らに取られる恐れはない代りに、お糸がまたどんな氣を起してどうしてしまうか分らないのである。

然し、また考へて見ると、中島の話が初めはよかつたけれども、今となつてはさきの中尾や堤のよりも一層悪い。だから、今度のことにして、若しお糸が自分のずるい野心からそのかげで絲を引いてゐるのでありさへしなければ、これが最後ぢうの目のいい話であるらしい。

そして、かの女が直ぐ自分で易を見て見ると、矢ツ張り、妙なもので、自分の考へどほりであつた。その翌日を樂しみにして待つてゐると、果して島村の主人と云ふのがやつて來た。團十郎のやうな顏の馬鹿に長い人であるので、初めはおせいもびツくりした。が、こんな男にあの綺麗な奥さんがついてるにやア、きツと、おかねが目あてであらうから、この方にはこちらも信用を置いていいのだらうと賴母しかつた。

先づおせいは自分だけで會見して見ると、渠は

『おれが引き受けるなら、』斯う〳〵するが、それは承知かと聽いた。きのふ、大體の話があつた通り、毎月、中島への返しなる二十圓と家賃としての二十圓と、都合四十圓を、まア、大きな家賃として出し、その上に親子二人をこの家に置いて養ふと云ふのだ。さうなれば、地代も營業税も向ふが納めるのだから、こちらとしてはながねんの心配もなくなるのである。で、大きな心持ちになつて、

『無論、承知します』と答へた。
『それでは、大川なんか相ひ手にしなくともえいから、早う大工を呼んで來い。』
『………』おせいは、隨分横柄な、氣みじかさうなおやぢだから、中島とは直ぐ衝突してしまひはしないかと思つた。が、斯うなつては自分の爲めでもあるので、また佐久間町へ行つて來た。そして席を客間に改めて中島と島村とを引き合はせたら、島村さんが先づ口を切つた。
『おれはけふは川口の代理で來ただけだが、一體、君がこの家につかつたかねはいくらだ?』
『いくらと申して――』中島さんは少し面くらつたやうすであつた。
『曖昧なことは許さん、はツきり云へ。』
『………』一方はもぢ〳〵してゐた。
『それに、あの大川と云ふ女は一體なんだ? はじめからお前の女であつたのか?』
『いや、どう致しまして。』
『それでは、ここへ來てからくツ付き出したんか?』
『まさか、そんなことでもないでしようが』と、おせいは見かねて口をさし挾んだ。川口やお粂からすべてのことを聽いて知つてるのだらうとは思つたが――
『お前は默つとれ』と、島村はこちらへ命じてから、また中島に、『一體、お前らはまだこの家へ這入

つて來る權利もないのに這入つて來て、不都合なことをしとるのぢやぞ。裁判所へ出るまでもなく、警察へ行けば直ぐ分ることぢや。』

『…………』こちらは尤もなことを云つて吳れるとは思つたが、あまり手きびしいので喧嘩にならなければいいが、と。そして、『それでも、隨分骨を折つて下すつたんですから、ね。』

『少しお手やわらかに願ひますが』と、然し、中島さんはおとなしく出て、『金錢上のことは契約書のうへに出してございます。』

『そりや分つとるが、その上にお前らの要求があるか？』

『ありません。』

『よし。それでは、四百圓とはお前らの儲けを多分に見込んであるとしても少し高いと思ふが、兎に角、これを契約通り二十ケ月に成しくづせば異存はない、な！』

『ございません。』

『それだけ聽けば、けふはこれで歸るが――お前らがここへ這入り込むと云ふ權利は契約面にもないのぢやから、こちらの都合によると、あすにも立ちのいて貰ふからそのつもりでをれよ。』

『そこは少し――どうも――』と、中島さんには最後に何か云ふことがあるやうすであつたので、大川さんも飛び出してこちらと一所になつて、

『まア、今少し』と引きとめようとしたのだけれども、島村はさツさと歸つてしまつた。
『三百なんか、誰れがよこすやうにしたんだ?』中島さんはその目を光らせてこちらをばかり睨んだ。
『あんたはすツかり何でもしやべつたのです、ね!』大川さんも亦こちらに向つて顏いろを變へてた。
『………』おせいは、大川がめかけと云はれたのは當り前のことだから、それをおこつてゐたツて左ほどおそろしくもなかつたが、中島が三百と云つたのにはこちらもはたと思ひ當ることがないでもなかつた。で、自分の考へが今更ら間違つてたことを渠にもあやまるつもりで、渠の機嫌を取る氣味になつて、『ほんとに三百でしようか、ね?』
『三百でなけりやア、あんな物の云ひやうがあるか?』
『ぢやア、あのお粂の計略です、わ』と、おせいはかツきりと云つてしまつた。一つには中島があのこわい目でまた出齒騷ぎでも初めたらと云ふ恐れの爲め、また一つには、田口の女房をふてぶてしいと思ふ疑ひの爲めにだ。そして大川さんから、
『あなたはきのふ何かあの人たちにだまされたんです、ね』と云はれた時には、『さうかも知れません、ね、わたし』と、さう云ふ方へばかり心がほんたうに向いて行つて斯うしてゐるうちにも今のお

やぢが若し地ぬしへ立ち寄つて、またこちらに都合のよくないことをきめてしまつては困るからと考へ付いた。『早速、ぢやア、地ぬしへ念を押して來ます、わ』と云つて、やツとその場のおそろしい豫想は切り拔けた。そして實際にそこの玄關へ駈けつけて『今顏の長い人が來てゐませんか』と聽き糺して見ると、

『そんな人は――まだ』との、ぼんやりした女中の答へであつた。

『………』おせいはそこの座敷へあがり込んでまた老主人に會ひ、『若し島村と云ふ男が來て、うちの地面の借りぬしになると云つたら、どうか相ひ手にしないで置いて下さい』と賴んだ。

『では』と、主人は呑氣にも『その島村と云ふものも大工の中島と同類ですか。』

『いいえ！』こちらはその丸で見當違ひなのをまじめに否定して、『云はば、まア、かたき同士です、わ、ね！』

『それぢやア、あまり要領がをかしいぢやアありませんか？　あなたは、こないだ中島をかたきのやうに云つてゐました。』

『それが少しちたわけがありまして、ね、矢ツ張り、中島さんの云ひぶんの方がいいやうですから。

『私の方はどツちでもあなたのいいやうに致しましようが、まだ事が起つて來ないのだから、まアもツとよく氣を落ち付けて熟考して御覽なさい』と云はれた。

『これでもわたしは考へて考へぬいてるつもりですから』と答へて歸つて來た。そして大川さんにこツそり、おそるおそる『棟梁は』と聽いて見ると、

『今豆腐屋さんを呼びに行きました。わ』との答へだ。『契約書が今の人の云ふやうぢやア間違ひだから、矢ツ張り、書き換へなけりやアいけないツて。』

『さうですか?』おせいはそれが自分の手もとにないのをこの場合は安心して高をくくつてゐた。

『あなたもそれは素直に承知した方が無事でしようよ――やがて豆腐屋さんも來るでしようから、ね。』

『豆腐屋は豆腐屋、わたしはわたしですから、ね!』

『そんなことをおつしやつたツて――』

『まア、その時にやアその時の考へが出ます、わ、ね。』おせいとしては、さていよ〳〵と云ふ時に對すればいいのであつた。

自分の部屋へ來て、直ぐ炬燵へかじりついて考へて見るに、あの契約を書いた時には、どうにでもしてこの家が立つてゐればいいとばかり、ただ無學な大工の云ふままに自分は筆を走らせたのだが、實は、それがどう云ふ効力や結果を產むものであるかを自分もはツきりとは知つてゐなかつた。ところが、今、島村さんの云つたところによると、四百圓を二十ケ月に返すやうにしさへすれば、なにも

中島や大川を氣がねまでしてこの家へ入れて置くにやア當らないのであつた。これは中島さんらには不利益にこそなれ、こちらには少しもそんなことがないわけである。

ここに先づ氣が付いて向ふの爲めに書き換へを云ひ出させたのはあの豆腐屋であつたらうが、こちらの爲めには島村さんがあつて初めてこのいいことを敎へて吳れたのだ。が、このいいことをあの文面によつて知つたお兼は、四百圓だけ出せば濟むつもりで、三百代言を出しにして、つまり、この家へ乘り込んで來る計略としか思はれない。して見るとこちらは男を寢取られたうへにも、また家まで取られてしまうわけではないか？で、書類をかの女に預けたことは、中島らに取られるおそれがなくなつた代りに、かの女自身に橫取りされてしまひはしないかと云ふ疑ひを生ぜしめられたのである。

なほ疑ひを進めて見ると、きのふの美人に對してけふのおやぢが亭主だとは――無論、そんな無理な夫婦も、近い話が田口とお兼とのやうに、世間にはないこともないが――まア、ちよツと不思議だ。來るものも、來るものも、揃ひも揃つて不釣り合ひな亭主を持つてるとは！　だから、矢ツ張り、中島さんが無學でも看破つた通り、あの島村は女の亭主だと云ふのはうそで、ほんの、三百代言であつたらう。道理で、最初に向ひ合つた時から、こちらはいやな人だと感じられたが、この家を、もう、自分のうちだとでも思つてるやうに意張り散らして、その話の最中に、政直がこちらの膝をつツ突き

ながら、頻りに
『よう、おツ母さん、なにか――』と云つた時、島村は
『少し靜かにせい』などとあの長い顏をしかめて政直を叱り付けたりした。
『………』あんな癇癪持ちらしいこわい人に比べては、まだしも中島さんの方がどれだけ扱い易いかも知れない。あんな者を二度と再び來させない爲めには、早くあすも宮仲へ行つてお叔に渡した書類を取り返して來なければならぬがどう云ふ風に云つて返して貰はうかと云ふことにまた心配があつた。

九

さうかと云つて、今迫つてる事に對する覺悟も亦心配であつた。
島村と中島さんとが會見したのは午後の二時ごろであつたが、四時になつて、中島さんは果して豆腐屋をつれて來た。そしておせいも客間へ呼び出されて行つた。
『あなたは一體』と、今度は豆腐屋さんがあたまから意張つた口調で、例の薄い髮の毛を五分刈りにしたちよツと尼のやうなおとなしい顏をこわくして見せながら、『何の爲めにそんな三百なんか呼んだのです?』

『ぢやア、あなたは』と、おせいも覺悟してゐた反抗が眞ツ向に出て、火鉢にかけて自分の兩手をふるはせながら引ツ込めて、相ひ手をにらみ付けた、なぜ一旦書いてしまつた證文を書き換へさせやうとするんです？』

『必要があるからだ！』

『必要があるなら、わたしの方にも必要があります！　全この體家を誰れのものだと思つてるんだ、中途から飛び出して來たりして！』

『さう、奥さん、喧嘩腰しぢやア話ができません。』『中島は向ふと一緒になつてこわい顔をしてゐたのを和らげた。

『…………』おせいはそれをいい氣持ちに感じたが、なほ豆腐屋の方をにらんでゐた。

『熊本さんも、もツとおだやかに出て貰はないと、な。』

『僕も少し出すぎたと思ひますから、取り消しますが――。』

『…………』かの女は自分の心も少し落ち付いて來たのをおぼえたが、云つて置くのはこんな時だと思つて、『わたしの家を乘ツ取らうとする人なら、わたしやア誰れにだつて決して承知しませんから、ね！』

『わたし達は決してそんな不都合は致しません。』

『それが確かなら』と、かの女は中島の重ねての證言を得たと受け取つて、熊本の方へもそれを聽いただらうと云はぬばかりの笑ひを見せて、初めて當り前の言葉ぶりになつて、『わたしにやア何もかれこれ云ふことアないのです、わ。あの島村をだツて、實際にわたしが呼んだんぢやアないんですから。田口の方から勝手によこしたんです。』これは少し田口の爲めには云ひ過ぎだが、この場はそれを事實として自分の力にした。ここにゐないものにはそれが分る筈はない。そして今ゐるものをさうおこらせては、然し、また、そのあとが面倒になるからと見て、またずツと折れた調子になつて、『實はわたしも困つてしまひましたから、その證據にやア、あの人が歸ると直ぐ、また地ぬしへ』と、つい、口がすべつた。が、第一回に地ぬしへ行つたことは自分の胸に秘めてあることで、ここでは云はれないのだから、ちよツと言葉が行き詰つた。そして『實は』から云ひ直して、『直ぐ地ぬしへ行つて、島村と云ふものが來て若しうちの家の爲めに地所の貸借のことを云つても、一切取り合はないで置いて下さいと賴んで來たほどですから、ね。』

『然し、田口さんも今更らどうすると云ふんでしよう』と、中島さんはこちらをなじるやうであつた。

『わたしの考へぢやア』と、わざとにも笑ひを見せて、『田口は家をいッそのこと賣り渡してしまへとまで云つてるんですから、今度のことはあの人ぢやアありませんよ。きツとお衆が自分の野心から総

をあや釣つてるんです、ね。』

『家を賣るにしても』と、中島はまだほんとうには打解けてゐないらしい、『今ぢやアわたくし達に相談なしぢやア困ります。』

『無論、だから、わたしやア相ひ手にしてゐませんでしたわ、ね。』

『あの男は二百圓までは一どきに出してもいいが、あとの二百圓は月々にしたいとも申しました。多分さうかねがないのでしよう。然し、若しあなたがそんなことでわたくし達を承知させようと思つちやア間違つてをります。若しわたくし達がどうしてもこの家を出ると云やア、四百圓は義俠的な實費ですから、そこへもツと正當な利益を書き入れて、即時拂ひにしていただかなけりやア――。』

『…………』こちらは、中島がさう云ふ附け加へを正當といふほど義俠的をふりまわすのはをかしいと思つたが、もう、そんなことを爭ふべき場合ではないだらうと見て、『どうせ、わたしもあの人をそれだけの資力がある人と思へませんから――。』

『だから、兎に角、契約書を書き換へることにし給へ』と、豆腐屋さんもまたそこ意地が殘つてるやうに中島へ知慧をつけた。

『兎に角、契約書が間違つてるさうですから、ここへ持つて來て今一度見せて下さい。』

『それが――今、ここに――ないのですが、ね。』無理に笑ひにまぎらして、おせいは云ひにくかつた。

たとへここに持つてゐたとても、この場合何とか云ひまぎらせこそすれ、出す筈がなかつた。お粂に渡してあるのも心配だが、それを取り返して來て、中島らに見せれば、このやうでは、きツと取り上げられてしまうのだらう。そしてまた書き換へるとなれば、はたに悪知慧をつける人も來てゐることだから、こちらの不利益になるのが分つてゐる。だから、まア、手もとにない方がまだしもであつた。

『多分、田口さんのところにあるのでしようが、あなたはそれを取つて來なければ困ります。』

『さうです、ね――。』おせいは、向ふから押し付けるやうに云はれるだけ、こちらもあとは無言の口をとがらせて、矢ツ張り不承知のやうすを見せた。そして皆の顔いろをうかがひながら、ただもじもじしてゐた。

　すると、豆腐屋さんがまた口を出して、而もこちらを再び威すやうに、

『それがないと、わたくし共もこの家のお世話はできません――この十日には抵當流れになるのを、わたくしがかねを出して取りとめようと云ふわけでしたが。』

『幸田さん』と、この時、大川さんも出て來て、『取つておいでなさいよ、さう强情張らないでわたしがゐる以上は、決してあなたがたを困らせるやうなことはさせませんから。』

『さう、ね。』おせいは、つまり、そこがどちらに對しても心配なので、きのふはふいとお粂に云はれた通りの氣にもなつた。そしてけふは、また。島村の意張り散らして行つたやうすから見て、お粂が

ひよツとすると、こちらが雄作の十五圓を横取りした復讐に、この家を占領しようとするのではないかと疑ひ返した。そして、矢ツ張り、あの飛び入りの島村よりも、この中島にたよつてる方がましかと考へてゐるのだ。

『何とかそこはうまくあなたの口でおツしやれば、向ふでも返して呉れるにやア違ひありませんから。』

『さう、ね――わたしと政直とが兎に角たべて行けさへすりやア――。』この點が最も心配であつた。

『そりやア、あなた、もう、さう、くどくど云はないでも、みんなが承知してゐるぢやアありませんか？』

『でも、ね』と、こちらは大川の立つてるのをじろりと見上げて、加勢を賴むつもりで、『よく念を押して置かないと――。』

『そりやア、あなたがたの世話をすることは』と、中島さんも十分呑み込んでると云ふ顏つきになつて口を添へた、『初めからわたくし達が承知の上ですから。』

『ぢやア』と、少しおせいは力づいて、『政直とわたしのことは確かに間違ひはありませんでせう、ね？』

『今申す通り、確かに間違ひありません。ですからこれから直ぐ田口さんへ行つて、契約書を取り戻

して來て貰ひたいのです。』
『さうです、ねい――』
『それがないと、わたくしも資本をつぎ込むのに困ります』と、豆腐屋さんも云ひ添へた。
『………』おせいはまだ決心しかねてゐたところへ、この熊本の云ひ添へがあつたので、一層また不安心になつた。中島とだけの關係なら、もう、多少はその心持ちも分つてゐるが、豆腐屋さんなる者がこちらから云へば矢ツ張り三百代言くさいところがあつて――。『ぢやア、あなたもこのことだけは確かに誓つて下さいますか？』
『誓ひます。』
『ぢやア』と、こちらはとう〳〵向ふの飽くまで威すやうな返事に押し伏せられてしまつて、止むを得ず、『これから行つて來ます、わ』と答へた。そして
『早い方がいいです』と、向ふにせき立てられたので、晩の食事をしないで出かけた。
　すると、お衆はこちらを見るが早いか、おこつてゐて、
『あなたは駄目、ね。折角、わたしがいい人を紹介してあげたのに、矢ツ張りあなたのくせの、半信半疑を出して！』
『そんなおぼえはありませんが、ね』と、おせいは先づ辯解した。と云ふのは、たとへ自分の心には

さう思つてゐたにしても、言葉のうへには少しもさう氣取られるやうなことを云はないで歸した筈である。

『だツて、島村さんはおこつていらツしやいましたよ、かねは出してもいいが、幸田と云ふ女があア要領を得ないのでは駄目だツて。人を信じたやうな、信じないやうな曖昧なところへ飛び込んで行つても、また堤さんのやうに、追ツ拂はれちやア馬鹿を見るからツて、ね。』

『わたし、なにも堤さんを追ツ拂つたわけぢやアありません、わ。』

『あなたはとぼけてゐるんでなけりやア、自分で自分のことが分らないんですから――。』

『ぢやア、兎も角、あの書類を返して下さいよ』と、おせいはそれをしほにして、何げないふりで云ひ出して見た。

『ぢやア、矢ツ張り、あの大工や大川に丸め込まれてしまうつもり？』

『さうでもありませんが、ね――』

『つまり、さうなんでしよう。あなたもよく／＼馬鹿な人、ね！　島村さんの考へぢやア、あの證書さへ握つてゐればたツた四百圓であの大工どもを追ひ出せるのですよ。』

『さうも行きませんから、ね』と、こちらこそ自分が中島らに對する義理もあることを知らぬお兼を馬鹿にしたつもりであつた。そしてそれを强める爲めに、中島の云つたことをそツくり持つて來て、

若し直ぐ立ちのくなら、四百圓の上にまだもツと貰はなけりやアと云つてますから。』

『そりやあ、向ふの勝手な云ひぶんであつて、こツちぢやア契約通りを實行すりやアいいんぢやありませんか？』

『それができるくらゐなら、わたしも心配致しませんが、ね。』斯う高をくつておせいは島村が一と先づ拂ひは二百圓までたらと云つたのを、その意張りかたに照り合はせて、私かにあざ笑つてゐた。

『然し、あなたの爲めをおもやア、今、わたしがあなたに書類を返すのは危險です、わ。』

『それではわたしに困ることがあるんですから』と、おせいはしまひには、契約書をこちらが持つて歸らない場合の山島らの怒りを想像して、そのおそろしさに自分の聲をまで顫はせた。そして、自分は泣きたいほど本氣になつて、向ふは田口が三百をよこしたと云つておこつてること。それをなだめるには、云はれた通りどうしても證書を持つて行かなければならぬこと。それでも、自分らの身の上のことは豆腐屋までも受け合ふと云つてること。それが實行されなければ、また、その時になつて、自分には自分の考へがあることなどを語つた。そして自分がお象に野心があると見ての憎みや疑ひには、少しも云ひ及ばないですんだことを肩が一つおろせたやうに思つた。

『どうしましよう、ね、あなた』と、お象は、今までそばに來て、默つてたばこを吹かしてゐた田口の方へ初めて言葉をかけた。

『………』こちらはまた渠に對しても今一度同じやうなことを以つて辯解しなければならぬかとまご付いてゐたが、渠は案外簡單であつた。

『本人がさうして呉れと云ふんだから、返してしまへ。その代り、どうなつたつてかまふもんぢやない。堤の時なら、若しあの堤が不都合な考へを出したツて、おれがそれをさしとめて置けるが、今度の大工にやア、おりやア初めからいい結果を期待はしてゐないんだ。』

『まだそれに、別に惡いことを仕向けて來もしませんから』と、おせいは田口の寧ろよく分つた返事によみ返つた氣がして、また強情張つた辯解も出た。

『どこまで馬鹿な人なんでしよう、ね、あなたは！　わたし、もう、どうなつたツて知りませんよ』と云つて、お兼は奥の部屋へ出た。

そのあとでおせいは田口に向つて、お兼にもわざと聽えてもいいつもりで『わたしやア島村さんだツてもかまひません、さ。けれども、また堤のやうに若し惡い人であつちやア――。』

『お前にやア、いいも惡いも分らないんだ。どうせ、心が腐つてると云はうか、根本から疑ひ深いんだから、ね。』

『そんなことがあるもんですか？』斯う、おせいは一言のもとに否定した。そして自分だツて、この正直な心には善惡の見分けが付くし、進んでまた善にも惡にもそのどツちかへの分量がある、その多

少をも見分けてかかつてるものだと。私かに誇らしく思つた。
『これですが、ね』と云つて、お粂はまた茶のまへ這入つて來て、『よく見て御覽なさいな、あなたの云ふ親子扶養の件などアちツとも書いてありませんから。』
『そんな筈アありません。』
『筈はないがあなたのお箱ですから、ね！』
『…………』おせいが受け取つて見ると、自分の渡した時に自分が封じた箇所は破つてあるが、書類は確かに三枚あつた。そのうちの契約書を讀んで見ると、如何にもこの通りだ――
『一金四百圓也　右者工事費と認定すること實證也　大正六年一月より二十箇月に毎月下宿營業の利益より二十圓づつ支拂ひの件契約如件』とあつて、中島と自分との名に實印を押してあり、收入印紙も張られてゐる。そして文句も自分の手には相違ないが、自分と政直とに對する扶養の義務のことは出てゐないのだ。
『こんなことだけ書いた筈ぢやアなかつたんですが、ね』と、おせいは自分ながら不思議であつた。
『その場で讀み返して見たツて』と、田口は意地惡い口調で、『またあとで讀んで見たツても、兎に角讀みさへすりやア直ぐ氣が付いた筈だ。それをお前はぼけてゐて分らなかつたんだぞ。』
『まさか、わたしがぼけても――』とまた反抗したが、然し、おせいも自分でよく讀み返しもせず、

あとからまた一度も出して見なかつたのは自分の落ち度だと分つた。『これぢやア、どうせ、不安心ですから、向ふが書き換へると云ふをいいしほに、今度は書き加へさせます、わ。』

それにしても、お互ひに興がさめてしまつて、おせいは他の話をしつつ長居をしてゐることができなかつた。

一〇

契約書は取り返したくせに、中島は熊本がまだかねの工面ができないからと云つて、こちらをもつれて裁判所へ行き十日の競賣日を二週間延ばして貰つた。そしてこちらが二葉會社へ五ケ月間納めてここ三ケ月を中絶してゐる無盡のかけ金をも出してしまはなければ、豫定のかねが足りないと云つた。その上にも、まだ何とか工面しろと云ふので、田口の方から毎月貰ふぶんを二ケ月だけ前金にして貰つた。

それでもまだ皆がこれでも足りないと云はないばかりの顔をして、大川さんまでがこちらに向つて、

『あなたは大分貯金をしてゐる筈ぢやアありませんか』と云つた。

『そんなことがあるものですか？』おせいは苦しまぎれに斯う眞ツ赤な嘘をついたが、そのうへに何

だかおそろしくもなつて來た。契約書は取られたまゝになり賴みの一つであつた無盡のかねも卷き上げられ、このうへに文子の記念や雄作の骨折りなる貯金まで出してしまつては、萬が一、若しこの家を追ひ出された時にどうすることもできないのであつた。

渠等がその初めからそんな計略を以つて這入り込んで來たのであることが、やツと、この三四日のやうすで俄かにおせい自身にも確かめられて來た。自分が島村をこさせて中島を怒らせなかつたら、それも斯う早くは事が起らなかつたかも知れぬ。いや、こんな事にさせる口實を與へなかつたかも知れぬ。それが自分には實に後悔の一つにもなつた。

が、今となつては、泣きたくも泣かれないはめに落ち入つてゐた。遠く離れてゐるものも、近くそばにゐるものも、みな自分の敵であつて、自分は八方ふさがりのやうだ。誰れと云つて相談する相ひ手がなくなつてゐた。止むを得ず、易の先生のところへ行つてまたそれを訴へると、先生もまたかと云はぬばかりで、

『その件なら、どうせ、おれが聽いても駄目だ』と云つた。が、それでも、『最後までは踏みとまつてゐなさいよ』と云ひ添へて呉れた。

『わたしもその腹はきめてゐますから』と、こちらも答へた。さうだ、もう、最後には追ひ出されるにちがひないと云ふことを覺悟の前で、今一遍自分の對抗策をやつて見る機會も考へてゐるのだ。

ところが、そんなことを考へながら、或時、おせいが便所から出て、手を洗ふ時、そこのがらす戸のうちに竹の葉が繁つてるので、がらすを暗くしてゐるそのおもてへ映つた自分の顏をふと見ると、自分の兩方の目が血ばしつてゐた。そしてこれから、田口らには既に氣違ひだと云はれてる通り、その眞似も十分できるだらうと思へた。

丁度、この時、わざとこちらのさけてゐた大川が、これまでになく、こちらの部屋へ遊びに來た。これまでは、つまり、人を馬鹿にしてここへ來たことがなく、用事がある時は向ふの室へこちらを呼び寄せたのに、今や少し不思議であつた。すると、果してこんなことを云ひ出した。

『あなたもこのままぢやア』と、何だか親切さうにだが、『やがて追ひ出されてしまひますよ。それよりやアどうです、わたしも棟梁の云ふことを聽いてますからあなたも今度の人に――？』

『わたしは、ね』と、おせいは聽くなりくわツとして、自分のこの血ばしつた目を以つて相ひ手を睨み付けて、『そんな淫賣ぢやアありませんよ』と叫びを投げ付けた。『あのなま意氣な豆腐屋なんか、聽いても呆れます！』

『さう直ぐおこつてしまつちやア、わたしの親切づくが通じません、わ、ね。』大川はわる度胸をすゑてるかして、なほ笑ひながら、『わたしやアただ向ふの心をあなたに傳へてあげるだけです、わ。』

『[illegible]んなことア眞ツぴらです』と云つて、おせいはまたと相ひ手にしなかつた。そして自分の束髮を

——染めた髮の毛がその根もとから殆どすべて白がのきぢを延ばしてゐるのを知つてるまま——わざと、さんざんに解き亂だして、家をそとへはだしで飛び出した。そして、
『大川さんは利口です。だから、わたしの家を奪ひ取るつもりぢやアないでしよう。利口は拔け目がないのです。淫賣なんかしないでせう』などと、反對にもじつたことをわめきながら、通りへ出た。そして巡査の交番まで行つて、『うちへ惡人が三人も흙入り込んでゐますから、どうか御處分を願ひます』と訴へた。
巡査がうちまで自分について來たので、自分はそれをわざと玄關で突ツ放して引ツ込んでしまつた。氣の利いた巡査なら、それからあとをよく調べて皆を叱るだらうと思つて。そして大川がひとりで渠に何かくど〳〵辯解してゐるのは、叱られてゐるらしかつた。二階の大學生もこんな時には出て來て吳れる筈だのに、これは矢ツ張り薄情なせいか、顏も出さなかつた。
兎に角、これが爲めにまた中島と豆腐屋とが寄り合つたが、中島はこちらに向つて、
『あなたがまだそんなことをするなら、田口さんに云つて、この家のことはお斷わりするより仕かたがありません』と云つた。
『ぢやア、さうして下さい。』おせいはそれでもかまはなかつた。
『然し、それであなたはすみますか、わたくし達の骨折りを無にして?』

『ぢやア、どうともして下さい。兎に角、わたしはこの家を離れませんから。』

『なにもわたし達があなたを出すとア云つてませんぢやアありませんか？　わたしこそ』と、大川は少し閉口したやうすで、『迷惑です、わ、あんなことを布れまわされて！』

『何を云つたか、わたし、ちツともおぼえがありません、わ。』

『それだから、なほ困りますよ。』大川はこちらの機嫌を取るやうに笑つてたが、こちらを全く氣が觸れたと思つてるのを、おせいはせめてもの心やりと見た。そして、うわべではあやまるかたちで、

『御迷惑なことを云つたのなら、許して貰ひます。』

『あなたはここをどこか知つてますか』と、豆腐屋は人を馬鹿にしてだ。

『えい』と、おせいはそれをわざときよと〳〵して見せながら受けて、自分ではお客さんのひとりと變な關係があつたのを文子に見付けられたのもここなら、秋元の姉と繪を見合つたのもだと思ひ出した。『ここは、なんでも、おぢイさんの居間らしいです、ね。おぢイさんのたましひがまだ殘つてますからね、まさかの時ア、それが助けに出て來ます。』

豆腐屋も中島もぎよツとしたやうすでこの部屋中をそれとなく見まわしたのでおせいは自分の意味にこれからも多少の效力が出るだらうと見た。そして、私かに自分はこの家のぬしとなつても、千年萬年飽くまでこの家を離れるものかと云ふ念力を込めた。

『あなたにかかつちやア、とても誰れだツて叶ひません』と云ふ笑ひになつた。そして『あなたがたの身の上は今後も決しておろそかには致しません』と中島が云つたツけ。

そして一月の十六日には最後の相談にまた田口が呼ばれたが、豆腐屋の出しや張つたあげ足を取つて、

『僕はまだ三百代言は勿論、辯護士をも頼んだおぼえはありません』と怒り出したので、おせいは、

『まア、まア』と仲を取つて、『斯うなつちやア、ただわたしの身の上だけを頼んで下さいよ』と云つた。そして田口もおだやかに歸つた。

そしてその翌日には、お傘も田口の代理で裁判所へ來て、印形を押す時に、『あなた、これで押してもあとで困るやうなことは起りませんか』と念を押した。こちらは皆がゐるところだからそんなことを云うだけでも感情を害しはしないかと恐れて、

『えい、大丈夫ですから』と、丁度、地ぬしにも答へた通りを以つてした。そして無事に家の書き換へがすんだ。この時、返り證文を直ぐ取つて置く必要があると思つたので、おせいはおほ急ぎで自分が筆を執り、中島と豆腐屋との云ふ通りにしたためたが、お傘には――また何か反對するだらうと思つて――面倒だから見せなかつた。

『買受家屋返書、右者大正六年一月十七日貴殿より買受けたる家屋の代金千貳百圓を大正六年一月十

七日より向ふ參拾ケ月迄に支拂濟相成候節は右の家屋を御返上可致候　依て契約如件』として、中島太郎吉印、幸田せい殿とある。

うちへ歸つてから、おせいはこれを今度よく讀んで見たのだが、矢ツ張り、扶養の件は這入つてゐないのであつた。今更らまた書き直さうと云ひ出すのも、折角をさまつたことにまた物云ひをつけることになつて穩やかではないと見た。それに『右者』とあつてもどこの家とは書き出してないが、これもお互ひにはどうせ分つてることとである。また、この値段を千貳百圓としたのは、たとへ形式上の賣買にとどまつてる書き入れに過ぎないとしても、あんまり安過ぎるが、これを兎に角毎月の營業利益から拂つて行くわけで――ここには自分は前の取り消した契約の二十圓づつと云ふのを、まだ、これからの月額であると思ひ込んで――向ふ參拾ケ月とは殆ど三年間のことだから、その支拂ひずみには十分のゆとりがあると見て、今度は心配よりも寧ろ樂しみになつた。

そして皆がうツて變つてよくして與れるので、自分の尋常な姿がほを見せるやうになつて、時々見まわりに來る豆腐屋さんまでが自分にはいやなやつではなくなつた。そして殊に、この年うへのものにいたづらにでも多少の氣があつたのかと思ひ出すと、どうせ承知なんかはするつもりがないにしても、あのあたまの毛の薄い生意氣な男が私かに自分の心に親しみをも與へる。

『奥さん、もう安心ですから、氣違ひや幽靈じみた眞似はおよしなさい』と、渠は冗談をも云つた。

『…………』おせいはてツきり自分がおぢイさんの話を八疊の客間でした時のこともいまだにこたへてゐるのだと思へた。

ながねんの苦勞を先づこれで一段落と思つたので、おせいは皆の勸めに從つて――自分はまだ實際に氣が進まなかつたが――先生より貰った櫻陰女史と云ふ名を以つて、易の赤看板を出した。櫻は櫻川町から取り、陰はさくらのかげで女にはふさはしい名だと云ふのであつた。

『早速、見て貰ひたい』と、中島さんや大川さんが賴んだけれども、

『身うちも同樣の人にはこツちも慾や氣ままが出て當らないものだ』と云ふ先生の說を受けついで、斷わつてしまつた。そして看板を出してから三日目に、やツと一名、女の客が來たので、そんな時には使つてもいいことになつた應接室で見てやつた。すると、それが不確かさうな顏をしながらだが、おぼし召しを十錢包んで行つた。それでもこの初めての收入が嬉しかつたので、皆に見せて自慢した。そして政直をも喜ばせる爲めにそのお小使ひにしてやつた。

然し、おせいが今こんなことをしたツて詰らないと思ひ返したのは、意外にも中島の女房子どもが皆で入り込んで來た爲めである。

『そんな約束ぢやアなかつたんですが、ね』と、初めはこちらが主人がほをして不平を云つても見たが、割り合ひに小さくなつてるので許して置いた。すると、段々に向ふが却つてはばを利かすやうに

なつた。そして中島の女房お浪が最初に衝突したのは、大川と燒き持ちからの爲めであつた。それに、また、大川が少しも帳面をつけてゐなかつたことが分つた。這入つたおかねをただ締まりなく出してゐたので、月の末になつて、勘定が何が何やら滅茶々々で、あとから、あとから、方々の書き附けが追ツかけて來た。

『これぢやア、とても、あなたにまかせちやア置けません』と、中島もおこつてしまつた。そして大川はこちらも私かには望んでた通り追ひ出されてしまつた。

『あなたはどうせお勝手や帳面の方はできないんですから』とまでぶしつけに云ふやうになつてた者が、却つてこんなありさまであつたのだ。それにしても、こちらは今更らまた中島の考へが分らなくなつた。

二

『…………』おせいが氣づいて見ると、うツかりとあの大川のやうな女に營業をまかせて安心してゐたのは、中島としても無謀であつたではないか？　今月この家として借金の方へ入れるぶんは初めてのぶんだが、それが出なかつたのである。これだけ客がゐて、そんなことでは、大川がきツとちよろまかしてしまつたに相違ない。ところが、それはそれとしても、これからは大川の代りにお浪さんを

立てようとしているのだ。

お浪は大川でないとしても、また、その亭主や豆腐屋とぐるになつて營業の利益があつても無いやうにばかりこちらへ報告してゐては、渠等が得をするばかりで、こちらはいつまで立つてもこの家を買ひ戻すわけにならないのである。これはどうしても自分がかねの出入りを握つて爲なければはツきりしないと云ふことが分つたので、中島に向つて、おせいはまた衝突の覺悟をきめて、

『これからはわたしがもと〳〵通り帳場に坐わりますから』と申し出た。『お浪さんだツて、矢ツ張り、大川さんと同様にまだ不慣れでしようから、ね。』

『では、わたくしのかかアはあなたの女中になるのですか？』

『そんなわけぢやア――』おせいは意外なことを云はれて、ちよツとまご付いたが、もう、云ひ出した以上はと思つて、『然し、わたしが會計をしませんと、ね、あなたがたに返して行く借金のらちが明かないぢやアございませんか？』

『借金はあなたの方から返していただけばいいので――この家はただあなたと政直さんとを養つてあげるのが責任です。』

『えツ！』かの女は茶の間の火鉢のふちへ來て、しやがんで火鉢に兩手をかざしてゐたのだが、びツくりした拍子に腰を落して、かた手を疊へ突いてしまつた。そして日ごろ、自分の心のうちにばかり

無理にも押さへてゐた最後の疑ひといきどほりとを一ときにおもてへ出して、『ぢやア、あなたはこの家を奪ひ取つたつもりですか？』

『いや、奪ひ取つたのぢやアございません。買ひ受けたわけです。』

『どうしてです？』

『どうしてツて――』

『隨分失敬ぢやアありませんか』と、こちらは向ふの云ひぶんなんかを聽いてるひまがなかつた。自分は向ふに養つて貰はないでも、自分が家を自由にしてゐさへすれば勝手に立つて行けること。そしてその家を決して本當に賣り渡したのではない、二葉會社の競賣を免れる爲め、お互ひの便宜上、假りに讓り渡した形にしたのであること。若し本當に賣れるとすれば、そんな安い金額ではない、手を入れる前のかたちに於いても、おぢイさんのゐた時から、千五六百圓の價うちがあつたこと、若しまた、たとへ家は向ふの物になつてるとして見たところが、この營業の權利はこちらが持つてゐるのであるから、さう向ふの勝手にはならないこと。乃ち、家を取つたと思つてるのも間違ひであるのに、そのうへにも間違つて營業をも向ふが自由にしてゐては、こちらをしてどこから家を買ひ戻すかねを出させようとするのかと云ふこと、などをつづけざまに責め立てて見た。

そのうちで一番あとの件に自分の異議がぶつかつた時には、自分ながら、これまでさんざん心配し、

疑ひとほして來たことの根本問題であるのが分つて、自分がこれをうツかりと、半ばは氣が付きながらも、おろそかに附してゐたことを一ときに目がさめたやうに後悔した。が、もう、おそかつた。

『わたくしの方では正當な手つづきを踏んでやつたことですから』と、中島は澄まし込んでゐた、『それが御不服なら、裁判所へなりどこへなり出していただきしまよう。』

『あなたは今更らそんな水くさいことを！』おせいは呆れたと同時にまた仰天しないではゐられなかつた。『あなたがさうなら、わたしも證文を書き換へて貰ひます。證文が間違つてるんですから！』

『もう、そんなことはあのかねを出して呉れた熊本に對してもできません。』

『そんなことがありますか？』おせいは悔しさの餘り、からだぢうが顫えてゐたのをまぎらすつもりで、火鉢のうへにたぎつてる自分がもとから使つてた鐵瓶を手に取るが早いか、これをこの部屋の眞ン中へ投げ付けた。ゆげをみなぎらせてころがつた鐵瓶の湯が一面に疊のうへへ流れた。

『奧さん、そんなことを云ふと決してあなたがたのお爲めになりません。』

『爲めも何もあるもんですか？』おせいは殺すなら殺せと云はないばかりに中島をにらみ付けて、『お前らが勝手にぞろ〳〵と子どもまでつれて這入つて來やアがつて、コツちを養つてやるツて、馬鹿馬鹿しい！　主客が顚倒してゐます！　もう分つてる、大川を出したから、今度はわたし達を追ひ出さうとするんだ！』

『そんなことアありません！』
『いいや、すツかり分つてしまつた！　お前らは泥棒だ！　家泥棒だ！』かの女はまた束髮を亂だす爲めに兩手をあたまへ上げ、立ちあがるが早いか、裾を直さないで茶の間を玄關の障子のところへ出て、直ぐばた〳〵とはしご段をあがつた。そして例の大學生を初め、二階の部屋々々を――客の留守なところもあつたが――のぞきつつ、大きな聲で、。中島らはとう〳〵わたし達を追ひ出すんです！　この家を乘ツ取つたんです！　わたし達は餓ゑて死ぬばかりです！　これから巡査に訴へて來ますから』と布れまわつた。

が、どいつもこいつも薄情なのだらう、平生はこちらに向つておじようずを云つてながら、こんな危急の場合を――ただきよろりとふり向いたばかりで――一人だツて何とか云つて吳れるものもなかつた。それにも亦癇癪を起していそいで二階を下り、玄關を飛び出さうとした時に、水道事務所へ勤めてゐるお客が二階を飛び下りて來て、
『奧さん、まア、お待ちなさい。先づ、わたくしでいいことたら伺ひましようから』と云つた。
『泥棒がゐるんです、うちに泥棒が』と答へながら、おせいはそれをしほに引き返した。そして再び玄關をあがつてその客を自分の部屋へ來て貰はうとして先きに立ちかけると、茶の間からお浪の聲で、こちらへ聽えよがしに、

『こツちがかねを出して買つてしまつた家を、冗談ぢやアない、自分で自由にしたいなんて』と云ふのが聽えた。
『お前なんかの知つたことぢやアありません！』こちらは廊下に添つた障子を明け、顔をその方へ出してお浪をにらみ付けながら、『かねなんかこツちが出してこそゐれ、まだ一文だツて取りませんから、ね、家は賣ツたんぢやアありませんよ！』
そのわけをまた詳しくこちらの部屋で語つて聽かせたら、お客さんは中島の方へはこツそりと、わざわざ交番へ行つて來て與れた。が、交番でも、もう知つてゐて、
『あすこの事情は裁判へ出てもその結果はあらかじめ分らない、とても警察で取り扱ふ事件ではない』と云つたさうだ。
こちらのうツかりしてゐた落ち度からとは云ひながら、斯う失敗してしまつた悔しさを辛抱してゐるばかりでも大抵の骨折りではなかつた。親子二名がただ無方針にここを飛び出しても仕かたがないので、たべてゐることだけは保證されてゐるのをせめてものたよりに、まるで隱居のやうにされて二疊の部屋にばかり立て籠つてゐることになつた。が、このたださへ不眠性になつてる自分の目もからだもます〳〵自分の意志には從はなくなつてしまつた。
然し、この商賣は大工なんかがただ几帳面に物を切りはめて行くやうたものではないから、今に見

ろ、あの何も知らない中島やお浪が手こずつてしまつて、さじを投げ出す時が來よう。こちらはそれを早く意地づくで見てやりたかつた。

すると、果して一つ面白いことが起つた。と云ふのは、あの支那人の目かけだが、それが一ヶ月以上の宿料とたびたびの立てかへ金とをうツちやらかして置いて、どこかへ喰ひ逃げをしてしまつた。そしてあとへ殘して置いた物とては行李一つしかないのだが、その中には月經の血がついて固まつた綿と切れだけが這入つてゐたと云ふ。

『だから、云はないことぢやアなかつたんだよ』と、おせいは政直を相ひ手に多少氣持ちのいい不平を漏らした。あの女は來た初めからかね拂ひが少しあやしかつた。それを大川のゐる時にも一度注意してやつたのだが、大川は自分も人にくツ付いたりしてゐたところから、その同病を憐れみ合つたとでも云ふのか、すツかり信用してゐた。そして田口を最後に呼んだ時、渠がこちらの手でむいて出した林檎を、意地惡くも喰べないで、

『お前は手もきたないだらうから』と云つたのを、大川は

『ぢやア、丁度それにいい人がゐます、わ』と受けて、あの年の若い目かけを代理に出したりした。

けれども、おせいの考へでは、若し自分なら、なくなつたおぢイさんからもをそはつてたこともあるし、客の方で少しでもかね拂ひがあやしくなると、直ぐ立てかへなどをさし控へるばかりではな

い。また、その客の出たあとの荷物や行李を、時々、手をつけたとは分らないやうに調べて見るのである。

今や、然し、毎日のやうにこちらへ難くせをつけ出したものらは、その支那人の目かけが喰ひ逃げをしたのまでこちらのせいにした。

いろんなことを毎日ふたりでぺちやくしやべり合つてたのだから、きツと、あなたが知慧を附けたのだらう』ツて――

『飛んでもないことを』と、おせいは心で怒つたが、おもてでは、自分か自分の子かが投ぐられても詰らないからと思つて、ただ長いものには巻かれてゐた。

が、その事件の爲めに、ただささへ虐待された二人が一層困らせられて、臺どころへこちらから御はんをたべさせて貰ひに行かなければ、いつまでも其用意をして貰へないのだ。客にでさへまる三日間食事を出さなければ訴へられても仕かたがない規則だのに、うちわのものに喰べさせないとは以つてのほかであつた。たまたまたべに行つても、政直までがこちらと一緒に悔しさとゐさふらふのやうに氣の引ける爲めとで、物が喉へ這入りかねた。

しまひには臺どころへも氣が引けて行けなくなつたので、止むを得ず、毎日のやうに、こツそり、政直においもを買つて來させて、それを二人でたべてゐたけれども、さうなると、また政直は

『御はんをたべたい、御はんをお呉れよ』と云つて駄々をこねるのである。可哀さうでもあり、たまらなくもなつて、おせいは渠をも田口のところへ賴むことにした。そして自分も決心をして、先づ自分の所有物として賣り拂へるものは古道具屋や古着屋を呼んで賣り拂つた。

それから、自分の身に必要な物だけをまとめて、いよ〳〵この家を易學上のをんな友達のもとへ出るとなつた時、現在臺どころで使つてる皿小鉢を遠慮なく二つ三つづつうら庭へ持ち出して、おぢイさんの時代から並べてある植木鉢の臺石にぶつけて、氣持ちよく幾たびにもうち毀わした。そして皆に向かつて、

『わたしは、もう死んだも同樣ですから、ね、幽靈になつても、きツと、この家は取り返して見せます』と叫んだ。

山の奥

一

『をかし　をかしや、
松澤　の　村　は
五尺あしだ　の
齒　も　立たぬ。』

爲雄はこの唄をずツと小さい時からおとなの眞似をして歌つてゐた。が、何のことだか分らなかつた。五尺も齒の高い足駄ぽんか、時々この村へやつて來る法螺貝の山伏だツてもはいてゐることはない。そんな物を誰れがはくものかと思つた。さうして自分のうちほど結構なところはないとしながら、尋常小學校を出た。そしてまた高等をも。

今や、徵兵に取られた時の爲めの準備をも敎へて吳れる夜學の實業補習へ行つてるのだが、自分の父親の用事や自分自身の小使ひ取りに、ここから半みちばかりある平林村へ時々行くやうになつてか

ら、やツとこの唄のわけが分るやうになつた。
『どうしたア、爲公、また一緒にドンタクへ行がねいか』と、おやぢ(庄屋)のうちのあんちやに催促されて、
『おれはまださしが溜らねいが、のう』と答へたこともある。
おやぢのうちのあんちやはこちらより二つ三つも年うへだが、さしで以つて來たわらの米を盜み拔くことを敎へて吳れた。尤も、それで氣が付いて見ると、これは自分の兄もやつてることであるから、爲雄としても、たとへ父の物をでも別に惡いこととは思へなかつた。そしてそれが一斗なり二斗なりになると、それをこツそり平林へ持つて行つて、貳圓なり四圓なりに換へ、自分の每日の買ひ食ひやたばこ代にするのである。
平林には、一の日と六の日とは市が立つ。それを『一六ドンタクの市』と云つてゐる。そこへは村を半みちばかり行かねばならぬが、あか土の深い道に大きな石がでこぼこ出てゐて、人力車などは醫者でも使はない。いや、使へないのだ。荷車を引くにしても困難で、雨降りあげくには、わらじばきの足が石をはづれると、くるぶしの上までも吸ひ込まれてしまう。これを他の村のものらが馬鹿にしてゐるのであつた。
『こら、五尺あしだの野蠻人』などと、市では云はれた。また、『貧乏村の小わつぱ』とも。

『………』さうだ、貧乏とか野蠻とか云ふことがでこぼこ道であつたり、うちの米をさしぬすつとしたりすることであるなら、確かにそれに違ひはなかつた。そして自分のうちがこんなところに在つて、自分がこれに生まれたのが如何にも恥かしかつた。如何にも面白くなかつた。話に聽く東京とか大阪とか云ふやうないいところでなくても、せめては新潟なり高田なりに生まれてゐたら、さぞよかつたらうに――。

面白くないのは、然し、そればかりではなかつた。母がけちん坊の上に根性ツぽねが曲つてゐて、意地を張り出すと、父の云ふことでも何でもなか／＼聽かないのである。そしてわざとらしくうちを飛び出してどこかへ遊びに行つたりする。さうでなくば、また、何も働らかないで、ことし六十七にもなつた婆々さをむごたらしくこき使ふ。少し耳の遠くなつた年寄りを『婆々さ』と怒鳴り付けて、『早う馬ぐさを煮さつしやれ！』

『煮れと云ふなら、煮るが、のう――』年寄りはよぼ／＼として、爲雄も一緒に寢るところになつてる部屋から出て來た。そして勝手の方の土間へ下りると、草履をはいてまた倉のある方へ行き、そのそばの柴ニヨから一と握りの柴を持つて來て、馬の草を煮る大きな釜の下をたき付けながら、『さうおればツかり働らかせねでも――』

『そんげな事くらゐ、嘉一に嫁貰へばまかせられるがんね。』

『なんにもおれは嫌はないがんね。嘉一がやだと。』
『それもお前がかげでつツつかつしやるすかい。』
『つツついたりなんかしやせんが、のう。』
『………』爲雄はそれを聽いてゐると、子供ながらに、年寄りもうそを云つてることが分らないではなかつた。と云ふのは、母が自分の里にゐる自分の姪のお新を嘉一の嫁にしようと云ふのに反對するのは、實際は、この婆々さんである。かげで嘉一らに云つて聽かせたことによると、母の里なる甚五兵衞のうちは昔から貧乏で、その爲めに皆手くせが惡かつた。母も若い時にはそのくせがまだやまないで、うちは決してさう困つてゐないのに、人の物を盜んで來たりした。その爲めに、婆アさんはいつも人の知らない苦勞をしたとかで、今となつては、もう、その孫の嘉一郎に二度と再びそんな苦勞をさせたくなかつた。

母の里のものらは今でもまだ、ちよツと人が見てゐないと、人の畑の大根や茄子を盜んで行くといふ評判だ。そしてそれが分つたり見付かつたりしても、人が別に何も云はないのは、そこの婆アさんが昔からこの村でたツた一人の取り上げ婆々アであるからだ。そしてその婆アさんがまた泥棒もじようずな代り、人の孕らんだ兒をおろすのもじようずだと云はれてゐる。それが母親の母だから、爲雄にも自分の本當の婆々さんに當るのだが、仕方がなかつた。

『さうだすかい、お前』と、うちの婆々さはうちの母親の留守に嘉一郎に向つて云つた、『がツかアがなんて云はうが、お新を貰ふなよ。』

『うん』と、兄はそれでも赤い顏をしながら答へた。『おれもあんげなをなごはやだ。』

『………』爲雄も自分としてお新の評判がどこへ行つても惡いのを知つてたので、『あんげなおかめ、あんにやもやめろよ』と、はたから口を出した。『あいつは、然し、あんにやを好きだすかい、おれにも惚れてゐて、のう、きのふも道で逢ふたら菓子をちツとばか呉れたが、ねし。』

『生意氣云ひやがるな！』兄はまた恥かしさうに顏を赤くしてだがこちらを叱つた。

『………』が、本當だから、仕かたがない。こちらはお新の顏を見るのもいやだけれども、駄菓子はうまかつたのでまたあとを喰ひたくなつて、自分でもまたでこぼこ道を四丁ばかり下りて行つて、酒や醬油類やこんにやく、豆腐などと一緒に駄菓子を賣つてる正左衞門婆々さのうちの若い衆の寄り合ひ場所まで行つて來たのだ。

『爲までが餘計な智慧なんかつけて』とは、いつも母親がぷり〳〵した時の言葉であつた。そして云ふことがなくなると、こちらのたばこを吸ふことまでやかましく叱るのだ。が、こちらは『自分の働らきで儲けたかねで勝手に吸ふがんだに』と云つて相ひ手にもしなかつた。椰子の實のたばこ入れだツて、ドンタク市で自分が見付けて、自分が買つたのだ。母に比べればずツと人のいい父

親からも小使ひは貰ふが、それも畑へ出たり、兄を助けて賣り荷を平林へ持つて行つたりする爲めだ。『どうして村のもんは斯うひどい道にして置くんだえ』と、兄に云つて見たことがある。すると、兄は

『村にかねがねいんだすかい、のう。』

『…………』して見ると、矢ッ張り、松澤（まつざは）の村は貧乏むらなのか知らん、大抵のうちでは馬などを少くとも一頭は持つてゐるのに？　そして馬を持たない甚五兵衞のうちのことばかり思ひ出されて、『あんげな貧乏人がゐるすかい、村もようならねいんだ、のう』と云つて、母とお新のことをさんざんにあくたいついてやつた。年寄りをむごたらしくする母親が憎い爲め、こちらはお新までを憎いので、夜這ひに行く若い衆どもがかの女のどこかをどうだ、かうだと云ひ合つてるのもすべて、かの女に關する悪くちだと聽き取れてゐた。そして『きのふもまた、あいつ、圖々しう菓子をおれに呉れやがつた』と告げた。

『あいつが早うどッかへ片づいて呉れたら、のう。』兄はいつもただこんなことを云つてるばかりであつた。

『…………』こちらは自分の兄のあとに付いて押して來た荷車（にぐるま）のかぢ棒の一方をまたいで、兩手をそれに握り付かせ、その上に自分の腰を乘せながら、みちばたの石の上にやすんでる兄のことを私かに考

へて見た。兄は他の若い衆とは違つて品行がよく、どこへも夜這ひなどに行かない。丁度、自分が學校で先生から敎へられてゐた通りの模範靑年で、ひまさへあればその部屋へとぢ籠つて講談物を讀んでゐるのだ。で、自分も兄ほど大きくなつたら、兄に負けないほど自分の品行は愼むつもりである。が、兄の

『冗談一つ云へないのは、』皆が笑つて云ふ通り、『玉にきずだ。』そして冗談をばかりではない、むごい母親に對しても面と向つては口返答もできない。だから、そんな時にはわざとこちらが出しや張つて、兄に代つてやつて、

『若しお新が來たら、おれちよが承知しねい。無理にもろたら、おれは東京へ逃げて行ぐがんだ！』

こちらが段々と兄同樣うちの爲めになるやうになつたのを父母が喜んでることは、こちらも自分のつよ味として十分に知つてゐる。

『爲の嫁にするがんでねい』と、母親は憎らしさうに叱つた。この時、それでも、いつもなまけ勝ちなかの女は自分で畑へ行つて來たかして、筒袖を着て、手ツ甲にもも引きをつけて、手ぬぐひ被りのわらじがけであつた。『うちのものがみんなでおれをいぢめてばツかり！』

『まア、まア、もうちとばか待たツしやれ。本人がやだと云ふあひだは、のう――』婆アさんは相變らず馬草を煮る役目に當りながら、斯うとぼけてゐた。

『…………』こちらには、それも尤もであつて、婆々さと共に父親だツてもお新をうちへ呼びたくないから、わざと當らずさはらずにしてゐるのだらう。して見ると、うち中で母親の味かたとし云へば、末ツ子のお德だけだ。こいつは母のそばに寢ることになつてゐて、まだ何も分らないので、をんな親の云ふことならなんでもいいやうに思つてるやうすだ。が、こちらは、もう、お德よりは三つもうへだから、さうは行かないと、爲雄には自分で考へられた。そして自分も自分の兄も婆アさんと共に父の味かたであつた。

二

が、爲雄は自分には親兄弟と共に田へ出たり、兄の荷車のあと押しをしたりする仕事よりも、雉を取つたり、うさぎをあとづけたりする方が面白かつた。うさぎ狩りは自分の冬の小使ひ取りの一つであつた。どこもかも眞ツ白に雪が二三尺も積んでゐると、山の奥にも喰ひ物がなくなるので、うさぎが奥から目のふちを赤くして澤山うろ〳〵と人家のあるところへ出て來る。そして人がたま〳〵喰ひさして棄てたやうな物を見付けると、おほ喜びをしてそれにくらひ付いてゐる。ゆき靴をはいてそれを追ツかけると、ぴよん〳〵逃げて行くが、その行くさきでは、地上の白さと一緒になつてどこかへ見えなくなつてしまう。そんなことは心配なかつた。

こちらは足あとさへついてゐれば、それをどこまでもつけて行くのである。すると、岩のあひだや、木の切り株の中や、おほきなけやきの根のうろなどに、小さくなつてすツ込んでゐるのが發見される。追ツかけないでも、寒い爲めにそんなところへちぢこまつてるのもある。古四王鎭守の森したなる村びとの墓場などには、殊にそれが多かつた。そんなのはすべて素手でつかまへられた。そしてそれを平林へ持つて行くと、一匹に付き二十五錢には賣れるのであつた。

　爲雄はまたいたち落しをも使つた。平たい板のうへに釘を一つ突き出てゐるのだが、そこへ餅でも、あぶらげでも、鹽びきのあたまでもなんでもさして置くと、それへ動物が口を持つて行く時、仕かけのばねを踏んではづす。さうすると、うへから力づよい輪がかぶさるのである。が、或時、このわなを置いたところへ行つて見ると、もがいてる白い動物はうさぎではなくて、猫であつた。そしてひどい顏をしてこちらを瞰らんだので、おそろしくツて、手が出せなかつた。

　そこへ隣り――と云つても、三十間ばかり奥――の、がツかアがとほりやがつて、

『おうや！　おらうちの猫を、畜生』と怒つた。そしてかの女が急いではづしてやつた。すると、その動物は血を雪のうへへたら〳〵落して、逃げ去つてしまつた。

　その人の怒つてる顏もおそろしかつたので、わなをうツちやり放しにして、渠も自分のうちの方へ逃げ出した。そして一二丁來ると、おそろしさも無くなつて、今度は俄かに腹の皮がよれるほどをか

しくなつた。うさぎの代りに馬鹿な猫がかかつたのだ！　それが第一にをかしいのだが、また、その猫をはずしてやりながらぶつ〳〵怒つてた人の顔もをかしかつた。
『あツはツは！　あツはツは』と云ふ自分の笑ひが自分のうちへ近づくほど烈しくなつて、玄關に達するが早いか、そこの板敷へ自分のからだをころがして殘りの笑ひを笑つたのである。
『どうしたか、爲！　そんげに笑ふて？』父親はびツくりしたのか、勝手の方から土間を出て來た。そのかた手に編みかけのわらじを持つて。
『…………』こちらはさう云はれるとます〳〵答へもできかねたが、親にあまへる氣味に手つだはれながら、飛び〳〵に言葉が出た、『今、あは！　猫が、あは！　あは、はツはツ！』
『何がをツかしや、馬鹿！』母親も出て來てゐた。兄も――また妹も。皆、それがまた餘りにまじめ腐つて見えた。
『あは、あは、あははツは！』ふと氣が付くと、今のがツかアがこちらのわなを手に持つて玄關みちへ這入つて來るのであつた。それがぶるツと自分の身にこたへると、今度はまた俄かにこのをかしさがやんで、默つて勝手の方へ逃げ込まなければならなかつた。
　何を怒りまぎれに發したのか分らないが、こちらが馬屋の板かべのふし穴からのぞいてゐると、隣りのがツかアはすご〳〵と歸つて行つた。

『爲、ちよツくら來いや』と、父親は、もう、わらを打つ石のあるところへ來て、むしろの上にあぐらをかいて、わらじを編み初めてゐた。

『…………』どんなにおこり付けられるのか知らんと思ひながら、おそる〳〵近づいて行くと、まアの顏はいつも通り柔和であつた。

『うさぎ取りに猫がかかつたのは仕かたがねいども、隣りのがかに氣の毒だすかい、こんだから、あんげな馬鹿げた笑ひかたはよせや。』

『うん。』こちらは自分のまアよりも猫の方がおそろしい。

『あのがかがおこつてゐたツた。』

『…………』爲雄はそれを聽き流して、うちへあがつた。あの人やあの猫に氣の毒であつたのは兎も角として、白い上の赤い血が、猫の苦しまぎれに瞰らんだ目つきと思ひ合はされて、いまだに自分の心に殘つてゐた。直ぐ兄の獨り部屋——倉に向つた六疊だ——へ行つて、『あの猫は隣りへ歸つただらうか、なア?』

『どうしたがんで?』

『怪我したすかい、のう、死んだかも知らねいども——?』それが生きてゐたとして、あの夢中な勢ひで飼ひぬしの家を忘れ、ひよツとすると、山の奥へまでも行つてしまつたかとも思はれた。そして

話に聽く山猫にでもなつてしまうと、こちらが柴刈りに登つて行つたりする時、向ふがおぼえてゐて、大きな岩の上から口を出して噛み付きに來るのが今からおそろしかつた。

『馬鹿云ふなえ』と、兄はこれを聽いて叱つた。

が、爲雄はそれから山へ行くことが少し臆劫になつてゐたところへ、新津から村上へ來る鐵道が敷けると云ふので、その線路のまくら木にする赤松を切り出す仕事が初まつた。そして、また、鐵道の爲めに山ざかなどを切り開らく仕事が。これは多くの人が一緒にするのであるから、そして自分の兄もそれに出たので、自分も負けない氣で皆の手つだひをして、おとなのまでは行かないけれども、日に四十錢や五十錢の賃銀は貰つた。そして、

『子供のくせに』などと、たび〳〵云はれても好きなたばこが、いつのまにか、巻きたばこにもなつてゐた。

そのうちに、山ざくらや蘭の花が咲く春が來た。そして雪も解けてしまつた。やがて、また、ほとゝぎすが啼いてとほつたあとの青葉の地上にその鳥の血が滴れてる時節も過ぎ、馬屋がむし臭く、積み肥が燃え出しさうな夏も去つた。そしてやがて稻を刈らねばならぬと云ふ秋になつて、爲雄の家から云ふと、一と下だり下の茂平のうちのがツかアが絲病になつて、うちの母親も看取りの爲めに二日ふた晩も行きツ切りであつた。が、その病人のやごめはとう〳〵死んでしまつた。爲雄も自分がずツ

と小さい時から遊びに行つてたので、氣の毒には思つた。

　ところが、うちの婆アさんが父に語るところを聽くと、

『あのががも村ぢうの評判もんで立派にやごめで暮してゐたども、うわべばツかりで』あつた。男があつて、而もそれが梅毒持ちのくせに兒を孕らませたのだが、その兒をおろさうとしてしやうがか何かを用ゐたに違ひない。うつつた毒がその爲めに一層ひどくからだを腐らせて、もがき死にしたのは天罰だ。そして『これもきツと甚五兵衞のうちの婆々さのさし圖であつただらうが、のう。』

『あいつにも困るがんだが、のう、死んだもんが可哀さうだに』と、父は答へた。

『………』村ぢうは大抵近いか遠いかの親戚なので、爲雄もさう聽くと一層茂平のうちを氣の毒になつたが、不思議なことには、その反對に一番近い親戚であるところの取り上げ婆々アとその孫のお新とだけに對しては、一層自分の憎ましさを增した。

　茂平のうちの葬禮には父と兄とが出かけたが、立派だと云ふから大きな饅頭も貰へるだらうと思つて、爲雄は自分も行きたかつたけれども父から許されなかつた。で、妹のお德と一緒にそのそばまで見に行つた。一つには、この村から葬禮の出るのが自分らに珍らしかつた。

　白い高張りの提燈や、銀がみ金がみで出來た花で立派なその行列が、をんなのよそ行き衣物をうちかけた棺と共に、ころもを着た坊主にみち引かれて繰り出して行つた。お念佛を唱へながら。そして

そのあとに、その家の長屋門の前に殘つたのは自分らも知つてる遊び友達の子供と今ひとり見たこともない女の人とであつた。學校の女敎員を除いては、誰れも結つてはゐないところの、ひたへに聞く突ん出たかたちの髮をして、その衣物もこの邊では見られないやうな奇麗さであつた。
『あれがハイカラと云ふがんだ、のう』と、お德は歸りがけに生意氣にもこちらへ云つて聽かせた。
『さうかえ?』爲雄も、然し、斯う答へるより仕かたがなかつた。あの人がゐたので、友達にも言葉をかけないでしまつたのだ。あんな人でも男に梅毒とかをうつされることがあるのか知らんと思ふと、女と云ふ物には――お新などを憎いと云ふ外に――まだ何か不思議なことがあるやうであつた。

三

或日、爲雄は兄や父よりも早く田から歸つて來て、稻刈り鎌を置くが早いか、直ぐ湯に這入らうとして、勝手の土間を水仕事場の方へ行くと、
『爲、手前はまだ風呂に這入るなや』と、婆アさんが云つた。『よその衆が這入らつしやるに。』
『…………』誰れが來てゐるのだらうと思つて、釜土の二つ据わつてるところから、まツしぐらに、いきなり茶のまの障子を明けると、ゐろりのはたに婆アさんとさし向つて、案外にも、茂平のうちの葬禮に見たハイカラがゐた。

『これが爲雄さんですか?』ハイカラはこちらを見て優しさうな笑ひをした。が、こちらは顏が眞ツ赤になつたやう思へて、なんにも云はず、ぴたりと障子をもとの通りに締めてしまつた。

『ひどうわるさでござんして、のう』と、婆アさんが云つてるのが聽えた。『この冬も、うさぎを取りそこなうて、隣りの猫を落しやんして、のう。』

『………』まだそんなことを忘れてゐないのかと、爲雄は馬屋のそばでわらじをぬぎながら、おもしろくまた嬉しく思つた。そして自分にもあの時の赤い血に茂平のうちの死んだがツかアのからだを腐らせた毒が思ひ合はされた。そして、女と云ふものも人間のやうな畜生のやうな物だから、そんな赤いきたない物がからだにあるのを隱す爲めに、その顏やからだにお白いなんて云ふ物を塗つてるのだらうか?それがをかしいやうでもあり、また何かなしに物珍らしいやうでもあつた。

うちのお德や、甚五兵衞のうちのお新や、その他・村ぢうの娘ツ子は皆、からだの色が白いので塗り物などはつけない。が、ほかの土地のものは色が黑いのであらう。して見ると、山にも畑にも一面に積もつた雪が春になれば解けてしまつて、土の地はだが出るやうに、かの女も湯に這入つて一旦洗ひ落せば、そのからだがすツかり黑くなるだらう。

それを見たかつたので、爲雄はうちへもあがらず、釜土のそばのわら打ち石のところのむしろの上で、誰れかの編みかけたわらじを自分で引き受けてゐた。

『ぢやア、遠慮なく頂戴しますよ』と云ふ聲がすると、その人はこちらの障子を明けて板の橋わたしへ下りて來た。爲雄は俄かに押し付けられるやうな氣にのぼせたが、ちよツとそれとなくその方をふり向くと、色取りのある綺麗な袖や裾がやわらかにぴら〳〵してゐた。そして黄いろいこなを吹いて咲く山百合の花のやうなにほひでもしてゐさうであつた。

馬屋の反對のがはには、やがて一杯になる筈の稻部屋がある。そのあひだが七八間もある土間の眞ン中を水仕事場まで板の橋がとほつてゐる。

『爲、先生さまにむしろを敷いてあげやんし』と、婆アさんも障子から顏を出して云つた。

『………』では、この村にも學校が建つのか知らん？　そしてその敎員に來たのだらうかと考へながら、むしろを稻部屋から出して來て、橋のそばで風呂場に近いところへ敷いた。風呂場は仕事場につゞいて馬屋のかどのはづれにあつた。ぷんと、初めてかいだいいにほひに自分の鼻がむづがゆくなつたので、それを横なでしてから、またわらじにかかつた。馬には馬のにほひがあるから、あれはあの人のそれであらうか？　それとも、都會の人がつけてゐると云ふ香水であらうかとも考へながら、よこ目でじろ〳〵見てゐた。

『爲ちやんも、もう、一人前の働らきをするツて、ね』と、今云はれたのを自慢に感じたが、さう云つた人へは直ぐにもあまへて見たかつたのである。が、耻かしいので、ちよツと笑つてくびをかしげ

たばかりで、返事はできなかつた。

朱のやうな色に何かこまかい模様のついた腰まき一つになつて、先生は風呂場へ這入つた。こちらには女のはだかは少しも珍らしくなかつたけれども、見馴れたべにやもんぱではないその色や模様がまた何となく變つてゐて、ゆかしかつた。が、再び出たかの女を見ると、その腰からうへのからだは矢ツ張り白くツて、別に村のものとの違ひはなかつた。

して見ると、そのからだを以つてあのお新などと同じやうに男に惚れてゐるだらう。少し憎らしくもなつた。然し、また、この綺麗な女に梅毒とか云ふおそろしい病氣をとツつかせはしたくなかつた。いや、どうせ塗りもしないでいい筈のお白いなどをわざ〳〵塗つてゐるのでは、そして梅毒死人を出した茂平のうちへ來てゐるのでは、もう、それにとツつかれてゐるのかも知れなかつた。が、またそんなことがないとすれば、その無いうちに、早く兄が嫁に貰ひでもすれば、丁度年も同じやうだし、儲け物になるのであるが――。

『ありがたうよ、爲ちやん』と云つて、先生はまた茶のまへあがつたが、直きに歸つて行つた。

『………』こちらは寂しくなつたやうな氣がして、『あれは高等科の先生かえ、尋常科の先生かえ』と聽いて見た。成らうことなら、高等科の、いや、それよりもツといいのでもあつて欲しかつた。そして自分の夜學かなんかで教へて貰ひたかつた。

『うんにや』と、婆アさんの返事は全くこちらの見當とは違つてゐた。『あれは〇〇さまの新宅のおんばさまだども、のう、少しわけがあらツしやつて、茂平とこの後見に來てゐさつしやりやんす。』

『………』〇〇さまと云へば、村上にあるのだが、爲雄自身でも聽けばほのかに尊敬の念を起す家がらであつた。そしてこの女は教員をしたこともあるから、これを先生さまと申し上げた方がいいと云ひ付けられた。茂平のうちは今やをんな子供ばかりで氣の毒だから、うちの風呂へ這入りに來て貰ふやうにした。そしてさうした以上は、まツさきにあの人を入れてやらねば濟まない。これからそのつもりでゐろと云ひつけられた。そして自分も少しも異存はなかつた。

稻刈りがいそがしくなつたので、鐵道工事の人夫には皆が行かなくなつてゐた。夜學も休みであつた。が、爲雄には、秋の風になびく黄がね色の稻葉のあひだにも、ひよツこりと先生のにツこり笑ふその眞正面の顏が見えて耻かしかつた。そして自分の運ぶ利がまが稻の根の何か堅い物に當つてかちツと云つた時、刄がかけたのではないかと、ついてるごみや泥をふき拂つて見たが、そのぴか／＼したところへも自分の姿は映らないで、優しい女のが見えたやうであつた。そしてまた誰れよりも早く田を引き上げて來て、風呂の世話をした。あまへて母のやうにふてることをおぼえただけに、仕事がいやになれば勝手によしても、父は何とも云はないやうになつてたから。すると、先生から、

『爲ちやん、少し水を下ださいな』と云はれることもあつた。

『ぬるうござんせんかえ』と、こちらからわざとのぞいて見たこともある。そして別に言葉をかけに行くついでもない時は、直ぐそのそとにあるはす田のふちをただ行つたり來たりして、風呂場の中に坐わつて顏を洗つてる女の尻から膝へかけてのふツくらした線を自分の目の前に思ひ浮べてゐた。そしてまた何も音がしないと、若しや湯にあがつて死んだのではないかとまで心配したりもしたのである。

世界にこの先生ほど慕はしい人はないと思へば思ふほど、その反對に、母親やお新の味かたばかりする妹のお德が憎ましかつた。そして爲雄がお德のことを

『このかま切り』と云つて投ぐり付けることが度々になつた。

『また、そんげなことして、可哀さうだに』と、母が叱るのなどは少しもこちらに利き目がなかつた。

『畜生！　毛だ物！　その目を見やがれ！』爲雄には、お德が母のかげからこちらをにらんでるのが猫のもがきに見えた。『手前らこそいたち落しにでもかかりやがれ！』

父親はゐなかつたが、婆アさんが隣りの部屋からゐろりのそばへ出て來て、

『なんで、いつも〳〵、さう兄弟いさかひしやんす』と云つた。『先生さまをお賴ん申してござらツしやい。先生さまによう云ふて聽かせて貰はなかつたら、いつまでもこのいさかひは直りやしやんせ

んがんね。』

『お新のことばツかり云はなかつたら――』爲雄はなほ斯う不平を漏らしてゐろりのそばを立ちあがつた。そして先生を自分が呼んで來ると云ふ嬉しさに、ひとり勇んで暗い夜みちへ出た。

自分の家のうらには蓮田や、ふき、みつ葉、茗荷などの生えてる庭があるが、そこから少しがけになつて、地盤が急に落ちてから、また山が高まつてゐる。そのあひだを二間ばかりの幅で流れる川の水である、今、がう〱と闇に音を立ててゐるのは。その他はしんとして、何ものも聽えなかつた。そして自分のうちから前向ふ、鎭守の森の山までに、高びくある田地をぽつ〱と散らばつて所在してゐる隣り〱の家々の火が、見え隱れして、微かに光つてる。

『なんにせい、お前は次男だすかい、あとは取れねいがんだに』と、おやぢのあんちやに云はれてから、爲雄はます〱自分のうちがいやになつて來たのだ。『をぢやをばなんざほうせん花の種だ、どこへ飛ぶやら分らない。ぱさ〱、しんかい、ほうい』と云ふ唄も覺えてゐた。このをぢとは次男で、をばとは次女のことだから。が、また、

『徴兵に取られるまではうちにゐねばならねや』と、父親に嚴しく云つて聽かせられたことをよんどころないことだとも思ひ出された。こんな寂しい村には住んでゐたくもないが、せめてあの先生さまの來てゐるのがただ一つの心だのみであつた。

『…………』自分が大きくなるまでゐて呉れるといいが――と思ひながら、もう、半丁ばかりのみちを下りて茂平のうちの長屋門へ來た。そこを這入つて玄關まで進むにも、この子供へ遊びに來た時のとは違つて、自分のかた苦しさをおぼえながら、『もう、あがらしやつたか、ねし』と聲をかけた。

『はい〳〵』の答へはかの女のであつた。

『…………』ぶる〳〵とからだが顫えた。が、これを土間に踏みこたへつつ、手燭の光りにうちの婆アさんの言葉を傳へたのである。

『ぢやア、待つてて頂戴、ね、一緒に行きますから』と云つて、かの女は奥へ這入つた。

『…………』爲雄は少しらくな氣になつて、あとに殘つた闇の中でぺろりと舌を出した。そのうちに今度は弓張り提燈の光りが勝手の方から出て來た。それがさきに立つて、いろ〳〵しやべりながら行くのだけれども、こちらは餘りにのぼせをおぼえてゐて、自分が何を答へてゐるのか自分でも分らなかつた。そして自分は別に古四王さまの山奥におほ猿がゐて、村の女をひとり奪つて行き、人間がするやうにその女を可愛がつてゐたと云ふむかし話を、自分にも實際に行なつて見たいやうに考へてゐた。

四

父親も歸つてゐて、書物を讀むことを好きな兄のほかはすべて、ランプの光りにゐろりを取り卷いてゐた。ここで、本人なる嘉一郎がお新をいやだと云ふことから、うちのものが二つに引き分れて、兄弟、と云つても、殊に爲雄とお德とのあひだに喧嘩が絶えないことが、婆アさんの口から話された。

『それは、うちのがかが無理にお新を貰へ、貰へと云ひやんすのも惡いのでござりやんすども』と、父親は云ひ添へた。

『まアもあま過ぎるだが、のう』と、母親は少しその聲にかどを立てた。『さうだが、おれもこの頃ではさう云はなかつたんだども――』

『まあ、結婚のことは本人同士にまかせて置かなきやアなりません、わ。』先生はその云ふことも先生さまらしかつた。

『本人が進まないのを、親が無理に押し付けたツて、どうせうまくはまとまりませんから、ね。』

『全くでござりやんすよ』と、婆アさんは先生の機嫌を取つた。

『それに、爲ちやんでも德ちやんでも、なにも、にイさんのことで自分たちが喧嘩をするには及びません。學校でもをそはつて來たでしよう、他人でもよくしなければなりませんのに、まして兄弟同士は』と云ふやうなことが云はれた。

『………』爲雄はその教へを決しておろそかには聽かなかつた。少くとも、自分の慕はしい先生の目の前では。然し斯うしてまた先生を呼んで來ることができるなら、ただこれだけの爲めにもまたお德と喧嘩してやらうかとも考へた。

現に、その二三日後、また嘩喧が起つた。これは爲雄がお新から菓子を貰つたことをお德が見付けて、母親にいツつけたのがはじまりであつた。

『爲はお新をいつも〳〵かたきのやうにしてゐるがんだに、まだそんげなことするんかえ？』

『お德もしてゐるがんね』と、爲雄は母親にだが負けてはゐなかつた。

『お德はまだ子供だすかい。』

『よし來た！　そんだら斯うやつておとなにしてやらうか』と、また一つ投ぐり付けて泣かせた。これが望み通りにまた、先生が風呂を貰ひに來た時の、こちらに對する優しい敎訓の言葉となつた。そして最後には、

『わたしがゐるあひだは、ね、決して亂暴をしちやアいけませんよ。その代り、なんでも云ふことがあればわたしにお云ひなさい。さうしたら、わたしがいいことはいいと、また惡いことは惡いと解きさばいてあげますから。』

『………』こちらは、然し、その綺麗な顏さへ見てゐられれば、それでいいのであつた。が、いつ

までこの村にゐるのか、それを思ふと、自分の心がじツとしてゐられないこともあるやうになつた。
で、或晩、兄もゐろりのそばへ來てゐた時、渠に向つて、
『あんにや、先生さまはいつまでゐさつしやるんだか、のう』と聽いて見た。
『おれが知つてるかえ？』
この時、母親の話で分つたのだが、かの女は村上の近在にゐるをつとと氣が合はないので、どうせ別れるつもりでゐるのだ。そしてそのをつとは少し因業で、かの女が村上で學校へ勤めてゐた留守に來て、家の物を一切勝手放題に運んで行つた。
『さんだら、あんにやが貰つたらえい、のうし』と、爲雄は思はず口に出た。一つには、かの女をむごたらしくした人を憎んだ爲めだが、今一つには、さうしたら、いつまでも自分のゐる土地を離れて行くまいと思へた。
『もツたいねい、馬鹿云はつしやい』と、婆アさんは叱つた。
『お新のことだらあくたいばツかりついて！』母親はまたこんな方へ持つて行つた。
『爲は先生さま好きなんだらう、のう』と、父親はただ笑つてゐた。
『…………』爲雄はそれに釣り込まれて、くびをかしげながらにが笑ひをした。そして自分の心を云ひ當てられたのだけれども、惡い氣持ちはしなかつた。

そして誰れにでも自分のあまへが無事にとほるつもりで、田に出ても、稻刈りの手をやすめ勝ちでたばこを吸ふことばかり多かつた。それを或日兄がり叱り付けたので、そのまま立ち去りかけると、父親が途中で見付けて、

『うちへ行ぐなら、積み肥の方をせいよ』と云つた。

『…………』爲雄はそれに頓着しないでうちへ歸つた。そしてどんたに働らいても、うちの仕事は兄の爲めにこそなれ、自分の爲めでないやうに思へた。例の『をぢやをばなんざ』の唄どほりに――。

庭に殘してある梨の實をわざと取つて喰つたり、しぶ柿の赤くなつたうちにどれか味はへるのがないか知らんと、それによぢ登つて取つてはかじり、取つてはかじりして見たりした。そして皆がひるめしに歸つて來た時には、春の日のやうにほか〳〵する光りを浴びて、まだわらじをはいたまま、先生のことを考へながら、柴ニヨにもたれてたばこを吸つてゐた。

『つみ肥をしたかえ』と、兄は當り前の言葉になつてゐた。

『…………』こちらは返事もしないで、兄が土間を馬屋の方へ這入つたのに卑しめたやうな想像を向けてゐた。

するとヽ兄はやがてこちらへ飛んで來て、

『なんで云ふことしねいで置くかえ』と怒鳴つた。

『……』こちらはおとなしい兄の怒鳴りなんか恐れもしないで答へた、『おれは鐵道人夫する方がなんぼえいがんだか？　うちのこと働らいたて、田も家もおら物でねいだに。』

『なんだア！』兄はいきなりそのかついでゐた鍬を以つてこちらを投ぐり付けた。

『わツ』と、爲雄は聲を擧げてよけようとしたが、田に合はなかつた。ぐわんと云つた自分のあたまを兩手で押さへて、うちへ走り込み、よごれたわらじのまま、茶のまを奥の婆々さの部屋へ行つてころげてしまつた。

『ひどいことした、のう、あんにやは』と、婆アさんを初め、皆も來て助けて吳れたけれども、こちらは痛さと悔しさとにただおい〳〵と泣いてるばかりであつた。

そのうちに、先生がまた賴まれて來て、いろ〳〵の優しい言葉をかけて吳れたので、渠もやツと自分から泣きをとどめたが、まだ痛むあたまを自分でそツとさわつて見ると、自分のあたまの右のかどにぷツくりと山ができてゐた。兄がこんなにきついことをするとは思はなかつたが、先生が來たのを見てどこかへ姿を隱したと云ふから、矢ツ張り、よわい兄だと卑しむことができた。

五

こけ（木の子）の出るさかりになつてゐた。稻の刈り入れもいそがしいけれども、こけも取つて置

かないでは、冬から春へかけての漬け物に不足するので、一日を例年の通り爲雄は兄と共に山へこけ取りに行くことを命じられた。

これを聽いた先生が物好きにもまた行つて見たいと云ひ出したので、翌日、爲雄が自分ひとりで案内することになつた。自分がかの女を好きなので、父もそれを知つて、兄には命じないで、自分をかの女の案内者にしたのだらうと考へると、少しはおほびらな氣持になつて嬉しかつた。

『さア、行かツしやれやんすかえ』と云つて、こちらは草刈り籠をしよつて先生を誘つた。

『ぢやア、つれてツて下さいよ。』かの女は大きなびくを提げて、草履をはき、裾をはしよつて、朱いろの裾を出した。

『…………』こちらは、猿に限らず、人間も赤い物を好きであるやうに思へた。ふたりなら、山猫をもおそろしくないから、このまま山の奥へ這入つて、毛だ物をでも敎へる敎員をふたりでしてもいい。二度と再びうちへ歸らないでゐたかつた。

爲雄の家や茂平の家の前に當る稻田のくろを十丁ばかり行くと、墓場のあるところからさして來た山の登りになる。自分らのうちは森のえだ葉に隱れて見えない。山は一面に松ばやしで、そのあひだに村のものらが柴に刈る山ざくら、日がん櫻、椿、カヤの木、ホウ、どんぐりの成るカシなどが生えてゐる。

『これはやぶからぢ、ね――蘭も澤山生えてゐる、わ。』
『………』さすが、先生だけに、山のことも詳しいと思へた。
『あの山ぶだうを少し取つて頂戴な』と云はれた時には、然し、どうせ酸ツぱいのだから、取つてやらなかつた。『ぢやア、あのあけびを』とまた云はれた。
『あツちのかえ?』爲雄は少しわき道へそれて行つて、一番熟してゐさうなその實を二つ取つて來た。皮がはじけて、そのなかみが黑いたねと共にはみ出してゐた。駄菓子ほどにあまいのはこれである。
二つとも先生に渡すと、かの女はそれを喰ひつつ進んだので、この人だツてさう自分らと違つた種類の人間ではないと云ふ親しみまでも感じられた。
段々に熊笹が多くなつて、じゆんさいの取れる小池へ來た。それから、またかもなどがよく下りる、周圍が十丁あると云ふつつみへ達した。
『大きなお池です、ね、この水はどうするの?』
『日でりの時に田へ引きやんす。』
このあたりで爲雄は自分自身の草刈り仕事をしてゐた。向ふは初だけぐらゐを取ればいいのだらうと思つて。すると、かの女は
『もツと、シメジやネヅミ持タセなんか取れるところへ行つて頂戴よ』とねだつた。

『…………』こちらはわざと遠慮して成るべく近いところをえらんだのだが、自分としてはどこまでも行くつもりであつた。『そんだら、古四王さまの奥へ行ぎやんしよう。』

つつみの右手を行つて、石段を二百段も登つた。が、先生は女のくせにこちらが思つたよりも足が達者だ。神社のあたりは赤松ばかり多いのだが、ここから海の方を見渡すと、たツた三里しかないと云ふ瀬良温泉は却つて見えないが、右には、先生の生まれたと云ふ新潟市が少し青くなつて見える。左りには、佐渡が島が微かに浮んでゐる。その兩方の中間にあるのは、鯛の名所なる粟生ゲ島だ。

『本當にいいけしき、ね』と、かの女はびくを提げたまゝ、暫らくその方へ見とれてゐた。

『…………』爲雄は、かの女の心にして若し新潟まで飛んで行くなら、その留守のあひだを、かの女のからだだけを抱いて、毛だ物などの襲ひから番をしてゐてやるがと考へた。そして同時にかの女がうちの風呂に這入つてるところをも思ひ浮べた。

なほ奥の方へ登つて行くと、松の枝がトンネルのやうに自分らのうへを重なり合つて、うす暗いほどであつた。その代り、ネヅミ持タセやヅランボウも澤山あつた。

『ある、わ！　ある、わ、こんなに澤山！』かの女はおほ喜びをしてゐるあひだ、こちらは別に草を刈つてゐた。

『…………』いつまでもこの村にゐて呉れいと云ふ意味を、何か一と言でもいいから、こんな時にか

の女へ云ひたいのだが、さう思へば思ふほど口には出し得なかつた。そして時々どうしてゐるかと、かの女の方へくびを上げてやぶをすかして見るのだが、近づいて行くことができなかつた。さうだ、朱の色ばかりがます／＼心に滲みて來て！

やがて、

一杯になつたから、もう、歸りましようか』と云ふ聲が聽えた。

『…………』こちらはうまい物を喰つてゐた夢でも俄かにさめたやうな氣持ちになつた。一旦は聲に應じて直ぐ籠をしよつて見たけれども、餘りあつけなく、情けなく感じた。かの女を好きだと云ふことが親にも知れてる以上は、このままうちへ歸らないでも分つてることだらう。さうだ、少くとも日の暮れるまでは斯うしてゐたいのが、失望の餘り、ふと、この當座のひようきんな眞似になつて、籠を脊にしたまま、手ぢかの松の大きな根もとなる熊笹のかげへ自分の身を隱した。そして默つて、向ふの樣子をうかがつてゐた。自分でいよ／＼情けないやうな涙ごころを胸に溢れさせてだ。

『爲雄！　爲雄！　爲雄――爲雄！』かの女はあわただしくこちらの名を呼んだ。一と聲毎に調子が高くなつてゐた。そしてこちらのあたまのあたりを赤い物がちら／＼してあちらへ行つたり、こちらへ來たりしてゐる。この時、初めて自分はかの女を自分に可愛いものだと思つた。

が、それッ切り聲も絶え、色も見えなくなつた。道でもないところへ驅け込んでしまつたらおほど

とだと恐れて、こちらもあわてて山ぶだうのまとひ付いてゐる灌木のあひだをぢかに分け登り、ちよツとくびを出して見ると、かの女はまたうへの方からこちらへ目の色を變へて急いで來るのであつたが、こちらの顏に氣が付かないと見え、丁度こちらの鼻さきのところで、また、

『爲雄』とわめいた。

『…………』思はずくす〳〵と笑つた。

『おう、ここにゐたの！』

『…………』こちらはかの女の安心したやうすを見ると、また、にが笑ひしかできなかつた。そして今一度今のことをさせて見たい氣持ちをしながら、かの女の立つてる地盤へ出た。

『人が惡いの、ね、わざと隱れたりして！　わたしびツくりして、どうしようと思つた、わ。』かの女はまだおこつてるやうであつた。が、直ぐその胸が落ち付いたかしてまたもとの通りに優しくなつて、びくの中のこけを取り出して見せたりした。

が、それからと云ふもの、先生が爲雄に對して以前のやうな子供扱ひをしなくなつた。そしてそれだけ、爲雄自身に取つてはかの女が冷淡になつたやうに思へた。たとへば、自分が見てゐると、かの女が風呂に這入るにも、そのからだを見せなくなつた。

『…………』こちらの思つてることが何となく分つて、それがいけなかつたのか知らん！　そしてそ

の爲めに自分を遠ざけるのかと思ふと、山の奥が今度はかの女の心になつて、どこまでもそれを突きとめたくなつた。そしてまた兄が嫁を探してゐると云ふのも、つまり、こんな心持ちを云ふのではないかと疑ひ出して來た。

婆アさんのいびきが大きい爲めに目をさました時などにも、直ぐかの女の山であわてた姿が目の前に浮んで、自分のからだぢうの力がただ一方にかた向いて行くのをおぼえるやうになつた。

そのうちに、いそがしい稻刈りも半ばはすんで、村の若い衆は少しはらくに夜なかをほつき歩く時が來た。或晩、さう云ふものが四五名正左衞門の店に寄り合つてるところへ行つてゐると。

『よそのものも珍らしいだすかい、のう』と云つて、茂平のうちへ夜這ひに行く相談が初まつた。おやぢのうちのあんちやもゐたが、爲雄とその二つしたの庄吉と云ふ子が先づうちのやうすを檢分する役目に當てられた。

いやと云へば、投ぐられるにきまつてるし、自分としても奥ゆかしい先生さまの寢てゐるところが見たかつたししたので、他の相ひ手と共に承知をした。どうせ、自分らはかの女がどんな部屋にゐて、どう云ふ寢すがたであるかと云ふことを突きとめて來るだけであつて、そのあとは皆としうへの若い衆が順番に這入つて行くわけだが――。

皆と一緒に爲雄も茂平のうちの裏庭へ忍び込んだ。そして馬屋――今は馬がゐないけれども――の

後ろに、もと飼つてゐた犬の出入り口がついてることは兼て自分も知つてたので、そこの板をはりがねにかけて引き剝がして貰つた。そして自分らふたりが先づ土間へ這入り込んだのである。それから、茶のまをあがつて見ると、自分のうちなら自分と婆々さとが寢る部屋に當るところは暗かつた。が、自分の父母とお德とが寢るに當る部屋にはランプのあかりがさしてゐて、而も女のハイカラあたまだけが中からぼうツとその障子へ大きく現はれた。

先生のには違ひなかつたが、ぼうツと映つたのでお化けのおろしさにも見えたところへ持つて來て、それが

『誰れだ』と怒鳴つた。

『………』こちらには確かに先生の聲であつたが、たださへ怖しかつたところへそのしツかりしたひびきがこちらの腰をぐら〳〵とふるはしめた。そしてゐたたまらなくなつて、爲雄は自分から眞ツさきに逃げ出した。

『駄目だか、なア』と、そこに待つてゐたうちのひとりが失望さうに云つた。

『村のもんだら承知しねいがんだが』と、また別なのが、小さい聲で。

そしてここが行かなかつたらと前以つてきまつてた第二の方へ皆が向ふことになつたが、爲雄だけは直ぐ許されて自分のうちへ歸つた。皆は頰かぶりをしてゐたけれども、自分だけは鳥打ち帽であつ

たのを落して來たのである。

『あす、また貰ひに行げや』と、年うへのものは平氣で云つて呉れた。そして村のむかしからの習はしを――如何によそのものにだツて――さう遠慮して耻かしがらないでもいいとあつたけれども、自分は矢張り耻かしくツてそんな氣になれなかつた。

その翌日は、帽子なしにそとの川をしてゐた。そして風呂の立つ頃には、先生に顔を見られるのをさける爲めに、わざとうちにゐなかつた。が、それから歸つて見ると、自分の帽子がちやんと屆いてゐた。そして父親から、

『馬鹿！　先生さまとこなんかへ夜這ひに行ぐ馬鹿があるかえ』と、こツぴどく叱られた。

『…………』もう、かの女とは顔も合はせられないと思ふと、爲雄は自分にそれだけの穴が明いたやうな寂しさをおぼえて來た。かの女がこの村のこんな惡い風を知つたら、きツと、ここを逃げて行つてしまうだらうと、思へた。そして若しさうなると、かの女に代るものがあつて、この寂しい穴をうめて貰はないでは、自分もこの村にゐられないと云ふ氣になつた。

二三日は引きつづいて年うへのものらについて自分から一緒に夜々を寄り合ひ場所やその他へほつき歩いて見た。が、別にわけ前にあづかるのでもないから、詰らなかつた。

六

ところが、先生に失敗した連中はまだ珍らしみを追つて見たいからと云つて、皆申し合はせて、再び鐵道工事の人夫になり、その儲けを合はせて中條へ女郎買ひに行くことになつた。そして爲雄も同じ仲間であつた。

六里の道をきんロの卷きたばこなどを吸ひながら出かけて行つたのだが、爲雄が先づ驚いたのは家のつくりが自分らのとはまるで違つてることをだ。馬屋もない。稻部屋もない。そしてどれも同じやうなかたちで、同じやうな綺麗な部屋が下にも二階にもつらなつてゐる。その二階の一つへ皆が集まつて酒を飲んだ。女がこちらのあたま數だけ出て來てぺちや〱しやべるのだが、同じをなごでも上品な先生さまが話すことなどとは比べ物にならなかつた。

馬鹿げたやうな、詰らないやうな氣がながしら、さて、皆と別々になつて見ると、今度はまたどうしていいのか分らなかつた。寢どこは取つてあるけれども、年ごろは矢張り先生ほどだらうと思へた女が、こちらの勞れてゐるのを見ても、寢ろとも云はなかつた。

『まア、お茶でもお飲みやんし』と云つて、どうして子供のくせにこんなところへ來たかと責めた。そして皆よりさきへ歸れるなら、歸つた方がいいだらうと。

『……』爲雄はただ先生の代りになるものが欲しかつたのだが、さう云はれて見ると、矢ツ張り、かの女に對すると同じやうな耻かしさとおそれとをばかり感じて、座にゐたたまらなくなつた。

そして女がこの部屋で圓い木の火鉢にあかがねの藥罐がかかつてるところをどこかへ出て行つた留守が幸ひであつた。渠は、これまでに見たこともない、やわらかさうな、うす赤いろの紙の一と疊みが誰れの寢るのだか知れない枕もとにあるのを見つけて、これを自分のかた手に攫むが早いか、一目散にそこを逃げ出してしまつた。一番仲のいいおやぢのあんちやにも告げないで。そして獨りで、夜みちを自分の村へ歸つて來た。

持つて來た紙は大切に自分の持ち本のあいだへ隱して置いて、向ふの女にしたお白いのにほひをまでも時々かいで見ようとした。

が、そのうちに、中條へ行つたことが親にも知れて、

『がにくそもまだ取れねいくせに、よせや』と叱られた。

『……』爲雄は仕かたがないので、『向ふの人もそんげに云ふだすかい、直ツき、なんにもしねいで歸つて來たども』と白狀した。が、妹などには時々こツそりうすら赤い紙を出して見せて、いいにほひがするよと自慢した。

『あんにやは女郎の鼻がみを以つて。』これが妹から母親に聽え、それからまた先生さまにも傳はつた

ので、こちらはかの女からいやな目つきでじろりと笑はれるやうになつた。

が、それだけこちらのおとなになつて來たことを向ふに知らせたのが嬉しかつた。そしてこれを笠に着て行つて、或日、かの女がうちの爐ばたにゐる時、以前よりは少し落ち付いた心持ちで、笑ひながら、

『先生さま、もちツとこの村にいらして下さえんしや』とまで云へるやうになつた。

――（大正九年二月）――

美人

一

『旦那、どうです、ね』と、おかみは特別に意氣込みあるやうすをして來て告げた、『一つ別におあつらひ向きがのございますが？』

『と云ふと――？』待ちあぐんでた安達は直ぐ心が動いたが、體裁上なんだかさうたやすくは見せたくなかつた。この大分まへから『今一度以前のを呼んで見て呉れ』と註文してこの待ち合ひの一室にぼんやりとたばこを吹かしつつ時をすごしてゐたのだ。

『あれがお氣に召しましたか』と云ふおかみの冷かしをばかり思ひ出して見ながら。

あぐらをかいて、赤がねの落し付き、桐のかく火鉢にあたりながら、時々首を延ばして障子の腰がらすからそとを見ると、狹い庭の石燈籠にもまだきのふの雪が消えないであつた。

物好きにも、わざと、こんな日を選んで來たのだが――無論、道はまだ雪どけできたなかつたが、けさから晴れてる日曜日ではあつた。

『御執心ですから、な』と、こちらも先きまはりの合ひ槌を打つて置いた。が、斯う首尾が長引くのでは向ふに何かさしつかへがあるに違ひないと思へた。

すると、一時間半ばかり空しく待たせてからの、この別な話であつた。

『これは實際旦那の儲け物で――うちへ來るお花の師匠ですが、ね。』

『…………』して見ると、今しがた便所へ行つた時に行き合つたのではなからうか？　可なり立派な身なりをしたいい女で、短い廊下をきまり惡さうにだが、お辭儀だけはして行つたツけ。

『どんなしろうと女でもおぼし召しのおありのがございますなら、おツしやつて見て下さい。大抵は、わたしが物にしてお見せ申しますから』と、その自分のすご腕を自慢してゐるおかみのゐるところである。

『ぢやア、內閣〇〇大臣の娘を！』

『おあいにくさま、おありになりませんから、ね。』

『ぢやア、おれンところの社長の細君は？』

『御冗談は別としまして――多少は向ふに弱みがあつて、それにつけ込むことができますれば、わたしがたとへ見ず知らずの人でございましても――』

『…………』無論、冗談には違ひない。社長も時々一緒にここへやつて來た。その勘定をおかみが料

理屋の書き付け見たやうに見せて取りに行つた時、社長の細君を見てその美人なのに驚いて來たのだ。が、兎に角、さう云ふことを云つてるおかみのところへ來る女だから、まだ誰れの手もついてゐないと云ふことは信じられなかつた。而もそれが美人であるから。然し、また、それだけこちらにも野心は燃えて來た。殊に、待つてる方のがどうせ來ないかも知れなかつたので、『ぢやア、』おもて向きは進まぬやうすでだが、『それも面白からうよ』と答へた。

『何を特別におごつて下さいますのよ、旦那、あなたにやア勿體ないほどの掘り出し物だ、わ。』

『馬鹿云へ。おれさまこそこんなところへ來てやるだけが勿體ねいほどだア、な！』

二十二三の束髮で、どちらかと云へば上品に鼻すぢのとほつて、なんでも赤と黃色との五分ばかりの立て縞八たんの衣物につゐの羽織りを着た、すらりとした女を、今見た通りに思ひ浮べながら、火鉢をかかへて自分ひとりで悅に入つてると、果してその女がしも手のふすまをしとやかに明けて這入つて來た。

じろりとこちらを見ると直ぐ、ぺたりとその場へ坐わつてお辭儀をした。顏を眞ツ赤にしてゐるところを見ると、まださう擦れてはゐないしろ物のやうであつた。

『こツちへいらツしやい、どうせ遠慮には及ばないから。』

『………』女は疊へ左りの手の指さきを當てて左りのかた膝から立ちかけた時、まだ後ろが氣にな

るかのやうに締まつたふすまの方をぢツと横向きに見た。それから、つツと立つてしまうと、『へツ』と云ふと同時にくびをすくめて、こちらへまだ耻かしさうな笑ひを見せながら、近づいて來た。
『隨分待たせやがつたぢやアねいか?』もう、渠はこの女が自分の物になつたと同様の安心と遠慮なさとの氣ぶんに包まれてゐたのである。
すると、かの女も――納得させられてるのだから、往生してか――割り合にうち解けた言葉であつた、
『それはお人が違ふでしよう。』
『………』成るほど、さう云はれて見ると、初めはこの女を待つてゐたのではなかつた。嫌はれたわけでもなからうが、向ふが何かのさし支へで來ないのを、なんだか少し、侮辱されたのだと思はれはしないかと、きまり惡くないこともなかつた。それを一つには自分でうち消す爲め、また一つにはこの女の面目を立ててやる爲めに、『誰れだツていいの、さ』と聽かせた。
『とのがたツて、そんなに薄情なものでしようか? わたし情けなくなつてしまひます、わ。』
『何が情けねい?』
『だツて、一どお會ひしてそれツ切りになつてしまうものなら――。』
『なアに』と、渠は自分には以前の來ない女に對する反感も手つだつてゐた、『こツちが呼んでやるの

に來ないから仕かたがない、さ。』

『そりやア、然し、可哀さうだ、わ。たまにやア、どんな用事ができないとも限りませんから。』

『………』こちらはそんな同類が相ひ同情する言葉をただてれ隱しの云ひ草だと見たので、憎まれ口になつて、『さう、さ。それも矢ツ張りその商賣上の御用事だらう。』

『わたしは、然し』と、かの女は黑と赤とみどりとの雲わくにところどころ錦糸で刺繡した襟をきちんと正して、『まだくろうとぢやアないのよ。』黑繻子と羽二重の藤色しぼりとの帶に、赤の紋ちりめんの帶あげ、竹色の帶どめには赤銅の大黑がついてゐる。

『そりやア、さうだらう――色が白いはうだから』と、こちらは洒落を云つたつもりで、自分の兩手を以つて先づかの女の左りの手を取つた。白とむらさきとで編んだ羽織りのほそ紐がかの女のむな元でこちらへ引けた。が、自分は右の手のひらでかの女の手の甲を火鉢の上でさすつて見ながら、きやしやな骨ぐみにだがまだ彈力のつよい肉づきがして、この種の女にありがちな皮膚のやつれを示めしてゐないのが賴母しかつた。

渠はそれとなくかの女の一方の手を辿つて見た。

『わたし、ぐりぐりなんかありませんよ――梅毒患者ぢやアないから』とでも直ぐ云ふやつによく出くわすものだが、この女はまだそんな型にまではまつて行つてるやうすは少しもなかつた。

『何をするのよ、くすぐつたいぢやアないの?』

『………』渠は笑つて手を離したが、かの女の扁挑腺のつづきに故障がなかつたのを大丈夫に思ひながら、『なアに、ただお前の健康診斷を先づやつて見たの、さ』と答へた。

『ぢやア、あなたはお醫者?』

『冗談ぢやアねい――人がらを見てくれ』と、笑ひながら、『醫者や坊主ぢやアねいから。』

『おかみさんは會社の社長さんだと云つた、わ。』

『まア、そんなもの、さ。』いや、社長の次ぎだともわざ〳〵說明するまでもなかつた。『少くとも、お前をただですツぽかすやうなことアしねいから』と、眞似てる江戶ツ子口調をわざとにもはツきりひびかせて使つて、『安心してゐて貰ひてい。』

『わたし、そんな心配はしない、わ』と、女も寂しさうにただ笑つてゐる。

『お花の師匠とア本當か?』

『わたしも、まア、そんなものよ。心配しないでゐて貰ひてい、わ。』

『おい、おい、人並みなことを云ふな!』

『ほほ! わたしだツて人間ですもの。』

『確かに畜生ぢやアねいが――。』

かの女は生け花の師匠が勸められてつい淫を賣つたと云ふことでとほしてしまつた。こちらはまたかの女も半ばは物好きでおかみの勸めに乘つたものとしか考へられなかつた。

＊　　＊　　＊

以前の女はお雪と云つたが、お雪はくらうとして垢ぬけがしてゐるところがこちらの氣に入つたのであつた。が、このお鶴と云ふのは、兎に角、その垢ぬけかたもまだ實際にしらうとらしくツて、可哀さうなほど本氣になるのをこちらは一層の興味におぼえた。

『どうだ、どこかで晩めしでもたべて別れることにしようか？』

『さうです、ね、おつき合ひしてもいい、わ。』もう、馴れてしまつた女に遠慮がちなところはなかつた。その前から、『一度ツ切りぢやア詰らないから、また來て頂戴よ』とも云つてゐたのだ。『電話もありますから、直ぐ通じます。』

『どこだい、お前のうちは？』

『それは云へませんの。然し、いつかまた申し上げてもいい時が來るかも知れません、わ。』

『お氣に召し初めましたら、な。』

『そりやア、こツちから云ふべきことぢやアございませんか？』

『…………』障子がらすのそとには、もう、燈籠の雪ばかりがはツきりし初める時刻になつてゐた。

風は寒さうだけれども、折角一緒にも行かうと云ふものを、このまゝ別れるのは知慧もなさ過ぎるやうな、そして何だか名ごり惜しくもあるやうな氣がした。いよ〳〵決心して、女に手を打たせ、出て來た女中に『自動車を一臺』と命じた。

銀座の或カフエへ行つたのだが、まだ時間が早かつたので、ここの客は少なかつた。二階の一室へあがつて、渠は自分としてはいつもよりも幅を利かせて見せた。

『カフエと云ふものはわたし、ささ屋へ一二度行つた切りですが――。』

『それも色をとことだらう、な?』

『そんなんぢやアないのよ』と、かの女は曖昧な笑ひを見せてゐた。そして『侯爵のお目かけだけあつて、あすこのおかみは美人です、わ。』

『どうだ、おれもお前の爲めにああ云ふ店を持たせてやらうか?』こちらはこの女さへ若しその氣にならば、その位のことはしてやつてもいいと考へ付いてゐた。いたづらに逢ふ女は度々あつても、この女ほどに上品にまた奥ゆかしく自分の興味を引くものは曾てなかつたから。そして、たとへば、自分が初めて女房を持つたその以前に、どこかで出逢つてこれなら貰つてもいいがと云ふ感じを得たことのある女に對した時の戀ごころのやうなものさへも加はつてゐた。

『どうぞ、ね。然し、そんなことまでにならないでも、またきツと來て頂戴、ね』と、かの女は念を

押した。

話が音樂のことに移つた時、三味線は好きだけれどもできないと云つた。が、六三郎や呂昇のものをも直接に聽いて知つてるやうすであつた。

書物は必要上讀むと云ふのだが、

『まさか、お花の指南本ばかりぢやアあるめいから――寂しさでもまぎらす小說本かい』とからかつて見ると、

『そんな意氣なんぢやアない、わ』とばかりであつた。

そして最も水くさいことには、

『一體、お前はどこにゐるの、さ』と再び尋ねて見ても、矢ツ張り、ただ、

『當分は申し上げられませんの』と答へた。

『…………』ぢやア、勝手にしろと云はないばかりの心になつたが、こちらはさうも見せつけないで、おもて向きは機嫌よく別れた。

二

その後、自分の行く會社に事件が起つて多忙であつたり、銃獵のつき合ひに行つたりして、十日ば

かりは物好きの遊びに無沙汰であつた。

　そこへ丁度或友人から手紙が來て、暫らく音信不通をして濟まなかつたが、それは不如意の爲めであつたから許して呉れ。今では相當の位置にあり付き、今度また結婚もした。で、妻をも紹介したいから、〇日の〇時に晩餐をたべに來て呉れとのことであつた。

　安達が行つて見ると、友人は〇〇倶樂部の幹事になつたからと云つて、その必要上の電話まで持つてゐた。家も成るほど相當なところであつた。が、ただ一つ渠に確かに不相當なのは細君で、渠が不をとこの貧乏育ちであるくせに、或地方でこちらもちよツと知つてた代議士をも出したことのある財產家の分家出の、うらやましいほどの美人であつた。

　それが而もこちらがどこかで見たことのある女によく似てゐるのだが、實際に誰れに似てゐるのかちよツと自分の記憶から呼び出すことができなかつた。

　しろうとの人であつたか、それともくろうとの女かと、これをばかり私かにもどかしがりながら、自分はこの細君が出てまた引ツ込んだあとまでも、友人と何げないふりをして談話をまじへてゐた。そのうちにお膳が出て、細君の妹だと云はれる婦人が前かけをして給仕に坐わつた。

　すると、意外にも、それがこないだ待ち合ひで出逢つたお鶴さんではないか？　誰れかに似てゐたのも尤もだが、まさか、淫賣をんなの姉を友人が細君にしてゐるのだとは考へ付かなかつた。

女が

『電話もあります』と云つたのは事實に違つてはゐないが、これだから無論その住まひを白狀し切れなかつたのだらう。必らずしも水くさい爲めではなかつた。

それにしても、兄弟が承知のうへでか？まさか！して見ると、矢ツ張り、お鶴さんも自身の物好きから、兄弟には內證でやつたことか？それとも、また、別に何か込み入つた事情があるのか？

これをこツそり聽いて見て、事情によればかの女を救ひ出すつもりで、かねの上のことなら、改めて相談を受けてもいいと思つた。が、ふたりツ切りでさし向ひになる折がなか〳〵見つからなかつた。

こちらは酒も飮まないので直ぐめしにして貰つたが、

『どうも濟みません』などと、かの女に何げないふりをして見せながら、樣子を見てゐると、かの女の方も初めから何も云つて吳れるなと云ふやうな意味をその目つきに見せてゐたのである。

『これもいづれどこかへかた付けなけりやアならない、云はば、まア、女の賣り物だから』と、友人は冗談まじりの本氣であつた。『いい口があつたら周旋して吳れ給へ。產婆の學校は卒業してゐて、今でもその方の仕事をやつてるけれど、そんなことをいつまでやつてたツて詰らないと思ふから。』

『は、はア――產婆をやつておいでですか？』安達はそれをも意外であつたから、暗にかの女のうそ

つきを責めてやるつもりで斯うとぼけて見せた。が、その口のしたから直ぐ、かの女が意氣なんぢやアないが必要上讀むと云つた書物も多分この仕事に關するもののことであつたらうと思ひ出せた。

馬鹿々々しい！せめては小説とか詩とか云ふやうな、趣味のある本を讀んでるのなら、女としてはふさはしくもありちよツと高尚でもあると思へたのだが、それ、子宮がどうの、そら、骨盤が斯うのなどとばかり書いてある本では、全く興ざめてしまう職業婦人のことではないか？そしてこちらは自分としてはどんな職業婦人をも今日ではまだ淫賣と同樣に卑しんでるのだ。と云ふのは、やがては、きツと、誰れか都合のいい男にくツついてその女房なり目かけになりなるのであるから。

この時、然し、

『いけ花も致しますが――。』かの女は赤い顏をして申しわけのやうに答へた。

『さうだ』と、友人はまた云ひ添へて、『こいつはいけ花も奧ゆるしとかまで取つてゐるのです。』

『ぢやア、なか／＼慾張つてゐます、ね――』と云つたには、花の師匠や産婆のうへにまた淫賣をするとはと云ふ意味をも利かせたのだ。

『ほ、ほ！』かの女は然し無邪氣さうなあまへ笑ひになつて、『でも、世間はまだをんなを男のやうにはもて爲して呉れませんもの！』

『そんなことで直ぐ男女同權論を持ち出すのだからたまりません。』友人は話をさう云ふ方へ持つて行

つた。

『いや、同權論もいいでしよう、若しをんなが男を――まかり間ちがやア――養つても呉れるつもりなら』などと云ふお座なりを云つて、安達はそれでも自分としてのかの女に對する疑問やら愛着やらが起つた胸の動悸を押し靜めてゐた。

かの女はあらい新大島の衣物に黑えりをつけて、襦袢の襟には無地の藤いろちりめんを。羽織りなしで、赤や青や黃色の瀧じまお召しの前かけをして、友仙羽二重のうらを見せてゐる。

が、こちらにはそんないろ綾をとほり越して、今もかの女の袖にちら付いてる長襦袢の色と姿とばかりが思ひ出されてゐた。

『これから可愛がつて下さいよ。』

『ああ。』

『きツと？』とも云つて、うぶ〳〵しいままにも媚びに滿ちたゑがほをして見せたツけ。

こちらさへその氣なら、いつまでも獨占してゐることができさうであつたのに、それがこんなところにゐたとは！

便所にでも立てばかの女が獨りでついて來るかと思つたので、食事がすんで、かの女が食膳をかたづけに二度目の引ツ込みをしようとした時、

『ちよツと失敬する』と答へて、その方へ立つた。

『あ、お分りですか？』かの女も果してそれと察してか、その手に持つたお盆の物を下に置きかけた。が、友人は故意にか、又は好意の爲めにか、

『便所か』と云つて、思ひやりもなく、自身が一緒に案内がてらやつて來たので、こちらの考へは無駄になつてしまつた。

けれども、友人が便所を出ないうちにと思つて、安達は急いで手を洗つて部屋へ行つて見ると、もう、食事の道具と共にかの女の姿もそこになかつた。そしてかの女に對する疑問と侮蔑とばかりが自分の胸に殘つた。

それでも、今一度かの女が顏を見せるかと、それとなく友人と世間ばなしをしながら待つてゐたのだが、かの女はとうとう出て來なかつた。

『………』して見ると、もう、こちらに向つてかの女は氣がないのか知らん？まだ氣があれば、うちにゐる以上は、何かのことにかこつけて何度でも出て來さうなものだらう。それが出て來ないのは、少くとも、向ふもその意外に打たれて、意久地なくおぢけてしまつたのか？若しどうせこれツ切りになつてしまふものなら、こちらもわざと意地になつて、『實はもうお鶴さんとは不思議なところで知り合つてるのだ』とうち明けて、この場にかの女の澄ましたつらの皮を剝いでやり、友人夫婦の面目だま

もつぶしてやらうかとまで思へた。

　が、また考へ直して見ると、ここにも電話があることだから、そして、『わたし鶴と申します』と云つたのも本名を正直に云つたのであると分つたので、ここは何も云はずに歸つて、あすなり、あさつてなり、かの女のこの弱みにつけ込んで、今一度電話でをどし文句の交渉をする餘地も殘つてるのであつた。

　これをあと／＼の樂しみに友人の家を引き上げることにして、玄關まで來ると、

『おい、お歸りだよ』と云はれて、細君もその性分が引ツ込みがちであるらしい姿を見せて送りに出たのに、お鶴はそのけはひさへも聽かせなかつた。

『…………』おぼえてゐやアがれよ、畜生！こツそり逢つてゐる氣さへあれば、その兄夫婦の手まへなどはどうにでも胡魔化して置いてやるにと、何となく、相ひ手にされなくなつたのに對する復讐の怒りが燃えて、安達は自分の頬に少からずほてりをまでおぼえた。

　が、揃へてある下駄をはいて、いよ／＼傷持つ足の退去挨拶をでもする氣持ちで最後のにが笑ひを細君に向けた時、かの女はまじめなゑがほで、

『いもうとは仕事の都合で外出しますから、よろしくと申し置きました』と云つた。

『あ、さうですか？』斯う受けた時こちらは自分ながら自分の弱みを却つて見透かされたやうに氣を

まわしたが、それは一刹那のことで、次ぎの瞬間にはずツとらくな氣持ちになつてるのを感じた。そして妬んだり、絕望したりするにはまだ早過ぎると云ふ氣安さが自分にかた苦しい口調ながらちよツとおじやうずをまで云はしめた、『ぢやア、お歸りになつたら、どうかよろしく。』

來た時とは丸で違つた深い印象を與へられて安達はそこの門を出たのであつた。

何も知らないらしい友人夫婦に對しては私かに濟まなかつたやうな、然しまたその知らないのに對して侮蔑的な勝利を得てゐるやうな、この二つの氣持ちを胸の奥にこんぐらかせながら、渠は自分の足を豐川いなりの電車停留場へと運んだ。

そしてみち〳〵考へたのである。あのお鶴が夜になつてわざわざ外出の都合ができたとは、無論、生け花の仕事の爲めではあるまい。看板なしに產婆をも誰れかの手について やつてるとして見たところが、急に產氣づいたうちがあつて電話がかかつたのでもなければ、わざ〳〵夜になつて出て行く必要はなからう。ひよツとすると、また別な男にあすこへ呼ばれたのではないか知らん？　それならそれで分つてるから、こちらも今から直ぐその方へ行つて見よう、と。

すると、また意外にも、かの女は停留場でこちらの來るのを待つてゐたのだ。

『伊藤さんでいらツしやいますか』と云つて、かの女の聲を運ぶ黑い姿が、冬がれの櫻の並み樹のそれらしい樹かげを――あたりに人がゐないのをしほにしてだらう――少しあと戻りして來た。

『…………』伊藤とはあの待ち合に於ける自分の匿名だが——して見ると、下駄を揃へて置いて呉れたのもかの女であつたのかと今更らのやうに元氣が出た。そしてわざと少し大きな笑ひ聲になつて、足をその方へ進めながら、『おい／＼、冗談ぢやアねいぜ！』

『どうもすみませんでした』と、かの女はこちらの前へ來て立ちどまつた。そのやうすが、こちらに對しては、いけなければどうでも致しますと云ふしなやかさに受け取れた。

『いかに圖々しいおれだツて、ちよツと二の句が出なかつたぢやアねいか？』

『だから』と、向ふもこちらの目の下でゑがほを見せたらしいが、うす暗いのではツきりとは分らなかつた、『申しわけかたがた、今まであなたをお待ちしたのぢやアないの——この寒いのに？』

『ぢやア』と、渠は自分のかた手をかの女の肩へかけるが早いか、かの女の耳もとへ自分の口を持つて行つて、『これからまたどこかへちよツと行つて見ようか？』

『…………』かの女はその顏を小きざみに二三度たてに動かした時、いいお白いの香がぷんと聽えた。

三

寒い夜には違ひないが、渠はかの女のうつり香に少からぬあツたかみをおぼえた。うすぐらい電車

遣を直ぐ坂の下の方へほく〳〵した氣持ちで歩き出したが、こちらの爲めに無理をして出たのではないかと云ふことが少々氣になつたので、

『然し、うちの方はかまはないか、ね？』

『かまひませんとも！』

『どうして？』半ばからかひの氣味で、『おれに申しわけをする爲めに、今度はまたうちへ歸つて別な申しわけをするのぢやア――。』

『なアに、ね、そこはうまくしてあります から。』

『ぢやア』と、今度は本氣になつて、『ねえさんはまだお前のやつてることを知らないのだ、な？』

『まさか――知れば默つてゐるものですか？』

『………』渠はわざとにも自分の足をゆるめて歩きながら、自分ひとりの慾情がさきに立つのを私かに抑へ抑へして、こんなわけもない分り切つたことを――別に云ふこともないので――ぽつり〳〵しやべつたのだ。が、『そりやアさうだらう、な。おれもさう思ふが――』と云つたのが冗談から冷かしに轉じて、『して見ると、お前の好きでやつてるんだ、な、淫賣なんて兄弟にやア飛んでもない思ひも寄らぬことは？』

『そりやア、さう云はれても仕かたがありません、わ。』かの女の素直な答へには、あはれな溜め息も

少しは這入つてるやうであつた。『然し、わたしとしちやア、またそこにそこがございまして——。』

『まア、心配するにやア當るまいて。おれのできることなら、引き受けてやらア、な。』實際に、斯うした考へも出てゐないでもなかつたところへ以つて來て、今晩のことが一層こちらを乘り氣にさせてゐた。一つには、かの女をわが物にしてしまつたところを見せて、ぼんやりツこの友人夫婦の鼻を明かせてもやりたかつたのだ。

坂の中腹は店々の電氣や露店のアセチリン瓦斯のあかりで明るかつた。

渠は店頭の電氣の照らしに女を見てゐると、きんしや縮緬のもみぢと櫻の色をところどころ散らしに刺繡した黑地のコートを着て、孔雀の羽根の刺繡ある黑い羽二重繻子を見たやうなショールをかけてゐた。道理で、今、手をその肩へかけた時の手ざわりもよかつたことが思ひ出せた。

身なりもあり、美貌でもあり、それに、何かの深いわけか失敗かがなければ淫を賣るやうなことはしなかつた筈の生まれでもある。

『あなたにやア勿體ない』と云つた待ち合のおかみの言葉も——ここまでは知つてた上のことかどうだか分らないが——萬更ら意味を成さないことでもなかつた。

人通りの多いところをぬけて、山王つづきの森かげの堀ぶちへ出るまでは、心ばかりがあせつて、一たび絕えた話をまた續けるほどの種も口へは出なかつた。が、かの女は素直にただこちらのからだ

へ寄り添つてついて來た。
山王の森とは溜め池の電車線路を隔てて向ひ合つてる〇〇〇と云ふあつらへ向きの支那料理屋へのぼることは、近いので自動車の厄介にもならないでいいから、こちらの獨りぎめにしてゐたのであつた。無論、もう、喰ひ物はどうでもよかつたけれども。
來て見知りの女中に安心して話のできる小じんまりした下座敷へ案内されると、
『なにか、ちよツとあツさりした物がいい、な』と命じた。
『わたしも御はんはすませて來ましたのよ』と、お鶴もみち〳〵の話に於いて語つてあつたのだが、まさか、今夜はたべに來たのではないとはこの店や女中に對して露骨に云へなかつた。けれども、氣の利いてるところだから、さう命じて置けば、あとは呑み込んでゐるだらうと思へた。
お鶴も亦、斯う云ふところへつれ込まれることには馴れてでもゐるかのやうに、云はれないでも初めから手ぎわよくショールとコートを取つて坐わつた。それが少しも不自然にもきまり惡さうにも見えなかつた。そしてこちらはおのづからに、もう、一つの意味を承知させられたが、それだけまたかの女のうぶの程度を今一段こきおろして見て置かなければならぬだらうと云ふ疑ひが加はらずにはゐなかつた。
むき出しになつたかの女の衣物を見ると、給仕に出た時のをそツくり着て來たものらしい。そして

その時からかの女の袖くちにちら〳〵見えてた襦袢の色には、こちらのもツと親しみのあるそのまた一つ以前の記憶を呼び起させてゐる。そこまで剝いで見せろとはこんなところでは云へなかつたけれども。

桐の角火鉢が出たその上の方でこないだしたやうに、またかの女の手を取つて、實際の感情をもまぎらす笑ひになりながら、

『おれもちよツと驚いたが、お前もあの面喰らつたやうすツたら、なかつたぞ。』

『そりやア――わたしお迎へに出なかつたから、ねえさんが安達さんと云ふのぢやア、あなたとは分りませんでしたもの。』

『…………』こちらには、かの女のぢツと人を見つめる目つきがまた一つの愛らしさだと受け取れてゐたのだ。それを渠は親しい記憶と共に自分の身に滲み込ませながら、『そりやアさうだらうよ。すまなかつたが、本名を云つてはなかつたから、な。』

『伊藤だたんて、うそを云つて！』かの女は少しよこ目にこちらをにらんだ。

『まさか、正直に自分の本名も云つて置けないぢやアないか？あのおかみは然し承知してゐるが、な。』斯う云つてから、こんな時に少し本音を聽かせて置けと思つて、『會社のほかに、この次ぎにやア代議士の選擧にも打つて出ようと思つてるものが、さ。』

『さう、ね。』かの女はこの時こちらの思ふ壺へ這入つたのか、俄かにまた一層、『あなたのままになる、わ』と云ふやうな柔和な顔やかたちを見せて、『國會議員になるの？』

『…………』矢ツ張り、おそらく自由なかねを問題にしてゐるのだらう。が、それもこちらの私かに承知してゐないことではなかつた。『まア、こツちへ來な』と云つて、渠はかの女の手を引いた。

『きまりが悪い、わ。』かの女もにじり寄つて來てこちらの顔を見あげたが、直ぐその膝さきと共にその目をも横へ向けた。

『…………』そのあたまのまわりのふくらみ毛が少し赤みを帶びて、あまりつやもないのに、眞ン中へのせ着けた細いあみ附きの束髪は黒びかりまでしてゐるので、持ち毛とかもじ屋のあつらへとが調和しかねてゐる。が、渠はかの女のその横がほを見ると、矢ツ張り美人を得たのだと云ふ感じが加はつて、こころ私かに嬉しかつた。一般の女には兎角目に立ちがちな頰ぼねも出ずに、如何にもすツきりしてゐる顔だと、再び見直したのである。が、それだけ心が急がれて、女をあしらふ言葉の方が絶えかけたので、無理にまたかの女の家にあつたことを云ひ出して、『お前が顔を見せなくなつてしまつた時にやア、おれは失望して少し憤慨したんだ。』

『ぢやア、もう、にイさん達に云つてしまつたの』と、かの女はこちらの膝の上でそのかみ半身にちよツと力ある浪を打たせてまたこちらを見上げた。『あれだけぢツと目くばせして置いたのに』と云は

ないばかりに。

『實は、何もかも云つてしまはうかと、一度は決心したんだ。さうしてお前ばかりでなく、お前の兄弟たちの澄ました顔をも、おれの手で泥を塗つてやらうかと。』

『若しそんなことをしたら、ふたりがまた逢へると思つて？』

『だから、おれもしなかつたが、な』と、先づこちらはかの女の急に熱してゐたらしい反抗心の鼻ツぱしらを和らかに折つてから、『若しさうして置いたらお前はどうする？』

『あなたはひどいことを考へる人！』かの女が右の手をこちらの膝へかけて左りの方へ身を起さうとしたのを、渠は自分からさうさせないで言葉をつづけた。かの女をわざとゆすりながら、

『ええ、どうする？』

『そんなことを云はれちやア』と、またこちらを見つめて、『わたし二度とうちへ歸れない、わ。』

『念の爲めに聽いて置かう』と、おもしろ半分にだが、『おれがあの時もう少し早まつて何もかもうち明けてから出て來て、思はずお前の待つてるのに出會つたとする。そしておれはお前に氣の毒だツたと云ふ考へに對する責任は持つが、それはかねの上のことだ。その場合、お前はどうする？』

『二度と再びうちへ歸らないの。』

『…………』笑ひをつづけながら、『出奔か？』

『さうしてあなたに養つて貰ふのよ』と、あまへた口調になつたのがその顏をこちらの胸へ押し當てて來た。

『………』渠はそれを女の眞實そツくりとはまだ受け取れなかつたけれども、兎に角、氣持ちの惡いことではなかつた。

が、女中の近づく足おとがわざとらしく大きく聽えて來たので、お鶴は電氣にでも觸れたやうにはね起きて、もとの座へ澄まし込んだ。

*　　*　　*

暫らくしてから、便所へ行つて來たのだが、渠の心も一と落ち付きしたので、渠はいたづら半分に箸を取つた。

かの女も亦箸を取るのに遠慮しなかつた。

『一緒に物を喰ふのはこれが二度目だが――一體、お前はどうしたをんなだい?』

『どうしたツて――?』

『なぜこんなことをするやうになつたのでい?』

『あなたも○○といふ伯爵を御存じでしよう――實は、わたし暫らくあの人のお世話になつてゐましたの。』

『けい庵婆アさんか何かの仲立ちでかい？』

『いいえ、お聽になつた通り、わたしは產婆學校も出てゐますでしよう。先生からの賴みであの伯爵のお屋敷へ奧さまのお產の手つだひにあがつてましたの。』

『は、はア』と、渠はわざとらしく笑つて見せた。

『そりやア、何と云はれても仕かたがございませんが――』かの女は少しあはれツぽいやうすになつた。が、さら聽いて見ると、そのあはれツぽさの原因も直ぐこちらには分つた。

『あいつア今洋行中ぢやアないか？』

『だからです、わ』と、訴へるやうな目つきをして、『わたしもなんとかしなけりやア――。』

『まア、手ツ取り早く云つて見りやア、旦那のあと釜を見付けてゐたんだ、な。』そのあと釜になるのも、さきが華族であつただけに、こちらの興味をまたそそるものであつた。伯爵が歸つて來て、再び取り返さうとでもすればなほ更ら。

『だツて』と、かの女は殆ど生まじめになつて、『一旦、人の世話を受けて贅澤をおぼえた以上、もう、女はそれをおぼえない以前に返すことができませんものですから、ねい。』

『それもいい、さ。さうしておれで不滿足がなけりやア、おれがあとを引き受けてやらうが、な』と、ちよくにこちらの氣まへを見せてから、暫らくまた言葉がつげなかつた。

と云ふのは、かの女がそのからだを容易にまかすやうにはこちらの言葉をさう容易に信じてゐさうなやうすが見えなかつた。そこがまたこの種の女にありがちな不誠實と水くささだと思へたので、また段々と冷かしの氣ぶんの方がおもてへ湧き出て來た。そして

『おい、お鶴』と、女中の失敗をでも白狀(はくじやう)させる場合の口調であつた。『伯爵夫人のお産がすんでしまつてからは、どこで逢つてゐたんでい?』

『帝國ホテルや箱根で。』

『カフエ笹屋(さゝや)へもおんなじ男と一緒に行きやアがつたんだ、な——義太夫や三味線を聽きにも?』渠は自分で聽き出して置きながら自分でそれをやきもきしたところを自分のかの女に放つた目にも見せはしないかと思へたので、ちよツとさし控へた。そして今一段深く考へて見ると、かの女のいつも斯うした素直(すなほ)で正直な返事も、實は、ほんの、ただ、さうした一時の勝手氣ままな歡樂に醉つてた夢の破れたその反動から、ええツ、どうでもいいと、燒けツ鉢の投げ出しに過ぎないのではないかと思へて來た。

『わたし、呂昇(ろしよう)は好きですもの。』

『おい〱、場合もあらうに、おれの前でのろけは御免でい!』斯う一つ、渠はかの女をではなく、自分のまたかの女に手でもかけたくなつたしつツこい心を制して置いてから、おだやかに、『よく然し

にイさんやねえさんがさう度々出して呉れる、な？』

『そりやア、あなた、そんなことをする以上は、わたしだツて外出の理由ぐらゐは考へて置きます、わ。産婆の用事だと云やア、夜だツておほびらでとほせますから。それに、また、とまつて來たツて――。』

『なアるほど。』これも自分ながら冷かしの口調であつた。

四

渠は勘定をすませてその室を出る時、立ちながらかの女と握手をしただけでは滿足できなかつたので、ちよツと接吻をかはした。が、かの女の口びるがひやりとつめたかつたのをそのあとまでも忘れないでゐた。

そしてそのつめたさが丁度すべての一般美人と云ふ物の缺點を示めしたやうに考へられた。蓋し、渠の考へでは、美人は自分から見て呉れいとばかり澄まし込んでるものだ。またお前がいやなら、他の誰れにでも世話をして貰ふことができますと云はないばかりにしてゐる。そこに人間の熱が自然と無くなつてる。いや、あつても、それを成るべく抑さへるやうにする習慣が、ついには性となつて、無熱も同様になつてしまふ。

若しお鶴にしてその物好きさうな又熱のありさうなところも、實はその場で男の機嫌を取る手くだの爲めに、たださう云ふ振りをしてゐるのであつて、それが獨りでに最後の口びるに避けがたい刻印(こくいん)として出てゐるのだとして見ると、こちらの心はかの女の美にはそれでもなほ引かれるけれども、かの女のそのつめたさだけは少しも好ましくなかつた。たとへ金錢上で約束をすることだけれども、その金錢にまでも男の性分としては心の熱が加はつて行くことが分つてゐる。それを女からは二等分を受けて別々に取り扱はれたくはないのである。

こんなわけで、自分は會社のひま／＼をまた玉突きや銃獵の方へ向けてゐた。そしてお鶴のことではわざとかの女から電話か手紙(てがみ)かの來るのを待つた。

ところが、念を抑した時、

『四五日のうちよ』と答へたのが、一週間たつても音沙汰(おとさた)がなかつた。十日たつても、矢ツ張り。

『どうしたんだらう？』つい、その不平といろ／＼の思ひ出とが切になつて、獨り言を云はせられることもあつた。

あのすツきりした顔だちの美人！肌の白い女！〇〇伯爵が歸朝したとしても、かねづくなら競爭してもいいとまで思へたものを、今いち度逢ひもしないで、他の人に渡すことは自分の堪へられぬ苦痛(くつう)になつた。

で、先づ、それとなく本人には分るやうな手紙を出して見た。が、これにも返事がなかつた。そして自分がかの女との應對に於いてかの女を餘り淫賣扱ひにしたのが後悔された。

そりやア、淫を賣る以上、淫賣には相違なからう。が、若し一たびその足を洗つてしまへば、そして目かけとしても互ひに本當の愛を感じ出せば、その前身のけがれも淨化されてしまうわけではないか？かの女はその見込みが絕えてゐるほどにはまだ墮落してゐないやうすであつた。かの女の墮落はまだほんの初まりに在つた。贅澤な生活をしたいと云ふ、まだほんの、云はば、よわい女としては無邪氣のそれであつた。而もそのもとはと云へば、他の大きな誘惑がいけなかつたのだ。

物好きな〇〇〇伯爵を第一にわがことのやうに憎ましくなつた。次ぎに、いもうとがあんなことをしてゐても知らないでゐるぼんやりツこの友人夫婦を。そしてお鶴さんが今一度堅氣に立ち返ることができれば、こちらはかの女に對する自分のこの慾望が遂げられなくなつてもかまはないが――とまでも思へた。

然し、また思ひ直して見ると、もう、萬事が間に合はないのかも知れなかつた。こちらの侮蔑的態度が向ふに面白くなかつたのなら、一たびあたまを下げてあやまつてから、以後を改めればよからう。が、向ふはこちらの改心を待たないで、別にいい男を見付けてしまつたのなら――？

『つづけて可愛がつて、ね。』かの女のうわ着をぬいだ時の長襦袢が目の前にちら付いて來る。そして

また、かの女のきちんとした時の紋ちりめんの帶あげが！　そしてそれらを今や他の男があつて觸れてゐるのかと思ふと、その男をばかりでなく、それらを用ゐてゐるその本人をまでが憎ましかつた。

ところが、今一つ、愛が間に合はないばかりでなく、憎みが間に合ひ過ぎて氣味がいいとまで思へることが浮んだ。自分はかの女とはたツた二度しか關係しなかつたが――それでかの女は姙娠！　さうだ、そんなことで困つてしまつたのではないか？

それも、若し他におぼえがないなら、かの女はきツとこちらへその相談を持つて來る筈だらう。少くとも、かねの上では、さうこちらを貧乏人とは思つてゐないだらうから。これはかの女がその兄に聽いても分つてることだ。そしてこちらは隨分あまい言葉も與へてあるのだから。

然し、さうしないので見ると、いづれにもせよ、別にうまい口があつたに違ひない。それがかさねがさねの憎さ、妬ましさになつて、もう、手紙が來るのを空しく待つてる餘裕もなくなつた。

招待を受けた以來、表町の友人へは、遠慮と氣恥かしさとの爲めに、その禮の手紙一つやらないで過ごしてゐたのだが、そんなことに頓着する餘地もなくなつて、直接に電話をかけた。そしてこちらの名を云つて、先づ、

『御主人は』と呼び出して見ると、男の聲で、

『ゐません』の返事であつた。よく聽いて見ると、矢ツ張り、名古屋へ行つて留守だ。で、念の爲め、

ふのは、自分の母も若い時はくさ草紙が好きで、それを讀み出すと、お尻がおもくなつて、をつとに呼ばれても、つい直ぐに立つて行かなかつたとのことだ。昔から敎育ある家の生まれが生まれで、而も尋常に行けば、自分もさうしてゐられたものであつた。けれども、今は斯うして、當分のあひだでも、友達のうちへ厄介になつてる身だと思ふと、さう威張つてもゐられないので、『ちよいと、わたしお友達を訪問して來ます、わ』と云つて出たのである。

これも、併し、田口のもとのお友達であつて、實は自分のではなかつた。が、誰れにでも無遠慮に物を云ふ田口が、さきに、渠のことをあまり酒ばかり飮んで勉強しないから、詩人としてもあたまが貧弱になつて行くのだと忠告した爲めに、渠はそれから田口の敵となつた。或會があつた時など、渠はなんでも短刀をふところにして行つて田口を殺すつもりであつた。それは併し他の人が前以つてなだめてあつたことがあとで分つたさうだが、可なり人の惡いところがある田口はわざと會へ少し後れて行つた。そして既に哀花も來てゐたのを田口は自分ひとりで別室へ呼び、直接に

『君は僕をどうかすると云つてるさうだが、どう云ふわけか』と聽いたところ、

『いや、もう、分つた』と、その時哀花は答へて、無事であつたさうだ。

『人はいいのだが、おだてられると昂奮するたちだから』と、田口も歸つて來て笑つてゐた。が、こちらはあの時まだ田口と一緒にゐたのだから、會へは行くなと止めたほど心配であつた。そして哀花

兎に角、男は女にかげでばかりなりとも干渉するだらう。女へ來た手紙などをも妬みや好奇心から横取りするかも知れない。こちらのをもそいつが明けて見たとすると、安達と云ふ名を聽いて今のやうな險もほろろの返事をしないとは云へないのである。

けれども、ここまで來て見ると、もう、こちらの物好きな夢か熱かも殆どすツかりさめてしまつてゐた。そして復讐的にかの女のことをその兄弟どもに素ツ破ぬいてやるといふ憤慨心も、またとは湧いて出ないのであつた。如何に貧乏でも伯爵なら伯爵だが、それでもない書生さんなどを相ひ手に獨りの女を――いかに美人だツて、高等淫賣とは云へるものを――競爭するでもないのだ。

そしてお鶴と云ふ女は、安達に取つて、ただ腋の下に毛の多い女として、自分の親しい友人間に於けるうち明けばなしの興味ある種となつたばかりだ――多少は、それでも、

『ひよツとすると、そのうちにも何か云つて來ないとも限らないが』と云ふかすかな希望は殘してゐたけれども。

――(大正九年三月)――

おせいの巡禮

一

『…………』おせいは時々思ひ出して見ると、自分ながら自分の心がおそろしくならないではなかつた。

田口のおぢイさんに田口と一緒に追ひ出されたこともある代りに、おぢイさんの亡くなる時には田口ではどうせ持ち切れない家だからお前がしツかりしてやつて呉れろよと賴まれた家であつた。それをとうとうあの中島の爲めに思ひ切つて、自分から飛び出してしまつた時には、どうせ人手に渡る家なら、いツそのこと、綺麗さツぱりと火を付けて燒いてしまひ、思ひ殘りのないやうにしてやらうかとまで決心したのであつた。

最後にそれだけは思ひとまつて、中島一家のものが現在わが物がほに使つてゐた皿小鉢などをぶち毀はして來ただけにしたからよかつたものの、若しあの時あの最初の決心を實行したとすれば、今ごろは自分がからだに手錠をかけられて、監獄へでも入れられてゐたのであらう。

『あなたも一生懸命でしたから』と、假りにこちらを置いて呉れてる易の相ひ弟子、藤戸さんは云つた。『あの時のあなたの顔ツたらありませんでしたよ。』

『さうでしやう、ね。』おせいも今では少し心が落ち付いて笑ひもでるやうになつてゐた。が、自分の信用してゐた易の先生とも自分の家のことから云ひ合ひをして喧嘩わかれになつてしまつた。と云ふのは、いよいよ櫻川町の家を出てしまふと直ぐ、先生のところへ行つて、『あなたが、もう、少し親切に相談に乘つて下すつたらこんなことにならなかつたんですよ』と訴へた。

すると、先生はその長い口ひげをふり立てておこつてしまつて、

『なにも、おれがお前につけつけ云はれるおぼえはないぞ、失敬な！師匠を何と思つてるのだ？』

『師匠は師匠と思つてますが、ね――』斯うまた理窟を云ひ出したのが一層よくなかつたのであつた。

『默れ！お前がうちへ來る爲めに、ほかの弟子の邪魔になつて困るのだから、もう二度と來るに及ばん！』

『さうおツしやつてしまつちやア』と、まだいろいろ辯解をして見たけれども、駄目であつた。

『どうせこツちぢやア見込みのない弟子だから』とまで云はれた。

『…………』その破門同様のことは藤戸さんを以つてでも詫びを入れればまた許されないこともなか

らうと思へたが、どうせおせい自身にもそれを職業とする自信の出て來ないことを——落ちつく家さへなくなつた場合に——續けて研究するでもなかつた。『わたしだツて、斯う三方四方からいぢめられて、なんたる情けないことでしよう、浮ぶ瀨がないぢやアありませんか？』

『だから、まア、暫らくうちで靜養なさいよ』と藤戶さんはおんなだけに親切な言葉を言つて吳れた。『わたしのうちなら、なにも遠慮はしないでもいいんですから。』

『…………』おせいは胸が詰つて涙にしかこの心持ちは現はせなかつたのである。

『田口さんのところへも暫らく行くのはおひかへなさいよ。氣の立つてる時は、またきツと喧嘩になりますから』とも云はれた。

『…………』それも尤もなので、おせいは子供が田口へ二人も行つて厄介がられてはゐはしないかと思ひながらも、自分は政直と少しの荷物とを屆けに行つた切り、用は手紙でまに合はせて當分は少し遠のいてる氣になつてゐた。

藤戶さんは本職として產婆をしてゐるので、こちらが行つた三日目に、つい近所の同じ町內にお產があつて、こちらも弟子の格で一緒に行つて手傳ひをした。そしてまた見まはりにも行つた。が、それがあとまでもいやでいやで溜らなかつた。產婦が產みの苦しみをする。これは自分もして來たことだが、今や、もう、數へて見れば、總計六名の子供に卒業した自分としては、もう、そんなことは馬

鹿馬鹿しい苦しみのやうに見える。おまけに、産婦の寢てゐる部屋には、ぷんと、いやなにほひがする。きたないやうで、これが自分には最もいとはしかつた。だから或時、友達に向つて鼻くそをほじくりながら云つたのだ。

『をんながかた付いて行くのは仕かたがないとしても、子供なんか生まなければいいのに、ね。』

「ぢやア、わたし達の商賈があがつたりぢアありませんか？」

『それもさうですが、ね。』おせいは自分の友達の職業が産婆であるのを、つい、うツかり忘れてゐた。が、私かに考へて見ると、をんなが子孫繁殖の爲めに子を産まなければならないとしても、自分は少くともその働らきと苦しみとを幾たびとなくして來たのに對する報酬と云ふものをまだ受けてはゐない。云はば、まア、詰らない苦しみばかりをしたに終はつてるやうなものだ。

　子供を多く産んでお婆アさんじみてしまつたのは止むを得ない當然のことでもあるのに、これが爲めに田口にはいやがられて棄てられてしまつた。それでも、その多くの子供がみな生きてゐれば、うへのはむすめであつたからもう嫁には行つてる筈だらうし、そのしたのも高等學校か大學へあがつてやがては月給取りになると云ふ樂しみもあらう。が、六名のうちが四名までも死んで、殘つてるのはたツた十四歳の雄作と十一歳の政直とでは、まだ／＼前途が遠いうへに、今や、この二名も田口の方へ取り上げられてしまつた。

尋常に行つてれば、立派な御隱居さまとして孫の顏もを見ながら、左りうちはでゐられる身ぶんであつたのに、そしてもとは好きであつた歌でも詠じてゐられたものを！　つまり、死んだものは仕かたがないとして、恨めしいのは自分を棄てた田口と自分の代りになつたお粂とであつた。

が、人間は生まれた時からおかねや男を持つてたのではない。裸かでみんな生まれて來たものだからと云ふことに思ひ當つて、綺麗さツぱりとこの恨みを忘れてしまふ折りもあつた。こんな時には、坊さんの云ふ悟りのやうなものが開らけて、すツとした心持ちになり、自分のこれまでの苦しかつた來歷を、田口やその友達やの眞似をして小說にでも書いて見ようかと考へた。

今もそんなことを考へたのである。田口が淸水と云ふ目かけを持つてた時、その隱れさきを一一こちらの靈感じみた判斷で當てて行つたことなどもいい種だらう。が、自分の二番目の兒が生まれて九ケ月で死んだ時のことも面白からう。醫者が頻りに濕布をしろと云ふので、晝も夜も怠らずそれをしてやつた。すると、子供の痩せこけた胸がいつのまにかむらさき色になつてしまつた。そしてこれに氣が付いた時は、もうおそかつた。

滋賀縣で田口が中學教師をしてゐた時のことだが、渠が夜中に飛び起きて醫者を迎へに出で、かど口を五六步離れたかと思ふ頃、子供は目をしろくろさせてがツくり行つてしまつた。

『旦那さまア』と、十六歲の女中が泣きごゑを擧げたツけが、こちらはそのひるまのうち、子供を仕

かたがないので抱いてやると、ぢツと目を見張つてその父親を見た時の様子を思ひ出してゐた。つまり、物は云へないが、この苦しみを誰れがさせるのだと云つてたのであつたらう。

これほど可愛がつて、一週間も寢ずの介抱をしたのに、この親の心も知らないでと思ふと、死んだ兒が却つて憎らしくなつて、つい、

『この親不孝め』と云つて、自分はその死骸にかけてある蒲團の上を叩いた。

こんなことも――思ひ出すと――愛が却つて憎しみに變るは人情であつて、書いて見れば面白いに相違ない。が、田口へ持つて行つて相談すれば、

『何を生意氣な』とでも、あたまから馬鹿にするにきまつてる。で、丁度、讀賣新聞に戸川哀花と云ふ詩人の轉居さきが書いてあつたのを幸ひ、渠を尋ねて行つて見ることに決心した。

『わたし急に小說が書きたくなりましたの』と云つて、藤戸さんの机の上で、わざわざ買つて來た一帖の原稿紙に向つてたのだが、いろんなことが書けさうであるに拘らず、小しも筆が動かなかつた。

すると藤戸さんは、

『あなたは詰り御隱居さんで本でも讀んでゐたいの、ね』と、こちらへはいや味に取れるやうな言葉をかけて、あざ笑つてた。

『さうでしようか？』おせいは、併し、さう云はれたのを一方では得意でないこともなかつた。と云

わざと

『ぢやア、奧さんにちよツと。』

『奧さんも名古屋です。』

『ぢやア』と、やツとお鶴さんの名を呼んだのである。

『そんなものは知らん！』

『…………』して見ると、かの女はその素行を知られでもして國へ追ひやられたのか？　それとも、自分から先を越して居どころを別にしたのか？　そしてそのあとへ留守に來たものだから、かの女の名さへも知つてゐないのか？

電話がそれツ切りになつてしまつたあとで、またかけ直す氣はしなかつた。が、ふと、かの女が『書生がひとり留守居に來るばかりよ』と云つた言葉を思ひ出した。今の亂暴な聲や應對ぶりから想像して見ても、あれはその書生であつたのだらうか？

若い女と男とがたツたふたりでゐるのでは、そしてその男が矢ツ張り美男ででもあつたら、かねづく以外で關係ができないこともない。お互ひにその美を自慢し合つて、知らず識らずにだ。若しまた女の方はもツと自重心があつても、男はおそらく少くとも一度は口說いて見るだらう。そしてはね付けられたとしても――

さんをほどく憎い人だと思つた。が、今では、その方が田口の鼻を明かす爲めの物を聽くには却つて都合がいいのであつた。

『いまだに何何かたとなつてるのでは、相變らず獨身で見すぼらしいなりをしてゐるのだらう。うちがうまく行つてたら、置いてあげてもよかつたのに』などと考へながら、神田連雀町へ尋ねて行つて見た。

すると、小さいけれども、案外立派な下宿屋にゐて、渠の身なりも思つたよりも綺麗になつてゐた。そして宿のかみさんらしいのがこちらへ變な目つきを向けながらも、丁寧に世話してゐるのを見ると、これも後家で、或は都合よくくツ付合つてゐるのぢやアないか知らんと、直ぐさま思はれた。渠がいい人であるのを知つてるだけに、こちらは妬ましいやうな、うらやましいやうな氣持ちになつて――自分もさう云ふ人があつたら、失敗はしなかつたらうにと。

『どうです、近頃は』と、鼻の高いすツきりした顏の哀花さんは以前と變らぬ優しい目つきをして云つた。『田口君とは久しく會ひませんが、近頃は景氣がいいやうぢやありませんか?』

『どんなに景氣がよくツたツて、女房子供を愛しないものが小說なんか書けるものですか?』

『佳しいい物を發表してる、さ。僕などは小說は書けんけれど――。』

『ぢやア、あなたは矢ツ張り詩の方ばかりですか、ね? 實は、わたしも小說を書いて見たくなつた

ので、どう云ふ風に書けばいいか伺ひにあがつたんですが、ね。』この問題は然し有邪無邪にもみ消されてしまつた。そして話がまた田口のことに移つたので、自分も興味がこれに向いて行つて、元のをつとの薄情なことを他の人にも語る通りにまた語つた。そしてお兼と云ふ目かけ同樣のものがこちらの子供を二名までも引き取つて、まま母根性を出してゐると云ふことを、自分の想像でだが世間にありがちな事實として聽かせた。

『うん、そりやア、えらさうなことばかり云つてる田口としてよくない』と、渠は同情して呉れた。顏に怒りの色まで見せて、『それをおれが一つ小說に書いて攻擊してやつてもよろしい。』

『ぢやア、賴みますよ。』これをでも目的にして來たやうになつてしまつたけれども、こちらも同情を受けた嬉しさにその氣になつてゐた。『わたしがへたに書くよりやア、そりやあなたに書いていただいた方が立派なものができましようから。』

　そして晩の御はんを馳走になりながら、神田の下宿屋はこんなにいい物を喰はせて、――いくらづつ客から取つてゐるのか知らないけれども――よく割りに合ふものだと考へた。

二

『あなたはちよツとへうきんなところがあります、ね』と、哀花さんにも云はれたのである。

『………』おせいはそれが文學者はだの人に向つては昔から一つの得意であつたのだ。それを田口の友達の前などでは、自分のをつとを押し立てて置く爲めに、『門前の小僧も習はぬ經を讀むと申しますから、ね』と、調子を合はせてゐたこともあつた。が、自分のをつとの家がらは足輕にほんのただ毛のはえた士族でしかないに反して、自分は或藩の家老の家の生まれである。父が早く亡くなり、母が再婚したので、自分はおほをぢの家にまたいとこを姉とし、兄として育つた。そしてそのをぢは自分の父の代りになつて藩主子爵の家令をつとめてゐたので、毎日のやうに子爵當主の御夫婦とは顏を合はせてゐた。が、如何に昔の殿さまであつても、人間としては同等の、而も同じ程の年ごろのものが、こちらを奴隷か何ぞのやうに、

『おせい、おせい』と呼び付けにするのが面白くなかつた。その上、自分ををぢが一緒に小さい時から兄弟のやうにして育つたまたいとこの妻にしようとしてゐるのがいやであつた。

で、自分に附いてる多少の財産ををぢが左右してゐるのが分つてゐながらも、わざとその世話にならないで、自分としては家老の娘が筆墨の行商人になつて、――つまり、今で云へば、苦學生になつて、――學問をしたのである。世俗を離れてへうきんなところがなければ、とてもできなかつたことではないか？

男子と一緒の學校で英語を勉強してゐたけれども、同藩の人で私かに約束をしてゐたのが死んでか

ら、自活の必要上小學教員になつた。そして今のやうに教員が行燈ばかまをはくとは限らなかつたから、女としてのたしなみに相當するだけの化粧や服裝をして、裾もぬり下駄のかかとを隱せるだけの長きに着てゐた。それを、こちらの心も知らないものらは何かいやらしい意味に取つて、『あなたほどのいい器量を以つて教員なんかしないでも、早くどこかへおかた付きになつたらおよろしいでしよう』などと云つた。

『…………』おせいはおほきにお世話だと答へてやりたかつた。これでも娘の時は蕃い人人や近所界隈での一番美人だと云ふ評判があつたものだ。けれども、他の友達などとは違ひ、いろいろな誘惑にも負けないで、云つて見れば、まア、この點に於いても世を超然として獨立してゐたのであつた。町口に對しても、最初は『年うへだから、駄目です、わ』と斷わつたのである。それを渠は無理に落し入れてしまつた。そして十四五年間を苦勞ばかりさせた上で『婆アになつたから――』は人を馬鹿にするにも程があらう。けれども、哀花さんとの會見から得て來た刺戟によつて、また斯うもとの超然氣ぶんを感じて見ると、こちらは超然ついでに、いツそのこと、この肩のぬけた時期を利用して、兼て一度はやつて見たいと思つてた諸國巡禮をしに出たくなつたのである。巡禮すがたで御詠歌を歌ひながら『ふる里をはるばるここに紀三井でら』チリリン、『花の都も近くなるらん』チリンチリンと、鈴を鳴らして步くのも、自分が度度見てうらやんだこともある通り、ちよツと面白いことではないか

――友達のうちにいつまでも厄介になつて、かた身を狹くしてゐるよりゐ？　そして自分にはまたさうした信仰ごころもないではなかつたのである。

それには、芝居に出るお弓の娘のことから、阿波の德島縣で病院を開らいてゐると云ふ人を思ひ出さずにはゐられなかつた。もう、去年のことだが、その人が何かの講習を受けに東京へ出て來て、ふとした緣からうちへ一週間ばかり下宿した。そして雄作が田口へ行つてからのこちらのごたごた最中をいろんな相談にも親切に乘つて吳れたが、いよいよ歸國すると云ふ時になつて念を押して行つた、

『ほんとにあなたと政直さんとのことなら、お氣の毒ですから、いつでも引き受けてあげます』と。『今度歸つたら、病院を建て增し、看護婦も置きますから、その取り締まりをやつて貰つてもあなたの仕事はあります。』

『それだ、それだ』と、おせいは獨りで躍りあがつた。そして早速、小西さんと云ふのに、家もとうとう取られてしまつて、今は假りに他人の厄介になつてゐる。產婆の手傳ひをするよりは看護婦の取り締まりの方がまだしも氣が利いてるだらうから、そして兼ねての望みの巡禮も折りを見てしたいから、と照會して見たところが直ぐ返事が來て、『然らばお出で下され度候。若し政直さんをもつれて來たられ候へば、當方で學校へも入れておあげ申すべく候』とあつた。『確かにお出でなら、一日でも早い方がよろしく候。』

『ぢやア、わたし決心します、わ』と、おせいは藤戸さんに云つた。『政ちやんもつれて行くことに。ねえ、それがほんとうでしよう、子供をふたアりまでも田口へ渡して置けば、お衆にふたアりともどうされてしまふか知れませんから。』

『さうです、ねえ——然し』と、藤戸さんは煮え切れない返事であつた、『田口さんだツて鬼でも蛇でもないやうですから。』

『…………』おせいは多分向ふが第一に無給料の助手を失ふのを好まないのだらうと見て取つたが、それにはわざと頓着しないで、笑ひながら、『わたしだツて、まさかそんなことは思つてませんの。』實は、田口の方が蛇か鬼かのやうに子供を虐待してゐて呉れれば、子供の心はいつまでもこちらへ向いてゐるに違ひないから、寧ろ自分の結構とするところであるのだ。が、如何に女房を追ひ出した田口でも、子供は可愛がらないでもないやうだ。だから、その上にもお衆がうまく子供を取り込んでしまへば、子供は實際にまだ母の心も知らないたより無いものだから、向ふばかりをいいやうに思つてしまつて、こちらを忘れてしまふおそれがある。これが自分には一番心配なのだ。

雄作が向ふの貯金を向ふへは郵便局で落したと云つて、たまたまこちらへ持つて來て呉れたことはある。が、お衆から毎日貰ふおちんをでも——おいしい物であればあるほど——學校までは届けるつもりで持つて來ながら、自分でたべてしまふやうな、これも薄情ものだもの、ああしてゐるうちには

生みの母を忘れてしまふかも知れやアしない。だから、政直だけは丁度いい都合だからづれて行つてやらうと思はれた。

　で、さう決心して宮仲へお別れかたがた出かけて行つたのだが、田口から政直の件に就いて一言のもとに叱り付けられた。

『お前ほど何ごとにも心のぐら付くやつアねいぞ。お前が勝手に徳島へなり、巡禮になり行きたけりやア行くがいい。政直は親のおれが引き受けた以上、なにも遠方の、而も他人なんかに世話をさせるにやア及ばないぢやないか?』

『それもさうですが、ね――』

『よせ、また、その返事がおれにやアいつも氣に喰はねいんだ!人を馬鹿にしてゐる手で!』

『なにも馬鹿になんかしてはゐないぢやアありませんか』と、おせいも言葉を返した。が、實は、田口を馬鹿にしないまでも、田口の代りに子供の世話をしなければならぬところのお兼は、その年が若いだけにでも、こちらが十分に馬鹿にしてゐるのである。けれども、叱られては、もう、政直のことは斷念しなければならなかつた。では、この學年がすめば、政ちやんを宮仲の學校へ移して下さいよ。』

『そんなことア云はないでも自然にこッちで分つてる。』

『併し、云つて置かないぢやア安心ができないぢアありませんか?』

『お前の物に不安心たのはお前の悪いくせだ。それだからツて、一一こツちのことに干渉がましいことはおれが云はせない。』

『さう云つてしまやアさうでしようが、ね。』

『あなたは、ね』と、この時またお粂が口を出した、『一體、人を信用しないで失敗するのですよ。堤さんや島村さんをおこらせたのも、みんなあなたが疑ひ深いからですよ。その結果はどうかと云やア、つまり、あなた自身までが自分の家を追ひ出されてしまつたぢやアございませんか——折角わたしがあなたにも都合のいい島村さんを紹介してあげたのに?』

『そりやア別に追ひ出されたんぢやアありませんよ。わたしが假りに出てやつたんですから。』おせいはまだこんな辯解をしないではゐられなかつた。尤もいつか時が來れば、再び取り返すつもりではある。

『あなただから、まだそんな强情を云つてゐられるのでしようが、ね——』

『ぢやア、わたしにどうしろとおツしやるんです?』おせいは自分が云ひやうもなくなつたのでただ斯う突ツ込んで見た。

『…………』お粂は返事をしないで、わざとらしく横を向いてゐた。すると、

『つまり、死んでしまへばいいの、さ』と、田口はひどいことを云つた。『さうすりやア、子供を敵

と味かたとのあひだに在つてまご付かせるやうなことアなくなるんだ。』

『なにも、わたしがあなたがたの敵ぢやアーー』おせいは少からず不平の爲めに口をとんがらかして獨り言のやうになつて、あの哀花さんが、

『田口は生きるにやア强いところがあるけれど、少し我利我利亡者のやうなところがある』と云つたことを思ひ出してゐた。

『敵ぢやアないか？』田口の聲には腹のそこからでも出たほどの響きがあつた。『子供がこツちにゐる以上、會ひに來るのは人情だと思ひ察して許してはあるが、ね、お前が一度來ればその一度だけおれの生活を邪魔するのだ。若しまた來ないでも、お前がかげで子供に惡い知慧をつけるに相違ない。』

『そんなことはしませんせん。』おせいはうそにも斯う云ひ切つて置かねばならなかつた、渠ももとは敵をも愛せよと云ふ宗教の信者であつたのを思ひ出して。

『まア、聽け！　お前のだらしなく疑ひ深い、さうして惡がしこい性質から見れば、ーー』

『わたしはすべて正直なんですから、ね。』

『聽けと云やア聽いてろ！　お前の性質として、生きてるあいだは、きつと、子供に會ふたんびに突ツついたりおだてたりするんだ。』

『まさか？』

『ところが、それが子供をとほしておれ達の邪魔になる。』
『ぢやア、そんな邪魔をさせるやうなことをしなかつたらよかつたんでしよう。』
おせいも馬鹿にされてるのが面白くなかつたので、暗に離婚の恨みを持ち出した。
『お前が甲斐性がなかつた爲めだと思へ！』田口は斯う叫んでから、少しまた聲を和らげて、『ところが、その邪魔と云ふのは、つまり、お前の爲めにもならないのだ。子供をよくしやうと云ふのが望みなら、ね。』
『あなたは人をばかり恨んで』と、これはお粂の言葉であつた、『御自分のことは分らないのですよ。』
『まさか、わたしだツて――』
『そのまさかがお前にやア禁物ぢやアないか』と、田口の聲はまたあがつた、『あのしらみの時で分つてる通り！』それからまたわざとらしい當り前になつて、『だから、念の爲めに云つて置くが、ね、たとへ徳島へ行つても、子供には直接に手紙はよこすな。まだ死にたくなけりやア、成るべく遠ざかつてるやうにしてゐろ、子供が死ねばこツちが知らせてやる。それが行かない以上は無事だと、お前はひとりで滿足してゐればいいんだ。』
『…………』さう聽かせられて見ると、おせいは却つて遠方へ行くのがいやな氣にもなつた。田口の今云ふ死んだと同樣のつもりになつて、一生の思ひ出に巡禮をして見ようと決心したのだが、その

留守を自分が實際に死んだと同様に思はれては、自分もつまらないし、自分の子供のことも安心できないのである。自分がかげにでも附いてればこそだが、ゐなくなればそれをしほに、お傘がどんなことをするかも分らない。その爲めに、ここは自分がげじげじのやうに嫌はれてるところだけれども、坐わつた時よりも一層お尻が重くなつてるのをおぼえた。さうかと云つて、この決心をひる返せば、また笑はれるにきまつてゐた。で、よんどころなく折れて出て、『ぢやア、成るべくそのやうに致しますが、ね』と云つて置いて、その時になればまたその時の考へがあると思ひながら、『わたしが行つたさきから手紙をよこしますから、その時蒲團を送つて下さいよ。』

『そりやアお前の寢棺のおほひと思つて、ね。』『田口の惡口は例の如くであつた。

『…………』おせいとしては、然し、ふるぼけた蒲團ではあるけれども、當分自分も着ないことにしてここへ預けたのである。まツこと困つた時には取りに來るが、それこそ成るべくよごれを増さないで置くつもりでだ。だから、藤戸さんへ初めて厄介になりに行つた時、

『蒲團は持つて來ないの』と云はれたのに對して、

『それもすツかり賣つてしまひましたから』と答へた。そして氣味が惡かつたけれど、前にゐた助手が着てゐたと云ふのを續けて借りてゐた。それは隨分きたなくなつてるままの煎餅ぶとんで、二枚をうへにかけても、この頃はまだ梅の花の咲いてると云ふ時節であるから、寒い爲めに夜中に度度目が

さめるのであつた。

三

『併し、わざわざ遠方へ呼ぶのに、ふとんまで持つて來いとアあんまりです、ね』と、こちらが實際には云ふべきことをお兼はこの時田口に向つて語つた。

『…………』多少の同情をして吳れたのではあらうが、おせいはそのお兼の言葉に對しても意地がさきに立つので、向ふから來た手紙のさうした意味を二度目には少し云ひ換へて、『別に必らずしも持つて來いと云ふんぢやアないのですが、ね』と答へた。

『旅費だツてもさう、さ。』田口もこちらへは顏を向けないで、お兼のはうへ、『困つてるからこそ女中のやうに使はれに行くんぢやアないか？　それに、送つても來ないで――よツぽどけちなうちだらうよ。』

『そりやア、小西と云ふ人はけちと云やアけちな人でせうが、ね。』よく云へば、なかなかつましい人である。うちにゐた時でも、一厘一錢をおろそかにしなかつたが、その代り、堅くツて、また親切であつたのを、暗に田口の不斷の行ひに比較して見せるつもりで、『併し、人情はありますから。』

『そりやア、人間だもの、誰れだツて人情はあらう。』田口の意味はこちらの云ふのとは丸で違つてゐ

た。『けちなのも一つの人情だから、ね。』

『ぢやア』と、おせいはまた意地になつて、『女房や子供を棄てるのも人情ですか？』

『さう、さ。少くとも、おれの場合はさうだ。お前が段々女房としての資格がなくなり、その上に子供にまで父を馬鹿だ、馬鹿だと云つて聽かせた。さうなりやア、誰れだツてますますぐれ出した愛をもとに返すことをするもんか？』

『そんなことがありますか？』

『人情、人情とばかり云つてるものにやア、却つて、ほんとの深い人情が分らないんだ。』

『人情にしても、あなたのア間違つた人情ですからね。』

『貴さまらに何が分るもんか』とは云つてのけながらも、田口がこちらの汽車賃と船賃とに當るぶんだけを餞別として出して呉れたので、おせいはそれくらゐのことは當り前だと思ひながらも、人にはいつも自分が正直であると云ふことばかり云つて聽かせてゐる自分としては、感謝の意をも示めしたかつた。が、斯う感情がこじれて來ては、またそれとなく小西さんの辯護を兼ねて、ただこの餞別が無駄にならぬと云ふことだけしか云へなかつた。』おかねは送つたが、本人は來ないとでも云ふことがあれば、向ふも馬鹿を見るからと思つたのですよ。』

『まア、行つて見りやア分る。お前はなんでも物にぶつかつて失敗して見るまでは目がさめないんだ

から、ね。』

『わたしだツてさう馬鹿でもありませんから――』おせいは斯う受けて、田口の飽くまで人が悪い云ひぐさを避けてしまふことにした。『兎に角、暫らく會へないんですから、子供に會はせて下さいよ。』

學校が引けて共に芝から歸つてる時刻を見計つて來たのだから、渠らはゐることはゐる。が、お粂のつれ兒の初雄と一緒に玄關の部屋で聲がしてゐて、この母の來たのを知つてながら殆ど知らないかのやうだ。それがお粂に對する妬ましさを自分に增させると同時に、また自分の子供に對しても胸一杯の不平やらいきどほりやらになつてゐた。

で、渠等が田口に呼ばれて皆のゐる茶のまへ來て、ふたり揃つてかしこまつた時、田口が先づ渠等に向つて、

『幸田は、ね、今度暫らく德島の方へ行くと云ふから、その挨拶をしてやれ』と云つたあとから、おせいはいきなり渠らを叱り付けるやうにして、

『おツかさんは、ね、今、お父アんの云はれた通り』と、わざとお粂にも當るつもりの言葉を加へて、今度德島へ行きます。さうしたら、暫らくは歸らないんです！』自分の淚が出さうなところだのに、少しも出ないのが自分ながら不思議であつた。『向ふへ行つたら、お前達も知つてるあの小西さんのところで看護婦の取り締まりをして、少しおかねを溜めて來ます。さうしてやがて歸つて來ると、あの大

工に取られた櫻川町の家をまた取り返します。これもみんなおツかさんがお前達のあとの爲めを思つてすることだから、ね、わたしが遠方へ留守になつても、ね、わたしを忘れてはなりませんよ。わたしはどこまでもお前達のおツかさんだから、ね。併し、また』と、いまいましいけれども、田口らの手まへをも思ひ直して、『ここに世話になつてる以上は、ね、ここのおツかさんやお父アんの云ふこともよく聽いて、熱心に勉强するんですよ。さうして人に馬鹿にされないやうに氣を付けて、ね、なんでも人よりえらくなるやうにするんです。』

『さうして、また、このおツかさんのやうに正直にして、而も人にだまされないやうに、ね。』と云つたには、自分としては、子供がお兼のあまい、うはツつらの言葉に乘つて、こちらを忘れてしまふやうなことがあるなと云ふ意味をも含めたのである。『火を見れば火事と思へ、人を見れば泥棒と思へと云ふこともありますから、ね。』

『よせ、馬鹿』と、田口は横合ひから口を出した。『云はせて置きやアべらべらと下だらないことを云つて！おりやアそんな馬鹿馬鹿しい教へかたはしないんだ！』

『なにも馬鹿馬鹿しいことアないぢやアありませんか？』

『よせ、貴さまぢやアあるめいし！　今の小學教育もよくないが、ね、手めへのやうないぢいぢしたことア子供に云ふべきことぢやアない。』

『そりやアさうでしようが、ね』と、うはべでは一歩をゆづつて置いて、『併し、子供にだつて常識は必要です、わ。』

『馬鹿！　無常識なお前が常識なんかあるものか？』

『さう一概に云つてしまつちやア――』おせいは自分をそんなものとは思つてゐないので、田口の云ふことをただただいつものわる口としか受け取れなかつた。で、なほ別なことで子供のこちらに對する信用をつないで置くつもりになつて、『それはそれとして、ね、おツかさんが今度德島へ行にやア、今一つ大目的があります。それは四國めぐりをすることです。巡禮と云ふものは、ね、東京などで見りやア、物を貰つて步く乞食のやうですが、ね、決してそんなものぢやアありません。眞劍に云やア、えらい坊さんの難行苦行のやうなもので、みんな信仰から出るんだから、ね、人の人格を高尙にするものです。だから、心配しないでおツかさんがその高尙な人格になつて歸つて來るのを樂しみにして待つておいで。』

『ヘツ』と、お兼は低い聲でだが田口へ笑つて見せた。

『……………』おせいはそれをじろりと見て、お寺の生まれを自慢してゐるものが却つて不眞面で、こんなことが分らないのかと卑しまれた。だから、お兼が一ときは習つたと云ふ西洋音樂をやめて三味線なんかをいい氣になつてるのだらう。こちらは然しもとは田口と共に耶蘇敎信者であつた。今では

その信仰がお互ひに變はつたとは云ひながら、オルガンの方がいまだに三味線よりもずツと高尚だと思つてる。そしてその高尚な氣ぶんを四國巡禮によつて得ようとするのである。人並みから見れば、かはり者はかはり者でもあらう。が、決して不眞面目なことではない。これを田口や子供に知らせる爲めに、『こりやアわたしが教員をしてゐる時から考へてたことですから、ね』と勿論片付けたが、教員をしてゐる時には、實は、ただ巡禮と云ふものをしがてら旅にでも出れば、死んだ戀人のことなどをくよくよ考へないで、氣がせいせいするだらうぐらゐのところであつたのだ。ところが、今やその動機が失戀とは全く違つて、自分の住むべき家をも失つたその心の氣晴らしから變はつてるのである。これをつらいやうな、詰らないやうなことにも感じながら、それでもおもて向きは確信あるやうに見せて、誰れに云ふともなく、『今度と云ふ今度は丁度いい折りだから、必らずやつて來るつもりですから、ね。』

『誰れも手めへ自身のやることをいけないとは云つてゐない。』

『でも』と、お粂はまたはたから、『巡禮なんか道樂半分にすることです、わ。』

『さうですか、ね？』こちらもわざと斯う受けてやつた。自分の寺の格式が高いのを自慢してゐるお粂から見ては、巡禮が人の物を貰つて歩くことだけをわけもなく賤しいと思ふのだらうが、それは下だらない格式や肉食妻帶で本當の修業を忘れた宗旨のことではないか？『華族さまのやうなお寺の人

なら、お馬車なり自動車なりでお成りになるのもいいでしようが、ね』と、一つそれをあざ笑つて置いて、『それぢやア、修業と云ふものができませんよ。坊さんの托鉢だツて、云つて見りやア、まア、巡禮をする心持ちとおんなじぢアありませんか？』

『口ぢやア手めへも人並みなことを云ふが、ね――。』

『またしらみをわかして、からだ中をぼりぼり引ツかきむしつたあとの附いた人格なんかでき上らないやうに氣をおつけなさいよ』と、お粂も田口と一緒になつて惡くちを云つた。

『まさか！』あの時だツて、おせいは自分のからだにまであれがわいてたことだけは誰れにもうち明けてなかつたので、そこは平氣をよそほつて、『子供は無神經なものですから、ね』と、今も渠らが母の遠方へ行くと云ふのを悲しいのか、悲しくないのか、ただもぢもぢして皆の話を聽いてると云ふよりも見てゐるらしいのにもそれとなく當りながら、『氣が付かなかつただけです、わ。』さうだ、自分も氣が付いた時には、あの小さい觀音さまが――それこそつれ立つた巡禮の行列のやうに――ぞろぞろゐたのであつた。それを思ひ出して、ぞツとすると、現にまた自分のからだぢうがむづがゆいのをおぼえた。

　せめてけふ一と晩はとまつて、子供との別れを惜しみたかつたので、田口が歸れと云はないのを幸ひにして、おせいはお尻を落ち付けてゐると、いつのまにか、また自分の手持ち不沙汰な手の指が自

分の鼻の穴をほじくつてゐた。

田口は二階へあがつてしまつた。お兼はまた、時刻が時刻だから、臺どころの方へ行つて、女中にみんなのおかずか何かに關する命令をしてゐた。

おせいは子供達がまた移つて行つた隣りの狹い部屋へ割り込んで、雄作が兄らしくしたの子供ふたりを相ひ手に五もく竝らべをしてゐるのを見た。

『この碁盤はおれと貧乏世帶を共にして來たのだから、いつまでも記念にして置いてやらうよ』と、曾て田口が云つたその盤も、こちらにはなつかしいよりもまた一つの妬みの種であつた。が、見てゐると、初雄が雄作から白石を以つて壓迫されながら、思つたよりも上手に黒石で受けてゐるのを發明な子だと感心して、『割り合ひに初ちやんもうまいんだ、ねえ』と云ふ言葉が出た。が、そのあとから直ぐ、おせいはこの小まツちやくれがこの家に何の資格もないのに、やがては、雄作や政直だけで分け取るべき財産を、今の赤ン坊と一緒になつて、それこそ爭ひ出す邪魔物だらうと考へた。聲を低めてだが、雄作をにらみ付けるやうにして、

『大丈夫か、え? いぢめられちやアゐないのか、え?」

『そんなことはないやうだけれど――』雄作はちよツと石を持つ手を休めて、考へるやうに答へた。

『やうなら、なにか少しやアあるんだらう?』

『別に――なにも――』

『しツかりしてゐないと駄目だよ。』斯う念は押して見たが、おせいは子供がさツぱりたよりないやうに見えた。お粂に對する不平でもあれば、今のうちに折角聽いて置いてやらうと思ふのに――まま母としてそのままツ子に不公平な所置がないことはないにきまつてる。それを子供がぼんやりして氣が付かないのだらうから、もどかしかつた。

晩の御はんには、田口自身がここの畑に作つたはうれん草のおしたしも出たが、それをお粂はかの女自身の手がらででもあるかのやうにして、

『度度雪に當つて來たのですから、ね、とろけるやうに和らかいでしよう』などと自慢した。

『………』それが氣に喰はなかつたけれども、口に入れては珍らしいほどおいしくないことはなかつた。

一とかたづき濟んでしまふと、田口は、

『兎に角、當分の別れだから、今夜はみんなに遊ばせてやるから』と云つて、子供に花札を持つて來させた。そして込み入つた親子六名が輪に竝らんで、札を一枚づつ起して各自の前に持つた。それから眞ン中にふせてある札を順番にめくるのだが、そのおもてへ出たのと同じのを持つてるものの名を呼んで、誰れでも自分の持つてる分をその人へ與へてしまふ。たとへば、櫻が出ると、櫻を前にひ

かへてゐるものがぐづぐづしてゐるうちにみんなからみんなの札を押し付けられてしまふ。そしてそれをたびたび繰り返してゐるうちに花札全體を貰つて、他にやるべきところが無くなつたものが負けである。

遊びとして面白くないことはないが、みんなに田口から附けられた名に於いておせいは不服であつた。本名を云へば、餘りに分り易いので、あわてて呼び間違へたりする面白味がないと云ふことはいいけれども、子供にはみな毛だ物や鳥の名が附いたのに、田口は自分を『おとうさん』、自分の女房を『おかアさん』と呼ばせ、こちらを『櫻川町』とした。せめては、自分が易の方で持つてゐる名の櫻陰をでも云つてくれるとよかつたが――。

で、こちらへ札を向ける時、雄作や政直は櫻川町をもおかアさんとか、おツかさんとか呼んで間違つた。それがおせいの自分として詰らなく馬鹿馬鹿しいところであつたので、一回切りで自分だけはやめてしまつた。が、

『おかアさんだ』、『おかアさん』と云はれるのをお衆は、然し、得意のやうになつて、多くの札を貰ひながらも、なほあとまでも熱心にしてゐた。

『…………』そんなことを子供に負けない氣になつて遊んでるやうな女がどうして子供の教育なんかできるものかと、おせいは私かにはたで見てあざ笑つてゐたのだ。そして早く子供と一緒にとこへ這

入つて、自分の留守のあひだに於けるお余に對する渠らの心得を告げてやりたかつた。

四

おせいはいよいよ出發することになつて、東京驛から汽車に乘つた。京都や大阪はさきに田口と一緒に見物したことがあるので、そして花にはまだ早いしして、再び目も吳れないで、直ちに大阪の川口から汽船に移つた。そして德島に着くと、車で一日路を板西と云ふ町の在所へ飛ばした。

案外邊鄙なところで、小西の病院も當り前のひら家を用ゐてゐるのであつた。成るほど、今、建て増しはしてゐるが、それもただ二た間の二階だてであつて、たとへでき上つても、子供を入院させたりした經驗あるおせいには、病院らしい感じがしさうでなかつた。が、まだ少し寒さがつづいてゐるので、風から肺炎や肋膜になつてる入院患者が多かつた。

『患者はつまつてをるのに看護婦がなうて困つとります』と、小西さんは云つた。そしておせいは早速渠の奥さんと一緒に白い服をつけて、看護婦代理をつとめさせられた。

東京で産婦のにほひもいやであつたが、わざわざこんな遠方へ來て藥局や病室のいやな藥りのにほひをかがせられるのはまた好ましくなかつた。たださへあたまがおもく痛みつづけたのが、それに醉つてしまつてか、到着の三日目には目まひがして倒れてしまつた。一つには、ほんの、ただ旅の勞れ

でがツかりしたせいでもあらうと自分ながら思はれた。
が、蒲團のことは小西さんにハガキを書いて出して貰つたが、自分は一週間經ても、十日たつても、とこから起きられなかつた。ほかにどこか惡いと云ふのでもないが、無理に起きあがらうとすると、くらくらと目まひがしてあたまが痛む。どうしても旅のつかれどころではなく、長いあひだの心配、苦勞が、まア、ちよツと落ちつきどころを得たと云ふ安心の爲めに、一どきにその結果を顯はしたやうであつた。
それでも、田舍くさいままにすらりとして、ちよツと上品に見える奥さんが、まだ親しみもしないのに、親切にして呉れるのを地獄にも佛と見て、涙のこぼれんばかりにありがたかつた。そしてそれにあまへて、とこにばかり就いてゐると、世にこれよりもらくなことはないとまで考へられるやうになつた。あくせく心配したツて、駄目なものは駄目になつてしまふのだから——。
東京へも何を云つてやつたか、自分で自分のおぼえがなかつたけれど、田口が書いてよこした返事を見ると、
『おれの子供をおれがまた引き受けた以上は、その教育やその他のことに就いてお前から干渉がましく頼みごとを聽かせられるには及ばない。そしてこのほかには、もう、お前とおれとの交渉はない筈だ。お前が死んだら、誰れかが通知をよこすだらう。以後一切手紙も、ハガキもよこすな。そしてお

前が骨となつて來たら、お前の望み通り、子供のそばへは確かに埋めてやるから。』

『…………』おせいはそんな文句を讀ませられると、却つてますます死にたくはなかつた。が、自分は兼ねての望み通り、自分の死んだ時は矢張り田口家のお墓へ埋めて呉れいと云ふことを書いてやつたものらしい。

お兼からも同時に一封が來たが、

『蒲團はこなひだ送りました。もう、とツくに届いてゐるでしよう』とあるので成るほど自分の着てゐるのがそれであつたと氣が付いた。『子供のことはわたしがあなたに代つて心配しますから安心なさい。あなたはそちらで十分呑氣に靜養をするのが必要ですよ。』

『…………』おせいはそれをもていのいい絶交書同然だと見て、いよいよ情けなくなつた。そしてがツかりして、また一しほ起きる力を失つてしまつた。

そのうちに、ここの婆アやさんからこのうちに關するいろいろなことをも聽いた。奥さんがけちで、皆に評判が悪いこと。主人がまた子供の多いくせにをんな好きで、來る看護婦にかたツぱしから手をつけるので、或ものは奥さんに追ひ出され、また或ものは自分から逃げて行つたりして、いつも落付いてゐるものがないと云ふこと、などを。

それで思ひ出すと、田口はこんなことを云つて冷かしたツけ、

『子供まで引き受けてもいいと云ふところぢやア、お前はお茶呑み友達にでも行くのぢやアないか、ね？』

『まさか！』實は、然し、そんならまたそのつもりでもよかつたのだが、小西さんに奥さんがまだあることは初めから分つてゐるのだ。けれども、今、自分だツて役に立てればまだ役に立つからだだと云ふことをここでまた思ひ初めしめられた。そしてあの繪を最後に田口へ渡してしまつたのを殘念に思へた。すると、不思議にも、自分に獨りでに勢ひが附いて來て、病氣も段段とよくなり初めたのである。

然し、いよいよとこ上げをして見ると、もう、世間は夏であつた。東京とは違ひ、この四國の暑さはまたきびしかつた。それにも拘らず、おせいは自分の病室であつたたツた三疊のまに置かれて、毎日、臺どころの世話をさせられ、食事も自分よりずツと年うへの婆アやさんと一緒で、女中同様の待遇であつた。そして小西さんはぶしつけにも、

『あなたは、どうせ、存外役に立たぬ人でした、な』と云つた。

『…………』それがお茶呑み友達のことでないにきまつてる以上は、看護婦の取り締まりは勿論、看護婦その物にもなれないと云ふ宣告であつたらう。『わたしはくすりのにほひが嫌ひです、わ』とも、病中に奥さんに向つて濟まないけれども正直に云つたこともあるほどだから、その宣告は別につらく

もなかつた。いや。却つてそれで藥局などへ再び出ないやうになるのだから、都合よかつた。それにしても、さんざん病氣の世話になつたあげく、よくなつたからツて直ぐ、わたしは四國めぐりに出ますから左樣ならとも申し出にくかつた。それに、また時節が時節で、ここでは巡禮のことをへんどと云ふが、それをするにはまだ暑過ぎた。

で、いろんな不平を成るべく辛抱して、當分のうち、この家の爲めに恩返しの立ち働らきをすることにした。そして田口のところへは、

『小使ひが貰へませんので、好きなお茶うけを買ふこともできません。少しおかねを送つて下さい』

と云つてやつたけれども、返事がなかつた。

そのうちに、そろそろこの德島にも秋かぜが吹き初めた。そして秋と云ふことで思ひ出すと、文子が死んだのもこの時節であつた。また、田口が前前から云つてたことによると、

『一般に男は春に浮氣ごころを起すが、女はその反對に秋が一番苦しいらしい』のであつた。

『まさか――さうでも』と、その時は笑つてのけたが、獨りになつて苦勞して見ると、實際に秋は女の情慾や嫉妬心を一番多く刺戟するのである。

或日ふらりと門のそとへ出たら、政直のやうな年恰好のもまじつてる小學生徒がその敎員どもに引きつれられて、遠足に出かけるのを見た。その行くさきは澄み渡つた山のふもとか？　川のほとりか？

兎に角、そんなところで男女の生徒をでも遠ざけて、自分ばかりが私かにあの大川さんの持つてたやうた繪を開らいて見たいと思つたことがあるのを聯想された。が、今や、自分の持つてた繪をさへ田口の方へ取り上げられてしまつてるのだ。あれがあればこんな時のせめてものこころ靜めになつたのに。

俄かにまた自分のこの相ひ手なさとこの寂しみとの爲めに心が落ち付かなくなつて來た。そしてこの小西家に於ける斯うした待遇を滿足してゐられなくなつた。まるで、それとなく、鳥かごの中か牢獄へでも入れられてゐるやうだ。たとへ喧嘩相ひ手にでも少ししツかりした男が欲しかつたけれど、この田舍では、たまにこの家に遊びに來る村長さんでも、とてもお話になる男ではなかつた。これでも多少は見識を持つてるのだから、婆アやさんが時時、

『あんたはお氣の毒なお身です、わ』とか、『お子さんが成人なさるのがお樂しみでしよ』などと云つて呉れるくらゐでは、まだまだ遠いへだたりを感じた。

そして何かにつけてわれ知らず癇癪はかりが起つて、小西さんへもその奥さんへも、時時、あとでは申しわけのないやうな突ツかかりをして、

『幸田さんは主人をどう思つてをる』などと叱られた。

『實は、わたし早くおへんどさんに行きたいのですが、ね』と、おせいは半ば不平晴らしに、また半

ば歎願するやうに云つた。巡禮にでも出れば、このからだぢうに欝してゐる氣持ちがまぎれるだらうと思つたからである。そして主人から許しを得ると直ぐ、東京の子供へは、『雄ちやん、政ちやん、わたしはこれからいよいよ暫らく巡禮に出ます。今一度はここへ歸てつ來ますが、面白いことがあれば歸京の上お話してあげますから、待つてゐなさい』と通知した。

規則通り警察へ届け出ると、五圓以上のかねを以つて出てはならぬと云はれた。その爲めに人がよく棒泥に逢つたり、殺されたりすることがあるからである。

用意の品物では、おせい自身が拵らへたのは札ばさみの板だけで、長さ六寸、幅二寸、そのおもてには『大正六年九月十日、奉徧禮四國中靈場同行二人』そのうらには『南無大師遍照金剛、德島國板野郡小西方幸田せい』と書かせた。その他のふり鈴、笠、杖、ござ、白木綿のかたぎん、脚絆、づだ袋などは、小西や近所のものらが呉れた。自分ひとりでも行かうと思つてるところへ、ついでにつれて行つて呉れいと云ふお婆アさんがひとりできたので、同行二人となつた。

西國巡禮とは違ひ、四國遍土は眞言宗で、御詠歌も亦別なのがあつた。それはみちみちおぼえるつもりで、その『道中記』をも人から貰つて用意した。

一體おせいがゐるのと同郡の板東村から初めて、先づ德島、それから土佐、伊豫、讃岐と順にまはるのだが、また逆に行くのもある。そして逆に行けば、今でも必らず大師に會へると云ふはなしだか

ら、耶蘇教信者であつた時から奇蹟を信ずる自分としては、この方がありがた味があると思へた。それに、自分の出發するところから直ぐ讃岐へ行ける國道がついてゐるのでもあつた。

『あなたは餘ほど信心がおつよいかして、いよいよお遍土に出るときまつてからは別人のやうに元氣がおでになりました』と、奥さんも近頃珍らしい愛想がよかつた。

『…………』それはさうにきまつてるだらう。兼ねての望みが達するのだから、いや、もツと深く云へば、自分のからだに鬱し切つてる慾情を大師さんによつてもツと高尙な方へ向けようと云ふ喜びも、少からず手つだひをしてゐたのだが、これは誰れにもうち明けられなかつた。

いよいよ出發と云ふ朝、早く、皆に見送られて家の門へ來るまでに、逆まはりのしるしとして札ばさみを右の肩へかけた。その方の手なる鈴を一つ振つて見て皆を後にしてだが、初めてころ見に、『南無大師へんぜうこんがう』と、思ひ切つてあはれな節で云つて見た。が、俄かに恥かしかつたので、直ぐ『あはツ――ほ、ほ』と皆に向き直つて、自分から腹をかかへて笑つたのである。

『なかなかじやうずだツせ』と、大阪へも行つてたと云ふ近處のかみさんが云つた。

『まア、御無事にいておいでなされ』と、奥さんも機嫌よく微笑しながら別れを告げて呉れた。

『…………』が、おせいは暫らくのお別れかと思ふと、自分のふりを今一度見まはして見て、なんだかひどく恥かしい上にまた悲しくもあつた。そして手に持つ鈴をわざと鳴らないやうにしてゐたのだ

が、それがどうかした拍子に、今度はまたひとりでにチリンと一つ鳴つた。
『さア、本氣になれ』と、なにか不思議なあたりから催促されたのであるかのやうで――俄かに自分の氣をも引き立てた。
『ぢやア、行つてまゐりますから。』
『御機嫌よう――御無事に。』
『…………』嬉しいやうな、併しまた情けないやうな氣持ちで自分の、と云つても自分の寄寓してゐるうちの、門を出た。讃岐の國ざかひまでは二里ばかりの道を早くぬけてしまひたいのであつた。
『初めはちよツと恥かしいさうやけんど、な』と云つた同行のお婆アさんも、自分らの近處の町や村を離れてしまふと、しら木の杖をついて歩きながら、こちらよりもさきに御詠歌がはりの『なむだいしへんぜうこんがう』をねむたさうに唱へ初めた。
『…………』おせいは、それを年うへた婆アさんだから矢ツ張り自分よりも圖圖しいのか知らんと見て取つた。が、自分も先きざきに對する稽古の爲めに同じことを、もう、恥かしみもなく繰り返すことができるやうになつた。けれども人のかどに立つて、御報謝を貰ふことはお互ひになかなかできなかつた。

五

白鳥神社とは日本武尊が伊勢の能褒野で白鳥に化して飛んで來られたあとの記念だが、ここから五里、大窪村と云ふのに四國八十八箇所の最後のがあつた。南向きで、本尊は弘法大師の作なる藥師如來の坐像である。

『南無やくし諸病なかれと願ひつつまゐれる人はおほくぼの寺』と云ふ御詠歌を本尊に向つてかたの如く三べん唱へた。そしてそのしるしとして兼ねて用意して來た帳面に寺の印形を押して貰つた。これがおはつの印であつた。

それからまた四里で、平地南向き觀世音菩薩の八十七番である。この御詠歌は、『あし引きの山鳥の尾の長尾寺秋の夜すがら彌陀を唱へよ』と云ふのだが、これがおせい自身の兎角亂れがちな慾情を抑へ靜めるには實にいい歌だと自分で思へた。乃ち、自分の氣持ちと今の季候とにそツくりよく當てはまつてゐたからである。そして宿へとまつて、はら密たしん經を唱へながらも、この歌ばかりを思ひ出してゐた。

また一里半にして志度寺があつた、推古天皇の御草創だと云ふが、これが八十六番で、十一面觀世音がまつツてあつた。この境內には足の腐つてちぎれたのと口や顔がうみだらけのと、二名の癩病の

物貰ひがゐて、

『どうぞ一文やつて下さい』と云つてゐた。おせいは田口に慈善をしたりされたりするのを嫌つてる習慣があるのを特に思ひ出したが、こちらは今は貰つて歩く身であるから、向ふをも可哀さうになつて、歸りの時に少しづつかねを與へた。

行く手に、松露でもありさうな松の竝み木街道があつた。その向ふから、これも巡禮すがたのものが十名ばかり揃つてやつて來た。男や女が入りまじつて賑やかさうなのを妬ましく思へたが、おもて向きでは、

『あなたがたも御奇特でございます、ね』と聲をかけてとほしてやつた。

『なむだいしへんぜうこんがう』と、ひとりの若い男がわざと冗談らしく云つて行つた。

『………』あれらこそほんとうの道樂にまはつてゐる手合ひであらうと見えた。

また一里にして山上南向きの八栗寺へ來た。それから一里、壇の浦で、屋島の山を十丁のぼつたところが八十四番であつた。

『あづさ弓矢島の寺にまうでつつ祈りをかけて勇むもののふ』を三度唱へた時はおせいも自分で源平の昔が思ひ出せてまた一倍の力を得た。そしてこの島の北はな長崎と云ふところに安德天皇御行宮のあとがあると聽いて、それもついでに見に行く氣になつた。

が、初めからつづくかどうか怪しかつた同行者が、
『そないな無駄なとこへ行くのは御免や』と云つた。
『………』その心はこちらでも讀めないほどのことではなかつた。同行者はただ寄り道をばかりでなく、巡禮その物をいやになつてゐたのだ。で、おせいは『折角出て來たのに、それぢやアあなたも御ごりやくにやアなりませんよ』と、自分が大師さんででもあるかのやうに云つて聽かせた。そしてこれは信心一つで行けるのだから、しツかり信心を持てと勸めたけれども、とうとうここで立ち別れることになつてしまつた。

自分だツて、無論、寺寺では本尊の御佛像に相應した諸眞言の短い文句、『おんころころせんだりまとうぎそわか』とか、『おんあろりきやそわか』とか云ふのを唱へながらも、實際にどう云ふのが眞言の信仰であるかはよく知らないけれども、斯うなると、落伍した同行者に對してもまた意地が先きに立つて、どうしても逆じゆんをすべてまはり通さないでは置かないといふ決心がますます強くなつた。そして御行宮のあとをも獨りで見に行つて來たが、小豆島の姿を海上に眺めたのは一つの思はぬ儲け物であつた。そして斯うしたことからでも、自分だけがえらいことをやり通せる人のやうに見えた。

それに、おせいには一箇所、高松に於いて立ち寄る家が初めから——東京を出る時から——きまつてゐた。それは瀧川と云ふ人のことで、もとは田口と或學校で英語の同僚たるよしみがあつたところ

から、こちらが田口と別居してゐるのを知りつつも――さうだ、その時はまだ別居だけであつた――
或日、櫻川町へ尋ねて來て、
『奥さん、どうか一つ急場を助けて下さい、或事件でどうしても四十圓入用ですが』と云つた。あまり樣子が氣の毒なのでその半分だけを都合してやつたところ、それツ切り音沙汰がなかつた。その後しばらくしてから、高松の中學へ轉職してゐることが分つて、催促狀をも發し、斷わりの返事も來てゐた。そこでそのおかねを報謝としては大き過ぎるが――取り立てて行くつもりであつた。
高松市へ近づいたのは、午後の一時頃であつた。東京では雄作も、もう、着てゐさうな制服の生徒三名に行き會つたので、
『あなたがたは瀧川と云ふ先生を知りませんか、ね』と、尋ねて見た。すると、同じ學校の生徒かして皆でよくところをも敎へて呉れた。
小さい家だけれども、小ざツぱりしてゐるらしい住ひであつた。わざと鈴を鳴らしながら近づいて行くと、丁度、みおぼえのある細君が窓から顏を出した。
『…………』かの女は併しただ當り前の巡禮が來たのをでもみてゐるやうすであつた。
『わたしは田口のもとの家内ですが、ね』と、いきなり名のつたのだが、ここではまたもとのだけは云ひ添へるにも及ばなかつたのにと思ひ返せた。

『まア、奥さん！』細君はびつくりしたやうすに變はつたのであつた。まア、あがれと云はれたままにわらぢをぬぎ、足を洗つた。そのうちに、瀧川さんも歸つて來て、けふはとめて貰ふことになつた。

おせいは、あれからの田口との行きさつや繼母お彙のことを詳しく語つて、久しぶりに自分で溜飲を下げながら、

『とても、だから、お話になりません』と、自分から田口らのことを卑しんでみせた。

『さうでしよう。呆れます、ね。あの人はもとから品行がよくなかつたから』と瀧川さんも贊成した。

『…………』併し、また、おせいが思ひ返してみると、そして細君の無事なのを妬んでみると、瀧川も亦この方ではあまりいいことはしてゐないのであつた。田口のやうにそとでの放蕩はしなかつただらうが、うちでは細君を一度は病死せしめ、二度は逃げ出さなければならないやうにした。そして、

『その原因はしつツこくツて、おれなんぞのやうにあツさりしてゐないからだらう、さ』と、田口も云つたことがあるので分つてた。『あの目が飛び出してゐるのでも、大抵知れてゐらア、ね。』

『…………』さうだ、今でも渠の兩方の目が相變らず變に飛び出してゐるのにおせいは氣が付いた。そして今度の細君が嚴丈なはうで、斯う長く無事につづいてゐるのかと思ふと、こんな夫婦も羨やましいやうだが、またいやらしいもののやうにみえた。そして矢ツ張り、自分ひとりの方がさツぱりと

淸くていいのだらうと考へられもした。
主人が晩酌を好きなので、おせいもその相ひ手をしながら、もとから坊さんには知り合ひを持つてたこの人から弘法大師や眞言宗の說明を聽いて、自分のしてゐることのありがた味を加へた。
『併し、逆にまはれば大師さんに逢ふなどとは、迷信に過ぎませんよ』と云はれた時には、
『でも、人の云ひ傚して來たことにはなかなか眞理がありますから、ね、これも實際にやつてみて來てからでなけりやアさう容易に否定もできないでしよう』とかの女は答へた。本當に逢へるものなら自分も逢つてみなければ損だと云ふ氣になつてゐるのだ。が、主人は反對なのかして、それツ切り興ざめがほになつた。で、また、こちらは話を田口に對する不平のことに向けた。
その翌日は丁度日曜日であつたので、少し派手過ぎる細君の衣物を借り着して、瀧川さんに藩祖松平氏の栗林公園や、黑田如水の舊城址などを案內して貰つた。そして貸し金のうち半分だけを受け取つた。若し少しでも渡さなければ、この巡禮に對して失敬ではないかと怒り立つてやるつもりであつたのだが――。そしてその翌朝早く出發した。路ばたの萩の花やすすきに露が置いてるのをみて過ぎながら、
『僕も相變らず子供が多いので困りつづけてゐますから、あとはまた今度に』と瀧川さんが意氣地なく云つたことを思ひ出してゐる。渠に比べてみると、まだしも田口の方が腕があつて、えらくみえた

が、それだけ後者は憎らしく、前者は可哀さうである。だから、自分はこの心持ちを以つてみちみち乞食にも施しをして、最後の御りやくを得ようときめた。

『國を分け野山をしのぎ寺寺をまゐれる人を助けましますす』の國分寺だけは、燒けてしまつてあとかたがないと聽いたからぬかしただけで、順當に讃岐富士を右に見て丸龜市をも通過し、大師の誕生地なる善通寺七十五番の札所、五岳山誕生院へ來た。四國第一のお寺だと云はれるだけ、廣い境內に宏大な構へが大師さんの御威光と受け取れて、

『われ住まばよも消えはてじ善通寺深き誓ひののりのともし火』も殊にありがたかつた。ここに大師その人のお作なる如來の佛像が安置されてゐた。

直ぐにはこの地を立ちかねたので、ここの宿屋にとまることにした。そして夜になつてまた境內へ行つて見ると、多くの人が輪になつて一つの大きな珠數をくりまわしながら、光明眞言とか云ふのを唱へてゐた、――

『おんうん、おぼきやあ、べいろしやなう、まかぼだらあ、まにはんどば、じんばらはらばりたや――おんうん、おぼきやきや、べいろしなう』などと。

繰り返し、繰り返し、これを限りなく唱へて行くのだが、おせいもそれを聽いてるうちにおのづから引き入れられてしまつた。そして、長い珠數のあひだに一つ特別に大きな玉が這入つてるが、それ

が自分の前にまとつて來るたんびに、自分も人並み通り一度づつ押しいただいた。そしてそのまはりかたが、夜が更けるに從つて、『おんうん、あぼきやあ』と共に早くなつて行くのをおぼえた、そしてあらゆる屈托や心配ごとをすツかり忘れてゐたが、皆解散してしまふと、却つて不斷忘れてゐたことまでも俄かに思ひ出せた。そして自分ひとりで夜びえをおぼえながらも、まだ境内をぶら付いたのが、若しこの心が見えるものなら、犬か猫の姿になつてゐはしないかと思はれるほど、自分の慾情が放縱に動いてゐた。

けれども、やがて會ふことができる筈の大師さんを自分の理想のをつとだと思ふと、もう、おせいは田口や瀧川のやうな俗人がみちみち自分の見る癩病やみよりも卑しいもののやうになつてしまつた。お大師さんのお姿さへ見られて、若い時の夢に自分の戀人に逢つた如く、この身もたましひも一度は收縮して、それから全くとろけてしまつてもかまはないのであるが――。

お大師さんの御誕生地を見た以上、もう、成るべく早くそのおかたに逢ひたかつた。が、ついでだから、また一里ばかりを象頭山金比羅大權現へも參詣することにした。が、神佛混合を禁じられてから、國幣中社としても正殿には大物主、相ひ殿には崇德天皇をまつつてあるのであつた。雨がはにみな大きな宿屋が立ち竝らんでるあひだを突き當つて、仰ぎ見れば五百段も六百段もあるかと思はれる石段を登つた。そしてふり返る每に、自分の眼界が開らけて行つて、海岸から直角に這入つて來る汽車

の道や瀬戸内海の島島も見渡された。

曾て經驗したこともないやうな、すツとした氣持ちになつて、好きも嫌ひも、愛も憎みも、罪も報いも、又人もわれもなくなつてしまつた。そしてこれならわざわざ巡禮と云はず、ただの旅行をしてゐてもよかつた。けれども、その高みを下だつて、再び自分の鈴の音を聽くと、おせいはまた自分の自分を見た。人間としての恨みや慾がつきまとつてる自分を！　そして矢ツ張り大師さんに逢はねばこのつき纏ひをふり落して貰へないやうな考への方へますます深入りして行つたのである。

『大慈大悲の觀世音――南無大師へんぜうこんがう』と唱へながら、とうとう讃州一體の札所を、

『はるばると雲のほとりの寺に來て月日を今はふもとにぞ見る』と云ふ、六十六番のたつみ向き雲邊寺までさかのぼつて來た。ところで、雲邊寺は讃州のさかひをはづれて阿波の國になつてるのだが、これから五里を伊豫の三角寺へ行かねばならぬ。

おせいがここでちよツと考へたには、きたない宿屋へとまつたり、見ず知らずの百姓家で厄介になつたりすることは少しもかまはないが、斯う獨りで自分の足や手をばかり勞してゐても仕かたがなかつた。だから、一つ、坊さんと問答をして見るのもいいだらう、同寺の住職へ會見を申し込んだ、そして他のことは聽くにも及ばないとして、自分に肝腎なことを持ち出し、

『逆にまはつたらお大師さんに逢へると申しますが、ね、それは本當でしようか』と尋ねて見た。

『本當です。逢うた人がたんとあります』との答へであつた。

『………』その職にあるものまでがまさかちそは云ふまいと勇み立つて、また杖を曳いた。そして歸京してのはなしだねにもと、日本一だと云ふ道後の溫泉へも一度は這入つて見て、つひには豫州全體のをも四十番の觀自在寺まで達した。

それから土佐の國へ移つたのだが、これまでにも、番號がへるに從つて札所と札所とのあひだが二十一里または十三里もあつたのに閉口したのが、直ぐまた七里、十二里、二十一里と來るので、もう、おせいも根が盡きてしまひさうになつた。さうかと云つて、もう半分以上をすませたところで、空しく引ツ返すのも惜しかつた。

無理に足を引いて、三十八番の足ずり山から岩本寺へ進む途中枯れ葉になつた柳の木の根もとに、なんだか變な物が疊んだまま腐つてゐた。おせいは足をとどめて勞れた腰を曲げ、暫らくずツと目をそそいでゐたが、なんとも判斷が付かなかつた。で、鈴を杖の方へ一緒にして、左りの手を延ばして――きたならしいとは思つたが――ちよツとつまみ上げて見た。すると、それがぼろぼろに崩れた。

矢ツ張り、なんだか分らないが――この時ふと思ひ出したのである、

『お大師さんに逢ふまへにや、きツとふるい袈裟の落ちとるのを見るさうや』と坂西村の人がひとり云つて呉れたことを。

『………』さうだ、それに相違ない。いや、さうでなくとも、この場合はそれとして置かなくてはならぬ。斯うおせいは獨りぎめして多少の望みを持ち直したのである。

けれども、岩本寺までは二十一里もあるので、一日はおろか、二日二晩でも行けないのであつた。すると、一の瀬と云ふところからさきに坂があつて、その坂をおせいがのぼり詰めかけた時、向ふから坊さんがひとり越えて來て、にツこりすると同時に笠をかた向けて、

『御奇特ぢや』であつたか、『御奇特や』か、兎に角、さうしたこと葉をかけて過ぎた。

『………』おせいは全くおそろしい夢にでも襲はれてゐる氣持ちであつた。よく見ようとしても、ろくにこの目が云ふことを聽かなかつた。きツとお大師さんだと思つたからである。そして今一度ふり返つて見ようとしたが、もうその姿が見えなかつた。

『南無大師へんぜうこんがう』チリリンと、立ちどまつたままで小くびをかたむけてみたが、あまりにふる袈裟とのあひだが存外に早かつたので、疑はしくもあつた。が、あのお言葉と云ひ、お顏つきと云ひ、たとへ、坊さんでも竝みの人間であつたら、とてもあり得べきものではなかつた。品がありすぎ、位があり過ぎた。

さうだ！　自分が考へてたよりもずツとお若いけれども、そして自分などはそのをつとや茶飲み友達たるよりも、その姉か母かに當るべきには失望したけれども、矢ツ張りお大師さんに相違なかつた

だらう。そしてそれにきめてしまつた時には、おそれ多いながらも、自分が渠を善通寺で生み落したその母親であるかのやうな親しみある信仰にまた違つた元氣を得てゐた。

　そして、もう、占めたものだと喜び勇んで、おせいは土佐國十六箇所、道法九十一里半（そのうち二箇所十九里は遭遇以前に濟み）をほんのただ申しわけの型ばかりにまわつた。そして阿波二十三箇所、道法五十七里半三丁をも、ただ十七番井戸寺の御詠歌。

『おもかげをうつして見れば井戸の水むすべば胸のあかや落ちなん』と云ふのには自分のこれまで湯を嫌つて、からだをあまりにきたなくしてゐたことに思ひ當つて、以後は少し風呂に行かないまでも、水で毎朝からだをふかうと云ふ考へを得た。

　巡禮はいよいよ板東村の第一番靈山寺に至つてすべてが濟んだので、おせいはこの自分がお大師さんに逢つたことと、袈裟を見たこととの二大事件を、靈山寺と同郡であるところの板西村へ歸つて、何よりも先きに全く本當らしく吹聽するのが嬉しかつた。

　そして暫らく見なかつたので、けちだと云ふ缺點に對するこちらの反感も薄らいで寧ろなつかしかつたその奥さんまでが、

『それでは皆の云うてることもほんまや、なア』と、信じて吳れた。

『無論、本當ですとも！　こツちがしツかりした信仰さへ持つてれば、この奇蹟にやア誰れでも逢へ

るんですから。』

と、一層言葉をつよめた時には、雲邊寺とか天邊寺とか云つたお寺の住職の言葉などは引き合ひに出すのでもなく、おせいは一座の皆々に對して、自分だけがえらいことを敎へてゐる氣になつた。そして方方のお佛壇の繪に見る弘法大師が椅子に坐わつてござるお姿に照らし合はせても分る通り、『お大師さんは而もまだお若いんですよ』と云ひ添へた。が、このおかたをでもあの善通寺で産んだ母親がある以上はその母親だツて男があつたのだと云ふことは、これは自分だけに思ひ出してゐた。

そして直接にお大師さんに逢つたと思へた時のやうな、疑はしい然し正直な喜びや親しみは、もう、自分に無くなつてるのをおぼえた。その他のことごとになると、また一層、親しい記憶がなかつた。あんまりおなじやうな、そして詰らなかつたやうなことばかりが多いし、また長い日にちを、本によつて數へて見れば、合計三百五十九里半も旅行したのである。だから、その一一を再び詳しく人人に語つて聽かせるにはうろおぼえに過ぎてゐた。

小西のうちでまた二日と立ち、三日と過ぎるに從つて、この二箇月あまり報謝を受けつつ四國をめぐつて來た旅行を私かに考へて見るとまるで狐につままれてたやうで、自分に殘つたものはただ瀧川さんから受け取つたかねのうちから三圓五十錢ばかりであつた。そして自分のあたまは少しもとりとめがなく、がらんどうのやうだ。そしてこのがらんどうの中をおせいは、三疊のまにゐて、夜など獨

りで自分が自分で見つめてゐると、大きなお堂に於けるやうな響きが聽えた。これはほかでもない、自分が矢ツ張り誰れとは無しにをとこ戀しさの聲であつた。

今や家まで失つてる自分として、おせいはさう云ふことに氣が付くと、相變らず自分を棄てた田口が憎く、自分の代りになつたお粂と云ふ女が妬ましかつた。

巡禮後のおせい

『せめてことし一杯は、なア』と、主人や奥さんからは云はれてゐたのである、『をつて貰はんと。』

けれども、おせいは東京にゐるものを、田口やお粂を初めとして、すべて誰れでも、なつかしいと云はんよりも好ましくなつて來ては、もう德島のやうな寂しいところには辛抱してゐられなかつた。

一

四國めぐりから歸つて、小西の家にまた半月ばかり申しわけだけにもとの奉公をつづけてから、

『どうも、矢ツ張り、からだが本當ぢやアないやうですから、寒くならないうちに』と云つて、そこを引き上げたのである。が、實際には、惡いのはあたまがぼんやりしてゐるばかりで、からだの方は巡禮前に比べて少しは肉も付いたかと思はれるほどだ。そして男のお役に立てようとすれば確かに立てられるほどのからだになつてゐた。

小西の家を出發する時にも、身がるがいいと思つて、巡禮すがたで出たので、大阪へ上陸すると直ぐ、汽車で四國八十八ケ所の本もとなる高野山へ向つた。そして山上の宿坊へのぼると、おせいが先づ誰

れにでも報告したのは路傍の袈裟を見たこと、御大師さんに逢つたことであつた。そして自分のまわつた札所の印がすべて揃つてる帳面を見せると、
『御奇特でござりました、なかなかこれだけすツかりまわつて來るおかたはありまへん』と賞められた。
『さうでせうか？』おせいはちよツとくびをかしげて、おもてでは無邪氣さうに見せたが、實は、それを無論だとして得意であつた。そして、土佐の坂みちで自分がお大師さんとして見た若い坊さんもこちらに向つて奇特と言ふ言葉を用ゐたが、この言葉が、その道の人々の通用語であつて見れば、あれも矢張り奇蹟ではなくてただの坊主であつたのだらうかとまた思ひ疑はれ出した。が、東京へ歸つても、あれをお大師さんのお姿であつたときめて吹聽するつもりにしてゐたので、ここでもそれで押し通してしまつた。そしてなほ自分に勿體を附ける爲め、『讃岐の國分寺の印だけがぬけてゐますが、ね、これは火事に逢つて燒け跡ばかりだと伺ひましたから、行きませんでした』とも語つた。
他のどこでよりも一番歡迎されて、獨りで八疊のまを特別に與へられ、二の膳附きで三日間の報謝を受けた。
それから、かの女は奈良へ行つたのである。その近處に有名な易師がゐると聽いてゐたので、えらい人なら入門して見てもいいと思つてだ。內實では、自分のした巡禮の經驗が東京で田口や子供に前

ぶれの吟聽をして置いたほどのものでもなかつたその埋め合はせにもしたかつた。また、既に東京の易の師匠からは見込みがないと破門されてる恨みや悔しさをも少しは晴らしたかつた。それに、また、獨り者なら、それこそお茶飲み友達になつてもよかつた。で、そこを尋ねて行つて見ると、果してゐたことはゐたが、目くらの老人であつた。そして長ねん書き溜めてある物を整理して吳れいと賴まれたので、これも一つの硏究にもなり、經歷にもなると思つて、本人の記憶を問ひ合はせながら、二十日間に大體の整理をつけてやつた。が、あまり六ケしいことが書いてあるので自分にはよくは分らないで濟んだ。

名古屋へも立ち寄つた。そして初めから心當てにしてゐた田口のもとの友人なる耶蘇敎牧師の家に一泊し、田口の惡口を十分に云つて聽かせて、この人からも、讃岐に於ける瀨川さんからと同樣に、こちらに對する同情を呼び起して、自分の滿足を得たのである。

これで、もう、東京を出た時からの豫定がすツかり終はつたので、一と安心して歸京し、また藤戶さんのうちに行つて、先づ自分の巡禮すがたを見せびらかし、『これで四國や高野山をまわつて來たんですよ』と驚かせてから、當り前の衣物に改めた。

こよみを見ると、十二月の三日で、去年、雄作を田口へ渡したのと同じ月、同じ日であるのも不思議であつた。それから、もう丁度一ケ年を經過してゐた。おせいには自分が、もう、一ケ月もたたぬ

うちに四十九歳になる事に思ひ當つた。

その夜、かの女は中島に取られた自分の家がどうなつてるかを見に、こツそりその横町へ這入つて行つて、その障子が締まつて中から電氣の光りのさしてる臺どころ口や、大川さんが占領してゐた切り炬燵のある八疊の部屋の窓したに立ちどまつた。そして、ぢツと中の人ごゑに耳をかた向けてると、あのおほ酒飲みの中島がまだ晩酌をつづけてゐるやうで、その女房や子供がおやぢの機嫌を取つてるはなし聲も聽えた。

自分だつて、田口から滿足に待遇されてゐたら、自分らの樂しかるべき生活をあア云ふ風にあいつらに占領されてしまう筈はなかつたのにと思はれた。

『お前は戸田さんを好きだ、なア』と、中島の機嫌のいい時の聲が云つた。

『…………』子供に向つてだらうが、――戸田と云ふ人の名は以前には自分らの關係範圍に於いて聽いたこともなかつた。今ゐる新らしい下宿客のことか知らん？　それとも、第二の大川さんのやうな帳場がかりをでも置いてあつて、その女の名か？　いづれにせよ、暫らく耳を澄ましてゐたのだけれども、こちらのことは少しも出なかつたのをおせいは物足らぬ感じがした。尤も、自分の話が出て、それが若し惡くちででもあつて見ろ、『今聽いてゐましたが、ね、人のうちを奪ひ取つたうへに、まだ人のことを云ふとアなんです』と、直ぐにも飛び込んで行つてやるのであつたが――。いづれ取り返

してやるから、おぼえてゐろと、締まつてる窓を見上げて心行くばかりにらみ付けた。
その翌日は、おせいも早速しらが染め屋へ行つて、隨分長いあひだうツちやらかして置いた自分の髮の毛を染めて貰つた。そして珍らしくひるまのお湯へ這入つて、顏をもよくみがいた。そして雄作らが學校から歸つてる頃を見計らひ、巡禮帳を話の證據に用意して宮仲のうちへ電車で出かけて行つた。すると、田口は外出、お衆はしたの春子をつれて隣りへ行つて、ふたりとも留守であつたのを幸ひ、おせいは早速玄關の部屋にゐた雄作に向つて、
『どうだ、え、ままツ子あつかひにされてやしないか、ね？』
『されてゐます』との答へであつた。
『さうだらう』と、おせいは云はないことかと云はぬばかりに渠の顏を見つめた。
『だから、しつかりしておゐでよとおツかさんが旅に出る前にも云つて置いたぢやアないか、ね？』
『もう、燒け火ばしでつせかんされたり、喰べる物を喰べさせられなかつたりすることを想像してゐた。
『もう一ケ年ぢやアないか、ね、そのあひだ虐待されてたんぢやア、からだも惡くならない？』
『なりました。』
『今もかい？　どう云ふ風に？』
『あたまが痛いんです。』

『………』子供ながらも心配する爲めだらうと思ひ取つて、『それぢやア、勉强もできないだらう！』

『やつてることはやつてるけれど――。』

『にイさんはわうだん病になつたのだよ』と、小まツちやくれの初雄がはたから口を出した、『さうして喰べ過ぎたつておかアさんに叱られたの。』

『少しぐらゐ喰べ過ぎたつて』と、おせいは初雄には頓着しないで、『今ぢやア、からだの發達ざかりだからいいけれど――。』

『おとうさんからも便所でいたづらをするツて叱られたよ』と、初雄がまた。

『うそつけ！』雄作は怒鳴つた。

『ほんとだい！僕も氣をつけて見たら、お菓子の白いこなが落ちてたから、きツと、にイさんは便所でお菓子を喰べるのだよ。』

『そんなことアよくないが、ね。物を欲しけりやア、お父さんにさう云つて、子供だもの、喰べたいだけ喰べさせて貰やアいいぢやないの。』

『だから、僕は朝の御はんはおかアさんも寢てゐるうちにわざと澤山たべてやるんだ。お辨當もおかアさんは女中につめさせろツて云ふけれど、僕が無理に一杯に押し込んでやります。』

『そりやア、女中はあかの他人だからどうでもしていいよ。』

『おちんだつて、僕は、學校からおそく歸つた時は、みんなに何をいくつ貰つたか聽いて、僕のが足りなかつたら、それだけ別にわざと貰つてやります。』さうして時々栗の皮や蜜柑をむいて見て、實が腐つてたり、ふさの數が初雄のよりも少かつたりすると、不足を云つて見せるのだとのことであつた。

『それもまま母を反省させる爲めにやいいことです』と、おせいは雄作の云ふことをすべて惡くない意味に受取つた。『さうして政ちやんの方はどう！』

『政ちやんは馬鹿だから』と、雄作が返事を引き取つて、『初ちやんと一緒になつて僕を排斥したりするんです。』

『僕は政ちやんの味方になつてにイさんと掃木を以つて戰爭して』とは、また初雄の言葉であつた、

『にイさんをとうとう門から入れないやうにしてしまつたよ。』

『さう、そんなことをしたの？』おせいはどうしてと尋ねて見たかつた。すると、雄作がこちらへあまへるやうにして、

『政ちやんはまだわけが分らないんだから。』

『さうだよ。』おせいは今まで何も云はないで默つてる政直に向つて、『お前は雄ちやんの本當のおとうとぢやアないか、ね？』その反對に、初雄はなんでもないと云ふ意味でだ。

『だつて』と、政直は初めて口を切つて、『にイさんは獨りでこの玄關の部屋で寢てゐて、こツそり蒲團をかぶつてやうかんなんか喰べてるから。』

『さうして僕たちには一つも吳れない、ね』と、初雄は政直の方を見た。

『………』おせいはそんなこともまま母の仕向けが惡いところから結果するのだと考へ込んでしまつた。そしてなほ政直に、『でも、お前のにイさんはにイさんだから、そのやうに敬つてゐなけりやアいけないぢやアないか、ね?』

『はい。』政直は膝に手を置いてかしこまつた。

『さうして』と、今度はまた雄作に、『お前の行つてる學校とアどんな中學校?』

『〇學院です。』

『ぢやア、耶蘇敎の、私立だ、ね?』

『おとうさんが一番近いからそれでもよからうツて――それに、僕は耶蘇敎も研究して見るのに都合がいいから。』

『お父アんだツて耶蘇敎は反對だのに――もツといい、府立かどこかへやつて貰つたらいいぢやアないの?』この點だけでも、子供がここの親からあまりいい待遇をされてゐないと見えた。『本當のお父アんまでがそれぢやア困る、ね。』

斯う云つてから、おせいは自分の巡禮によつて得た知識を以て眞言宗のありがたいことをちよッと語つて聽かせた。また、子供にもおぼえがある筈の瀧川さんに會つて、貸したかねを受け取つたことも。そして自分も行つて見た道後の溫泉には、みかげ石造りの三階建ての溫泉場があつて、その立派なことは日本一だと云ふことを、自分は實際にそこへは這入らなかつたが、人の云つてた通りに云つて聽かせた。また、土佐と云ふ國は、人口は少いやうだが、大きな國で、巡禮のみち順を三十六町一里に直せば、おそらく百二三十里以上になることも。

そして今途中で買つてみやげに持つて來た貳十錢の蜜柑のうちから、——多くはお衆に見せる爲め殘して置かねばならぬから——二つづつ三人の子供達に分けてやつた。が、こちらのをよくしないのに、なにも向ふのに盡す必要がないと思つて、初雄には、それとなくだが、わざと成るべくよくないのをその數だけ同じやうにして渡した。すると、渠がそれを知らないで、

『ありがたう』と喜んだのを、こちらはいぢらしくなつたけれども——。

『さうして』と、おせいは雄作に、『あのことはいまだに知れないかい？』

『あのことツと——？』

『それ、去年の暮れのこと、さ。』田口の十五圓を橫取りしたことをさしてゐた。

『…………』雄作は少しいやな顏つきをしたけれども、これもそばにゐる初雄を憚るやうにして、『あ

れは時々云はれます。然し、あの通りとは思はれてゐないやうです。』

『いつまでも云ふんぢやアないよ。』

『はい』と、雄作はこちらのして見せたこわい顔を見つめて答へた。

そのうちに、お粂が相變らずぞべらとしたなりをして、春子を抱いて歸つて來た。

『おや、いつお歸りになつたの？』怪訝さうな顔をして、玄關の土間に突ツ立つたまゝ、自分のうちだのにあがらうともしなかつた。

『きのふ歸りましたが、ね』と、おせいは答へたのであるが、向ふのやうすがこちらの來たのを困つたと云はないばかりであつた。つまり、子供をいい氣になつて虐待してゐた弱みがあるからだらうと思はれた。で、こちらも少し馬鹿にして『まア、早くおあがんなさい、な。』

『…………』云はれるまでもないと云つたふりで、お粂が玄關をあがつて茶のまへ行つたので、おせいもわざと遠慮なくその方へついて行き、殘りの蜜柑を風呂敷ごと出して、

『これは、もう、今少しづつ子供に分けてやりましたが、ね——公平に』と、この最後の言葉を先づ向ふへの當てつけにした。そしてこちらはかの女に抱かれてゐる春子があたまの髮を長くして可愛い兒になつて來たのを私かに憎らしく思へた。

七

　すると、お兼はこちらの強みを避ける爲めにだらうが、直ぐ話を四國のことへ持つた行つて、
『どうでした、ね、あなたの巡禮の結果は』と云つた。
『…………』それには、今度は、おせい自身の方が少く引け味をおぼえた。と云ふのは、さきに東京を出發する時大いに吹聽したほどの効果を得てゐないことが自分自身にも分つてたからである。が、さうは見せたくない爲めに、『まア、これを見て下さつたら分ります』と答へて、用意して來た巡禮帳を出した。
『なんだ、判取り帳を見たいなもんぢやアございませんか?』お兼は兒に乳を飮ませながら、暫らく繰り開らいて見てゐたのが、斯う云つてこちらの大切な帳面を疊の上に投げ出した。『わたしだツて、新潟にゐた時はこんな判は誰れにだツて押してやりました、わ。』
『だから、信仰のあるものにやアありがたいんぢアありませんか?』おせいはお兼を寺に生まれながら實に失敬なことをする女だと私かに怒らないではゐられなかつた。が、自分のやつて來たことに估券をつける爲め、自分の怒りを抑さへながら、まじめ腐つて例のくさつた袈裟を見たこと、お大師さんに逢つたことを語つて聽かせた。隣室にゐる子供にもよく聽えるやうにだ。

時間から云つても、場所から云つても、斯う遠ざかつて見ると、ますます自分自身でも信用できなくなつてることではあるが袈裟ではないかと見えた物が柳の根元に腐つてゐたのは事實であり、その時お大師さんだらうと思へた若い坊さんに坂の上で出逢つたのも事實だから、それを直ちにそれとして置けばいいのであつた。誰れも自分のほかに見てゐたものはなかつたのだから、それを間違つてたと云ふ資格のあるものがない。そして自分が見たことにして置く方が、四國めぐりの順當にも叶ひ、自分にも重みが附いて、都合がよかつた。

『でも、そんなことが今どきありますもんですか？』

『然し、わたしが實際見たんだから、仕かたがないぢやアありませんか？　それもわたしが幸ひに逆にまわつたからですよ。逆にまわれば、きツとその途中で袈裟の落ちてるのを見る、さうすると、またお大師さんに逢へると、誰れでも云つてることでしたし、また讃岐と阿波の國ざかひの天邊寺の住職も云つて呉れました。』

『ぢやア、さうして置けばいいでしようが、ね、子供は矢ツ張りあなたに似てなか〳〵强情ですよ。』お粂は話をその方へ轉じた。『强情ばかりでなく、喰ひしん坊でづるくツて！』

『わたしやアなにも喰ひしん坊やづるいことアありませんよ。』おせいはお粂の攻撃をとぼけてそらせるつもりで、『これでも巡禮をしてゐたツて、あはれなものを見りやアたとへ一錢でも二錢でも必らず

やつて來たんですから、ね。』

『そのあなたの留守にも、雄作は第一買ひ物に行つて來ても、いつもおつりを返したことがないんです。さうして、見ツともないことにやア、女中の目を盜んでつまみ喰ひをする。わたしのゐないときにやア、また、戸棚から砂糖を出して嘗める。御はんはたべ過ぎてわうだんにやアなる。わたしがそれを爲めにならないから頻りに注意してやると、意地惡くでも云つてるやうに思ひ取つて、物をこわしたり。おしまひにやア、自分でこツそり買つて來たお菓子なんかをはばかりの中や寢どこで喰べたりして！もう、わたしやアなにも云はないつもりですが、ね、その爲めに弟どもにまで馬鹿にされてるんですから、ね！』

『………』おせいは雄作に弟はふたりもないぞと云ひたかつた。

『わたしが臺どころでそれとなく聽いてると、雄作はお湯の中で政ちやんをつかまへて、初雄のことをなぜあんなあかの他人の味かたをするのだ、お前の兄弟はこのにイさんだけだよなんて、自分が馬鹿にされるやうなことをしてゐながら、聽くのもあはれなけち臭いことを弟にまで泣きつくやうに云つてるんですから、ね。』

『………』それは當り前ではないか？　政直こそ何も知らないであんな初雄と一緒になつて本當の血を分けた兄に當たつたりしてゐるのを私かに馬鹿だといきどほられて、おせいは先づ雄作を辯護し

てやるつもりになつて、『でも、子供にやアまた子供の考へもありましようから』と云ひ返した。

『ぢやア、何が子供の考へです？　あなたは一體、初めからわたしを馬鹿にして、わたしが何かままツ子いぢめでもしやアしないかとばかり思つてたのでしよう――あかの他人と云ふのもあなたの口ぐせでしたから？』

『さうでもありませんが。ね』と、おせいは受けたが、向ふが問ふに落ちず語るに落ちたのぢやアないかと云つてやりたかつた。が、どうせこの女に云ふよりも直接に田口に向つてそれを責める方がいいだらうと思へた。

『あなたが、多分廢嫡されるかも知れないとでも智慧をつけて置いたのでしようが、ね、子供は今からおとうさんの六法全書なんかを讀んで、おとうさんの留守に時々わたしに喰つてかかりますよ。わたしにやアちツともそんな氣はないのに。』

『…………』分るものかと云つてやればどう答へるか、きツとまご付いたに相違なからうと考へられたが、おせいはそこまで押し迫まるをさし控へた。そして『わたしが何もわざわざ智慧をつけないでも――』と、そらとぼけて、雄作が中學へ這入つてから餘ほどつよい考へも出て、こちらの云つて聽かせたことを段々に實行しかけてゐるらしいのを喜ばないではゐられなかつた。そして少からず勝ち誇ることができるやうな氣ぶんになつて、鼻の穴をほじくつてゐた。

そのうちに田口が歸つて來たので、おせいは俄かにこの落ち付きがなくなつた。直ぐまたあたまからおこられはしないかと待ち受けながらも、久しぶりに顏を見るのだから、私かになつかしかつたのである。

『お歸んなさい』と、子供らはうち揃つて渠に挨拶したが、その言葉を、おせいも少しあまへる氣味で繰り返して、田口が玄關のまと茶のまとのあひだの敷居に突ツ立つてるのをちよツと下から笑ひを見せながら、見あげた。が渠は相變らず冷淡にも、

『お前こそいつ歸つたんでい？』

『きのふ歸りましたがね――』おせいはこれツ切りあとの言葉が繼げなかつた。こちらがこれほど親しみを持つて今後も渠に向はうと思ひ直してゐるのに、渠は少しも察して呉れないで、一つには、お傘の手まへをも考へてだらうが、一と言だツてよく無事に歸つたとも何とも云はないのである。それを先づ訴へて見ようか、それとも直ぐ子供の待遇が惡いことを責めて見ようかと迷はないではゐられなかつた。

『生きて歸つて來たんぢやア、また子供に惡智慧をつけるばかりなんだらう。』

『そんなことがありますか？』おせいは横目で田口の動くのに從つて行くと、渠はお傘もゐる長火鉢のそばへ坐わつた。

『今もわたしが、もう、注意をしたのですが、ね』と、お粂はこちらの云ひたい話をも邪魔するやうに口を出した。

『…………』おせいは仕かたがないので、お粂の投げ出したままになつてる帳面を自分で手を出して整へ直し、これを田口の膝さきへ押しやつて、『まア、わたしがどれほどのことをして來たか見て下さいよ、お大師さんにも逢つて來ましたから、ね。』

『四國は弘法大師だが、一千年も以前の人にかい、馬鹿！』

『それがどの宗敎にもある奇蹟なんですよ。』

『馬鹿！今更ら奇蹟なんか――。』田口がまじめに反對しかけたのを丁度いいしほにして、おせいは、

『さう一概にやア云へませんから、ね。』

『若し世にそんなものがあるとしても、人間の本能が緊張充實して常識のさかひを乘り越えたと云ふこと以外にやアない。たとへば、かしは手を打てば瀧の水が太くなるとか、念力で探し物を當てるとか、冥想の極、適中した豫言を得るとか。』

『これが、だから、信仰で靈に通じるんぢやアありませんか？』

『なアに、靈なんて云ふものぢやアない。ただの本能解放に過ぎない。』

『本能でもなんでも、現在自分が見たから見たと云ふんぢやアありませんか』と、おせいは自分の理

靴で押し付けてしまつた。自分だツて、もう、話のたねとしての以外にはどうでもよかつたのだけれども。

『お大師さんはまだお若いのですツてよ』と、お兼までがこちらを冷かすやうに田口へ語つた。

『若いから若いと云ふんですが、ね。』

『ふん！』田口はただ鼻で受けた。

『…………』おせいはこちらの夫婦ともどうして斯う薄情なり冷淡なりであらうかと考へた。

『然し、折角あなたにも見せたいツつて持つて來たんでしようから、ちよいと見ておやりなさいよ』と、お兼はそれでも田口へ勸めた、『また何かの種にもなりましようから。』

『つまらない』と云ひながらも、田口はこちらの帳面をちよツと手に取り上げたので、おせいはそれに向つて、[illegible]

『高野山さんでもこれだけまわつたおかたは少いと云はれて來たんですから。』

『馬鹿づらづらしくやつてりやア、誰れだツてまわつて來らア、ね』と云つて、田口もまたそれをほうり投げた。そして少しきつい聲になつて、『こッちぢやアそんな呑氣どころぢやアないのだ。第一、手めへはあの戸田哀花に下だらないことをしやべりに行つたかして、あいつがそれをいいことにして、碌な小說も書けない癖に、おれを攻擊するやうなことをお前のことにかこ付けて書いたぢやアない

か。』

『………』おせいは心ではいよいよ約束が實行された、な、と考へたが、『わたしやア何も下らないことなんかおしやべり致しませんでしたが、ねい』と、胡麻化してしまつた。

『そんなこたアどうでもいいが、子供が芝の學校から不良性を帶びて來て、政直までが素性の分らない壹圓以上もする銀の水筒をどこからか持つて來たりするし、雄作はまたけち臭くも便所に隱れて菓子を喰ふのアまだしもだが、ね、もう、色けのついた子のするきたないこともやり出したし！　仕やうがないぢやアないか？』

『………』おせいはさう聽くと、先づ、自分の顏が赤くなつたやうに、おぼえた。そして田口をうわ目にも見つめることができなかつた。暫らく何も云へなかつた。初雄が今しがた云つたことも、――まだ小さいからお菓子のことにばかり持つて行つたのであつて――實は、こんなことが含まれてたのかと思ふと、自分が田口へ渡してしまつた繪を惜しがつて、巡禮中にも忘れかねてゐたことまでが恥かしかつた。然し、また、田口があれを今、現在、どうしてゐるだらうと考へると、この親にしてこの子であつたのだ。憎らしいのは田口やお兼ばかりではなかつた。自分はけふは久し振りにとまつて、子供と一緒に寢てやれば、子供も喜ぶだらうし、自分も亦それだけ田口に接近してゐる氣がして嬉しいのであつたが、さう聽いて見ると、もう雄作のからだばかりは蟲の付いた喰ひ物のやうにきたな

らしかつた。止むを得ないから、ただ『ぢやア、よく云つて聽かせて下さつたらいいぢやアありません、か』と云つた。

『そりやア、生理學上からも云つて聽かせた、さ。然し、たびたびわうだんになるのア、ただあいつの喰ひ過ぎばかりぢやアないのだ。』

『へい、その病氣ですの？』おせいは俄かに雄作のことが心配になつた。『さうして醫者にも見せて下すつて？』

『馬鹿な！醫者に見せたツて直るもんかい？喰ひ過ぎだけのことだツて、自分から自分で直さないぢやア直るものぢやない！　だから、おれがお粂に云ひつけて子供の食事を控へ目にさせるやうにしてイるんだが、雄作は殊にそれを惡く取つて、かげで茶碗を毀わしたり、お粂の留守にその鏡をたたき割つたりする！そこへお前が斯う歸つて來たんぢやア、また一層いい氣になるにきまつてるんだ。』

『わたしがゐたら、却つてさう云ふことはさせないわけぢやアありませんか？』

『分るもんか？』田口は斯ういきどほつて見せてから、『今一方のことだツて――こりやア子供に聽えた方がいいから、今云つてやるが』と云つて、或小僧の話をした。おせいも心配だからよく聽いてゐると、その惡いことをぶらんこの柱からすべり落ちる時におぼえたのだが、それから毎日度々やめられなかつたので、段々その顏が青くなり勢ひがなくなつてしまつた。親が氣付いて醫者へつれて行つ

でも、その癖は直らなかつた。そして一年とたたぬうちに死んでしまつた。

『………』おせいもそんな話は初めてなので、聽いてぞツとしてしまつた。そしてふすま越しに雄作の方を向いて、『雄ちやん、よく聽いてゐましたか、え？』

『………』返事はなかつた。

『毎日、あたまが痛い、痛いツつて、みんなそれと喰ひ過ぎとなんだ』

『早く何かして下さいな、ね。』と、おせいも全く折れて出るより外仕かたがなかつた。

『あいつ自身が分つて來るまでは駄目だ。』

『わたしやア、もう、かまはないつもりですから、ね』と、お衆は、もう、これまでにも随分手こずつてるやうすであつた。

『でも、親として引き受けた以上は、ね。』

『親は引き受けるも受けないもないんだ。子供が云ふことをいつまでも聽かないぢやア、處分するだけのこと、さ。』

『………』おせいは學校が惡いのではないかとも考へて、『なんしろ、私立ぢやア仕やうがないから、もツといい中學へ入れてやつたらいいでしように。』

『いいや、場合によりやア、學校もよさせてしまうんだ』と、田口は怒りをつづけてゐた。

『……』おせいもその方へばかり心配が向いてゐたので、その他のことはゆふ食後までも忘れてゐたが、いよいよとまることになつて、自分の子供らの寢どこへ行つた時、政直を眞ン中へ入れて、自分はその左りへ寢た。以前にはいつも自分が眞ン中へ這つてやつてたけれども。

八

三疊のまは親子三人が寢るには狹かつた。が、主人の寢間とは離れてゐるのでおせいが子供とのひそひそばなしを主人に聽かれないやうにするには丁度都合がよかつた。

かの女自身が人情と思つてることにも、もちろん、男と女との關係が含まれてた。自分が田口を薄情だと云ふのは、渠が自分を可愛がらなくなつたからであるが、この情を自分の雄作も亦多少でも解して來初めたのかと思ふと、うかうか物も云へないと云ふ氣がした。そしてそれとは直接に當らないで、先づ、

『雄ちやんはおとつアんの云ふことも考へて見なけりやアいけないよ』としか告げることができなかつた。

『……』雄作の返事はなかつた。が、ないのをしほに、おせいは今度は政直に向つて、

『政ちやんだツて、初ちやんよりやアにイさんの方をうやまつてゐないぢやアいけませんよ。あれは

本當の兄弟ぢやアないんだから、ね。」

『だから、僕、學校ぢやア』と、政直はこれもひそめた聲で答へた、『あいつがいぢめられても、いい氣味だと思つて、助けてやらないんだ。』

『それも少し可哀さうだが、ね――』

『だツて、あいつアいつでも自分で僕のおとうさんは田口〇〇ツてえらいんだぞと自慢ばかりするんだから。』

『でも、政ちやんはどう思つてるの、おとつアさんのことを』と、おせいはそれとなく鎌をかけて聽いて見た。若し好きだとでも云へば、直ぐ反對してやるつもりで、すると、政直は自分でもあまり好きでないかして、

『僕ア友達にも默つてるんだ。〇〇なんて云はれると恥かしいから。』

『さうだよ』おせいは安心であつた。そしてかの去年はやつた『〇〇と兼子と現代式だね』と云ふひやかし唄をまだ政直もおぼえてゐるのだらうと感心した。『あんまりお父アさんの名を出すと、罪もないお前までが却つて世間に恥をかくから、ね。』

『僕は――さうは――思ひません』と、雄作は突然口を出した。『學校の友達がみんな僕のことをおとうさんの雅號で『おい、〇〇』なんか云ふから、僕も直ぐ『おい』と返事をしてやります。』

『それがいけないぢやアないか、ね？』おせいは思はず少し大きな聲が出たのに氣が付いたのである。雄作がそれだけ自分を遠ざかつて行つてることに見えた。自分はもともとから『おとつアさん』と云ひならはせて來た筈だのに、いつからかは知れないが、渠だけがお袋の口調を眞似て『おとうさん』と云ふやうになつたことさへ既に面白くないのだのに。『お前は、もう、今からお父アさんのよくない點ばかり眞似ようとしてゐるんだから、ね！』

『そりやア、おとうさんにもよくない點があるのは僕も知つています。』

『ぢやア、云つて御覽な』と、おせいは今度は少し自分の子の機嫌を取るやうに出て見た。自分を棄てたりして、ほかの女を持つたことでも云ひ出すのだらうと思へたからである。が、渠のはさうではなかつた。

『おとうさんは耶蘇教を惡く云ふけれど、僕ア耶蘇教にもいいところがあると思ひます。』

『だから、あんな學校はいけないツて云ふんだが、ね』と、おせいはまるで豫期とは違つたのがいましかつた。『早く轉校させてお貰ひなさい！』

『友達も澤山できたのだから、轉校なんか――なにも――』

『どうせろくな友達ぢやアないんだらう？』斯うも一つ云つて見なければならないほど、おせいは自分のたよりなさをおぼえた。雄作がうちではおいしい物をたべ、そとではいろんな友達がふえて行く

と云ふのに、自分はこれからどこかへ奉公ぐちを探して、女中にでも行つて、子供の一人前になるのを待たねばならぬのであつた。

『でも、大抵はみんな勉强家だから。』

『雄ちやんはそれでもいいか知れないけれども、ね、おツ母さんは一番つまらない、わ、ね、女中たんかしたツて、お小使ひ一つ吳れる人がないんだから。』

『僕が大きくなつたら、澤山あげます。』

『そりやア分り切つてることだが、ね、まだまだいつのことだか分らないだらう。』

『分らないけれど、――どうせ僕がおとつアさんのあとを取れば、あのお兼なんか追ひ出してしまつて、おかアさんをうちへ置いてあげるんだから。』

『無論、さうでもしないぢやア親孝行にやアならないが、ね――』おせいはそれよりも、もツと目の前のことが考へられてゐた。どうせ、渠が貰つたお菓子などをおすそ分けして持つて來て吳れることなどは、以前からの例によつても分る通り、當てにはならないのだから、いツそのこと、おかねで取つてやれと云ふつもりになつてゐた。今や自分の貯金としては、死んだ文子の記念の四十圓あまりも、雄作が田口へは落したと云つて持つて來た十五圓も、そツくりそのままにしてある。それに、巡禮中に瀧川さんから受け取つた貸し金の半額のうちも、三圓ばかりは使はないで貯金のうちへ殘つてるの

だ。が、それはみな少しでも手をつけたくなかつた。『少しやア、ね』と、もう、政直が寢入つてるのを見すまして、雄作の方へくびをもたげて行つて、『わたしにお前の貰ふ小使を分けて呉れないぢやア困るぢやないか？』

『さう困つてるの？』

『無論だ、わ、ね』と、おせいはその問ひにつけ込んだ。『今ぢやア、假りにも藤戸さんのとこにゐるんだが、ね、あすにもあさつてにもおッ母さんは女中の口を見付けないぢやアならないんだからね。』

『ぢやア、あの帝國文學を賣らうか知らん？』

『どこにあるの？』おせいは乘り氣になつた。

『二階の押し入れの中に。』

『澤山揃つてゐるんだらう』と云つたには、おせいも直ぐその雜誌の第一卷第一號から十ケ年分ばかりが製本された時のことをもとの記憶から呼び出すことが出きた。たださへ暮しが困つてたのに、その製本代の爲めに米屋の拂ひを延ばしたのであつた。

『おとうさんも、こないだ、もう入らないから、賣つてしまうツて、本屋に見せたんだけれど、おせのおかアさんが二圓や三圓ぐらゐなら、殘して置いてもいい、また子供の參考にでもならうツて。』

『もツと高く賣れるよ』と、おせいは自分の方へばかり考へを持つて行つて、『ぢやア、斯うしようよ

――賣れたら、半分はお前の小使ひにしてやるから、あとの半分をわたしにおよこしよ。』

『ぢやア、さうしましよう。』

『然し、お父アさんやお兼に知れないやうに、ね。』この點は、然し、以前にも子供に十五圓の經驗があることだから、大丈夫だらうと思へた。そしてこの夜は珍らしくかの女はうなされもしないで眠ることができた。

おせいの一つの苦勞は、巡禮に行つてゐても、夜中にきツとおそろしい夢にうなされることであつた。これは田口に棄てられて以來、習慣のやうになつてしまつたのだが、この習慣が少しゆるんで呉れたのは、櫻川町のうちであのお客さんの○○と暫らく仲がよくなつてたあひだばかりであつた。

それも、そばに眠つた文子が或夜感づいて、まだ子供だのになま意氣にもせき拂ひをして見せてからは、文子の口から田口の親戚中の問題になつてしまつた。それからと云ふもの、それをそツくり夢にまで見て。田口からあのこはい顏でひどくうなされることも度々であつた。

櫻川町の家を奪ひ取つた大工の中島に夢で出齒庖丁を以つて追ツかけられ、雪隱のなかへ追ひ詰められて身動きもできなかつたこともある。また、誰れとも知れないおほ男の泥棒に蒲團のうへから馬乘りになられ、自分の息の根をとめかけられた。そんな時には、きツと、自分の苦しい聲を擧げてうめいてゐるのに氣が付いて、目がさめるのであつた。

『またゆふべうなされました、ね』と、今度の主人の奥さんによく笑はれるのである。

何とか株式會社とかへ行つてるうちで、主人の淺見法學士といふ人も若いがよく分つてゐて、田口の書いた物をも讀んでるので、こちらが渠とのいきさつを詳しく語ると、十分に同情を以つて聽いて呉れた。が、その夫婦のあひだが如何にも締まりがなくツて、人の見てゐるところでもふざけ散らしてゐる。まだ子供がないからいゝやうなものの、こちらまでが赤い顏をしないではゐられないこともあるのだ。

『うなされるのはわたしの惡い癖でして、ね』と、おせいは笑つて見せたが、そんな時にまだ向ふが目がさめてゐたとすれば、何をしてゐたか知れやアしないと思はれた。道理で、若夫婦がどつちも顏立ちがいいのに、毎朝起きた時にはあんまり目やにを付けてるのも見ッともなかつた。

それに、おせいはお香々を切る時にちよッとつまんで口へ入れる。それを奥さんが見て主人へ告げたかして、

『婆アや、お前は然しつまみ喰ひをする癖もあるさうだが、それだけはよして呉れよ』と云つた。『きたないから、ね。』

『なにもつまみ喰ひぢやアありませんよ』と、おせいは怒つて、きまり惡さをまぎらせた。婆アやなどと呼ばれるのも面白くなかつたのだが――。『女中が主人に味のかはつたものを出してもいけません

から、ね、ちよいと調べて見たばかりで。』引き續いてこちらが田口と一緒になつてゐて見よ、こちらの與へる物を喜んで讀んでるお前らではないかとも云ひ添へたかつた。

それでも、淺見（あさみ）の家で年をも越したが、おせいは矢ツ張り田口が戀しかつた。そしてそれには向ふに子供がゐるのをたよりにしなければならなかつた。そしてまた子供の顏を見ると、田口の物を子供からねだつて見ないではゐられなかつた『帝國文學が賣れました』と云つて、雄作がたツた貳圓をこちらへ渡した時、ほかのものにはこツそりだが、

『これツぱかり！ぢやア、お前が半分以上を取つてしまつたらう』と、こはい顏をして責めて見たのである。

『いいえ、ほんとうにこれが半分です。』

『分るもんですか』と、おせいは不平（ふへい）ながら受け取つた。

『おい、幸田、さうあんまり度々來ると、お前の爲めにならないぞ。注意しろ』と、田口が云つた。

『だツて、子供に會ひに來るぶんにやア仕かたがないぢやアありませんか？』おせいはお衆にもわざと聽いてゐるといはないばかりに答へた。尤も、田口がこちらへ向つていつも冷淡なのに對する不平も手つだつてゐた。そして段々に自分ながら遠慮がなくなつて行くのを感じた。自分と子供とのあひだにどう云ふことが行はれてゐるかと云ふことは、お人よしの田口にはいつまでも分るまいと思つて

た。

或る日曜日に、その前日からとまり込んで、もう、歸つてやつてもいいと思はれる午後の一時頃であつた――玄關の土間までは下りたが、また別れがたいやうな氣がしたので、あげいたの上へ腰をおろし、半身を疊のうへへあげて、雄作や政直が初雄と共に春子を相手にしてゐるのを見てゐた。春子も段々可愛くはなつて、もう、よち〳〵と立つやうになつてゐた。

『また立ちて御覽なちやい』と、雄作が云つて、その兩手を擧げて見せた。すると春子は立ちあがつて、よち〳〵と歩き出した。が、一方の足のさきが疊へひツかかつて、ばツたり倒れた。

『あは、は』と、皆が笑つたので、春子は泣き出した。

この時、お粂が奥から出て來て、ちよツとこちらの樣子を見るが早いか、顏いろを變へて二階へかけあがつた。そして、

『あんた、ちよツと來て下さい』と、田口へ云つてるのが聽えた。『幸田が失敬ぢやアありませんか、やう〳〵歸りかけたと思ふと、また玄關の土間からくびを延ばして子供と顏を見合つたり！さうして春子のはうがそばでよち〳〵してちよツと倒れたら、それを馬鹿にしてみんなでわざ笑つたり！』

『……………』誰があざ笑つたり、顏を見合つたりしたか？あまへて、うそを云ふにも程があらうと、おせいはその癇ばしつた聲まで憎々しかつた。向ふが向ふの子を可愛いなら、こちらも亦同じやうに

こちらの子が可愛いのは當り前ではないか？そしてどちらもこれは田口を一つの父としてだらう。向ふが若いからうそまで云へるのなら、こちらも年相當の申しわけぐらゐはして差し支へなからうと覺悟した。が、お衆よりも先きに田口がけたたましくはしご段を下りて來たのを見ると、渠のおそろしい權幕が想像されたので、いそいで自分の腰をあげぶたの上から放れしめた。

『まだ歸らないで』と、渠は果してあたまからこちらを睨み付けた、『ぐづ〳〵してゐるのか？』

『今歸りかけてるぢやアありませんか』と答へた時には、おせいは入口のがらす戸を明けて、かた足をその敷き居のそとへ出してゐた。自分が毆ぐられても詰らないと思つた爲めだが、なほ自分の左の手を戸にかけて、渠が何と云ふかをうは目に見つめた。

『ぢやア、直ぐ出て行け！』田口の怒りかたはこちらの待ち受けたよりもひどかつた。不斷の小さく優しい目を燃えてるかのやうに光らせて、短かく刈つたうはひげまでもぴく〳〵動いてるやうに見えた。『たださへお前が來るのを隣り近處のものは笑つてるのだ。直ぐに出て行け！』

『出て行きますが、ね』と、おせいはわざと落ち付きを見せるやうにして、『わたしは子供のことさへ頼んで置けばいいんですから。また來ますよ。』

『いや、もう、貴さまのやうなやつア二度と來るにやア及ばない！』

『そりやア無理でせう』と、かの女は思はず自分の一方の足をもまた土間へ入れた。子供がある以上

は、自分も時々尋ねて來ることは許されてる筈であるからだ『うるさい！また小理窟を云ふか？』田口はこちらの云ひたいことも云はせないと云はないばかりに、こちらを叱り付けた。それからわざとらしく少し言葉を和げて、『子供を三人ともお前にまかせてあつた時ア、こツちが一ども會ひに行かなかつた。姉の方が會ひたいと云ひながら病氣で死んでも、その葬式にさへ行かなかつた。それをお前はおれの無情だと云ひふらしてゐるやうだが、こツちにやアまた別な理由があつたんだ。一つには、お前のつらを見たくはなかつた爲だが、ね、今一つの理由は憎み合つてる父と母とのあひだに立つて殘つてる子供の心を兩方へ迷はせたくなかつたのだ。今ぢやア、お前のおろかな計らひからお前らにやつた家を取られてしまつたので、子供はこツちへ引き取つたが、お前まで引き取る道理はない。おれが子供を引き取つた以上、今度はお前がさう度々こツちへ來ないのが本當だらう。貴さまが來る爲めに、子供の心はそのたんびにぐらつくし、その上、家庭にいらない悶着が起つて迷惑だ！』

『…………』おせいは渠の長談議を聽いてゐたけれども、別に、尤もなところを發見することもなかつたので、つい、へらず口も出た、『あなたは自分勝手に迷惑してゐるんですから、ね！』

『何を云ふ、この婆々ア！』春子を抱き上げてたお粂もはたから失敬なことを云つた。無論こちらもかの女に當つたつもりではあつたが――『一旦、離緣された者が圖々しくやつて來るなんか、ほかの

うちにやアないことですよ！』

『………』おせいも然しこれにはぎツくりしないではゐられなかつた。殊に、その離緣の一つの理由にはこちらの弱みもあつたことだから。暫らく憎みを見せてお傘を見つめてから、『さうですか？ぢやア、歸りますから、ね』と、またこのあとに子供のことを賴むと云ひかけたのだが、わざとさし控へてぷり〳〵怒りながら、直ぐ玄關の敷居をまたぎ越えた。が、この時、まだ名殘り惜しかつたままに、『若い人から見りやア婆々アになるのも當り前です、さんざん苦勞をさせられたあげくですから、ね。』

斯う云ひ棄てて、おせいはがらす戶をぴしやりと締めた。そして田口が手を入れてると云ふ大きい畑のそばを門へ急いだ。が、ことしも和らかさうにできる小松菜やほうれん草を一度も去年のやうに喰べさして吳れなかつたのは、前以つてこちらを斯うして追ツ拂ふつもりであつた爲めだらうと思はれた。

斯うなると、もう、一人前になりつつある雄作しか自分のます〳〵たよりとすべきものはなかつた。あすは中學校の方へ行つて、渠に會ひ、自分の身のうへのことを相談して見ようと決心した。淺見の家も面白くないので、どこかへ奉公がへをしようと考へたところであるから。

九

その翌日、〇學院と云ふのへ行つて見ると、思つたよりも大きな松ばやしの中に建つてる學校であつた。丁度授業中であつたが、學生監督の手が明いてたので、その室でその人に面會し、

『わたくしは田口雄作の實母でございますが、わけがございまして、今ぢやア子供はまま母の手に虐待されてゐますので、學校の成績もいかがと思ひますが』と云つて見た。『實父に當ります田口は薄情なはうでして、子供のことはあんまりかまひませんから、子供は始終ひとりで心配してあたまが痛い、痛いツて云つてますのですが――』

そして喰ひ過ぎや便所のいたづらのことは、子供の恥ぢになることだから、少しも云はなかつた。すると、却へつて向ふから、

『雄作さんのはただそんなことばかりではありませんから』と云ひ出した。驚いたことには、田口は子供のことを――恥ぢ知らずにも程があるではないか――すべて云つてあるのであつた!

『へい。そんなことがあるんでしようか』と、おせいはそらとぼけて見せた。そして自分は少〳〵ともそんなものでないと云ふことを示すつもりで、『わたしは初めて伺ひましたが――ぢやア、矢ツ張り、品行の惡い田口の子ですから、ひとりでに矢ツ張り惡いことをもおぼえるやうになるんでせう

か？』

『そりやア、親の感化が一番多く子供に及ぶでしようから』と、こちらをも含めて云つてるやうな學生監督の意張りかたが少しこちらの氣に喰はなかつたが――。『成績は數學と體操のほかはさう惡いこともありません。ただ面白くないことには、『朝、いつも少し後れて到着し、皆が整列を初めた時に、やツとその列へ飛び込むことが毎日のやうで――これはちよツとその氣になれば、ただ五つ足か十あしかの急ぎで教師の氣を惡くしないですむことだが、とのことだ。それに、今一つは、門前の菓子屋で買ひ喰ひをすることが多過ぎると云ふのであつた。

『では、なにぶん、よろしく願ひます。わたくしからも惡いところは幾へにも云つて直させますから』と、學生監督へは答へた。そしておせいは私かに嬉しく考へたのである。雄作がさう買ひ喰ひをしてゐるほどなら、田口から隨分お小使ひを貰つてるに相違ない。

『なアに、僅かしか呉れない』なんて云つてるのは、こちらへうそを云つてるのだらうから、これからは威し付けても自分がそれを少しづつへづつてやらうと。

放課時間になつたので、雄作を監督室へ呼んで貰つたが、ここでは話ができないので、おせいは渠を多くの生徒の遊んでゐない柵のそとまでつれ出した。そして『今聽くと、お前は大層お小使ひを持つて買ひ喰ひなんかするさうぢやアないかね？　少しおツかさんにもそのおかねを分けて呉れないぢ

やア――。』親孝行とはさうしたものではないと口說いて聽かせた。さうして雄作の曖昧な辯解やらこちらのそれに對する反駁がつゞいてるあひだに、時間のかねが鳴つたので、渠は行つてしまつた。よんどころなかつたので、

『またあした來ますから、ね』と云つて、おせいも別れた。が、その翌日は奉公がへをして、駒込林町のちよツとした質屋の女中に這入つた。これは芝のに比べては子供の學校へ近いので、自分がちよツと迎ひに行つたり、子供が學校がへりに立寄つたりするの便利があると考へられたからのことであつた。で、この報告をも兼て再び子供の學校へ行つた時は、もう、何となく氣が引けて、おほびらに這入つて行けなかつた。そして門前のお菓子屋のそばに立つて、雄作が買ひ喰ひに出て來るのを待つてゐた。若し來たら、先づ、その買ふお菓子を少し貰つてやらうと考へながら。

然し、なか〳〵出て來るやうすもなかつたので、他の出て來たり這入つて行つたりする生徒のひとりに賴んで、渠を呼んで來て貰つたりするのである、すると渠はむツつりおこつてゐて、皆のものには聽かれないやうにしてだが、

『見ツともないぢやアないか、おかアさんがさう度々來たら』と云つた。

『親が子供を尋ねて來るのがどうして見ツともないか、え？』以つてのほかだとおせいは自分こそ怒らないではゐられなかつた。

「でも——みんなが——きたならしいお婆アさんだと笑つてるから。」

泡鳴全集第八卷終

大正十年十月十五日印刷
大正十年十月二十日發行

泡鳴全集八卷

（非賣品）

著作權所有

著作者　岩野美衛

發行者　國民圖書株式會社代表者
東京市麹町區内幸町一丁目六番地
中塚榮次郎

印刷者　東京市神田區三崎町二丁目三番地
井波修次郎

發行所　東京市麹町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話新橋一一二七番
振替東京五二二九八番

印刷所　國民圖書株式會社印刷所

（製本　佃製本所）